PL 777 .35 O9 v.2

Ozaki, Kyuya
Sharebon shusei

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

尾崎久彌編

第二巻

俳諧[illegible]集成

東京　春陽堂刊

PL
777
.35
09
v. 2

LIBRARY
JUL 30 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

通仁枕言葉

全

通仁洸言葉　全

解題

本第二卷、洒落本版本廿五、稿本一、計二十六種を収めてゐる。年代、本の形容等に就て解說、左の如し。

一、三　幅　對　無學堂大醉作 畫家不詳　安永七年刊

序者の無學堂大醉の作である。大醉の正體不詳。小本一册、原本元表紙、茶表紙。序は、序とも斷らず、二丁、最後、無學堂云々の署名と二川云々の印とで半丁、その裏、橋上二人の口繪、以上計三丁。以下本文三十五丁。全體にて三十八丁である。序は、大字、六字位一行、五行半丁。本文は、十三字位一行、六行半丁。挿繪の雪灯・硯箱・手紙などは、本文第十丁の表である。めりやす「きゞす」の稽古本表紙の體裁で、半丁を費してゐるのは、第三十丁表で、その裏は、白。最後の東天紅の景は、第三十五丁の表と裏へかけてある。(即ち、第三十五丁の表に、「中にはや東の方ハ」と三行があつて、左に

雲、その裏が烏と來てゐるのである。）めりやす「雉子」稽古本體裁の半丁分の他は、凡て序・本文とも輪廓なし。

此本、元來、新修日本小説年表などに見當らぬもので、稀覯本の一。作風、原始的で、一寸面白い。末期本の如き冗い猥がないだけでも、とりえであらう。末尾に、餘興として出て來るめりやす「雉子」は、本格にもめりやす「雉子」があり、そのもじりである。本格のめりやす「雉子」は、上方唄にもこれと同じものがあるが、それをめりやす物として唱ひ出したのは、寶曆頃であらう、とにかく寶曆九年後のめりやす第二の集成本「歌撰集」には、これが收められてゐる。京傳の「艶氣樺焼」中に列擧せられためりやすの中にも、三馬の「東風流」初編の中にも此の雉子はある。すれば、寶曆から文化頃まで榮えためりやすであつたらう。なほ此の「三幅對」のもじり雉子に就ては、嘗て本歌と比較して述べた事がある。（拙著「江戸軟文學考異」收載の「めりやすの二つ」。）

二、驛者三友　秩都紀南子作 口繪不詳　安永八年頃刊

これは、私の失敗した、これ迄の分の唯一である。これが、穴學問と同一本であることに全くうつかりしてゐたからである。校了となつてから氣がついた。が時晚し、折角挿繪も其外一切出來上つた

ものだからその儘にした。卽ち未飜刻物の集成を標榜してゐる自分には、第一の失敗だつたのである。此本、「穴學問」と同一、全く同版木本と思はれる。穴學問は、詳しくは、新術穴學問で、これならば、德川文藝類聚第五の中に、旣刻せられてゐる。が同本と氣がついたのは、本卷校了の後、偶然の機會からだつた。唯、本校訂本が、口繪も入れ、一切原本通りである事に、重複乍らにも滿足したい。さて、然らば此の二者一であるが、どちらが原題であるか、それは、穴學問の原本を見てゐないから斷言は出來ないが、德川文藝類聚本の中に、序に「穴學もん」とある、これが四字卽ち驛者三友に相當すると思ふ。卽ち原題が「驛者三友」であつて、その四字に、これを當てたものと云ふ。此本年代不詳、但し中に、平賀源內作の矢口後日に就てなどの評判が出て來るから、此作、矢口後日上場の頃の安永八年頃の出版であらう。序二丁分、十六字位一行、五行半丁。口繪は、序の中に挾まり、二丁目の表にある。以下本文、本文だけにて三十一丁、計（序とも）三十三丁である。（序、本文とも輪廓なし。）小本。作者秩都紀南子は、ちつと來なんしの宛字、實は、平秩東作であることは、周知の事實である。

三、通 仁 枕 言 葉　蓬萊山人歸橋作 挿繪不詳　安永十（天明元）年版

例の蓬萊山人歸橋作の一。彼の作で未飜刻なものは、他に「遊婦里會談」もあるが、これも稀覯の

一である。小本一冊、原本元表紙、茶表紙。序二、以下追丁にて三十三丁表にて了。(但し、下六、又十五、各一枚ありて、誠は三十五丁)挿繪は、第五丁の裏、第六丁の表にある。序は、十二三字位一行、六行半丁。本文、二十一字位一行、七行半丁。此本、幸はひ袋も共に存在してゐたから、此種袋の標本として、本卷頭に掲載した。此の複製原寸大、殆ど原物同様の出來ばえだと、自認しておく。

さて此作、ちよい／＼、我らのいふ洒落本は、體驗派小說の隨一なる斷定の、その裏書にまた恰適な氣分が滲んでゐる。初め、生花の噂などをお互がしてゐるのも、當時の通人遊士の條件の一だつたのだらう。(此本、序・本文とも一重の輪廓がある。尚、以下の諸本、凡て此の輪廓がある。一々はいはず之を略する。)

四、かよふ神の講釋　通野意氣作 口繪不詳　安永十(天明元)年刊

小本一冊、序言、口繪、凡例とも又七とも八丁。本文は追丁にて十八丁分、通計二十六丁。(但し、尾には、又七を略き、二十五終としてゐる。)序の如きもの、例外に長文、一行十五字位、半丁七行。此分、七丁表まで、第七丁裏第八丁表口繪、第八丁裏凡例。本文は、初め稍大字で十四字位、中程は、十七字位一行、七行半丁。一種の講義物であるが、神道に藉りて、所々ふざけた趣向がある。作者、

通野意氣、不詳。

五、傾情智惠鑑　雲樂山人作 口繪歌麿カ　天明三年刊

雲樂山人作、燕十序、歌麿跋、挿繪も歌麿のであらう。

談義、色道傳授物類の畸形の一。荒唐無稽もこゝ迄行けば、寧ろ驚異、徹底したものである。小本一冊、序以下追丁にて廿八終、「廿八丁裏は、跋附」。挿繪は第八丁裏第九丁表にある。恐らくは、跋者の歌麿畫であらう。序は、十八九字位一行、八行半丁。本文は、初め、十八字位一行、八行半丁。後、廿二三字一行、八行半丁。

六、北廓鶏卵方　百一誌作 挿繪不詳　寛政六年刊

傾城また實情のものありとの意から、此の命題は生れたのであらう。百一誌の作、作者の身元は不詳。扉の繪、次ギヒラキにて序、その裏目錄、以上にて二丁分。次ギ本文、本文の初丁、なほ序の中に入れて、即ち序の三、その裏、挿繪のヒラキ。即ち序三のウ、本文の一のオ也。此の書畫者名なし。以下追丁にて、跋とも四十一、序の三を加へて、通計四十四丁也、中本一冊。續編の「戀の譯知蔵」な

るもの、恐らくは未刊のものであらう。序は、十五字位一行、八行半丁。本文は、二十一字位一行、八行半丁。但し此本に限り、人名を意味する符號、卽ち此の校訂本に示せる[松][雨]の如きは、原本、誠は、「松」、「雨」の變り風也。跋は、罫ありて、十一字位一行、六行半丁。

七、手管見通五臓眼　完　山旭亭主人作　畫家不詳　寛政年間刊

原本、元題簽ありて、卽ち右の如し。元表紙、菱形、中に菊の如き模様を繋ぎに、無地に光澤だけにて摺り出し、惣體は、うすき帶青綠色。小本一册。扉繪半丁、そのウラよりヒラキにて、一丁半分、山旭亭の自叙。次ぎ二丁分、あつ丸の序。次ぎ、目錄一丁分。(以上、凡て罫を引く。)次ぎ口繪五丁、卽ち本校訂本の如きものなるが、但し、原本は、繪が表にありて、その裏は、[共一]云々。[共二]云々の說明也。卽ち校訂の、上欄の六號文字は、原本、その繪のウラに當る。此分、繪と文と表裏五個、卽ち五丁。丁數の打方は、山旭亭の序までを序二、あつ丸の序まで、新しくまた、序二、目錄以下更に、一二を數へてゐるが、原本、目錄を一、店者の癖を二、女中の癖を三、船頭の癖を三、(卽ち三なるもの二丁あり。)臥婦の癖を五、呼出の癖を四、(本校訂本、また此の錯誤した原本綴込順序のまゝとなした。或は、此の呼出の癖は、六の誤か。)といふ順序である。以上を通算すると、扉以下十丁。本

文は、丁數の打方、例によつて怪しく、本文冒頭が、七、その次十三、といふ怪しいものである、が十三以下は、數字を正確に追うて、跋とも四十で終つてゐる。卽ち本文だけを正直に數へると、廿九丁である。卽ち序とも通計三十九丁である。山旭亭の自叙、稍細字にて、十七字位一行、六行半丁。あつ九の序は、十四字位一行、六行半丁。口繪のウラ、細字、三十四字位一行、十四行位半丁。本文は十五字位一行、八行半丁。處々、・の讀點がある。自跋は罫を引いて、十五字位一行、八行半丁。

八、部屋三味線　流女某作　口繪不詳　寛政年間刊

洒落本中の異色作として、校者の愛讀措く能はぬものである。卽ち當時深川の妓の内面生活。自己の體驗を如實に彼女自身描寫したものとして、恐らく近世稗史上の珍であらう。此本、流女それがしといふのは、遊客男性の代作ではなく、妓某の眞筆であらうと、内容の迫眞の描寫程度から窺はれるのである。私は、此の本、校訂に及んで、四枚のをり〳〵、そのグロテスク味とエロチツク味と、交々あつて、それに屢々脅されたものであることを告げておく。已むを得ず闕字としたが、房事の程度を問答した件なども、恐らく稀觀の文字であらうと思ふ。（普通公刊本の上として。）尙、此本小本一册、自序一丁半、口繪ヒラキにて一丁分、そのウラ、校閲者の言。以上三丁。（口繪は、本校訂本、製版の

都合上、ヒラキに亘る上線部の文字を脱した。即ち子供屋福清圖とあるのである。)本文は、附言とも四十九。通計五十二丁である。自序は、罫を引き、十五字位一行、六行半丁。校閲者の言の半丁、罫なく、十六字位一行、七行半丁。本文は、十九字位一行、八行半丁。附言は、豫告とも一丁分、罫を引き、十四字一行、八行半丁。

九、見通し占　十返舍一九作　同　畫カ　寛政十年刊

小本一冊、「當變木十露盤占」又は、「當變木眼倉八卦」と同一本であらう。一九の作としては、初期のものである。序以下追丁にて十二、別に跋一、計十三丁。序一丁半、そのウラ、小序、此の小序、第三丁表へかく。その餘白は、恐らくは一九の自畫像、十露盤を持てる圖。そのウラ、「うらなひの事」云々の半丁。次ぎ、第四丁表、大黑辨天など四個、その裏福祿壽壽老人など。次ぎ、第五丁表にて坎中連云々。その裏、同卦云々の體裁。序は、十三字位一行、六行半丁。本文は、二十三字位一行、卦の外、七行半丁。本文、處々、・の讀點を附してゐる。跋は、十四字位一行、六行半丁。

一〇、白狐通　梅暮里谷峨作　同政口繪　寛政十二年刊

色道論議物としては、異型のもの。中本一冊、自序一丁半、その裏ヒラキ口繪（國政畫）。その裏目錄にてヒラキ。其の裏、捨（よそ）きらぬ云々の半丁。以上計四丁。本文、追丁にて（第五丁より始まり）四十二丁表まで。その裏に「幾とせも」の歌、跋一。計四十三丁。自序は、十六字位一行、七行半丁。本文は、二十三字位一行、八行半丁。但し本文、實例の部分（會話のみの處）は、一字下げ、稍細字。

一一、契情買言告鳥　梅暮里谷峨作　畫家不詳　寛政十二年刊

小本一冊、元表紙、更紗模樣表紙。序一丁半、（此の序の終り、谷峨の署名の次、左下に、例の提灯の印あると、「白狐通」序の如し。此印、略く。）その裏ヒラキ口繪、その裏目錄、以上三丁。以下本文、但し、本文、上の卷十六丁、中の卷（丁を改めて）十七丁半。（この半を下の一に入る）、下の卷、五丁。外に跋一丁、奥附豫告一丁。計四十四丁。序は、十一字位一行、六行半丁。本文は、二十二字位一行、八行半丁。谷峨の作としては、後の人情本風の臭味はあるが、好短篇であらう。（此の續篇は、廓の櫻、本集成第四卷に編入の豫定。）

一二、曉昔茶唐　艶示樓作 とよ丸畫　寛政十二年刊

小本一冊、序文二、後序（丁數を打たずして）一、本文追丁にて第三丁より始まり、跋とも四十三丁、後序とも計四十四丁。挿繪は、第六丁裏第七丁表にある。此の畫家とよ丸は、豐丸、豐春門下として、版畫の製作も偶々見られ、洒落本にも數種の挿繪を見受ける。さて此本、客が妓をかつぐに就て、面白い挿話を傳してゐる。しかもそれが二個、前の一個は、寧ろ實情の妓に對する、飽きそめた男のかつぎ。後は、悪黨の妓に對する客の小細工を弄した（茶番式の）かつぎ。前は、罪多くして、後は、悪じやれである。偖、此の作者、艶示樓は、從來、鹽屋艶二と同一人視せられたが、（小說年表の如き）私は別人と見たい。しかも、自序に京傳の鼻印を使用したり、我儕なにがしが夜半の茶漬云々によりて、京傳の門人たる事を詳かにしてゐる。艶二も艶示樓も、例の己惚者の隱號から暗合、卽ち別人で、これは、京傳門人の某としたい。さうして、年齢に於て稍若すぎるのであるが、或は、此の艶示樓、後の東里山人（鼻山人）ではなからうか。卽ち鼻山人が京傳の弟子である事と、鼻印の使用者たる事との暗合からの推定である。卽ち京傳が多分に加筆した東里山人若年の作（東里とすると、此歳、十六歳位）だと考へたい。（尚、此の艶示樓に就ては、拙著月刊「江戸軟派研究」三編第一冊に

細述したこ）さて、此本、自序は、十三字位一行、六行半丁。後序は、十一字位一行、五行半丁（此の淺草の深ろは、晝鶯亭か、否か）。本文、十八字位一行、八行半丁。跋は、十二字位一行、六行半丁。

一三、仕懸幕莫仇手本　小金あつ丸作　畫狂人北斎口繪　享和元年刊

い　小本一冊、元表紙茶。本校訂、見出し一頁の裏は、原本の見返し也。通神藏の前編、忠臣藏に擬ひたるもの丶一丶自序二、序二、口繪五より七（三丁）、附言一丁（八と九）。本文一より以下、八九丁半、その裏（三十丁裏）自跋。計三十九丁。自序は、略々本校訂本の如き體裁にて罫を引き十三字位一行、六行半丁。序は、十三四字一行、六行半丁、罫なし。附言は、罫ありて、十六字位一行、七行半丁。本文は、二十一字位一行、八行半丁。自跋は、二十字位一行、末の四とも十行。

一四、倭良玉子　十返舎一九作　栄水畫　享和元年刊

い　小本一冊、元表紙青、此本は、他本の如く、（從來の洒落本の如く）表紙、三方を截ち居らず。卽ち天も地も綴目の横も、表紙を折り込んである。（此の底本、後版とは思へない）元題簽、洒落倭林貝ま子　全とある。序三丁半、その裏、附録發詞半丁（以上、序の四）、次ぎ、靑樓曲半丁、その裏ヒラキ栄水の畫、

その裏、目錄。以上六丁。以下本文、追丁にて、四十丁半。校訂用底本、四十一丁目裏、余白である。跋を闕くかと思ふが、これで完全であらう。叙は、大字、罫なく、九字位一行、五行半丁。附標簽詞は、校訂本の如く、天地雲形にて罫を引き、十字が一行、全六行。青樓曲は、罫ありて、七言一行、全六行。本文は、二十字位一行、八行半丁。さて此本、後に作者不詳（無論原作者一九ならず）にて、此本の版木を第二編第三編に闕（ママ）足し、その儘流用したる改題本「通子選」（小本四冊、文政頃の刊か）なるものが現れてゐる。（尚、その補足改題の跡のくはしきは、拙著月刊「江戸軟派研究」三編の第十六冊を見られよ。）改題本に於ける改題作者、反良心の程度が、極端に顕はれて、面白きものである。

一五、青樓小鍋立　成三樓主人著　目繪不詳　享和二年刊

小本一冊、叙以下追丁にて、叙が第一丁より第二丁表。口繪は、第二丁裏より第三丁表。第三丁裏は目錄。本文、第四丁表より第四十丁裏にて了。次ぎ、谷峩者の廣告一丁。作者不詳であるが、成三樓とは、第一章表題からの思付か、但し此の表題の方が、作者名からの思ひ付か。叙は、十七字位一行、八行半丁。（初丁表の、青樓小鍋立叙の下に、不明の印がある。菘谷艸二かとも讀める篆體。叙末の署名の次、川岸の文字は、校訂本の如く、右左にあるのであるが、原本は、馬の背の如きを印形に描き、

その背に、此二字があるのである。本文、十七字位一行、八行半丁。本文、風流・柔和・元氣、三人遊びの形式であり、泣、笑、怒の三上戸（此の形式、此頃の洒落本に間々あり。）と同工異曲かと思ふ。末節、妓の眞實に觸れて、ほろりとする描寫である。

一六、手管早算獨稽古　富久亭作　口繪不詳　享和二年刊

小本一冊、此本、元題簽は、穴可至子とあるといふ。自序二丁半、その裏目錄。序の四の表、口繪の一半、即ち障子の穴より覗く二人。同裏、欠伸の客。（校訂本は、此の表裏を、繫いで一圖とした。）本文、別丁にて、四十九丁。跋一丁半、その裏豫告。計五十五丁。自序は、罫を引き、十四字位一行、六行半丁。本文は、十七字位一行、八行半丁。跋は、罫を引き、十六字位一行、六行半丁。（此の跋の最後の署名の次の印は、上は文字黑、下は白ヌキで、共に篆體である。）妓の愁野・笑顏・腹橋は、例の三上戸の筆法。然し此本、客と妓のそれ〴〵性格の相違が、會話の巧みさからも窺はれて、佳作の一であらう。

一七、青樓口記　白陽東魚作　北洲口繪　享和二年刊

小本一冊、序二丁半、その裏口繪のヒラキ、その裏品目、計四丁。本文、改丁一より四十丁。後記一丁。惣計四十五丁。序は、罫を引き、一行づゝ間を置き、薄桃色と白との色摺。此の自序、一行十四字位、六行半丁。(此の序、白陽東魚の署名の次に、笠と杖の如きを一にした印形あり、略之）本文十六字位一行、八行半丁。跋は、十字一行、六行半丁。此の本の内容、首尾、比較的に細かき描寫にて、人情本の臭多し。が描寫、彼より氣品に於て立勝つてゐる。通客の品定の章など、例の品定の形式を追ひ乍ら、酒落本式に脱化させてゐる。夢に結んではゐるが、柏木と榮次郎との赤心相照らす所よく、且末尾の道行の文章、頗る新内あたりの道行振を聯想させる。白陽東魚なるもの不詳。北洲は、北齋門人、同號、大坂の人、雪花亭といふのとは、別人であらう。

一八、甲驛夜の錦　宇治茶釜作　十字亭畫　享和二年刊

新宿本である。小本一冊、序一丁半、次ぎヒラキにて一丁分。その裏跋にて一丁半。以上計序四。本文改丁第一より二十九丁半。序は、十二字位一行、六行半丁。(この序の終り、宇治茶釜の署名の下、印の代りに茶碗一個の形がある。)跋は、罫を引き、十一字位一行、五行半丁。此の跋者の樹下石上といふのは、歌麿風の美人畫の版畫などある同名の男と同一人か否か。作者の宇治茶釜も不明。本文は、

十七字位一行、八行半丁。此本、方言とりまぜにて、頗る面白く、且つ新宿情調とは、こんなものかと見えてよし。末尾、妓と客の眞情、妹女郎の遣引も痛く我らの心を刺衝する。定りきつた型と思ひ乍らも、ホロリとせざるを得ない。

一九、素見數子　十返舍一九作 自畫　享和二年刊

小本一冊。序の初丁表不詳（一に、「身受する客はともあれさく花に風の手つけはいとふよし原　鈍々亭和樽」とあるといふ。）その裏自序、ヒラキにて、以下序四丁表まで、此分界を引く。（此の序の、青樓素見數子自序の下の印は、白ヌキ。例の一九の本によくあるもので、初め此の文字さつぱり讀めなかつたが、此頃、彼の名の貞式だと思へてきた、その篆體だと。卽ち上が魚の字の如く、下は式と由を一にした如き形である。試みに「遊治郎」の自序には、原本のまゝ撮つた、卽ちあれである。）四丁裏五丁表へ自畫の口繪。五丁裏、標目半丁。本文第六丁より三十四丁迄、以下追丁にて、跋と後序にて三十八丁迄。自序は、罫を引き、十一字位一行、五行半丁。本文は、十五字位一行、八行半丁。跋は十三字位一行、六行半丁、後序は、十五字位一行、七行半丁。此本、一九の洒落本としては、最も纏り、（短篇として）且つ猥味の勝つたものである。第一回の光景描寫。第二回の五明の負、半可通者の思ひや

り過ぎての失敗など、面白し。第三回中の、さくしや一九曰くの體驗——秘傳をいへるも、彼の實際を露呈して珍しと思はれる。

二〇、起　承　轉　合　十返舍一九作　自畫　享和二年刊

小本一冊、元表紙茶。題一、自序三丁、以下此の自序の署名と共に、次ぎ卷物の如くして、卷止め貼外題の體裁、婉曲歌が見えてゐる所にて半丁。その裏一九自畫にてヒラキ、その裏起承轉合にて、卷軸の體（てい）、以上題と序五とも計六丁。本文は、追丁にて跋・豫告とも三十九丁。惣計四十丁。題は、罫を引き、九字一行、五行半丁。自序は、十字位一行、六行半丁。本文は、十八字位一行、八行半丁。跋は、罫を引き、十字位一行、五行半丁。跋者の和樽は、當時の狂歌師、神田に住した、綮和樽ともいふ、戯作も數種ある。その太鼓印は、鈍々亭から來てゐる事明白。

二一、滑　稽　遊　治（ママ）　郎　十返舍一九作　自畫カ　享和二年刊

（い）小本一冊。起承轉合の續篇である。序初丁の表、石摺風（墨摺白ヌキ）の扉、その裏自序、此の序、三丁表まで。三丁裏は、ヒラキにて口繪、その裏總目、以上序の四丁。以下本文は、追丁にて、第四

十丁表まで、その裏跋。但しこの跋文、「此巣にかゝる」にて後がない。これでいゝのであらうか、無論アト缺丁と思ふが、さてこれは、此の校訂の底本としたもの斗りではない、(此の底本は、家藏)關西方面の二氏本、名古屋の一氏本、及び家藏の一本と計四本とも、此の四十丁で、アトがない。よりによつて、此の四本が缺丁であることも可笑しい。他の善本によりて補足したいと思ふが、さてその機會を得ぬ。因みに、此のまた續編たる「色唐紙」は、蔦唐丸の作で、これは、小本で四册揃、作風は、すつかり人情本、戊子(文政十一年)春の序があるものであるが、いくらにも飜刻の價値はないと思ふ。とにかく、この遊治郎の末尾、續々編を待たせる所など、中々味をやつた書き振である。

二三、魂膽胡蝶枕(ゆめ)　著々樂齋廣長作　北渓畫　享和二年刊

中本一册、元表紙茶、元題簽は、魂膽胡蝶枕　完とあつて子持の輪廓である。自序野を引いて、此分二丁。目錄も野を引き、此分一丁。計序三。本文三十六、計三十九丁。作風は、見らるゝ如く、すつかり人情本式である。女が遊里に沈む徑路も、餘りわざとらしい。自序、十四字位一行、六行半丁。本文は、二十一字位一行、八行半丁、例の地の文ともいふべき二行の分は、極の細字である。

二三、教訓相撲取草　十返舎一九作 喜久麿畫　文化元年刊

中本一冊、元表紙茶。滑稽本紛ひの酒落本といふべし。頗る卑雜なる文字と趣向、此趣向、間々二世爲馬の月成（猿猴坊）などにより、既に踏襲せらる。（古くは、酒落本にも、京傳の四十八手などがある。）扉の次ぎ序が第三丁の表まで、（此の序の初行、あの印形は、例の私の判じた一九の貞式印、普通一九の自序のと同樣である。これから推すと、此の序者一竹齋實は一九で、自畫自賛の類ではなからうか。自序が第四丁の表まで。（此の自序の終りに、署名の次、九形に貞と下に燕手との印形がある。この燕手だけ此の模本では略いた。）第四丁裏より口繪、此の分ヒラキ。その裏（第五丁の裏）、附言あつて、此分、第七丁の表まで。その裏ヒラキにて、目錄。その裏（第八丁の裏）よりヒラキにて口繪、各六面、その最後（第十四丁のウラ）が喜久麿畫の一九の像。以下追丁にて本文、跋とも廿七丁。序は、罫を引き、十字位一行、六行半丁。自序は、罫なく、十四字位一行、七行半丁。本文は、十六字位一行、七行半丁。跋は、十四五字位一行、七行半丁。

二四、吉原帽子　櫻花漢子作 畫家不詳　文化年間刊

中本一冊。（輪廓は小本風なれど、中本仕立のものと思はる。）新兵衞物の一。序二、傳が半丁、その裏ヒラキ口繪、その裏目錄、計四丁。以下改丁にて跋とも三十一丁、計三十五丁。自序は、十字位一行、六行半丁。傳は、十三字一行、此分罫を引き、八行にて半丁。本文、十三字位一行、八行半丁。跋は、十三字位一行、八行半丁。文化頃の刊としては、また、洒落本氣分を失はぬ、さりとて、新兵衞隱家へ小女郎の來る件などは、梅曆の丹次郎と米八との隱家逢曳の手法の先蹤とも思はれて、いや味が感じられる。

二五、契情實之卷　楚登美津作　歌麿畫　年代不詳

中本一冊。此本、小說年表などは、寛政年間におくが、自分は疑問とする。寛政若しくは享和とすれば、此の本畫家の歌麿は、當然初代歌麿であるが、初代には、稍、拙ない感じがする。勿論初代も晚年だからといへば、それ迄だが、當時、すでにかうした稗史類に、挿繪の餘り無かつた初代歌麿といふ事から考へても、これは、二代かとも思はれる。とすれば、此の本は、文化四年以後にせねばならぬ。初代歌の死は、文化三年九月。作風の人情本風から考へても、寛政期は、肯つけないかとも思ふ。

さて此本、扉の裏に、楚登美津の自畫像、次ぎ、初丁表から序、此分二丁、次ぎ綱目一丁、計四丁、

なほ、校訂の程度に就て。

校訂は、その程度、一切第一卷どほり、原本の儘とし、但し清濁音だけは明瞭にし、原本、清音のものも、濁音と認むるものは、濁點を附した。其他、本校訂本、本文括弧内六號活字の分は、原本、細字二行の部分たる事、前卷の如しである。

×

本第二卷の補遺。

其後、最近に至つて「北廓鷄卵方」の元題簽本を發見した。此の元題簽も所々、手ズレのため、不明の箇處もあるが、大凡左の如きものである。即ち此の本の寛政六年頃には、既に折々此の色紙形題簽が使用されてゐた譯である。（家藏本の寛政三年版「錦之裏」も此の色紙形題簽であるが、これは、絶版版木の元本ではない。即ち或は偽版本又は後摺本かも知れないから、此の色紙形題簽の年代に入れるには、稍躊躇する。）特例として古く天明四年版の「角鷄卵」が、色紙形である。）即ち左の如きものである。

作しや御慶申上〇〇〇〇〇〇
〇〇〇とり出す〇〇〇ハ
守雌齋百一誌著　是を
ごらうじませこしのしんもの
で御ざりますけいせいのいきじを
とんだよくうがちました卜
さしいだすいろじ上げてなんだ
北廓鷄卵方　全
こいつハおもしろさふだおいて
いかつせへトふうしをきりひら
ひ〇〇みれは

といふので、伏字の箇處は、手ズレ不明のものである　これによつて、百一誌、守雌齋の戲號を附けてゐた事が分つた、がこれも、此の作だけに因んだ戲號かも知れない。（補記）

○

尙、此の校本の延刊した、又はすべきに就て。

此の校本（第二卷）、その校正の殆どが四校了となつたけふ、解題、右の如く執筆したが、偖これがいつになつて出版せられるか分らない。決して出版元春陽堂が、圓本などの爲に紛れて遲らかしてゐるのではない。實は、此の第二卷解題執筆のけふ、まだ第一卷の出版を見ないのである。第一卷は、昨年八月一ぱいで既に校了。九月早々には、內務省の內閲へ差出した筈である。それが未だに發行の手順にならない、最近內閲制度中止とか聞いたが、此の集成第一卷は、如何なつてゐるか。校者として自分は、杳として消息を知らない。ぐづ／＼してゐるうちに、たうとう此の第二卷も校了に近づいた。校者として（出版元もであるが）、一日も早く發行の運びにならうことを、第一卷もろとも念じておく。

內閲制度中止のため、そのため本卷は、一層削除に加減した。大した事はないのであるが、小を削り大を助けるためには、已むを得なかつた。削つた部分と雖も、大凡そは、現行既飜刻物の猥描寫と同程度又はそれ以下である。が、一層の小心となつたのである。讀者、微衷を酌んでもらひたい。

最後に、本第二卷、三幅對（曙者三友、北廓雞卵方、部屋三味線）曙昔茶店（遊治郎、吉原帽子）契情實之卷は、家藏本。通仁枕言葉（傾情智恵鑑（影寫本に據る。挿繪は、日比谷圖書館原本撮影の好意による。）〇起承轉合は、石田元季氏藏本。かよふ神の講釋）見通し古（仇手本）青樓小鍋立）獨稽古（甲驛夜の錦）素見數子（魂膽胡蝶枕）角力取草は、成川庄司氏藏本。五臓眼（吉告鳥）婦身噓は、飯島花月氏藏本。白狐通（花良玉子）青樓日記は、市場直二郎氏藏本に據る。成川氏石田氏飯島氏市場氏の御好意を感謝する。

昭和二年十月廿六日夜八時卅五分稿
同年十一月十二日夕五時補記

編　者　誌

洒落本集成　第二巻

目錄

三幅對……………………一
驛者三友……………………二七
通仁枕言葉……………………三七
かよふ神の諡釋……………………六一
傾情智惠鑑……………………七七
北廓鷄卵方……………………九七
手管見通五臟眼……………………一三一
部屋三味線……………………一五七

見通し古……………………………………一六九
白狐通……………………………………二二五
契情買言告鳥……………………………………二二九
嘯苦茶唐……………………………………二六七
仕懸叢叟仇手本……………………………………二九一
埜良玉子……………………………………三二七
青樓小鍋立……………………………………三五九
手管早算独稽古……………………………………三六七
青樓日記……………………………………四二三
甲驛夜の錦……………………………………四四七
素見數子……………………………………四七五
起承轉合……………………………………五一三

滑稽遊治郎……五二五
魂聽胡蝶枕……五六五
敎訓角力取草……六〇一
吉原帽子……六三九
契情寶之卷……六五五
婦身嘘……七〇一

通計廿六篇

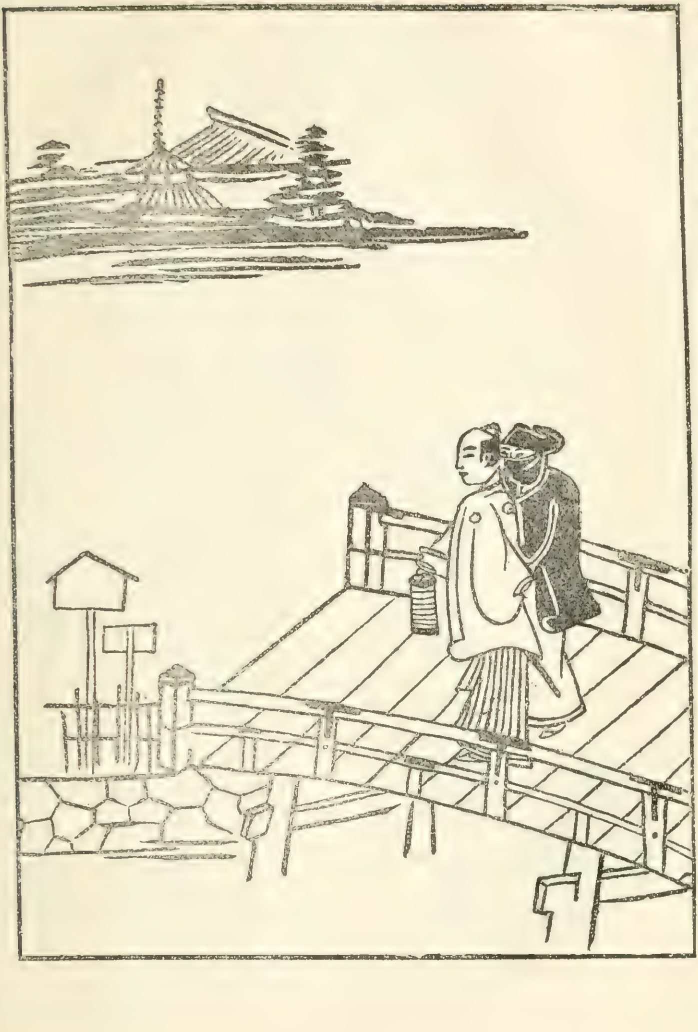
三幅對 全

歳の十一月に徒杠成十二月に輿梁成る今此月三幅對の僻書成る昔往釋門の徒は肉を喰はず爰に妙哉魚物の佛像顯れ飴屋は紅毛の壺を借り又白狐の奴僕と化ぬ今此三人の戯れを梓に彫るも豐歳の春のあした童子の一笑を求むとて一巻を捧て床下に伏事しかり

干時安永七戊戌年

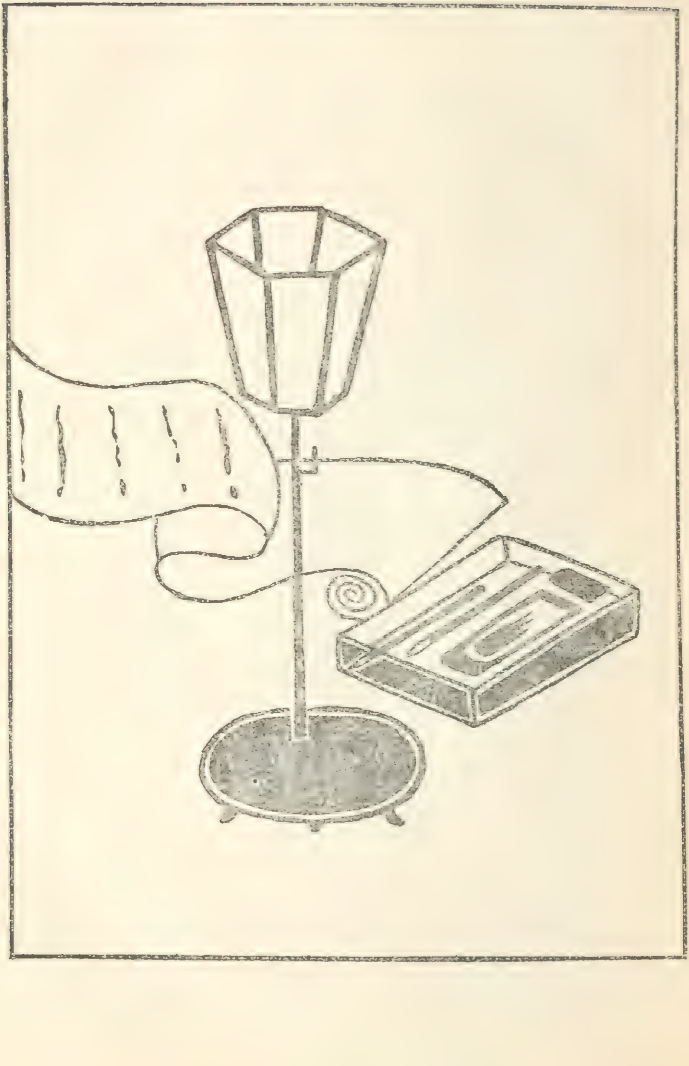
正月

無學堂大醉著



舜は諸馮に生れ負夏に遷り鳴條に卒せり東夷の人なり爰に鮮魚集鳥凡青の三人は海野に生れ富家にそだち戀情に至れり遊意の人なり戯を酒宴に結んで共に鼎足の譽名書するに勝へたりされば此三人は遊びの極するにてこの春の初會なりとて鮮魚はふたりが方へさそひながら行こよひはなんぞしゆこう有たしといへばふたりは趣向とはなんじや 鮮魚少し小聲にてさゝやきければきまり／＼御承知ならばおさきへまゐらんとて鮮魚は猪牙をいそがせ少しゑもんなどつくろいながら大門へはいれば三人の女郎鮮魚をちらと見るより茶やを出むかひしが集鳥凡青見えぬ故おふたりさんはどふしなんしたといへば少し譯あり／＼ マアゝゝ一所に御出ふたりはすこしおそからんもふおむかいにはおよばずとてつれ立階子をあがれば 若い者やりておふたりさまはおみへなされませぬがどふなされましたといへば イヤサ ちとしゆこうが有て跡から來る筈 ハヽヽ 是は御趣向とはなんでござります 鮮魚今宵はかきのすわうの出はもどきといふおもひつきだが少しわからぬ事が有つてちとおそひはづじや 若いものしたがその御趣向は何かおもしろそふな事でござります 女郎けふはぬしはじめたんとまたせなんした集さん凡さんもはやく來なんすりやよひにこうして待つて居るもどかしさは マアどふしるんせうの 鮮さんの趣向／＼と斗云ツてかくしなんすもなんごとかわけがありんせうぞへ 鮮なんのわけかへむつまじ中のうはき事 マアゝゝお待／＼とはいへどもふたりは兎角しておそければ集鳥凡青の女郎

若菜雛鶴はたつゝ居つもふ口もくれかゝるに鮮さんよふだましなんしたうらみのいひはじめでありんすよ　このやうに氣をもませなんすも鮮さんの男氣ゆへでありんす　ぬしおひとりじやありんすまいしおふたりを殘しなんして趣向〳〵とかこつけなんすもなんぞわけがありんしやうかくさずと云ッて聞せておくんなんしよ　鮮すいとすいとの御中ながらおうらみは尤〳〵けふは昔からのやくそくこうおそくなるはなんぞわけができたかもしれぬといへば　女郎そんならちよつと文をやりんせう若菜さんちおかきなんしといへば　鮮　マァおまち〳〵その文にこそ趣向もあらんどれ〳〵爰で下がきしやうと硯引よすればもし文にしゆこうとはどふしなんすへ　ちと〳〵思ひつきがある昔から御待わびのうさ書盡すといふこゝろにてうを盡しにて書たしとて頓てあんじながらかきだせば　女郎見てわらひだすを座中若いものものぞきみていやも鮮魚さんこれはとんだおしやれどふも〳〵ハヽヽアハヽヽヽこれはこたへられぬとはらをかゝへて居るところへ茶やの亭主階子から首を出しながらもし御二人さま御出なされましたといへば若菜ひな鶴は少しつんとしよそ目づかいしながらもふなん時でありんすエといへばイヤモずいぶん駕もいそがせたれけふはきつうはやく日がくれたそふなエヽ久しひもんさけさからよふ氣をもませなんしたの集鳥九青居りながら手をつきコレハヽヽ初はるからおしかりぞめ　きついおひわく先以年始の御祝儀申上ますなどゝしやれるを鮮どふだ〳〵きつうおそかつたのイ



ヤモ御ふたりのおはらだちおれひとりのめゐわくとんと大こまり〳〵あまりおそさにいま御ふみの行くところじやといへは　若いもの　もし〳〵あのおふみ鮮魚さんのおしたがきイヤモとんだ事で御ざりますまあ〳〵ちよつとごろうじませ　二人どれ〳〵ちよつと〳〵もふ〳〵ほめられては出しにくいほんのした書御めん〳〵二人いやその出されぬところがなを見たいとふたりは立かゝり無理に取て披みれば

春のめでた鱚鯑としれし御事にて候御しうぎは御けんの鰹節とわざとそふし残しまいらせ候扨はけふ〳〵の御やくそく鮎よりの御はこびまし鱒はすに候得ば心わ鯛のこ鮎して格子に鰊魚待まいらせ候鮮魚さんはけ鱧御はこび候へども御鱚も鯒く候哉鰕ご御鱡鰈りも出来まゐらせ候哉たゞしは鰒の御方へ御烏賊されも有やらんとすいしりゝ得ば鰻こゝろのつれなさはもしや御あきませもなくば此身は鱆かこうせうかと御鰡かはしく一しほ鰤小鰈まいらせ候殊に鮮さんの御鱒じにてきゝまし候得ば何やらん石藻魚しもあるよしにて跡より御はこび候はんとあふ瀬られ候よしたとひどのやうな御事かは虎魚係の鰻目も海豚魚にて海月かゝりまいらせ候得ば迚も御鮭みもあるまじとさりとは御鮃しくかほどつれなき御こゝろからは御さけすみも沙魚かしけれどいひ鱈事の鯱鯑子を鯇々鰆つゞりまいらせ候能〳〵御くみわけ下されかし数にも鮹ぬ我らをふびんと思召親々にもはやく鮟鱇させてやりたいとの

御こと葉有鰹おもひ鱸居候得共ぬしの御心はどふやら生鰹節かといま鰆くやしう過し鰘ごとの起請をも河魨に鯣かと口おしさにたつ魚子は魚虎のたねとなりまいらせ候鱲子の啼かぬ日はあれど鮭に魮ても酔ひでもぬしをおもはぬ御事はほんにひと日もなく斗候かほどにおもひ江豚をも熨斗の御心には鮑かとひとり装鰕だに蜆まいらせ候ほんの忝辛螺となる事は芝海老馬刀と有し御こと葉今さらむなしくなり増てうきめを淡菜かとおもへばあわぬ昔がたんとましかとおほへり

と読ければ　若いもの　やりて　なんとどふで御ざりますイヤモどふも〳〵コレハせん印さついぞ〳〵時にかの趣向も持ては来たが是を見てはとんとだしかねるハなんと集公どふじやイヤモきつゐぞ〳〵とんと閉口御めん〳〵　若いもの　イヤ夫では成ませぬどなたも〳〵昔からの御まちかねはやうおだしなさりませ　かむろ　両方からもしだしなんしよ〳〵と耳をひかれておふさ〳〵出すよ〳〵と立ながら扇をかざして

〽とふざゐ〳〵　セリフジヤ〳〵　とはいひながらまはらぬ口のつたなさもつきせぬ御代のためしとて山々里〳〵うら〳〵まで明るあしたのにぎやかさわけて名にあふ五丁町年のはじめの規式とてきつといたゞく喰つみはさも橙々とつみかさねやがてしやれをも結根松にくひ〳〵は鳳尾草の舟につみたる神馬藻我搗栗といわゐそめ老もわかいもよろ昆布これぞ草薢のさかゐ榧いつもかはらけかぶろからく

む屠蘇酒もおさまりてはやくあそびに奈良漬で茶漬がよひと居つゞけの根芋にくぜつ長芋のうらみの笋薯蕷いわれて手をば菲薤すこしはおねを薩摩芋この里芋のならいとてお河首烏芋をいひまわし害餘子馴染の其中はやほなかどをも蘿蔔汁蓮草海苔のあさからぬなさけにわれも春菊を土筆でかよふ心太冬葱い君の御なさけはその蓮の根のとなりもの泥にごらぬ一筋のおこゝろざしコヽこのむねに引烏芋よごれ牛房の此なりで大豆のふる夜も百合の夜も木の葉がらしの紫蘇の夜もいかで何とか糸柚干かゝるむだごと夕貝と御西瓜もじもあらんかとはつかしけれど初茄子に甘菜かわせしその時より思ひこんだる梅のうち御すいりやうましまさば菜にか蘘荷の子のうゐは蕗よろづ世の末かけてたがいの中は長小角豆柚の世までも八重成と思ひつめてもぬしさんのこゝろが若シや麻の實ならば茶んも越瓜のしたごゝろ「コレ丸青さん何かおもしろい事かとおもひんしたにとんだ事をいゝなんすわつちやねふ〳〵いやでありんすよしなんし　丸青（キリマノリニテ）「こんな遊にかこつけて御氣にさわるおしらねどもおもふことの薬いひちらすはぬしのこゝろを引んため　若葉エヽよくも否なんしたまお〳〵まいなんし長ならわたしがおもふこと丹の上までをあかしていわねはなりんせんまあ〳〵だまつて聞なんし

へ〳〵行衛定ぬ河茸のかずなきながれのうき身にも初茸に御目にかゝりしその時のおまへの並茸椎茸に

ふかくもおもひし治茸ねおいよるをも鼠茸やくそくありしその日には大門口に松茸の早松茸に藍茸とあけて日には岩茸農かたひ出ひを何ゆへにうわのそらにて木耳かこれほど松露なしんていをぬしのこゝろの胡葱をおもへばむねに芹あけてしんるのほのふ煎大豆貫にしん氣を採大根三葉にかはせしとの葉をおもひ出しては栗かへしひとりなみだを蕗の薹つとめする氣は縮緬麩撮菜ほどもつみわけてなかい芽獨活となるならばたがいに小豆なさけどし外の望はありんせん

〽凢青イヤ〳〵〳〵からみ大根じやなけれども山葵とそのよにいひかけて跡で陳皮とはねる氣か

〽若菜ホンニおまへはどふよくな人のこと葉を芥子の粉私がうわきなものならばいひ米さんすも麥ならず黍けいせいの粟れさにぬしは冬瓜のむだばなとおもひなんすか梔子や蜀黍かけてたつねても蒟蒻がいが有るものか　若いもの　モシ〳〵凢青さま若菜さんまあ〳〵ちとおまちなされませいやもふこれはどふもけしからぬとんだ事　若菜さんもきつゐおかくしけいはじめて見ました　是こそほんの俄大出來で御ざります時にお二人さまの質くらべは中々はては御ざりませぬがむまい所はわかりましたそしてまだ集島さんの御趣向も御ざります先々御酒になさりませといへば　凢青いかさま〳〵手前がつての長口上まつぴら御めんホヽあやまつてとおふざなたゝめば座中はしばらくわらひ止ず集島は少し醉て鎌鏡が膝にとまりてまどろみ居るをもし御趣向〳〵とゆり起せば集島目をこすりてモウヽヽ

おれがしゆこうは後篇のつゐでにせう　若いもの　イエ／＼夫ではまた延ませうイヤ延さぬ／＼若いものそしていつごろで御ざります集松過にはきつと／＼といひながら又ひざに寐ければ　[illegible]ぬしはきつう酔なんしたそうながぬし斗只寐て居なんしてはわつちがすみんせんもし集さんこれもしとくすぐられてアヽ出す／＼とやうやく目をさまし羽ばたきしながら

めりやす
きゝ壽

㊀鶴 利板

雛子

三下り〽雛子啼野邊の若草雀鶬すてられて合鳩の雛と鶍鵤鷺鵯とがるゝ合孔雀の羽のよるべ雀ぬ身はかげろふにあづまが鴨も鶏て鶉ないぞやこれのふほんにあれ鴛さへも燕はなれぬあげ羽の鳥鷲〳〵とても鵜たりづれ水鶏ごふしの鷹〳〵に春にもそだつ花さそふ菜種は矮鶏の花しらず鳥は菜種のあじしらずしらず鴫れぬ中なれば鷹れまいものさりごてはそなたの鶺になりふりも鵯のすゑのはなれごま長い山雀鴻てむかし鷗とあすか川

とうたひければ座中は一度にやんや〳〵のときの聲

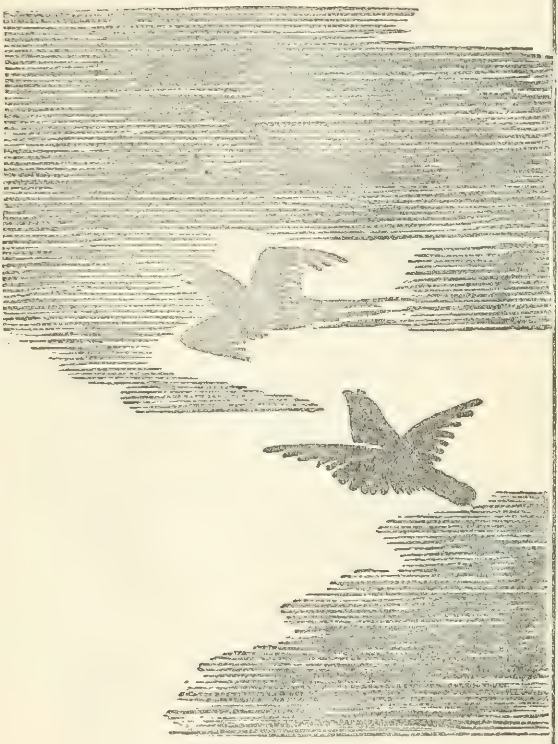
しばらく

やまぬ

中に

はや

東の方ハ



驛舍三友

全

序

紀南子驛舍三友を著して雛妓に見せびらかす雛妓是を引たくりて突飛して逃る書肆またうしろから抱付て奪ふ剞劂氏これを側より彫刻さあ序をかけと予を來てせがむ其聲耳邊の虻のごとしさあ書ましよと起直りて筆をば採はとつたれども ごう蕉葉に堪ずしてぼく〱睡ればつめつたりたゝいたりしてやたらとせむるなんの 如才が御座らうと ちよ〱らしつかり半分ほご序す

例埜 外惣子書

淫声幾何

發端

秩都　紀南子著

つら〳〵此里の來由を尋るに野邊は果なき武藏あぶみふみかけて絶間なく甲斐路に通ふ旅人の道の小休晝休さしもあやしの草のまろ家やう〳〵三四軒ありしによつて四ツ家の里とは名づけしとぞ或時甲斐人ぶら〳〵と川へせんたくに行けるが[illegible]いて日が暮たりふしぎやな水底より光りを放てる一顆有こはなんぞよつて能見れば是こそ夜光の玉[illegible]さてこそ玉をころばし〳〵くらき闇路を苦[illegible]朝夕玉をなでさすりけるにふしぎや此玉自然にうごき一人の美女と化し往來の旅人をとゞむ人〳〵これを聞傳へみな此美女を戀したふされば街上にかうやうの女をさして玉といへり所は武藏の多摩郡川は則玉川といふむかし天人此所に分際もなく天くだりてこの川水の清きにめでとある汀に玉子[illegible]出にて光りし玉也人間是を拾いし後玉子の光り一向見えずさらに行衛もしれざればな[illegible]の玉子行衛いづことしれざれば飛行の道も何かせんと月宮殿の白衣をとりだし[illegible]をたのんでぶらころし鑰ひちりきも賣はらひやけをおこして此世界へ七寶充滿の寶をふらす是むだ遣ひの濫觴也七月八月と月かさなりしきりに天を戀しう思ひ天の羽衣とり出さんとおもへ[illegible]れば借りたる金は一由旬その利はまた半由旬月宮殿のかの白衣はもはや出すべき工面もなくたゞほうぜんと

あきれしが今は仕様もあらざればむざんや羽衣ながれにけりもはや此上是非もなく里人を頼みつゝわれとわが身をうりしろなし十萬年の年季をいれて姿はかはる河竹や此羽衣のながれしより流の身とは名づけゝる彼天人よりかひもとめし簫ひちりきをとり出して里人是を吹ければ其音をしたひてあまたの天人吹度毎にあまくだれば段〳〵是をとめ置て軒をならべし旅籠屋へ手に〳〵わかちてかゝへけるさてこそ宿は異香くんじ群集をなしてゑひとう〳〵おれもゆかうわれもゆかうと下界の大通大ぞうまでみな〳〵天女の手管にかゝる名づけて有頂天道といふ

出立

里チかアよチひ引〔無有〕チヽイ雷尾じやアねへか〔雷尾〕コレハ無有先生に露時雨子〔無〕ハテ珍らしひ對面だやよなふ　雷その對面がきついこと〔無〕さもそう〳〵シテ何所へ〔雷〕何所と定るあて所もなしさ〔無〕黒仕立に米屋かぶり闇の夜の目印にやアゑへがどうも人がわるひぞ〔雷〕みかけはわるくつても人はすとんだゑへものよ茶屋に下りとつちやアけちりんほどもなしか下らふといつても茶屋は下ゲすかしらきてうめんなんときれいなこつちやアねへか〔無〕おきやアがれ〔雷〕シテぬしたちやアどういふぶらつきだ〔露〕けふ花の會で無有さんに御目にかゝりましたをさいはいどちぞへといふ謀叛で御ざ

りやす〔雷〕そりやアとんだこつたサラバ一所に〔無〕木幡の里に馬はあれども〔露〕君を思へばかちはだ
し〔雷〕イヨちく類めヶア足から大灘だ〔無〕これ息子おれがゆく方を通らつせへ〔露〕南無さん〔無〕そり
やこそ物もいはれねへ〔雷〕ソレ又駕よヤツサコレハサ〔無〕エヽぞんざへな野良だぞ〔雷〕くそわらじで
かけやアがるから〔露〕はねがいつそかゝりやした〔無〕イヤモウちつとだぞ（跡より二人づれほうかぶり
にて）わたしがようなおたふくにほれたおまへの氣がしれぬ〔松〕八やゆんべはよくぬけたな〔八〕馬鹿
なつらじやァねへかきめいりのねへ念佛講をみるやうないつまで咄していられるもんだゆんびやア追
分の市がとけへいつてのそれから千田屋のばいたァ思ひいれいぢめてやつたよきかつせへねりま大根
をみるやうな肉の腕にゐしれねへ戒名を十七八ほつていやアがるからおれがからみぬひてやつたら
せつながつてみんなもう死んで今生きて居るナァ御ぜんせねへとぬかしたわなそこでおれが此ごろほ
りたてのあらほとけを二三人見出してむてへにいびつたらおれが名をもほらうとぬかした〔松〕おそ
ろしい／＼〔八〕そこでおれがすとんだ思ひ付をして來たよ〔松〕そりやアおもしれへどうじぶくつたの
だ〔八〕きかつせへ夜着とお針を十四五本引くゝつてむしやり／＼とつつつひたらきい／＼ぬかしたは
ナ八といふ字をふんまたがつたやうにほつて墨をいれやうといやアがるからおらァ死人めらと一所に
あつかはれちやアてへぎだから光明丹をいれて逆修にしようといつたよ〔松〕ゐへ／＼〔八〕そこでご

てれつあたまかしやアがるにやアわつちが腕だとつてらんとう場ぢやア御ざんせねへとなきつつら
なしてはつきやアがるかおどしやうほねなのしかゝつてミツどやして灰ふきから大蛇の出るやうな・・
はなあたいへおひて来たよそれでもあいつが脊中もごうせいかたい脊中だ今にこゞがしがいたくつて
おられねへ　松はて馬鹿な（といふ跡よりそろり〳〵と）武左衛門　新左　左衛門殿其之外の廣衙で御座る
新左衛門　さて累年降霜の節は介様で御座る順吏貴殿には御老屈と申　労以少ツヽおひるいなさ
い　武左　モウ爰には是までいづくへおこしなさるゝな　新左衛門　イヤ手前ハ明石と申仙家で明石と申めしもりを
ハヽヽヽヽ　新左　イカニモ〳〵兼〻かれが器量聞及ましたが就中かのうかれな大酒をいたし氣儘な
随筆に申ス一國とやら一城とやらいたすものに御ざる　新左衛門　イヤ左程不通にも御ざらぬ兎にかく金
銀を塵芥のごとくまきちらすはつれたものでござります　武左殿にはいつかたへお越なさるゝ　武左　拙者儀
なまの國やにて何の某之助とか申親かもとのをしへ一度に土壇場のじやすいのとあだ名の御ざる傾城
が出ました拙者も此間は名酒になぞらへましたよき熟酔いたしてござる拙者の甚下に頼ましたる　新左　とんだ
だへんなきだね　武左　イヤモウそんな石こつけをつけこいはれにしてやうなぐいしがよくされるものよ第
一傷になるか又勤よしかけもやうれんはお次第おかす事とさいへして任ル〳〵はれまへにもうかへるには
きとれたものはうれしがるの　新左　何かといふ詞はいひあへずなまくする女郎はイヤモウ一ト口もくへね

へゑあんなのがふられゑア今度の世にやアのろまに生れるがかなりだコレ息子ぬしもまだ身なりが野夫だよ先その大たぶさをすつとすくなくあぶらべつたりもざつと付て不用くすしにいはつせへまつかう心得たがゑへ月代さつと髭ていねへ梳念入レのざつとゆひといふ所だ〔雷〕なんでも惣體いきにして一ト言いふもむだ矢なし穴いゝのすごひ所を見せつけさつせへ〔無〕しかしまだ／＼よつぽど修行しねへけりやアいかねよ是からおれがそろ／＼と仕立ようおしい事だ色男の埋木花をさかせて大通の仲ケ間入をさせてへと身は似た山の高ッはりへのみやぐらを跡にみなし大道かゞやく茶屋の行燈風にかはるはとめ寄橘にあらで風鈴蕎麥のけぶりはかり／＼

茶屋

〔三人〕おかさんどうで御さへすゝといひながら小はるやへ上ル）〔若者善二〕是は／＼御揃なすつて〔女房〕どつち風が吹やしたかホンニきつひもので御ざりやす〔善〕どなたも御きげんよふ〔女〕ソレおみや御茶ァ ホンニタべも善二とお噂を申やした〔無〕そりやア有がてへしかしろくな噂じやァあんめへ〔娘〕おみや とんだまアはり氣でおぜんすね〔雷〕時におみほうちつとみねへうちとんだ美しく成たの〔善〕おめへさんが御出なんしたらおめにかけやうとつてむくの葉で此頃まい日みがいてゞ御ざりやす〔おみ〕おいて下

さへよ［雷］おみほうまつちよつとこゝへきや［おみ］アイおめへさんがたアなぜ久しく御出なんせんへ［無］イヤ女郎買もとんとさへぬからそれともおみほうでも（おみ）ほんにかへ［雷］イヤソレデモまだ眞の事は知めへおれと色事をしねへかゑへ夢をみせるがな［おみ］いやでおざんすよ［雷］ナニいやであらうよそりやア眞の事をしらねへからだ［無］コレ雷尾子あんまりつか〳〵物をいはつしやんなおみがよこつぽうでわらつてゐるぜへ［喜］おめへさん今時の娘にやアそんな野夫は御ざりやせんモウ此頃とんだ深ひ色おとこが　おみなんのこつたおんなじやうに［無］ハテナ油斷のならぬこつたの　（此所へ亭主かへる）［亭主］是はいらつしやいました［露］ホヽウ御亭主御歸りか　雷婆婆已來だの　［亭］ホンニ左樣で御ざりやすきついおみかぎりと成やう［無］いや久しいこと病氣ト云てへが何ンともねへ［亭］大かた北國か品川しかし霜がれには遠方は御無用で御ざりますまして露時雨さんなどはお宿で大ていお樂じと成やしよう［無］イヤモウ品川も此節はさへぬよ　雷とかく夏のこつた（此所へ盃出ル）［女］サアまア一ツ上りなさましあげなさへ［亭］サアたりまし［露］是は御馳走［無］時に御亭主久しぶりだ［亭］たべませう［無］（盃亭へはつちり壹分）［亭］ハイこれは有がたふ扨これを恐れながら（と雷へさす）［雷］おゝさへ〳〵［亭］イヤモウ晝からのみつゞけ腹わたの糟漬で御ざります［雷］そこへ希代の妙藥［亭］是は〳〵これではまた一盃給られます［露］そんならも一ツ飮つせへ（と花をやる）［亭］さても兩手に旨ひ

もの此やうな御酒ハいくらもたべられます [無]イヤこいつは蟲が忝へ [露]サア善公にもちとさそふ
[善]有がたふ御ざります時にお聞なさるましとんだ事が御ざります [露]ナンダ〳〵 [善]イエ安〳〵はお
はなし申されませぬ [女]ナニ善二は此頃夢中さ [無]ハテいやなことの熱病ではねへか（此所へいきな小
もんになゝこのうら忝りなんきんのはなり五丁紐類（カ）ちがひのはかた帯ひたいくつきりとぬき中月代の當世おとこ）
アイおばさん [女]五丁さんかおはいりなされませ [五丁]イヤ八百さんはどうだの居續もほうづが有も
んだ今夜はぜつぴ歸るやうにいつてくんねへ [女]ナニサさつきもそう申やしたがおかへりなんせん
[五]ハテこまつたもんだイヤわつちがいかざあ歸るめへいつて引立て來やふ [女]またみいらとりにお
なりなせんしよう [五]何サそこらアぬからねへ例の辯口で敲廻す又内藏さんにも用が有しマアいつて
きやせう（と出てゆく） [無]ハテ忝へきみだ [雷]そしてこよひは [女]玉城さ [雷]インニヤあいつは御め
んだ [女]さうおつしやらずにいらつしやいまし外へ御出なせんしたがしれると [善]ソリヤア難波さ
んの角が十五六本もはへやす [雷]イヤもうあきた [女]おめへさんも情なしだぞさやうなら升坂か吉本
を聞てござへ [善]かしこまりました（しばらく有て） [善]升坂ハおさし吉本に春風さん織井様さわら木
さんはどうでござりやしよう [雷]よかろう [善]さやうならば直にお出ヒ成ましと立出ル [女]サアい
らつしやいませ [無]行べし〳〵（と三人打つれ出ル） [女]左様なら御きげんよう

二階

〔善〕アイ次兵衞どん 〔若者次兵衞〕アイ二階へ 〔三人〕（打つれて）登るはしごの衣紋坂右か左かイヤまつこれへとずつと通す 〔無〕何ぜん公こゝはだが部屋だ 〔善〕春風樣の御座敷でございます 〔無〕何かいきなこつたのシテ床にかけたる一軸は 露周齋が赤壁の景だ 〔無〕活花は梅に寒菊かんしんなことだその外和漢の茶器品々湖月に古今萬葉集 〔露〕いづれ風雅の佳人と見へた 〔雷〕ナニサこいつもおへない茶人だらふ（此所へ子共茶持來る） 〔無〕ソリヤコソくすぶつた茶わんが出た 〔善〕また無有樣のわるい口がはじまつた（ほどなく盃臺その外いろ／＼三人の相かた出ル例之通さかづきすむ） 〔無〕コレ雪姫でも彈正でも茶を一ツもつてこひ 〔子共〕チヤけしからねへ 〔善〕サアもし御めしかへなされませ（三人の女郎行） 〔雷〕無有さん御らうじたかきつい粟島だネ 〔無〕いづれもいかぬこと 〔雷〕しかし露時雨子のは美事なことだよときにぜん公なんぞちつとくへるものをほしい是こんなものは皆無喰へねへの 〔善〕かしこまりやした（ほどなくみな／＼いできたる） 〔無〕何さんはどかりながら（と盃をさす） 〔春〕あけんしよう 〔無〕まづまづ（春かつちりといはせて盃をさわら木へさす） 〔無〕これはどうだきついもんだ初會とハいひながら人によることだぐつと崩して呑氣は内藤宿かノヽ 〔春〕イヽエたべんせん 〔雷〕ナニぬしたちの身のうへで〔さ〕

アイたべるときはたべへナ　[雷]よし〱おきらいなすつたのさうきらわれちやアたゝねへと無上にやみとのむ　[織]（小聲にて）さはら木さん夕べも又さんがきなんすとつて玉川屋まで來なんしたが升坂ハいきなんしたとさ　[左]あんまり又さんもつまりんせんよ　[無]ナニチはなすのだちつと聞てへな　[左]何きゝなんすこつちやア御ぜんしねへ　[無]色おとこのはなしか　[織]マアそんなものでおざんす　[雷]コイツハやけるはい　[藤]もしおみしいがだれぞ呼やしようか　[藤]下に次五郎としげ太夫がおります　[雷]ソレハエヽみんな呼でこい（ほどなくげいしやどや〱）[藝者]これは〱無有樣に雷尾樣イヤ露時雨樣あけは御安泰の御やうだい恐悦至極にぞ。／じ。たゝて　まアつります　[文五郎]まアつります〱と何を笛のだ　[毛七]聞なア　（しげ太夫ゑびすじやアあんめへし　[雷]ゑんなく欠しぶりだ　[無]早速ながら　[しげ]たべをせうきの内ま殿やらつしやい　[文]こいつはいゝぞ　[熊藏]一日先生彈給へ　[定]どつちの目でへ　[熊]どつちいこつちのと一ツ外アねへじやねへか　[文]コイツハゑへ目だその序にひかつせへ〱うれしやさらば彈んとて　[しげ]ヽシ北國ハナ　[無]聞しくりやれ此中も本所の仙薬がとこで難波丁の五柳に逢た所が今から藏前の山魚が所へ河東ぶしの稽古にいくと云からおれもちつと蘭洲が會の事で用も有し又家櫻をとつてこやうとおもつてそれから行たがさいごの助サアはなさばこそ三ン日三夜ぶちながしの大手こずりさしかし遊びは名にしあふよしわらのことだよ　[しげ]てりやアとんだこ

とで御ざりますその内には金龍山の織殿などゝいふ洒落が御ざりましたらう [無]ナヽおとゝひだつけが柳ばしで駒と濱庄が二人づれで通たから何所へ志して行のだと聞たりや織殿へゆくといふからおれも一所にゆかうとみなとやから猪牙にのりの汐先にぐつと會所までから一がいにいつたが何が織殿でいけぬ藝者を二三人よんでのんだが [しげ]いけぬ藝者とは似たことも有ものね [無]これは御めんあやまつたイヤモウしんにさへなんだよ白駒は酒をやめるし濱庄は茶斗いつてのますがどうもおもしろくなかつたがいゝ所へこゝの舞曲が来て居たよ何か俵屋の春日野に帯をねだられたとやらいつて珠城が女房と来ていたから呼かけたりやアこれはいゝ所で逢たさん〴〵お久しい結城座で矢口の後口をした時逢た儘だど（三）つてそれから大のみさ [しげ]そりやアてうどいゝ所で御ざりました矢口の作は平木辨門どのとやらの作だと申ますがとんだ智恵者さうで御ざりますね [無]あいつは遠國へ智恵の買出しに歩行はた此中もおらんだのゑれきてるとやらいふ物をこしらへておれが臑から火をとつた一度臑から火をとつておくとのほせがぐつと下つてどんな女郎にもあつく成氣遣ひがねへほんに辨内でおもひ出した稲野や林右衛門はこつちにゐるかの [しげ]ナニか伊豆へゆかうとやらいふことで御ざりました [無]あたけ丸じやアあんめへしもうゑへかげんにすればゑへ今月なかば時分に升やへゆくやくそくをしたがと何から何までしりつらのほんとはたせし鐵炮は時候はづれの空だめ也 [露]そつちでば

かりはなさずとこつちでもちつとはなしやしよう 【雷】いやもうそんな噺は流して少長の身が見てへ
【しげ】中〳〵おなぐさみに 【あげの新】ナニいやらしい年寄のくせに 【しげ】ナニ年寄だそれでも夕べかはいひとつて　たじやアねへか 【新】チヤむしのいゝ 【しげ】それもう色目さ 【新】すかねへなふ 【文】とつけへこうしよう 【子供】チヤ夜とりのまねをしねへもんでおざんすよ 【しげ】しつたかよう（此所へぜん出ル） 【無】ナニむすこ酒はいかず 【善】御膳を上りまし 【定】お二人様ながらちつと 【雷無】イヤ酒をのんではとんと一粒もいかぬ事 【文】味噌汁はちと上るがよう御ざります 【無】そんなら是で飲つせへ（トいろ〳〵とりくらふ） 文公氣ハねへか 【文】よふござりませう（とくふ） 【新】よふなにかをくひなんすぞ
【文】しれた事さ先當時くはぬ物は四ツ足で駕舁と炬燵やぐら 【無】なりくだもので首つくゝり 【しげ】魚類で本魚と土左衛門 【文】ヤアざつとあんなものだ 【雷】まだ〳〵もちるいでくへねへのは御氣もちとはいとりもち 【文】アイその外なんでも下さります 【新】ナニばからしい 【文】さて此日序に此所へ出ますがそれ坂東に名も高き市川流のつらねごとサア弾て下さへ東西〳〵夫史記の本記に曰舜の側に象稱ず象は是獣にあらず 【無】コイツハかてへぞ 【雷】かてへハゐへがやつぱり狸だ 【文】へイ邪魔が入た折角つかひかけたものを 【しげ】麻病にならふぞ 【文】さアまアよふ引 【熊】どうした〳〵時にまふ何時であらふ 【新】もふ引ケ過でおざんす 【しげ】いつれも退散ハ 【一座】よふ御ざりましよう 【雷】しばらく〳〵

【露】マアみんな一杯つゝ 【喜】イヱもうよう御ざりましようわたくしもちふおいとまこれから又總州へ参ります 【無】それは御苦勞 【喜】周朝は何時におむかひに 【無】例刻〱 【一筆】さやうなら御きげんよう 【春】モシどなたもおやすみなんし 【無】ソリヤそろ〱追出すハ 【雷】ソネヱニ寐たがらねへもんだ夜はまだねへがいよシテ身が女房共はごけへいつた 【露】ナニカな野郎衆が居つかねへ 【無】默りつけねへからさ 【新】よふ口をきゝなんすぞ 【無】その筈さ山下に三年 【雷】八幡山に四年 【新】さう見へやす 【春】サアむだなやめにしておやすみなんし 【新】サアおいでなんしと 二人ともに引立ゆく 【春】サアおやすみなんし 【露】まだ早からう 【春】なにはやくはおざんせんと立切障子引廻す屏風のうちへぞ

床内

翠帳紅閨に ならべし千とせの夢とりの八ごゑも寐耳に水さす人も朝には衣錦となり夕にハやみ雲となるはしまはあすまながしにすや〱と只一睡のゑよう榮花またたまいれた物ではなし 【春】もし〱ちつと起なんしまんまり寐なんすとくすべりえすよ 【露】イヤくすべることは御あんだ 【春】そんなら目を覺しなんしすア煙草をのみなんし 【露】モウいやだ 【春】アゝにくい 【露】あいたゝ〱〱いやもうじやうけつこなし 【春】それならいつきなんすへ 【露】一二三日中に 【春】いゝへ口をきゝて御出なんし 【露】

そんならあさつて【春】しまつてゐいすよ【露】承知〳〵【春】そして獨おいでなんし【露】なぜ【春】なぜでもさほんにさつきもいゝした通初會からとんだやつだとおさげすみもなんしようが夜ごとにかはる川竹の【露】（小ごゑにて）つらい勤のその中に【春】ぬしのやうなきやく人には勤のやうにもおもやしいせぬホンニ末ながくおかよひなんしておくんなんしどうした縁かしりいせんがぬしにちよつとおめにかゝりいしてより（とうつむく）【露】アヽ茶ならお茶に淡雪だ【春】なんのことでおざんす人にばかり氣をもませシテきなんすことハいやかへ【露】いやでハねへ【春】すりやきなんすか【露】これがこねへでいらりようかい【春】ねつからうれしいねそんなに茶ばかりいゝなんししかし勤のうき身なればさだめてはかないやつだらうと思ひなんすも無理じやアおざんせんがうたがいなんすもことによりいす勤の身にあらうことかはつかしい事をしいしたぬしがさういふお心ならあれまでことをわけハしいせぬ今更つもりなんすほどもおはづかしい【露】サアむつかしくなつてきたソシテ何がはづかしい【春】マアよく積てもみたんし初會からあられもないことを申いして親にさへかくすことをみんないはしてそのうへでたんぼわたしがいやだとてそりやあんまりで御ざんしよういやならいやと假名でいひなんしいやともあうともいゝきりたんし聞てわたしも了簡しゐす【露】ちよ〳〵らにもせよ茶にもせよおれがまよひの心からはまんざら嘘ともおもわれずアヽかつたじけない【春】ヲヽうれしいと

ホンニ命もおし鳥のつがひはなれぬ思ひ羽は繻子と緞子の妹脊山中を流るゝ一ト重帯ものを言ならばさうといはまし岩ばしの夜の契りハかはらじと常盤の松の村時雨跡よりはるゝ冬の夜は明がたちかくや成ぬらん

きぬ〴〵

寒閨に獨ふして婦なしとはこれなんめりと獨ぶつ〱やけを起し聲はり上げてさまよ引〱といへどどうしたといふ人もなくいねんとすれど相手なければ烟草とあくびのかはる〴〵どつちをきいてもごう〱あの聲ばかり折節廊下に足音あれどわが傾ならずとなりの睦言聞さへうしと夜着引かぶれど寐られもせずらうがいやみをみるやうにふとんのうへに寐たり起たり手をたゝいてもあいともいはずわが身をして大通と胸にあまんの我慢高慢ぐつとみおろす心から猶さら腹も立たり居たりあたりさはりもあらけなく〔無〕コレ雷尾やあんまりぐつついて居ずとおきさつせへ〔雷〕是はめいわくおらが傾などは今がたやう〱来て先あの通り〔無〕ハテナ新宿ももうさへぬはへ〱まつ惣體がいけぞんざへだ〔雷〕若いものといふやつが股引の尻をまくつて案内なしに人の座敷へのめり込ムし〔無〕マア吉原などにとんとねへ點だばいたといへば鷺の泥鱠ふむやうな足つきで廊下中そゝりやアがるそのくせ眞なつらアし

てぴんしやんしやァがるほんに孫子の代までも遺言にしてよこさう所じやァねへ〔さ〕ぬし達は何をおつせへすへ〔無〕なんでもねへが今夜はとんだおもしろい遊びをしやした〔さ〕それハようおざんすわたしやア積がおこりいしてぬしたちにおかまひ申しんせん〔無〕はてな人の積なら三年もこてへるね（此所へおり井来る）〔織〕かへりなんすにハはやうおざんすマアちつとおやすみなんし〔無〕お志はありがたいお志を無にするじやァねへが此間にゆるりとまいつてやすみやせう〔雷〕ほんにみんながよくするもんだ〔織〕何のこつておざんすマアおいでなんし〔無〕よしてくれへみともねへ手めへがたがつらアみるとぐつとむねくそだ〔さ〕あんまり一國だね〔無〕もちろんのことこれからアいゝてへ事をのたくり出すのだきあこゝらへきてまはされるやうなとんちきじやァねへハこゝらでいふハ馬の耳を澁團扇であふぐよふなもんだが後學のためにちつたア聞ておくがゐへ〔雷〕無有やいふはおだゝはなぜんてへ通なものと物をいふすべをしらねへからおつかながつてよつつかねへのだ〔無〕そのくせ高へつらアするけれどしやつ面へ三ン間階子をかけてもはじまるめへ〔雷〕しかしこゝらでこそたくさんさうにいへ本所の方へでもくら櫓をするとたいていへうれしがるこつちやァねへ〔さ〕なぜへ〔雷〕水場じやァ手めへらがつらアのき場にしておくとな助舟がなくてもまづあんどだハ〔無〕ほんに此内へきていろ／＼なばけ物をみるぞ 〔雷〕コリヤアふくろうにけへどりをさせて此女郎共と一所に両國へみせものに出したらは

やらうぞ [無]イヤとてもこゝらで小言をいふもあんまりじやけらだ氣はづかしいさらば息子をおこして歸りませふ（此所へ小はるやおむかひ）[雷]何ぜん公かおそかつた／＼露時雨子支度は[露]もうよう御ぜへやす [吞]そんならかならず待ていゝすよ [露]アイ此間に [吞]どなたもおちかいうちに [雷]ハイ正月の十ヲ斗有時ふとさんじやして又おせわに成やしようとふられた脊中に腹いせはふみとゞろかす階子もばた／＼みせのくゞりもぐわら／＼／＼月落烏鳴わたりて天龍寺の鐘の聲ゴヲン

通仁枕言葉

完

通仁枕言葉　自序

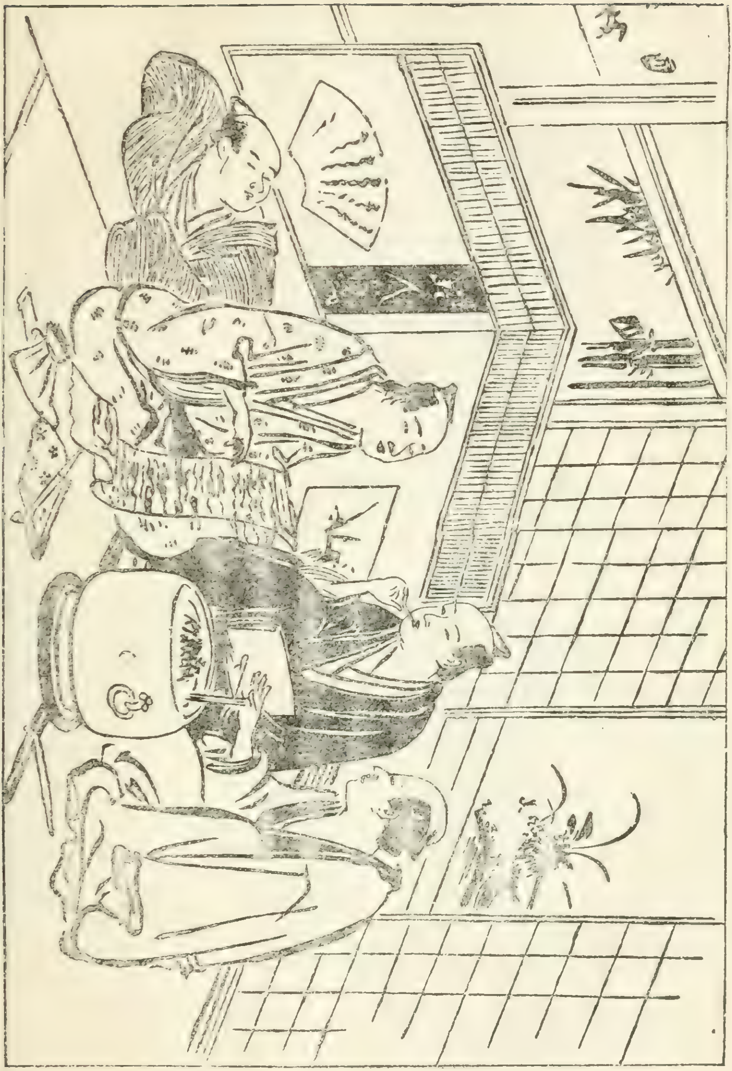
僞の。文字を分れば。人の爲。是。傾城のいろはにして。親の爲。夫の爲。身をたち賣りの。西瓜同士も。義理に詰れば緣をきり。夜每ハ昔。時每に。替る木まくら薄蒲團。客を欺して金を取る。是も勤の操なり。其懸らるゝを知りながら昇るといふも人の爲。左すれバ遊びも善の端。此發端を尋るに。かの遊ト大會と。內を僞り出て來るも。金を遣へば人の爲。芭蕉の翁の發句にも。華の會。鐘は上野䟽。淺草䟽。七ツ聞ケバ。花を揚。歸る支度も一ト趣向。吉原

雀ハねぐらに入る。櫓仲町。裾土橋。大通不通。家暮のろま。屋鋪衆息子集りて。ミなそれ〴〵の。樂しミを。囙らぬ筆にて著わせども。一ツも實の事でなし。本屋の爲に述たれバ。やッぱり是も人の爲。悪ひ所は穴賢。

東都蓬萊山人歸橋
戲誌

安永兩子の年
めでたき春

【一擧】りやんさん。花も、生る内はくるしひが。コウ出来そろつた所は、奇れい事だねへ。【二指】そふさ。じれつたくなると出来ねヱねへ。公の水仙は能く入ッた。しかし三もとの花が。多すぎる。莟ばかりにしねへ。はかまも三もとながら。出したがいゝ。まだ冬至めへだによ【擧】わつちもそふは思つたけれど。先生が来てから。相談しよふとおもひやす。床の脇の仙人笠也は。上の一輪が能くうけて居るから。引ッぱりが有ッていゝねへ。【三瓜】(は。ふすべ縮のぞうりをならして)二人ながら早かつたの【二人】三さんおそかつたねへ。ゆうさんはどうでござへす。【瓜】一ッ所にそこまで。来たけれど。柳ばしの中むら屋まで行やしたわつちは今朝生てけへりやした。梅のずゐゝをたづねたけれど。ねへからかんせへに。おどり猿にちよびと白玉椿さ。見物の有る大會にころぶといふ句も。若ひ中の事さ。すむゆうなんざア。此ごろ案じて。今朝来て生やした。向ふのぼくの南天に。かん菊のねじめ。能く出来たねへ。わつちが歸る時分にも。まだいぢつて居たッけが。ぜんてへ福耳といふやつが。生ケにくひやつだ。花ゞが下へ落て。ならねへものさ。【一揷】きつひもんだねへ。しかし。ぼくの南天には。アヽ實は付かねへもんだが【瓜】なあゝに。木ぶりのいゝぼくへ。穴をもんで實をさしたのさ。こふいふ悪句は。先生へはおんみつだによ【圓】せんど江戸ばしの三河屋で。源明が合を見やしたが。大きな砂鉢に。かきつばたを能生ケやしたが。花と花との間を明て。三所ほどさ。あれもする



事かねへ。［爪］ずいぶん一ッ系なぞが會でも魚道といつて。間を透かす事も有りさ。元祖根がしまらねへからのこぢつけさ。杜若と菊と水仙を。とり廻していぢれば。外の花は出來るものさ。此夏杜若一ッ色の會に。十合が四季を生分たが。冬にはこつたそふさ。其會の二日ほどめへに。花溜へ入れて置て。二番咲と。すこし葉の先の枯たを。生ケやした。こゐらは。せへりよくといふもんさ。むかしも利休が馬だらひニ櫻を一ッぼん出して。生ろと有つた時。はさみもくばりもねへ所を。さすがは利休で。櫻を手に持ち。元から半分ほど水のうへえこひて。その枝をたらひのふちへ立かけ。水へうつるかげと散ッたけいきを見せたといふこつた。こふいふ事が氣性の第一さ。［指］外の流じやア。こゞませて生けるが。うつとしひよふだねへ。［爪］是も理のねへ事でもねへのさ。ソレ軒下に虎耳艸を釣して置て見ねへ。みんな外へ向やす。生花も其ごとく。出生を元とする物故。床のうしろハ壁か板で。正面から陽氣をうけるから。しぜんとこのやうに上をうけて。まへがゝりに生ケるもつともな事さ（とはなして居る所へ四開、舟宿よりかへる）［四開］みんなはやかつたねへ。此大ぜいの連中がそこや爰にかたまつた所は。白魚のねはんをみるやうだよ。［舉］來るともふむだをいふ。しやれどうしのあぶらげでも喰つたそふだ。今まで何をして居た。又氣の有るのか［開］おとゝひも行やしたが。ちつと。どろんこ。よたんぼうでわからねへ事が有やしたから。今日は晝夜を廻して。むけへに來るはづ

でござへすから。來たら待たせて置けといつて來やした。［指］けふの南夫は妙だね。御出情が見へやす。誰やらに見せてへのう。［四］花會に花の評をするは。いやの番頭が。じやうるりの功者をいふよふで。やぼらしいこんな事は。流しもちで。世事のうわさに致しやしやふ。［爪］さつそくながらおなんはどうした。引こんだそふだの。［四］吉原に居た時分から。平藏とあやしふござへしたを。尾花屋へ來る若德に出てから。色客のよふに。やぐら下の湯なぞへ。來るといひやしたが。ゐんといふ物はかわつたもんで。小田原の父といふ者に。五月の十日に。笹屋でふひと出て。六月のまつりにも德がしまつて。江戸へ見物に來やしたが。德が歸ると父を引込んで。二人しての竹わりかんゐうとうさ。［爪］佐名太夫がいざこざはどふなつたの。［四］せんど檜物丁と（佐太夫居所也）山の伊勢屋で。中直りがござへした。それに付て。佐名太が三絃彈の市次が。猪牙の。けんくわの噂しを。お聞なせへしたか。［二人］いんにや。［四］いつかの日だつけが。堀江町の吉川から。多葉粉屋のてゐゝが。福もとの内へ。おやゑがつらを見に行やした所が。その日どこやらの隱居が。松介や藤藏を連て來て。何か藝者の五六めへも呼んで。錢を遣ふ。内中のものは。おう箱のこわめしを明けたよふに。逆さに成ツてさわぎやす。所へ。はぐり錢のおれたやうな。けちな客だからふてうし燒が三文ぐらひに。とりあつかわれたから。けへゐうといふ。しやうべゐづくで。おふでや佐名太夫が。とめたけれど聞かねへで。

一人がいふにはいめへましひ。是から佐名太や市次をつれて。土手側へ行ふといふ、佐名太も名のある者だから。土地の客人を、余所へ連出したやうでも。氣のどくとおもつたか。ありがたふはござりますが。六本木の方の御屋しきへ。おやくそくでまゐりますから。参られません。市次ばかり。おつれなさりませと、はなされは、そんなら市ばかりこひと。客弐人に市次と、猪牙に乗つて出やした、段々川へ出ると一人がいふには。手めへがよつほど目の縁がいゝの。出しやがいゝのと。引ずり込んで。せがき共の笑を見るやうに。あしくするも程が有。どいつもどいつも〳〵。不断役者と附合ふから。南京人が長十郎の聲色でも遣ふやうに、一ツもわからぬ事斗いふ、イヤなじみだのさしみだのと、まへろによつて寐て居るのが。あすこへ行よりましだろうと。向ふになつていつたれば、客人の男もむつとして。あしくされたとおもふのは、うぬがやぼからおこつた事よ。心安ひが過ての事だ。高へ所へ氣が附けば。あつとも腹は立たねへ物さと。あつちこつちへ云ひやつて、仕めへにやアつかみ合。市次は相手から氣の毒がつて。いろ〳〵といつたけれど。聞かねへとおもひなせへ。だん〳〵それがこうじてくると、市次は泣ごゑに成ッてとめるほど。つよく成ると。さすがは吉田の源ほど有ッて、云ひやうがいゝのさ。市さん氣づかひしなさんな。此早ひ汐にコウそう〳〵しくつては。今に滑にでもくりかへりやすが。おまへ斗はどうしても。ころしやアしねへといふを聞くと。二人のてゑゝは。けんく

わもやめてしづまつたも。大笑ひじやァねへか（みな〳〵わらふ）[環]檜もの町が此ごろ。座しき見臺を貰つたそふだが見なせへしたか [開]見やした。一ッてへが。極のなし地に。菊壽を青貝と金銀とで高蒔絵にして。ソレあの。座がねが金のむく。銀と赤銅で張つたのさ。七拾両ほども。懸つたそふさ。小松川に見せたれば（文字がいん居所）おれも若へ時からお大名へも出たがコウいふけつこふな見臺はみた事も無いといつたそふさ。遣り人は飯田町のかただそふさ [爪]そんならよの字かの（とはなしなしている所へ中むらやより）[舟頭吉]ゆふさんは爰でござりますか。[開]だれだ吉か。どうした來たか [吉]イヽエあつちから急に。御文が參りました。[開]使はまつているか。[吉]置て歸りました。[開]よし〳〵。うけ取た（せんどうはかへる）[三人]何がいつて來た。[開]女房の所から何の事だか（とかんがへ〳〵ふうな切り見ながら顔のいろかわる）[指]何ぞふさぐ事でも出來たか [開]がつてんが行やせん。[爪]ひとりしてじれる事はねへ。ドレその文を見せねへ。（三人もそばからのぞく）きうにたの字がわいらふから。くる事は無用だと書て有る。なるほど合點がいかねへ。今朝しほ留のよしやから。歸る所を見たが。中氣した大こくをみるやうに。あぶはゝといつて。げんきよく。けへつた。それに見ねへ。くる事は無用だと。いふ事が。十一迄書て有る。たとへ病氣にしても。ちよつとは來ひと。いつてよこしそふな物だに。[開]ちつとはあたりも御座りやす。尾花屋の内へ。去年のゐべすかうからくる。

節木の平助といふやつが。錢を遣ふから。おゝかたこいつが仕めへと。へんげへたもしれやせん。それにおかねまでがぐるになつて。しやうちしそふもねへもんだが［指］そふいふあたりが有なら。達へは無へ。おしかけていつて。ぬしが切れるか。平介を切させるか。それから先は手が有ふ。［開］なるほどそふしやせふ。おめへなんぞも御出なせへし。［三人］どふせふか［爪］ナアニあの子斗遣るがいゝ。わつちらは辨てんの。ニヤアへでも行ふそふしざア。後へんの案じが有るめへ。（是よりみな〳〵わかれてかへる。それより四開は中むらやへ行。舟にのり石場の前を通りまりしてんのまへを通り。梅もとへ行かずに。外のうちへ行かんと。しらぬふりにて山もとの内へ行あがる。舟中のいき册あれども。通俗の小册にくわしければ略す）

山もとの座舗

［娘まさ］能ふ御出なせへした。どなたぞおなじみでも御ぜへすかへ。どふか見申たやうだ。［四開］見申も梅ぼうしもねへ客さ。久しく来ねへから。どの子がいゝかしらねへ（と居ぬ女郎斗わざと聞にやる）おみをか。おしげにしやう。［まさ］おみをさんは上方へ行やした。おしげさんも引込やした。誰が有るか。聞に遣つて見やせふ　［開］そふしねへ　（娘は勝手へ行。女すいもの鉢肴持てくる）［女］壹つお

吸なせへし。だれぞ藝者衆を聞に遣ろうかねへ　[開]（是もしつた者はわるしと）仲太夫は。[女]南さいぎ町へ引ッ越しやした。[開]和藏は。[女]四月死やした。[開]辰ハどふした。[女]土ばしへ行て。女ほうもちさ。どふも合點がゆへりやせん。みんな今居ねへもの斗。口を切ンなさるが。どふかわけの有りそふなことじやアねへか（此じやアねへかといふ事も今の通言）[開]そんなら近へ頃出る。幸吉とやらを聞てくんねへ。[女]能く近ィ頃出る者を。しつて居なせへすねへ。と（ことばを殘して行）[まさ]いゝ所がござへす。お梅さんにっおいまさんに。おみなさんに。おことさんに。おことよさんに。おらゐさんどの子ども衆も。美しふござへす　[開]（多く口な切れどもみなちかづき也おたよが口なきらぬなあやしく思ひ）美しひ。とまり木の高へ下は。なじまれねへ。このごろみた。何とかいつたつけっ（とかんがへて）それさ。たしかおたきとやらだ。[まさ]そんな子はねへのうお吉どん　[女]そふさ。だれだのふ　[開]子ども屋の名ハ。丸ひろ屋とやらさ　[まさ]ヱヽそんなら丸ひら屋の。おたよさんでござへせふ　[開]その事さ　[まさ]有るなら口をきりそふなもんだが。お吉どん聞て來ねへ（女はきゝに行藝者幸吉來）[幸吉]能ふ御出なさりました。[まさ]正月屋を聞てへねへ。またいつものきまじめか　[幸吉]度々遣ふで古しにかぶれそふだ　[開]（カ）此さんは來るか　[まさ]けふもおいちさんハ。山しろ屋へ行て（といふ所へ女ハ見ばんなかへる）[女]おまきさん。わりひねへ。[まさ]どふだねへか　[女]いくよ

しめ内に出て居なさるとき　[まさ]あとを付たか　[女]尾花屋から付て居やすゝ　[まさ]誰に聞た忠兵衛どんか　[女]五郎さんにさ（と聞より。四開は思ふにちがひなく。しかしいくよしのうちに出ているハ。おたよが客になる。くぼ井といふ客人ならんとおもひその上。くぼ井とは近付なれバ。いくよしへ行。久保井に逢ひおたよを遣るとも。きれさせるともせんと。色々工夫をする。）[まさ]どふなさりやす。[四開]（ハ飛立ツ心を落付て）だれぞこまかひ所をひとり呼んでくんねへ（女は聞に行）

幾よし屋の坐舗

（ハ久保井におたよ。梅田におかね。其木におその。藝者佐名大夫。仙丁。龜。はおり。大吉。勘介）[娘うた]久保井さん。大きい物ではじめやしやうか。[久保井]何でもはじめたがいゝ。[仙丁]おうたさん大き過るよ　[うた]いらぬお世話さ　[久]コレおまつほうゝけさぞうり取を仕めへによこしたが。よかッたか　[娘まつ]それで大にあの子と二人で氣をもみやした　[久]ナゼ　[まつ]ぜんてへおたよさんハ梅もとのお客の世話で。江戸へ迎に行なさる所へ。あなたのほうから。お人が参りやしたから。梅もとのおかねさんに。おいよさんがどふぞ先をへんげへてくんなせへと。頼ミなせへしたけれど（いくよしの女ぼうおいよハ梅もとの女ぼうおかねが姉也）出来にくうござへしたを。市さんに（此市といふハ梅もとの

亭主也）色々言やしたれば。おらがお客ハ度々くるから。今日ばかりハ遣ろふと。あつちの客人のほうハ。おたよさんを病氣のぶんにしやした。のふおたよさん（とかほを見る）〇（おたよハけふの仕まひへんがへの事。ならぬと梅元にて色々いひけれども。むりやりに病氣と。おかれが方々。云ッて遣りけれバ。ぜひなくいくよしの座しきへハ出けれども。心おもしろくもなく。何やらかんがへて。杉ばしの先をかんでいる）

〔久〕どふぞしたか　〔たよ〕しやくだそふで。づつうがしやす　〔久〕何しやくで頭痛がするとんだ。（もノ呪リ）錢が無くつて。くるしひのか。頭痛もしやくもやめにして。ひしやくで無間がましだろふ　〔た〕かわッた事を云ひなさる。こふいふはかねへ顔でも。玉の帳を見なせへし。日に四ッ五ッは。あきないやす。錢や金にかぶり付く。あんまり淋しひ心もねへのさ。今日梅もとの客人を。病氣といつてへんけへたも。おめへに出るが。嬉しさにさ（とおして笑ひながら）〔久〕だまりやアがれ。此あまハ。うぬが勝手のいゝ時ハ。お客のほうを貰たの。あすの仕めへをへんけへたの。辨慶から暑寒を遣ふ。切ッても切れねへあまじやアねへか　〔梅田〕久保非さん。いゝにしねへナ。おたよさんも。だまんねへ。おもふ中の小いさかひは。鳥のそらねかいつわりか　〔其木〕そのいつわりかが。まだわりい。小いさかひを立退ても。（斎宮大夫を似せて）わたしが姿日に立てバ。かり駕に日を送り　〔藝者大ぜい〕ありがたし／＼

〔久〕佐名ほう彈かずに。一段語らねへか　〔佐名大夫〕川ぞひか善知鳥かね　〔大ぜい〕秋の七ばけがい

ゝによ。（佐名大夫ハ一段かたる。此間酒事有。ほどなくかたり仕廻）［其］コレ仙丁。深川拜見といふほんを拵へよふとおもふ。仲町ハてふげへしれましやう　［其］てめへにそうだんしよふ。まづ子どもも衆でも。美しひ所が。お今。お梅。おたよさん。手の有る所が。上がたのおいち。おミな。おらへ。おこと。おこよ。一ト通りの所が。おその。おかね。おいく。おつる。おまち。おくめ。おぬい。いまの。お百。おしげ。新ぞう衆で。おミき。小とめ。羽おりで美しひのが。おとめ。おちか。おいち。歯を染たのが。甚介。義太夫のおいよ。としまの春治。此土地でハ。此三人より外ハ。歯を染た者ハねへ。じやアねへか。いきな所は。大吉。八十吉。かね吉。ぶんごで佐名大夫。義太夫で八重大夫声色で長次仙丁。鎮。幸吉。さハぎで三吉。加兵衛。伊八。仙吉。まづあらまし。人の知ッた所ハ。こんな物さ。くわしくハ内に書付て置た　［仙丁］きつるもんさ。私どもも。高へ中だね　［梅田］月見に九が所で有ツた茶番をお聞なせへしたか　［久其］いんにや　［梅］中尾が出て。娘道成寺をする。やくそくの所へ。千鯉が来て。どふぞ道成寺の住寺を（ママ）。させてくれろといゝやす。ミんながいふにやァ。手めへの茶ばんハ。聞た事もねへといへバ。ちつとしこうもござへすから。どうぞといふによッて。其番組にして。段々初手から。茶番がすんで。今の道成寺ハ。夜の九ツ過にも成ッて。ほんのほだいの。まり唄もすミ。鐘へ入るとそれいつもの通り。二人のほうずがさわぐ。おくから千鯉が。住持で。衣を

著て出て。おかしまなごの庄司(せうじ)といふ者。官人の娘をもちなぞとお定り通りいふ内に。勝手(かつて)から町人が官人出て。千鯉が袖を引き。何やら囁くと。千鯉がこまッて。やかましひ。爰でいッては。外聞が悪ひ。どふでもあとでして遣ろふと。いつてかたりをして居ると。又袖を引て。それでも九ッ迄の御やくそくで御ざりますから。おきめなさッて下さりませと。うるさくさゝやく千鯉ハこまる。見物のほうでハ。アノ男ハなんだといふと。誰が云出したか。堺町の中村屋から。そん料で借りたアノ衣を。九ッで時が切れるから。せつきに來たのだと。こそ／＼笑ふとみんなが。其氣になッて。こいッは大わらひだなどゝ。見て居ると。千鯉ハせつながつて。色〻といつても聞かずにせッく。見物はおかしがる者も有り又氣のどくがる物も有り。千鯉ハ胸にすへかね。腹を立ッて。此男のやうな。けちな。大勢居る中ではぢをかゝせた。二度と何ンでもかりハしねへ。衣も何も持ッていきやァがれと。衣をぬひでさん／″＼に引さきなげちらして逃込んだ。衣ハ残らず。くろちりめんの頭巾さ　〔大勢〕かんしん／＼。見物の氣を取たが妙だぞ（とみな／＼ほめる中にまじめにて）〔仙丁〕面白ひやうだがぜんてへ茶ばんとハなんだねへ　〔藤田〕しらねへか。氣のどくだ噺して聞かそふ。能ッく聞ヶ（とゑもんをつくりつゝ）そも／＼茶ばんのはじまりハ。筆のじくを能くとをし。少しの薬に茶をさして。くだんの竹の先へぬり口ぶ付てふく時ハふしぎの名玉顕れて。あたかもびいどろのごとく也。唐土にてハ。しんの

うこうあん。我朝にてハ南郭仙人。是を茶ばんのはじまり也。（ミなく〳〵どつとかへして笑ふ）（又酒事有つて茶わんになりおたよが所へさす）〔たつ〕つぎなさんな　のめねへによ〔娘ほの〕いつも呑ながら〔たけ〕けふハのめやせん　〔松哥〕ナニ呑めねへといふ事が有るもんだ（とむりに手をおさへなミ〳〵つぐ）〔たけ〕呑もしねへ物を（と云ながらいきもつかずにのミちやわんを出して）のどがかわくから。もふ一ツぺへ哥気が違ツたそふだ。よしねへ〔たけ〕いゝはな（とまたのみ）ヱヽじれつてへ。どふしやうのふ（と茶わんな右の手水鉢へうちつけわれると。くぼ井ハけふの仕うち合點行かずとおもひ人のしやれも咄しも耳へいらずかんがへ居たりしがむつとして）〔久〕何がどふした此女ハ（といわんとする口を其末はおさへ）　其愛でいつては。まけだのからくり何の事ツたな〔久〕いふじやアねへがりけへをとくのだ。昔吉原遊女に。何とやらが。客を送ツて大門を歸り。まだ行春の。明さおく。歸りし客の内の首尾。いかゞとあんじ居たりしに。折ふしほとゝぎすの初音を聞て　〽君はいま今戸のあたり時鳥。まことにそふも有りそふなもんだ。深川のやつらは。客を。ちよんひい。かしまで送り。もやひをとひて。おし出すと。おさらばよふ。お近ひ内に。おばさんにも。よく云ッてくんねへ。吉どんあしたよ。などゝ云捨て茶屋へ歸ると。おき番のあんかをかりて（此あんかといふは小き箱に入し火ばち也。俗呼んで辻こと云。家の風義ニて男女のおき番あり。又おとこ斗の家も有りし）襦でてんでに引ツつゝミ。今夜の客ハついでねへ。

りやんでもよだ喰ふ。ハりらをした。揃ひも揃ツた取ツたりだ（此とつたりといふ事は。人形芝居のやくざ人形に。手の無といふ事也）あたごになるが。いやさにの。鉄棒がら〳〵おさらばとさ。お客じやアねへ飛だねへと（此あたごといふ事ハ二十日にて廿四日に成ルといふ事也一きりを薬師と云。三切りを大師と云もみなふてう也）ひとりがいへバ。モウどこいらへ行ツたろふ。石場のあたり新地のはなか。七ツのそこりで。通るめへなどゝ。客の話る内ハごう〳〵。枕の朽るほど。どぶさつて。帰ると起てくぜり出し。もし時鳥の鳴く時ハ。こけは今。洲の有あたり。時鳥。いかにそだちがいやしひ迚。コウ手には迄逢ふ物か。（とおたよが方を。しり目にかけていふ。おたよハむつとし）[た]とんだおめへハ御はつめへだ首の塩だものと。奥の女中の色だやうに。おろせばしやれだとおもひなさろふが。こふいふ勤をするからハ。むかしの高尾小紫。百に四へへの夜鷹でも道に逢ツた事ハなしさ。あんまりあきれて。おか椎實が一ト袋。直はしらねへが。買に違ろふ。けびた所がかんばんさ　[甚助]ちつと古ひが弾やしやう。大吉さん能しか（二人して調子を合て）〽蛙なく野中のしみづ清ければ。田毎の月は。うは気じやと。明くれ思ふてくらする　エ引　〽早乙女の菅笠しろき一もんじ。女心のくよ〳〵と。明暮思ふてくらすエ、引　〽卯の華の垣根にしける雉ひにこがれて鳴くやほとゝぎす。明くれ　[久]モウあとは知れた物だ。やつぱり古ひが。むねのほむらが聞てへの（大吉と二人してかたる）[松]おたよさん　[た]たな

んだ　[松]ちよつと來ねへ　[庄]呼出すも古イ所さ（と出るお松は小ごゑにて）[松]梅もとから。堀江町の客人が來たから一寸かしてくれろとさ。床へ廻らねへうち。いつて來ねへな。そしておめへハ云過るによつ。よしねへな　[庄]あとの所をがつてんかへ　[松]承知木かち〳〵。まくを通して置ふハな（おたよハ梅もとへ行。四閑は山本を出。もへ立心をおししづめ。何しらぬ顔付にて幾よしへ來）[開]久保井さんハモウ來なすつたか　[ほの]アイ見通しにおいでなさりますどなたでござります　[開]ゆうでござへすと。いつてくんねへ（と娘とつれだちすぐに見世へ行）[ほ]久保井さんどなたか　[久]だれだ（と顔を見て）コレハどふでござへす。おめづらしいマア爰へ居んねへ　[開]けふハおめへがたのお揃と聞やしたから。おあとをしとふてさ（と四閑は。おたよが居ぬ故。かくれしかもし間違にて。ほんの病氣かと。あたりを氣を付る）[佐名仙丁]のふさん御きげんよふ。おめづらしふござります。[久]コレおほのはう。だれぞ美しいのを獃人。[ほ]だれが能かろふねヱ。[開]インニヱよしねへ。羽おりでも呼びやしやう。そしてぬしのおくがたハヱ。[久]至つての麁相さ。今めへりやす。おめへ顔さんを取らねへか。あつかおふ。[開]ちつと勝手に逢にくる者が在るから。おつ付ケ取やす（かくておたよハ四閑が來りし事ハ夢にもしらず。梅もとたかへり。見通しへ來りしに誰やら頭巾をかぶりし人。能く〳〵見ればふが顔に似たるやふニて。合點行かぬ顔にて。心をつける）[庄]おほのさん。いつそ醉たよ　[久]たの字爰

へ來や。是が私妻でござりやす。「開」ドレお内儀にお近づきに成やしやふ。(と頭巾を取つて)何ンに酔なすつた。うそのにこゞりにか(おたよハはつとおもひ。ひたいをおさへ一ト口の返事も無くうつぶく)なるほど美しひもんだ。どこの女郎衆。女郎衆と云ッたら。しかられよふ。子供衆だねへ。(奏者ハ。ふな／＼四閑がおたよを呼ぶ事をしつて居る故。いかゞならんと。氣のどくがり。物をもいわず)おめへはどうかしなすつたじやァねへか。(といつてもあいさつなし)なぜ返事をしねへ。(といわれおたよハ)「たよ」是にハわけが有りさ。マァこつちへ來なせへし(と廊下へよび出し)さぞ腹が立やしよふが。段／＼長ひわけの有る事でござへす。マァ下に居なせへし「開」おれがうつな事も有ふかと。わきの内から手を廻して聞ケバ。宴の内に出て居ると。見番で口をきつた。病氣といつてかつぐなら。見番や廻しにも。通して置たら能かろふに。コウいふあさはかな書よふでハ。コンナ牀しいやろうでも九軒の茶屋じやァ相應に。人にも顔をしられて居る。さとる堂へ上ッたやうに。廻すもほどが有るもんだ。爲になるから錢づらで。ぶり元へ付たのかよしにしろおきにしろ。由良之助が枕紙しやァ有るめへし。いまさら手めへに突出されるも。くやしいとハおもわねへが。中町へ來ル客人ハ。きふにたの字ハほれて居るの。きのふも湯屋でこふいつたのと。是からしてが氣に入らねへ。家暮な事をいふよふだが。てめへがさして居る臣に。尺の伸た名代ハ一度も呼だ事ハねへ。「たよ」だん／＼云なさる所ハ。一ツもむりじ

やアござへせんが。わたしがいふ㕝なも。お聞なせへし。けふおめへのしめへの所へ。久保井さんが久しぶりで。来なさるから。おかねさんにそふいつて。おめへのほうをへんけへて。くれろと。おいよさんが頼ミなすつたけれどもそふハなりやせんといひ切ッたを。おかねさんがしやうちして。手紙を書て遣んなせへした 開 どういへばこふいふと。おかねでもぬかみそでも。手めへが一ッどつこひと。島田の元結を引ッちめれば。一も二もねへりくつだのに。あんまりしがねへ。しらを切る。 ― たなるほど。わつちが。出めへとさへいへバ済(すむ)けれど。けんどおめへが咄しなすつた。晦日迄に。両手ほども無ければならねへと。アノ狂言も有るからねへ。けふの仕めへも幸ひに。出たのハ悪くもござへすめへが。コウいふりくつになるからハ。久保井さんとけふ切れて。おめへの顔さへ立たなら。マアいひぶんはござへすめへ。 開 久保井がかをきれるに切れて。おれが顔ハ立ッやうだが。頼んだ物をもこしらへねに。やつぱり切れろといふ心か。 ― たゞ久保井さんを切れた迚。出来ねへ㕝もござへせん。もしもくめんのわりひ時やア。もう一年もねんをいれて。十めへぐらひは。いつでも出来やす。こふいふ所でおめへをつぶす。女とおもひなせへすが。わたしハくやしふござへすハな(となみだぐむ) 開 そんならどふともしたがいゝ。おれハ久保井にそゥ逢はねへ。四方八方いゝやうに。あすこへ行つたが

― たゞおッつけ隣(となり)へ行からね。かならずまッて居なせへし。四間ハ梅元へ行おたよハ大勢居る見通しへ来り

久保井が側へより）久保井さん。改ていわずとも。さつきからのいざこざを。てへけへ承知でござへせう。どう引をもおめへに。出にくひわけがござへして。けふから。だれでもおよびなせへし。もつともゑんりよはござへせん。（と聞より久保井はこうなにやしおんなきわめ）久 しなによつたら切れもしやうが。切れぬ時には。又どうする。旦 ナンノ切れるの切れねへのと。おばゝが酢だまをかむよふに。理屈もいりやせん。（二座の大ぜいはあきれはて娘はそばにて氣のどくがり）哥 おたよさんどふした。氣が違ッたか。そんな一ッ國が有ルもんか。あきれて舌が廻らねへ。吉兵衛さんを呼に遣るよ。どうでもそれじやァ濟ねへよ。旦 ナンノすむのすまねへのと。大屋さんに頼まれて。井戸けへにやァ出あへし。うッちやッて置ねへな。久（ハおんくわ（ママ）に多葉こを吸付て）腹の屋てへの雜もつを丘ぞうへおちつけ能く聞ケよ。おれにてへしてハ。どふもそふいふ事ハ。いはれねへはずだが。鹽屋のやうでもうそでねへ。暮のしかけに正月の。仕めへも人が多くさせ。節句〳〵はじやうせきで。二季のすもふに二度の月。春顔見世の兩芝居。山びらきからぼたんのさかり。一年置の祭の棧敷。山王の祭禮にハ。艭で見せた。一石橋。時ゝ替るまへだれも結（ケ）までうぬが物好かせ。二人の廻しの心附ケ。升屋の普請能く出來た。ゑびすの宮へ行てへの。又かゝさんと連立ッて。目ぐろの不動鬼子母神。その日に乘つたかごの代。よく〳〵の時でも有るか。此ししぎ（たノ誤カ）は石井屋へ遣ッても。壹分より外かしやせん。あ

つもりの帯を引出すに。わづか弐分ほどたりやせん。どうぞ跡をと云のこして。夜着で半分かくれる顔」こけが承知で二朱も遣れバ。舌を出すのも知ッては居れど。われがからだのうごく度。外の客にハけちりんでも。まけた気のねへ男だ（とうぬぼれと一ツこくをしつかりはんぶんに。いざこざをいひちらす）

し（投歸橋は心氣の事有ッて。八まんの社だんに通夜しけるに夜ハほの〴〵と明ければ。ねぶらぬ夢ハさめにけり）

歸橋 歸ッてにばなで。茶つりましよとお定りのからすがカア〳〵。鶏ハあすこでコッケッコウ

かよふ神の講釋 全

かよふ神の講釋

謹上再拜〳〵。かけまくも。鎮祭奉通ふ神の廣前に額き。宇豆の御饌宇豆の御神を捧。ねぎ事を申。北方ニ跡を垂給ふ。吉原の神社九郎介稲荷大明神をはじめ。東方にハ富ゲ岡。南ン方には坂の飯成。端々角々の小祠等に至るまで情を賣るもの情を買ふもの。通ふ神の神徳に寄らずといふ事なし。信心參詣の輩。速に感應あらしめ。通。不通。いき。やぼの差別なく。擁護のまなじりに。みそなハし。常持に守り給へと。恐れミ〳〵を申。拍手チョン〳〵鈴ガラ〳〵扨いづれもがた能ふ御參詣。まづ以て此間中御披露申通り。久々中絶致した。女郎買の守り神。通ふ神の社建立の趣向。且又通ふ神の。御神徳をも。講談いたし。神恩をひろく御承知有レ之やうにと存るが。我らが心願に御ざる。扨夜前も講じます通り。何茂方が口癖に。日々云給ふ色事といふ事が神道の極意最上といふて。色事が神道の根元でござる。此事の委細ハ先年十寸穂先生が著述の。艶道通鑑といふ神書に。述置かれました。十寸穂七部の神書の其随一でござる。神

學志の面々ハ。定て御覽なされつろふ。依て委しくは申さぬ。つまんで申た處が。二柱の御ン神ゟ海も山も木も艸も人も鳥も蟲けらも。此神恩より出來ました事じや。扨此二々神のおはじめなされし色事の名を神道ニて。交合と申じや。スリヤ色事から世界も出來。人間も色事でなければ。出來ぬ。其知れた事を。事むづかしく。コウ序分を略して置かねば和した講釋が出來ぬ故。まづざつと堅ミを申のでござる。近ごろ心易ひものと同道して。杜選和尚の說法。大通禪師の法語などいふを聞ましたが。神職の此方どもが耳へさへ。おもしろく思ふからは。佛好の人々ハさぞやさぞ。御信仰とぞんずるが。迚もの事に。神道の講談で。神の敎の色事に導たく。通ふ神のやしろ建立に付て。かうしやくを初ました。しかし杜選和尚や。大通禪師のよふに。面白ふ略す事ハ。講釋が下手故。其所ハかんにんして聞て下され。扨と色事が神道のこんげんといふ所が。くどくも。此かうしやくの眼じや。その色事といふものを佛道でハ。きつい嫌ひもので。妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者とやら敎へ。死ぬ時の輪廻の種々ふり捨させるが。佛法の立て派、出家しては女の手から物を貰へバ。五百生が間手の無ひ物に生れるの。なんの

第一巻八二頁

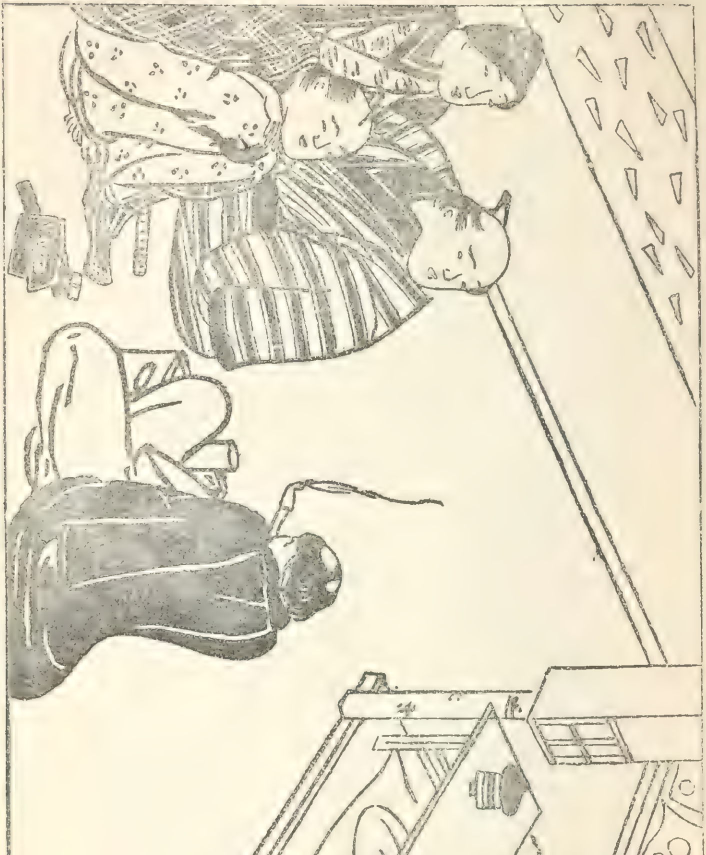
第一卷 一一二頁

かのと。とほうも無ひ女嫌ひ。善導大師ハ一生の内女を見れバ眼の功徳を失ふとやらいわれたげな。ソウい、ふきらひな女を相手の色事のきつすい女郎買の印可を免すは。チト間違ひで有りそふな物又女郎買をいろ事のきつすいと申夫を如何と尋た所がソレ此もふけにくひ金銀あたじけなひ人の心で。女房子に着せる正月物を染返し物で濟させても。松の内の仕舞をうけ込ミ。又女郎の方でも暮の諸拂借金方へ砂を蒔くも、呼ぶ客の外聞を繕ひ。手前物入で。もん日を仕廻ふは何ンと是ぞきつい色事ハ有るまひ。大體世間の地色とやらを見るに。女を引くか男を引くか取圖で無ひはなひ物でござる然れば色事は女郎買に定まつて有る。時に通ふ神の御神德といつぱ近ごろまでも女郎の文に通ふ神と書かねばならぬ事にて有ッたげながいつの頃からか神恩を忘れ今ハ書かぬと年寄のはなし京大阪でハ女郎の文ハ勿論色子若衆の文にまでもかよふ神と封じめにかく事ぢやが。それはまゝよ通ふといふ字は則通。是神にては通神人にては通人。通力自在に女郎を廻すは此御神の德でなければ。遣ふ金も死金。色男も投出し相撲是迄は理屈問答かうしやくの前書。サア本ン文にかゝります。神祕を殘さず講じまする東西ゝゝ

辛丑春

通ふ神の神主

通野意氣述



凡例

一己惚高慢乃辨
一不男金色の辨
一色男きまりの辨
一吝ミ惜ミ乃辨
一理屈なしむちやの辨

以上

高慢己惚の辨

夫我國二所の宗廟。八幡太神の御母君。山城の國。伏見の里に。鎮坐まします。御香の宮の御神ン體。神功皇后の神物にも。三韓王ハ日本の犬也と宣ひ。又唐國の學者の親玉。カノ聖人とやらが己惚。天徳を我になせり。又天竺の佛の元〆。お釋迦和尚の天上天下唯我獨尊是三國一般の高慢うぬぼれ。しほ屋の權輿なるべし。爰に寶永年中の頃かとよ。新吉原の名取の契情玉菊といふ女郎てうちんの紋所に。てれんいつわりなしと大文字に書きあらはせしハ。今の目から見た時ハ。あまりさへた事にも。聞へぬけれど。其時分の洒落とは見へたり。實正直の神心。ひどひ事をちやうちんに書きおつたと。其氣性に惚さする。是もこんたん。スリヤ外の女郎ハみんなてれんいつわり女郎と。いわぬばかりの己惚高慢。人を屎とも思ハぬと云ふ。陽氣剛强の神心。己ハ通だ。おれがやうないき人は。此内の客にも二三人とは有るまいと。十人が十人その氣持で遊で見ねバ。おもしろくもおかしくも無い。わしなども。そのいにしへ。まだ神職に成らぬむかし。前髪を落した當坐。はつ吉原の一二度といふ物ハ。喰ひならひの。ふぐ汁を見るやうに。あふ／＼とおもふ内に。三度か四度、お馴なさると。亭さん兒さんが聞わかり。向の人。おいらがの。籬てすりの交りも見分。引ケの噓四ツ。鐘の淺艸。大

門の四ツで。歸らにやアならぬと。誰一人に習ひもせねど。すこぶる功者身をいふうち。はや半年もお詰なさると。うへ見ぬ鷲の己惚高慢。買ふ斗が能でも無ひと。色事がして見度。淸幸が買ふ。丁子屋の女郎に。どうぞ切かけて見たいが。此中ちよつと附合に。いつて。新ぞうに聞たが。大のあたつきもんだといつたが。どうぞ手前此戀の橋を渡してくれは鳥と。茶屋のむすこに。ひらり帽子。まだ前髮の跡がみつ〳〵向ふもあんまり。おとなげ無けれど。その氣性につい直か成り。新造買と身をやつして。年ン明キ前の女郎買を大地埋るも己ほれの妙所。茶やの出合も名の無人と仕ちやア。道具にならぬの何ンのかのと。おごりに奢が增長して。是からが晝三かぶと。舞臺數もふまぬうちに大鳥風の仕うちと覺へ。五年ぞう六年ぞうの女郎買を。眼の下に見おろし。十八神道宗源壇。炎祭まで。淸して仕まふ　かふいふやつに限り。身をもうたず能かげんに帆を下しかう買ふものと脂さがり。髭なで己ほれ高慢の神勇尊むべし〳〵

不男金色の辨

世の中に。たへてさくらのなかりせば。春の心は長閑からまし。洛陽の下加茂に鎭坐有る岩木のやしろの御正體。色男の水上。在原の業平樣。當世の色事。助六大明神斗でも行かず。世の中にたへて

黄金のなかりせばと。讀かへねバならぬハ。兎角何にしても。金山彦の尊の。神光がうすく。曾我兩社の氏子となりてハ。とら少將りむかしハしらず。金がかたきといふせりふハ。きまり切ッた名言。不男の持丸大盡十度通へバ十度ながら。上下ぶつ重て。着かへて來る。神たちもそれ相應に。本ン社に連て末社まで光りつよく。この庭かぐらにはづれてハ。中ケ間内の見へも悪ひといふ程に。光られてハ。元祖高尾が。亡魂でも。チットハおしをこらへ。おかしからぬ事でも。ゑミための祓に。兩物前の大ばらひ。桃にあやめに軒端ふく。月見小袖。八朔日。神衣の手配り迄。一人客とちてはやされ。金で女郎を廻して見給へ。金ハ活ふと死なふと儘是眞ンの女郎買。あらがねのつちで庭はくもろ人の渇仰。じやもッ面でも片眼でも。引く手あまたのミしめ繩。すゞしめ給へ八乙女の。袖から袖をつらね山。よしのゝ山に。鎮りまします金精明神の荒御靈。と。あがめらるゝ果報大盡。しかし眞ンの色たる事ハ。貧乏にとゞまれども。眞の色がしたい迚。急に貧乏にも成られず。もち人にハ猶なられず。所詮金もちの色男ハ。眞ンの色にあらず。金色にあらず。神半分佛半ぶん。兩部習合の色事にして。どおぐおやの半か色と。神通のかでは立て置ます。不男の金色ハ。神代からの神心を。いわれぬ野士の學問根生。萬事手まへから。氣を濟して出來かゝる。金色もうぬがなからはつして仕まふ是邪氣心中にまんと有る故。亡れが小智にからまされて。一ッ生記の意体かぶで。おもしろからぬ女郎買

も。正直の神教に違ひ。直きを捨て。利口による故只々不男のかなしさハ。金銀を。もふけ溜て。金色の樂み成就あれと恐惶謹白

色男きまりの辨

きまりとは極の中畧。ぎゝの二神青海原に天のうき橋のそのむかし。あなうれしうましおとめにあひぬ。是ぞきまりのはじめなるべし・式部が筆の五十四帖・日本色男の惣鎭守・光る君の御きりやうよし・詩哥管弦の御風りうに・色男と來給ひし故・千載の末是をしたふ・色男には何が成ると・二三人の連の中にも一ト際勝れし當世仕立・人並に・金も遣ひ・引美抔の下剤も用ひず・諸事上品に出ずいらずハ・是通ふ神の守りめ強く・色男の一ツ徳・杜選酒落の當氣もなく・心おくれてびゝりもせ（ママ）ず・生レた儘の神心・する程の仕うち節に當り・一寸トいふ事時に叶ふ・縛ハず・銹らず・唯一至妙の神慮に至れバ・異樣な事一ツもなし此所をあおに聞込ミ・正直〳〵と繕綺と・身ふせうに男も作らず・髭ほう〳〵と唐人の如く・髮ハそゝけて鍛冶屋のごとく身形りも常の平氣になして・こへばらぬとやら何ニとやらと・めつたに人とすれ違ッて・又正直の心に違ふハ・唐風の虛無自然・老荘の見へはいりまするぞ・愛の所を能く味ひ・能く思惟して見給へバ・年ハ半白の坂を越すとも女郎買といふ

場へ來かゝつてハ・踵のたこを浮石に削り・不正直なる黑あぶらに五十ほんだの世間並・さして見ぐるしひ事もござらぬ行かふと行まひと色仕立にこぢ付るが・女郎買の正しき・是神道の極意でござる・色男は元來・光るうへにも光りをそへ正直の頭ハ時を違へず・髪結の手の替らぬやう・衣類着束ハ猶もつて・丸角住吉に名の葉をくゆらせ・通ぶらず初心ぶらず・云ひたい事を云仕たひ事をして氣一ッぱいに遊び給へバ・おのづからなる神慮に・誠ハ感じ合ふ物ゆへ・きまりたふなふてもきまる道理・儒佛教の彩色を止めて・内外の神の白木作りけづり立ッた宮ばしらふとしく建て女郎買の・其礎をかため給へと恐れみ〱を申

吝ミ惜ミの辨

延喜式内二十二社をはじめ・日本國中三千餘座に・吝神の名をへず・むかし〱悪蟲のごとく吝蟲と云へる蟲有ッて・惜神の使也といへり・貧乏神にハ遠く・福神にハ近し・身を治め世帯を守るといへり・伊勢の御神供に杵と申せバ・至ッて尊き吝神にござれど・通ふ神の神慮にハ・いさゝか違ひがござるハ・吝神惜神を忌給ふにはあらねど・此二タ神ハ常ていの事にて・我平生の守り神にて・宿に居て家業を勤・身上搾り道においてハ・殘る方なき神ン德なれ共。通ふ神の御もちまへ。女郎買

の一道にハ。甚これを嬉ハせ給ふ。去れば古語にもいへるごとく。女郎買のぬか味噌汁。萬代不易の神ン言也。はじめ此道に入らんとする時。物ごとはじめこそ大事なれ。通ふ神の擁護の先達に随ひ。誠の神教に随ハずして。小鰭なすあしき神に。旦那／＼と嘲し上られ。是眞ンの神に非らず。似た山の神たちにて。小祠一ッ社の舍さへならず。あくまでに心さもしく。己れがつたなき神心に只追從と錢のほしさに。遷宮のはじめより。小ぎいかうにひすらこぎ。吝神惜神の教へを傳受し。コケと出ものを口癖に唱へ。もん日日柄もぬけつくゞつゝ。凡に半年と買居ル事無く。始の上調子にさすがの黒人も。はり込で見てハあいそが盡き。トいふてまんざら女郎の方から。長棹の仕内も出來ず。色仕立の立轉し内證から。せくとこしらへ。おもしろおかしく。突出されても。色客の悲しさ。あそこも揚げぬ愛も鬼門と。上郎衒成ホ色氣の無イ突出され客と成はてたとハ夢にも知らず。人さへ見るとせかれじまん。これ吝神惜神の神力增長の所明らか也。此一道には。此場を捨て。通ふ神の教へにしたがひ。正直を以て工夫有べし。客ハ買ふもの。女郎ハ買ハるゝものと正直の土臺をすへ。どのやうなけつかうな御所帶でも。女郎の身上ハ客の懷斗りといふ。正直の神心の誠が向ふへ通りさへすれバ。呼バるゝ事呉ふくやの判取のごとく。さへ渡る事月見のごとし。爰に至ッて極眞の色客。まじりなしせかれ客と。通ふ神の神慮にかなひ。今助六の明神とも。名を發し申べき也。只通ふ神の神恩。かへ

すくも。幣づきたまへと敬て白。

理屈なしむちや乃辨

偖この一段ハ・今までの講釋とハ大違で通ふ神の極々の神秘。チト切落へハ落かねませうが。何茂とくと聞て下されトいふてむつかしい。チンプンカンではござらぬ。余り淺ひ事じやによつて工夫の入る所じやと申事。マア序分から是までの長かうしやくハ。ミんな理屈と云もので。私がやうな何にもしらぬ。田舍神ン主が。娼婦買の間に合かうしやく。大通の歷〻を聽入にして。通ふ神のこんりうかうしやく。小づら憎く思されやうが。此一段ばかりハ理屈をはなれ・むちやになるといふ所が。通ふ神の神髓。極意の神祕じや。神書に所謂。大事によつて神事をはからず。唐の學者が易にいわく。思ふ事なくなす事なく。佛者の無着則。無一物のとほり。理をはなれて。理を明らむ。至ッて高い論でござる。といふハ何の事もなく。おもしろひから遊びに行。コウ遊べバおもしろい。そうしてハ氣にいらぬとこ。義理も仁義も出た通りにとゞけ。是が通とも不通共。云ひたひ酒落ハいひのめし。けいしやめこうと。下卑やうと。淨瑠理でも念佛でも。當氣が有るなら。夫も御勝手馬鹿もりこうも此里になく何この事もなくて。通と名を得る。是りくつなし。むちやの妙用。分らぬ口の長きかうしやく

〔亭主〕申〳〵講師さまへモウ四ツをうちました。〔神主〕是はしたり今晩ハ。いこうかうしやくにこりました。アヽみなさまさぞ御たいくつ。次ハ明晩と（威義つくろひ。すゞ打ふりてヱヘン〳〵）謹上再拜。〳〵。當席講談聽衆の面々陰陽和合の通ふ神の。神慮を仰ぎて新造禿茶屋。船宿・藝者遣り人。若ひ者案摩坊主髪結まで愛敬有レとねぎごとを申。三種の御祓吐普加身依身多女〔聽衆同音〕寒言神尊利根陀見。はらひ給へ清めてたまふ拍手チヨン〳〵。

傾情智惠鑑

全

傾情智恵鑑序

鹽谷公の赤鰯由良之介さんの名言唾から出た誠でなければ末がとげぬとは粹成哉〳〵蘇秦張儀は唾つきの親玉にして誠すくなし今やあふ坂山の麓清少納言さへかりの空ねのうさアねへと讀じ邊りに住雲藥山人傾情智恵鏡を著予に命じて唾の無おもむきを證人に立よと言に任せ入置申一札の事とも書れずお家の唾はつき次第唾の皮の羽織を着て鐵炮玉のじやき〳〵汁を喰ながら万八鱗様も上覽あれ本にしたからほんの事にて御座候爲後日認置序文いつわりなき段仍

ふだんの如し

卯そはねつから　　台閣西之隱士

つかぬ初春　　志水恵ん十題

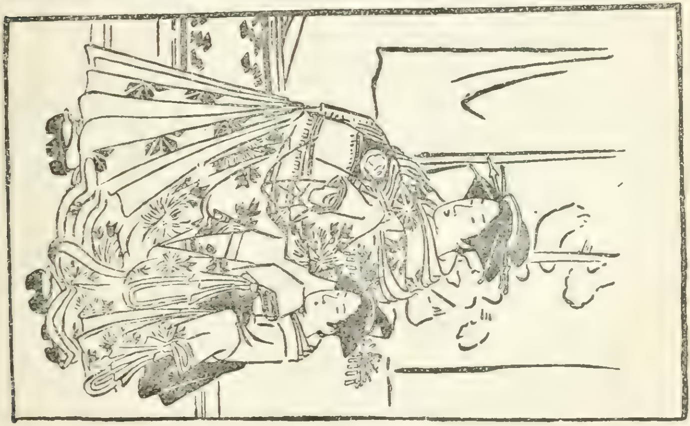
唫はつき次第水は呑次第にて
末は河竹となる智恵鑑の三番叟

抑これはめつほう彌八といへるものにて候。我は万八が又従弟にて此へんの通國に住といへども。所の風土に染ず此度思ひたちすむところ求んと。所々方々草臥足を引きずるにて候。まづ我國風俗は。人を茶見せの前垂姿。金は梨子地の硯蓋の奢を極め。寒の師走も天とくじといふ旦那寺にぬくとめられ。九夏三伏の夜は紙帳をもつてぶん〳〵をいとひ。食ハ糠味噌汁を常とし。劍は細きをよしとす。一名を手連國とも呼ぶとかや。彌八も爰にしばらく逍行して。短册紙を七月より七月まで賣リ返し。御酒の口を師走から師走までうれども。はかどらず。よつて唫を賣て渡世せしが。鐵炮の問屋の伴頭が。髭をなでながら大きな目に。大筒の十露盤の玉がそれて。此國に居候となる事かなわず。大通國の方へぱつち尻はしよりにて逃行見るに。そのよふがいといつぱ。後にハ似田山といふ大山巍〳〵とそびえ。前には河竹の流れをてゝぎ。左リハ意喜島右は粋が淵。誠にすいたらしい手くだの地也。似多山の麓にしばらく足を止めんとせしが。こゝはきいたふうの風烈しく。咄しもあわずおもしろくなしと。隣鄕なるめくり村に出て見るに。素漢堂とも踏こくられて居るを。蜻わらつてゆけば。裏店

の嗅さん達が寄り合て。しもざんとやらのち産とやらをとりあげ。手ハ赤藏になりけれども。血心も仲藏と見へて。家内はばたり／＼しづかなるゆへ。此處を立んとするに。村雨俄にふりしきる。こゝはむかし其角がかゝる田を見めぐりの神ならばと詠じし處かとあきれ。合羽十をかりて出けるが。鉦太皷二の音かまびしく。ひよんなめにあふびきどう二。こんな事を聞ひたらば逃け屓にして。點錢のついへを構わず。にげるものをと漸役をのがれて。飛ん田變田意喜島といふ田の畦を通り。覽州逢江山の麓にたどれば。ひわ茶いろの雲靉靆。吹來る風のつなまぐさきにハ。鼻をひこつかせ。誠や佛棚の大和上總が江戸前のかほり。深川のいてうやが大串の團扇の風もかくやらんと。向ふを見れば。あらおそろしや。兩眼は人魂のごとく赤く光り。覇王樹のごとくの角をいからし。出刃庖丁にひとしき牙をならしたる有樣は。おそろしいやら怖ひやら。中／＼詞に述がたし。かの鬼夜な／＼めぐり村へ出て。びつくりさせし化もの也。その外青物澤山に仕込み。六百六十の數を合せしハ。八百屋見せなるか。源の大根ミるなきんかんしいたけ。たけみつハ浮丸の一腰と名付て。大江山鬼神たいぢの勅定のとき。源の大根へ給ハりしと聞。兎に角此所はすばらしく。住事もやすからずと。それより寺箱へかけこみ。後生を願ひ。六道の辻でまごつかぬよふじんに。質面樣へ顔かけて。一生工面をせまいぞとたしなんで見ても誠なや。此啌つきにハ何がなる。觀善てう悪ハ百込ミ貳百込ミの恨の綱に引あげら

れ。利足稲荷の説法を聞に。誠にその利高からず。百に四文の勧化柄杓をまハし。又此和尚ミけ猫坊の立花の名人にて。受ケ流しの事までつぶさに口傳を請。この地にこしをおちつけんとすれども。三月八月は水の流のよふすを聞。早〱立さり。それより青梅じまさんとめ島へ渡る。この島〱いうら〱襟ぎらひなく歩行見るに。ばらをの明神。木地は八わた黒介稲荷とごたまぜのよせ緒をの社あり。神事にハ所の若ひ者。ぬり下駄を履ひて三番叟を踏。その外亂地木邊知木の神。木枝を栄へ繁りしは。神代の巻にも。知木は扛秤なり。神社の棟を覆ふ花形琵琶板の上にわだかまる木を。破風と言ひ。経巻ハ伽藍にあり。社にうちちがへたるを。鰹木の破風とも。かたびつこのちん小狗とも申とかや。此浦をよぎりてあてどもなくやみが雲と筏に乗て。めつぽう海に浮ミ。唼八百万程行バ。おいらん田といふ國あり。此國富貴の地ゆへ。福輪湯といふ薬出る。ひとゝせうそ八百八町をおいらんだのふくりん湯こりゝ〱と甘ひとうり歩行しハ。此薬なるよし。おいらん田より。下馬に鞭うち。下卑段といふ谷あり。昔〱爺と婆ミがせんたくする頃。素見といふ名劔を格子の如きのあミの目よりひきあげ。そめ木といふ木にて鞘を作りしが。接葉はときの銀の椋鳥おほくあつまりて。此劔いづくともなく飛行。そのゝちむしかえしに。さいけんといふ劔。苦海より引上る。此劔はそのかミ山形の三郎が所持の由にて。令の銘あり。今は盆暮二季に五十間道の喜多川の水にて。きよめあらたむると

や。それより所〻方〻をへめぐり。尻をどつさりと落つけた處が。南瞻部州。むかし〱の神さんも松かね屋のあづまや戀しとの給ひしころ。むさし野に住居を定めんとすれど。日本橋の近邊は店賃も高直にて　高直の頭に本田の髪やどるといへども。斯店賃が高天が原にてハ。中〱二日三日四日市のあたりにハすまれまじと。八ツの御耳を振り立て。一足にとび澤町の裏店住居。鍋釜二ツ竈河竹の流は楠町の伯母さんから貰ひ。摺鉢は瀬戸物町の店請の世話。せつかいハ鶯なめしのお梅どのゝ宿下りがてらの家見の一しな。客を四角に見る裏店でも。己が高慢の心一遍にて。買て北尾や春章が。在がごとく心を動す錦畫を。二枚屛風のびんほうかくしに張附て。毎日〱詠じ。とんと吾妻の女の風俗に惚れて居る折ふし。隣裏にお鉄といふぬかるゝ藝者。元よりきりやうは新富に出の手のおなかゞあいきやうをもたせ。筋違の菊次が目もとに吉わらのおちゑが口つき。土橋のおとよがちよ〱らをひとつにいとこ煮にした風俗ゆへ。おてつぼう〱と人のあいきやう淺からざりしが。同氣あいもとむるとやらの本文のごとく。此おてつもほん〱とうそをつく事鐵炮の玉のごとし。世に嘘をつく事をてつほうといふ事は。此お鉄ぼうよりはじまりける。めつぼう彌八ハ。もとより嘘の名人なればつおてつがうそにくらいこみ。破れ鍋にもとお蓋と親ぐるみにおてつをもらひ。夫婦中むつまじく榮へしが。夜食のかたまり御腹ほてれんとなり。質の流に二月增當ら十月に玉子のやうなる女子を儲け。



その名をお雲とつけて。兩親の悦び大かたならず。末〻ハ唼の株を此子にうそをよくつく聟を取てやらんとたのしミ。蝶よ花よといつくしミ。てうち／＼とゝのめといふうち。光陰は禿のとうに立て。强飯くさくなるにひとしく。おくもハいつしかひさしひやつなれど。いざよふ月の細眉に。卯の花垣の白き齒に。金なし毛織のむすびさげ。大振そでの娘ざかりとなりたるが。栴檀ハ二葉よりかんばしく。獅子の子は谷よりとんぼうがへりをさせても中がへりをするごとく。唼をつきはしらかす事。鎗の穂先よりもするどさハ。親のゆづりとしられたり。そのうへ俠な生れつきにて。勤奉公を望。終にハ女街と云木阿彌の手に。極めの折紙を貰ひ。鐵炮玉やの抱と身をしづめ。名は雲といふ字をかたどり。やみくもと名附しが。はりつよく仕て色をふくみ。なさけ深く色あでやかにして。松ばやのさゞれ雪ひしに三ッ柏の物ごし。品／＼川の松坂の左三の桐が髪の艶。仲町の梅本のお竹が雪のはだへ。新宿で上總の和しうが人殺しといふ流し目を。やゝくもひとりで脊負ふたよふな姿。閨のともし火かゝげつゝと讀し花あふぎか。その衣／＼の分れ霜と。ことのはのやさしくきこえし若紫が風情もおのづから備りて。丁山宮古路にもまさるべき遊女なりしが。おしひかな二親の血筋にて。諸事ちよ／＼らにて客をたばかりける。傾城にまことなしとハ。此やみくもがとよりいひならわしけん。やみくもつら／＼おもひけるは。われ客をたぶらかすその智謀。ちんぷん漢の孔明さん。我朝の多門兵衛さん

にもおとるまじ。わつちが術を此儘置もきついむだ。ほんに鐵漿堀へ姿見の鏡を埋むにひとしと。鹽屋の心増長して。おゝくの遊君へ教へのため。一書を殘さんとて。物まへの文を書氣になり。片ひざ立て。うそのや硯箱持て來やと　筆の立どもわきまえず。どふぞ／＼の重言だらけに書集しその一册は。アノ傾城智惠鑑。是から奥をよんでお聞かせなんしと。ひとりねの客にあてがふ。客名代の新造を相手にし。ほう杖をつき。よだれをたらして讀む。その文に曰

○二階をせかれたる客を。遣り手若者に隱して上る法

かしわめん鳥を多く買て。遣り人若ひものに毎晩振舞ふべし。みんな雀目になり。めく／＼らにと言身になる。ところでかの男を扇ぱち／＼にて二階へあぐべし。しかし禿にハ口どめの花笄等多く用ゆ。新造のめくばせは。色事をゆるすを以てせんいちとすべし

○金持の色客をこしらへる法

金持の田舎客が名代の新造をいびり。むせうに手をたゝき。隣りの座敷でさへすかねへウといふ客の首をぬひて。色男の首とすげかへべし。その首をぬく時に。兕の哥

首の間屋いやこの側に文もせで
ちよ／＼ら盡しのやけのみの月

此哥を三べん吟じてぬけバ。ほつてもぬけぬといふ事なし。しかし金持の客の方にも祕哥あり

ゆるぐともよもやぬけじの我あたま
かしたる金のあらんかぎりは

此哥をしつて居る客の首ハぬけぬ也

○無心を言ずに金を貰ふ法

仙金法に曰。金の有ル鼻紙袋へ。すい膏薬をはり。その上へふ動の穴しばりの呪文。鈴如斯すゞといふ字を書ひて。こふやくの上へ置くべし。金おのづから吸出して。こなたの用だんすの引き出しへうつる。この呪は、鈴といふ字ハ金へんにせしあるといふ字だから。そふでありそふなものと。阿部晴明が嫁の葛の葉への言付なりと云

○毎晩お茶をひかぬ法

こふしさきへ大勢客のあつまりし時に。いもりのくろやきを。吹矢のさきにつけて。よい客をねらひ。きん玉のあたりを吹べし。かつちりとあたると。客がから／＼と臺所へあがる也

○まわし客のあるをしらせぬ法

木たいの客に、硯ぶたのしゝ茸あるひハ仲の町のまつ屋のごてさんにもらつたかつほの膾からとい

ふよふな。塩のむしようにからひやつをなめさせると。客咽がかわひてくるゆへ。水をこのむなり。その時になんばいも水をのませると。客のはらあいがわるくなつて。かゝつて居て雪隠へゆく。その留守によこに行べし

○自分のこゝろの内を客に見すかされぬ法

馬道は新宿にあり。牛がぶちはしばにあり。ねづみ坂はでん通院の大黒のわきといふよふに。さきばしる客ハ。女郎のひき出しの内にハ。こま下駄と文がら。なしぢのりう。手箱の中にハ蜘のすがはつているとおもふにハ。わる推量にしるもののゆへ。女郎の心の内のさんだんも。たいがひさとるものなり。これを見すかされまいとおもふにハ。扁人すごろくの中の。かくれ蓑かくれ笠をせんじて呑べし。心の内で。どのよふな事をもくさんして居ても。客人に見すかされぬ事妙也

○名代をとらせて。客に腹をたゝせぬ法

今は客がこふしやになりて。若ひ者が来て。たれ様一寸御目にかゝりやしよふといつて。女郎がたつて行くと。間もなく若者が。もミ手をしてくると。客のはうからせんをこして。こん夜はやる事はならねいぞと。まきじたの大あぐらといふふうの客は。若ひものゝ云とりがわるひと。たばこほんでもふみこわされて。そんもふゆへ。此客にハはらをたゝせぬ呪あり。女郎じぶんの髪の毛を。

十本ばかりぬいて。これを客のはな毛に結付ると。客人のはな毛がとんだながくなるゆへ。どふあつかつても。はらハたゝぬなり

○遠方に居る客の方へ。はやく文をとゞける法

ものまへにハ。客人がよくいなかへ行ものなり。遠國へへだたりてハ。茶屋ハもちろん。ふミつかひもいきてがなし。島屋十七やへ廿四文そへてやつてもきうにハとゞかぬものゆへ。きうに文をとゞけるにハ。てつぽうの玉へ文をゆひつけて。口ぐすりをつよくして。うつと。たちまちとゞくなり。しかしてつぽうでハ。客がうそらしくおもふゆへ。矢文の方もしかるべし

○客へしんぢうに。似せ指を實と見せる法

夜具でもしてもらふか。または部屋でももたせてくれた客が。むつかしく口説をいひ。されよふなどゝいふは。ゆびか。きしやうか。髪か。此三ッの内の望ミなり。今夜指をきらふとおもはゞ。晝のうち。こつかばらで。こぢきが賣ル指をかつて。べにがらと酒をとふぶんにして。よく煮て。まくらを二ッに挽割て。その中へ入おくなり。夜に入て。客指を望時に。かの枕のうへに指をのせてうへからかミそりで。とんとたゝくひやうしに。指を引てたゝくべし。枕ハ二ッになる。中よりさいしよ入置たる指引出して。客へあたふるなり。指をきる時ハ。客も眼をねむつてゐるものゆへ。

ずいぶんてづまができるなり。きりたるあとにて。指の五本ある事を。客人あやしまバ。はづかしながら今までハ。六ッゆびなりとこたふべし

○客へ血をつけずに。きしやうを赤く見せる法

かねて起證文。しら紙へしたゝめ置き。客にさけをしいてのませ。はやくねかし。よくねいりたる時分に。あかい紙にて眼をはりふさぎて。客人をおこすべし。客眼をあいて。かのきしやうを見るに。眞赤に見へるゆへ。まことの血とこゝろへ。よろこびてうけとる也

○客をだましてよぶほう

客の方へ若ものを使にやる時に。釣ざほをもたせ。釣竿のはりの先へ。小判を壹枚ゆひ付て。客の前へなげると。客金をとらんとして立出るところを釣ざほをかついてだん／＼あとへ引。客ハもふ一足／＼とおもつて。金をおつてくる。ついにハ大門の内へ引こまれるなり

○客をはやくねかす法

ゆづかみつかんのつゆを。客の眼へしぼりこむと。客ハ眼をしば／＼する。その時に枕もとにて。下手なかとふぶしをかたらせべし。是ハ夜中うるさくかゝる客を。ねかす法也

○客に居續をさせる法

居つゞけのきらひな客に。居續をさせるにハ、あけがたに目かくしをはじめ。客を鬼にして。手ぬぐいで眼をかくし。ろうかへつきだしておいて。ねるなり。きやくはいつまでも夜なかの氣になつて。らうか中をさがしあるくなり。朝がゑりのきやく。とらまへられぬよふにようじんすべし。かくて日のくれたじぶん。手ぬぐいをとるべし。客は長イ夜とこゝろへて。あそぶなり

○不きりやうな客を色男にする法

どんなふきりやうな客でも。びいどろをさかさまにつるし。その中へ客をさかさまにいれて見るとよく見へるなり

○禿をねむらせぬ法

かむろのひざのうへに。ふせがねをおき。あごへしゆもくをゆい付ておくなり。ねむけつきて。ほく／＼ねむるたびに。かねがおやん／＼となるゆへ。なむさんぼうなむあみだぶつといふたびに。おやん／＼のかねに目をさますなり

○待ぶせをせずして客をとらまへる法

仲の町のあふみやか。桐屋がまへあたりへ。その客の名を書たるふミへ。ひもを付て捨て置。そのひものもとをひかえて居べし。客かえりに是を見付。我名の書キたる文ゆへ。ひろいとり。懐中し

て行ところを。引よせるなり。客ハ折介だこといふ身にて。二階（かい）へ引上られる。たゞし風のつよきときは。ふとき糸を用ゆべし

○遣り人のきげんをなをす法

小人島より。小ぶりの男をよりよせ。かい鼠のよふにふだん懐中へ入。めしつぶなどをくわせて。ひざふし。もし遣り人ふきげんのときハ。かの豆男に言付けて。遣人の懐中へ入。わきの下のあたりを。こそぐらせると。藏前の閻魔（えんま）が。もつこふ丸を呑だといふよふな面（つら）の遣り人も。にこ〳〵と笑ふ事妙なり

○こうし先へ來た客を。不殘とらまへる法

夜見世の出るまへに。はいとりもちを。こうしの表のほうへぬりおくなり。むくどりのごとく客人こうしさきへあつまる時に。うちからたばこをつけて出すべし。うぬぼれの客ハ。我つれの前への見へにて。なじミのふうにこうしそばへよりて。べつたりともちにつくなり。いくたりも〳〵此とをりながしのもちへ。かものつくやうにつけておいて。大ぜいたまりたる時分に。ほうきではきあつめて。二かいへあげべし

○借りた方よりさいそくをうけぬ法

金を十両かしてくれたならバ。毎月一両づゝふやして。貴様の死ぬときかえそふ。貴様ハ死ぬまでにハ。百年もその餘も。間があろふ。その内毎月壹両づゝふやすと。百年目にハ千四百六十両程になる。なんとむまいものであろふといふと。金かしハよくのふかきものゆへ。一生さいそくをせずに。かしておくものなり

○酒好の客に。茶を酒といつわつて呑せる法

引ケすぎになつて。もふちつと／＼とゝ。酒をうるさくのみたがる客をバ。あをのけにして。鼻の穴へすこしづゝ。酒をつぎこみ。さけのミ猪口に。茶をくんでのますべし。鼻にさけのにほひがするゆへ。茶をさけとこゝろへて。何ばいも呑なり

○駕に乗らずにはやく行法

仙里代行の法に曰。柳橋のあたりにて。船にでも乗ふかと。懐手をしてぶら／＼来れば。てうど三枚に駕をいひ付て。乗る客を見付て。ぐつと尻をはしより。手でうちんをともして。旦那あけますをあいづに。あき手のほうぐミと一所に駈べし。尤いき杖をたてる時。こなたのらうそくのしんを切り。ざん時の間に五十間までかけつけ。出張りの水茶屋にて。立ながら水をのみて。ずいぶん下直にして。女郎屋の二階では。アヽ駕にゆられてせつないと。たわむれをいふべし。わすれても駈て

くたびれたなどゝ。いふべからず。穴賢(あなかしこ)

○としが寄ッても。色男で居る法

識の万金丹を懐中すべし。千金法の妙薬なり。其薬法ハ。五三桐九分ッ、飯櫃(イビツ)六十目　南鐐一両目。是を無間(むけん)の鐘三百両加味して。こゝへ三両。かしこへ五両と。まきちらせば。金錦(きんく)の長ばをりのむすこ殿より可愛(かあい)がらるゝこと。妙なり。しかし此くすりを用るさし合に。焼味噌を茶漬(づけ)の菜(さい)に忌む

○我姿を。客に夢に見せる法

是は　ざうしを買て。我貌によく似た女の上へ。べに筆などにて。いやミに發句など書ておくべし。客にそのざうしを遣る時。わたしが戀しいとき。これを見なんしと。脊中(せなか)を一ッたゝいて。羽織をきせながらやると。内へかへり此本をひろげて。お役のやうに見て居る。仕舞の切に夕べ戀しい可愛と。今まで(たか)本を見ておもふたのへ。夢に見る事うたがひなし。是遠山といふおいらんが。反魂丹の影干反魂香の傳授といふ

○通子相傳秘法。女郎を買て能もてる法

四方喜久にひまへんじやくが日。先ヅ向ふに客のない日をくらせ。初會の日を定め。おいらん四十五匁　一回鳳凰(ほうわう)の木をおんぶしたる振袖九十目。牽頭(たいこ)の唯の皮(かは)五十目。堀の舟宿十五匁。仲の丁三丁

日惣花六百目。是を茶碗酒三杯入て。床花三百目程くわへ。三會目に二丁町東棧敷根引とすべし。
これ在原業平直傳の秘法也

跋

雲樂仙人は雲を能つかみ闇を行の先生なり因而闇雲に傾情手管智恵鑑を著
我また馬鹿の馬に鞭を打て其尻馬にまたがり鼻の下に日本橋の眞中よりき
いた風の似た山の手まで智恵鑑を熟得有らばどんな惣領の甚六も智恵の輪
のぬける事ちり神様かけて喹は內外清淨ぞつこん喹のはへぬき爾云

忍岡うた麿題

卯の初春

滸都洒美撰

是は家／＼を郡にわけて
遊君を名産になぞらへ
上にてうちんの紋所相印を
著すおもしろき本なり

通扇興　完

扇の手遊びにて高てんを
わけ洒ゑんのあそびを催す
おもしろき本なり

新吉原大門口
耕書堂　蔦屋重三郎板

北廓雞卵方

全

北廓雞卵方

北廓雞卵方序

廓に晦日八月も出る。また竹むらに名高き最中の月ハありながら。土手の大福餅あつたか。なかつた下拙が智恵。さぐりあつめし小錢の穴。四角四面な鷄卵方。義理となさけのはりをもて。廓のふわ／＼むき玉子。その美しき小册子。予求て見れバ妙なるかな。玉子の勢して其夜の中に筆を一ぽんにぎりつめ序がましく書のもヲ、はづかしとしかいふ

寅の春

韓信堂
色人

第一席

ぬれてあふ夜の新枕
さむさに歸る朝の雪
つもり〳〵て眞切の
紲ハ切てもきれぬ

誠與誠

第二席

はれてあふ夜の新枕
うれしく歸る朝日の
出通ひ〳〵て女夫ぎ
ハいねてもわすれぬ

緣與緣

第三席

ういてあふ夜の新枕
ふられて歸る朝の雨
たがひ〳〵の心根ハ
繼でもつがれぬ

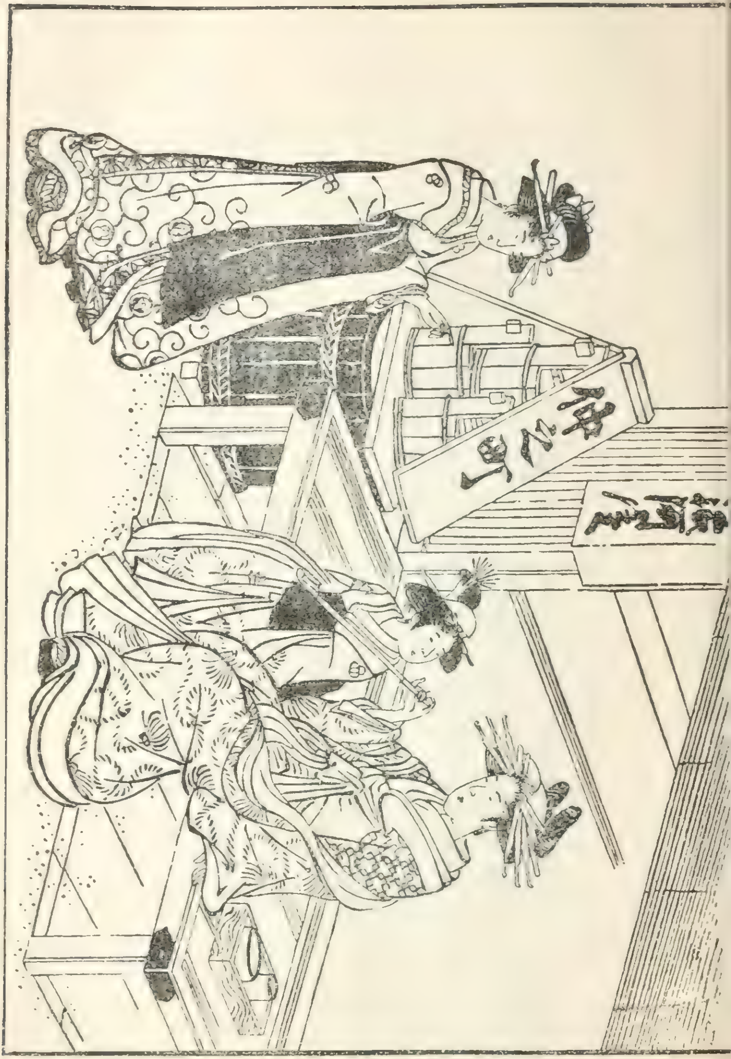
惡與惡

北廓雞卵方

百一誌著

第一席

春來ぬとまづ梅にきて鶯のものいひ染つ朝より葉手と立派と意氣張と三ッかさねし三盃の松かざりする秋津洲の廓下のをとハ初午のたいこまつしやもつきそひて花の盛や毛せんに一寸ころりとねはん繪の枕に香ふ蓬生や耳かまびすき祇園會のはやす童の行去て三五の月や島臺に薄尾花も俄なる哥の文句を菊月やもん日もの日もめでたしと祝ふ惠比壽の神祭りかわいらしいと解紐ハすへ迄女子の身の祝ひ餅搗きねの音ならで野山ハとんと打なひてゝ仲の町に雪と見まがふ風俗ハ（龜田やのけいせい）〽松風（ちりめん茶返し小紋に中がた角つなぎの 枚メのがくむく同角つなぎのあいちの下着しごきにてねまき姿としの頃十七八すきとふるかとおもふきりやうなにかふかきものおもひがほにてたてひざにてむねのけむりをきせるよりふいている）アヽいつもしんきなどふしたらよかろふぞ（トいふうち妹女郎）梅の香（廊下より來りしやうじをあけ）おまひさん何をひとりごとをいつてふさひでおいでなんすへ酒でもおあんなんしな 松 さけぢいやざんすヨ 根 そしてふさいでばかりおいでなんしちやアわるふおつすらつとおあんなんし



な【松】ありがたふおすがほんにいやでざんす一寸トしたことが氣にかゝりんして心が落つきいせんヨ【梅】何ざんすへそんなに苦勞なんす事ァおきかせなんしてわつちにもともにくろうさせておくんなんしな【松】なにちよつとしたことさ【梅】それでもおまひさんのやうすが【松】外のことでもざんせん【梅】あふかた雨杏さんのことざんしやう【松】アイ【松】大かたそうだろふとおもいゝしたおまひさんひとりくろうなんすことァおつせんわつちにもはなしておきかせなんしまたお氣のはれることもあるものざんす【松】ほんにぬしがそふまでいつておくんなんすからちからたよりと思ひすにへ今夜ばかりわつちがあんじるでもざんせん此間中雨杏さんがきなんしてもいつもにかわつてふさひでいなんすからわつちがいふにやァなんぞくろうになんすことでもおあんなんすならはなしておきかせなんしと申しいしたらバ迚もきさまにははなしたとてもはじまらねへ事またきかせてくろうさせる事もいらねへ事だもしきゝたかァこねへだに來てはなそふといつてお歸へんなんしてこんやきなんす約束ざんすけれども今にお出なんせんからどふなんしたやらそれがいつそくろうでざんすョ【梅】そりよヲ苦になんす事アおつせんたとへ今宵きさつしやらねへとてあすにもしれることさんすなに物思ひなんすとまた御持病にさわりんすにへ（トさし合にてはなしの中ばへかむろろうかより大きなこへにて）【三芳】モシおいらんへ雨杏さんがおいでなんしたにへ【梅】それごろうじいシうハさをいへバ影がさすとやらそれだから

あんまり苦勞になんすなと申しイす事サ（松風みよしがことなきゝうれしさ半ぶんかなしさ半ぶんにてたつて二足三あしでると）雨香（年二十三せいかつかふすつかりとした息子株黑はぶたへの小袖しまちりめんの下着三ッこんちりめんのじゆばんこび茶糸おりの帶黑なゝこの紋付羽織かむろにじやうだんしながらろうかばたばた）三アレおよしなんし丈がひくゝなりんすとサ　雨せいがひくゝなると小人嶋のおいらんにするわへ（トいゝながら松風が顔をミて）なんださみしいこつたでへぶさへねへ顔つきだがまた積氣（ママ）か　松（せんどわかれしより心ならずましてけふはやくそくの夜なれバ宵より部やにひとりの物思ひにて雨香來りしならバさつそく此間のはなしなど待しなれどもまさかかほをみれバいゝだしもせず落つきがほにて）アイいゝへ積といふでもざんせんけれども二三日ふさひでなりいせん　雨また何か氣にかゝることをこしらへたの　松ヲヤぬしやアおかしな事をおいゝなんすくろうをこしらへるものが有物ざんすか　雨何がおかしひ事があるものか苦勞もふさぐも隨分おれがしやうちさ　松何ざんすへぬしが知ておいでなんすならいつておきかせなんし　雨そりや後にはなそふ來る／＼ふさぎやつてもたがへに病のたねだサア一ツたべやしやう（とこれより酒ごとあり甕者しんぞう一坐にてさわぎあり時刻もうつりければざしきもひけ直に床に廻る）松（先へ　なつけ雨香の長づゝをひねくりながら）モシ　烟草をおあんなんしそして心ねへやうだけれドこの間いゝなんした事をおきかせなんしいゝ事でもわりいことで

もはやくきゝとふすヨなぜかむねがおちつきいせん 雨（實のことはあかさぬ積りなれどもしぜんにかほにあらわれ松風にだん／＼たづねられせふことなしに外のことであいさつする） そんならいゝやせふこんなことをいふても恥かしく可笑しいやうだけれどもこねへだ中やうすをきひたりみたりせんどもおちやつたこともあつたが何か色男らしいがきておもしろく遊ばせてやるやうすだがこんなあげくにやア。へエヨウニされやうかとおもつてくろふになり下めへもそんなことでふさぐモしれねへ談そふといつたのハ此ことよもふこれではなしハなんにもなしさへと心ねへことにてあいさつし眞のくろふをはなすもつまらずひとり思ひのむねにみちくればおしきかほをミせまじと鼻の上迄よぎをひきかむりねたふりをして） 松（返事もせず雨杏のかほをつく／＼見てなみだをおとししんに男ほどうたぐりぶかひ物ハないと心で思つて口に出さずよほどして雨杏さん／＼といへどこたへぬゆへしたゝかに鼻をつまむ 雨アヽいたへ何をするのだへ 松なにをするのでもざんせんマア目を覺しなんしてわつちのいふ事をきいておくんなんし 雨きゝもしやふがもちつとまつてくんねへまたふさがせるだろふ 松（外めからみると何かおかしきやうなれども松風が眞じつの心よりさつきの雨杏のことばあまりうわきのよふにきこゆる故へ） までじやおつせん苦に苦をかけて思ふこゝろも水のあわわつちの言をきゝなんし昨日やけふのことざんすなら申しいすことアおつせんけれども是程今迄に何かをうち明て申いす又かねて段／＼におはなし合申いした事も有に今さら

なんの浮氣でさつきのよふなことをおいゝなんすほん氣であんなんすなら定めて今迄わつちの苦勞を茶にしてお遊びなんしたろうし　たゞしやァあんなこと手にしてきれなんすお心かへ（トさもごふはらそふに側に有合杉バシぱつちり折てなみだぐむ）［雨］（手まへもむねはれやらぬを松にきかせてくろふさせるもいや也そふしてまた松にうわきものと思われていゝ分もできず松風が眞實のことばをかんじて）手めへもでへぶぐちになつたぜ鳥渡したことを氣にかけ苦にしてそれでつゞく物かながへ間にやァたけへに氣にされることもあるものださつきやァほんのおれが外に氣になることも有やさきそれニ手めへがふ意にいゝ出したから間にあわせていつたことだそれを根にしてうたがひを起しかれこれと心細ひことまでをいつておれ迄むねを一ぺいにさせるぜアヽじれつてへなぜこんなに思わせてくれるぞ（トうわまぶちうすあかくはれたる松風を　顏をつくづく）見てこれむねにつもつていることがあるからほんとふを談すがふさひでくれちやァおそれだよ［松］（此間中から雨香がさへやらぬよふす何か氣がゝりのことあらんとさつせしゆへだんだんたづねけれどもさつきのよふなうわきあひさつゆへどふぞして本心をきゝたくおもひし所ろゆへ）何わつちがふさぎひすものざんすかむねにあることたアなんでもいつておしまひなんしそふなんせんといつ迄もおけへし申イせんにへ［雨］そんならはなそふが腹をたつめへぜエ［松］なんのばからしひ腹をたちひしやうおはなしなんし［雨］アヽはなさゞァなるめへかねてはなしや

つた通りせわになつたりせわにしたり一生夫婦の契約して今迄何一ッ氣にさわる事ヲいつたこともしたこともねへおれがいゝ出すからにやアよく／＼のことだと思つてきゝわけて力をつけてもらわにやアならねへぜ　〔松〕そふぬしやアことをわけていゝなんすからわつちの心に分ることならきゝひせふわね　〔雨〕ムヽ今さわぎたつたことでもねへがのぜんてへおれにいゝなづけの女が有てとふに引とるのだけれども知てるとほりおれも二三年みもちもあしい所を親のじひにやアあつちこつちへ頼でいけんをいわせかれ是の掛方ハそれと云ハずにすましてくれるし今年ハいづれにひきとろふと云相談がきよねんのくれからのことよ是をおれが得心さへすりやア雨しんへ一ッの孝といふものだけれどもいづれにてめへと一生そふ氣だから今迄延／＼にしたのサさぞはらが立だろふけれどもきかせねへも罪とふからはなそふと思つていたけれどもなるたけ親にもふ孝にならぬ様に叉手まへを入るつもりだから色／＼にしあんしてミても了簡がつかず共内親類からはいづれにも両親がへんじをまつているとせめられるしほんに理につまつてしかたがねへいつそうき世をやミにしておやにも義理も打すてゝ心まかせにとおもへどもいにしへから五常をかひて一ッでも身のたつたためしもなし誠に是程みにせつなることはねへ今ではおやたちもおれが返事をまつてござるのさ　〔松〕（雨杏がことバをきゝくわつとせきたる所たさあらぬかほつきにて聲ふるへて）そりやアどふ共自由にしなんし　〔雨〕なんのこつたじゆふにするく

れへならはなしもしねハたかとこねへわな（トしばしたがひにことばもなかりしがとかくに松風氣がすまぬゆへ一たんハおかしくいつてミたがだん／＼雨香がこゝろざしのほどなかんじて）松「もしへ／＼さぞ宵からぬしの氣にさわりんすこと斗り申イしたろうみんなわつちのおりざんすからかんにんしておくんなんし今こと新しく申でもざんせんけれどもわつちのくるわへ身をしづめしもぎりとまことにせめられて泣になかれぬわけゆへに今ハかよふにいやしきつとめ申イすも恥かしうざんすけれども今年で此里に四年の間多くの客の坐敷へ出ても客の心にしたがわぬわつちの氣情ぬしにハついしたことがいつしかにかさなる縁の枕のちりもつもり／＼て今になりきつてもきれぬ此中ながらさつきからことヲわけてのだん／＼のお咄し御両親へのまことのぎり身つまされてぬしさんのお心がおイとしうざんすか様にぬしにくろうさせ申イすもみんなわつちのつみでざんす世間にもいくらも有ならひで此身さへなければとてしんじうしたりミをしづめたりあんな淺とい心ハざんせんネ義理と死との二ッでハしぬほどやすいことアおつせんましてぬし一ッのお心で御りやうしんも御あんどさせ申イすに御りやうしんへのぎりも立一ッにや御先祖への御かふ／＼必ずせまいお心をおだしなんすなへ今迄按／＼ぬしさんのお心をさつしてミ申イしたがおやご様へ御かふ／＼なんせバ數ならぬわが身への約束がかけそひとげればおやご様への御不孝かふと信とを二ッながらたてたいお心がとふらぬゆへ此間中

の御心勞けつしてわがみのことハおほしめさずにいゝなつけのお方をお入申て御雨親樣へ御あんどさせ申なんしそふなんすれバ先だちしわたしの母のいけんとぞんじてあきらへすから一ッハ川竹のながれにすむ私の身のためしんにそふしてお心をおやすめなんし今迄ぬしにくろうさせ申イしたハにくひやつと（こヘもふるへて）思召そふがかんにんなんし（トいゝつゝ右の手にてむねをおさへながらはなくひしめむちうになる）　雨（久しきなじミなればおさなもせうちにて）コレゑゝお筆引〳〵氣をたしかにもてヱゝ三芳か〳〵（トうろたゑあわてさわぐゆへかむろもめをさましめをこすりながら）　三ア、イ、（トきたりてミてびつくりチヤおいらんしやくがおこらつしたよ梅の香さん早くおいでなんしよ〳〵（トむめのかをよびたつる）　梅（さつそくおきて來り）チヤどふしひせふねへ雨香さんへいつでも黑ぐわんしがよふざんすから早く上ておくんなんし（ト下だんすの小引出しよりこくぐわんしを持て來る）　雨（左の手にて松風がむねをゝさへ右の手にて黑丸子をくちにいれさゆをくちうつしにして）くすりやアよくおさまりやしたおふかた今によかろふ梅の香さん一ふくのミなせへ（トいふうちウンといつてきがつき）　松ア、せつなふざんしたわつちとしたことがぬしにおゝきにくろうさせ申イしたもふよふおすからサアおやすみなんし梅の香さんおふきにおかたじけよもふねなんしおふきにようおつす三芳も寐やよ（トいへどもいまださつぱりせねゆへさへぬかほつきにて）わしへあんまりよいからふさぎひしたからのことざ

んすさぞなんとか思ひなんしやう（此うら街のかミよしもそれこれとかたづけねてしもふ） 雨そふいふ氣だから病もふけへになるよ（トとかく心ならぬかほつきにて松風が顔じつもミへ何ひとつうわきなこともなければわが思ひつめしことをきかせしならバたんきなこともし出さんかと口にハ出さず心でけさがまづわかれになるかとおもへば我しらず涙をながして〳〵 とかく苦勞の世界だから何もかもうつちやつてくらすがいゝよ 松（雨香が心をさつせしゆへ思ひどほりのしんせつないつてハミたが心も落つかずまことに無ほどせつなるものハなひとこゝろでこゝろをとりなをして） 今宵のよふなことばかりも有イスめへ明日ハいなんしな 雨おれもいてへけれどもあすハぜひけへらにやアならねへいつともいわれねへけれ共またくるわなそしてはなした通りだから己がほうからさたのねへうちやア人をよこさねへがいゝよ（トすこしはなしのとぎれるうち） 金龍山ノ鐘ゴヲン 茶ヤ男ハイおむかひでござります 雨ヲイ今いくよ（トいふ内しんぞふはほりかみ入のゐいたんすより出し雨香にわたす） 松（あさのわかれのなごりおしきハあふてうれしき宵にしもしれしことなれどもまさかにあか月のきぬ〴〵ハ人の心も入かわる又さたせぬうちは便りもするなときゝしなむねにふさがるかず〳〵かねにハせかれいゝたいことハ跡や先とき立ものハなみだ）もしへ今朝ハかんにんしておくんなんしわつちハおきひせん（ト床の間のハふをむひて涙をふひている） 雨そんならけへるからずいぶん大事にしなせへ（トすぐにろうかへいで） サアいきひしやう（ト新造禿おくつて茶やへか

へりける）

第貳席

柳枝（ハトしハ廿八九中ぜひにがみばしつた顔つき八丈格子島の小袖小納戸八丈の羽おり通ならず野夫ならず中ぐらひの女郎かひにて友人雪枝と一坐にて龜田やのまつ風がもとへ四五會もかよへどもかれて深まの雨杏も有ことなれバ中々柳枝におまきことばもかけにて柳枝は雨杏有事をしらずたゞ氣高ひ女とこゝろへいづれにふミしめてミんとけふも雪枝をさそいにくる）○（雪枝のすまひ表黑べいにて大戸立つけて有くゞりをあけて）柳 雪枝さん御在宿かね（庭のうへ付坐敷のよふす俗ならず一風有年頃四十ぐらひにみゆれ共本年は三十七ぐらい色白くせいかつかうすつかりとしていやミなしの男てつ小納戸鬼ぶとりの小袖の上着是にて下着ハ御さつし立じま八丈のそでなしばをりさらさのしとねの上ニたてひざにて一閑張じたての朱ぬりむじの小卓に何か小説物をひらひて宣德七賢人のほりの手あぶりにて竹ざいくのたばこ盆を引よせたばこのんでいる）雪 アレどなたか御出なすつたハ 下女ミよ アイ（とたつてせうじをあけて）チヤ柳枝さんでございます 雪 どなたかと思たサア柳枝さんすぐにこつちへ 柳（ゑんがわにて少しなりふりをなほし）御めんなさひましマアごきげんよふ先日背淵の會後すきと音信を絶しました 雪 イヤ此方からも御ぶいん斗り ミよ ハイお茶を 柳

アイ（ト取て下に置）［雪］おれにも一ツくりやアマアたばこ盆をあげや［ちよ］アイ（ト右に茶を左にたばこぼんをさげて）ハイお茶［雪］なんだぶしよふな女だぜイヤ柳枝さん此間會からけへつたばんにとんだ化物が來てきもをつぶしやした［柳］どんな化物へとんだことネ［雪］おめへもミたこともあろうソレ箕の輪の息子よ［柳］なるほど出合やァしねへがしつちやァおりやす［雪］あれがの　さる所の娘と一年も馴染でいたそふさ所が娘の親が段〻のいけんもふるくなりいかさま大きにしかつたうへで土藏へいれたそふさ［柳］きついお染きどりだね［雪］そふさ所が一念ハおそろしいものだふしぎだか箕の輪の内へ夜の四ツすぎに日高川といふ身できていづれに吉にあわにやァならねへといふものだから内でもわけの有ことだたァおもつていたが色〻にだまして吉藏ハきのふ出たまゝけへらねへなぞといつてもびく共せず落つき顔でさよふならお歸り迄待ましやうとおとなしくいふ物だからしかたなしにヤァあがつていなせへといつて大かた久しくまたせたら退屈してかへるとでもいわふかと思つた所が中〻大ばんぢやく奥でハはゝおやが吉をつらめへて色〻聞所が一向今迄内のめへ來ハ雨夜の星だから吉もす顔でこまりきつていふにやァちつとともだちの妾についてわけの有女だからわたくしが逢ませふといふもんだから親もそんならといつて出したそふさ吉がそこへ出るとアノ女が飛付そふないきほひで齒ぎりしてなくものだから吉もなにも云出すこともならずしかたなしうちの前もつまら

ねへからすぐに女をつれのはつち（わ）の所へ夜の八ツ半時分に入舟さ　〔柳〕そりやアとんだ狂言だ女ハいくつ位でごぜへせすそしてすミやしたかへ　〔雪〕まだすまねへのさ女が小僧にしちやアとんだ氣位の高ひやつさ吉が親達ハいづれに手ぎりのつもりだけれども女ハ又いづれに吉にそれにやアならねへといぢばつてとんだ新手をいゝやす鳥渡かゝりやつてしやちでもまけやせん　〔柳〕ご心配といふ中しかしいきな御苦労ネ時にこんやハどふでごぜへます　〔雪〕いゝねしかし内をあけるもおかしなもんだス　〔柳〕北のかたわへ　〔雪〕此間榎の島へいきやした時に隅田川があらア一ト口きめやしよふしかし何もねへス　〔柳〕あつちへいつてのもふだちやアごぜへせんかマダ早ひわなマア何なしとものミなせへなこれやそのさけを持てきや　〔ミよ〕アイ（トすぐに八寸にてふしと盃をのせもち來る）　〔雪〕サア一ツのミやしやう（と一盃のんで）はゞかりながら　〔柳〕さよふなら（と一ツうける）　〔雪〕コレミよやなんぞもつて來やな　〔代〕アイ（ト梅が香とうわミづをぼんにのせ持てくる）　〔柳〕かつてながらかさねやしやふ（ミ代つぐすつとのんで）サアおをさめ（ト玉枝へさし）すぐいきとしやせう　〔雪〕久しひもんさよふいそぐやつだよ（トいゝながら身ごしらへも出來ければミよ氣をつけやといゝつゝ出みちくさなしに）○（仲の丁蓬莱やへくる）　〔雪〕でへぶおいそもじだね　〔茶や女房〕これハ／＼御揃でよふいらつしやいましたほんにおとゝひ人をあげましたがおるすだつたそふでござります　〔雪〕何だつけね　〔女房〕なにさきのふちよいといたした花の會

がござりました（トいふうち）茶若 これハおふたり様よふこそ（トいゝながらたばこ盆をもち来る）〇（それこれの内　硯ぶたてふし盃もち来る）〈太夫芸者　呑太　幇治（ひきたて倹ほどさわぎ酒事有て）柳 サア都なけへやしよふ　雪 いかさまよかろふ　幇 柳枝さんへおあいさんハこねへだハ亀田やハ清盛さんでごぜへすよ　柳 おいてくれふるひぜ　女房 サアいらつしやるよ　茶若 （箱でうちんさけかた手にてちよいとかたはしよりしながら）雪枝さんあんたハこねへだの京町のしわくちやをおきゝなせへやしたかへ　雪 なんだの　柳 女郎どふしのたて引のことじやァねへか　若 さよふでごぜへます（ト道中のすてぜりふあり）　呑 サアお櫻へめへりました　若 （ときにたち）サアいらつしやひましたよ（トすぐに二階ざしきへ通る若者よふいらつしやいましたと共に酒事になり雪枝が相方村風とし十八九みぬ王昭君もかくふらんかとみまがうつくしさあひねずみしゆすの帯つきうちかけハ藤色しゆすに櫻川のぬひ帯、花西（カ）にしき柳枝のあひかた松風先にしよす通りのきりやう衣裳もミな）〇（じミにて）　松 雪枝さんよく柳枝さんをつれてきておくんなんしたね北国からまちいしたよ　雪 あひさどつちがつれられたかしれねへのさ　呑 おあいさんがたアなんでごぜへますつれたのつれられたのと鯛と鮨子様のけんくわをミるよふでごぜへますね　雪 なんだおじにしぐるな　村 柳枝さんはどかりながら（ト盃をさす）　柳 いたゞきやせういたゞきてへけれどもマアおゝさへ　村 マアお取あげなんしな　柳 マアいづれ　村 さよふなら（とうけてのむ）〇

（此間けいしやひきたてゝめりやすいたこにて大さわぎ折節）新造[綠野]（松風の方へむかひて）おいらんにやなぜさへなんせんへ　[松]なぜへこれ程さへていゝすものを（といふ折ふしあまりざしきも長ければ[若]ちとあちらへいらつしやりませんか　[雪]（いつもきまつたざしきかつて久しきなじみのことなればみへもへちまもなしに）　いか様寐のミも又よかろうさアノ／＼あつちへいきやせふ（トたつてろうかへ出ると綠野雪枝のきせるたばこ入を持て付てゆく）　[村]柳枝さんサアおめへさんの所へおいでなんしな（のこへと共にみな／＼御きげんよふにてざしきをかたづける）　[柳]雪枝さんお宿入かねちつとめへつておかしをかたろふかね　[村]サアお出なんしな（柳枝雪枝がざしきへはいる）[柳]雪枝さんなんでござへすねマアおきなせひな　[雪]イヤもふこねへだではざしきへきやひも氣くたびれがしやすこふなつちやアもうおひこミだぜへ床へ來たらはふ／＼としやしたマア御免なせへ　[村]おあんなんし（とすひつけてだす）　[柳]アイと一口すふところへ）　[綠]柳枝さんへあつちへお出なんしなおいらんハひとりでおいでなんすにヨ　[雪]色男になるも又うるせへもんだろうの綠野さんおいらんにそふいゝな柳枝さんハ何もいやらしひことをさせることつちやアござひませんからおあんじなさんなといつて　[綠]雪枝さんなんざんすへおちらしたんすなおいらんにやアしかつておあげなんしな　[村]柳枝さんマアあつちへおいでなんしよ綠野さん一所におつれ申な　[柳]おいらんにやアわつちをバ軒の下の猘犬をみるよふにおしやうにおひ出し

なさるのがおほへていなせへくひつくから（トいゝつゝ出てゆく） 村さよふならおやすミなんしよ（トミどりのも共に松風がとこへゆく） 村もしへこよひハどふしておいでなんしたへ 雪どふしてとハなぜ 村それでもおとゆふのおふミに四五日チヤア出られねへといつておよこしなんしたでハおつせんかへ

（コヽ圖あり。略）

如此 雪きつい所をきめるのこふきあるもおふかた今やハひとりねてくれと云どでへじやアねへか 村ぬしやア如才もなくおいでなんして人の氣に當ることハ斗りないゝなんすよ綠のやもふねやよ 綠さよふなら雪枝さんおいらんおやすミしよ 村何かをしまつてくんなんしたか 綠アイ（トいゝつゝ次の間へ行）

第三席

我とこの枕もいかに思ふらんなんだかゝらぬ夜ハしなければとハミぬ世の人の言のはなれど心に今吉のへだてなく松風ハ雨杏に別しよりさへやらぬくもりがちなるうき月日おくりかねたるくるうこそ日〳〵に次第に十寸かゞみうつすかげさへミすほらしかほのやつれもたれゆへとかわするゝひまハ片時

もたひてあかせし夜半しのみ［松］もしへなせだまつて斗りおいでなんすへ［柳］わつちやアぜんてへしつかな事アきれへだがくるたびごとにおめへがふさぐかたしかたなしにだまつているのさ［松］そふ思ひなんすもむりともおもひゝせんあつき御心からこそ私のよふなぶきよふものともおしかりもなんせんできておくんなんすお心ハいつそうれしうごんす［柳］そふせしはかりいわつともいゝわなおめへの二世とも契約した色男にわかれてから戀かつらひすると云もとふに聞ていらアなほんにわつちのこけへくるのハおめへのうさはらしのお相手にでもなろうかと思てさ［松］（だいつとふさぎしよふすにて）はんに人の口にハかないゝせんぬし迄そふ思ておいでなんすから私のじつを申イしたとてほんにもおきゝなんすめへしかへつてつミがふかくなりイすから申イすめへそしてそんなことをどこでおきゝなんしたへ［柳］（何もきゝへし事もなけれどもいゝかげんにいつたることを松風がむねにぎつくりと云様すがほにあらわれければ）じつをいふも罪がふかくなるもいらねへわな生徳りちぎなおいらに泣かくすおめへの心のもつれがほどけねへひらつたくいゝなせへしなんほおらんだじやふるりをミるよふにわからねへおいらでもかわいゝ男にあふようにはたらいてあけやしよふ［松］そふいつておくんなんすハうそにもいつそうれしうごんすほんに申イすもおきゝともなんすめへけれども人の心程しれにくひものハおつせんふなんのうわきらしいおわひゝ男にわかれてからの戀やミいときはつかしひこと斗り聞もけがらわし

うおゝやァこゝをよくきひておくんなんしわつちのかゝさんハいつたひわかひ時からの持病もちであんなんしたがきよ年の八月時ぶんから段〻おもる病の床度〱のたよりハごさんしてもついちよつとおそば八參つて御樣子をたづねることも不自由にともゞ〱はなれてのことざんすりやアあんじすごしいすりつひその内にはかなくも無常の風にちる命とふミのたよりをきゝしよりぎりもふこうもわきまへて長ひ御病氣の其内に一日なりとも御側にてせなかなでたりお藥も上てミたひと思ふ心も水のあわやかて年あきおそばにて一日也とたのしミに暮そと思ふかひもなふ長ひわかれになつたと思ひすりやア心も引入るよふで一時も氣のはれることアおつせん「御きけバきくほどおあへもよくいろ〱なうそをいふぜそふ又おやに迄かつけてかわひゝ男のうしろだてをすることたへねへわな「傾」色〱にこゝふたきうそをつひてつとめてハミたれどミ餘りのことにじれがきて）エヽむづかしひことをいゝなんすそんなら今迄申イしたのハみんなうそざんすヨもふいつそ〱おやこ兄弟にかへてもかわいひ二世も三世もと納そくしひした（ちからないれて）モウいつそ〱かわいゝ男にわかれへしてから一日へんしわするゝところじやァおつせんあにおちつくよふで似たこへがしひすりやァおねにびつくりあたりひすくらひでざんすおわかれ申てその後もいやな客衆のかず〱にどんなうひあもつらひあもかわひゝ男にする苦界とおもひゝすりやアおつともつらくもおもひゝせんぬしのやふないやな客でもつとあるの

ハみんなかわいゝ男にするくがひでおすもしへ是でおうたがひハはれいしたかへかわひゝ男のうわさをしてもあいたひみたひで寐ても覺てもおられへせんかんにんなんし

柳（すましてハみたれ共少しむつとして）産をする女か鍛冶屋の手間とりをとる樣にひたへェあせハながさなへがマアおれがいふことをきゝなせへあめざへくのおたふくかできのいゝ冬瓜をみるよふになまつ白くおゝきなかほをするが心ハおそろしひもんだぜ是が誠に外面似菩薩内心如夜叉とやらだぜ（コケッコウ）アヽもふくだかけとやらがなかアあしたがつらへひと寐入しよふ（とぐつとよぎをひきかぶる）○（ほどなく雪枝來る）雪サア柳枝さんおきなせへな〳〵おいらんもおつかれとミへるしかしもふおきなせへな 柳（めをさましなまけたあくび三ッ四ッハッア引〳〵アヽ）ねると思ふと夜があけたぞ 松雪枝さんもふおかへりなんすかへ村風さんハへ 雪どこへいつたかいやせん（と一ぷくたばこをすいつけるところへ）茶若これハどなたもおはよふござります雪枝さん今あなたのおざしきへめいりましたら 雪こつちへおいでなすつたかサア柳枝さんいきやせう（トつれたちかへるはしごおりる音）ドン（間を置て）ドンひとりハドン〳〵〳〵○（いづれも客をかひせしあとわきてひつそり松風の名にひきかへて明やらぬまどの障子も其まゝにまたうすぐらき屏風のうちおきもやらずたばこをのんでいる）梅おいらん湯におへェなんしてそしておまんまをおあけなんしな 松湯にもは入りとふ

もおつせんまんまちたべとふもおつせんからマアさきハなにかをしまひなんし 梅アイそふじやアおすがねおまんまもすこしおあんなんしなこなひだじやア朝斗りじやアおつせん三度が三どながらほんとふにやあがらずそしてついてふさいでばかりおいでなんすし さへなんす日ハ一日もおつせん ほんに人ハ氣のもちよふでおすによ思ひ〳〵のつもるのがついにハ病の根となつてひよつと見せでも引よふになつてみなんし心と心でやくそくしたかわいゝ男に逢はれてあふ夜もなひよふになりなんすわ

松（梅の香の言を涙ながら聞いたりしがおきなほつてふとんの上にたてひざにて）ほんにいつとてもかわらぬおめへのしんせつ雨杏さんの來なんすじぶんからだん〳〵わつちのために多くのくろふしなんすわつちがおめへの身の上のことをいふこそほんとふなれおめへにいわれていゝよふもおつせんほんにぐちの上ぐちになりわつちの心で心がしれへせん 梅おまいさんまだ他人らしいことばかりおいゝなんす苦勞きがねはこのうへにどのよなことがあろふともちつともつらくハおもひゝせんお前さんぜんてハ平生とてもうちばなお氣也それに人のよふにひとつふさぐことがあつても一ツハうさはらしをしなんしよふといふやうなこともなくたゞいちづなお氣だからなをわるうおすョ雨杏さんのかたから一向さたハおつせんかへ 松せんどおわかれ申イす時に内のよふすもかれ是とむつかしひからいつともいわれねへけれども又おれがくるしいづれにおれがほうからさたのねへうちハ人もよこすなといゝ

なんした其時ハおかほつきも本とうならすいつもにちがつて随分身の養生を大じにしろの人ハとかく苦労の世界にいるから何もかもうつちやつて暮すがいゝのと心ほそひことばかりいつてお帰りなんしてからさつぱりとさたハおつせんハ　梅「なぜだねへたとひおいでなんす事も御ふじゆふなら人でもおよこしなんしそふなもんだねへいつたひがアゝゆふおきだからもしもせまつたうへからハたとへ男の気だとてもふりやうけんなことでもしなんせんけりやよふおすね　松「（なミだなふきながら声もにごりて）ほんにそんな事をいつておくんなんすないとゞ思ひにますおもひおもひすごしのそのせひかどふやらもふ一生あわれハせんよふな心になりいすせんどお出なんしたほんもなにか心もはれなんせんよふすだから色々ときいてもたゞよそ外のことで斗り挨拶しなんすからわつちもついはら立まぎれにおいらも申イしたのさあけくのはてにいふことが有から腹をたつなといつておいてだんだんのわけもおはなしなんしたが誠にふたすじのきりにからまつておいでなんすのさ其ほんにもまた何かはなしなんすであつたろふがわつちもしつての通り積がさしこんで手間どりイして少しまどろむと思ふと夜があけイしたわつちどもの身のうへでこんなことをいふもおかしうござんすけれどもほんにいまゝでハすいたかわひゝよそ外にひとへに両者さんのお心がいとしふさんすヨたとへ遠国へお出なんしたとても筆のいわさゝないといふハさだめてごふじゆふなとこにおいでなんしやふヨ　梅「（心にハおもわれど気たと

いなさせんと）　よごと日ごとにそふ斗り思ひなんすもよしあしのかたは思ひにあこがれてかれ野ゝ身ともなりなんしてごろうじひしほんにおめへさんひとりなんぎ又一ッにハお前さんの思ひなんすほどにもなく雨香さんハどこやらでたのしみな世界にお出なんすもしれへせん二　松そふおもへバ思ひゝすものゝ憎な々なにいろ〳〵とあんじすごした其時ハはらもたつたり又してハなミだも出たりいろ〳〵の心のもつれがとけへせんほんにこういふしぎになるとハしんに悪縁とやらでおつしやうわすれよふと思ふ程思ひがましてなりイせんほんに雨香さんがきなんしたらくひついてゞもやりてへとおもひゝす（となミだながらにふしづむ）　時あさから鳥渡いゝ出しイしておたがひに何だつたねほんにやァすこしおまんまもおあんなんしな（トいふ所へ　男もしおいらんへ蓬莱やの男衆が一寸お目にかゝりとふおすッサ　時ゝ芳なんだへ　男なんでさんすかおめにかゝりとふおすッサ　松こつちへよこしよくのやよ　岩（ほどなくきたり）これはおいらんお久しうごぜへますねほんに雨香さんハおいでなさらすまたいそがしひで大きに〳〵御ぶさたになりましたこれハ雨香さんのハふから飛脚でめへりましたからお聞申ますと　岩風様　雨香がなだす　松チヤ雨香さんハどこにいなんすへ　若ハイひきやくの人ハ常州からめへつたと申ました私アいそがしうございますからへイさ樣なら（トかへりそふにするを　松ほんに大きにおせハだつたよそしてつかひの人をおまつとこつちへよこしてくんなん

し 若ハイもふとふにけへりました（トそう〳〵下へおりて行） 梅こふしてまいにちのよふにおうわさゝせぬ日もないよふでおすから此念がとゞきいしてもたよりがありそふなもんでざんしたね 松そふさマアどんなことかと（ひらきミれば）

よきたよりにまかせ御なつかしきのまゝ一筆しめしまいらせ候まつとや時しの御あたりもなふ御くらしなされ候や恋しくうけ給り度ぞんじまいらせ候われこともせんし御めもじのせついまか様にいたしおり候こと迄も御はなし申たく候へどもぬしにもあれまでわがみことにつきだん〳〵の御心づかひもしもうちあけはなし候ハゞたんりよなこともあらんかとなにていなしにあとさきにもつれをつゝむ我むねの内御さつし下されかしせんし御わかれ申せしふうちの首尾とてもかねて御しらせの通りまだしんるい内に月日を送るもわが氣しつに候へバ一時へんしもあいなり申さすあれなすぐにすこしのゆかりも有候へバ常州のかたへ参り心よりなすかんなんとハ申ながら其ハふに有しにひきかへてさゝしき浮世をわたりまいらせ候一寸御きゝもありしなばいなかへゆかすともとおふ勢もあらんなれどもせんし御はなしあひ申せしとをりのふたおやい心それにつきてはむりならぬ道すじゆへしんるい中のだん〳〵のいけんたとへ十ヲに六ツの理をもち候とも少しもとふらぬわがことばそれゆへに今のしぎふたおやニもつれのなきよふにし世間てへも節のなき様とおもふゆへのわが

はからひか様にいなかへ参るといふもじつハおやのきにさかろふといふものに候へどもいづれに
わがみを一旦おとし候ハねば先がたはじめしん類へもたゝぬわけゆへか様の手段にいたしまいらせ候其
のち内よりも人も参りだん〳〵わけ合もつき候まゝ近き内にそのハふへ帰りまいらせ候あいだそのふし
ハさつそくまいり御けんにてくわしきことハ御はなし申まいらせ候と存まいらせ候くどふ申もべつのよ
ふにハ候へどもせんし御わかれ申ふしもなんのしさいもはなさずさだめて情のうすきものと御く
ませもあらんとさつしまいらせ候申度ことも数々のはまの千鳥のたつゝいつもはいつそあとやさきかへ
るかりがねのひきやくだよりに先あらましをちよつとしらせもふし参らせ候筆すへながらみな様
へよろしく御つたへ下されかし梅の香さんへハ別してよろしく〳〵御つたへ下されかしまづハあ
ら〳〵めでたく　かしこ

雨香ゟ

松風様
御もとへ

松「梅の香さんおまへも悦んでくんなんしせんし御わかれ申てから常しうといふ所にいつておいでな
んすげな　梅「そのくらいなことならバちよつとはなしておいでなんしてもよさそふなもんでざんすね

おめへさんも猶さらのことお心やすふいたしひしたわたくし迄もあんじすごしいしした雨香さんもいなかへおいてなんしてさぞや氣づまり御ふじゆふにおいでなんしやうちつとも早く御かへりなんしてお目にかゝりとふおすねへ　松アイサ夫につひても思ひ／＼の念がとゞきいした此お文雨香さんのお身のうへもしれへしてうれしうおすかふしてとふぐへお出なんすことゆへにたよりせぬ内ハ人もよこすなといゝなんしたがふしぞふして見ひすりやア心のけつちやくハとふにきめておきなんしたことゝ見へもしたそれを日にハだしもせず色／＼なとござかいつてわつちにはらをたゝせたりぬしも氣をもんでおわかれなんしたあのあさのお心ハどんなにおんなんしたがふね（ト咄し中へ村風きたる）村松風さんけふハどふざんすへちつともお心よふおすかへ　松（一ぷくすいつけ村風へ出し）いつてめへりいしなふね　松村風さんいつも／＼御しんせつにたりねしおくんなんすもふおしつけ八ツでざんせふねへ（トいふうちほどなくひるみせをしらすすゞの音（コヽ鈴ノ繪アリ。略ス）ガラ／＼／＼

北廓雞卵方尾

北廓雞卯方後篇

戀(こひ)の譯(わけ)知(し)識(り)

來春可入御覽候

全一冊

いにしへより滑稽劇談の書夥しといへども皆戀をかひて人の垣(恒ノ誤カ)を失ふ今ややつぱり戀をかひて義理實情のおもしろみをあらハすその實義の根元は後篇戀の譯知識にて御覽被下かしと云〻

北廓雞卵方跋

いにしへの諺に玉磨ざれバ光なしこいわ禮しに人も亦性根玉をみがゝねバ光所があかつきの鴉のよふに疎まれんも恥ならずや余が朋百一子かのかつぎの海士にあらね共胸の魂もて眼睛をバ虚言と眞實の中の街にミがく事多年傾城鷄卵方を作る嗚呼美なる哉傾城の玉のやうなる眞直をバ磨出したる此册子たづさへ來て跋を請余もたまく此書を得て瓦のやうな氣玉迄玉らぬ程にミがゝれてあたまをかきくあら玉のとしだまに贈ることしかり

花屋面枅白

手管
見通

五臓眼

完

秦之方鏡化而成五臓眼ヲ深き川に網して得たり其玉のかたちめんこうふハ

くの玉子に非ず又おしやべりの卞和がかへ玉にも非ずうば玉にハ鼈甲光りをあらはし統てしろく膚艶なる事下村の翁香を欺きよく人間の肺肝を見る事天竺の耆婆が得しかの藥草よりも審なる事硝子の中の金魚を見るにひとしく空にかざバ天の川の猪牙船まで見へすき地にうつせバ其儘地獄の

世界をもうがつ萬客のはらわた一夜妻の手管いづれか見へ透むやとちゝん
ぷひ〳〵御代の御寳なるひと品を取出し品玉のたねとなして玉のまさごの
數〳〵を比翼ござのうへに並べ連理の枝のさくら木にうつしうへることし
かり

藍水北居山旭亭演 旭

眞婆行

序

金翅鳥化而祖母線となる　玉磨ざれバ光なしひかりなきをかへ玉とす夫龍の玉ハ額にあり　親仁の目の玉をぬひて悪玉と化すなんどけしの介が品玉よりはやしこゝに閻婆行なるもの　野狐の囘〻國よりひとつの玉を得たり名づけて五臓眼とす人の肺肝をうつすにしほミつ玉のしほさきにちよきをとバせしほひる玉の朝迎ひに山に至るなど其深川の　どんぞこをうがち　性根玉の闇明を見るなんぞ　猫兒眼の山猫山の手のやぼなる目玉及ぶべけんやこゝをもて其まゝ小册の題號にかうぶらすァ、鐵炮玉の　八ツあたりか抑作者の親玉か御手にとつてめがねごろふじろと金卞もつり方に序す

神田安つ丸誌

なべ

手管見通五臟眼目錄

○其一
深床の艶
○其二
少通の辨
○其三
割床の語

○其四　呼出（よびだし）の話

○其五　陰婦（ふせだま）の説

○其六　染客（なじみ）の言

目録畢

店者の癖

（のウラ）

其一 客店衆廣さん三すじ立ぬのこ二ツ三ツまわたを入るゆへかさばらずいづれもさやの袖口茶ふとりの帶こんばんハより合じや又引合れる事にやなどといふ是小言を引合と云日ぐろ參かほミせなど出ばんハかき入の日その四五日まへよりこ

んたん左のとをり

其二 出番四五日前より手ぬぐひをそめにやる尤角のほうへ思ふやつの名などあさぎにそめるなどのしうちありせんたくやへ子供を百度まいりほどやりきものゝ仕立かたねん入當日かミさかやき殊に六ツかし又店によりてハ大坂ことばをまねてあいかたの女郎をあのがきがなどゝいふところもあり爲らふハ一めん通り句なりあまりのぼせてまぬけのあいさつことばなどハもおまへその中にはんかこすく立廻る風あり

女中の癖（のウァ）

其一 女中そろひのきものにてけんばんへかけてきてあいかたの女郎をきくつれの女郎中どしま何人などゝいふ時ハよせバにて廻しども手まへ〳〵のあづかりの女郎の名をいふそのこへ見たをしやの市のごとくいゝよまゝにもしやせううつち

やつておきなぢきにかへんなはるはやくよこし申なといふハ口ぐせおそくかへる客のもかくいふ

其二 おはなどんわたしやアおくりぶれへいくからひなさんのよひどまりをつけて安さんがきなつたら戸ばしのかぎやへ人をやるのだよあの子もきでもちがつたさうだナゼあれへにばいしさんをむごくするのふほんに見とをしへちつと行ねへ又次郎どんがはらをたつとわりいよなどゝいふ事有

船頭の癖（のウラ）

其一　せんどう客のきたを見てすぐにおはちを出してめしをくふときハうのみにして口をむぐつかせながら夕べあの子のところからおめへさんをきゝにめへりやした二三日引込んでゐなさるさうさかみさん夕べかりてきたあんかをすぐに入て行やせうまつくらだふらふもしれねへもしふつちやアわりいからやれになせへましつきはりも入て行やせう

其二　コウちよつと仲うらへ行てくろからはやくとこを廻してくんねへなにいろどころかかのよアノ子がうちにゐれバいゝがいま向ふからけへつたそりやアてうどいゝあすこのうちもおめつけがいるとはなしにくひおめつけといふハ子供やの女郎の中にとしまでかみさまになにかをふつこみさばくやつなりにくまれがつてのものなり

臥婦の癖

（のウラ）其一 たまハよけれども廻しが多くいけずるきもの多し氣だてハおもしろき立引ありなけるやつの十二匁なり風ありなれどそれもていしゆによるていしゆがぐつとかしてきらせてだなどゝひやうばんをとらせしやくせんのつまりハ年きりかへ也うつとしひ事もあり

其二 部やでより合ふと客のれうち也あれももう二三度きりだよなどゝ人の客をわるくいふくせありとし玉をやつたにこれへハなぜんて一晴もわるはんかになつたそのくせ一きりに三四度ヅヽ床へはいりたがるひらきをいつてもさつばりしたほうがいゝのううるさいねへ

呼出の癖 （のウラ）

其一 つれへこつた又しよけへだハないまきたそうだふけへきなしよせんそういつてもこゝの内でハもらつちやアくれれへこんやあハれへじやアとんだつがうのわりい事があるよおめへアノ大さんのとこから何かよこしたじやアねへかあいてけへる時しらせてくんねへほんにいきてへのふおもしろかつたこのごろに又いくとよ

其二 チヤおめへのかみハとんだいゝのふおますさんかなどゝこいつじめへ羽根こよこい町あたりに店たかりて子供やへかよひなりだんなさんどうも出ても出れへでもおんなじ事でござへますから二三日引こミませうといふハかんちやうが二ツもつかへたときのせりふなりみかたにしてハよしむかふにしてハむつかしきやつなり

手管見通 五臟眼

○其一

山旭亭主人著

美食をくらひ酒をのミ。三紋箱を枕とし。たのしミ其うちにありとかや。春宵一刻のちよんの間にも。價千金をついやし。さんばしのぶらでうちんハ宿酒のあたまにひとしくぶらりき。一寸切れる氣の居つゞけ。わり床の屏風は。土藏の壁にことならずらく書たへず。仇な潮來ぶしの文句ハあんどうにのこり。あやしき文がらハ身じまひ部屋のすミにあぶらじミてうづくまり。天井へ吹付る紙ハさながら碑文谷のごとく。百疋のかばやきハ宿の敷居よりも高く夜具ハゝみの風呂敷すミのこにありかじあられ比翼もんのぬり枕ハ夜着の兩袖にひそミ用事をつけるよび出しあれバ。一座にさしをりくふせ作あり。ミす紙をかんざしへむすんで。まち人をかけるもあれバ。硯箱を引ふせて。夕しはゆる〳〵御目もじいたし。山〳〵御うれしとの文言ハ。板行でおしたるごとく。かべと見られてきやうけんをかゝれる客ころし文句でもてる客よきもあしきもいづれ塞翁の馬の背をわり床の客。廊下を通るうハざう

り。コウおふミさんちつとおよんなせへト屛風のうちから聲をかければ。ふかひなじミの世界と見へて[おふミ]チヤ徳兵衞さんかよく來なつたの。さぞおたのしミネもしへナゼわつちが客人をつれてきておくんなはんねヱ[徳兵衞]おめへまた來るやうにかけバいゝのに（トうりことばに買詞ないふ）[おはつ]たばこなすひ付て〳〵おふミさん一ツぷくのミな[徳]吉さんハ來なはるかへ[文]マアきひておくんなせへわつちがじれつてへとだしちやアあのネ吉さんハこのごろとなりのおやまさんの所へいくとさ。[はつ]そりやア吉さんもわりいがおやまさんもお山さんだのふあれほどとなりづからでおめへと心やすくしながらしつてゐて出る事もねへ。吉さんとおめへの中ハ人も知つているのに[徳]ソリヤアなにかわけがありやせう[文]ほんにさうしておくんなんしト（うつむいてきせるの吸口をつかんでひたいへあてゝ大きにふさぐ折から女中の聲　おふミさん〳〵[文]又のちにまいりやせう（ト出て行。

なにかひそ〳〵とはなしありて　次第に夜もしん〳〵とふけわたりふうりんのおとにあんまのふえせけんもしづまりしおりからかすかにいきなこへにてうたふめりやすなきけハ）

（コ、三味線ト撥と稽古本つげの櫛の圖。略ス。）

めりやす

つげの櫛

へ仇に日をうつら〳〵とおくる身のいつも世界ハかハらぬやうに思ふ心のあどなさやねやのふすま

のあけくれにやがてくがいをあけがらす　かあいとつげのよこぐしのそのなりふりもよひ中とうたハれたさのうハ氣どし　合〳〵からむくぜつも小夜ふけて鐘がなこどの中なをり　〳〵ぐちなしうちをかべと見てじらしもんくをかきおくる文のさきめのべにのうつり香

はつ　あのめりやすハあだでいきなもん句だねへ　德　アリヤアたしか太孝がつくつて錦屋惣三が手をつけてよしハらででヱぶはやつたつけ　はつ　ぬしやァ吉原へもいきなはるかへそれだからどうもくろうでありますよ　德　くろうなはつさおれが十ろうといふ男ぶりだから　はつ　ほんにあきれヱすよ十郎にしちやァつよさふだのふ　德　なァに力ハねへのさ　はつ　いゝへおしがつヱゝといふ事で有ますよ　德　此ごろハよつほどしやれが上ツたぜヱ　はつ　ぬしにしこまれてさ　德　あんまりぬし〳〵といつておらふめへおらァうハばゞじやァねへしかし内で時ゝへびをつかつた事ハあるけれど　はつ　よくおだをいゝなはるなぜぬしアそんなにうハきになつたぞ　德　そうさおれがのハしかも江戸前のうハきだ　はつ　どうりでぬらくらとしてくらしなんす　德　そのぬらくらものにハたれがした此うつくしひ顔でかト（見ればにつこりわらふかはつが目もとのうつくしさ徳兵衛がまよふももつともなり）　德　あちらの客ハどふした　はつ　いつそやかましひ客人だからまハしハねへ顔さ　德　そんならちつとあつちらへも行かいゝ　はつ　それでもどうも　德　はてそこがくがいだあれ〳〵いつそ手をたゝくじやァねへかサアいつて

來やな／＼ハテそれがわりいおれが爲に内證のまへもよくねへ　ト（すゝめられふしやう／＼に出て行く）

○其二

今よひおはつがあげし其風といへるハきいたふうをすぐにひやうとくに其風と付しなるべし

思ふ人あればこそねぬほとゝぎすお初ハこよひ二世とちぎりし徳兵衛來りしを其風といふむつかしき客ゆへさたなしにねずミの幕にて徳兵衛がそばをはなれがたく此客人の方へハいつかうよりつかずきかいが島のふとんのうへくゆらすきせるをはいふきにおともきびしき八ツあたりもはや八分もきこゆるころあひあふひや酒青ツきりいくはいもひつかけて足もともよろ／＼とたつて見寢て見すハつて見ても心ならず度／＼かさなるかしハ手におはつハぜひなくらうかをすた／＼來りせうじをあけて「はつ」チヤなんだへばからしひしづかにしなんしななぜねなはんねへヱわつちが氣もしらねへやうに「其風」手めへのきハなんだ杉かゑのきか大かた松の木の大木だらふきもがふとひから今までどこへ行ツて居たへばか／＼しひ「はつ」どこへも行ハしやせんハな手水に行てそして下でまんまをたべて居やした「其風」なんだ手めへハうしのとしかしらねへが長ひ小べんだぜヱめしもいくらくらつたかコレ何

ン時だと思ふへ氣のきひたからすハな顔(かほ)をあらつてわらぢをはく時分だわへ［はつ］わつちがわるくバかんにんしなんしなるほどぬしのがもつともでござへす（トいろ〳〵まるめにかゝつてもがてんせぬゆへお初もあきれぬれども安がくがいとおもひ）マアきげんなをして酒でもひとつのミなんしな［其］いやだおもしろくねへ七ツ下りの雨と娑の内のやうなわりィ酒ハあがつたためしがねへハヘ［はつ］なんだへぬしもじよせヱもなくッてしづかにいつてもわかりすハな［其］おきやァがんなせへじよさいの有のねへのと新右ヱ門町からくる青貝(あをがい)の箱(はこ)じやァあるめへし立ごかしが氣にくハねへハへむざこかしが聞てあきれらアエ丶かと思やアがつてあんまりくらひそばへるなへ是ヱ丶おれがはくうらつけでさへ捨负たアそれになんだ二朱やそこらのやすひからだをもちやァがつててんかんやミを見たやうにあんまりふんぞるなへこんなやてへほねで權七さんにされちやアいちぶんがたゝねへぞ（と大きにこへ高になりむつとせしゆへおはつもふしよせんいかぬと心を定め）［初］いちぶんが立たねヱへいちぶんがたゝざアせめて半ぶんでもたつやうにすゞりぶたの玉子でもくひなんしな［其］なにいハせておきやァあんまりいやにしやアがる此ふんばりめもふりやうけんがならねへト枕をふり上る（此ものおとに女中若者とや〳〵とはせ來りやう〳〵となだめる所へせんどう來りおまへの御むりハ御尤ごかしに酒にゑひきつているをむりやりにだまして舟にのせてかへるやうすなり）

そのわり床のきやくのせかい是もなじミと見へて女郎も客もいたつてくだけたとしにてかきもせずかゝれもせずいやミもなくわるじやれもせずべして花やかにもせればはでにも見へずいつ來ても同じてうしにてそうなうにおりおりハ心づけしたりいつでも金だけのあそびなしてかへるこれらがまことの女郎かいなるべし

○其二

半兵衛 となりの客ハでへぶあつくなつてかへつたの 小いな ナニあのくらゐな事ハたびたびさ 半 今の女郎買ハうぬぼればつかりでミんなあのくらゐなものさやつと二三度も行ともふ女郎をひきミんたんするさんだんをしたり着ものでもかりてくるを手がらのやうにコウきゝねへおらアタベつとめをはたらかせてあそんで來たといつぱしうぬが色男のきぐらゐで友だちにはなすが心あるものハかけでわらつてゐらア 小 さやうさ大かたそふいふ風の客人がおほふござりやすよ 半 ハテ二度か三度もいハれりやアいけすかねへと心であいそをつかして見てもほうばい女郎やそのつれしゆの義理はりでよんどころなく一度や二度ハ勤をはたらく事もあらふがかけへ廻ツてくそをミそにいつてあいそがつきるハしれた事だハテむだな金をつかへじやアねへが壹分の所を貳歩つかひ貳歩の所を三歩つかつて三

度行くのを弐度行てもきれいにして見たがいゝあそびに質が入ッてむかふでもそれだけにあつかふからひとしほおもしれヱじやァ有ルめへかそれを今時の女郎買手合ハこけに金を遣ふのころしてつかふのと金に手あしでも付て居やァしめヱしもとより金がなかァ女郎買にいかねへがいゝりやうけんだ

[小]わつちらだつてもかふいふつとめをするさへあるにとあんまり人をだました事もなければだまされた事もごぜヱせんほんのうまれのまゝでつき合てゐるのさ [半]それがいゝのさいくらかひてもかゝれてもすゐのとげねへ事ハやくにたゝぬチヽでへぶさぶくなつたとなりの客が帰ッたからでへぶしづかになつた

○其四

草も木も寝るにけいせい郭公世の中につとめの身ほどつらひものハあるまじあるが中にもましてよび出しなどはやる子どもハせハしなきものなりけふハ何やの仕舞客と身ごしらへする内にもモウ朝参りのもどりがけの客にちよつと一切ぬすミと出かけその客を帰して晝しまひの茶やへ来る店ものゝ出番なれバ日ぐれかぎりに客ハかへるとすこしほつといきをつかふとおもふ内はや宵どまりの茶やからよびにきてそのまゝ行バ又宵だちの客しゆがどうぞおめへを名ざしでよびてへといひなハるからどう

ご宵泊の客しゆのくる盞盃ばかりでもちよつとざしきへと女中や丹やどにわうじやうずくめにたのまれまさか顔づくなれバいやともいハれずぜひなくその客へ出てゐる内はや宵泊の客つからハ櫛のはをひくがごとくやう／＼きりぬけて其茶やへ来りざしきもそこ／＼にちとあちらへと床へまハれハなじミと見へていろ／＼のこんたんはなし客ハもふ何時だらふと問へバ女郎もよふおぜへすハな今夜ハ居なんしなといへバ客も女郎の氣を引て見る氣でおれも居てへハ山ゝだがどうもつがうがわりひとすこしにほハすれバ女郎の方でもそれとハさとれどそしらぬかほでわたしも自前(じまへ)ならしやうもやうもごぜへすけれど何をいふにもねんきの内だからどうもまゝになりやせんといふはたしかに今夜のつとめをはたらひてくれのといハせぬ前置なるべし是らハいさゝかの事なれどもたがひに氣を引て見たがるものなりいつぞやはやくかへし申た時わたいが客がきたとつてよびにきやしたからいつて見やしたら外の子のきやく人さいつそ／＼もうはらがたつてわつちやァあの夜ハひとりさびしくねやしたぬしをかへさねバよかつたとハまつたくその夜いろ客の來たのなるべし誰やらが前句付に傾城ハないてろうかで舌(した)を出しむべなるかなおそるべし／＼

○其五

氣にいらぬ風もあらふに柳かないやたら客にもなびかにやならぬがくがいの身のうへとハいひながら勤(つとめ)といふ字に二ッハなけれどもふせ玉の子どもハ茶やをあるくせハもなけれど勤る所ハやはりおなじ事也いつも／＼初會(しよくわい)客にばかり出ているがのうでもねへと客人のなじんでくるやうに手くだをつくするが中にも此客ハそうをうな客なりどうぞながくよんだらどうやら爲にもなりさふなお客と思へバその客の來た夜外になじミの客いち二人も來りしていにもてなしかねてより内ゞ女中としぐミ置云ィ合て屏風の外より誰さんちよつとおめにかゝりませふとよびにくると客ハもふすいを廻し久しひもんだ又なじミの客が來たといふのかあやまるせへといハれて女郎もすこしじれて見せなんだな爰へ來ていひなんしな〔女〕それでもそこでハ申にくひ〔客〕いゝハ何もそうかくす事はねへしらばけにいふがいゝ〔女〕そんならおゆるしなんしと屏風をあけて（小ごゑにて）あのね本町の福さんが來なはつてさつきからおまへをはやくよんで來てくれとつていつそやかましくいつてわつちをせめなハるからちよつとなと御出なんしなあれほどにしげ／＼きなはるものを（ト耳へ口を付少し客へきこへるやうにいふ）〔女郎〕いつそきのどくだがわつちやァこんやハ外へ行のがしミ／＼いやだからどうぞいゝやうにいつて名代でも出しておくんなせへ〔女〕おまへが出てるなはる事をさとつてるなハるからどうもそれじやァせうちしなはるめへわつちが中に立ッていつそつらひそれともまァくるめて見やせう（ト出て行）〔女郎〕いつ

そもう／＼じれつてエよどうせうのふを八百もいゝもしへ今に大かたぜひ／＼といつてもらひに來やせふからおまへかんしやくをおこしたていにもてなしいやだやる事ハならねへといゝはつておくんなせへわたしばかりいやだといふと内證のてまへ女中のまへもよくねへからといふ内あハたゞしく女中來りて本町の客人殊のふもめるていをくりかへしてはなす客もわざとやほッたくやる事ハならねへとうぬがはなげをよまれかきのめされるとハ夢にも知らず心のうちでおらア男ハ中くらゐだが氣どりがいゝからおれにほれたなと思ふゆへする事なす事がおもしろく見へ女郎もとう／＼ゆかずへい氣にてその夜ハろ／＼(ろく／＼カ)手水にもたゝずたんせいをぬきんでゝ勤るゆへどのやうな客でもかふいふしゆかうにかきのめされちやアのろくなつてこたへられねへあいつがところへ行かずんバ有べからずあゝいふ女郎をかつてやらねへけりやア女郎めうりがつきると是よりその女郎のする事なす事がみんなおもしろく見ゆるものなり是ゝな女郎と女中と極内ゝにてしぐゝし妙手と見へたり又ハ店者かおやしき一座何時にハ是非(ぜひ)／＼かへらねバならぬといふ刻限(こくげん)をしりてゐながらよん所なきまハしの客人でもある時ハ兩方がためになる客人ゆへ氣のどくに思ひとめたくもなけれども義理でよんどころなくとめるしうちあり 〔女郎〕サァあちらの客人ハよふおぜへすからけふハぜひ／＼ばんまで居なせへしとしきりにとめる 〔客〕そういつてもおきにあちらの客へ行だらう 〔女郎〕イゝへ行やせん 〔客〕いゝや行だらふ ト ころん

なこて居るなかばへ女中あハたゞしくかけきたり）［女］もしへあちらの客衆がもふおかへりなはりますからおまつとおくつておいでなんし［女郎］ナヤかへんなはるかおやつとおくつてきやすからまつて居なせへト（そのはり合に立ツて出て行）

是も手なけまつたく先のきやくかへるにハあらずかやうにきやうげんなかゝねバこの所出にくきゆへなけもつとも此客久しくおちついてゐる客なら又新手あるべし

○何氣なく平氣にて先の客へ勤てゐる内こちらの客やがてもはやかへるこくげんの鐘のこゑしバらく待ても來らぬゆへひとりしたくをして屏風をあける小ちよくがしらせるあいづのきつかけにらうかを上ざうりの音はげしくばた〳〵かけ來たり

［女郎］チヤモウおかへんなはるかいソこじれツてひのふまだはやうありますよ［客］ナニはやひものかおそくなつたくらゐだ（といそ〳〵たあどけなくしんにふさひだるていにてわかれをおしむ手くださま〳〵しうちハそい客人のりんきおうへんにしたがふてかきのめすべし○さやうならおちかひうちとハひと通りのあいさついつ何日にハかならずきなんし心まちをしてゐやすからといへバ）［客］その日ハちつとよんどころねへェ用がある［女郎］そんならいつ來なはるへサアいひなんしナトそい日をいハぬうちハくびへかぢり付てはなさぬ故ぜひなく）［客］そんなら其あくる日こやうト（目から出

ほうだいにいへバやう〳〵かぢり付た手をはなしきつとよ〳〵とくりかへし〳〵いふ）〔女郎〕かならずおだましハおひでんだよ〔客〕らいでんが聞てあきれらアト（らうかへ出れば）〔女郎〕そんならおさらばよふト（せなかをた丶きながらおかへんなんすよとはしごのきわでいへバ女中きたりもつとも門口までおくつて敷居な客がさ丶たくかまたがぬ内にさう〳〵二かいへかけあがり跡にのこりし客の床へ来りにつとため息をつき）いつそすかねへ客人だからやう〳〵だましてかへしんした丶ト又此客ハ左（ママ）の通りつとめるなるべし

評ニ曰 如斯あハし客ありてあちらの客人ハいつそすかねへやぼてんだのとんちきだのふざけるのと客人のまへでそしる女郎ありこれはたしなむべき事也かふいふ女郎ハ又先の客の所へ行とこちらの客の事をかくの通り又そしるとしるべしとかくつ丶しむべきハ舌三寸なり吉田の兼好のいハれしかの言葉おほきハ品すくなしと書のこされしもことハりなるべしまことにわざハひの門とハ古人のいましめつ丶しむべき事なり

○ 其六

潮来艶内節の文句ニ曰けいせいにまことなしとハ誰がいふた日ぐろにのこせしひよくいか〇アヽむべなるかな女郎に誠ある事いにしへよりかぞへるにいとまあらじめづらしからぬ事なりされどもいつたい

がうそでかためし勤なれどもかの大星由良之介が名言の通りそのうそから出たまことでなければしん
のおもしろミハなし愛をもつて實情のある事をもしるべしとかくなじんで見ねバおもしろミもしれま
じまづやつと二三度も來りしおなじくらゐな客おなじてうしにつとめておく客人おりあしくおち合ひ
いつそじれつてへといひながらおなじやうにからだを半ぶんヅヽつとめやうと思ふ氣でもその内にも
客の氣ぜんにもよれど「つな五郎のしん内ぶしの中にもどうやらあふて見たならバおもしろさうなおかたじや
と」といふ文句のとをりしぜんと氣どりがいひとか口合がおもしろひとか思ふ方へたんと勤るならひ
いづれの女郎の氣もミな同じ事なるべしそのおもしろさにだん／＼度かさなりのりがきてどうぞなが
くよんでしやうはあの人の世話にもなりたひとおもふ心根がはやほうばいの目にたつのもいとハずは
でなうき名がうれしふてとゝなりざしきでかたる々ぎりの淨瑠璃の文句がきうにうら山しく成りどう
ぞと思ふ心からいハねどしうちで男もさとり一日なりともこいつを小指にして見てへとのちハたがひ
に實心を見せたくなつたり又見たくもなるならひなり「富士太郎の上るりにふかふなる程やぼになり」とい
ふことの葉ハ尤也今ハ兩方ともにやぼにばかりなつていればくろ紳きしやう血きしやう血酒日文時文
といろ／＼さま／＼に心をつくす事になりもはや何もかもしつくし只一日／＼と年ゝの明るをかぞへ
うつら／＼とほかの事ハ耳へも入らずどのやうなりはつなものでも此道にこりかたまつてハ氣ぬけの

したやうになり人の謗も世のぎりもしら紙にかきおくる文玉づさもはやふめうとになりたひと同じ文何をやつたりとつたり二三日もあハねバ牛としもあはぬやうに戀しくなりかならずたび／＼來なんすな爲になるめへから月に二三度くらゐヅヽ來なんしと口にハりつパにいへどじつハ毎日もよびたく男の方でもおれもつまらねへよ此ごろハてヱぶしやく金ができたあんまりこめへと口にハいへどこれもやつぱり毎日も居つゞけに居たく女郎の方でもその通りほかの客をあながちそまつにする氣もなけれどもしぜんと心がうかぬけれバあしくもしたり不づとめにもなり又ハほうばい女郎のつき合内證のおもわくいつとなくあしくなれバその身のつらさハいかばかりならん○けふハようこせ(ミカ)へやすハな此櫛かうがいをやれバこれ／＼借しんすよ又こんどハ此しまちりめんをかうすれバこれ／＼つきますとだんだんわるごすくばかりなりて今迄おほへぬあしき事もおほへ手のとゞくだけくめん十めんしてざらに居つゞけに置たりむりにとめたり男の方でもそのとをり内に居ても氣がくさつてならねへとかんじんのしやうばいも手につかずうハ／＼とばかりしてもちろんきるいハありたけなくしてしまひそのうへあたり近所一家しんるいに迄ぎりのわるひしやつきんもかずしれず出來ながひ月日の事なれバたがひにつまらぬ身の上になりだん／＼とふたりながらさま／＼とそれでハいのちがつゞかねへとりかいをとひてミんなにゐけんをいはれてなるほどこれでハからだがつゞかぬからだがまつとうして居てこそ

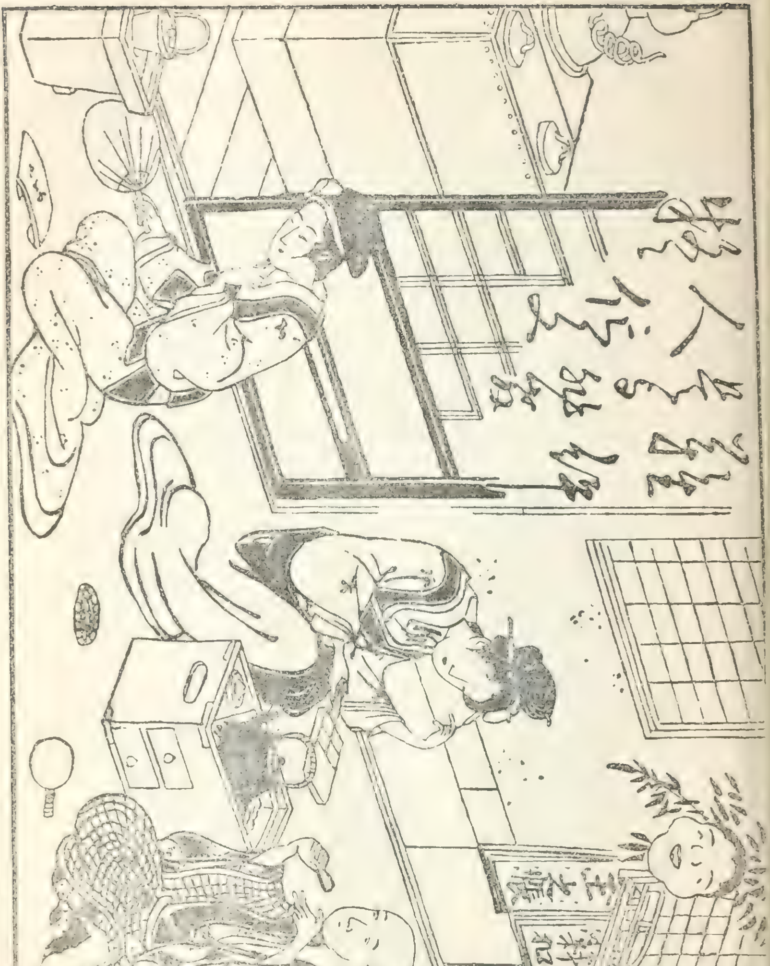
たのしミもありと思ひながらもしよてのうちハまゝよ／＼でくらせどもひとつもとしをかさねて見れバたがひに少しヅヽのりやうけんがつきいつとなくとをざかりさほどまで兩方がおもひつめたれど男も又ほかにおもしろき事出來女郎も又よく世話をしてくれる客がつき月をかさね日をかさねついにハどうかいふはり合でとをざかりする／＼べつたりそれなりに切れるのもあり又ねんのあけるをまつて首尾よくそひとげるも有誠に人の心の花にぞありけるとこれらを聞かれらをさとし浮世のありさまをとつくりとかんがミてことをはからバ國をおさめ家をおさめ身をまつたふするの一助ならむかとまじめになつてしるす

五臓眼　大尾

自跋

一夜の歡樂千歲をのぶる夕べに大盡とあをがれ旦に菰をかぶるともなんぞ鼻毛をよまれてかきのめされん事を憂へむや給ハ時鳥とともに飛ではつ松魚となり猪牙舟のさほをさしミハちよつとあがるもひときりが南鐐一片にして口に太平樂をとなへ鼻にかけ香のにほひをきく居つゞけの客人ハ居ながら內證を知るも馬鹿の道の德なるべしと穗並庵のあるじちとあちらへと小半しきにおひてミす帋のはしへしるす

部屋三味線　全



自序

紫の女御のぐゑんじ物語はほくえけやうのうらに折哀なる思ひをのべ給ひしよと聞へしほどに明石高砂の浦ならねどもつながぬ猪牙のこがで客見るとか聞へし所に住侍けるころおなじ流女どちのむかひ居物がたりぬるがまぐろといふものゝよふに身を一切二切と切賣し侍るとのあまりにかなしび思ひて床座敷のやくなき事ども手紙反古のはしつかたにかきすさび侍りしがたゞこれハ土佐日記なんどのよふに客衆もすなる左禮本といふものを女郎もして見んとてかきつゞりしわらひぐさにこそ侍れ

富が岡の部にすむ

流女それがし

しるす

伊勢物語ハ或曰勢女之筆作或云業平之自記未能決焉云云此草紙ハ妓女の遺稿なる事明し其故ハ妓女より客を想像たる情筆端に感深し他の左禮本ハ客より妓女の情を推量たる說にて珍しからず得之反古中將奇書聊爲奧書云爾

右　　　　無名子校閲

部屋三味線

○附見大意

近頃清人の著す所の艶史多く渡り妓戸娼門中國に蕃衍し纖約に及を知る其書を閲に異域も本朝も人の情といふものハさらに變る事ハなけれども蓼くふ蟲も好ゝの感ハあるなり明の世にハ北里に金陵といふ公の花街ありて廓妓の風俗衣冠正として我東方今の芳原のごとく又金陵につゞひて一箇の外場所あり是ハ風俗俗人に同ふして浮花川の妓兒に似たりされバよしハらと浮花川ハ風俗大に同じからず趣又ひとしからずされども人情ハ一ッにてハアノ〱國もおいらん國もむかしも今も詮るところハ異なる事なしされども又あそびの情がちがふといふわかちもありよしハら客から浮花川客のあそびを見ればまづ初會からまづはだかにて見通しせましとおどりさわぎあをつきりの茶わん酒を見へとしいけぞんざいなもつてあそびとすつたなきやうなれどもよく酒をすゝめ作頭のしかミつらをにこといハせ鑵袋とともに金納をじやらつかしてちよつとあつらへ肴に帳合千金の鬱を散じにきびの出來しわかい者も一寸棚の間をおすミてい南鐐一片の一切あそびに年季十稔の壽命をのべる心地し妓兒も心得ては

やく床へ廻りちぎりきな肩の手拭銅子の湯でしぼりッ丶湯がへりのつらで内の首尾をくるめるなど娯またその中に有されバ金どらはうたねどひまどらをうつ客浮花川にまゝある事ぞかし和哥町の狂迎ももつともの事にて夜更小更に歸る客いくらもあれバなり此せはしなきが呼出し買のあそび優長なるが芳原遊の風流にして翠帳紅閨萬事の禮式備ハり雛の臺子のごときたばこ盆を若ひ者うや〳〵しく捧げ出れバ媚妓の見識高金蒔繪よりも高く秋月の古今よりも優にやさしく上坐にすハる是ぞ浮花川に遊びつけたる客ハ坐しきの内究屈そうにて簞笥の環のぐハたつくハひつくりかへしてさわぐ浮花川の見とうしにしかず唄一くさりいたこ三ッ四ッに讀者一ッの廻ひかゝれバ忽然として雷のおちたる跡のごとくチトあちらへと追立らるゝやいな妓兒の床へ廻るもはやく床をバあけぬ法なれど是をよしハら客の身にハあとより追ハるゝやうな心もちになりかのおいらんの床納りおまんまをたべ用をたしゆつたりとせし床入に暮てハあすまでと客も心をゆるすこそ誠の遊とやいはん是を呼出し買の寄にハじれつたく思ふことにて　いづれがぜいりレか非なるハしらねどモシへぬしはいつそ氣がつまりいすこつちへよつてねなんしもコウおめへハきうくつだよおびをとひてねなはいましもことばかハれど品かハらず風流由人是を論じ此道の先哲よしはらの人情ハつくしたれ共いまだ浮花川の情同ふしておもむき芳原と異なる事をしらずソレよしハらハおもくるしふして御しんぞのごとく浮花川ハ世事のよきおか

ゝさんのごとし予これが論別をなすといへどもひつきやうひぢりめんのいもじと白ちりめんのしたおびとの違ひのミ

の姿も名高きなには津の花めづらしき鳴の円仇なこし障子の大文字に婦清と書たる妓戸のていしゆ請兵へハ長屋での口きゝにて會所の勘定日にも圍爐裏の上にすハりてかゝへの廿人も持てさすがどうらく背のなれる果とて妓兒のあたりも稿ふかく女房おかゞが上手ごかしに部やの子どもを廻す事恰もぞうしがやの風早へいふく廻り壇の内しんかうハ佛だんの線香なるにしられて神棚のとうめうハ燕年のふとんの数ほど二しの宗論の茶鑵ハちよゐが隠の釜よりも光る熱銅壺の蓋ゐはてうせんべいかうの照りを欺く貸本やは太閤記の二編目を置て行小間ものやハ一番のほろの諸入二ばんと間ちがつて持てかへり居候惣菜を買に出んとし妓奴ハ寄場から口をかけに来て門ですりちがふ亭主ハ釣に出女房ハ銅壺六鉢の茶ほうじと丸ゝに達しばんとうハ婆ゝアにて浴衣の引のしをしてゐる梛此子ども屋の二階といつパいづれもとりちらしたるものにて女護のしまの角りべやといふべく櫓ハ開帳場の幟よりもぐにやつき吹がらのやけ穴ハかのこまだらに緋のばんゐりをうバふおしろいいくちよぼとなく腰ばいにはねてハ〔マヽ〕佃田沖の白魚にひとしくうへ木とうがらしほうせん花のいろにうつらふ口紅粉の唇なめし手ぬぐひハ樂や鞘茶の肩にかゝりて鬘ハいつもあふむきたる貌をうつす年増禁ハまたがへしの高まげ。つぶしま

げを好。島田くづしのもゝぢあげハいちをさげ。まおとこ本田ぐるりおとしのつり舟。ひねつてばいおすび。いぼじりまきしんぞう衆ハ大島田のがつくりおとし。けいこ髷にハしぼりばなしの髷結を好天神結ハひら〳〵のごてんぼうをさす。ふくらびんのかた天神。あだにハおとしばら。あらひがミの草たばねに前がミを切らせるありかつこうハその日の出來不出來にして髪結の手ぎハにまかす明てかへる子ハうれしそふに二階へかけ上り口がかゝりて帶を〆る子ハさもいやさふにおりる酒あたりで赤玉をのむ子あれば自ばらで酒をとりよせるありふさひで手紙をかく子あればいさんで鼾をかく子有今やりくりする閙しき中にねこのあごを撫てゐる閒な子有何れうき川竹のながれとてしゞべ顔をしたる蠟燭のともしかけあんどうのふちにのこりばつた油皿に油をとられて苦界のふちに沈ミつるせるぺん〳〵艸ハ蜉蝣の身の一ト切を爭ふはりかへたるミの紙に誰が釵のわざならんじれつたき穴をのこし今朝置わすれたる菅笠ハ咲蓮の傍に有顔ねむげなる苦界の身にも客帳とともにかぞへて見るあすさく蓮の蕾さへいくつ賣る身のはかなきを觀じ明地にからむへちま蔓を見るにつけても月見の夜の祭がくわうとなり客衆に水をとらるゝ身ハ紅粉樓中おのづから情をうつすドツピといふ所ほどものゝあはれもげつそりとなりこうろぎぬかミそ桶のすミにすだきとんぼう北に向ひてものほしざほにとまる頃しも秋のくれさむく子どもハみんな出はらひてあとハ淋しきその中に（かゝへの子におそのといふハことし十七に

て新子のころよりなれそめし六三が事を想やミに殊さらおもきとやにつき何かにつけてつらひ身をくがいのよしミに氣をつけてしんミも及ばぬかいほうハ出居衆にきてゐるじまいの子にあい日のおまつとて枕だこのミゝの根をはなれたる大どしまひとり日のかゝらぬたいくつにかべにもたれてしのびごまに新内のながぶしをひく〳〵 三下り〳〵おのへはいとゞしやくのあげむりな事ばしいハしやんすいかにつとめの身じやとても心に二ツハないわいなチヤント（ひきしまひ） 〔お松〕おそのさんどうだやつぱり惡寒がするかへ薬をあつためやうか 〔おその〕アイサほりの内さまの御かげゆへかけふハちつと心もちがよふござりやすヨ（ふびんやおそのハ元よりもやせがたちにてほそおもてじんじやう過ておとなしき生れゆへなる此やまひそのおもかげもおとろふてかミの毛ぬけていろ青ざめ土茯苓の大ふくに顔たちをしてゐるゆへやミつかれたるすがたハげにゆうれいのはま風にあふたるごとく手ぬぐひをうしろはちまきにしてあせじミたる匂ひぶくろの糸ひもとまもりぶくろをすじかひにほねあらハなるむねにかけよぎにもたれてねてゐたるがやう〳〵おもきまくらをあげうちなミだぐむそのふぜい） 〔お松〕（もともにさつしやり）なんのこつたナ氣をしつかりともちねへナなさけたこつちやァいかねへによその内かハりこんだやミぬひてしまふとおそろしくたつしやになつてどんな濕ツかきでも瘡ツかきのお客をとつてもうつる氣づかひハないのさ 〔おその〕ほんにかへかういふ口舌をするからハぞつびし一度ハ下のわつらひハありうらと兼てかくごハしてるやすが色戀ゆへとハ云ひながら土地

に借金ハするし氣のもめてるやさきけさかゝさんがきて内のやうすを聞やしたにとつさんもよい〳〵になつてさつぱり出入が出來ねへそうだがわたしハ目にあつてるゐしほんにつらひとくるしひとでいきはぢをさらさふよりこんだの病氣をさいわひにいつそ死んでしまハふかと思ひやすがまだ五年ある年ン季の内死んで主人にそんをかけてハわつちやアうかまぬと思ふからホンニ氣のはりばつかりでいきてるやすのだヨヱこゝのおかミさんの心いきもうれしひのサけちな子ども屋などでハかゝへのしきせしかけも縞にして跡でしんぞうしに直してきせるやうな氣ざもなく紫ちりめんや松葉色ハ勤をする内着ておくがいゝ素人になつてハ女房でもつれねへけりやア着られぬものと染ものをきせなさるし外の内でハ惣菜もろくなものをたべさせず田地にはへてる藤豆のよごしやむかごのざぜんまめなどでおそれるにひまな時ハ酒でものミやと旦那さんも氣を付てくれなせへすだまかされると思ひながら前箱から出る子はどの子どもしもよく賣るよと茶屋舟宿業の評判もよひやうに勤る氣になるといふハホンにいまじハはつきれるが義理ハはづされんとやら此はり合ばつかりでつとまるのさ [illegible] それだから商賣やのおかミさんハしちこさいをいつてやかましひばかりでもいかねへハなまたまんざら氣のいゝばかりでもすまねへのさ内のおかミさんなざアこゝがよくッてわかつてるなはるから有がしいゝハなそれはそうといつそからす鳴がわるひよ　トハかんざしをぶッつけてたゝミざんをししやミせんとつてつ

めの先ぐいたこ）〽やねのからすがものいふならバヨたよりきゝたやきかせたひ　おその　ホンニ此六さんハどうしてくれるのだのう張護符(はりごふう)もけふで廿一日早ふからだをたつしやにして借金もぬき年季もぬき半季くらゐはもらつてなりと素人になつて六さんと湯治(とうぢ)にいくやうにもなるやうに世話にもならすにもとでくらゐハさんだんをする氣になつてゐるのさ是ほど迄に思つてゐるのに六さんもあんまりな煮豆(にまめ)ぐらゐハこしらへて病氣見まひによこしてもさのミのろくも有まひにむりな無心をまちがハしてからおそろしくはらをたつて文一ッ本よこしやせんハなホンニ二上りのいたこの通り〽死ンで見せたやおしやかの身なら死で見せましよつらあてにトハよくいつた文句だねへ　おその（おまつのかほ）ホンニおめへハあきれけいるよしかし六さんのやうな男にアヽおもハれてハ誰しもまよひそうなもんださぞおめへハ氣がもめやうヨロめへなら氣めへなら何そつのねへ男だものイタコ〽せじハよくつていきわたりこれではれねバききがむのトいふものだよ　おその　なぜだねいなぜかあハぬと心ぼそくさびしひやうでゐてまさかあへバたくさんそうに足のちかひをゐけんしてイタコ〽世間ンわたらバ身を大せつに人によなれて世事をよくしトいふいたこのやうに身につまされやすよ　お松　うさアねへその女子共衆のほれる客人といふハどんなものだねへ　おその　よびたひと思ふ客衆ハきつとこねへものさ誰しも覺の有事で初會ハあだゝとおいゝ男とかおもしろそうな所にほれやすが末ながく出て見れバちやかしぼつかりで

思ひの外もゐがなく男つくでも腕つくでも金つくでもミヽつくでもなくかハゆくなるもふいそのつきあも心いきばつかりでござい　すッわッちハ是でもこの性でたとへ三日なり共ひとつになる氣で出世の事もおもハずふりと見こんだがせいごの寺け阿彌陀如來お釋迦さまおおおぼ二親のいけんでも思ひおへしのなくゞ女のならひで罪がふかくなつたもいやさらおもへバ六さんもうんのわるいのさ　お然其はつの流すなさんとおのへの事ハ湯屋でもきんでいやうばんするわきゝかふハ噂おもしかかふと思ひやすがこつてどうらくなすゐけになつちやあおかつていい事ばつかりでねへ　ミヽ六さんとおかへとがなれそめのはじめからはなしてうさをはらしねへな　〔おその〕わすれもしねへおとゝしの八幡さんの祭の朝の事よおそろしくよひきつてつかれてねていやしたが下へおりてきぞうすいをこしらへてたべてゐる所へいんでんと湯園からはなしで翌倍の日がかゝつたとおもひなさいし共時間あがふつ／＼いつて／＼つらいからさしをついて出あへと思ひやしたが傍におかみさんがあらッたからふけいきなと思ひこそもいつこくもいはれず引すりをかたつぱんにはいて二階へ出た所が大一座の其中で六さんの顔の盃ゞわたしにまつたが惡ゐんのはじまりさ　ソレその時まんざらでねへとおもひやしたら何か氣持もよくなつたやうでどなたもこつちへおよんなさいましと女衆のいつた時たつて六さんのうしろにすハり氣にすいた濁者がはたへも見へたそふでこんどハおたのしこたのきまつたのと一座の女郎

樂にいはれたがうそにもうれしくホンニ性のあつたといふものハおつなもので床へまわつても氣がおかれずつとめる氣もなくつい夜があけてその朝ハ早歸りで下へ送つておりそれから二階へかけあがり床へはいるとまわしが床を揚にくるもしらずたわひもなくねるものさねへ［お松］ウヽそふさ大キに［おその］所がモシ何か心ならねへやうで寢つかれずいつそ手紙を出して呼にやろうかと思ひやしたが初會やそこらでばからしいと思ひ直して呪をして心まちをしてゐやしたら一日おいて三日めにひとりで裏にきなせいしたその晩四ッ明ヶに用があるとぜひ宵立に歸りなはる所を無理留にして泊になりやした裏の事で何もいふ事もなくいひたいとおもつてもモシほれた男といふものハ何かおもしろいやうでゐてこわいものさたがひに口數もいやゝな事もいはぬやうでも何か三年もなじミこんだやうにわかつた心いきになりやしたあいて内へ歸ると何か落したやうにうつとりとしてゐたり思ひ出して心おもしろくなつて心ゐきのいたこなひいたり外の茶屋から口がかゝるとしゝしんじつ出るがつらく富岡へばかりはいりこんでゐたくほんに富岡といふとおそのさんハいさゝで出やうがちがふよと部屋でみんなにもいはれるし六さんときくと飛んで出るやうでごぜいすにあんまり來なはる度にあいてばかりゐてもひまなようにおもはれうかとおもつて折ふしハ女樂へとをして外へ出てゐやすが今あきやすとうそをいつてつくつておいてくんなとたのんでわざとおもはせぶりにおそく出たりそふかとおもふ

と一座のお客に外へでもいつた事をきくとしがミつきていやうにはらがたつて〳〵ひとり氣をもむなどハ女房氣どりのやうでおかしいじやァねへかへ又一座の多いもよしあししさ初手の内ハ賑でいゝやうなもの〻いざこざやもめができてつい中われがして長くハそろつてこねへものさその中で六さんハひとり引殘つて折のわるい晩などもわたいをなじミとたてなすつてあすの跡もつけておゐてじぶくりなしに名代をとつてついぞ此事でせわをやかせなすつた事ハござゐいせんよホンニ初手の内六さんハすゐつこい人だとおもつてゐやしたが舟宿衆迄いかれぬ内かけもつてきなせいすやうなちいさい氣ぜんさ夫だからきげんのいゝばんハともに心おもしろいやうでふさいでゐなはるとなぜか氣にかゝつてあんじるやうになつて此ごろではちつとおそいとよびにやり逢つた所がやりくりのさんだんばかりで青い息をつき顔をつき合してまじ〳〵して夜をあかしやすよどうらくといふものハ初手の内ハ浮氣で見へにもする氣がありやしたが今でハミんなにきかれてもナニ六さんの事ハ末のせわにならふの色の饒のといふ賜でハねへが内にゐた時ちつとせわになつた恩があるからする事さとかくす氣になるといふもつまらねへからおこつた事さ心持がこふひがむものか女衆がちつとしかたでもわるいと六さんよりわつちが腹がたつてくやしくなるもぐちゐへさ六さんだとても遊び過したあげくだもの夫だからわたいぶ船宿衆に迄きげんをとり折ふしの心づけもくるしい中でしておきやす是ほど迄に氣をもむに六

さんが醉て平氣でいられるとしミ／＼とはらがたち勝手にしなとたまさかにいゝじらけにしてかへし
た跡までおしみもなくあやまつて呼にやるのもくやしいものサいかにほれたがひけだとて此やミ付の
先月中病氣で枕をひいてからアノ梶の長兵衞さんもやつぺしいぢにかゝつて來なはるのさやかましい
客だが爲にハなるから押て出たのもさんだんでそのばん六さんをせかれてほりものをけさねへけりや
アならねへわけになつてみれんらしくけしてハ見たがしんにかなしくつて見通シのくらい所へはいつ
てころ／＼ころげてわつちやア泣やしたよ其ばんちやんと六さんが來たとおもひなせいしナニサお針
さんにしやくられて無理ばかりいゝなはるからわつちやア無理酒をひつかけたらおそろしく咳が出て
氣持のわるいになんのおもしろくもねへ死にかゝつてるらアなといゝやしたら六さんがかんしやくで
嶋田も氣がつえへといゝさま藁束のまん中を二本指でひつくづしおもふさまふミのめされた時ハ長兵
衞さんにさすられたよりハよつほどうれしかつた［お松］イタヨヘ　ぶてのたゝげ（ママ）のしめろのとかもやは
じろじやあるまいし」お客にたゝかれて見ねへだがかんにんするものかそのたゝかれるが色となれバ
うれしいからおつだねへ　［おその］ほんにそれハそうサ六さんも氣どふらくな生れだからどこといふ事
なく遊に御なつたそふだがわたいを嚊なつてからこのかた是を遊びの打留と思つてるなさるやら外へ
つき合にもいきなはる事をさゝやせん是ばつかりをわつちやアもしやの末にもとたのしんでおりやす

よト（うれしなミだのはら〳〵とつやなき髪にふりかゝる）お松ヲヤ此子ハいつそ涙もろいよわつちに迄もらひ泣をさせなせいした娯ミもてへけいにしておきねへくろうだよ女郎衆もどふらくで土地所へ借を出かして倉替をした所が知らねへ所でつき廻されへこんでゐるもいかねへものよそれだからわつちらあ色と土用干ハした事ハごぜいせんおそのうそをいゝねへおめへも色ゆへ二度のつとめじやあねいかへお松なる程懺悔はなしだがね个の亭主ハ板前をはたらいてゐたのサ庖丁がきいてゐやしたからどこにゐてもいゝ錢をとりやしたがいくらもらつても附合で身がもてず今じやあ結者でおゐやせんその時分旅人衆にいゝ客人があつて問屋へ仕切を取に荏土へ出るとわつちを仕舞通しにしておくのさしどう田舎へつれてゆくやくそくで足のねへ顔で年季をぬかせ圍れてすつかり着込兒のせわ迄させて突出してしまつたのサその譯で今此苦勞をするもいゝすいきやうだねへナントお客の噂をするも久しいものだがわたしが客衆の心意氣になつて遊びのやうすをいわふからおめへ女郎衆の心になつてすつぱりとはなして見ねへなおそのなるほどおめへハお客を見分るがじよせいがねへから此客ハどのくらゐな客衆といふ事がわかりやしやう先わつちが子ども衆でいわふならホンニ客人ひとりがてい〳〵じやあいかねへもので此客衆ハ長くもくるだろうと氣をゆるすやうになつた時分外の茶屋に出てゐてその客の來た時一寸逢にゆき名代のしんぞう衆を出しておき壁と見て思ひの外いゝとしま衆が其しんぞ

う衆にお客サとられる事がありやすが譬とりにくいむつかしい客にもせよ捨にくいものでこんな腹のたつものハねへものさねへ　お松　その又じよせいのねへ客衆でいわふなら折がわるく外の茶屋に出てゐる時なら娘分や女がしらせずにおゐてハ跡でアノ子にうらまれやすからぜひ借てこよふといふものなれど借た所が一寸逢にくるばかりで畢竟おもはせぶりに氣ばかりわるくするやうなもので名代の子ハ内のしんぞうしかいうれ板をひつちよつてゐる子を出すもんだから出る子もその氣で名代なら寢るが當りめへとおもつて寢るものでお客ハ腹もたゝれずおもしろくない目をするものだからなじミのとこへさつぱりとしらせずに初會の顔でいゝ中どしま衆でもよんでなじみをじらしてせつこませるがその晩をおもしろく遊ぶといふものサしかしなじミをなじミとたてゝ名代をとつて寒い目をするハ情のあるお客サ又女郎衆の方でもあつちのお客を早く歸してあした參りやすよといつておいて夜が明てもこねへ時ハ客衆も折のわるいをじぶくるハ無理としりながら腹がたつのさ　おその　それハあのなにサこつちのお客が早く歸つても向ふの茶屋へいくがつらくなつてつい顔へ日のあたる迄寢すごして向ふのお客ハ來そふなものと腹を立てかへつてしまふのさほんにさむいあさ先の茶屋へ起てゆく時足のきれるやうなつめたい目をする誰しも覺へのある事でとんだつらいものだが夜が明てからやほにアノ子をよびましやうかと女衆に聞せずとも小早くこつちから押かけて名代の子に斷てさけてすぐに床をか

へさせるが十人が十人お客の承知するもので朝直しになりきげんのいゝものサ夫とも客衆によつて高をくゝつていかねへ事も有やすがお客に腹をたゝせるハ得てハ折のわるい晩の仕内からおこる事で爲にもなる客ならその日すぐにあやまつて手紙を出し茶屋からも若いしゆを迎にやり夫でもこねへ時ハ舟宿迄迎にゆき船頭衆を内迄見せにやつても用があるの留守だのいやだのといつて逢ねへ時ハあんまりせつこいのないのだから舟宿へ手紙をおいてくるのサ　フミ〳〵おまへ様御しんのほどハいよ〳〵我身事御見すて遊し外〳〵へ御入らせもやとしミ〴〵くやしくいつそしんでしまふとかとりころすとかたゞハおかぬと書てやるとてゐげいな客衆はきつとかへるものサそれでもこねへとじかに髪をきつてやる子があるねへこふいふ日にハ客一人すてるにおしいもので惜を折て取とめて一年となじミこんだうへ何ンにもしてもらハねへでこられねへじやアうまらないよネイ　【お松】仕舞を付ておいたお客ハやほに早くもこられぬものなればわざと手間どつてくるものだが身じまひハちやんとして待てゐるがいゝのさお客もなじんで呼ふと思ふ子なら舟宿迄ちよつといつておきさへすればたゐ事だから待酒を付るがよし四明にきて思召の子がない時ハ不興なものさ晝仕舞のお客ハ暮迎に歸りそびれてぜひ直しになるものさ閒を買も同じ茶屋に仕舞でお客を待てゐる子なら忍ぶ戀とかいふ所もあれど外の茶屋に出てゐるを借て閒にするハお客のみれんさきの茶屋からハ取戻にくる何かせわしなくわかれて跡で甚

者を買て歸るもはりやひぬけのしたものサ［おその］くると二日三日ゐつゞけをする客衆ハかならず足の遠いものサ鼬鼠の道をきつたやうにわすれきつてゐると又ぶら／＼ときてなじミハなじみにして外の子も呼ず四五日もぶんながすあまり長留をしてもわるいからと子供衆もかゑんなさるやうにすゝめ迎舟の追かけが來たり内からも用があると手紙がきたり一座か友達衆が迎にきてもずるけて猶かへらずそうかとおもふとどふいふはり合にか一文瓜の蒂のきれたやうにふつとかへるものサその遊も起て藝者をよび元氣よく酒をのむかとおもふとつかれてすや／＼寢たり四日も五日も只うか／＼とゐるもの是ハやけになつたといふ客でもなくのろくなつたといふ客でもなく酒飲か却て女房持などにあるものでこふいふ客衆はとりいゝのサ居續のお客をとつてゐる内ハ手めへのからだのやうでらくなものだがその跡で外へ出るがとんだつらいものサ［お松］又酒飲客の座敷の長いにはひざつこへしびれをきらしておそれるよなう［おその］いつこう下戸でたべ物へ手をつけねへような客衆も座敷をするものがこまるねへ［お松］いつていゝ抱と自前とハたてが違やすよ抱の子ども衆ハてめへハもらハずとお客にはたへ心付をしてもらつて茶屋で顏の通りのいゝようにしたく自前じやア何ンの此土地ばかりじやアねへといふ氣が有からてめへえとかくもらひたがるのさ玉なし用事を付て荏土へゆくとても舟宿のかゝさんの所へ煎餅袋でももつてゆくような世帯じミた事もあり他所行の外むだに用事ハつけねへのサお客が待立

に寢かす氣で通にして歸んなはる時なぞハ抱の身ならすたゞに其茶屋へ寢る所を床をあげさせて又外へ出る氣や朝參りの客衆の初會などにも出たりするとお客が足さへ近く數さへ重ればいゝかとおもつてアノ女郎衆もいゝ年をして慾ばつた杖でもついて梯子をあがればいゝなどゝわるくいふものだから自前をかせぐほど人の氣がねをするものはござゐせんによ心やすくは入込茶屋じやアつかつてもくれるが自前といふと合持をする日（ママ）にハ土地の客衆を他所へひゐてゆく子があるものだから抱の子ども衆のやうにハどうしてもつかわねへハナどこの茶屋でも番頭や仲居に上手をつかつておかねへとまんざら出直りになる所も外の子を出すようないおかもあるのサ　おその｜アノ迎がかゝつて帳場に直しになるかを待てゐる時一座ハみんな直しになつてひとりさがるハ恰好のわるいものさネイ出居衆でかせぐにもうゐて（ママ）へると床屋や髮結さんに借が出來やすい主を落したり腮をひかれたりして見ねへ勘定迄に商內を仕詰にやアいかねへわたなたんぼ腮を出すといつてらおまんまも內で斗たべちやあかゞびのめへえおかしいから茶屋でたべるにもしろなんぼなじみの客衆の前でも直し肴にちやづけがやわんのふたもあやまるやつさネイ　おその｜ほんに抱への內ハてめへのからだでねへようなものでいつこくもあるのさ夫だから和哥町などじやア四ツ過の初會などにやあ蟲がかぶるの酒に醉てゐるのと我まゝをいつて出ねへのサ表神樂などでもさしをついて茶屋でやかましくいふと下駄をひつさげて子ども屋へかゑつて仕まうよふに手前からさがるやうな氣つよい子もあ

ゐそうさ「お松」そんないつこくな事ハふせじやあないやせん夫だから芳原から見ると大きにこつちらハ勤いゝ所さ客衆もふせと呼出シとハ遊びのたてが違ひ抱と自前はかくしてもお客の目にかゝるのサ「おその」ホンニわかりやしようよ抱の内ハ見へが多くお客に手前ハもらハずともはたでよくしてもらつて娘分や女衆にたてられるがうれしく正月の仕舞も鐘目送札を張りあた歯を染るに鉄漿をいくらふかして揃の浴衣をいくつ出したアノ子ハはたらきのある子だと出た跡でも此土地へ名を残したく思ふものさモシ客衆の身にはとしま衆のおゐねへ女郎衆ほどけつく當りが和らかで買いゝよふなものだろうネイ抱より自前の子に取くんでハお客もたてゝ引が出来て抱よりおもしろい所がありやしよう「お松」どふしても至らねへ内ハお客の一人リや二人リしくじつたとてナンノどふするものかといふ氣があるのサ子ども衆もお客のすきになるようになるとばゝあサ「おその」しゆすの袴のひだとるよりもお客のきげんがとりにくいといゝやすがお客より部屋のつきやいがとんだむつかしいねへ「お松」わたいらが部屋などハ子ども衆がみんな人がいゝからナどこの部屋でもよくもめのあるものサかゝゐでもしてもらうとそねまれるし仕着ばかり着てゐて見ねへはたらきのねへよふにわるくいふし浴衣などをちやんとこしらへておいてもくめんのわるい子の出来そろわねへ内ハ着ずにあつい目をして待てゐるもホンニ苦界とハよくいつたものサだしつこぐらいのつき合ハいゝが櫛箱をかきさがして油を遣れたり笄

をおつぺしよられたりするも氣をよくお心よしにしているとほうずがねへわなてめへのいもじがせんたく前だから人の裁立のいもじをとりちがへたふりでとはりなしに〆て出る子などがあらあなぢきに茶屋へいつて床から呼出して〆かへてくるやうにしねへと道なしサいもじハ子ども衆によつて足さきのかくれるようなをすくもありくろぶしぎりなをすくもありいもじをはきちがひたハへんにきざなものサ　おその「又藝者衆も苦界だねへ見番がひけてから出ると寢込から出るものハ仲間でよくもいわねへものだが女房子をもつた太夫衆ハ慾でもかせがねへけりやあならずはなり衆も自前をかせぐ子よりハ割がわるいからせつねへそうだネイ一日寄場のいろりのはたに欠かしてゐるがあるかとおもへバなじミの客衆で二軒から一度に口がかゝつて廻りきられねへでそんなら誰でも呼ふといふ客の所へひきな藝者衆が替りに出るのハ商賣づくとハいゝながらひけたものだネイ　お松「ならんでゐる茶屋の内でも賑な日もあり淋しい日もあり藝者衆のお客の氣に入もどふいふものかわかりやせんよ能賣もその日の運サ一ツ内の子どもで仕舞があつたり買込になつたりしておつけへされねへほど賑で取かゝんだうれてしまう中に部屋に獨居てゐるハへんちきなものさホンニ勤をしたものハ獨でハはだ淋しくて寢つかれねへものだといゝやすが違ハございせんよ　おその「モシむだに藝者を買ふ客ハいくらもあるがはたへ心付をするお客ハねへものさネイ　お松「客衆といふものハはたのいふ事ハじやうがこわくて子ども

衆のいふ事ハよくきくものでございすが無心ばかりハきくようできかねへものさ　おその　新子の時分廻しや茶屋の若ゐ衆がアノ客も何度くると思ひなさるもうくれてもいゝ時分だからもらつてくんなせいといはれてもお客に向ッてかし場にやつてくれろとか廻しにちか付になつてやつてくれろといふ事ハどふもいゝにくひもので下ではたらきのねへようにいはれるもつらいねへ　お松　土地によつて新子やあまい子などゝ見ると朝早く客衆の歸つた跡に子ども衆の寢てゐる床へ起番をした若ゐ衆がきてくどく事があるのさ二度か三度恥をかゝせてもきかねへ時ハ客人を引留てあかるくなつてから歸つてもらふ事がありやす是を朝發りといふそふさ　おその　モシ座敷をする娘分や女衆ハお客の見譯が第一だと申やすが子ども衆もお客の見よふがあらふねへ　お松　客衆ハ百人百色でございすが先いつて見よふなら藝者買といはれる客ハ大方酒のみ客にあるもので遊びも大風に見へて床へはいるとすぐに寢てしまつたり色氣がなくていゝよふな物でございすがよたんぼうに醉れたと床でねてしまうお客ハ女郎衆の身にとつてハうれしくねへものさ極て約束した事などもあてにハなりやせんがいつもにぎやかに遊ぶお客だから來なはるとはたからも持あげるこふいふお客ハいやみなしに介抱さへよくすれバきけんよく無勘定に藝者をいくつも買てぜひ直しにする思ひの外世帯持やいゝ年をした番頭衆などにあるもので其かわり足ハ遠いのサこふいふ遊びのはだで目鼻のあいたお客たら揃の前だれも出しかゝへの二

三度もして仕舞の樽醤油を舟宿へつかわせたお客サ子ども衆ハ替り物茶屋ハなじんでかわらずきさへしておけバ暑氣見舞の三本入の臺つきの扇寒見舞に越後屋の砧まき巻煎餅の二重折女郎衆からも水引でむすんだ松葉のし正月の初文を出す位ならいゝお客といふものサ〔おその〕モシ亦いきななりをしてゐる客衆ハ大方色仕懸にしたがるものだねへ〔お松〕色身な客ハ床へはいるとさきからひつからんだ事をいゝ出すものサこんな客衆ハおそろしくいやゝをいふとも氣の合よふにして何かうれしいように見せ枕の下へ手をさしこんではなさず夜明前に多葉粉の火をとりにいくなどの仕内を承知するものサその夜も寝ずに勤てかへす此客ハうぬほれが深くつけ裏にくるものさつけ裏にきたお客のなじんでくるためしがねへものといゝやすがこふいふ客のくるよふにするにハ手紙も早く出すのサいまだ御なじみもなき御中へ文とハ御つもりのほども御はづかしく候へ共せんし御わかれのふしよりあまり／＼御なつかしさのまゝ人して申上るなどゝ書てやるとその文を大事にしまつておき友達にも見せてあれがとこへ々べいきやしたがこふいつたのあゝいつたのどふいふ心いきかしらんとかんがへるがたのしみで見へに一座をつれてきてもてるふりを見せたがるよふすやら一座へも世事をつかつてつれてきてもらうよふにたのんでおくと其一座もうらやましがつてせつこませるものだから段／＼足が近くなつて是ほど通くるにまだわからぬと少しハ足の遠い時分謎引でもせねバならぬ場になつていやゝをやめてし

んになはなし合にすると粋ごかしになつてとふ／＼床の入替時迄ハ此客をにがさねへのサ［おその］又色身ハたいがきいたふうで見への あるハどふした客衆だねへ［お松］そのおれハ色気がないと見せるがやつぱりその客の見へサ見通シに大あぐらをかき酒の口などをきいて見てわるくいゝ藝者衆や女衆を口ぎたなくしこなして床にハかまハねふうで座敷がながいのサどのはり合にかぶう／＼をいゝ出すこふいふ客衆にハ小間になつてまハされてゐるがこつちの手サ又やほにぶう／＼ハいわぬといふ風な客衆は初會などハ盃をさばいてよさぎよくを一座にやりなどしつたり（マヽ）ぶりにもあなどをさばくのさこふ客の苦界の情を知つてゐる人がに（マヽ）た山かをためすハ床へ廻つてから一座の床にはなしてゐるハ半可てまへの床にやほに居つくハ本の通り者でございす［おその］ホンニお客ハお客らしいがいゝネイ粋らしい顔をする客ハわからねへのだよ譬ていはゞ商賣柄の旦那衆が外へ遊にいきなはるが素人衆より却て遊が下手で上手の手から水がもりいゝ水をいつたり粋はだけつく野暮になり即才ないほど遣ひ過すらのさその替り譯を知てゐる丈する所でハきつとするのサむちやなお客にあつてハしかたがねへわな［お松］くいきわたつた客衆といふものハ二三度も來て廻しにもかつきになり先河岸者にやり夫から座敷をするも其分で義理や女衆にやるのサ一度に惣花をするハ大義なものだからないしよでくる度に一人ヅヽやる是を盗花といふ所もあるそうさ直しになつて藝者をよぶ所を料理番にやつて蟄者をするよ

うにおだがなければじよさいのないよふに取扱れてはたからそだてるものだから子ども衆もよくせねばならねへのさ藝者がはいりこんでにぎやかな中に獨でさみしくしてゐても女衆が廻つてきてゝとあるからでねへで座敷をさばき藝者を買も商直しや當達の日用の客ハどこでもふんざを祀ものだから其時ハ大家の四五枚もよんで向から三味線を入ると隣の茶屋へもかつこうがよくけふハどこもにぎやかでございますがおつゝらお内ハなぜ(か)さみしいよなどゝいふ時ハ藝者をよんで大さわぎにするとふさいてゐた下のおかみさん達が氣持がよくなつてきんなかふつて座敷のねてるものまでゞ藝者ばかりいくつになつたの由へつれていかうのといつてもはたでうれしがらねへものでお座敷もよほどきてはたへする事をしれへ客衆ハ顔がたゝねへでよくねへものさたとへまんざらでねい客にもしろそのねへうちハ文などもかされねへのさ〔おその〕モシへあの初會に出て此お客ハ外になじミでもあるかと番頭衆に聞といつていどこの何屋の内へいかしつたが今じやアいきなさらねへなどゝいふ是はよくさせまふと思つていふのサ娘分や女衆なども目についた客衆などハ床へ廻る時モヽおたのみ申やすなどゝいつて屛風をひゐてゆくのサ今まで誰をよびなせいしたとお客に聞たとて正直にいゝなさるもんでハありやせんがてへげへ客衆のやうすハしれるものでその中に眞ほれてくる客と此客をためしミにこばふとおもふ客ハないものでございますねへ〔お松〕實さよつてくる客と何か内に氣のもある事をいつてやれ

になつてくる客ハ同じ事でつまらねへといふ胸があるから間日からもしれるものサ身をうつ客衆も初手から迷ふもんでもなく先初會に一座の中でその客の氣にすいた子ども衆に盃がなつて床も心おもしろく遊んで歸り元がいやでないゆへさそハれて二三度ぐらいきてつい一人リでもくる氣になりもふ是切〳〵とおもふ内に何かひかれぬ義理達引が出來てかわいそうによく勤るといふ氣がおこりいつとなくなじミこんで初手ハあだな遊でわかつた客が何かうらミつぽくなつて何の事もないにいゝつのれバその子ハいろくなつたと見ぬいてうちやつておくを腹をたつて茶屋舟宿にもあたりのあるようにかゑて見たり子ども衆もいくたりかへて見ても元木にまさるうら木なしとやらでどの子もよくしてもおもしろからずとかくなじミのとこが戀しくなつて又其子の所へきつとかゑつてくるものサ

おその　やけになつた客衆ハへ

お松　座敷の内からしれるのさ連もなく獨遊びて足の近いにしてハさのミ子ども衆にもかまはずむり酒をのんでつけけん氣を出してもどこやら理に落たよふになり見へもへちまもなく亂髪などで四明に來るかと思ふと朝がへり時分にきたりして床では何のはなしもなく氣くたびれて寢てしまう是ほど迄に身をやつしてくるものをよく〳〵のてうさいほうならしらず子ども衆もかわひそうになつて歸した跡で茬土へ懸をとりにゆく女衆をたのんで舟宿迄よつてもらうに客衆ハ内へ歸りそびれてこつちへ又こよふといふ所を舟宿のかミさんにあまり足の近いをいけんされてついつかれ

寝ゝに音曲のあんかに煩懐をしてもからだがだるく動気がして耳の鳴がいたこの三絃のように聞へ何やら苦勞な顔つきになり目さへくぼんでわれながら面目なく友達にもかくしてはなさぬようになると遊びふしこつたといふもので所謂素見ゝつたけいきがけの駄賃といふれうけんが出るのサ茶屋子ども屋でもながい正月ハないよふにせきその客衆もおもしろいでハなく猶〳〵やけになつてくるのだから出るすハむつかしいなものさ遊びの金といふものハ無理をするものゆへ夢中になつて鼻先のかんがへはく勇ましうちは思ひの外算段の出来るものなれど狐の落たよふにさつぱりとしまつた日にハ默てきましゝとまた借金の催がもとになるので是も一生の穏高價學を見たとあきらめるより外ハ客人もねへいさ　おそのそれは情を賣がこつちの商賣だから尋常にもなりやすめへがそシ床はどふすればよふございしようねへ　お徳それより一に顔二に床三に手と申やす顔のいゝハその子の生れ付で是にハかなはぬようなものゝ　お客をころすにハしんに妙があるのやす手のあるハさしてもない子の催促して客をとるといふものサ今でハ　よしにしてハはやりやせん基稲和哥街あたりで初會に帯をとくとふにないやたにも道理ですね　おそのあの子ハきりやうもいゝがなぜかお客がつかねへといふ子ハなぜだねへ　お捨それハ　お客の顔を見る癖のきつとある子サ

ねへと客衆にふつて何のないように思ふもの[illegible]腹のけしそ[illegible]欠のいほつた所へ[illegible]をはつて

おくに　おかしく困つてあいそのつきるものだから客衆を見て　はらねへがいゝのサ頭痛肴ハかまわねへ　おその 姉鑓二日ハみんながたしなゝやすが又鍋炭を湯へほだてゝのんで出る子などがあるそうだねへお客といふものハ内へ帰つて神棚へも手を上ゲなさるものだから行水をことわらずにしてハこつちの罪になるねへ　酒のゝの出来ぬ客又　ねへうちハ氣がおかれるねへ

お松 出番の衆や顔ににきびのできてゐる勇な客人で　廻るより早くしまつたハいゝものゝにハいやだねへ　おその 子をもたねへとおゝふせいかな女郎衆といふ女郎衆にもいさい子のきらいなものハまゝにねへいさ　お松 てうづに出て　あけばなしににしてもお客にやかましくいはれる譯もなく　事ハ茶屋舟宿衆もいふ事ハできねへものサ　おその きゝがわるいねへ　お松 わけがごぜいす何ぞに凝つてゐる人か何か氣にふさゝい事のある人か久しく逢にこなんだ人かサなじみは　おその

お松 そふい

（トいふ所へきたる）通しアイお松さん富岡へ出ますおい
そうだからおはやくよ 宮迎の八幡鐘ボヲン 両人嘸やはきやり

二冊 畢

○附言

夫黴瘡下疳便毒結毒之病近世尤盛而貴賤男女罹之者。十居其半是和華一轍。蓋承平酣歌之都會人人樂安佚内則膏粱膩味。常充口腹遂生濕熱瘀血外則沈醫柳巷花街以動蕩淫火一釀成此病。遂傳之娼妓男娼則娼妓男娼之傳諸人也。不知其幾千百或傳之妻妾或遺之孫甥而終身爲癈痼之疾豈可不恐謹哉予非醫家是雖非所關姑記爲世之鑒戒噫房勞野合者深戒之戒之

一名曰
杯觴宏 遊僊窟烟之花 全一册 同出版

揭花
水性 浮華川容氣 全一册 同出版

見通し占　全

序

聞說五斗兵衛ハ。乾坤ふたつの間をぬけたる。亮鐵炮の奥味を悟り。今十遍舍主人ハ。聊種が嶋をもとめて。人の善惡吉凶の黑星に。的中せる叓を勘考す。於是田街偶座法印。これを鹽焇くさしと嘆息し。大物浦の法印ハ。宛捨方なりと嘲哢す。當るも八卦。不當も八卦也。只戊午(ママ)の新玉藥に。一とせの筒口。切てはなせし空踊弃(ママ)。あたりはづさぬ當變卜の十露盤龜卜。ぱちくはねるも新しき。趣向といふ證人に。引出されていなミがたく

江東亭濱風誌

午 孟春

小序

サアノ丶だんなも御しんぞうもなちう方のこらずかまのまへのおさんどのハおもてへしりをそこにおいてはやく來なせへコレ〱長吉てめへもるねぶりをせずと爰へこい〱この本はひとりですら〱よむ本でハねへサアめいめいのねがひのぞミなるかならぬをうらなつてやろふ先たとへバふじの山

にあしをふんのばしてつくバ山をまくらにしてねて見てへといふのぞミだれが心にもそんな事ができるものかといふだろふが是心安くできる事也くはしくハおくにありさるによつて占考にあらざれバ成就ふじやうじゆをわかちがたしおさんどのゝ願ひハ芝しばいの狂言をあへものにしておまんまのおかずにしてへといへバ長きちハ又屋たいミせをそふじまいにしてへといふだろふし若旦那や手代しゆハよし原中のおいらんをたまごとじにでもしてくいてへといふのぞミできるかできぬか先くちあけにうらなつてやりませふエヘン〱

▲うらなひやうの事これハうらなつてもらハんといふ人の年の数とその月と日と時とを合せてそれを八ヅヽはらひのこるかずにてうらなふたとへバ三十歳の人が二月十五日の七ツ時にうらなひをたのまバ先其人の年の数三十と二月ゆへに月のかず二ツと日のかず十五と時のかず七ツとつがうゞて五十四となるこれを八ヅヽだん〱はらへバ六ツのこる六ツのこれば☳この卦なりそのところにてねがひごとのよしあしをうらなふもつともそのねがひハなにといふ事をあてるゆへその人ハそのねがひのしなをいハざるがよし

▲八卦之変

正月のうりものまもり本尊の佛ハやめてふくのかミにしやした

月一ツのころ
月二ツのころ

日 みツのころ
日 七ツのころ

☵ 坎中連　男願ひ叶卦也

此願ひハなんでもうつくしい。小まちかやうきひかといふよふな。かねもちのむすめのところへ。むこに行たいとののぞミ。それもせふばいのあるところハうるさいから。あそんでばかりくらす内がのぞミ也なるほどよくげのないのぞミ。ずいぶん神ほとけをしん〴〵してじせつをまつべし。ひよつとしたら。ゆめにミる事もあるものなり

☵ 同卦　女ねがひ叶卦也

この願ひハ宗十郎か。八百蔵が。おまんまのくいさしをたべたいとのねがひ。ずいぶんてがるくかなふ事也まいにち。宗十郎や八百蔵がかどにたちて。おあまりをいたゞかしてくださりませといふべし。もしまた。いぬのごきにあけてあるをつまミくいてもよし。そのうちにハ。ひよつとしたら。ふたりのくいさしたのもあるべし

☳ 震下連　男願ひかなふ卦也

この願ひハ。たかなハのぢめんをうミともにかいとり。ふじの山をとりよせて。うミのうちへなをし。つきやまと見せかけ。せんごくぶねをせんすいにうかめ。ざしきにねころんでゐながら。くじらをつつてあそびたいとのねがひ。ずいぶんこゝろやすくできそふなことだから。たけ田のからくりとそふだんしてごろふじろ

☳ 同　卦　おんな願ひ叶卦也

此願ひハはやくていしゆがもちてへといふねがひ也たとへおとこハ。かさかきでもかつたいでも。目からなミだがでよふが。よだれをたらしてゐよふが。くちがくさくつても。わきがゞあつても。それにハかまわず。むせふに達者(たつしや)にさへあれバ。おとこハどんなろうずものでも。とんぢやくハないとののぞミ。ずいぶんこのねがひハかないやせう

☲ 離中斷　男ねがひ不叶

此願ひハ人にむせふに物わすれをさする藥がほしいといふとんだ願ひ也。かけ取がきても、此藥をふりかけるとたちまちかけをとる事をわすれ。其上よそから取てきた、錢金も財布ぐるめにわすれてかへるよふにしたいとの望ひとりが一兩ヅヽわすれても十人で十兩。百人で百兩。たゞもふかるしごと。しかしこんな願ひハやめなせへ。ひよつとそのかけ取がかへる事をわすれると。居候が大ぜいできやせう

☲ 同卦　女願ひ叶卦也

此願ひハ。なんでもていしゆと。たつたさしむかい。たなをもつて。あさばんおまんまのかハりに、ごほうとながいもと。たまごばかりたべてゐて。そしてよるもひるもねてばかりゐたいとのあつかましいねがひ也。ずいぶん。そふしよふとおもへバ。こゝろやすくできることなり。しかしてんぼうの

ていしゆをもたねバ。すゑながくつゞくことなし

☶ 艮上連 男願ひかなふ

此願ひハ何ごせうばいをはじめ。もとでのかゝらぬしゐ物を。ねをたかくして。そのくせいくらもうれるよふなあきないがして見たいとののぞミ。あんまり。ゑてかつてなるねがひなれども。じきさまかなふねがひなり。そのかはり。ミなしゐものをかけうりにして。とらぬきになりてあきないすべし

☶ 同卦 女ねがひ叶

このねがひハ。ふきや丁さかい丁こびき丁の一ばゐを。ふつてもてつてもつまいにちかハりぐにミたいとのねがひ。じきさまできるのぞミ也。銭八十四文あれバできる事也。三しばいのゑほんを。廿八文で一さつヅヽかつておき。まいにち内で。にぎりめしをこしらへ。それをたべながらゑほんを見なさるがいゝ。それでしばいへいつたもどうぜんだ

☴ 巽下斷　男願ひ叶

此ねがひハなんでもやたらおんなにほれられあつちからも。こつちからも。ひきずりひつぱられ。そして女の方から。小づかいもひとりまへから。いくらといつてあてがはれ。きたいものをきて。くいたい物をくつて。あそんでくらしたいとの願ひ。おめへもまじめなかほをしてとんだ事をのぞミなさる。しかしこれハできやす。はやくにようごのしまへおいで〳〵

☴ 同　卦　女ねがひかなふ

此願ひハ。かミハすこびんにて。うすげしやうもぐつとあだにつくりなし。ほうじまの八丈のしたぎに、うへだのごり〳〵するやつに黒じゆすのはんゑり。大はゞの帯をよこちよにざつとむすび。さてもあだなふうだと。人にいはれながら。まいにちゑどおうを。あるきたいのぞミ。ぜにがあれバじきにできる事也そふしてもしも足がすりこぎになつたらかまほこやへよめに行なせへ

☷ 坤皆断 おとこ願ひ叶

この願ひハそれとかほにハいださね共。へいぜいおもつている事にて。なんでも。せかいぢうのごけといふごけを。わがくいものにしたいとの願ひ。これハ手おもきよふなれ共。じきさまかなふ願ひ也まいにち。そこらぢうをあるひて。ごけと見るがさいご。すぐに手づかミにしてくいなせへ。ハテいぬのごけを。だれもしかる人ハあるめへ

☷ 同 卦 おんな願ひ叶

此願ひハ何でも。たいけのわかとのなどのおめにとまり。あれをにようぼうにせねばならぬといふよふな事になつて。とう／＼そこのおくさまとなりて。ゑよふゑいぐはハししだい。よそへ行にも。びやう打ののり物。大ぜいともをつれてあるくよふな。ミのうへになりたいとの願ひ。ずいぶん叶ふねがひ也。しかし今ハできず。うまれかわつてきたもふべし

☱ 兌上斷　男願ひ叶ハず

此願ひハよミかきさん用のたつしやな。ほうこう人がかゝへたい願ひ。それも小りやうりハもちろん。かないのかミさかやき。そして米もついたり。まきもわつたり。せうしよくでたつしやで。めつたにわづらはず。其かハりに給金(きうきん)ハいくらやすくてもいゝから。そんな人があらバほしい願ひ。いつかうできず。そんなちうもんの人ハミなとふに旦那(だんな)になつておりやす

☱ 同　卦　おんな願ひ叶

この願ひハ一しやうにたつたいちどでもいゝから。かぼちやと。さつまいもと。てんぷらを。おもいれたべて見たいと。御きりやうのいゝににやわぬ。とんだけびぞうのねがひ。ずいぶんぜにがあれバのぞミかなふ也。しかし。このお人ハ折〳〵ねどころや。せつちんのなかで。だいぶくもちをあがるそふだが。いつてへかいぐらいがおすきと見へた

三 乾皆連 男願ひかなふ

此願ひハとかくよし原へいつてもふられてならぬから。どうぞふられぬよふにしたいとのねがひ也。是ハ、じきにできるねがい也。尤かねをつかへバふらるゝきづかいハなけれ共。金をたんとつかハずに。ふられまいといふのぞミだから。まづよしハらへゆかふとおもハヾ。大門をずつと入てけんぶつ斗してかへるべし。女郎をかハねバ。いかなぶ男でもふらるゝきづかいハなし

三 同卦 女願ひ叶

此願ひむけんのかねをつくと。いるい。くしかうがい。其ほかぞうりはながゑ。あぶらおしろいまでも、わいて出るよふなてうずばちがほしいとのねがい。ずいぶんできそふな事だから。なんでもおとなしく。しんぼうしなせへ。せうじきにさへしていると。てんとうさまのおかげで。ついにハおめへの。もちまへのてうずばちから。なんでもかでも。わいて出そふなとだハヽヽヽヽ

跋

彫たり書たり摺たりとぢたり。やたら君子に授んとするハ。この一書也。もとより口から出次第のてつぽう汁にひとしく。あたらぬ所にちくと斗。味ミのあるをきこしめせと。手前ミその鹽からきを。しいつけもり付。御客方に。お腹をかゝへさせんとするものは。又例の

十偏舍一九　(貞)

寛政十載
午蒼陽
通油町
村田屋版

白狐通

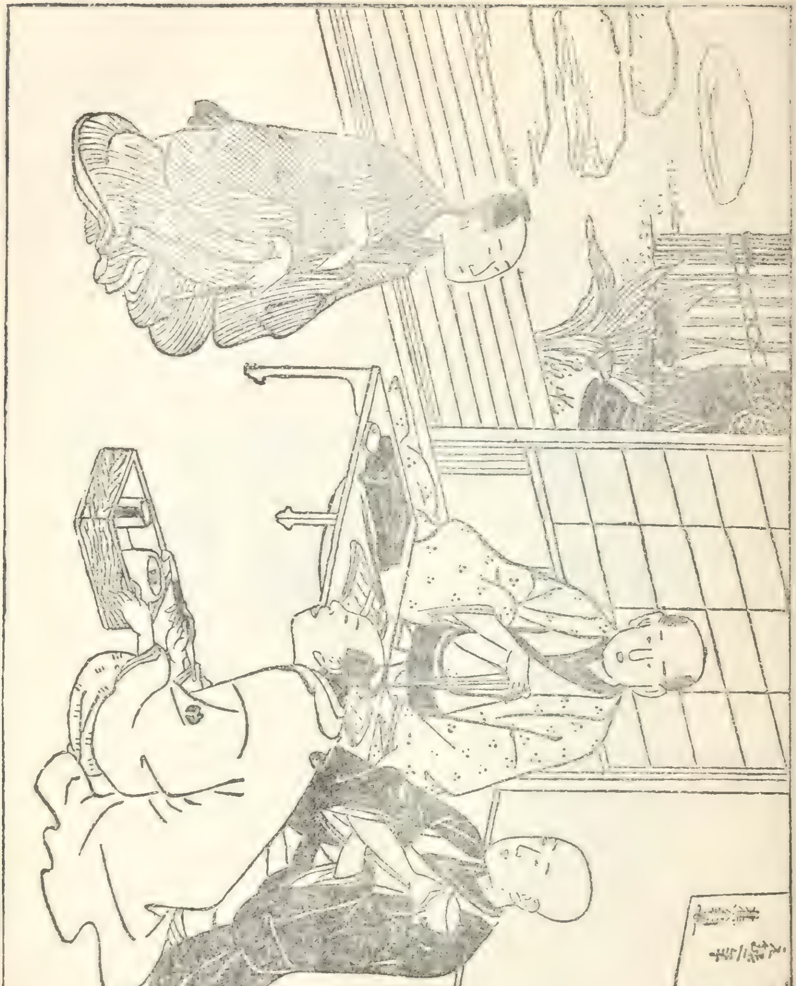
完

自序

狐三度花表をこへて白狐となり廓狐山出しのはじめより大門を一度くゞり姿鏡へ影をうつせば通力自在によく人を誑事九郎助も眉へ唾をつけて退く亦素女實おもてにかざり内ぞゆかしき和歌集に我思ふ人ハありやなきやと問れしも反古にばかりは筆拍子の實ぞ君なら命とおもふ情同じといへどもことぐく手に葉を分白狐通と題も虎の名をかる狐のまた才をかりて化さんとすれど人われより智あつて化す事不能俄盲の杖にひとしく探りあたらぬおかしさハ明手のかたと云教へられむ而已

廓中のはつ春

梅暮里谷峨述



目録

○第一　未亡人
○第二　粉頭
○第三　処女
○第四　婢
○第五　処女
○第六　雛妓

○第七　細君

○第八　姐妓

終

捨きらぬ世を根岸の庵へと蛙啼夜の闇路をたどり猶箕笠に侘て誹友のおとづれハ雪月花にこゝろをかよハし天地間のあらゆるを風雅にむすび爰にたのしきを過れバ霞棚引麗にせめて戀句の跡たれてその長日をくらしぬる

白狐通

梅暮里谷峨著

○未亡人

宗匠月に日に眼いふのもうき身なり 省我申ませう手にそぐなわぬ若後家の珠数 宗匠妻にゐひしたゐものゆへ其すじハいやだの 省我そんならぜん何いたしやせう 宗匠おもどりならうち越がむづかしいからわたしが付やせうわつたほうをかんがへな 省我あまりおくれるから跡のほうへせめて一順すへておきやせう前句を吟じてもらいてへね

○粉頭

宗匠ほうばる雪をもてあます下駄 百我女ともまた男とも端女郎 宗匠お付の意味がうけ給わりてへの 百我まハり正切廓の世界ハ此うへもなきつらき勤にて数をうらぬ女郎ハつとめのかたてまにハ水も汲だり飯もたき見せのそうじも紋日もの日の苦うすければあふかたならず夫ゆへまつハいやな男のすいた男のと大見せほどハ鼻に入る事を苦にもせぬおのづとミへも情もうすく人がらあしくまた此

中にも地色客いろあれども通人ハいやらしきとおまがあわつ爰に世事吉といふいろ男彼納の手拭日和下駄で通わハ

[おきの]これ吉さんそんなにひやかしてあるかづとゑんぎなをしに一ぷくのんでくんねへな [吉]ちつと用があるから廻つてこよう [おきの]エヽせじのわるひそしてはなしがあるから [吉]何の噺があるものだ [おきの]これさまあまちねへな [吉]これでも四木ンつゝハいきこざなしにつう用だよそんなにひつぱりあへ直がきがる [おきの]けちな事をいうの [吉]いゝよそうし紙(り)のねへところへそつくりとおいてくりやな [おきの]にくひ日だのうほんにおゑんさんのことで用がある [吉]おきやあがれそうハかつがれねへ [おきの]まあ腰をかけてゝねへいゝ事でもわるひ事でもねへよ [吉]なまへ高利でもつけてかそうといふ事か [おきの]マアそのくらゐなことさ [吉]なんだ [おきの]おゑんさんがおき(さカ)のさんの所へあがつたをしつてごふぎにあつくなつてゐるぜ [吉](おくのほうへゆびをさして)いゝか [おきの]みんなるすだからまあへへンねへ [吉](はいりながら)やううそをつく女だ [おきの]うそかゝねへおゑへが来たらしらせてくれろといふからおゑへの聲がするとしらせてやつたもふこようまちねへ [吉]おふきにくろうせうだの [おきの]しれた事さ兄弟ぶんだものを(といふところへおゑん来り いきなりに胸ぐらを取て) [おゑん]此やらうハふとひやろうだよくおれをふゝつけやあがつた [吉]

なんだ此きさまがいめよしやアがれ【おふん】いやだよさねへ〳〵【吉】わけもいゝやあがらねへでてへエるな【おふん】ヽなきごへにてヽおしのおもてへなんだわけもいわねへおれがいわねへでもうぬが胸に覚へがあろう【吉】よせといふならよせへ（とつきとばす）【おふん】つきとばすともなたゝくともころすともどうともしやア〳〵【おきの】ヽアはなしねへ表へ人が立またそふこうするうちか折がかへるからまあしづかにしねへ【おふん】ヽでもおきのさん聞てくんねへ一度くらいならいゝがしにしておくが二度や三度じやあきかねへわなあのあまにこれようとうだからとも思ふがそれみしりつゝ此のあまがあがらアなもつと気のきいたあまならおらアにつかわれても了簡しめへ物でもねへがあんなやつにいゝやうにされてかうまらねへ【吉】此べらぼうめたれにしやくらわたいゝごうさらしだ【おふん】あんまりしらをきるなうぬがゆびの輪(わ)もあのあまにもらやあがつたじやアねへか【吉】うなあそういうとでおおりだ此輪をもらやアそれがそうこにあるものかへ【おふん】ヽ百なり二百なり出してこしらへた物を咄(はなし)がわにたつ引れじやアあるめへしめつたむせうにわけもなくやるものかへあのあたじけねへあまがやるから是もいゝけうこだ其(それ)ほいきたかアおれがほうの手(て)をきれてからどうともするしろ【おきの】おふんさんもふいゝかげんにしねへ吉さんもわるひからへこんでいるわなあの女との中(なか)はすつぱりおれがいゝようにするからまかせねへな【おふん】うつちやつておきねへおな

れがほうからそうまけてでる事もねへ　おきの 吉さんもよくつもつてゝねへあゝしたたて引のあるわけの二人りが中ゆへおめへも男だ一度ハ女ぼうにせずバすむめへそんならいゝかげんにうハ氣もしねへそしてあんなあまアあしにしてハおめへの男もすたるぞ　おふん こんなことをいつたつておいやろうが耳にも入るめへがおきのさん聞てくんねへな此間も内の小指があのやろうに氣でもあるかなんのかのとやかましくいふからなるたけハ主人のこつたから耳をつぶしていたがあんまりやきもちらしくおつうゆうから何もそのよふにやかましくいゝなさる事ハごぜへせん吉さんも昨日やけふの客でもこぜへせんからいまさらきなさんなとも云にくうごぜへすまた吉さんが來たとつて何も取のくつれるといふでもなくこふいつちやアおかしらしいが人並にハうつておきやすといつたが何ぞといやアがつたら思入れふてゝ腮をつるさせてゝせうと思つたらそういふ分ならいゝがひよつと手めへの身のためになるめへと思つたゆへいつたが何も氣にかけずにずいぶんせい出してくりやとへこんでいたわなあのやろうがことじやアいくら氣をもんで内へもしらをきつていることつちやアねへそしてこれまでも今日ハいくらいるのあすハいくらいるのといつた度につひぞ間をかゝせた事ハねへそのなまでぼろをかつてあるかれてはあわねへ　おきの 何さそうでもあるめへのふ吉さん　吉 どうであいつがのぼせている所へ何をいつてもらちのあかぬ出人だからあとでよくいつて聞せべい

「おきの」そんならおゑんさんもおれにめんじて中をなをつてくんねへな吉さんもさあ一所にいきねへ「おゑん」子指のゐすに一ツもうちねへでわりいの「おきの」いゝのさこれ吉さん其かわりに定さんをとりもつてくんねへな「吉」鯉定かおしやべり定か「おきの」こいさださんさ「吉」せうちの幕だが八がほうハどうした「おきの」あんなとうへんぼくハとつくにつき出してしまつたよ「吉」いゝかへおきのおめへにはじをかゝせるやうな諸事しうちハしねへよなんとでもいつてつれてきねへおゑんおきのさんおれがせうちだよ「吉」おれがせうちもいゝ「おゑん」いつそ氣のどくだり「おきの」いゝよ中よくねゝへな「おゑん」おさらバよ（路次ハしまりますとたかごへにてよバわる）「おきの」ばからしいとまりをひかねへけりやアならねへ（あハたゞしく鐵棒がらく／＼）

なんとむざうないゝ事だね此あとの二人のこんたんハこんど吟じやせう

○婢

拙我情なき端句に耳取鼻右衛門といふ浪人者の下女におさんとて中ぐらゐなしろものありまた隣に飛田虚吐といふ醫者の飯焚に權七といふ田舎にして八氣のきひた男かねておさんに心あれば井戸ばたなぞの出合のときもかわいゝ尻だちつとそつちへよせておれにもくませてくんなせへとしりをたゝけ

バこれ権七どんよしなせへなもとなりどうしといゝことにハ下〳〵の事なれば千柳點の妙句のごとくいつか禮の字も紛失してしまつて色事となり月日のかさなるにしたがひ人ハたいがひ目もとでしれるようになりもとよりこらへじやうのなき者どもなれバ用のかた手間又ハ行ちがひあたりのむきゝにも一升はなれめへの四十ハ夫婦になるのと蛤町をはだしでとをるにくすぐつてへ事をいゝしんゝりのはなしハ夜が更てから長屋の厠が定式ほんのこれがくさひ中さ

〔おさん〕権七さんおめへといふものハきこへねへものだ此ごろ聞バどことやらへ聟にいきなさるそうだいよ〳〵そういふ譯ならなぜこう〳〵と打明てくんなさんねへはづかしひ事だが田舎に居た時分から村の若衆がいろ〳〵と口説たこともあつたが義理づくなときハ一度や二度のことハあつたがおめへのやうにこう何もかもうち明また少しのものでもかしたりなにかするハ夫婦になろうと思ふからそれになんぼ男のうハ氣だとて外の女をもらふとはあんまりだおめへがそふいふ氣まづい心ならおれも今までだまされたはらいせにじやまをしてゝせる〔権七〕これ〳〵其やうに大きな聲をしてハわるひこんたもおれも主人もちだ譯もきかずにそうやきもちをやくことハねへ〔おさん〕何やきもちだへわたしがやきもちハあたりめへだがあんまりおめへがはらぶと餅なことをするからハまさかそうされてハちつとこつちの勘定が粟餅だ何にもわたしにいわれてそう餅〳〵してゐる事ハねへ

権七 よくつもつてもミなせへ幾世餅までもそれふと云かわし其うへ此ようなどらやきをしりつゝせわみしてくれた物だから切餅にもかき餅なぞといふようなまうひきな粉餅ができるものか一生人のわらびもちになるもはづかしいと何も此やうに餅盡のこじつけでもあるめへそれといふがむこふが餅屋で喰てへ／＼と思つているからだまあ氣をおちつけておれが云ふ事をきかつせへなおれもいつぞハはなそう／＼と思つていたがいゝ間もねへから此よふにのびて後手になるやうだがいかにも伯父の世話で聟にいかねバならぬ おさん 夫となせへ 権七 サアそこだしづかにしやこんたとこふいうわけがあるとつていやだとはいわれずまづ伯父きの云ふをせうちして旦那へもいとまを願ふたら首尾よくやろうと双方ともに出來たが只できかねるはおれがむこいれをいやといへバおじごともあひそづかしすれバこゝにつとめもできず身のまはりにハなりどふもつまらぬ事だらけ おさん そんなら今になつてきれてくれろといゝなさるのかへ 権七 マアだまつてきかれろこんたも田舍にいゝなづけのあるとやらどうでこの世でハそわれぬまた落ぶれて恥をかこうよりいつそ死でしまおふと思ふ おさん エヽ 権七 そうびつくりすることハねへ おさん なにびつくりハしやせんおめへがそういふ心ならおめへひとりハころしやせん此世のゑんハうすくとも未來ハかならずあおうとゝミすてゝくんなさんなよ 権七 そんなら今宵九ッ（マヽ）の鐘を相圖に忍び出て長明の場所ハ隅田堤 おさん 稲荷どうの

念佛とともに「権七」コレシイ
是からが廻り道具でふたりして何かうさんな道行にて人里遠きむめわかのあたりへゆき「権七」これおさんこふつれだしハだしたれど親たちがおきゝなされたならさぞなかれるであろうすれバあふきな不孝ものこれといふも前世からの約束つくでもあろうがどうもしよふハない事かと思へバ〳〵むふんべつなる二人リがなりゆき「おさん」ソリヤきこへませぬ権七さんそのよふな氣まつひことをいゝなすつてもいつてかへらぬことだわなしかしおめへハおれがこのやうにいわずに泣く〳〵と譯にいつたらよからふがそふハ二國のかざりものだ「権七」虎の皮だといふ心かそういふこゝろならば人目にかゝらぬうちさあおさんかくごしや「おさん」もし権七さんかんじんの刄ものもたずはんじ物のよふに德利ばかりもつてどうして死ふと思ひなさる「権七」そこに妙薬がある物か今までたびく〳〵心中もあれどもとかく一人リハ死でこのうそれでハ耻のうハぬりだそこで流義をかへてかねて旦那の秘法の毒薬を盗おき此ごとく大切に酒につけてもつて來たこれをのめば五躰悩亂してたちどころに血をはき命がねへさあわしがさきへ呑からよくしんだをみとゞけてそして跡でしんだがいゝそんならそれのむぜ「おさん」まあしつかにのむがいゝわな「権七」人に見つけられてハ骨折ぞんだ南無阿弥陀佛「おさん」モウのミなすつたか「権七」アヽせつないアヽくるしい〳〵アヽこゝがせ

おさん チャノ〳〵けしからねへもう死なすつたかはやまつた事をしなすつたのふマサとんだ薬りだあのよふにも血を吐せつないかのふばかノ〳〵しいあんまり早ひ死やうだからうそらしいこれ権七さん〳〵そんならほんに死なすつたさうだ氣の毒だのうかんにんしなよ

権七がくるしむやうすをミてさうに死がいやになりてあたりをミまわしそう〳〵どこへかおさんハ逃て仕廻そうするとやゝあつて権七ハそつと目をひらきあとを見送りまんまとおさんがにげた事をよろこびなんなく爰に行ところがおさんの在所もおかしいねこの女も欠落をしたもののゆへ江戸にもいられず在所へ行此様子を直ミきく権七にいつぱいはめられし事ざんねんにおもへども手前がうへもない不實ゆへ人にもはなされずたゞ心でばかりくやしがるハどうだへ此どく酒ハ古句のよふだがかの芝居でするすわふの皿さ 宗匠 マア其くらゐな世界さ 〽力にものびちゞミある車井戸 排我 跡からはげる下女の發明

○處女

むすめ 跡へまいりませう夏痩と執成て置く病なりとハ去屋舗に侍田左衛門といふ人の娘にお条とて

きりやうといゝ風俗といゝあいきやうハ顔にこぼれ一度笑バ國をかたむける相ありまた同じ家中に同じ權をならぶる娵田兵衛といふ人の息子に傳九郎といふて至て人柄よきいろおとこ尤としごろといゝ互に思ひ思われてハいれどこぞう同士の事なれバ番の出這入にハまわり道ながらも左衛門が門をとをると内でも今頃は傳九郎の引時分とお粂も心付ている事なれバ足音又咳ばらひをしりて用ありそうに玄關へ欠出互に顔をミやわすれどまさかはづかしく影をかくし傳九郎も急に早足になり跡でハたがひに殘惜く思ひ夫よりハ手馴し琴三味線さへしミ〴〵と手につかず唯札にばかりかゝり歌書をミても戀哥をひろいてハ我身にひきあてまた湖月の情の深をかんじちよつとしたむだ書にもこがるゝ心を筆にあらハしまたハ傳九郎内なぞと書てうさをはらしまつそのくらゐな事なりしが月日を送るに隨ひ此人ならで肌ふれじと心のちかひも通ぜぬ戀の積となり痞となり年頃の事なれば心易人〴〵働ぶりに緣談の世話すればとがなき人としりながら顔ミるさへもうたてさの涙にしらす枕より外にあかする人もなくいよ〳〵重る戀やミと乳母ハさとりて

[うバ]お前さまハ能所から度〳〵御縁組を申て參りますに只いや〳〵とばかり其あげくハ積づかへとお醫者様やら御祈禱と親ごさま方ハたいてひお案事なさるゝ事でハないどふもがてんがまいりませぬお前さまをおそだて申た乳母に何もおかくしなさる事ハござりませぬまたどふかなる事なら此

うばがいゝやうにいたしませうわな [おくめ]うばや私ハかたづく事ハいやだからいつせう御奉公を
おかゝさまに願てくりや [うす]おまへさまハわるひ御了簡誰しもお若ときハそのやうな相談をされ
るハいやなものなれども先へお出なされてハ若同士の夫婦中はじめの内ハやつぱり色事をする心持
それからお子でも出來てごろうじろ今思召やうでもなくおせわハやけれど朝夕たいてへお樂な事
でハござりませぬ [おくめ]うバもふ〳〵そんな事聞もいやもういつてくりやんなよどうぞ御奉公が
わたしハいゝ [うば]夫程におつしやることなら品によつたら御奉公おねがい申てあげませうがそれ
にはなんぞ譯がなけりやなりませぬ [おくめ]それでもかたづく事ハいやだものを [うば]どの樣なお
かたでもかへ [おくめ]アイ [うば]そんなら嫦山様の御子息傳九郎様でもおいやかへ [おくめ]（はづ
かしさうにつこりわらう） [うば]それごろうじろそれでも御奉公をおねがひなさるハきこへませぬ
[おくめ]（なみだながら）サアそれが自由にならぬゆへ [うば]其やうにお煩ひなさるゝほど思召事ならお
氣のよわひ何ハともあれなぜはやく此うばにおあかしなされませぬ [おくめ]それでもどふも [うば]
つゝみかくすもうハ氣に噂をする時の事さあ〳〵乳母に何もかもおいひ [おくめ]そんならうハかな
らず呵てくりやんなやあのはづかしひ事ながらいつぞや奥へ上つたときあなたもまだ御前髪で奥へ
出入御隱居様や女中衆がてうど似合のよいふうふとなぶらるゝハはづかしけれど嬉しさの世にも稀

なるごきりやうとはつに見たがまよいの雲おれぬ心の親〳〵の御不和でどふでそれれぬなら心ハ尼とも思ふてゐる「うば」一図のお心からハそう思召も尤だがよくつもつてごらうじませもとより両親子様だとて何も敵同士といふでもなし御役柄故のあらそひ事もこりや何所でも有るならひ其様にきな〳〵と次第ニ重る御病氣でハ叶ねがひも出来ぬ道理もふお心弱お子さまだぞ「おくめ」うバや道ならぬ迷よりこふ煩ふて忽躰ないおふたり様へ御苦労懸る能〳〵な不孝者とわきまへてもおもひ切られぬがいん果いつそ一ト思ひに死だなら此思ひハ有るまひのう「うば」いかにお年が若ひとて假染にも其やうな事をおつしやりますな死ばかわいひ人に逢れますかへ「おくめ」夫でもおれゆへ死だと思召ハすこしハ不便とおぼしめさふ「うば」うれしくおぼしめそうがまた罰をおたちなさりやうが其時おまへさまへ誰も知らせてあげても有るまいし双親方へはなげきをかけ永代人の笑の種もふ〳〵おどけにも其やうなことを云て案事させてくださりますなさあ〳〵おかゝ様が御らうじてハまたおあんじなされるゆへおだまり〳〵「おくめ」それでもうバがそんなになくものを「うば」うバももふなかぬさあこつちをおむきなさぞお目がはれたソレ鏡をごらん

育く上げたとハいゝながら實身にかいほうの中にもどふぞ病氣をはか〴〵とよくしたく思ひどうやらこふやら文の通路ハはからひしが猶戀しい床しひで今までより病氣もおもり内〳〵うばが咄しにてま

さかのときはあまいたらひの母親なればうばに打まかせしらぬふりをしてゐればバ左衛門が留主を見合傳九郎にせめてハゆる／＼と噺でもさせたなら氣を引たつる事もやと呼にやりしが程なく來たり「うば」傳九郎様がおあんじなされて内ゝ御出なされましたがおかゝさまも夕べのお夜伽のおつかれで今すや／＼とけしなつておいでなされますゆへこゝへおとをし申ませうからつもることを思入れいつてちとうき／＼となされまし「おくめ」（くわつと上氣して胸ハだく／＼思ひながら）うそ「うば」何のうばがうそをつきますものかへ連ましてこやう（とゆくをひきとめ）「おくめ」それでもこゝへつれましてハわるひ「うば」なぜへ「おくめ」どふも此よふなところへそして此やうにとりみだしてゐるものを「うば」ばか／＼しいそんなにとり亂しなされてもたいがひの者の化粧をしたよりはるかおうつくしう御ざりますわたくしにお任せなされまし卜行「おくめ」そんな事をいつてなぶつてハいやよこれさ／＼も

聞入ず傳九郎を床のそばへ連行うばハ氣をとふしてはつした所が「傳九」おこゝろよふ「おくめ」アイトいつたばかりいゝたひ事もいひかねて顏ハ紅葉に上氣してまだはつ戀のおぼこさを側でみるめのはがゆさをそうこういふ内左衛門が歸りの時刻なればあかぬわかれをさしひきすれば傳九郎の居る内ハお粂の氣さきもつねのやうになりしが歸りし跡ハひとしほにふさぎもつよく流石の乳母もいろ／＼手療

治をすれバする程いやましの病に今ハ十方にくれし所に御慈悲深ひお上ゆへお耳に入ると傳九郎とお衆との縁談をでつぺんから御媒人ゆへ親〻の是迄の不和も仲よしの川と流しおくめも其よろこびに良薬よりもきゝめよく日にまし快吉日をゑらミ祝言さ娘方の意ミハ詞すくなく思入ばかり多くどうもいゝ句がいへやせぬ【宗匠】唯うちばが第一〳〵

○雛妓

【宗匠】恋ふ夜の一トすじ蟲の聲たへて出戀【新造】人並にする新造の色此ふりそで新造といふものハまだいろ氣もない時分から見世へ出され名代藝者あげにでゝもいろ〳〵人のこんたんをミなれ聞なれ無理にいろ氣のあるふうにていつしか地色も相應にとつて廻しとりとめたいろ事もなく大故たま〳〵こいきな客が二三度もくれば心の内でハ其やうにおもわぬも人目にハとほうもなくほれたやうに

【高巻】三ッ浦さんおめへに氣をもませる事が有る【三ッ浦】なんざんすへはやくおきかせなんし【高巻】今幸さんが角町のほうへいきひしたよ【三ッうら】うそでざんせう【高巻】そんならうそにしておきな【三ツうら】ほんにかへじれつてへのう今じぶんなぜきいしたね連でもありひしたかへ寄イしやうかね【高まき】わたしが大黒屋から出ると角町へはいんなんしたがたしかつれがあるやうでざす

三ツうら まあ聞てくんなんし一昨日の晩もつき合で角町へ行とつて見世迄よりひしたに依て私がそういつてやりいしたつき合といふものハおめへさんのやうにこつていきひすものかねといひしたら何そうした事でハねへそのくらゐならかたきし顔ハださねへといゝなんしたからそんならまあ一寸でもお上りなんしとむりにとめ人したらどふも今夜ハあがられねへがそれ共つがふ次第ではづしてこやうといつたからいろ〳〵待人をかけてまつていゝしたがとう〳〵来なんせん男といふものハなぜあのやうな氣なものでありますね 高まき ばからしいぬしもきなんしたかろうけれどまやひがわるひからの事でざんせう 三ツうら 角町のもとしハいかぬがわたくしどもとちがつてて〳〵手があることでハありませぬほんになま中顔をミせへすからこんな思ひをしゐすにへだゝりし客をとほふなくこがるゝやうすの所へ禿がしらせに かむろ ミツうらさんおいらんの客人が大神樂をまわせなんすとさ 三ツうら ほんか かむろ アレはじまりいすかして大皷の音がしいすよ 三ツうら ほんにのふといつか色男の事もわすれうゐたへまわり格子へかじりつひて大神樂見物さ 宗匠 なるほど 新造 まだそれよりかおかしいハ大大廓の振新が善といふ者にほれており〳〵はかねへ路次なぞで瞬をしたり何かするかまたある晩約束ゆへ善が來て居るだらうと思ひいつもの路じへゆくと

しん造 善さんか 喜八 あい しん造 チヤ喜八どんどうして 喜八 どふしてもいゝ足があつたから来やしたおめへハ何しにきなすつたへ しん造 用があるから 喜八 誰にへ しん造 たれにでもいゝうつちやつておかつせへ 喜八 いゝへおきやすめへおめへといふものハあんまりなものだぜおれがほうの手もきれずにまたほかへこしらへたの しんぞう しりいせんたれがそういつたへ 喜八 あんまりしらあきんなさんなさんな（此重複、ママ）たつた今おめへがそういつたじやあねへかたとへおめへがいわねへでもそんな事ハとふにせうちだ向ふのわかひ衆ともできたをそれも此頃ハあき風で善さんとまたこしらへたじやあねへか何と田町にござんす法印さんよりやあきつかろう しんぞう こんたハむりばかり云ふ人だ 喜八 そうふゝつけられてハすまねへ しん造 そんなことはしりいせん此人もひつこひ人だ

ゆかんとする所へ何心なく善ハきかゝり善が顔を見合ると善さんかナヤばからしいといつて新造ハ逃てしまひ善もあんまりへんゆへ或夜友達二三人で其見世さきをとをると壁をおぶつて其しんぞうがいねむつて居るを側のしんぞうが笑ひながらこれ／＼三ツ浦さんおめへの色男がとをるといつておこすとふつと目をさましてゝたところがゆきすぎたゆへおこされた新造にどのへ〽なんとお落し咄めくね 宗匠 イヤ振新の情ハこれらが秀逸だろう

○姐妓

宗匠もう明るやら鶏の聲する　秀我傾城を女房が買ふて詰ひらき　宗匠假染にも妻は禁じます御一直なさい　秀我傾城の質に硯の水氷る　宗匠徒老師あてかね通り句のすじをうけたまハりてへ　秀我さしたる事もなくありふれた句なれども親苦勞して其子樂をし其孫乞食するとの諺かたのごとく爪へ火をともし金をためし今ハ大分限の中に富田屋升右衛門といふ人の子に寅之介といふ色おとこあり升で入て寅で出すいんぶんやら此男が遣ふほどに／＼丸さきのおいらんも大ぼれで今迄いろ仕立でよんだ客のいやらしき事をいふもいや／＼耳にさわりて顔がたち寫になる見文客もつらをミるもいやになりけふハ雨がふるから流しなんしの天氣がいゝから歸りにくひのと春の日に冬の夜をつき合でも早／＼あきたらずいかなる大盡のむすこにても茶屋の挊も滞此おいらんも此男のためにはこゝとそり有る夜具も一通ハしりの客と名のつくものヘハ多少ともに切かけいろ／＼はたらけども限りの無事故たゞひに身つまりとなる愚痴ばかり云樣になり夫からハお定りのとをりに聞かれでもなるたけハいろ／＼なことをして逢しが最早しりだんもつきたるところに番新がきつひやつりへ座敷の長持の中ヘ寅之助を忍ばせせつない心遣ひをするうちに或夜屋敷客の早歸り時分ハよしと寅之介を　のうちへ入れつゝも

る

　おいらんのいふにはいつそ気づまりでだんせうどこもなんともだんせんかへ髪もうつとうしかろうとひやわいへ世帯をもつたよふにきう屈せまつろゝ（ママ）な所で髪もとりあげ手前の着物もきかへさせたり始のうちハ酒盛などしてこつそりとたのしんでよかつたところに

［箕之介］唯さへあけしい（ほノ誤カ）間もねへつとめの身の上に段々と苦労をかけ其やうに不都合にさせあわれぬ様になつたを今も此様なこわひ所へかくまつて朝々の心づかひハなんにもいわぬうれしひぜ　と（ほろりとなミだをこぼす）しかしおれが身ハどうなつてもいゝがもしゝれた時はてめへの難義になろうと思つてそれがくろうになる　［おいらん］（わつと泣出しが袂を目に入すゝりながら）　なぜおめへさんハ其様な事をいつておくんなんすそんならわたくしがにくうだんせうねほんに思へばはつに御出なんしたときもどうぞと思ひハ思ひながら京町へひとゝふりならずお出なんすと兼て聞及んしたからいくらおもいゝしてもと思ひきつてわるくしいんしたら其夜もおめへさんハはらもたちなんせず何かごうぎにふさぐのこの様なときにハちつと酒でものんで遠慮ハねいからぐつと寐るといゝといいなんしたゆへ私があいさねへ酒でものんだら気のはれる事もありひせうが何をもうしいすにも下戸でだんすから一倍気のはれる間ハありいせんぬしのゆるしがでたからどうぞねようと思つてさへ自由になりいせんほんに人にもこんな苦労があるいすかねへともふしいしたら苦労のあるときハ下

前ひとりくらうするやうに思ふ物だが分てこういふつとめゆへくらうの中の苦労をもとめずバ命もつゞくまいよそきの人にもいゝかけんに苦労があらふからごふ〳〵さとあぢなところへひつかけておいでなんしたから打明て私が心をもうしんしやうとも思ひいしたがなぶんなんすかもしれもせんにいや〳〵とおつな事をいゝなんすねとはぐらかしてそれからなんともいわずねたふりをして一夜あかしいした 箕之介 おれもわるくされるほど猶増思ひで二度が三度とたびかさなれどいつもおなじやふなてうしゆへどふも心がとけぬからもふむつとしてしかも五会目のときだこれ来る晩も〳〵其やうに積がいたいのはらがすじばるのときくも気のどくだいらざる事だが薬でものめばいい おいらん 薬ハきらひでだんすものを 箕之介 そんならきつひことハねへいやな者の来た時発る積だの自由な積だ手ばかりじやあねへ積痞まで餘けいがあるのいやらしい事でもしようと思つての用心ならあんじなさんな おいらん どうして私共のやうなものにそれハあんじいせんが私がしやくハいやな客のきたときと跡ハもうしいすめへ 箕之介 跡をきく迄もなくふせうちゆへのことだがミれんな心でハ仕打はかりでハあきらめられねへからかんでくゝめるようにいやだからくるなとそうきつくでられゝばおれも男だたとへどのよふに思ふともどうするものだ おいらん その様におめへさんが事を分ておいゝなんすゆへもうしいすがおめへさんを呼び申イすと気がちがつてさわぐ

者があリいす 蓑之介 こつちの身にハ覺ハねへがそれでこめんどうだからよびにくるといふのか

おいらん わたくしハ誰やかましくいなふがかまいゝせんがおめへさんがきのどくでだんすそんな事を思ひ廻すと積も發いすのさ 蓑之介 今更うす情をいつてちやかしておくのがおどけとハいわせねへぜ

おいらん おめへさんこそいゝかげんにたぶんなんせんで後悔なんすなへとそれからなんのかのとうれしひ事ばかりいゝなんすゆへ遂に隨てなんのことも思ひいゝせんで私が心を打明お咄もうしいしたらおめへさんも聞入度をかされてきておくんなんすに隨面かた時もあわぬ其日のながながとみんなが面白さふに咄しなしいすといつそ腹が立またおめへさんがおいでなんした時は何が心うれしくみんなへのあたりもよくそれだからきげんけへだだといゝすけれどほんにわかれた其夜ハあかしかねたるわたしがいんぐわそれゆへ内がわるからふと氣ハついていれどついわる智がすぎいして何日々々お返しもふしいせんからその様な身にしいしたもみんわたくしがわざだんす私がついていてハのだらなんす事もあるめへ。からどの道おめへさんの敵ハわたくしゆへどうぞ手にかけころしておくんなんしさうすれバ本望でだんすと

あどけないことをいつてしうたんゆへ隣座敷で泣あかしやした彼是するうちかねてかんをつけて居ることなれバつひ見付られぶとうといふところを此おいらんがおひかぶさつて主のしりなんした事でハ

だんせんミんなかわたくしひとりでした事だから私をどうともしてかんにんして上ておくんなんしとかじりついてはなさぬをむりむたひに寄たかつて外の座敷へ連てゆき質をばふとひ野郎の盗人のとぶちてうちやくするから二階では私も質とは心易しあんまり無情なやつらだとぐつと癇積にさわつたからいきなりにそいつらをはりのおしなんと客ハあい身互だ世にあるときハおまへさへのおちぶつさまのと今またぬしがあゝいふ身になりしつたとてそう現金に盗人の泥棒のとハいわぬものだ是からハおれがしの持た富がうり物買物だはなし合を付たら云分ハあるめへ此猿曳人めら指でも付てミやあがれひき剃髪の冷こいのをくわせてミせるといつたらわたしら其時分ハ相應にするしまた内所とも至つて心やすしもとより内所夫婦はそんな不人情な事ハきらひゆへそこでハ一番はねやしたまた傍輩女郎がよりたかつて

ほうばい女郎　心易すれば質さんがかわひそうで私ども迄がかなしうだんすに身にかゝつたおめへさんの心根がさつしられへすいつものやうに積がおこつてハわるうだんす秀我さんがあゝいなんすかあわれなひやうにハなんすめへわな　おいらん　口をしくかう氣がはつておりひすゆへ積ハおこりひせんがほんに人といふものハさもしいものでありよふにはでにお出なんしたときハなんのかのと氣はつかしいほどもてはやし今になつてむごらしひぶちたゝいてもよくばつもあたらぬもので

だんすこんなうきめをミようよりひと思ひにわたくしをころしてくんなんせばいゝとあわれつぽい事だらけゆへどうで乗りかゝつた船と力をつけそれから頃が親元へ行委細を咄しとくしんさせ内所のかミさんにも受出しの相談をした所が御存のとをり隠居もゆへあつて三四年まへより他國いたしてをりますが一兩日の内にハ歸ろとの狀がまいりましたゆへもう一日二日お待なされましといふから隠居が著すると直に相談に懸た所が替つた事も有る物で此若隠居が田舎から出ると此富田屋へ初奉公ミなの氣に入りつとめた所が腰元と色事をしてはらませ人にしらせまじとおろし薬を呑せた所にあわれ此女ハそのために死との事がぱつとしたゆへなんぼ氣に入の者なればとて外の者の前もあるゆへしかたなしに暇をやり其時貳百兩といふ金を内ゝでやつてなんにでもとりつきよき耳を聞せろしかし出入ハならぬぞとだん／＼深き情の有る主人の息子ともかんじんの隠居が旅へ出た留主の事なれハだれもしらふよふもなくとんだ事をしたとおひ出されるものがあるやら呵られるやらで此どさくさで出入も叶よふになるおいらんもなんなく女房になりばつた／＼かたづく此内のミちゆきが狂言のやうさ　東我 女郎もなるほどほれたりといつてハ素人よりきついものだね　西我 おめへハ實色好だからそんな事をいふがしんにほれた所ハ素人がきつひのさ女郎に實があつてつまるものか　東西 女郎たつて實のねへものかなそういつても今どきの地女ハ由斷がならねへおふかたハ欲とくづくさたとへ欲

がない所が錢金づくでハ死ぬしのふといふ中でも直にあいそづかしだそして智恵もなんにもいらねへちつと色の白男だと直に惚わな 西我 そりやあおめへのいふ事だがそふばかりでもねへのさあの傾城の涙て郎下で舌をだしといふ何ハ能いつた何だねちつと額へ毛抜のあたつた者ハいゝ仕立でなければならぬ辛ひ世の中惚たふりをすればじきにうぬ惚る氣になり格子なぞで長咄をして居ると心でハいまく〳〵しく思つても義理にも上れといふとどうも今夜ハあがられねへといへばそんなら内が悪ひかへといつたらいゝや金がねへといふだらうと女郎も帥在がねへからなんともいわずそりやあわるひのふととりあわずそんなら歸らうといへバどうでもあがんなんせんかへといへバいゝ附込所だとあがつてもいゝがあがる氣でこねへからといへバそんならおかへりなんしともいわれず十度に一度ハ義理づくで上ると先の心もしらず惚られた氣になつて何屋の誰と大いろごとだとハ此くらゐなものだらう女郎に實があつちやあ年季をつき出し〳〵しても廓を出る事ハならねへ誰しもおれにはほんに惚ほれたと思つてやつはりはれないのさ 東我 イヤおそれたごこうだんだ成程やゝくもに實ハないがまたそんなやすいてはふり込の半可客のする事で傾城買のきらふ事さそれだから女郎といふものハつらひ勤でまづたとへていはバ十人客があれバその樣な中くらゐな客が五人いつそいやだのうといふ客が三人欲づくでは能されぬほどいやな客が一人どふぞ呼たひといふ客ハひとりあるかなしそういふもののゆへより

きらひすれバ年中茶ばかりひゐていねバならぬゆへどのやうな客でも胸をさすつて呼のさ主ハ地もの
師といふものゆへ一圖に實のねへものとおもおふがあつたりといつてハ今の咄のとをりさ是から
ハ主のよくがつてんのゆく樣にほれられた間違から咄しやせうまづ傾城といふものハ嘘を常として其
中に實ありまた誠の中の嘘ありこれを見るにたて引亊年明まへなぞに引當てゝるとよくしれやすまづ
宗匠 おつとあまりながくなるゆへまつ／＼あつかり 東我 それでもあんまりものがわからねへから
なるほどゝぬしにとく心させねへけりやあ氣が濟ぬ 西我 おめへそういつても一番へこむ事がある女
郎よりハ女房にもつた所が 宗匠 年が明れバもう素人の評になります彼付合にも高砂も婆ゝのかたハ
熊手なりといづれ女ハ欲深きものなれども素人に人目を忍ぶあれバ買色にかけかまひなくじつをつく
すあり惚たりといつてハ何といふ格別たくおもしろみをさつてくるしミ斗り地女も人にはなされる人
ハまだよけれども人にかくす人また女郎も人と一所にゆくうちハよけれど人がじやまになりかくれて
行やうになれバ我身をほろぼすことうたがひなし兩樣とも、品ハ來酉の春後篇にしやうぶをつけませう

幾としも盛ハ
つきし花の御代
目出たく筆をとり
そむる春

白狐通終

白狐通

自跋

天地開てより四序流行のミならず物發りてハ廢れすたれてハ又發る其事少なからずといへども廢れざるは此迷なりいつそ佛經の戒めの如くせめて女の手を握り手無者に生るなら手なふして可笑ともかゝる迷ハあるまじきを色好せざるハ珠の盃に底なきとは衆人を惑するの語なるべし

千種菴霜解大人撰

狂歌花鳥集

此書ハ當時名高き人ゝの狂歌を寄せ其中より面白を撰で狂歌よまん人の見合に甚だ寄よき本也

契情買言告鳥

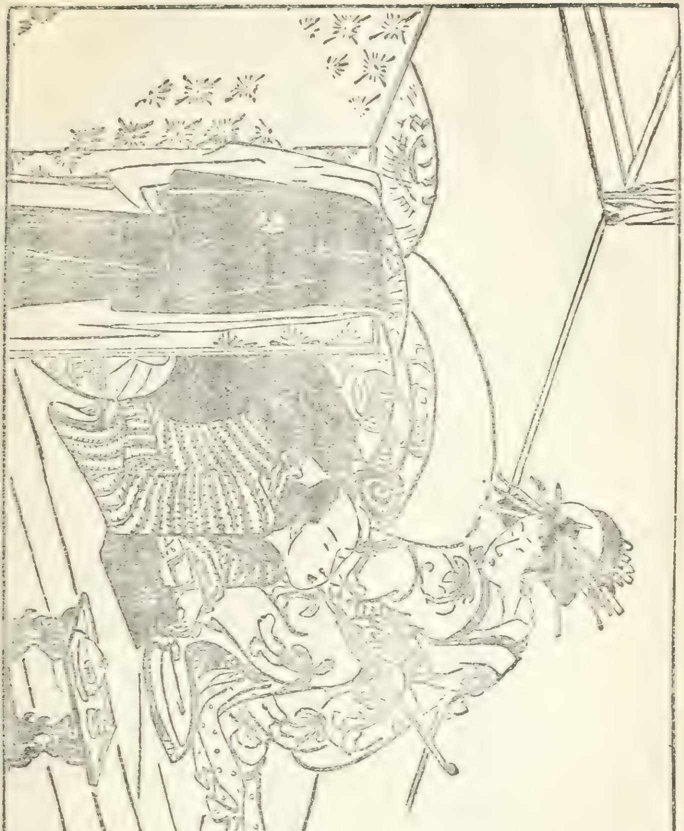
全

序

洛歸街降れても燕市街じや最照とは白雨にあひし荅花にひとしく濡てほころぶ色廓の無道と雖又道あり不義といへども復有義一寸先は厭ハぬ闇の空。音の鶏に函谷關はゆるすとも月落鳥啼てこそ情郎の隔となれば鶏にだも悶る心ならん故に言告鳥とは題す物ならし

梅暮里谷峨述

申のはつ春



目録

○上の巻　雛妓をあげて　おいらんを契る

○中の巻　奸計をもつて　ふかき中を裂

○下の巻　赤心をあかして　身を謬

終

契情買言告鳥

上の巻

梅暮里谷峨著

色廓の色の世界の其中に世話になるのを客といゝ世話にするのを色男といふつとめの外のたのしミハたのしミならぬくるしミのくるしむ中のたのしミこそこれをつとめのうさはらしともいふやらん牽頭芸妓がとりはやし賑ふ座敷もそこらにかた付んとすれバおとこいそぎとなぶらるゝもうれしさながら顔あかめさすがに客もその座をはつすも又色氣のふかきぞかしどれ〳〵とてもへだてなけれどわけて心やすき座敷持〔梅がへ〕〔満〕さんよくしらぬ顔をして通んなんすねマアちつとおはなしなんしな〔満〕客人があつたじやアねへか〔梅〕かいりいした〔満〕そんなら一ツぶくのんでいかざアなるめへアイ〳〵いゝからかいつた〳〵〔藝者〕それでもおいらんへおれたし申ませんでハしかられます〔梅〕わたしがいゝよふにとりなしてあげいしやう〔満〕新八もいつてもいゝぜへ〔茶や男新八〕まふよふ御座りますおまへがたハもふゆきなせへ〔満〕ハテいゝといふに〔新八〕さよふならサアおめへがたもいつしよにめへりやしやう〔太夫〕そんなら旦那ごきげんよふと（みな〳〵かへる）〔満〕源七さんハいつきなさつた〔梅〕おとゝい來て

今朝かへりいしたそれから嫌よふおもひしたら屋敷の客が来てもちつとさきまでおりいした　清どふりでおめへのお顔の色がわるい　源またあ(マヽ)ん事を源七さんハ何(いつ)きいしてもよく嫌たがつてなりいせんどふもわたくしがおもふよふでハさんせんそれだからおめへさんも御幸さんがあのよふに氣をもみなんすものをもつとうハきやおやめなんし　清そんなひれつな男じやアねへ　番新うき舟　清さんそのよふにきれいな口をおきゝなんすなさきの字の事をしつておりいすにへ　源それでありうじいし　清あんまり郭利がつよくつて何もねへうちがおかしいじやアねへか　浮御幸さんがてつせうかれつけふと言やめにしれんをはなしてやるといゝなんした　幸そしておれをつきだすとかそれゝなせへそふいふおそろしいなだ　源たれしもほれてる身でハ可愛さあまつて憎さが百倍でざんすハ　清ばかのあいがあきられるまでハそんなふよふなことでハつきだされねへ　幸その口をとふしておあげなんし男といふものハあきやすいさせにだれでもそのよふに口利口なうそをついておりいすよ　清どふでもおめへがたのうそはうへこたいふ浮舟さん　浮いゝおしだつけな私なぞハうそハきついきらいでざんす　幸そんならなんで口説といふのか　浮そいけいなお客人いおもいれわるくしてやりいすこれもたことうらざんすハ　幸マア清さんおきゝなんしてのへハあんなよをいつて人にハどふもほかのきつくへのあたりがわるいから氣をつけろといつていけんをいゝす　清あんまりてめへがつてだ　浮そふじやアざ

んせんがわたくしどもの身とハちがいゝすハな【梅】此子ハうそでざんすハな源さんのことや何かまでいつそかけになりひなたになり實をつくしておくんなんすから大きにものがしよふざんすによ【清】こゝの内の世話をする女郎衆ハだれても若いのハひとりもねへがおらがのばかりだあの子にもいろごとをあてがいてへものだそふしたらおもひやりがあらふ【梅】それだからおめへさんばかりがたよりでざんす【坊主 はつね】おいらんのおすせへす梅かえさんに清さんにいゝかけんにおひだしておくんなんしとさ【梅】あいさ御きさんに清さんにうわきをせぬよふにいけんをいつておりいすから今におけもふしいすおつとしんぼうなんしといや【初ね】アイ〱(といきそうにすると)【梅】是さおほへたかいつてミや【初ね】清さんのうわきをせぬよふにいけんをいつておりいすから跡をいハす【梅】それミや今におけもふしいすしんぼうなんしと【初ね】(アイトそう〱ゆく)【梅】それ御らうじいしだれしもすこしのうちもはなれるがいやで【清】これほどおかけれバいゝじやアねへか【梅】あのくらいなものだもふ何もゝふしいせん【清】物使二度におよハぬうちおかいろふのふ【浮】てへ〱まつてお出なんしやう【清】あしたよ【皆々】おたのしミなんし(清八そう〱　)【清】人をよびつけて寐ているもいゝこいつハゆふべけんを見せつけられたなそんならおらも【こゆき】あんまりまつてもきたんせんからもなりいすのさ【清】それだから勝手に【こゆき】そうハなりいせん梅がえさんもて

んぐ〳〵の身におぼへがねへかなんぞいふにいゝかげんにかへしたがいゝ　満（ふりむきながら）ばかないへ人にうらみがあるものかあの子も一座のはしなりでめへともわけてこゝろやすくするじやアねへかあの子が氣をとふしてかいれ〳〵といつたとてそんならかいろふともまさかいわれねへちつとハはなさねへでどふするものだ　御幸はなすもほどがありいすハな　満そんならおれがわるく御ざ候あいだまつぴらごめん下されべく候めで度かしこ（おきあがり両手をつきあたまをさげてひやかしながらいふ）
御幸（ニツコリわらいながら）そんならかんにんしにくい所でごんすがかんにんしいしやう　満かんにんするもこれがつよい　揚巻（びやうぶのそとから）みゆきさん　みゆき揚まきさんか　揚いつてもよふざんすかへ　満サアはいつて一ツぷくのみな　揚ごめんなんしと（半分顔を出して）　御幸さつきい事かへ　揚おめへさんハうらみなものだねどふしておくんなんす　みゆきマアきいておくんなんしそこら中をあるいてよふ〳〵おかいをうけていまかへりいしたハな　満そこら中を繁しがわるくつておひ出されやしたそれで内のしゆびははなはだわるしさ　揚心がらだからよふさんす　みゆきこつちはかりのあくなつたとおもつてミくびつてをりいせん私がいゝ手本でごんすぜへ　揚それがたりしてできんしやうハ　みゆき今吉左右をもふしいしやう　満もうゆくのか　揚又いつてめへりいしやうねへ（ト行）　満阿彌陀の女郎かいにいつたよふだ何をいふかねつからわからねへ　みゆきこふでごんサ

アな揚卷さんがいつそ助さんニほれてとりもつてくれろといゝすが出來いしやうかねへ 清人の心ハおれにもしれねへがあんなうつくしい女郎衆をしやうちしねへものがあれバ大馬鹿ものだ 御幸さんならおめへさんでもかへ 清手めへといふものがなけりやア承知しねへでどふするものだ 御幸助さんも若紫さんとハ一トとふりならぬわけじやアありいせんかへ 清なんだか此ごろハ氣まつい事があるとつていかねへよ ミゆきそりやア耳よりでざんすがきれなんしたといふでもざんせんかへ 清インニヤおれがおもふにやア番新がいかねへやつだから此客をよぶとどふで始終ハ身のためにならぬとおもつてか狂言をかくと見へた何をいふにも若紫がまだとしがいかぬから心にまかせぬよふすだ ミゆきそふきけバかハいそうでざんすねへわたくしどものとこの宿木さんとハどふでざんす 清あな事でハねへもおもつときついのだ ミゆきどこにもありいすものだねへそふいふところならしやうちなんしやうねへ 清マアだれにぞよびにやりやな ミゆき下座敷に助さんがいなんすからちよつとはなしがざんすからごふぞきておくんなんしといつてくんな まぼろし（アイト下ざしさへゆきそのとふりないふ） 助清さんが何か用があるとか 清用事のおもむきよのぎにあらずだが極内用だからマアこゝへ來な 助なんだ氣ミのわるいおいらんごあんよと這入 御幸（めへりいすのでざんすがおめへさんにもさむしかろうとぞんじいしてよびにあげいした マアこゝへおあがんなんしな 助こゝがいゝがどふ

も気がゝりだはやくきゝてへ 清 手めへよくしつてるよふにいやナ みゆき ほかの事でもざんせんが
おめへさんにおしんがざんすハ 助 命をくれろといふのか 御荘 イヤヽヽばからしい 助 そのほかの事
なら兄弟分(きやうだいぶん)につながるおめへのいふことだものをなんでもきかねへでどふするものだ みゆき 人に
いわせておいてあとでかれこれハならいせんにへ 助 そのきめたてがおつてんがいかねがおれも男の
はしくれだハな みゆき そんならもふしいしやうおめへさんにほれきつてるものがざんす 助 おれに
ほれるものならどふでろくなものではあるまい 清 ありもりよりハうつくしいぜへ みゆき ぜひとり
もつてくれろとたのまれへしたがどうぞそうもしてやつておくんなんし 助 アヽおめへがたといふ
ものハたのもしいものだはなしのつきる中じやァあるめへに人をよびつけてうれしがらせてなぐさむ
のか みゆき そんな事でハざんせん 清 はやく名をいつてきかせやな 御荘 そんならもふしいしやう
がきつとようちだね 助 やミと人はかいきのあやつさ みゆき おめへさんが京町のわけがなけりやァ
何もこふきめだてハしいせんけれどいハせておいて跡でいゝわけがましい事をいゝなんしてハその子
にもはぢをかゝせたくしもすめいせんがそふいゝなんすからよもや私にこまらせなんすめへからも
ふしいす 子 アノ 揚巻さんでざんす 清 なんとあんまりわるくハあるめへ 助 マアそりやアほんか飛んだ
アトとぼけて見せる） 揚巻 それ見なんしなやどころでハざんせんハな 助 ちやじやァねへ揚巻さ

んなら十年ばかりめへからせうちしている［御若］實のある子でざんすからその覺悟でいなんしよ［助］そりやアこつちの畠にはへるくさだおもしろい／＼［浦］京町のほうのわけも知きつてほれたからいゝじやアねへかそして京町のほうハどふした［助］おめへもしつてるとふり番新があのとふりなり若紫がまだこぞうといふものだからいつこふなものだよそのうへニあいつも氣がおかしくなつたハな何か逢ともつともらしくいゝわけをいふがマアはやい事があるこふいつちやアおかしいがわたしがいつたばんがいくたりきやくがあつてもかたきし身うごかしもしねへやつが此ごろハはんぶんよりむこふにながくいやすこれほどわかつたことハねへながどうをふつてはおをかこうよりハとなんでもきれよふとおもふがこれといふてつせうもねへからいろ／＼となんだいをいふけれどなんのかのとまさかはなさねへそれだから此ごろハかいしきつら出しをしやせぬ［御若］そりやア揚卷さんのためにハもつけ調法でざんす［浦］京町で見付られたら側のわるい内だからむつかしかろふよまあ／＼きれるまでハかくれるよふニしておがんなせへこふしておれが茶やからくれバしのぶにハものがしよいおめへの茶屋でハなんのかのと大事をとるだろふ又はれてあがられるよふになれバそれハおれがどふとも茶屋の方ハするマア當分これが利かただ［助］そうしやしやうとさきの氣もしらずにのり氣になるでもねへが先いわひに一ツのみやしやう［御若］つめとうざんしやう（トつぐ一口のんで置）一寸とかんをさせいせう

[助]氣ハ心だからもふのミやすめハ大きにおせわのおじやまのおやすミよいゝ夢でもミながらまつて
おりやしやう（ト下ざしきへゆく）[御幸]寐ちやアなりいせんによ今に直ニやりいすにへ [西]早蕨(さわらび)さん
はいゝか [ミゆき]それだからあの子の新造衆を出しやした [蓮]そんならば袋の鼠にしておいたのだの
[御幸]うれしがらせてきいしやうりねへ [通]きやくハあるか [ミゆき]初會でごんすそうさ [通]ヤレかわ
いや南無妙法蓮陀佛(だぶつ) [御幸]さつい後生ねがいでごんすね [蓮]おれも望があるがおよそな商業のこれへ
ぼんと當をあてに金をかりたほどつまらねものハねへ [御幸]いつてくるうちまたどこへも御出なんす
なへ [國]今時分しれたことさ [御幸]（御まきをつれ立行）助さん寐なんしたかへ [助]どふして寐られる
ものかえ、かくミじかくまつていたハた御幸さんかおめへなら寐(ね)ざアなるめへ [御幸]よふござんすハな
助どふもおめへの名ハいゝにくいよふだ [御幸]アイ〱わたくしの名が幸といゝしたのへ旦那(だんな)さんが
すぐにおれりやをくれて御幸とつけなんしたこれ揚雀さんなんのこつたなこゝへお出なんしナア〱
やくたいもい人をたしかにお渡(わた)しもふしいすにへ（トおしやる　）雄ハ
よいの程でごんす [助]御幸さん雛(ひな)　もにげだしハしのへかの [御幸]テヤ猫じやアあるめへし
[助]一もつのねこハ爪をかくすといふからふんのねへでも是からハかつてしだいにかきなせへ [御幸]
助さんもふかへ　（トゆく）[國]人もふゆくのかへ（トまさゝ手よりふきたながら

揚むりなことをもふしいしていつそおきいごくでざんす　助おらあ夢じやアねへかとごふもがつてんがゆかぬ　揚夢ならおめへさんも京町へたいしなんしてもよふござんせうけれどわたくしもおもひきらるゝだけハと今迄ハあきらめてもおりいしたがはづかしい事もうちすてゝ御幸さんをおたのミもふしいしたをせ事(じ)のいゝおめへさんとハいゝながらよくきゝとゞけておくんなんしたねしかしひよんなものに見こまれなんしてめいわくでざんしやうねへ　助なるほどおめへのいふとふりひよんなものに見こまれたふこれがもつとうつくしくねへとかまたハ心いきがかいねへとかどこかわるいといふ事ならおもひきりも出來よふが息(いき)のかよふうちハどふで思ひきりハできねへからやぼらしく今からしよくごいミをするよふだが仇惚(あだぼれ)のたゞさみでとりくんでハ見たがおもいの外手がねへや何やかやでたくつき出スもあるやつだがそれじやアおれが身がたちがたない　揚そりやアわたくしがいふことでざんすまたなれ〱しいとおぼすゝなんしやうがおめへさんせへきておくんなんすりやアどのよふな事がありいせうともぐすへ〱内所(ないしよ)でやかましくいゝしやうともまあごろうじいしこふいふつとめをしいしても女の口からはづかしい事ハもふされいす物かへ　助そふいふ氣ならいゝわ

助やかましい　　　　　揚　嘘(うそ)をつくと叓をつき

とふすぜへ（トのどなつくまねをして見せる）揚その時ハどふともなりいす折からいづれの座敷にやら

傾城道成寺うた

へせいもんくつされだましハせぬに引にひかれぬ心があれバそれハねてからそのいゝわけなせうそいの

○中の巻

どれとても客の噂のその中にも若紫が座敷にハうへをしたへとよりこぞり助六がうわさとりゞ
「新造 とこなつ」（マアカの）ア野分さんおきゝなんし十五日のひも助さんがいきなんしたそふさなんは男がよくてもあおじやアあいそのつきたものでさんすなへ 「番新 のわけ」早蕨さんをあけて揚巻さんとあひなんすといつてもおいらんハまだのみふさんすハなそれだからみくびつてそのよふなふミつけたしかたをしいすおあへがたハきなんしたときゝなんしたらつけてせひつれて来ておくんなんし茶屋もねしの茶やからハいきなんせんそふだの 「しんぞう かゞり火」アイサアほかの茶屋でさんすとさそして朝や晩やよるハめつたにはいんなんせんあふかたハ日のさかりニきなんす ト紳屋せきや がいゝした 「のわけ」そふいふてへ助さんだ物を日中なら猶よふざんす 「かゞり火」たしかにけふハきなんす時分だからもちつとしてからつけていゝしやうねへ 「のわけ」そんならそふしておくんなんしと（いふ所へ若紫きたる） 若「ヤレ／＼眠やかな事だの 「のわけ」助さんがあんまりでさんすから此子たちにたのんでつけにやりいす 若「ぬしもち

つとゆきちがいの事があつてはらをたちなんしてそれでたしかにきなんせん［のわけ］おめへさんハそれだからはがゆふざんすせんどもふしいすとふり揚巻さんと大いろごとでざんすつさ［若］そふでもありいしやうがぜんてへ助さんハそんな氣の人じやァざんせんがそれといふもあのいせ久さんとわけでもあるよふにたれかいゝしたから氣まづくおもひそんな氣にもなりなんしたろふそれだからもふ一度おめにかゝりよばぬまでもいさゐをはなしもふしとうざんすハ［のわけ］ばからしいぬしばかりいゝ男ぢやァあるめへし今さらどふされなんすものでざへすそしてほんとうにうたぐりなんしてもい久さんのまねが助さんに出來いすものかへあんなものハかミをきつてつき出してしまふがさつぱりとしてよふざんすあんまりふミつけたしかたでざんハなわたくしがついていてそのよふニされなんしたといつちやァ仲の町で私がいゝわらいものにされいす

若紫もいゝたひこともあれどもせわになる身のことなれバ何事もなミだとともにひかへ痞に時をうつせしが折わるくも禿がしらせニ新造たちわれも／＼と出るよりはやく助六を引連來り廊下のかたさハがしく

助しつかにしやなぐわいぶんのわるい此よふニされるおほへハねへサアノ＼どこまでもゆく［若柱］よふざんすだまつてお出なんしト（おくざしきへ入られる）［のわけ］サアこれをきせかへておくんなんなん

し　助ばからしいこんな赤ふり袖が着らるゝものか　かざり火　そんなむだをおいゝなんすなサア〳〵きかへなんしトへよりたかりきせかへる）のわけ　それ見なんしいつそよくにあいなんしたマアゆるりとおあそびなんし

奥座敷へたゞひとりうちすてられまてどくらせどたれあつておとづるゝものもなくたま〳〵とふるをよびかけれバしりいせんよといふのミかゝるふしまもなく月夜に釜をほり出スとハ大キなそうるの事ニて野分をはじめ手ニつく新造どのゝさしきへかよりこざり

竹川野わけさんふりそでをきせかへたのを見いしたらふだん心やすいせへかいつそかわいそうになりいした　のわけ　おめへなんぞハ今からそのよふな氣のよハひことをいつて髪をきる時ハやくにたつめへ　かざり火　はやくきるがよふざんす　のわけ　此子もまだはやふざんすもちつとうつちやつておきなんし　若　いかにしても髪をきることハよしてあげておくんなんしな　のわけ　かんじんのおめへさんがそれじやアすミいしねへわたくしどもニまかせなんしな　若　わけのあることざんすから　のわけ　おめへさんハどのよふな事をいわれてだまされなんしたかはらもたちなんせんかへあきれけへりいすそんなミれんな事をいゝなんせずともい久さんがまつてお出なんしやうはやくお出なんしト

わがこゝろのまゝにはからいにくさながらも二三もくもおく事なれバぜひなくと（もカ）のあんじすがたニ

ておくざしきへゆく跡ハてんぐ〳〵に髪剃(かみそり)はさみと云ものをもちおくざしきへおしよせ「のわけ」助さんいつそいきでざんす揚巻さんが見なんしたら猶ほれなんすでざんしやう「助」おめへがたハあれほど心やすくしたものだからわるいことがあるなら此よふにしねへでいつてくれたがいゝ「のわけ」そんないゝわけをする口ハもちいせんおめへさんのむねにおきゝなんし「助」むねニきいても心ニきいてもしらねへといふからそんなら若菜(わかな)を一寸とよんでくんなせへ「巻柱」若しゆハおりいせん「助」そんならだれでもいゝ茶やをよびにやつてくんな「巻柱」おめへさんよびにやんなんし「助」おれがいわれるくらいならたのミやアしねへ「かゞり火」おめへさんにつかわれるものハたれもざんせん「助」そんな事をいわずにそんなら若紫をよんでくんな「横笛」若紫さんハきやく人でおめへさんのよふな人にかゝらかつてる間ハざんせんとさ「助」後生(ごしやう)だからどふぞ一寸よんでくんな「のわけ」よび出したとてどふしてきなんすものかへたとへきなんしてもわたくしがなりいせん「助」何をいつてもとりあげぬかこんなめにあつたことハねへばからしいなんのことハねへあミ笠(かさ)をかぶつて編先(へさき)へ出て居よふといふなりだ「よこぶへ」よくおめへさんハぐど〳〵(マヽ)いゝなんすねかくごのうへでざんしやうハな「のわけ」そんなことをいゝなんせずとも道成寺(だうじやうじ)でもおどんなんしそふしたら猶ほれてがざんせん「かゞり火」アイサねへふんまいゝからわたくしもほれとふざんすがぬしがぬしにほれていなんすからほれ所がざん

せんどこにほれたらよかろふとまよい〻すいつそはなでもほれいしやう [のわけ]此子ハとんだこと
ないふものだあのはなにハ一番ニほれてる女郎衆がありいす [かどり火]わたくしもほれ所がねへから
ほれよふとおもい〻したがすけべへな女郎衆でざんすねへそんならはなの先のほくろニでもほれよふ
[のわけ]此子も人の事ハわらいながらすけべへな子だのふとかくはなのきんじよにほれたがるよ
[かどり火]どふもしかたハざんせんハな [明石]いろ男といふものハすて所ハざんせんのふどふりで
額のぬき際がはげいしたが大かたかあいがつてなめたのでざんしやうあれがただん／＼うへの方をな
めなふすかへ [のわけ]蜒のよふな女郎衆でざんすねへもふい〻かげんにして髪にかゝりいしやうお
めへさんもあかるいうちがかつてでざんしやう（トみな／＼たちかゝり） [助]どふでもかゑなきるのか
あのくらいなぐさんだらよかろふそりやアあんまりだ [のわけ]みれんな事をい〻なんすな猫食たむく
いでざんす
（トハ助六もきらる〻事とこゝろ細くなるたけハのがれん人情なればいろ／＼にもがき手を出せバ
[のわけ]じやでざんす手を出しなんすなきつてもしりいせん（トおどしおもふま〻にかみなきりて） [明石]
よくおとなしくきらせなんしたきものでもきかへはやく行て見せなんし[助]（いちつて見てなくちなかれ
す） アハなさけなくもきつたのきのふのゑかたけふのてきかわりやすきハ人ごゝろだ

此一句にてかわいそふにおもふにやたいていハちらほらとはづしけれども番新野分が手につくしんぞう一兩人のこり

〔よこぶへ〕そんな事をいゝなんしてたれもなんともおもいゝせんよサア〳〵もふおかへりなんし〔助〕どふぞ日のくれるまでおいてもらいてへ〔のわけ〕そふハなりいせんわたくしどもも見せまへだから用がざんすそしてそんなことをするとおいらんがこゞとをいゝなんす〔助〕手ぬぐひをおめへがたのおかげでおとしたからどのよふなのでもせめてかしてくんな〔のわけ〕よけいハありいせん〔紅梅〕そんならバわたくしのでもかしてあげもふしいしやうかね〔のわけ〕ばからしいよしなんし〔紅梅〕それでもあんまり〔のわけ〕はてたとへあつてもぬしにかす手ぬぐひハざんせん江戸町へいつておかりなんし〔助〕此時節(ちせつ)どこのうちでもつらかろふが三浦とやらはんほとやら手めへのよふなこんじやうのわるいものが此ひろいくろハに二人ハねへぞよ（三浦とハのわけがはい名也だいのこしやくなしんぞう也）〔のわけ〕手めへもいゝひかれもの小うたとやらさ〔助〕おれがおもひでばかりも見ろよくハねへぞよ（なみだぐみていゝながら下へおりる）〔のわけ〕色(いろ)おとこのかへりだよよく見なんし

何かわからずしてとび出して見るもあり又心やすくせし女郎ハきのどくニおもひてかたきしかほも出さず根があきもあかれもせぬ中を野分がはたりてさきたることなれバ若紫て（もカ）名残も惜しミ人目な

くバとび出したくもおもへどもわけてこよひの客いせ久とてむづかしやなれバよそ事のよふに我座敷よりすき見せしニその見すぼらしきすがたニおもハずなミだをこぼせしかバ

〔い久〕手めへハなぜなく 〔若〕ばからしい何なくものかへ此ごろハとかくふさいでなみだが出てなりいせん一ッのみいしやうかね 〔い久〕それがよかろふなんだかけふハさわがしい日だたれぞかみでもきられるよふすだ 〔若〕そふでざんす 〔い久〕そりやアむごいことをしたまあどんなふぎりだか髪をきられるとハよく／＼わるいことだと見へたその女郎もまんざらでもなかつたろうにあんまりきのつよいことだ 〔若〕アイサそれにハわけがありいす女郎衆もいつそはれきつていなんしたからきやく人もそのよふにいやでもねへかしてあしをちかく来なんしたがその女郎衆を世話にする女郎衆がとかくその客人をじやまになんしてそのきやく人の来る晩といふと外にあしをちかく来る客人のとをどふかわけでもあるよふにわざときけがしにこそ／＼ばなしをしなんしたり新ぞうしゆニいゝつけてハこふしてあいたがる人があるのなんのとないもしねへことをいつてよび出させその客人の氣のわるくなるよふに／＼とはからいなんすからその女郎衆も又だましか久しいものさわたくしハよび出されるおほへハざんせんとはらをたつていゝなんせバほんのことでざんすとたび／＼よびにきいすゆへうそとハしりつゝうつとふしうおもひなんして御出なんすとやつぱりうそだけれどもなんぼ氣がいゝといつてもその女郎

衆もむしがざんすからまさかだましともいわれずきよふがおそいからまちどふしがつてその人ハどつちへかいつてくるとたつた今いつたといゝまぎらかしてもその女郎衆もはらをたち久しいものだあの客人がきなんす晩といふとなんのかのといつて人をだましなんすばからしいたれざいゝつけてがあいいしやうとせわをする女郎しゆにあてつけておいゝなんすけれどまさかにぎんミもしにくゝおもひなんして又ハあんまり手間をとつてハ猶その客人がなんとかおもひなんしやうとそう／＼にいつていゝわけをいゝなんすけれどふだんのことゆへおつうかんをつけなんすもむりでもござんせん　い久　何もそのよふなこめんどふなきやうけんをかゝずにその子のためにならぬきやくならよびなさんなとしらでいふほうがよささふなものだ　若　サアそこでざんすその客がなんでも人なミにハなんすゆへよぶなともいわれずそしてぜんてへいきのわるい女郎衆だからその子のよほふといふきやく人だとたとへたおになる客人でもじやまをするがきついすきでざんす　い久　きやうけんでかみをきられてハうまらねへものだ　若　そふしたあいそづかしで手をきらせねバ又ひよつと内證(ないしやう)であいびきでもしよふかとうたぐつてしたことでざんす　い久　おねハわるいがそこにいたつてハよつぽどふるだぬきだの　若　それだからきミつくおもひなんしてしぜんとあしもとをくなるすれバ外へもおもしろいヿが出来(でき)そふなものでざんすとその女郎衆ハすこしミにくゝハおもひなんせんがせめてそのまちがつた心をつうじたいとひ

とりで氣をもみなんす [い久]それまでにどふかなりそふなものだの [若]たとへどのよふにおもひなんしてもまだとしはもゆかず出ても間もざんせんニよつて人の世話になる身なれバ何ごとも心にまかせなんせんからいとゞくちおしくおもひなんす [い久]それでそのよふにはらだちなさるだか [若]だれがへばからしい [い久]たんはかくしてもしぜんとしれる五音の調子 [若]ハテこふいふゆきちがひできれるよふになつたならマアどのよふでざんしやうやら人のことゝハおもいゝせんよく耳をあけておきゝなんし（トみゝをひつぱる） [い久]アヽいたいとんだところへとばしりがきたよしてもおくれ [若]あざむもつけバたれぞやかましくいふ人がありいすかへ [い久]ばかアいへ [若]サアきゝいしやうハトむなづくしをとる） [い久]いゝよさ

[作者曰]これよりのろくなりはじまりさよふニ御らん

○下の巻

二世までもかわらじものとむつごともかハるも人のなかごとゆへ引さかれたる誓紙朱をうばハで侫しゆかりのいろのむらさきをむすびかへたる揚巻と解てむすバる縁の綱 [茶や]さよふならおやすみなされまし 助けふハ何かにつけて大キにおせ話かみさんにもよくいつてくんな [茶や]明朝ハ何どき時

分(ぶん)お迎(むかい)をあげましやうねあしたハうさんなものね〔助〕マァいつものとふりさ〔茶や〕人里とをき所なれ
バ此子をおもいれ　　しておやんなさりましとんだすきさ〔さはらび〕新助さんいつそすかねへよおす
まさんをそふしてあげなんしな〔茶や〕氣のおほひ子といつちやァねへあんなにやきもちをやきまさァ
な（トしりたゝきそふにする）〔さはらび〕（大きなこへにて）あれよしなんしおすまさんにいつゝけへす
にへ〔茶や〕その口へゆをのミなと（ちやわんを出す）〔さはらび〕しりいせんよ〔茶や〕ヱイ明日むすめ氣
をつけよふぞ（トちよつとからかいゆく）〔さはらび〕大ごへにてあれさァ（あとは小ごへにて）ひつゝこい
斧(ちく)（本ノマヽ）いだはやくかへりなんし（ト火入レを見て）たれかよく入レてくれたそふだ助さんさみしうざんしや
うがちつとまつてお出なんし間を見合ておいらんをよこしもふしいしやうこんやもおりがわるうざん
すしかも二人(ふたり)きやく人があいいす（トいゝながらゆく　しらせにそう〳〵きて）〔揚〕助さんもふ〳〵〳〵あい
たくつてなりいしなんだが座敷でハ人が氣をつけいすとしんぼうしていゝした〔助〕又こんやもふたり
あるそふだの〔揚〕いくたりでもいこふ（行）じやァなしよふざんすマァおめへさんハひよんなことでざんし
たのふ〔助〕これ見やこんなに根からきりやァがつた　揚　ほんにねへそれでもよくゆひいしたからしれ
へせんハ〔助〕イヤもふ日頃(ごろ)一ツわんのものをくひやい心やすくしたものもミんなむこふづらになつて
イヤはなすもぐわいぶんがわるい〔揚〕ホンニさぞせつのふざんしたろうそれといふもわたくしがむ

りほれをしいしたゆへおめへさんニもせつないめもさせいすかんにんなんし 助そりやアいつてかへらぬことだこふくるくらいでハかくごのうへだが今までハともかくもこれから手めへがたねをとるゆふがほを見るよふニいつまでもちうぶらりんな心でハすまねへどふともしつかりときめてもらハねバならぬ 揚そりやア少しもうたぐつておくんなんすなわたくしがよふなものでもわたくしゆへにこふいふことになりいしたものでざんすものをおめへさんのかほのよごれるよふなことをしてすミいすものかへこれからハはれてよびもふしいすそふおもつておくんなんし 助そふした所がいつたんハたつよふなものゝ短(みじかい)さかりで又わかれるよふにならバときのことがおもわれるよふだ 揚又その時ハどふかしよふもざんしやうハなおめへさんゆへならどのよふなうきめもいといゝせん 助そのこゝろざしハうれしいがひよんなことにより行すへハふたりの身のつまること 揚それもぜんせのやくそくかいづもの國(くに)でむすんだゑんかとわたくしハうれしうざんす 助どふやら今から後篇(こうへん)をかゝれるよふな心もちだ 揚毒(どく)をたべらバ 助皿(さら)までたとへ死(し)ぬとも 揚ふたり一所に助六さん 助揚巻 揚巻かならず見すてゝおくんなんすなへ

跋

チヤン奴人の不買の歎息聞ば吐唾而蜘知無へアヽラかんてんのゆかぬ老子曰知足之足常足とはいまだ此廓を見ざる前の教言成歟素見の賢として青樓を歸らんとすれバ落日と倶に靈香薫じ琴鼓の音樂或は唱盡新詞して五街より西施毛嬙の三舍をも避るの浮妓如浦を見てハアヽ欲〳〵の舫を解おもふまゝに流るならたとへ金言ありといふとも網のめに水のぬけるに異らん至是嘲とも道にたつて譏者少く其深意を知ざればなり嗚呼愼べきは色欲の迷いじやナア

やはく書

梅暮里谷峨著

傾城買二筋道　色男始めハほれられ後に突出れふ男始めハふられ後に心解る書たる本也

後篇　同廓之癖　此つゞきにてたがひにふかく成實をつくしあふ所をかきたる本也

三篇　同霄之程　これもたがひわづらいあふ程ほれ逢たるとも浮世しばし隔らるゝを書たる本也

傾城買猫之巻　女郎のうそをよくしれるよふにかきたる本也

白狐通　地もの女郎の情かき兩方の論をするおもしろき本也

契情買言告鳥　つとめの外にきやくに逢ふおもしろき本なり

來　後篇言告鳥　閨たるまゝいろ〳〵しのびあひふてる所まで書たるおもしろき本也

酉　傾城買甲子夜話　甲子の夜いろ客をよぶならいにて二階へ色客のあつまるを書本也

新　傾城夢之汗　夢によそへてあいかたにね事をいふおもしろき本なり

版　鶴岡花撰帳　辰巳のしんの手をかきたるおもしろき本なり

追々出來仕候間御求御覽可被下候

疇昔茶唐 完

遊ふべの茶がら自序

夫屁はころしてひるにしかず金はいかして遣ふにしかずいきた金とてものをいつたるためしもなく死だ金とて幽靈にもならねどたゞころすといかすとハかの屁玉と金玉ほどのたがひあるなりとハ我師何がしが夜半の茶漬の筆勢にしてたれかハ是をあまんぜざらんや爰に予が著述なせるハすべて彼書にもとづくといへども夜半の茶漬のあまり茶の二番せんじにも至る事なく馬の小便にをならざれバ其名を夕べの茶がらといふ一斤百茶の澁しといへども女の中の豆いりに同志の茶呑友達あつて若うかされて寝事をしらずバ書肆の幸爰にミてんト爾云

仇氣屋のひとり息子
艶示樓のあるじ誌

後序

佛に方便あれバ聖人に權の道あり艶示樓主人が茶唐の筆勢虚にして實あり艶にして儀あり戲言に似て然も勸善懲惡の語なり御如在ハあるめへが四方の遊子淺く買んで深く味ふべしといふ

淺草　深ろ

遊ふべの茶がら

艶示樓主人著

貢氣しづんで精楽こむ今戸橋と土手ぶしに唄ひたる山谷堀の傍に荒たる一ツの庵あり三番の杉には引かへて閑淵酌にもまけぬ氣で門にハ一ト本の柳をうへあるじと覺しく年頃みそじ斗りの法師たゞ一人すめりける此法師いかなる人ぞと尋ぬるに昔ハきるやんごとなき方に御家つかへしてやせたりとも馬一疋をもちゐ栗ほうひへほうに似たる鎗一本のあるじたりしも天生の氣道楽にして何氏の折目高なる交りのかしましきをさけて弟に世を譲りすぐさま頭をそりこぼちて此處に世をのがれ番 客膝之助

安 ゐやもわらやもはてしなければト㊃の先生が筆ぶとにかきたる額をかけ彼深草の元政といふとも是江なりといわぬばかりあけくれ和書に眼をさらし見ぬ世の人をともしびの許に雑香樓の何某が日待々々の文をひろげひとりすめるハ脇目からもこよなふなぐさむわざとハ見へぬそれが中にもたわれたる事をのみひたすら狂哥に心をゆだね花になく鶯を聞てハせつかいを思ひだし秋の野の小萩といへバ欄から落た牡丹餅のことゝ思ひ李白ハ酒一斗詩百ぺんといへど我ハ小半の酒に狂哥十首をよめるなどざれ言いひて門壁設而常閑先キから先キへ消あるきおふくハいつも留守がちなれど若在宿する時ハ廓通の仲宿として通子来て物語る事度々なり一日法師在宿の折から比しもむ月のすへつかた雨そ

ほふる日つく〴〵と春の詠の淋しきにまだしも春のうそ寒くひとり住身の徒然の餘りいろりにかけしくわんすの中へかん德利をつゝこみ酒のかんをしながら竹取物語りを見て居る所へ入來るまろふどありいかなる人ぞと見てあれバ是も一ッ個の通子と見へて（かんとうじまの合羽姿におなんど八丈の羽折すがぬいの紋上田がへしとみへる嶋ちりめんの小袖下にハ丁子屋の仕きせ小袖のへりとりむく桃山織のおなんど茶のはゞのせまき帽頭巾をふりまきにして）和尚御宿かとしほり戸明て入來る主の法師これを見るより本の見かけた所を一枚ちよつと折て下に置キイヤアめいらかなる大人の御入サア〳〵 [客]どうだ和尚どこをあるくかいつきて見ても達者に留守だぜへ（トすわる）[主]そういつて下さんな此ごろハそこら中の詠歌やら畫會やらで又その間にハ隱居ハ年初に來るなどもいわずの [客]ヲゝ世にふれバ言の葉しけきくれ竹の [主]山の奥にも鹿ぞなくなりサ時に茶ハ [客]たてゝのめといふ事か [主]けふは湯がわいてるぜへ [客]コレハめづらしい事のアゝ又かんをかけたな酒ッくさかアねへか又德利のしりをあらわすだらう [主]よくいろ〳〵なわがまゝをいふ人だぞ人の内へきてそんな自由がなる物か [客]我まゝもおかしかろふぶ性をやつてハ（トわらふ）[主]（手まいもわらつている其内酒のかんができるとつくりをみゝいきわまでたかくもちて客のかほをみて）ドウダ一ッ氣ハなしか（客ハ貌をしかめかぶりをふる此人下戸とみへたりそれゆへ主人壹人してのんでしもふ）[客]時に此頃おかしい咄を一ッ聞やした [主]ハテノなんだの

時計茶店

管あつたらはなそうと思つていたが公の嬉しがるふうな噺さかういふりくつよと〳〵ぜはしい所でたばこを一ぷくすつてはたき）ナニサさる所に表徳をとう〳〵といつてある一ツ個の色男子があつたのさ其通子が深川かどつかいづれまづ水邊へ久しく馴染でいく所が第一男がいゝにむねハわかつてゐる金もマア相應にハ立廻るし女郎も大きにほれて是非女房になる氣でいる男のほうでもずいぶん内へ入る氣でいる所が女郎が常〳〵いふにハぬしもどつちこつちモウ二年餘りもかふしてきなさるが金のなる木ハ持まいしどんな大盡でも里の金にハつまるならひとやらでついむりな事でもしてきなすつて借金だらけになつた上へまたやつかいなわたいがいつたらどうにもかふにもなりやすめへよしや二人つかふ男を一人にし一人つかふ女を半ぶんにしてなりともわたしが水もくみやせうおまんまもたきやせふけれどもそんな淨瑠理本にあるやうな事をいつてゐちやァ互にしまいがつまりやせんそれについちやァおめへこんどからわたいが方のつがうのいゝ時ハ呼にあげようから呼に上たらきなせへしかならずむりな事をしてきなさんなトいつテ其後ハどうくめんをするかしらねへが月の内に六七度ヅヽ金をこしらへて置てハ呼によこしやすそうして女郎のふところで行支又半年斗で其内に又ある時呼によこしたから行時に道で心やすい金まんの大盡にあつて道から其日一坐になつていつた所が色男がぐつとはたらかせて極美しい女郎をすぐつてかの大盡にあてがふと其日大もてにもてて一ッ二ッも直してマア其日

ハそれで歸つてきた所が女郎がすぐれて美しい上にひとがきにかゝれたものだから大盡あつくなるめへ事かとろけろ程にのほせだしてあくる日に直にうらにいつてそれからハ宵をつけたり又ハ晝仕廻をしたりして毎日／＼行所が其度事にいつでも色男をもさそつてハひとつに行其内にハ色男も度／＼の事なればつがふのわりい時なんぞも有所がまさかきたなびれてけふハ金のねへからいかれやせんともさすがいわれず時としてハ女郎のふところをあてにゆくよふな事もいかさまあつたとみへやす大盡ハそんな所へハ氣ハ付ず毎日のよふに行所がそふ／＼行度毎に仕廻て置てばかり行物でもなくつつかけて行事もありその大盡の相方ハといふとその里でも一二をあらそふはやり子で何屋の何がしといつて板がしらとかこやがしらとかとんだぜんせいな女郎だからふいにいつちやァ大クハないがちでその時ハちよつとかりてハあふ所が酒のいつぱいも呑でハじきにいつて仕まうそうすると大盡ハいらざる借りて逢て初午のばんのむじなか甲子のばんのいたちを見るよふにいゝ物を見てけつく氣しよくのわるい上へおつぼぶしで切腹しぞこなつたといふような新造なんぞを名代にとつていめへましくつてならねへ所へ矢鱈にいやらしい文句などをだされる物だから猶さいめへましくやくともするとかんしやくをおこすときかの色男のあいかたがぐつと其圖へつけこんでその大盡にあしをつけばどふだろふ此女郎ハ色男を時に金にこまり／＼した物だから此大盡を色じかけで金をひつたくるつもりで大よく心で

しかけた色で色男へたいしてハ大キに忠心な筋サそれとハ大盡夢にもしらずひよろりとこいつにのせられて今迄死ぬほどほれていたあいかたの事も忘れはてゝまた此女郎に大のぼせて猶も毎日行時にこゝにまた一ッこまつた事ハ呼出しの女郎の事なればバ色男と一坐で行カねばその女郎にあわねへからしらん貌で色男をもさそつてハ一ッに行其内に女郎めハ手ぼしこくだまくらかして五兩も八兩も引タくつて色男がくるとハその上の勤を拂つてやつてその上にもうまき物なとをこしらいさせてひそかにくわせたり何かするそれからまた日數たつにつれて度重ナればあらはるゝとやらでいつしか色男もかの大盡とのわけをかぎつけるし大盡のあいかたも少しかぎつけたやうすで何か事がやぶれかゝつてきたと見ると其女郎めハさんざ引たくつたからモウよしと何がなく大盡ときれてしまつた時大じんハ初のあいかたの首尾ハわるくする其うへ金ハどんと引ッたくらるゝ今更ひとりつまらぬものになつてついにハ是ぎり足がとまつてしまつたとき是にまた色男ハ段ゝと此ごろのわかちをかんがへて見てつくつくひとり思ふにハアヽ女郎めふてへやつだもとハおれをよほうといつての事だとハいふ物のそれ程惚てへと思ふくらいならモウもつと外に仕よふも有そうなものだおれが行たいにハ金がないから金をとらせやふとつてくるで色事をさせたやうで大盡へたいしてどふもおれがすまねへぐるでねへと見る時にハ一坐の者に女郎をぬすまれるもしらずにかつていたかといわれるもやアこれもつて貌がたゝねへよハ

くノ\ものをあんずればおんを仇でかへすにハ似たれども大盡への義理といひ一坐と色の悪名ハぬかずにハおかれねへトその女郎へてへして色男がむこふづらへまわつてきてどふかいゝいしゆのかいしよふが有そうなもんだと晝夜いろ〳〵とかんがいているそれとハ女郎ハ夢にもしらず昔にかわらず呼におこす色男ハしらん顔で行事ハ行けれどもいしゆをかいすの心ハやまず彼是する内にまた一ト月と二月立てすでに立行日月ハ流れ水よりすみやかにて光陰矢のごとくその年もぐつとおしつめてはや極月廿五日となつてきた時この女郎めハ今迄がひどい事をしてハ色男を呼〳〵した上だからその暮の不工面サにつちへもさつちいもいけなくつてとても其土地でハ年ハとかねへからくらがへをするつもりで相談がてらおふくろの所へとうりうにきて色男にも談じねバならねへから私身分の事に付是非御相談申さねバならぬ事があるからちよつと御ふくろの所まできてくれろといふ文をやつた色男ハこの文を見るときやつたしかにつまらぬでくらがいをさつした物だから是に付てこそさいくつけふの妙けいありちつとよふがあつて此頃中十日ばかりいかなんだこそ時にとつての幸ひとどう工面したかしらねへが着物ハ中におよばず其外の持物にいたるまでがうせいにきらびやかにして出かけていつて久しぶりでおふくろにもあい其内紙入レからきんをちやら〳〵トなげだして酒や肴をいろ〳〵ととりよせてのませたりくわせたりしているうちしばらくすぎるとおふくろハ氣をきかせてはづして仕もふと女

郎がなせ此頃うちハきなさらなんだといふから色男がいふにハ此比ハモウ實にまじめな用が出來てどふもこられなんだけふもそのよふにかつていたけれどもてめへが身の上の事についての用といふ事だからまじめな用をながしてきたトいふト女郎がけふ呼に上たハ外の事でもねへがか樣〳〵と不工面に付てくらがへするおもむきを淚ながらに物語るから色男がいふにハいゝあんじねへがいゝ妙な事があるおれも此事をはやくてめへに咄してよろこばせうと思てゐたけれどもどふもこられねへで咄さなんだがてめへも知つての通りおれも此くれハ不工めんでどうしよふとおもつていた所が廿年斗あとにおらが親父がよその店へ預ケて置た金が五十兩あつた所がどふもとれねへでとてもいけねへと捨た物にして置たのがふいとした事で此度とれるりくつになつてきてゝなんのかのといつて利ともにやァ六十兩の餘になつていゐるけれどもマァこのくれ半分かへる積りであすハ受取はづだその内を四五日あとにいつて内がりをしてきて見る通りこんなにき物や何かをこしらへたがどふかしてサ廻り合せがよくなるとかふいふ事もあるものだから物といふ物ハきつくあんじめへこつた實にこの暮ハ首でもくゝろふかと思てゐた所だつたがほんよろこんでくりやとまじめで咄すト玉椿の八千代までもと契りをこめたる中の事故女郎ハよもや僞とハ思ハずソリヤマァなんにしても大きによふござりやしたトしんによろこぶ樣子色男ハしすましたりと猶も誠しやかに金さへあつたらくらがへにもおよぶめへいかにせつない

とつてけふ日となつてさへぶんわるくくらがへもされめへ此暮いくらあればいゝト聞トマア此暮八両
ばかりもありやアよふござりやすといふから色男がいゝあんじねへがいゝ八両よこそうトいふト女郎
がそんならどふぞそれ迄たてけへてかしてくんなせんしト言さらねへ内にナアニサかすのかりるのと
いふ事じやアねへてめへとおれがかふいふ中じやアおれがものハ手めへの物手めへの物ハおれが物だ
心づけへせずとつかつたがいゝ是迄だつてもついに五文のこつてもどふかふといつてよこした事もな
くかへつてが手めへのおかげでいきノ＼した物だからひつけふそれ故てめへにもこふいふくらうをさ
せ年よられたたつたひとりのかゝさんにまで気をもませるもみんなおれがわるいからだこんな時によ
こさにやアよこす時ハねへからてめへがそふいわずともよこそうと思てゐた所だそれハいゝがこゝに
又一ツこまつた事ハあすハ今の用でどふもこられめへしあさつてしあさつてハやしきへいかにやアな
らずなんぼう七両や八両のはした金でもあつたな人にもたせてもよこされずそふして見ると廿九日か
大晦日に間かゐてもつてこよふといふものだが萬ノ＼一此節のこつたからどんな用でこられねへ時に
ハこまるふしけふ日となつてそうノ＼べんノ＼と待てもいられめへがどふも此よこしよふにこまつた
トしばしかんがへてゐゝかふしてくれねへか物ハそうだんだがなんとてめへかふしてくれねへか物(マヽ)ハ
そうだんだがなんとてめへあした一寸とりにくる事ハなるめへかトいふトソリやずいぶんいかねへ

事もござりやすめへといふからそんならとてもの事にそふしてくりやそうすればてめへの方も用もたいろしおれも手渡シにすれバおんごするといふ物だ金を受取所ハ藏まへの方だから柳ばしのいつもの舟宿までくるがいゝけふ歸りがけにいつててめへがきたならバ先きへしらせてよこせといつておこふからの八ツ時分にきたがいゝト其日ハマアそれで歸てきて扨あすになると女郎ハ御袋と猪牙に乘て其舟宿までくるとかみ様ハさし心得て直に色男を迎にやるそれからいろ／＼と咄シなどをしながら待て居る時それからやゝ二タ時半まてどもくらせども色男がこないから女郎もおふくろもあくびたら／＼でのつゝそつゝして待たいくつしている時さんざまたせたうへでゑんやらやつと色男ハいつきせきとかけてきて門口からあゝ待どうだつたらふはやくこよふと思たけれども時分がらで先キもとりこんでゐて埒があかなんだと紙に封じていかさま小判で七八兩もあろふとおもふ程な物をだしていさいハ此中に書付て置たから内へかいつてから見たがいゝおれハまたいかにやアならねへトいひすてゝ直にまたかけだしていつてしまふト女郎もおふくろもさつきからまちたいくつしてゐたものなれバ用がすむとおかみ様大キにおやかましうござりやしたとそこ／＼に暇乞をして直に歸つてしまふ扨女郎ハ大キに悦んで内へかへつて金の封を切て見ると中に一通の文がありひらいて見れバその文言が

御やく速金子八兩上げ可申と存候處其御方へハなぜか金がいやがつて參りもふさず候しかしなが

ら御やくそくをいたし候て上げもふさず候てハよろしからず候故御やくそくの印までに百足小判にて八両さしあげ申候御まへ事ハ一座のものと色事をせうといふ手のある女郎衆ゆへ私もまけてハならねとぞんじこつちからハ足のある金を差上申候此金にて年を御とりヽ成候ハヾさだめし来年も百足のごとくにたんと足がつき可申候まヽずいぶんせいを御だしなさるべく候かしく

といふ文ていに百足小判八両を封じこんでやつたといふが二日の上下の丹や何やかでよつぽどつかわせさつきしわすひまをついやせた上へまたかふいふめにあわせたといふがなんと情ねへじやアねへかそうするとその女郎ハ極月の廿七八日になつてきてハをりくらがへも出来ずよんどころなくはかない年をとるトヽ誰いふとなくその事ハ其土地中の評判になつてきてその女郎の事をバ名をバいわずにみんながむかで〳〵といひ〳〵したからくるしがつて此度ハほんとうにくらがへして身を隠してしまつたといふがこのはごさハどふだトしかたではなせバあるじの法師もゑつぼにいりイヤモウ是ハしんにあきされた女郎もわるいがこつちもわりいそれ程にするとがでもねへ深くたヾして見る時にハもとが遊びといふものだがらそりやつと先キのいれみにならねへ様にしたいもんだョ今のその咄で思ひだしたが是なんでがいヽ遊びわつちなんぞアいたつて心安くさる所に表徳を雪峨といつて年頃三十斗で是もういふ寄ひけのはへたぐつとにがみばしつたいやみのねへ色男があるまづその男の様子といふ物ハいたつ

てしつかでマアどんな三太郎に見せてもいつも晝三かい以上とみへるひんのいゝ男サ共くせ女郎ハと云と大奴な極人のわるい女郎かすきであふもハいつも仲町へおもにいき〳〵したつけがあるときつき合ですそへいつた時久しい事だから内の名も女郎の名もわすれたがそのとき雪峨に出てきた女郎かあの土地での一番大濡くらいで大の奴でくらわれねへ深川はじまつての惡とふ女郎ダ元より雪がハ望む所なれバ大悅でいるときに女郎も大きにきたやうすでいかさまそれから三四度もいつてからあるとき又つれがあつていつた所が藝者の二組斗もあげてにぎやかにあそんでいる時つれのあいかたとその惡とう女郎と座敷で何をかはなしをする何をいふとかおもつて聞と共惡とうがいふにハだれとやらがわたいをかつぎにかゝつたわなあのてふゝにかつがれてつまるものかそんなのろい女郎衆じやアねへトかなんとかいふそこで雪がゝいふにハコウさつきから聞ていれば何をひとりしてふん次郎をいふのだそんな事をいつたあげくに手のある人が有てかつがれでもしたらいゝ見せ物だろふトいふとフウ雪がさんがおつりきに本をよむぜへめつたにそのかつがれるなんぞといふことハわたいらが関にやアねへ法サそれともにおまへがかつがれよふと思なはるならものアためしだかついで見なせへしとぐつとあぶせてかゝつたから雪がもまけねへ氣の男だからウゝかついでかつけねへ事が有物かトいふトウゝ面白〳〵おめへ男ならかついでみねへトいふからあとでかふけへしねへがいゝトいふと藝者共も

そこでなんとかかとか一ツ二ツしやれてそれハ先ツそれぎりになつて仕舞て歸つてきて又四五日立てから行た時例の悪とふがいふにハコウ雪がさんこんにやアかつぎなはんねへかかつぐにやアいゝばんだぜへトかなんとかてうす(ママ)やうな事をいふ其後も二三度も行所が行毎にかつがねへか〳〵といふから雪がハいゝあへましいうるせへやつだト思てゐるうちそれから凡日數十日斗も立てからのち雨のしよぼ〳〵ふる日大ぜいあとからいかふといふ物が出來たからいつもの舟宿から雪がハ外の者より先へ乗だして猪牙方から行て見ると其日ハあくとう女郎ハ客があつてしかもそこの内へ出ていて廊下であふとすヤ雪がさんよくきたせへしたといふから客人かト聞トあいトいふ開業かといふと初會でござへすが今客人ハ高橋迄いきやしたトいふさて其日悪とうが出てゐる客人といつは芝の方とやらの坊主客でりつぱな士を一人供につれて江戸橋あたりの舟宿からけさ晝前からきていかにも金まんな人と見へて未十把形で在組斗も上てわれる程の大さわぎて金をつかふ事水のごとく和尚大酒をのんで女郎も酒を乖のがかいたいといふ事でゐのにゐられてかの悪とうがでたもの〻其和尚ハ其日ハ何か用があつて歸がんじとやら遠くゐ所で逢てのゐてもしてそれからいかさまうかれだしたともいふやうな様子でこん夜ハ二人共女郎を何どまりゆつけて置て朝鐘をもそこへまたせておきの一寸今高ばしの雪がんじまでいつたの〻雪がハそれとハしらねへから大ぜいあとからくるはづだから初會の客でらもらへといふト

どふもしにくうござりやすけさつからきていて宵どまりを付て置て一寸いまいつたのだから御きのどくだがこん夜斗ハどふももられやせんトいふ雫がハ今まで行内についにそんな事をいつた事もなくけふはじめてもらへといふにもられねへといふものだからもとより短氣な男なればぐつとかんしやくをおこしてもらわれざアいゝけへらふト二かいをおりにかゝる所をあくとふ女郎が引留るをあふりけざまにほかしだしてずつとおりると女どもが四五人一度にむらがりかゝるをふりもぎつてかけだすとかしにハまた舟頭が仕廻いきらぬ家根舟へ雫がゝひらりととびのると悪とふ女郎がちらしがみではだしになつてしかもその夜は大雨で道がわるいにおつかけてきて舟のもやいを引ッぱつてけへす事ハなりやせん〳〵トわつわつトなきながら帯も着物もどろまぶれになつて留るうちからハ女共が追々にかけだしてきて口〳〵にやいやといつて留る近所でハけんくわが出來たトこしらいて人がばら〳〵でゝ見るからせつがハげへぶんがわりいわいべらぼうつらめはなしやアがれトいふ内もあんまり人がでゝ見るからかつこふがわるいによつてそんなら内へへへりもせうがほへつらをかゝすとも足をあらふ湯でもくめとしやうことなしに舟からでると大將の深手をおつたよふに大ぜいごちや〳〵とかじりついてつれてくる其手をぐつとふりもぎつてそれなり雫がハ飛だしてうらやぐらのほうへにげてしまうとそれ客人がにげだしたハどつちへいつたこつちへにげたと追かけてハ出たれども比しも月の廿日餘

りあやもわからぬしんのやみに雨ハしやじかゞをながすがごとくでそれちやうちんよからかさよと上を下へとごつたがいしてでそふどうのまつさいちうあとからくるやくそくの雪がゝ一座のてヱヽどもがいかふといつたせうがにやァ囃子にうしろハ見せんトかうして其数凡十人斗家根舟二そうでわつわつといさみにいさんで上ッてくる一座とハいゝから(ママ)はじめの雪がに引かへて大のはんかのなま通どもとふけんびたいに五分月代むかふはちまき横鉢巻あごからあたまへさかさまにはふかぶりをしたやつも有りあるとあらゆる髷場所通がいきほひきつて二かいへ上るとりやうちどに落やつて大こんざつにたつたとき何かハしらず門口でモシ／＼爰でござりますアヽアレあぶなふトいふによつて何だとおもつて是を見ると士のかたにかゝつてさつきの芝の御門さまがよつた程に／＼どこでのんだかとつちりものになつて足こしのたゝぬ程よろ／＼よろぼひながらけさもころもゝどろだらけで目斗頭巾も横にそれくゞりをは入るとそれなりに上りはなへたをれかゝるから大ぜいかゝつてふんやらわつと引ずり／＼二かいへあげると廊下のしやうじへつきかゝるやらざしきの入口の敷居につまづくやらやつとざしきへ引ずりこむト女房が口／＼にけしからねへどこでこんなに上りやしたへヱヽモウなんにしても御ねむし中がよからふといつて枕を持てきてねかすうちはや不審視ぶたそのいびきも鼓／＼と持てくるしまつて置たおなれば程なく二人りの女郎も出てハきたれど和尚様のあいかハ雪がゝわけ

が有物だからふさいで斗いるときに其内和尚様がたをれてゐたが小便に行てへト言だしたから座敷のなト士とよろ〳〵するのを引ずつてつれて行ときに雪がゝあとをしたつてきた大一座のなま通が是も小用のかへりと見へて向ふの方から一人くる時せまい廊下の行ちがいにそのなま通のかた先へ和尚がよろけてぶつつかるト約諾だから来てみると雪がゝいねへが気にくわねへでいづれもやけの勘八であいてほしやでいる所だからサアかつてんせう事かこのすりこ木坊主めなぜつきあたりヤアがつたトむなぐらをとりにかゝると和尚もよつている事だからナニヲうぬハといゝざまにそのなま通の鼻柱をひしやげる程にくらハせるとまたぶちかへそふとする所を　士ハ引わけるその物おとにソレけんくわト云はどこぞあれ残りのざしきのはんかどもが我おとらじとかけだすから多ぜいにぶぜいかなわんと和尚をこわきにひつかゝへていちもくさんに士ハもとのざしきへにげこむとつゞいて追くるなま通ども二人の女郎もにげんとすれどもせまい坐敷の入口を大ぜいにたちふさがれてにげる事もならずどをうしなつてゐるたへ廻るをはんかどもが坊主ちやらふも女郎共もかたつぱしからぶちのめせとすでにかふよと見へけるとき和尚ハ頭巾をぬぎすてゝずつくと立て大音あげ坊主だとおもつてあんまりいぢめてもらふめへおらがかつぐハ此くらいな物だトいふを見れバ和尚でハなくつてそれが雪がハどうだらふ昼間きた廷の和尚ハほんの坊さまでハなく雪がゝ近所にいるなんとかやらいふ畫かきだそうサ其ま

た供の士ハどことやらのやしきもので二人共に狂言のすじを言つかつてそん料でせうぞくをかりの雲がんじまで行とハいつわり實ハゑんまどふ橋あたりに仲宿をこしらへて置イて雪がゝかけだしてくるのを待てゐる雪がハ茶屋をにげだすと直にその仲宿へいつて和尚のせうぞくとすつぽり着かへてよつたふりをしてまた立歸つてきたものサ是を見るとと（マヽ）惡とふ女郎がわつトいつてなきだして下へにげていつたさわいかに遊にするとつてもかつぐノヽもほどのあつたものだけへぶんがわるくつてわたヤアァノ座敷へハ出られやせんこんなくやしい事ハござりやせんルト大聲あげてわつハツトなくからかみ樣も女郎どもゝみんながおかしさもおかしゝ腹もたつあんまりの事に內中のものが夢を見たよふな心持でゐる時にはじめのはんかてヱゝトいつたのも是もまことのはなかでもなく水茶屋や土弓場なんぞをはつてあるくやうなやすいともがらでもなくどれも一ツ個の通子だ所がなんにしても女郎があんまりくやしがつてわつわつトなくから大ぜいいつていなノヽとだまして見ても何ぶんないてばかりいてざしきへこないであとでみんなが是にあふきにこまつたそうサあんまりの事に亭主が見かねてしかつたりだましたりして二時斗の間いろノヽと利かいをといて聞せてゑんやらやつとの事でざしきへよこすとそれからのこらず一ツになつた所が十二三人の客にその女郎藝者から舟頭やうちの女や何やかで四十人ぢかくの大一坐となつてざしきを五間ぶちぬいてあふさわぎの最中へ初の畫書の坊樣が畫の

衣に引かへてこんどハぐつと羽折着ながしてどふだの狂言ハよくいつたかノト言ながらくると是を出てあくとう女郎が又にげだしていつたのをよふ／＼大ぜいしてつれてきてなんにしても内をさわがせたかわりに皆がゝ惣花をやつて夜中みんなが機嫌よく遊んできたといふがこいつハどふだとはなせバ客がかんしん／＼こいらが本の遊びといふものだらう通道においてハ近年の秀逸だ同じ花をやりながらも金をいかしてつかふといふハこいらだらふと両人ハのり地で噺ている時に先刻よりかたすみに二枚びやうぶを立まハし晝寝して居たる作者の艶二郎びやうぶの内でのびをしてにぎりこぶしをさしだせばあるじの法師が見つけどふだ氣がついたかトいふゆへ [ゑん]ナンダカバチヤくちや／＼トやかましいてエヽだぞと（めをこすり／＼おきいづれ） [客]イヤアとんだ人がねて居たのいつツからきていたのだ [主]ナアニタベ二人してうかれだしたナヨ [客]どこへ [ゑん]べんてん／＼ハトいゝながら田原町仕立の紙入の中からよふじとはみがきをだしてつかふ） [客]ハテ珍らしい所へいつたノウあそこハ下とくひ物ハ妙にいゝ所だトいふ内艶二郎ハたばこ盆へ指さしをするゆへあるじの法師はいふきをとつてやると是より又三人ハしばし夕べのはなしの内軒端をつたふ春雨のいとゞしつけきたそがれどき遠寺の鐘の音もしめりて雨の夕べの物淋しきにざんじに悪念發起して又ひとつめのせかいとなる

（此草ぞうし中来れけといへども帙数のしげきないとゑてこゝにもらしぬ猶別冊に著）

遊ふべの茶がら

畢

予此卿庭に樂寢の內二人の物語を聞侍りしを其儘に書寫し夕べ聞たる茶話にして夜半の茶漬のおもむきに似たれバ名付て夕べの茶がらといふ

艶示樓主人作

跋

夫雪は飛んで散亂すといへどもいまだふらず嵐に木の葉の散る頃柳原の土手を通り懸りしに茶店の隣に端書共取散らし商ふものあり傍にハ茶のせんじがらうづ高く積さもきたならしき店な近々泥中に蓮あり須原出雲寺に無きものもかやうなる處にあるらん呉服やに無き小切店に有が如しおいらんのおよバざる風味廿四文の辻君にあるまじきものにあらずと立寄見れバ此草紙あり捨置んも心なしと嚔苦茶唐と題して申の初春御きげんに備ふものなり

柳塘山人誌

仕懸幕莫仇手本

全

仕懸
幕莫
仇手本
前編

初段より六段目までふか川のせかひにならいよび出しの穴ナをうがつ

仇手本
後編
通神藏

七段目ゟ十二段め迄よしはらのせかひになぞらへしんの手くだをあらわす

兩册とも本賣出し申候

自序

猪牙飛で四天川岸に至り船頭陸を走て名馴の先後を争ふ相募る疳癪ハ判官が短慮に似たり閨中に由良が手管をめぐらし本藏が氣轉おむかひをしらさず件内が野暮勘平が色男狸寢入の角兵衛ハ目隱しと共に戀の闇にまよふ梳籠の小波道中着に京染の手際を見せつけおかるが髪指待人を占ふ浮氣の出居衆ハ夜打の坐頭と共にはだか也師直が性惡かほよに仇つき義兵衛が男氣年季を拔し善惡邪正の二巴合てひとつの世界となし前編ハ仇手本後編ハ通新戯大極二の理に分て北廓の陰巽の陽都て全部十一回わからぬ處ハ假名手本の書ならひ作者のいろはと見ゆるし給へかし

小金あつ丸

なべ

序

夕夜に大臣柱とあをがれ旦にやぐらの臺頭とよばるゝとも何ぞ遊びの花の可ならんか時世〳〵と鳴鳥の聲にアヽラ怪しやナア と客はうすのろ〳〵に魂を引もどされけふも幕なしのとふしに六段目のくぎりを忘れちよん〳〵幕のひときり遊びの店もんめ五分に仲上橋女の世界を小金あつ丸なるもの穿チ仕懸の穴より閨するに細き事市江がしうちもなどご及ざらん實に戀はくせものとてぬすみの幕の色仕懸に忍びの夜半の合語あまとハ小女兒の字にしてかわとハくらがへ買婦のから名なるべしと其本文の淸書に習ひて仇手本と名づく此後遍の通神藏ハのちほどおめにかけましやうさらばだア

山旭亭間葉行述

第一回

鶴ヶ岡山稲本楼遊宴

高野屋妓貌戯世界

第二回

若狭楼ニ而小波力弥ニ逢
本蔵松ケ枝ヲ切之世界

第三回
於屋形高直遠半相諍
於傈船頭勘平契世界
遠州屋
半兵衛

第四図

遠州屋半兵衛自腹之着
稲本ニ而薬種次郎悪世界

大星屋由良之助

第五回

勘平千崎弥吾と途中話

定九郎に逢暗夜泊世界

第六回

山家町與市兵衛カ隠家
慓為勘平勤奉公ノ世界

侠通左陀

附言

大磯化粧坂は鎌倉の巽に當て活氣色里なり昔朱蝶辨天何がしなんど風流世に雷鳴妓女もいつしかコンコ、マカリキの時花言葉と共に時去りぬされど名は今もしる所なりさかんなる哉若町の樓上美をつくしあたかも蛤町の辰巳樓かたゞしやお直しの蠟燭かしんきしん〳〵の連引にうかれて通ふ頑要息子つき出されたる外飾客送る女中に出る藝者朝直しのぶしやう貌霄泊のおもひがほ顏と〳〵の合せかゞみあわせてやるも勤の情てらしてやるハ妓女の達ひきたそやたそたれかハけふの妻ならんあだしうき世のあさづま舟よるべさだめぬうき川竹一夜のふしの涙枕朝に店衆を送り夕に色客をまつあはれむべしたが爲に切小指ほどはしる血ハ泪にまじへ一身を抛て生涯をあやまつも君がため春の野に出る若盛迷ふも一花さとるも一花ちらぬうちの樂し

ミなるべしさはいへ双ケ岡の色事師は花ハさかりに月は隈なきを見るものかハといはれしァ、千金も一夜壹分も一切歡樂の是非ハたゞ足ることを知るに有べしどふしたがいゝか我もしらず女中衆の口ぐせならぬもしちよつときいてめへりやせうとしかいふ

仕懸莫幕 仇手本

小金あつ丸著　神田

第一回

靏ヶ岡稲本世界

都而天地の間其理ありて姿あり姿ありて後名あるべしと古人の言葉故あるべし夫辻番の親父は長寿臺の低に居て火の見番のたかきをうらやまずといへど太夫棧敷の高きは上間棧敷の低を誹り屋形船の低は橋の上の人込を笑ふ高山の月高ふして望べからず五湖の水も深ふして窺がたし凸凹は世界の理也今日の理を以昔をおすにたがふべからずかのおとく女がはなのひくきハ高慢の高きに勝らんはな高さがゆへに尊からず高も低も戀の道頭を上て四ツ手駕を望み頭低て猪牙を思ふ朝に名を聞て夕に買とも可なりこゝになまくらならぬ鎌倉鶴ヶ岡八幡の山に二軒にかぎらぬ二軒茶屋ハいかなる理をもち其姿ありて後名附しやしらず夫が中に一際目だつりやうり樓稲本とて繁昌ならぶかたもなくけふも問くる客人は足利や義三郎ハあしかゞやといふ金持の一ト人り息子ゐしやう付多くの小册にゆづる　半兵へや助ハく

るかの〔あんしうや半兵衛〕（義かかみ出見世のていしゆ卅二三の色男也但シ遠州や）まいります〔高野や直右衛門〕（かうのやといふこれも義がかみむれわるもの也）助やはやくこねへか旦那がたがつねさつしやる〔若狭屋助七〕（若町わかさやこのわかいもの）たゞ今めへります菊ゐさんにあいましたただんなへよろしく（トかれこれいなもとへきたりドヤ／＼上る）〔女中〕ヤよしさん助どんよくはやくきたの〔わかさやすけ七〕けふはみちでおめにかゝつたからつれ申てきた〔女中〕丹やどしハ〔わかさや助七〕今に内へそういつてやつてくんねへ〔女中〕おめへ内へよらねへか〔わかさや助七〕申うらをとほつてきた（トこのところおきだまりのさかづきいでまづさんばそうにたまごやきできたをもつてくる此ところのふう也〔あしかゞや義二郎〕たまごやきをひごいにくわせよう〔あんしうや半兵衛〕たれぞよびにやりましやうか〔かういや直右衛門〕すけが思ひ入があるといつた（トいふところへ）〔若狭や介〕おわかさんをよび申さぬまへにちよつとこのまくで　この比出なさるかほよさんといふうつくしいはなりを一切よびハどうでござります〔あしかゞやよし二郎〕それもよかろうほかのものをよばずにこゝハそれ一まいであとをわか丁へひきだうぐハ〔わかさや助〕直さん　どうでございましやう〔高のや直〕おもしろからふ／＼〔あんしうや半〕いかさまね　ト（此かほよといふハ江戸げいしやにて半兵へとふかき中なれどこのころわか丁へでるゆへ此一座これをしらず）〔若狭や助〕コフ／＼（ト女中をよび）内へそういつておわかさんハたしかけふハひるじめへでゆめもとにあるからあとをつけてそしてかほよさんの口をかけてすぐには

ここハこつちへもつてこいといつて〔女中〕アイしやうちサ〔わかさや助〕これさまだいふことがあるとり居
町のかまくらや（これハよし次郎がふなやどなり）よしさんがおいでなすつたといつてやれといつてくん
な〔女中〕アイ（ト行このうちおひ／＼さかなも出るわか丁よりかきやのむすめぶんおきせかほよきたるあしや
う付くだ／＼しけれバ略す）〔かほよ〕助どん（トいへてこし次郎にむかひ）あなたよふお出なはいました
〔娘ぶん〕よしさんへけふハなぜはやくお出なはいました〔あしかゞやよし次郎〕ナゼはやくハこねへものかこれ
見やけふたばこ入のしたておろしだと ねづみがハのきんとに大江山の一しきにてねつけハかぶと也）〔女中〕
チヤよふございますねえ〔かうのや直右衛門〕きめうだろう〔あんしうや半右衛門〕たんなハごふせいなことがおすきだ
〔わかさや助七〕さやうさ（此かぶとのねつけに名かうが入てある其たしところ一向しれずよつてたかつていぢつて見て
もしれずとう／＼かほよがかき出してすこしれなハてあける）〔あしかゞやよし次郎〕これやすきつい〔みな／＼〕ハヽ
ヽヽヽは〔娘ぶん〕かほよさんハよくめつけなはつたのふ〔あしかゞやよし次郎〕一ぱいさそうと（かほよにさし付て
はへ—うぎをやる）〔かほよ〕ちとおさわいこれハおありがたふ〔わかさや助七〕おさハいやすはハやま
〔みな／＼〕めうだ／＼〔あしかゞやよし次郎〕源吉ハ子どもやになるそふだの〔高のや直右衛門〕はたらきものだの〔あんしうや半右衛門〕
これへだあなたごりけハヽで名トとふたり馬にのつていた〔わかさや助七〕いへあのお子さんものつてお
出なさいます〔かほよ〕ついぞねへよしなヨ〔娘ぶん〕にくいくちだのう（トこれなしばらくしや

れときなうつしミな〳〵わか丁わかさやへゆかんとたつ）〔あしかゞやよし二郎〕サア〳〵いゝか〳〵〔かうのや直右衛門〕せハし
ねへだんなハいゝだすとまてしばしハねへ（ト直右衛門かほよに大きにほれとかくじやらつきたがる）ちよ
つと小やうといふところだ（トたつてだい所でさら〳〵とはながミへ文なかきくハゐ中する）サアよし〳〵
（ト八まんのとりゐざかの人ぎやうやのまへあたりなぶら〳〵くる）〔娘ぶん〕かほよさんあれミなかわいゝ
人ぎやうがある〔かほよ〕ほんにりふほしひよ〔かうのや直右衛門〕だんな一ツかつておやんなさへまし〔あしかゞやよし二郎〕
どれでも気にいつたのなとつてやりやな〔かほよ〕オヤうれしいのふ（トこのうちこな〳〵さきへぶら〳〵
ゆくかほよと直右衛門あとへのこる）〔かうのや直右衛門〕かほよさんちよつとはなしがある（トとりゐのわきへよび）
〔かほよ〕なんでござへますエ〔かうのや直右衛門〕なにさ（トいゝながら　さつきからのしうちでてへけ
エしれそうなもんだ〔かほよ〕なんでござへます〔かうのや直右衛門〕なんだとハどふだなおれもかうのやの直右衛
門だア一ばんいゝ出しちやアいやかおふかへんじをきかねへけりやアすまねへ〔かほよ〕どふでもいた
しやしやうからまアあつちへ〔かうのや直右衛門〕そのてもふるい〔かほよ〕アレサおめへさんでもねへとちうでい
わづともなる事じやござへませんか（トそつちこつち直右衛門わるくじやらつき　いたりなにかかほよも
ぐわいぶんわるくまつかになつてこまつて居るところへ）〔わかさや助〕かほよさんなになしてゐなさるいゝ
かけんにきなせへエ（トいふにびつくり）〔かうのや直右衛門〕（さつきの文なかほよがたもとへうちこみ）コレすけおれ

がアつかつてつれて行になにやかましいことがあるもんだ（トすこしむつとする）「わかさや助」それでも旦那が見てこいあんまりおそひとおつしやりますからサ「かうのや直右衛門」てめへが口をきくにやアおよバねへすつこんでいろェだんなハねかそうがおこそうがおれがすきだ「わかさや助」（ちよつとして）アイはいしやしゆハわつちらがあづかりだからよびにきたのさ「かうのや直右衛門」（にらみつけ）口ごうしやすなにヲ

チヨン〳〵〳〵

第二回　若町若狭屋の世界　附リ　本藏表裏の松ゲ枝

（こゝにゑんしうや半兵へが店内大星や由良之助が子力彌と云はことし十五の色わかしゆ由良が手紙をもちこいわかさやへきたる）「力彌」これをと出す　女中（ハイ〳〵てうばのきハにおいたこども二三人かみさんに咄をしていたりしが其ノまゝ立なつてやから出る小なみ力彌に見とれてゐるたゞしまだこれも十五斗りのおぼこ育ちに、はづかしそふ也力彌をこゝろふしへつれ行こなし〳〵いやがる力彌に一人りかわせんとかれこれ女中ミ見ーこ小さいわい今となせやの小なミさんといふ娘子がおいていなさるからおとなしくていゝずたからとむりおたいきはめと

うく　納る）［力彌］わりいことばつかりトしちにとられたやふに　もぢ〳〵してゐる）［女中］
（ちやを二ツ　）サア小波さんお出よ（ト出ちがひながら）
と（せなかをたゝく）［小波］しらねへヨ（トうれしそふに　ゐしやう付りやくすたばこ一ぷくのみ又一
ぷくつけてアイト出しかんりやく　あてながら見ぬやうに見る）［力彌］（モ見ぬやうに見て
ついかほ見合たがひにつこり）［小波］あいね（トいつてだまつてゐる）［力彌］エ（トいつてこれもだまつ
てゐる）［小波］（しばらくあつて）［力彌］
［小なみ］へ
おめへはんを　やせさせる人もあらふかねへ［力彌］こつちばかりやせるのサ　ト（なか〳〵お
やの子なりしばらく小なみも新ぞうゆへいふことにこまりわつけもないところで）［小なみ］モシヱあの人ぎ
やうといふものハかわいゝもんだねへ［力彌］とんだことをきくのヲ［小なみ］いんにへけふかほよさんが
きやくしゆにかゝつてもらつたといつてもつてきなはつたからさにんぎやうでさへかハいゝからほんと
うの子ならなをかわいかろうね［力彌］そうさ　［小なみ］わつ
ちがやうなもの　［力彌］　［小なみ］（フヽウトわら
つてゐる）　わつちがねがいがかのふかねへ［力彌］そりやア品川のうらないにでもきくがいゝ

小なみ ほんにさ 力彌 たれもうそだゝアいわねへ 小なみ ヱヽモじれつてへヨ（トきせるをほうり出す） 力彌 かわいそうにきせるのしつたこつちやアあるめへし 小なみ それでもはらがたちやす

力彌 わつちもねがへがあるネ 小なみ なにがへ 力彌 こんどのとにしやせふ 小なみ こんなうそな事ハねへヨよふかしこんだきなささりそふなとだおかしいヨ 力彌 こんどきちやアわるいのかへ

小波 そふじやアごせへせんがしよせんおよびもねへとさ 力彌 およびのねへのナ思ふからねがいサ 小なみ じれつてへわたいがほうでサ

〽（りやうりばに一料理人本蔵其外女中などうへさとり〳〵） 女中 アノりきさんはいゝ子だのふ 娘ぶん 小波さんもまんざらでねへやうすさ わかさや助七 コフ本蔵きかつしけふもあのかうのやの直めへいめへましいあんまりおそひからかほよさんのむかへにいつたらごふぎあつくなつておれにくつてかゝるやつさなにあのしはんほうがあしかゞやのよしさんのかみであるいてついぞ一分もくれた事もねへヨシ〳〵あしたよしさんのやかた船がでるはづだからへこませてやらふ

本蔵 イヽ〳〵したがはらをたゝせてしかたがあらふとしばしかんがへ（にはのまつの小ゑだなりやうりぼう丁で切ておとし助がまへゝほうり出す） わかさや助 コリヤア本蔵なんにする 本蔵 、こはいろでいだいの物のせめ道具すへはりとおやりあそばせ わかさや助 （おなじくこは色で） 本蔵できたと（にらむ）

〔女むすめ分〕中皆ミホミ〳〵〳〵〳〵

第三回　屋形闘諍
附り　おかる勘平啀し合の世界

（こゝにとりゐ丁さぎさかやといふふはやとゝハかうのや直かいりつけなりせんどう伴内あい日にてけふハあしかゞやの義公がやかたぶれいの大一坐あれハ直右衛門ひゐきゆへ伴内ともつれんと来）〔高野や直右衛門〕伴内うちかけふハかまくらやから旦那の屋形がてゐからてめへもやゐつもりにはなしておいた〔伴内〕そりやアありがたふござりますときにおめへさんこのあいだおはなしのかほよハありやア江戸けいしやで此きんじよの太夫の妹さこつちにゐるゐうちゐふんしうやの半兵へが色事の大きまりさ〔かうのや直右衛門〕そりやアほんの事か〔伴内〕ナニおめへさんにうそをつきやすものか〔かうのや直右衛門〕ムゝよし〳〵しかたがあるけふの屋形の事をあの半兵ハへだんまりで行と旦那あへハかほよがところへいつてこれへといゝのあいつをしくじらせハどふだ〔伴内〕それじやアおめへさんのお手にいりやす其ときやアむすめぶんのおかるにはたらかせやす〔かうのや直右衛門〕うまい〳〵　ト（はなしてゐるところへわかさやいりやうりばん本蔵けふのやかたで助がけん〳〵は

でもせぬやうにと直右衛門作内へはむきの重づめなどもち来る） ［かうのや直右衛門］本蔵なにしにきた ［作内］本公きさつし ［本蔵］ときに高野やの旦那これハ私がちよつとぞんじつきさけふはまた助がめへりますがなにかきのふ直さんへぶてうほう申たそうでござります ［かうのや直右衛門］ナニいゝゝそんな事をきにかけるおれじやアねへ ［作内］旦那ハつうだア ［本蔵］よろしく作内さんたのみやす （トかへりそうにする） ［かうのや直右衛門］本蔵〳〵けふい屋形の世かいを見ていかねへか ［本蔵］ハイありがたふござへますがあしかゞやのだんながなんともおつしやりませんそして助もめへりますおかるさんもついてゆきなさる内があきます ［作内］そりやア直さんのおねにある ［直］いゝい旦那めへハおれがしやうちだいゝよふにいふハ内のこともおれがむりにつれていつたといへバだれもなんともいやアしねへサア〳〵 （トむりにつれ立三人ともかまくらやへ行くすでにかまくらやより屋形のしゆかうぜんつくしびなつくし足利やのよし公をまん中のきしきにすへつき〳〵のおはい〳〵高野やの直其外若狭やの助本蔵むすめぶんのおかるみな〳〵大さわぎにて大川へのりいだす） ［よし］おかるやかほよハけふハどふしたの ［おかる］ゆふべからりうがしなはるとつてやうじをつけて引こんでいなはいますがけふハちつともよけりやアぜひあとからお出なはいますはづさト このうち助がきのふの本蔵がきりし松がへのだいのものを直右衛門かまへゝいだし ［助］直さんこれハあなたへと出す ［直］（もけさ本ぞうがつかいもの又わかさやの助がだいの物によんどころなく一分）それ助

（トやる）［助］（は思ひの外一分くれしゆへつらのかハなむかんと思ひし事まちがひ其まゝにしておく）［助］これハ（トいつたばかり）（さてふんしうや半兵衛ハおくればせにきゝつけ大きにせきこみてまへのふなやどはやのやへむかん平にちよきないゝつけうできりおさせやかたへのりつけろ）［半］モシ直さんうらみだぜしらせてくんなさんねへ［直］とんだ事をいふぜ二八ゆふべもけさも人をやつたハヽアきこへたかねての色事かほよが所へゆふべからお出のそれでるすかハぬしやァふなを見たやうなこぶまきのにこどりがすきだのふなおとこめちつとたしなまつせへふな／＼しなさんな（むつとせきしが義二郎がまへなかれかほよがことなどいわれむねんなこらへてゐる）［直］成程色男だぞ［半］いろ／＼なむりな事ばかりなになを（トかれこれむつかしそふ）［義］なんのことだそう〴〵しいマアのめ／＼と（さかづきを半兵衛えやる）［半］（はいとこつぶ゜なうけてのみ゜）助こうさす（トなげるふりにててうど直がうつむいたみけんへうちつけ血ながれる）［直］半兵へわりやア［半］そゝうだふしやうしやれ（トそうとふになる本蔵とめる）〽つきそひきたる娘ぶんのおかるハせんこくはやのやのかん平がちよきにてきたりしとき半兵衛やかたへうつるすくにそのふねへのりむかふがしの茶やへ船をつけふたりながらはなしてゐるゆへ此そうどうを一向しらず）［勘平］ときにてめへあすのばんにやァぜひかのものが入からもしできざァおびでもかしてくりや［かる］おめへまたしんちへでもにこぶのか久しいもんだ［勘］手めへもいゝきな事をいふぜへ［かる］いゝきよりおめへがいゝむし

じやアねへか [勘]べらぼうめそりやアそうとかみさんがなんぞといやァしねへか [かる]なあにおらがかみさんはわかつた人だヨあんなどうらくなていしをだんなさまとあがめておいてほんにはかな〳〵しいほどだわたいといふもんだ [勘]ミつさんも此ごろ松田やへ色事ができたそふだ [かる]それ見ねへそふいふことだものおかミさんがきをもむはづだ [勘]此間なんひやの二かいからてうじやの女郎しゆとはなしをしてゐた大ぬしの富公もいつしよにいたつけヱそりやアいゝがおれもつまらねへいつそてめへといつしよになつてひとかせぎやらかそふと思ふよ [かる]わたいもおよさいハねへわナこねへだもとつさんにやアいゝにくひからかゝさんにあらましはなしておいたがマアあすこをにげてのうへでどふかしやうがあらふわナ [勘]しづかにはなししやきこへるぜへそしてあのばん内やらふがむねきだからけどられねへやうにするがいゝ [かる]そりやアしやうちサいけねへひつらつこいすかねへつちやアねへどこぞじやアわたいが作内どんのおけあしをとつてやらふとむねのしたじめをしつかりとしていやすあんしなはんな(おりからセツのかねきこゆる) [勘]じッだそふだけふしくじつちやアさんだんがわりい [かる]ほんにのふ(トふたりながら茶やをいでちよきへのる所へ) [伴](おかをかけて来かしより)勘平〳〵大事ができたマア船をつけろ [勘]なんだいけそうな〳〵しい [伴]なんだどころか伴兵へさんが高野(かう)やの旦那のあたまをぶちこはしたァ (トきいて両人びつくり) [勘]どふいふわけでと(ふねをつける) [伴]

（のりうつり）わりやアそのそうどふもしらねへでおかるさんもてへげへしれたもんだなんのためにきやくじんについてきたのだいまいつたとてまにハあわねへかん平わりやアおかをいつて内へしらせろおかるさんハおれがあつかつてわかさやへおくりとどける　勘も（しよせんやかたへハいかれずかけおちとこゝろをさだめ）　やかましいうつちやつておけおかるさんハおれがとどけるわりやアけへれ　作しのごのいわずとおかるさんをおれにわたせ　勘たあごとつくなと（つかみあいけんくハとなる）　おかる（なきごへになり）あれ／＼あぶねへわたさんな事をいつてるるひまにおそくなる伴内どんおめへハかへんならおそくなると勘平どんもしくじるわナ（ヘカ）　作かん平がしくじるにかまふものか　勘だまんねへおかるさんまかりちがやア二人りでかけおちするぶんだ　作うぬにおかるさんをやるもんか　勘おきやアがれあんどうなと（いなかへちよきぶれながれいづれバてうどふかみへ伴内を）どんぶりこヅブ／＼／＼／＼

第四回　遠州屋半兵衛地腹ヲ切

山の稲本さハぎの世界

かほよ（としは十七斗り道中着をさかへてとこ着柳しぼりのちりめんのゆかたははな色さなだのしたじめしろちりの下帯かみハかみゆいのおますがのちにくるつもりででしのおなをがすいた斗りむすびあげてゐたるまゝ半兵へハ一かたならぬきやくゆへそのまゝにてべつかうのつくりもの五六本さしくるとこのうちにはらばへになりたばこのんでゐる）半兵へ（なるみしぼりのかほゝおかしゆかたをきてねころんでゐる）半コウてめへこねへだかうのやノ直に山でいちやついてるたそうだの かなにそれわだいがはじめてよしさんのざしきでいな本へおめへもきなはつた日人ぎやうをかつてもらつたときあとへのこつてなんのかのとひつッこくいふをひとも見るけいぶんがわるひからおつふあわして 半みんなきくにやアおよバねへそれになにもてめへがへんじをやる事があるものかへてめへがしまだのもつといを一ツどつこいとしつちめれバ一も二もねヱりくつだあのやろうがむねきでよしさんのめへでてめへがことをいゝだしてきのふおれをしくじらしやアがつたてめへハおふかたあれにでるきでへんじをしたろうけふじばらできたのもこのわかちをつけにきたのだろようらしくぢばらをきつてぜんせいのまねをする事もねへがいまさらてめへに長さほにされちやアうまらねへからこつちからりつぱにしてきれてやるハ かおめへもうたゞいぶけハ事ばかりへんじをやつたわけハわつちがほうでもおめへとのわけがあるからしらせめへと思つていたこのうたでおもしろおかしくはじしめてやつたのだハななぜそのやうにおめへハぐちに

なつた 半 おれがぐちよりてめへがあだほれをするがきがしれねへ（トいふうちあしなときこゆるゆへだまろ） 女中 もしへあけてもよふございますか かり おくらどんかなんだ 半 あけてわりひがかんにんしてやろう 女中（うちへはいり）あのやくしやの治郎さんと石やの馬さんとやらがおめへさんをたづねてお出なさいました 半 なにやくしやの治郎がきたそいつハ高（かう）のやがまハしもんだ石やの馬ハやくそくだからくるはづだそれじやアきうに大ぼしやまで手紙をやりてへ（硯とりよせてがみしたゝめかれなとりにやる）見とふしにゐるかとしたくして出かゝりかほよてめへ出ちやアわりいなをしてまつていろやまへつれていつてどふかはづして治郎をけへそふ かり はやくきなはいしョ 女中 そふしなはいましと（つれだち見とおしへゆく） 半 おそろいで 治 ときにあい方ハだふした 半 あけてけへしやしたこれから山へでもいきやしやう 治 なぜ見せねへだれをよぶ 半 ナニつくいから此此でる小糸サ ト（しらなきる）〳〵（サアノ〳〵とつれだちいなおとへ行この所まはり仕掛にて二けん茶やいなもとゝかわる）〳〵（石やのうまハけふ半兵へがすばらなきつてきたりしなせうちゆへあまりむだをさせじとてなあてるやうにおもふ）治ハかうのやゆまハしものにて半兵へにちばらを切らせおもいれつかハせしうへにてはじなあたへふたゝび此とちへこられぬやうにせんとたくみいろ〳〵このみごとをいふ） コレなんだしほのからひものばかり出して切おとしてべんたうをかつてもこれよりくへるぜへなんぞもつと出さねへかしミつたれな 本（こいう

かれてゆらが方へ手紙をやりしゆへ太夫はをり大ぜひよびにやりわかさやへつめさせおきけれどゆらがきたらぬゆへ金びらがきらされぬゆへまたせておく）［治］どふだけいしやハねへか［馬］いまくるやかましい男だ（なにかまぬけになり半兵へハきをもみかれこれてまどりしゆへ治郎あくたいのまきものをならべたて半兵へをおろしざしきをけたてゝかへりけり）［治］おらアけへらアおもしろくもねへ［馬］マアまたつせへ（トとめてもとまらずかへる半兵へもくやしがりはぎしりをしてゐる所へ治郎とすれちがひに大ぼしやの由良金をこしらへかけつけたりしが此坐敷のやうすを見て）［半］ゆら公か［由］ホイ［半］おそかつたざんねんな

カチ〳〵〳〵〳〵

第五回　勘平定九郎

てつぽうの世界

向よりくるハでうちん（勘平すかして見て）［勘］イヤ千ざきやの彌五さんじやアねへか［彌五郎］（ふりむきとくと見て）そふいふこへハ早野やの勘平じやアねへかどふしたマアどこにゐる［勘］おめへにおめにかかるもめんぼくねへがわつちもおかるが出入でいまにひるハでられやせんからよるばかり用む

きに出やす 彌 そりやァきのどくだおれが大ほしやのゆらさんをたのんでやらふからちつともさんだんをしてあつちをかたづけてもらふがいゝゆらさんがのみこめバ半兵へさんの方もいゝわけをしてづいぶんできる五十めや百めハ仲間でもしてやられるハ 勘 そりやァありがたふごぜへますそんなら又おかるともそうだんして見やせうこゝハともうだによつてどふぞおめへわたしが所へおいでなされてくださいませんか 彌 あしたいつてやらふどこだ 勘 アイ山家町でけだものやの與一兵へとおきゝなせへし大やハ角兵へと申やす大やの角兵へでも狸の角兵へでもじきにしれます 彌 そんならかならずつがふしておれもいそぐから 彌 さやうならト

引かへし

與一兵へ （かん平がおかるとにげてきてゐるかくまつてハおけどおかるがほうがかたづかれバかん平がみもあかるくならすといろ／＼とそうだんしおかるをよしハらの一文じやへうつてもとおやかたの方をかたづけかん平がみをたてゝやらんとそうだんに行かへるみちに定九郎（おのやのむすこなりしがかんだうされてこのごろハゆすりかたりをしてあるくおやぢを見かけあとよりい おやぢさん／＼もしへ（トよびかけとふ／＼みちづれになりむりむたいにおやぢをさかやへひきいれいまぬきけをすゝめてよはせしまの羽織とはながみぶくろをひつた

くりすいとくじとする〳〵（かん平ハ彌五郎にわかれかんがへながらゆくむかふより定九郎ハおやぢのはなりなふちころしぶら〳〵きたりかん平にあいむりに引づゝてつぼうなひやかしに行）[勘]おらァこんや用がある[定]うつちやつておけかまふことハねへ（ト長やへはゐる定ハてつぼうつうなり）[理八]どうだゐじばん[何八]定さんでへぶいゝけんきだの（トたん〳〵一けん〳〵むたないつてあるく）[定]コウおかぶへくゐやらうハゐのしゝの八だぜへかんこうなざァあぶねへよけてやるがいゝぜへ[勘]ムヽなにしつていらァなんのあいやらうがおらがおやぢのなかまのゐるものだたァごとをつくとぶつてしめらァ[定]いなりだうのたまがよつほどきてゐるぜへ[勘]ウヽあのあちらのながやの中ほどにゐるあまハいゝつらだの（トいゝながらくるゝ定がなじみ[玉]定さんよんねへ[定]やつあたりやァごめんだつれがあらァ[玉]いゝわなとなりのお金さんもひまだ一所にあげねへな[定]そふしべェかかん公あがらつし久しぶりのお金さんならおれもきがあらァ[玉]あつかましい（これよりさけさかなをとりよせ定九郎大きにゑひてくだらぬくだをまく）[定]コウ勘公きかつせへはへェはなしがあゝこふだそういつちやァおかしらしいがほんのこつたが三百六十よかんにちゑごれあめゆきのいとひなくこの長やへはゐりこまつてゐるからにやァどのながやのどの女でもこいつのきゞらいハこふだあいつハどふだといふ事ァ田つかひのからくり人ぎやうじやァねへがまゐへのあけさけでもしつていらァぬしなんさァせんどうしやうばへてふか川へはかり

いつたもんだがたかい女郎だつてきんのいつかけがしちやアねへやすい女郎だつてゐてきちへくさがはへてけへるがとびでもしねへもんだたとへせつちんのへちまがやねうらへてん上するほどからんだりくつがあらふとまゝ心いきにけしつぶほどでもわかつたところがありやアなんにもいやアしねへそのかわりまかりまちがやア 玉 おめへゑ(酔)ふとひさしいもんだいゝかげんにしねへ 定 だまつてきけへ 勘 いんにやぬしのこゝろハせうちしていらァ 定 コウ〳〵まづきかつして八平らくじやアねへが辨けいがやろうになつて七ッどうぐのやりくりではかまアはいとこう(てか)ほうがあやまりじやうもんをかいてこようがとまわりのほんじやみるやうなわからねへせりふじやア定さんの虫がかつてんしねへそふじやアねへか 金 定さんいゝわな 玉 おめへハでへぶならべたてたのろじがせまくつていきとをりのじやまにならハナいゝかげんにならべて置ネヱ 定 やかましいわヱおりよやうをハ七ッすぎのくろばふてへ(ほぶて)をみるやうにてめへでへぶうすつぺらにとりあつかふな 勘 よしサおれがのミこんだよ（トかわこれしづまり定九郎こまものみせなだす） 勘 お玉さんくすりハねへか 玉 こゝにはながんぶくろがあるよ（トいだす） 勘（とつてみてはておやぢのによくにたとおもひながら中のはんごんたんとわちうさんないだしのませる）どふだちつともいゝか 玉 ねるそふだうつちやつておきねへ（トかん平ハ思ひいまゝにてつぼうのおこりた定九郎にあくふとやらかしだんまりにて先へかのかみ入もわすれて入て歸る） 勘（外へでゝ）大ぐ

はんじやうじゆチら丶丶―

第六回　山家町

けだものやの世界

［おかる母］もふかへられそうなものだのふおかる［かる］あいさ勘平さんもかへりそふなもの人にばかりきをもませていゝきだぞと（トはなしてゐる所へ二文じや　才兵へどふだおやぢどのハかへられたかゆふべやくそくのとをりおかるどのをつれにきた［二人］まだかへりませんいまもはなしていました（トいふ内かん平かへる）［母］おかるかへつたなんだどつからきなすつたへ［才兵へ］おめへあのこのてへしかゆふべおやぢどのにさうだんしたがおやぢどのるすでも此しやうもんでよかろふいさくさハあるまい［母］（トてあんぎやうたあらため）なるほどよふござへすおやぢのはんだつれていきなせへ（トいふとすこしふさぐ）［か］かゝさんそんならたつしやでいなはいしかんのんさんへでもきたらよんなはい（トすこししほるゝ）［母］ずいぶんたつしやでいやと（なみだぐむ）［才］（サア〳〵とせり立かごにのせつれゆく）〽（引ちがふて大やの角兵衛さきにたち大ぜい長やの同行衆中おやぢをかたにかけ［皆々］これは

さかいてうへあさ參りにいつたらまだうすぐらいにおやぢどのがどこのくにゝゐいきつて大どうにねてゐられたからつれてきました　角 まづくすりでもしんぜさつせへ　皆々 やれ〳〵與一兵へどのハ久しぶりでよわれた（トいゝすてみな〳〵かへる）母 とほうもないゐいよふはなりもかゝ入もすてゝきてばか〳〵しいと（おくへつれ行かいほうする）へ　おもてより 千さきや彌五郎　原の郷右衛門（ずつとはいり）彌 どふだかん公さんだんハできたか　郷 でへぶにぎやかだがなんだとりこみだの　勘 ナニおやぢがよつてきたのサア〳〵あがんなせへ（トはながみ袋をわきへほなりだしかた付る）母（かみ入をみつけ）此はな紙袋ハどふしてもつてきた　勘 それかへほんに定さんにゆふべあつて定さんのをあづかつてきやした　母 ムウ　勘 サア〳〵どなたもこつちへときにごじぶんハどふでござへますネ　彌 いまくつてきた　勘 一ぱいあげてへもんだなにもさかながねへす（よし〳〵ある〳〵すいものさかなをトにわへおりまないたにほうてうをいだす）郷 コウ〳〵かん公かまわつしやんな　彌 なにをするのだ　勘 今勘平がたらをきるのサ　二人 おきやアがれ

是より後篇　青樓(よしはら)一文じや

中の丁一力(いちりき)やさわぎの世界

七段目〆廓(よしはら)中のしやれ十一段目

まで出來仕候さやうに御らん可被下候

カチ〳〵〳〵

自跋

猪牙は茶船の遲を笑ふ茶船は猪牙の危を誘る危に乘るは首尾の安を思ひ安きに乘るは先をとらるゝの不覺をしらず爰に是ならんもの八彼所に非也予是にならつて仇手本の戯書を著述す全く浮氣をすゝむるにあらず實前に利有て後に危をしめすと例のきまじめをあつ丸ミづからばつす

神田

滑稽

埜良玉子

全

埜良たまご叙

滑稽詞曰。かへる〱と。野良の雞卵じやァ有めへし云云。其名を擇て。標題に蒙しむる叓。娼妓客を暖て歸すを以て。如是命たるものなり。夫牛の刀を用ても。衣〲の雞。引割て玉子辻にせんと欲し。斷の竈。正旦の刻ハつくらざれ共。是も山椒醬油に煎附られて。寓坐の眞物食となること。學女良の好意に雞卵の於客。其精分を補んが爲なり。苦界のつとめハ。恰雞の如く。傾城則雞情なり。是を以て。悋氣の燒玉子あれバ。志操に彫る。うで玉子あり。粪拔の雞玉の頰輔に。自慢をつけてあがりま

せと。並べたてたる家臺廓。熟れ玉子の君が爲にハ。寒鷄卵農尊きも。鵞の玉子の卑も。倶に望ふ。雛の鳥と契らん事を。これその。くだかけを以て。天を窺ふの類ひならずや

十偏舎一九誌

敬貞

干時かのとの酉はつ春

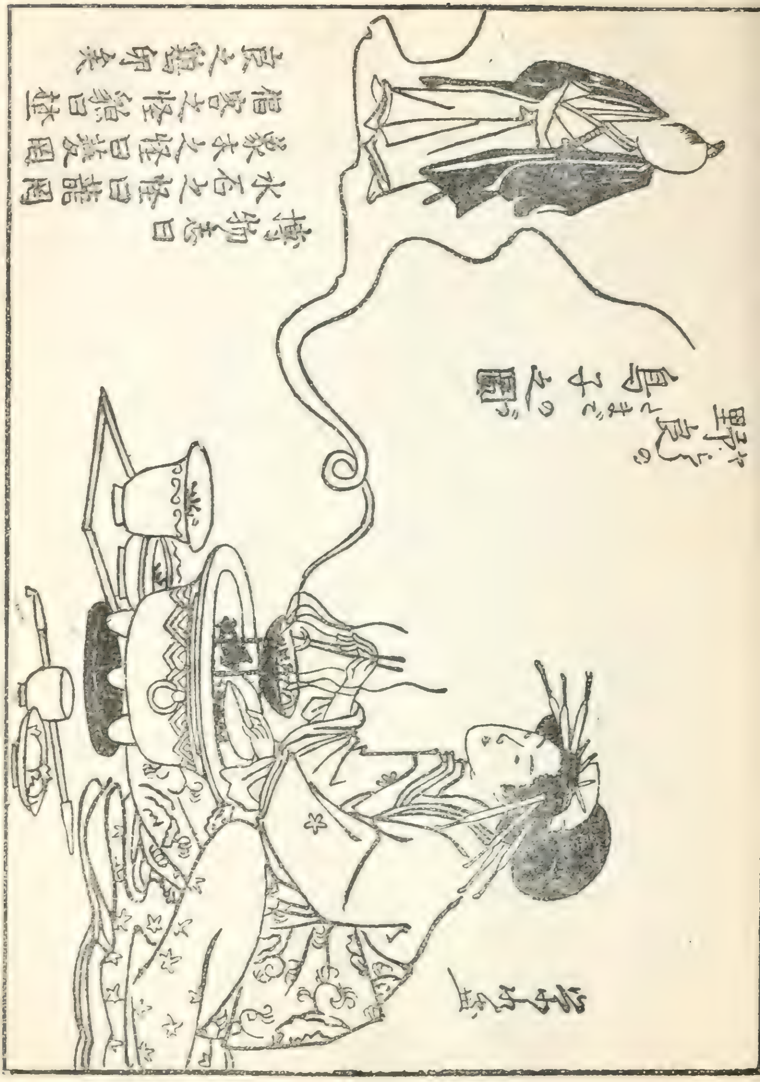
附標簽詞

唐詩稱遊冶郎謂少年俠客也今題楚良玉子若強罔依歸去俚言矣飛兮刎兮轉兮余意々々拍掌則爲使金錢交干滑稽本也

青樓曲

對雪青樓越女幽
晚風吹來多貴遊
已看今年叢春色
萬戸珠簾捲上鈎

靏鳴樓主人



○知つた風の不問物がたりハ
　初會の一口物に思ハず頬を燒玉子

○おとなし風の寐物語に
　うかれて迷ふ傾城の夜をふかし鳥子

○聞いた風の百ものがたりに
　丑ミつ頃からけへる〳〵と野良の玉子

野良の玉子　十偏舎著

第一章

大通直うして髪の如く。野暮曲つて鬢張の如し。娼妓ハびんつけ油のごとく。於客ハすべて天窓の如し。夫あぶらをいふとハ。京の島原浪花新町の通言にして。吉原にも又。百助が枸杞の匂ひをときめかせ。梅花の艶をいつてハ。朝帰りのおくれ毛をなでつけ。或ハ。べたついてうしろ髪をひくあり床がけよりハはすがけの。あたまかくして尻かくさぬ。客の油断に毛氈を。かぶつたせうこの赤がしら。誰取あげるものもなく。あたまがちに遣ひし身の終に天窓ごなしとなるハ。皆あたまから。しれたことなり。爰に月代の青黛と狂名をついた男。年の頃ハ廿八九。ちとおそまきながら。藍上田の小そで。おなじ羽折。連ハ宝次郎廿二三。黒紬の小袖ハいやミなれ共。京染の新しきにかへつて顔の色をしろくし。格別の人がら。羽折ハねごやちゝぶに。染ちんばかりも。廿匁から出したといふ。みぢんあられ。今ひとりハ太助。こんとめの三すじだちに。紺の和どろめんの羽折。いづれもあきんど風なり。巴屋の太々講より無分別を出しぶら／＼と出かけ。まだ日ハ高しと。青黛がなじミの田町あたりの水

ちや屋に。こしをかける 〔靑〕もふ七ツだろふね 〔茶や女房〕イヱもふよほどまハりやした 〔太〕そふだろふ。巴屋(ともへ)へ參(めへ)つたハてうど晝時分(ひるじぶん)。それからお梅(むめ)がおどりを三ばん見ますし。さくら川がはなしをさいたり。そふして。こんなにのたまくになるまで，たべたことだから。てへ〳〵。ひさしいあいだじやアござりやせぬ 〔靑〕それでもまだはやい。ちつとのことで晝夜(ちうや)をくちつちやアあやまるぜ。ノウ定(さだ)公(こう) 〔定〕ナニぶら〳〵めへつて。中の町(てう)でたべやしやう 〔靑〕それがいやだよ。みす〳〵こけをおしむよふで。日のくれるまで。茶やの内にもいられねへハな。わつちらアこれまで。茶やにながく居(ゐ)たこたアなしさ。ハテむかふへ行(い)きやア。じきにのむものを。茶やでなまよいになるも。こけのせんぎさ。又それも。そこの内のゝへに。げいしやでもよんで。遊(あそ)んでやることもありやすが。マアおなじくハ百疋(ひやつぴき)たゞやると。てへ〳〵嬉(うれ)しがる事じやアねへ。こういつちやアばか〳〵しいが。わつちら程遊(ほどあそ)びに。ほねをおつたものアなしさ。そのかハり。こつちの名がうれているといふもんだから。（トそばにのみかけたちやをひつくりかへして）どけへいつてもアツヽヽ　。是ハ〳〵（トたつてはなりのすそをやたらふるふ）〔女房〕ヲヤおあつかアござりませぬか（トそこにあつたのりいれすりの引札にてきやくのはなりをふく。この折ふし。むかふのかたを。大いさみにいさんではしるかご）エイかごコリヤサイヤツチヤイコレハサイ（トこゝにいきづへをしておせをふき）〔跡ぼう〕モシ旦那(だんな)。ごふてきにいそぎましたぜ 〔客〕

承知〳〵［さきほう］だんなハ承知大じんさまだと［跡］そこで鬼ころしを。のましてやろふといわつしやるか［客］おきやアがれ［かご一人］ヤツチヤイコレハサイチツテウヱイかごコリヤサイ〳〵（トちうなとんではるかに行過る）［青］コウ定さん見ねへ。晝日中かごのたれを。あけていくやつハ。みなけつの毛まで。ぬかれる手やいだ。しかしわつちらも青いうちハ。見へに乘るもんだから。あのてんもありやしたが。今じやアつらがはづかしいね（ト此はなしの内。すみだはらをつんだる車の音）［車力］アヽウヽそこだア〳〵。お茶やに。そこだに。お客が。いるぞや。うへだのおきやくハ。のろまな。かほだぞ。かうまん。くさいハアヽウヽチウタカ〳〵（ト行過る。青たいハうぬが事な。わるくいわれたもしらず）［青］アノ炭もみんな客のとこからいくのだわな。今じやア客もこすくなつて。なじみの女郎や。茶やの歳暮をかねじやアやらねへ。イヤするが炭のいゝのを買こんでおいたから。よこそふの何のと。わづか三兩か五兩がもんで。車につんでひつこませるから。とんだてへそふに見へる。かねでやつちやア。なんだか人が。しらねへからのことよ又米でもやると。茶屋でも貰ふが又あつちのミへだから。人の目にかゝるよふに。わざ〳〵じやまなとけへ出してつんでおくもんだから。コリヤアどこそこの客が。よこしたといふこたア。自然と人にも。しれるといふもんだによつて。とかくかねを遣ハすに。おちを取ことをする客があるから。又その上をいかにやアならねへといふもので。女郎も茶屋も。い

まじやアはねがおれるのさ 〔定〕なるほどさようさ 〔青〕しかし。わつちらアヌ。そふいふてんハしたく
てもできやせん。なぜといゝなせへ何でも大門をへゑると、雨がハきつて。しらねへちや屋アねへも
んだから。一けんの内へ。人のめにたつよふなことをすると。そこら中へ。しにやアならねへといふ
もんだから。やつぱりかねハかねで。こつそりとやるがいゝのさ 〔定〕さやう〳〵。なるほどあなたハ。
お近付が多いが。いがやの九平次なども。さだめて御ぞんじでござりませうね 〔青〕ずいぶんしつてる
やすあそこでもてへぞ遊びやした 〔定〕私もたつたいちどあそこのうちへハめへりやした（トうはきない
へゝかげがきす。向ふとなるハいがや） 〔女ほう〕ちとおよりなされませ 〔九平次〕ハイおさむうござりや
す 〔女〕もしおめへさんのおうわさがござりやすよ 〔九〕ハアそれハ（トたちもどり）御めんなさいませ
（トこの子やひがまへをとふり女ぼうのわきへこしをかける） 〔女〕今あなた方が。おめへさんのとこりおは
なしさ 〔九〕へイそれハ（トいつてそれども、ちかづきのきやくでなし。よく〳〵見れバわかいほうのきやくハ。
たしかにそれだと少しみおぼへあれバ）ちと御めんなさりませと（定次郎がわきにあるたばこぼんにてすい
つけ）モシぶしつけながら。あなたハどふか。おみうけ申たよふでござります（トみんなのかほをみる）
〔太〕ハテどこぞでおめにぶらさがつたこともあらう 〔女〕チヤぶらさがるたアへ 〔太〕おめにかゝるも。
ぶらさがるも、同じこだハ、ゝ、ゝ 〔青〕わつちらア年中。へへりこんでいるもんだから。見たこともあ

りやせう（トいき過る）いがやハナニきさまのことじやアねへと、心に思ひながら、［九］あなたもさよふだが。こちらの旦那ハ。たしか此夏燈籠の時分に［定］傳馬町の盈行さんと。おめへのとけへいつたことがありやした［九］さよふ／＼（こいつハはなせるきやくゆへ。九平次ハじきに。定次郎がむかふのかたへこしかける。せいたいハちかづきだと。でほうだいをいつただけ。めんぼくなくしよげる）［九］盈行さんハ折ふし入らつしやりますが。あなたハそれぎりで定めて外に。おなじみの世界もござりませうが。もと私かたへもいらつしやりませ［定］ナニナわつちもひさしくあんばへがわるくつて。それからこつちのほうへハ。大きにぶさたをしやしたのさ［九］へイそれハ。時に今晩のお世界ハ［定］ねつからあてなしさ［九］さよふでもござりますめへ［直］コウ定さん。おしに逢つて外へ行でもねへの［定］なるほどさよふさ［九］お供いたしやせう（トいふハ定次郎ハずいぶんたしかなきやくゆへこれをめあてにして）サアいらつしやりませもしへ道中ハいゝが。此宿引がうるさうござりやすね［三人］アイかみさんおせハ［女］さやうなら。（ト又おけへりに［九］わつちもけへりによりやせう（ハヽヽヽトわらつて。つれだち出かける　はや大門をへゑると火ともしころ。中の丁のけしき。又すがゝきの音）［淨瑠璃］（櫻島原歸大全三だん目の口まくらく）るハぞめきの腰乙鳥・褄がなで行違ふ・風の手拭ほうかぶり。或ハ霞の袖頭巾。よるの梅がゝしたひくる。客ハ格子の垣のぞき［地廻り源吉］（中の丁のかたよりすてぜりふにて）エヽおきやアがれ。こつ

もつて三百ならできやすが、おそれながらあなたへのだてきる拙のかゑ、けつかういへわへ［通］実体
なんだ□のやうにかたくひ□しても□やな［客］［九］り、あの□□□のあんどんが見ることふに、□物を
つらへけりやそれをしたやらうかゞ、どつちへ行きやすがつた［作者］はのほうへ［九］アはやくまゝな
へりやりまゝつて行き、又□かふへたことようれ、おめしまめぐひにて、あたまをつゝめて一人々り
ふところ□して三ゝ手□ゝ見へ、四人ゝうしろへ□□りて来たるきのいてうとみへたり）［三五］□□おきつ
し、□□にあるかやいてしるのが、□□かつきだしたと見た［客］□ハヽア実体／＼、□□□ハ□□となつ
て、□□につゞれ、□□あかりにくゝても、□中あのつゞかゝ□ゝした［九］そこへ□□□、□□ハ□さにちか
とりそだ□るべし／＼［客］□□こんなことをいつても、□□にやア□せねへさらにわりひだ、アア
となりへ行かふ（とこうしのびやうへくるりめんのはなりなひつかけて、ばりばり／＼と引きき）ホイこれハ、
さてけりや、［西］□たる□□をきて、□□をきけたる者とたつて、□さるものハ□レ□つらのおかハのふ
ついでかいてみされるへ二□□すゝんの□二人、いづれもはやかゝまにゝはうかずゝなしてゝ□やアー／＼
こゝのうちのアゝ、こうでもこけるゝ内だ、□さん見なへ、おそろしくあかゝかをしてゝあちらにいく
つるさ、一ツ二ツ二ツ四ツ五ツ［ツレ］□□□□んだな、□やしもの化ものが出やアしめへし、そん
なはづていわ□しゝ、□□をしまつていなゝにとて見ろへ［客］はなんにあたゞぞ、あの人しんぞうを見

ねへ。氣のちがつた節季候を見るよふに。あたまへいろ〳〵なものを。くつつけていらア（トとなりのみせにしきそめのかざつてあるをみて）［吉］松さんありやアなんだ ［松］コリヤアこゝの内に。敷初があるのだハ ［吉］おらア又うり物にしちやア。札がさげてねへとおもつた ［松］あんなてへそふなものを。こしらへてよこす客があるから。そふいつてもごうせへだせ ［吉］ナニこれをこしらへてよこした客もつきのしれたあたじけなすびだ ［松］なぜ ［吉］見ねへふとんばつかり五ツあつて。夜着アたつた一ツだアな ［松］べらぼういふぜ（ト又となりのみせをのぞき）ナヤ爰にしよふ手めへも見たてろへ ［吉］何がてへ〳〵 ［松］アノお影講のおもりものといふ模様のきものをきているやつハどふだ ［吉］アリヤアどふか下手な佛師屋がこさいた。佛さまアみる様にごうてきにふとつていらア。あれよりかア。其となりのむらさきときめよふ ［松］アリヤアおれがのだ ［吉］ナニおれがのだ。おちよぼのてんぐるまがあきれらア ［松］しやれずとはやくきめてしまやな ［吉］すみつこのあさぎにしよふ。ナヤありやアたつていかア ［吉］なむさん。むらさきもいつてしまつた。吉きやな。もつとひやかしてやらふ（ト此内せいたい。定二郎。太すけ。いがやの男にてうちんをともさせ。［九平次］モシ定さん。こゝがかのところでござりやすぜ ［定］ほんに。さつきのはなしハどふだつけ ［九］モシ穏便でござりますよ。（ト少しあとへさがり。さつき。わたくしがとこに。いらしつたときちよつと腰をかけた。おいらんの事さ ［定］アリヤアだれだへ

[九]玉川さまといふこゝの内の一まい看板でござりますてときにモシ。妙なことがござります。アノ玉川さまがネ。あなたをよく御存で。わたくしらが内のやつに何かおはなしがありやしたが。くハしいことハ私もうけたまハりませなんだが。何にしろ。今宵ハアノおいらんになされませぬか[定]そふさ〱[九]そんならサアおいでなされませ[宙]青黛さんこゝにいたしやせう[青]どこでもよし〱[九]サア入らつしやりませト[浄留理]夜るを晝とや萬燈の。花も紅葉も色あせぬ。くるわハけにもかんたんの。枕時斗が一ツ時の榮花にちとせやのぶるらん

第二章

遊遊ハごうぎなやたいぼねと言ひ。通ハがけへひろしといふ。鷄舌樓の一トかまへみせにハ染井の花壇をうつし。内にハ萬燈星のごとく。ふきいれたる板の間にかゞやき。大こく柱を礎として貨悖つて入るものハ。又悖つて出る諸人のいりこみまことに。千両の小判。ゝだけているが如くにしていにしへの三浦山口が富にもおとらぬ家の賑一二階の梯子ハ横にひろく廊下ハたてに長くしてあたかも。手長島の楊弓みせにことならず（おもてざしき二けんめのへやから出かける）

エヽいめへましい。がきどもが。こんなものをおつことしておきやアがつて。コレみどりやア。きし[禿廻シ]アイタヽヽヽ

やごをおとしたァ手めへか【みどり】イヽエ【禿】といゝへじやァあるめへ。いつち大きなざまァして。手めへより外にやァこんなものを。おもちやァそびにするものァねへいつてもノヽきかねへ。すぶてへがきだ。ソレやくハんのくちから何かこぼれらァエヽこぼれるといふに。コノのろまハ（トひとつくらハしにかゝる。かぶろにげるひやうしにやくハんをおとし。にへゆをこぼす）【禿廻】ソレ見やァがれ（トこぼれたゆのなかへふんごみ）アツヽヽヽ。エヽいめへましいアツヽヽヽ。長八どんノヽざうきんをちよつとよこしてくだせへ。このがきやァ。きりノヽはやくとつてきや。エヽいくじのねへあまつ子だ（トこゞとをいゝながら。よこちよのらうかへつんまがる。此内ふいてしまい）【禿】すかねへぞよヲ（トこゞへにいつてかけ行おくのかたより。へやもちしげ山。おやゆびのつめをくわへ。かたてにつまをとり。らうかのかたはしのほうへよつて。そろノヽあゆむ。あとり（とよりカ）ふりしん）【新造】しげ山さんノヽ【しげ山】しづかにしなんしな【竹】そふ申いした。今にお出なんす（おくざしきよりこれもへやもち）【竹川】ユウ（コ）重山（しげやま）さんハどこざんす【しげ山】こんなノヽ（トハざしきのはいりくちにふたりながらつくばひ。ひそノヽばなしの内よこ丁のらうかかいたまくになつた客。かぶろにそでをひつぱられ肩さきぬけかゝりいくじもないなりに）【客笑止】エヽヽヽツヽ。だれだ。そこにいらァ。ハヽァあねごたち。又どじやう汁だな【竹】さゝやき牛房（ごばう）ハもふきゝあきいした【しげ山】ねしやァよく。廊下鳶（らうかとんび）をおかせぎなんすの【関】そふさ。それだからなべもし廻し座敷で。

あぶらけのよふな。ふとんでねやした　〔禿〕サアお出なんし（トひつぱるはずみによろついて竹川　〔しけ〕
　花ざとさんにいつつけいすゴエヽうるせへせうしさんだよナ（トつきはなして二人なが
らにげ行）〔笑〕コリヤまちやアがれ（トよろつきながら。かけだすひやうしに。あとからくるわかいものにつ
きあたり）〔笑〕アヽいてへだれだ　〔若者〕コレハ笑止さん。どけへ入らつしやる　〔笑〕喜助かうめへもの
ならちつとくれろへ　〔若〕さしあげませう　〔笑〕けんなまでやるハ。そのかハり。廻しものハあやまるぜ
〔若〕へヽ久しいものさハヽヽヽヽ　〔笑〕しけやまつらアどけへいつた。ウヽこゝだな〱　〔かぶろ〕こか
ア青柳さんのとこざんす　〔笑〕ばかアいへ。しけやまのじやうなしあまアどふしている（トよそのざしき
へずつとは入れば客も女郎もしらぬかほ）　〔客〕どなた　〔笑〕ハイこれハ御めんなさい（トかぶろに引ずられ
て行）○既に其夜も引四ツのしらせにつ藝者の三味もちやんときりあげ。牽頭もどんと。打おさめて
立あがれバ。上り下りの梯子ハ盆山のごとく。おさまりやした座敷〱の床の内（おもてざしき）
〔定次郎〕　おいらん　〔玉川〕（と
しの頃廿三四。せいかつこうすつかり（つカ）として。きりやういたつてよし。いしやうにはでなこのます。おくゆかし

くみせて火の手とり也きやくのぬぎすてたるはなりな。手づからたゝみながら。もんどころな。じつと見てにつこりとわらひ。たんすへいれうちかけなとつて。

〔玉〕もしへ。なぜだまつておいでなんす〔定〕どふも。なにもいふことがねへからさ〔玉〕外へおいでなんしちやア。そふでもおざんすめいが。わたくしらがとけへお出なんしたもんでざんすから。そのはづでざんすよ〔定〕ナニどこも。外にいくところハなしさ〔玉〕うそをおつきなんし。もしへそりやアそふと。さつき九平次さんに。私が申いした事を。おきゝなんしたかへ〔定〕イヽヱ九平次がなんともいゝやせん〔玉〕ヘアヽントわらひながらたばこをつけていだし　おめへさんの所ハどこでざんす〔定〕されバ。どこだつけか〔玉〕おじらしなんすよ。わたくしがあてゝ。お目にかけいしやう。南国のほうでざんせうね〔定〕アイヤアそんなものさ〔玉〕わたくしやア。おめへさんのとこをよくしつておりいすよ〔定〕どふして〔玉〕ぬしのまへ髪があんなんすじぶんにやアわたくしらが叔母さんのとけへも。よくおいでなんしたから〔定〕そふさ。それでしれたおいらもぜんてへ。見たよふだとおもつたから。いろ／＼さつきから。かんげへていたのさ。なるほど。おめへのおばさんのとけへもいきやした。其じぶんハたしかおめへの名ハ。おとらさんとか。いつたつけの〔玉〕よくおぼへてお出なんすよヲホヽヽヽ〔此おいらん已前ハそうおふにくらしたものゝむすめにてふた親にわかれておばのかたにてそだてられし也おばといふハこの定二郎がきんじよにいて

折ふし八定二郎かたへもおはりなどにやとハれしものなりこのおいらんそのおばの方にてそだちしゆへ定二郎も見しつている也）　[定]こいつァ妙〳〵。おめへがこゝに居よふとハ。おもひもつかねへこつた。さだめしこれも。おめへのこゝろがらだろふさ　[玉]ほんにこういふ身になりいしたも。だん〳〵わけ合のあることざんす。よんどころねへことで。わつかいねんで。こゝへめへりいしたからもふ来年の七月ハ。ねんがあきいす（こいつハうそ也まだ三ねんばかりハひつかゝつておれともわざとねんなみじかくいふハこれ手とり也）　[定]ソリヤアおたのしみだ。さだめてどこぞの色男のところへ。お出だろふ　[玉]ナニわつちらがよふなものが。どけへいかれいすものか。ほんに夢にもしらねへ。くけいとやらで。どふいゝしたら。客人のきに入いす事やら。なんにもしりいせんもんでおざんすから。ちからになつておくんなんす人もおざりいせん。ひとりのおばさんハおとゝしなくなりなんして。ほんにたよりすくねへ。身の上でおざりいす（ト少しふさぎしそばにうつむく）　[定]おばさんハ本所のほうへ。引ッこしなすつたつけが。なくなりなすつたかきのどくな　[玉]もしへ。おめへさんのおとなりの。針屋のおゝすさんハどふなんした　[定]はりやか。今ハ椿屋へ嫁入をして。てへそふにくらしている。そしておめへもしつてる。ソレ合羽屋の太郎よ。ひとところハ。かけまやへ聟にへゑつたつけが。今じやア井土ほりになつていらアな　[玉]ムウそふして。わつちらがうらにゐなんした。ソレ犬市さんハへ　[定]ムヽあの。

つむりのまん中に大きな瘤のある。陀島といふかほの按摩か。アリヤア去年。堀の内さまへ願をかけて。目があいたつけが。それからつまらねへかして。今じやア乞食になつているといふことだ [玉]誹諧師の西行さんハ [定]アリヤア今戸の。あねさまのとけへいつている。おめへのとなりの豆屋ハ。鳩ヶ谷のほうへひつこむし。こんにやく屋ハ。ゆふれいばしのほうへ。ひつこしたといふことだ [玉]ヲヤノ〳〵わつちらア。今おめへさんがたのほうへあへりいしても。しつた人アおざんすめへのふ [定]ナニサそふでもねへのさ [玉]アノね。どふぞねんがあけいしたら。おめへさんがたのほうへ。あへりいすから。せわをしておくんなんし [定]ソリヤアおいらがとけへ。きなさるがいゝ [玉]おありがたうおざりいす。おめへさんのとこの。おきんまでもたきいしやうから。どふぞそふしておくんなんし [定]もつてへねへ。ナニそんなことをさせるもんだ [玉]それだとつて。何もせずにいゝしちやア。おめへさんの。おかみさんにしかられいしやう [定]ナニおいらアまだ。そんなものハなしさ。それだから。おめへさへ承知なら。女房にとつていふもあんまりおかしがいゝの（ト此せりふハ思ひきつていふとしまだけじきにいはこみ　）[玉]コンナ。くちさきで人をうれしがらせなんすハ。客人のくせでおざりいすが。ほれていゝすものを。おだましなんすハ。ほんに罪でおざりいす [定]ナニわつちらアおめへがたをだますよふな。はたらきハござりやせん [玉]おめへさんも。とんだ事があんなんすよ。

なんぼおさななじみでも。ひさしぶりで。今宵おめにかゝりいしたもんでおざんすものを。おめへさんの。おこゝろもしらずに。めつたなこたアいわれいせんが。ほんとうに又。そふおもつておくんなんすなら。今からおめへさんの。女房でざんすから。もふ外へおいでなんすと。きゝいせんにへ　〔定〕ソリヤアおたけへよ。これからハおめへの色男をも。せかにやアならねへががつてんかへ　〔玉〕ナニわたくしらア。そんなものハおざりいせん。

こかアおめへさんの女房の内でおざりいす。

ほんにおめへさんが。前髪のあんなんした時分にやア。とんだかハいらしくつて。其時分から。思つておりいしたものを。もふこうなつちやアはなれいすことじやアおざんせんから。わりい物に見こまれたと。かくごをしてお出なんし　〔定〕おめへも其時分にやア。でへぶかせぎなすつたが。ぜんてへ。振廻ずきのほうだから。なんぼそんなにいゝなすつても。ねつから信仰がうすいよふだ　〔玉〕チヤわつちやア。そんな氣じやアおざりいせん。それともうたぐりなんすなら。どんなことでもいたしいす。命でもあげいすから。いつそころしておくんなんし。ヨヨ

なぜこんなに。まよわせなんし

た。　　　　　　　　　　。此内いち座のせいたい。ひとりねのさミしきまゝに。ぶ
らつきてあるき）　［青］定さんどふだ（トずつとはいり。　　　）ハ
ゝア　　年代記にある。山城のくにで　　有子をうんだといふものだハゝゝト
すわる定二郎おきよふとするな。　　。これが女郎のほうからほれているせう
こ也。人がきても客のミへ又そい身のなふらゐゝなたいしミに。　。一トとなりの中ハ
。人がくると。じきに　　。これ。人の見るめをはづるきみにて。
おもハぬ男と。うきなのたつないとふたゐべし。ほれたどふしハ。けつくなのたつな。うれしくおもふものなる
ゆへ。わざとひつこくして。人にミせるハ此道のならひつとめのミにでも。こゝにかハることハなし）［玉］もし
おゆるしなんし　　おちてあつたしのきなさす）［定］青たいさん一つぶくお
あがりなせへ（トこれもうつぶけになりきせるをとる）［青］時に定さん。きいてくんねへ。破軍の劔さきに
でも向かつたとミへて。こんやのよふな。目にあつたこたアねへよ［定］どふなさつた［青］宵からふとん
の上に。たつたひとりさ。野良の木魚じやアあるめへし［巨］其菊さんハどふなんした［青］色男が来た
と見へて。からつきり。きついものさ。しかし。わつちらも。人をこういふめにあハしたこたアいく
らもあるから。そのむくひだとおもやア。はらアたゝねへが。おつなもんで。どふか壁の下張に。道

具立を書たうちへでもへへつているよふなもんで。ねつからつまらねへの 玉ソリヤアそのぎくさんち｜今宵ハいつた。あんばへがわるいといゝなんしたつけが。どふなんしたやら。ぬしやアおさミしくつて。おきのどくだね 間ナニサそれだとつて。野暮に腹をたてる。わつちでもないから。こんなめにあはせるのハ。あつちの目がきかねへといふものさ。ほんのこつたがわつちらア。幕のうちの煮〆じやアねへが。かみしめて見ねへけりやア味へのしれねへといふ男だから常住ひねりばなしにされている。女郎衆の眼にやアわからねへはづよ。野良ハふけいきでも。小判のひかりで。色男からつりをとつて。あそんだかハりにやア。是まで新造のしきせなんざア。絹ちゞミを昆布のよふな。ちりめんで。してやつたもんだから。蒔ておいた種ハ有がてへもので。今でもへりとりむくの下着ハ。毎としたゞでも着て見せやす（このしんぞうのしきせを。もらうにハ。十匁と十五匁ハいることゆへ。それでこのせりふなミへにいふか）今じやアそふでもねへが。二三ねんあとまじ（マヽ）やア。ほんに一日でも。五分縫の疊を。ふまねへけりやア。ねたことのねへ男よ（トむしやうにはしやぐ。ふたりもミゝのやくにきいていれば。やかましいほどしやべるゆへおいらんたばこをすいつけてせいたいがかたへだしながら。わきのほうをむいて。定二郎とめはを見やわせ。わらつている。せいたいハむちうになつて。おいらんがきせるのあとさきをまちがへて。がんくびのほうをだしたもしらず。口もとへあてがい）といふもんだからアツヽヽ、 玉チヤど

ふたんした（ト口にそでをあてゝわらふ）[青]おいらんうらミだぜ。ごうぎにやけどをさせた。アヽまだ。ひりつくハ [定]めつそふな [玉]かんにんしておくんなんし [青]コリヤアこんやアどけへまハつても。ろくじやアねへ。もふいつてふせりやしやう [玉]もつとおはなしなんしな [青]イヤおじやまになろふもきのどくだ（ト立出あしにて何かべつたりふんづけ）チヤきみのわりい。鬼灯をふんづけた（トたもとからはなをかんだかミを出しふきすてゝ行）[定]おとらさん

[玉]おとらじやアあやまりいす [定]なぜいゝなだぜ

評に口功言令色にして人を惑す傾城の心にハ鮮哉仁。終に客の懐に是も鮮かな金。されど次第に。高慢の鼻ハ。高いも低いも色男の氣取になつて尻のしまいハ。身の仕舞をまけた〳〵と觀音の市にハあらで一家を安賣に賣はたすハ。此せちがしこき世の中に。似合ぬ人の心ならずや

第三章

[番青簾]（ひとりざしきに。ばんをしていてハつまらず。日ハさへてくるさみしさのあまりに。火ばちの火をかきさがして。てうしをかけているところへこれもおなじくやくしやにて [太助]（ひとりねのさ

ミしさこゝにきたりて。たがいにてらされた。じゆつかいないつているト此内しんぞうあハたゞしくはいり)

[新野かせ]おゆるしなんし(トあんどうの引だしより。らうそくいともしさしなだし。ともしてふくろとたなをなにかさがす) [青]あの子が。らうそくをさし上ゲてまごつく所ハ。うしの時まいりが。かなわちのあたまでも。おつことしたといふもんだ [太]イヤうけ合仕事の壁がひねへで。左官がよなべをするといふ。手つきもある [野]コンナみどりや手めへ。さつきのものハよ [禿]そけへおきいした [野]それでもしれねへ。じれつてへ子だのふ ト(こゞとないゝながら出て行) [青]コウあの子。いゝ子だ。どふぞ若衆をちよつとよんできてくんな [禿]アイ引(トへんじもおもく出て行) [太]ちつとわけへものをよびつけて。いつておやりなさるがいゝ。あんまり人をばかにしたことだ [青]インニヤヨ女郎買ハこゝだの。こつちやアだまつてゐても。今にあつちから。あやまつてくるよふにしてみせよふ。こゝが所謂兵をよく仕ふものハ。赫々の功なしといふ所だ。此孔明がはかりごとを見てゐさつし。妙だによ [太]はてな(ト此内わかい者てつとはいり) [若]およびなすつたア。あなたでござりやすか [青]こゝだ〳〵。コウおじやまだろふが。ちつとおたのみのすじだ。今一ぱいのまうとおもつた所が。何も肴がねへ。どふぞ。なんぞちよびとしたやつが。たつたひといろでいゝから。はたらひてくんねへ(トふところか

らゝかくほうりだす。わかいもいゝ又こゝとだろふと思ひの外少しハかすりのあることゆへまんざらでもないかほつきなり）[若]かしこまりやした。おてうしハへ[太]コリヤアありやす[若]只今火もあげやせうコリヤア時に。おいらんハどけへいかしつたやら。おさゝしうございませうにハヽヽ（トねつからおかしくもねへことをわらつて出てゆく）[南]コウ太助。見さつし。わけへものへあゝすると。どふしても南一ハかすりのある事だから。ソレもふ。ぜひきやつが。だまつちやアいやせん。今に女郎がくるよふにやァ。いわずとも　あつちではたらきやすハ[太]なるほど。コリヤア女郎けへ極秘のところだ（ト此内わかいものだいじうのふに。火をはこび又ちいさなどんぶりに。うどのさきのほうを。せんにしたやつと。山やのきんかんふに。なまがいのすびたし。わさびといふやつをぞくにだいこおろしとひねつて。たつぷりとかけ。ひとつのはちにハ。玉子のやきたて。おさだまりのとりあつめもの。長すゞりぶたにのせて。もちいでまんなかへすへる）[南]これハ大きにおせハだ。ナニこんなになくてもいゝものを[若]もふあがりますよふなものもござりませぬ。おいらんも今にお出なされます[南]ナニ是でのミやア。もふおいらんハ入やせん[太]あがつたらなを。　なりそふなこつたハヽヽヽ[若]ハヽヽヽ　おなじよふにわらつて出て行）[南]太すどふだ[太]妙でござりやすサアおはじめなせへ[南]コウ見さつし。其かハり。一分で是斗だ焼玉子に。甲州とうがらし。くわるもまん中が。くさつてあらァ。おらが新道のいせ吉

で。貳百が物だ　太さやう〳〵。こつちらのどんぶりが。百五十にして。三百五十ばかりのだしものて。一分たァあまり。利のとりよふがすくねへわへ。ハヽヽヽ時に。青黛さん。其かハりかの例國ができたら。又まんなをしに。どけへぞめへりやせう　青れいこくたァなんだ　太ソレサ先比あなたへ。おたのミ申た大ふく町の角やしき。估券千五百兩惣地代といふやつが出來ると。しつかりはなし合がわかりやすハ（ト此内せいたいが相方）其ぎく（ミすがみにて。はなをかくし。今おこされたといふかほつきにて）チヤまだ。およんなんせんかへ　青ナニひとりでねられるもんか　太おいらん。ひとつおあがんなせへ　其わたくしやァもふ。こよひハ。しやくがおこりいして。いつそせつなくてなりいせん。さけハもふおゆるしなんし　青ナァニどこぞで。おもいれのんできたのさ　其どこでも。たべやァいたしいせん　青たべねへもすさまじい。かけゑんせうか。ウスドロ〳〵で。出よふといふふうをして。今ごろのさりと。出てくる化ものだものを。どふせ。きのきいたのじやァあんめへ。ノウ太す　太ナニサそふでもござりやすめへ。マァおいらん。すハりなせへ。青いきものをきて。そふしてゐなさると。どふか、さほてんのはちうへを、ミるよふでわりい　ト（此内定二郎ねまきのなりぶら〳〵でかけい）定チヤおにぎやかだ　太イヤおめへも。今のばけものぐミだ　定さつきのいしゆけへしに青たいさんのおじやまをしよふとおもつてさ（ト火ばちのそばへすハると。そのぎくも。定二郎がわきへすハり）

[其]玉川さんハヘ [定]ふんぞりけへつて。今いびきさいちう [其]うそをおつきなんし [定]うそじやア
ねへ。　しれやせん（トはな
しのうちに。立ぎゝしていたりし。玉川ずつとはいつて定二郎をひつこかし） [玉]よくいろ／＼なことをおつ
せへしたの [定]コレ　[玉]あやまりなんしたか／＼ [青]おいらん。でへぶおむつまじいの
[太]あやかるよふに定さん。一ツあけよふ [定]酒ハ御めん [太]デモひとつ （トむりにつぐ定二郎かほを
しかめて。一トロのむ。玉川さかづきをとつてぐつとほす） [其]もしへ今宵ハ。玉川さんが。いつそおう
れしうざんすとさ [定]なぜへ [其]おめへさんハひさしい。おなじみざんすものをハトかれてのよふすを。
玉川がはなしにて。せんこくせうちのことゆへかくハいふなり） [青]チヤなじみだ。おいらにやアだんまり
で（ト大きにきもをつぶす） [定]ナニなじみといふハト（いゝそふにするを。玉川きやくのほうへたをつめつてい
わせず） [定]コウいてへ／＼ [玉]いたくつてもわつちが身じやアなし。かまいゝすものか（トのつかゝ
つてつめるやら。たゝくやら。いちやつくをせいたいと太すけハ。まじくじとしりめに見ていながら） [青]も
ふさけものめが [太]エヽいま／＼しい（くちこゞとをいふ） [青]時にもふ七ツだろふ。太すけへろふじ
やアねへか [太]けへりやせう。定さんハどふなさる [国]定さんハ。とうりうをしなんすとさ [青]おつ
てにするがいゝ [定]ナニ御いつしよにけへりやしやう [玉]チヤおめへさんハ。さつきあすもいよふ

と。おつせへしたじやァおざんせんかへ。おけへし申こたァなりいせん　青定公ハいるがいゝ。おいらァけへる　定それでもいいがやがめへるまで。お出なされバいゝ　其まだよふおざんす　青よくてもわるくても。やがて夜があけらァ。はなりを出してくんねへ　ト（此うちはや太すけハはなりをひつかけてきたり）　太サァ〳〵出立〳〵　玉チヤほんとうに。もふおけへりなんすかへ　定どふでもおいらひとり。残つちやァわりい　玉わるくつても。わつちがいゝよふにして上います　定おほきにおせハだ　玉おせハじやァおざんせん。わつちが客人ざんすものを　どふともわつちがしてへよふにいたしいすから。そふおもつてお出なんし　ト（そのざくもろとも。ふたりをおくつていづる。ふたりハふくれけへつて。はしごをばた〳〵おりると）　玉其よふお出なんし　若もの　これハお早うござります　二人アイ　ト（いつた斗。くゞりをあけてもらい。そとへすつといで。四五けんほどゆきすぎて）　青是ハしたり　太どふなすつた　青ふとんの下へ。ゐつちうふんどしを。わすれて来たト云ゝ

評に曰　褌を忘るゝものハ。恥を恥として再び行ず。魂を忘るゝ客人ハ。是を取返さんとして又行ものし。契情が　夜光の魂に蕩れ。秦王（ママ）十五城をまもる。劔のたましるまで。若ものにせしめらるべし。其内玉鼻のさきへ宿がへするに至つて心の臟の家主。本然の店賃を失ひ。肝心の情が洞ることを恐る。たな受の膽をつぶして芋を食ひ。屁をひつて屁のすハらぬ魂ハ。終に膝

と談合して。足をばかりに駈出すべし。一寸の虫にも五分の魂。五尺のからだハ魂も一尺五寸。
手拭をもて。あらひゝがゝバ。みがいただけに光るべし。性根玉でも。なんの玉でも。

後序　夜話

鳥の子を。十宛十八累ぬと茂。足下と野子が此中ハと。少納言が詠しも眼の中。客と倡妓の嫁合を見て。産出したる野良の玉子。十扁舎主人。是を懷に暖め。チヨン〱と掌を拍。なつたり〱と。唱ふるに。忽一個の冊子と變る。此冊子則玉子の四角なり。女良に寔なきにもあらず。されど契情に好意が有て運のつきとハ。柳樽の透逸。戸堅くハ啌つこに惚て實情をたつる。傾城に逢んとを。嗚呼啌故油斷のならぬ。たまアご玉子ウ

噺文成誌

多　成

青樓小鍋立

全

青樓小鍋立叙

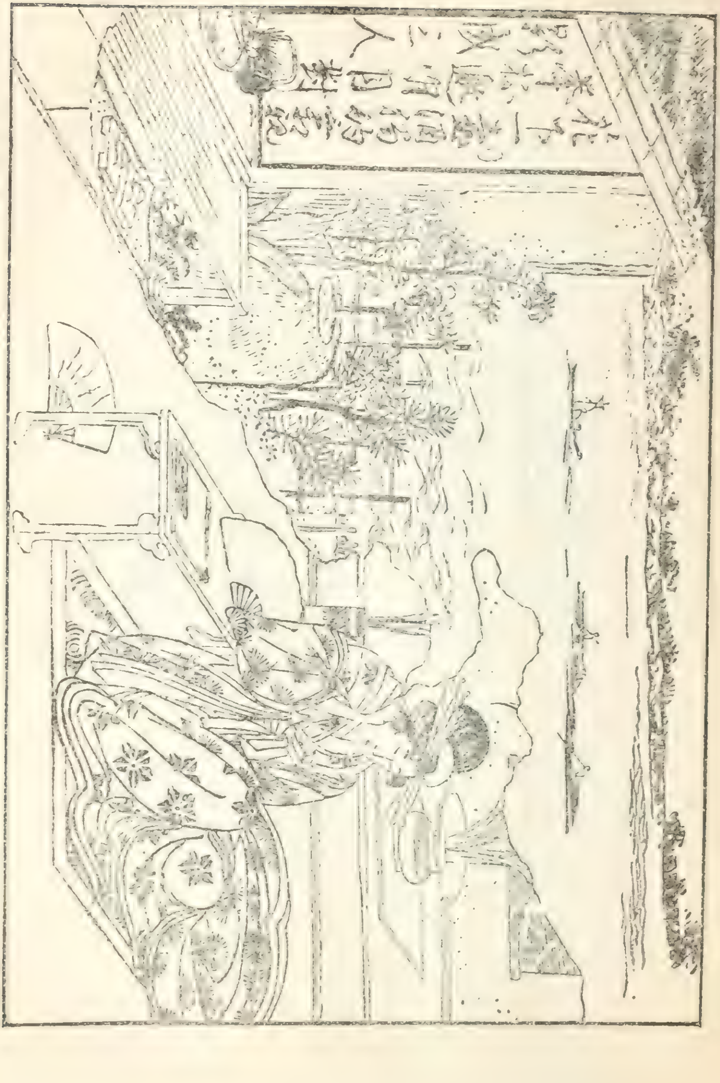
調味の遺たるを拾ひ集て小鍋立鐘も慈姑の常磐味噌ほちく喰に五分切の五分も誘なき娼姉や坐禪豆なる妓妹の饘なことを椎茸と奈良漬ならぬ守口に好イせんよと火取鱚獨坐敷に輝鱓ごれ程腹を蓼酢でも鯵に虚言をば竹林麥合せ細魚に胡桃の甘煮迷安キは薯蕷の道いつか心も空豆を蔭では指を彈豆はるの眼指と新菜漬笑れたのを厚焼卵辱を梅がえでんぶとは今更何と紗羅砂梅夫は日光蕃椒貞夫に大盆大平の三葉のひたし蜜々に文をや蠣の吸物にこやかく胸をもみ大根榮螺なことを木海月にはやもふ角を鬼殼やき引ずり寄て打栗も菠薐草から出た寔は鮑もいらず中直りチヨイト火鉢で甘露梅解兼たる煮凍も溫られてぐなさなる鮃から見てさへ有貞意楽ミを句多々敷も雙たて狹き坐敷を散亂すことしかり

戌のはつ春

成三楼のあるじ

手酌酒盛述

（岸川）



○前話

客の
身の
心得

成三帥
庵酒盛

○後説

女郎の
身の
習ひ

成積妓
閨待人

青樓小鍋立

成三樓主人著

成三草庵酒盛

丁稚 よい／＼よいとな（ト庭へ水をうつ）此家のあるじ 風流 夫で砂がしづまつていひ／＼コレ小増や何ぞ肴をもちつと持てきやア、大に醉た（トとろ／＼ねむけなもよふす） 末和 なるほど妙景だぜ長堤の花に臥金龍の月に醉墨水の勝景雅となく俗となく是にすぎたるお肴はなしだ 元氣 堀に通ふ一葉の船は二州の風におくられ廓にいそぐ四ツでのこゝろは常世の雁金につれだつ人の心の花川戸に瓦燒煙は口舌のむねをこがすのかとみへやす御主人の樣にこゝのお住居じやあめづらしくもごぜへすめへが引まどから鯱をみてゐてたま／＼こうきた所はまことに壽命が延そうにおもはれやす 風 なにかにやア不自由なかわり冬むきなぞアようござりやすよ隅田嶋の松は手柄まけのおいらん業の樣は髷を亂して狂ふ新造地いみに透間をみのぐりを遣りてはさらにしらひげの宮あふてうれしの森はあれどとやかくあんじる首尾の松なぞといつてはたいてひ廓の景物だねへ二三日も居續をしなせへな 末 こうみつかなやになると三日や五日嗌してゐてもつきるといふこたアござりやせんが是でも傾城

けへおやア三人ともにあんべいがちがうからおかしひすまつあだでまんと手の有るどちらといへば浮氣らしびといふのは風流さんの智惠でしなふといふものだ又元氣ですこし中の字といふやつア元氣さんのするどな所で惚やすよ〔元〕わつちのはとかくこれもてだよ情ありのしつか者といふところを柔和さんの仁心に迷つたのでなくつちやアほんの寔おやアござりやせんよ〔風〕いづれあいゑんきえんさ色男は茶漬めしだから美ひおとこにどれでも惚るといふ理屈はねへあのおとこはどこがいゝのだと二階中でわらわれるのもいくらもござりやせうこゝでふられても貳丁目じやもてゐでもつたものでござへすね〔花〕したが初會はよくみておいたやつがいゝ盃がまちごふと氣をあしくするやうなもので一チ夜のことでもこゝは人情わたしがやうなものにおかいあたりなんしていつそおきのどくざんすとかなんとか思ふこともあるそうさ所でいつの晩どこに客人を待ているをみかけたの茶屋のかゝアと噺してゐたときその前をとをつたの色男らしひものと格子でくぜつをしていたのといふと氣うけはおゝきによをござへす〔元〕よくあるやつだが盃がすむとわつちたらわつちの女郎をほかの女郎が見てにつこりとわらふのはかけてみて何ぞ噂でもした所がそりやアあの客人がおめへだといふのかなんだかきがしれねへできゐがわりひね又坐敷でなんだかふさいでいたやつが　でこくうにいさむのがあり座敷ではにこ／＼ものでいたのが　では人でもきつたやうなつらをするのがござりやすがアノ座

敷でふさひで　てうくのは何ぞほかにはらのたつことのある八ッあたりさおゝねいやとも思はぬ客ならもよいとしたことから氣が晴ると坐敷でろく／＼あいさつもしなんだが氣のどくになつて假にきげんを直したの也　へきてからふさぐのはしみ／＼つらくつてならねど一座のおへもおそれからきげんよく合ていても　じやァだれも見てがねへから本性をあらわすのでござへやせう　風　へまはつてから文をかくことがよくござりやすが廓のことでなにかなが／＼しくかいて封てしまつておくのは世間は實でしもふいから所もねへからいつかいてもいゝのを這入て實がいやさにたにがなしに手間をとるつもりとみへやす文書てしもふがはやいかもつてかけだすかたちはしんぞうをよんでかゝすのは一座の客がきていてふみをやらねへかといわれてしようことがねへからかくのだからふでもよいふじやァなへがこつちに氣のあるのならかけへまはつてかくことさ　花うらや　寄合で揚枝をつかい／＼そう／＼　へきて今夜はよくきておくんなんしたマア

おらへさんは見申たことがあるやうなとこないだうお思ておりひすとトきみへかくト小指で兩かへたでながら顔をみてにつこりとわらひアレサたびをはひて　わたくしにおとらせなんし此ッ八谷のいはつたをごろうじいし　かたきりは積でおざいいすかなんのとたへまなく口を聞かの　手水にいくにも人のね

ている鼻(はな)のさきをゐしやくもなくひよいと　いろ／＼な

　朝も迎(むかひ)がまつているに　　此間につれ申て來ておくんなんしと

つれになんべんも縮羽織(ちゞみはおり)を着(き)ながらうしろから　たりするのは誠(まこと)につとめの身一式(いつしき)で有がたひ

點(てん)しきじやあねへ又　　もぢ／＼しながらはつかしそふにそつとはいり

第一あんどうのあまりあかるさをきらひ顏をみるやうにみぬやうにこつちがとゐ／＼ねむるとそこ

で顏にあなのあく程みながらたばこをのんでたのしみ

　ねむりもせずあんまりたいくつさに思ひきつた樣子(やうす)にていつそよく　あんまりさみしう

おざんすからちつと目をさましておくんなんしそしてよあのネ　では

おわゐうおざんすかともふしひすことさなどゝ諸事(しよじ)ひかへめにことばすくなく何かもしかとはいわね

どどの道(みち)よびたそうにいひ朝もきせる多葉粉(たばこ)入なぞをしんびやうにまとめ人のいる所ではあんまり

物もいわず外の女郎は此間にのおさらばのといふにだんまりでいて心ありげにみへるのがしんにいゝ

のでございやせう　風　おゝきにさ　したが三度や五度ぢやア何がどうなるのかしれやせんよ　通　つう

れい此ごろの女郎は妙(めう)な仕(し)うちがあつたから其まゝにはすておかれぬのなまごろしにしてけへしたか

らもふ思ひ切るのといゝやすがむかふになをむかふからわりひたとへむかふはきらをふとこつちからはれ

たゞなら岩木ならねばあれほどにまで思ふかとふと氣がつくがさいごほんものになるはこゝからだ又いつまでもわかつたことのねへは介六だの權八だのといふ深くいゝかわした男があるからだそりをしらずにだまされるといふはこつちがばか又金のいくはうで突出させうのうけだそうのといふは情をしらねへ木石同前でござりやす　間夫と女郎をくるめて金をださせたり着ものをかりたりするほど情ねへことァあるめへと思ひやすおやはらからのために身をしづめ全盛な程內證はいふにいわれぬ苦みの血のなみだでいるものを其樣なことをさせて色男の氣になつてうれしがつているといふは鬼もならねへしわざだそれともこゝで金がねへともふ是ぎり顏がだされぬ今少し先へよればどふともなるといふ樣な時節五日か十日のさしくりにかゝるといふ樣なことかしどうは女房にするにきまり切て居る樣な事なら格別それにしても末は長ひこと苦界はすこしのうちのことだから其樣にしていかずともいゝこと又傾城といふものはそこのわけさへよく承知させておきさへすりやァ月に三度か四度かよへば其上もなびたがる物でもなしかうさへしていきやァ身もちてるすへは急度女房にもなられるといふものなれどナァひよつと運がさいごなにのこともかのことも思はずめつたむせう一トはんも內には居られず親がかつへよふが子が死のふが一寸先はやみとなりあかるひは吉原ばかり三十日〳〵のたてづいそく互に今はいたゝまれなくなつて女郎は仲の町へも出られぬやうになり內證からはせかれもよつと顏をみる

ことならずかんしやくばかりおこしていてもどふもつまらずしのふのいきやうのと云ふみをみるばかりたきのなみだで田舎へでも身をかくしてもこちらのことがわすれられず今じやアふみの便りもたへ其後ひどい工面でもどつて来てらうのすけが印判の墨ぐらひでおくら前をとをつたればむかふから見たやうないきな女がいきな男と夫婦連観音へでもあへるといふなりで出やつた所がかの女郎あんまりがいぶんがわりひから芦簀のかげへかくれたればきやつもきのどくに思つたか見ねへ顔をしてゆき過てからさすが跡をふりむひたがいゝひきといふやうになりたがりやす　〔客〕つゝしむべきはそこだよ酔は身をくうとはいふものゝ身をくつさぬがまことに如才のねへ男さ又世にいやなは半道半可の通人さきりつめにして金をかりたりいやおうのいわれねへやうにしかけて指をきつたの髪をきれのと出来合のきせうしんこのゆびをもつていてたかくとまられちやアなんぶんおほあやまりだすこしかてへたとえだが閑殺木諸近仁で無がなじんのうちが大つうさ　〔風〕めへどの嘲本のつう人といふのはまづ着ものから抓入きせるたばこ入頭巾たびはき物手ぬぐひまでいきなりにて二三人より集り四方山のはなし詩歌連俳書畫の名家あるひは役者たいこ持などのうはさ其外流行のことをはなし丁でいへば五町きつ中の女郎屋の家風おいらんの好嫌ヤレ平日樓の皆つるは松花堂が見事だの今の咲川も畫ができるのふかきは歌をよむのやさし王の白人は碁がつゐゝ繝萬字屋の本笛も畫をかくの嬉屋できさんじと

いふことをよくいふ銚子屋でばかといふことを久助といふ若蔦でしんすといふはぶ男のことかんすといふはいろおとこだの鐵錢屋ぢやあきいたふうといふことヲよすがだよといふやうなたぐひ又は近ごろで金をつかつた大盡は野田の新五郎口輕の飛鳥越ヶ谷の鹽才などだのヤレ當時はきゝのおいらんは出樓で小倉さき松田やで瀬澤はべつもの部屋の松倉が末へたのもしひ粂之介が部屋のとき松くらといつてあのとをり出世したから其例にならつてそう付たのだ鐵錢屋では和木簾屋で玉簾咲川は是も別物とすれば深さだ、やさし玉で白人に玉神樂、生根玉でめへの木塚が出てみれば今じやア赤次だ肴屋では是ぞと指をおるのもねへ若蔦の繼木はとしはいかねへが手とり物だ平日ろうでは是もほつちの二ツあるは別物にして唐札久山を一年中あげづめにしている客がある瀧屋じやア瀧人中半次で留外熊人はぐつと年しての突出しだ表具屋で月外をいはにやならんだ中で是と飛のいたもねへ勘藏松田でもおしよくそのけると百春に初村、岡こと屋で尾の濱に二タ川春海老のかたらいも長人しての突出しであそこの内で年だかどうかしたのゝ妹とでおいせといつたからそれでかたらひとつ いたのだ鯛萬字屋で一ト言額樓で遣流に成原若町屋で寄木これらがマア今でのうがちさまた女房じやアともよ代屋のおなよ中のお針屋のおみつがうつくしいのだれはどうだのこゝの小便所へはそうめえるそんなよそこの雪隱はこうゐへつたと色々種々の噺がつきるとゞいかうといふことになつて出かけるそこで茶屋へゆ

く盃が出る美しひ藝者をよびにやるとおぢふにおゆふふるくつてもうごかぬがおてつなぞがきてひきかけるさごじが大呑傳じがしやれる藤じがしんなありやす所へ出てくるおいらんのきりやうとしかつかう音もの坐敷のおもむきがあつてチヤチヤンとひるて仕廻ッて皆々かへる夫より　一人のきやくは中ッばらをならべるむかふではこくうにしやれてわらはせるとなりはしんなちぎりのほち〳〵はなし程なく夜も明ればハイおむかいといふところまでを五分もすかねへやうにすつぱりとかきやして成程妙にようござりやしたがもふ趣がくつて今じやア實情の所をおもにかいたがよくうれるそうでござりやすねへ　[元]アイサ唐も倭も昔も今もかはらぬものは人情だからこればかりやアなんべんかいてもふるくもならねやせんのさ　ただそのふるひついでなら今のおはなしにつひて一首やりやした少し悔はとび火三ッの山にただはやまひといふ氣味がござりやすがこうさ　〽日くせをしつたか玉屋おつす松葉だアす扇屋ざんす丁子屋サ　[風]こいつアあんまりどつとしねへがこぢつけただけあたらしいネ　[元]夫と久しいものはお國がい丶様にされる旅人がおききにつかはれる色男がひつてん金持が突だされるなごがお定まりでなるほど人情のつねをかいたものだがそうばかりでもござりやせん千じや萬べついわれはせねども六ッ七ッまでもそだてられた所が人がらのなかなりや人がらをこのむはり物の中にそだつたのは玉のこしよりくはへぎせるで長屋づき合がおもしろく思ふおやしき生れはおやしき

客がなつかしい田舎では旅人と噺合がわかるといふきみでこゝは古郷ぼうじがたしのばでとかくうぶの所が戀しいものとみへやす 風 市川流のあらごとは江戸ッ子のきもにひしとこたへ義太夫狂言には店者が袖をしぼる出かわり時分にやア鏡山が當るといふやつぱり理屈さ 元 ときにつかねへことだが柔和さんのかのわけはどうなりやした 花 わづらつてゐるさうさ毎日のやうにふみをよこしやすがいづれあつていはねばゝ返事もせずにおきやすがおりへなぞもしつてゐる譯合を今さらいゝ出してとんだことにでもなろうかといゝかねていやすよ 風 それでうつちやつておきなすつちやあはてしがつくめへせへ 花 それだから實は今夜ら一寸ともいつてきてへと思つていやすよ 元 おめへ行のなら付やをふせエいづれにも存念の所をはやく云てきかせてやりなせへな 風 けいせいの心いきをおもひやふと不便でならねへによ 花 なんだか酒が裏におちそうだ 風 そんなにふさがずと行のなら支度をしなせへなもはや夕陽芙蓉になん〳〵だ 元 今からいくとちやうどいゝ時刻だ 花 吟聲あいみてもはかなきものは行衣に數かさとめぬ契りなりけりだ 〽枝おり戸を明る音ざり〳〵 丁稚 モシ旦那樣柔和さんと元氣さんが中の町でおまちなさいますとはやくお出なさいませとおつしやつてモウおさきへお出なさいましたァヤさつき持てめへつたお肴を上りもなさいませんネ 風 大きに寢やつた(トそこらをみまはし)すんならもふいかうから跡をよくかたつけておきやよ

成積妓園待人

墨水の筏上すり火うちの音チョンく

一柔和があいかたノ一春日の（歯ぎしりいおとぎりくカリく）の（元気が相方）一常夏たゝきてはわるうおざんすよ立なんせんやうにしておくんなんし　元承知だぞ（風流が相方）秋篠アレサそんなにちからなおだしなんすと借がおさまつてから跡で手やほうほうがおざになつていたみなんすはなかなかすがいばんしんく一三笠熊のゐがあけたふおざりいすどなたでもちよつと出しておくんなんしその用だんすにたしかおざりいした　一柔愛にもつてゐるゐマアこりよゥ呑せてくんなせへ　夏こゝへおよこしなんしモシ春日野さん魘りでおざりいすおあがんなんしアレサあんなに歯をくいしばつて顔をふりなんすものをソレまたたちたがりなんすよ　一楓わつちが膝へかぢりついてゐるからほつてもたゝせる事じやアねへ　一秋この汗がごろうじいしアレサそんなに身をもがきなんすと草臥なんすよあんなに手がなんしてはつぶりがあぶねへから其かんざしも何もかもとつておあげなんし　柔きみのわるいしやくだぞ終にこんなに發たいを見たことがねへ　一三此ごろはでへぶようざんしたところへ柔和さんがお出なんしてヤレ嬉しやと思ひの外だねへ　夏ぬしがおこさせなんしたのでおざんせうどうぞしておあげなんし　柔おめ

へなざアきめ所をしつてゐるからいゝが強くおさへると痛むといふし側にまじ〳〵して居るばかりだはな〔三〕おさまりさへなんすりや跡はうそをついたやうでざんすよ〔柔〕でへぶ静になりやしたそつと手をはなしてはどうだネ〔三〕もふ一度藥りをあけひせう（トロうつしにていませる）秋今のはいゝあんべいにあへりいしたごつくりといゝしたから通りなんしたでおざりいせう〔夏〕春日野さんどうざんすちつとはようざんすじやアおざりひせんか〔春〕アヽイヽ〔三〕もしおいらん氣がはつきりとおもちなんしどうでおざんすへ〔花〕アイコヽ笹さんか柔和さんは〔三〕これはどこゝにおいでなんさアみんなもおきておいでなんすよ〔春〕チヤ〳〵わたしにかゝつてまだねなんせんのかへとこなつさんもあさしのさんもひさしぶりでおあいなんしてさぞおはなしもたんとあんなんせうにおじやまをいたしひしていつそおきのどくざんすもウようおざりひすからあんじておくんなんせすともふおやすみなんし〔秋〕そんならはようざんすからたんともおもひなんせすとヤアとつくりとおやすみなんしわたくしどもいつてねへせうはな〔春〕おめへさんがたのおむつまじにひきかへてわたしやア柔和さんにあきられへした（トわつとなきだす）〔柔〕アレみなさへなアいゝふひねりをいゝやすはな〔三〕それだからふあつてもきれねばならぬとおつせへすじやアおざんせんか五年このかたおかよひなんすさいちうにほんにうぶけでついたほどもおめへさんのお氣にさはるたこたアおざんせんにはどのやうなとが誤でおけな

くされへせうアイサわたしやつきだされる覺はこれほどもおざりいせんとはいふものゝおめへさんの身でおめへさんの身をひきなんすことなりやどの樣におもいひしてもわたくしや三筱さんの相談つくにやアめへりひせんよそに增花ができなんしてたらわねへわたくしでざんすからあひそのつきなんすもぜひもおざんせんかはんにおめへさんにかぎりうは氣なことのなひおかた情といひ實心といゝすへたのもしひおこゝろは唐天竺にも二人りとはおざんすめへとこれほどまでだまされゝはだまされへすもいかとおもいゝすと悔しうおざんすイヽ引くやしひ（ト有あふものにかたりつきまたもやおこゐはさしり）　三モシヱおゐらんどうしたものでおざりいすおつせへすこたア積がなをつてからいつておくんなんし（トもがく兩手にとりつく）　春さつきの剃刀をどうなんしたおいゝなんしおめへまでがおんなじやうにサアはやくおいゝなんしともうしひすにヱヽモじれつたうおざりひすよ　引　夏こまつたものだねへ　秋どふいたしいしたならようおざんしやうやら　風コレサ春日のさんせつかくおさまりかゝつた所でそうじれてはかりいによ柔和さんは又どういつたのだ　柔どうとつてだん／＼のわけをはなそうとおもつていゝかけたところであのとをりだわな　風そりやアひつきやう積がおこりたくつていた所へもつてきたからのこつてあろうさんならおゐらんこうしなせへマアだまつて寢なせへそこでおもつていた所で柔和さんの心いきのところを聞てみなすつたらまたそうでもござりやすめへそれに

してもみんながかう居てはよく寝ねへからいつれも寝るとしやしやうじやアねへかへ [夏秋]さうがよふおごんせう（トみな／＼それ／＼にあいさつにてふしど／＼へおのがさま／＼出てゆく跡はさし向ひ表座しきの

唄もきこへ下座けんのさはぎもしんとしづまりやゝしばらくだんまり） [夏]ソンなにうらめしさうにおれが顔をみることはねへはな [佐]ひよつといやだと思ひだしなんしたらおつとりうちこう寝なんすのもさざいやでおさんせうね親兄弟ともふしいすものは顔さへろくにみしらずと国をへだてゝくらすふた親だ跡までむすんだゑんは切はいたしひせんに夫よりか大切に思つていてもおまへはそれのほどにはこれもいとやも今まで二世の夫と思ひさだめておりひしてもたつた一ト口きれたといつた斗でおめへのたにんとなりひすとは此様なはかねへものはおざりひすめへ [夏]ヤア[illegible]はかねへと思ふはてめへ斗じやアねへ突の二階でも手めへが艶で出た女郎はすさまじいことだあろうが互に苦労もしあひ客は女郎のためにしくむる女郎は客のために年季まで入レても末は夫婦になるがうれしいと命にもかへて思ひおもつた人のとけへしの中よくえひこんだはすくなかろうといゝてへがマアあるめへ有てからが百人に壱人か[illegible]程にまで難義をしたかひもなくなんのかのといふわけでとんだ人に受出されるよ年があいてしやうことなしに心にそまぬきやくとひとつになるか大勢の客の中だからそうはありそふもねへものだが勤のうち夢にてもみたことのねへ人の女房になるがマアおはひすいやア我身のうへはかりじやアねへとさ

つはりとあきらめるがいゝたわひもねへことをぐず〳〵思ふとわづらつてしんでしもふぜへ〔春〕そりやアのぞむところでおざりひすひごうの死をしたものは劍の山や血の池でごつめつのおにゝせめられへすもいとやしひすめへがおなじことならあたりさはりのないやうにわづらつて死とふおざんすはすらるゝ身をばおもはず誓てし人のいのちがおしけれど其ちかつた起情をもつてめへりひしたならたとへ夫はあるめへがさいのかわらで迷やいたしひすめへねへ〔梅〕そりやアてめへ何をいふのだ馴染の客とされるたびにしなふことならば此廓に傾城のたねはつゞくめへてめへも今までにや五六度もしなざアなるめへ〔春〕人も知ておりひすおめへさんとの中のこたアなみ一通りのことだとそう思つてお出なんすのかへ〔梅〕それだからことをわけていふじやあねへかそりよふをろく〳〵聞もしねへで死ぬのいきるのとあのやうに癪積をおこすじやあねへかマアよく聞くがいひわすれもしねへ仲の町で手めへをみてぞつこん迷てあがつたところが知てる通り何ひとつとり得のねへおれが樣なものだが折節冬枯とかなんとかいふ時分夫に手めへもまだ小僧で今とちがつてろく〳〵客もつかねへ時だからはんの傾城の常でおりよウよびたがつたをうそとしりつゝみんなまことにうける其眞實が手めへの腹わたへしみこんだが後は其うそにいつたことがみんなほんのことゝなり惚たほれぬはむかし咄そんじよどこでうまれてこういふ譯で此さとへきたとてめへの口からはさぞいゝにくかつたであらふと思

ふやうなことも打あかして段〻のわく（ヘカ）たて今じやアたよりねへ身のうへでおざんすふ便と思つておくんなんしといふにつけ外にたよりがなけりやァこそおれがやうな者を力に思ふかと考てみればべつにかわいさがまして顔ばかりには惚もせずほんの女房の様に思ふ手めへのほうでもおりよウよぶのには苦界の身の楽と人は思へど片時もわすれたことがなけりやア思ひ出す間もないところへ外の客がくりやアたのしむ中のくがいぞと心にそまぬかんさしやだてでな模様のかいどりがおれへてへして氣はづかしいとほんにけいせいのやうなこたアみぢんもなく情をもらさぬ時もなけりやアいつか女郎だといふこたアわすれてしまいひよつとするとどちらがおれがほんの内だかしれねへ様に思ひ二日便がなけりやアどうしたかつらくつているかさうはないひよつとまたおもしろいことでも出きはせぬかと思ひ二日かほをみねへと唐へでもいつた様におもふにつけ越方行末のことをとつくりと考て見るにいやゝゝおれが身斗りじやアねへあれほどにまでおりよウ類にしているてめへにまでなん義をさせるでもあるめへと夢がさめて見りやアとてもつまらねへ 【春】どふ夢がさめなんして何がつまりなんせんはやくいつておきかせなんし 【米】サアつまらぬといふは女房といふもなア此世からあの世までに一人りよりほかアねへものにきまつたものだによ 【春】そりやアおいゝなんせすとしれたことでおざんさアな夫がどうつまりなんせん 【米】其いわねへでもしれたたつたひとりの女房を義理につまつて今度外

からもたにやアならねへ　[春]（エヽトおどろく）　[米]そこだからこゝの所をよく聞てくれろ今迄是ばつかりハはなさなんだが常〳〵てめへがうたぐつているアノおしつといふはおいらが爲にやアマア主筋だがいまじやアけへすにもけへす所もなしやろうにもやる所のねへ義理と哀のあることでどふあつてもこふあつても女房にもつめへといへば一家親類はいふにおよばずしんでしまつた親父今いふ主筋の人へも義りも法もかけるのみかありよウみす〳〵みごろしにせにやアならねへ白イ黒イにかみ分のあるおれならばハイトいわざアなるめへじやアねへかそりよウまた嬉がる心根の不便さかういつちやアおかしらしひがつらといひ心だてといひ徳がよならどの様な分限へでもよりによつたいゝ男を亭主にもち町内の人にもうらやまれるよふ榮花にあまる身のうへいやがられてもおれがやうなものゝ女ほうになりたがるかと思やさつぱりといふけハなしにかわいくつてならねへこういつちやアてめへは何とか思ふかはしらねへがそんならやア人の情も世の義理も捨てしもふにしろしよせん丸くはいかねへハしれたことそこでさらしの手拭で道行とでかけた所が二人りともこういふからだでたつきなければつまらねへとつてつまとつまをむすびあはせて柳の木へぶらさがるかだかれやつて水をくらつてそれで本望けつかうなことだと思ふやうな夫ほどのばかでもなしそういつててかけ妾をおくほどの力はなしありつきりの智恵をしぼつてもこいごみうちめしもくはすにかんがへてみてもひとつになる

ことのならねへやうに天帝からのおさしづだからしかたがねへと思つてくれろこう夢がさめてみりやア是からが現のはじまり兎ても角てもすゝまにやならぬ浮世なら一生を面白くらしてへもんだねんのうちや妹だとおもつてきてよかァきもしやうがそんならハイさやうとさつそくにもいわれめへがこれからァすゐた男に身をまかせおれをばせめて兄だと思つてくれ必ずたん氣なぞおこしてくれめへぞ（跡はむせびこなみだごゑかすかのは猶なみだぎりとじひとをかみわけてなくより外のことばなし）そのやうに物もゑいわず顔のいろまでかわるやうじやアならねへはがてんがいたかいかねへかなりむほうものだと思ふのか但シは又一家一門へ此世で義理がかけようが主親へあの世で顔が向ケられめへがおしづが路とうにまよをふがそうはいつてくれそうもねへもんだとおりよウうらんでゐるのか　春　其様にことをわけていつておきかせなんすものをなんぼ物をぞんじいせん私でも無理とはさら〳〵おもやいたしひせんわたしやどうりにつまりイしてなみだがこぼれてなりひせんいかに賤つとめなしいすとて義理もおよくもいりゐせん私さへよけりやあよふざんすから切レゐこたアいやでおざりひすトたとへこがれ死にすればとてどふまあおもふされへせうぞ私がことにかまいなんせずと此世でもあの世でもどこもかこもいゝやうにおしいさんとめうとになつてたんとかわひがつておあげなんしおゐえさんは夢がさめたとおつせへすが此様なかなしいせつねへこれがマア夢でおざいいせうどうしいせふし

よせんいきてはいられへすめへわたしばかりかゝさん迄けさもけさとて逢にめへりいして病氣でいるのをそう思ひゝしたかおめへさんのことを問いしたから此頃久しくおとつれもおざんせんともふしいしたらてめへそりようを氣にしてゐるひのじやあねへかつねゞはなしのとをりなればあの樣な末頼母しいおかたはまたとあるめへおれだといつてもてめへより外にちからにするものはねへすりややつぱりぬしのおせ話にならねばならぬ身のうへもしもお心にそむく樣なことがあつては七生までの勘當だぞ隨分大切に思つていろつとめの身ならうはべはたとへかざるとも心にまで白粉をつけてあきられるな只あんじるのは手めへの心のちいせへのだわつかなことを苦にやんでわづらつてばしくれるなおれひとり跡にハのこらぬぞとこふいふことをむしでもしつたかなみだをこぼしてもふしひすからいつもの持病ざんすから氣つかひしておくんなんすなまたぬしのこたアついやちよつとの中じやアおざんせずふとなれそめしそもやそも末の松山波こしいせうと切レる緣ではおざんせん必あんじておくんなんすなともふしひしたらをくのお客のその中であのやうなきいやうといひ身代といゝ實義なお人につながるといふは勤をしたがおれまでの仕合だといつそ嬉がりきつてけへつた跡は猶彌まさる積の種そふいふ所へこういふ譯できれへしたともふしひしたならわたしよりかかゝさんがなからへていひすめへ韻に思ふおめへさんにはわかれてしまひたつた一人りのかゝさんをさきだてゝわたし獨

り何なちからに此世にのこつていられへせうとても死ぬならおめへさんのみておいでなんすところでしにとうおざんす臨終の時一ト言のみかうが何よりもうれしうおざんすかわひそうなはかゝさんの身のうへわたしが死だときゝいしたならなき死にいたしひせういさるのわけはおめへさんいつてきかせておくんなんしかなしいことや身にかへてうれしゐことをかきこめしおめへさんの筆のあとみんなしまつておざんすから一所に埋ておくんなんし花さく春はおわすれなんしやうとも淋しき秋の折〳〵はわたしがことも思ひだしておくんなんし百ねんの御寿命すぎた先の世でおしいさんとひとつうてなにおいでなんすをよそながらおめにかゝりいしたならことばをかけておくんなんしいゝたいことは山〳〵なれど人音せぬまにおさらばゝト（片手は薬湘にいだきつゝきかくせしかみそりとりいだしかよはきのどへぐつとつきこむおしや二十二の花のさかりのしみたへなる雪のはだへはたちまちひざくらのあけにそみてもまだトふれぬか口なしやもふひとめぐりと心はあせれどもちからもぬけて手もうごかず此ときあまりのくるしさに思はずもこゑをはなつてうめきいだす）　三 おいらんどうぞなんしたかへ何ぞうなされなんしたかへいつそきみのわるひ聲をおだしなんしたよけふは一日うとろ〳〵しておいでなんすがわるひ夢でもみやなんせんか　ト（たゞ何となくおろ〳〵なみだ）　春 うれしやみんな夢でおざりいしたかいつそかなしうおざんした（ト夢はあとなくさめたれどもなみだはのこる袖のつゆ）もふ何時でおざりいすへ　国 たつた今行燈

がでへしたハアレサもふしらせへすなんだか今夜は出とうものふおざんす〔春〕そんなら一トロのんでお出なんしな〔三〕アイたべエせうからおゐらんもおあがんなんしてふさぎなんせんようにしておくんなんし（トたがいにおんじるしんせつにふさぎせうなるおいらんのひよんなことでもきかうかと座しきに心うしろがみひけばひかるゝ夜みせのすゞをふりしん鹿の根ほそながきこゑにて）〔鹿〕今仲の町へ風流さんと元気さんと一所に柔和さんがお出なんしておしつけこちらへおいでなんすと申てめへりいした〔三〕そりやアほんにか〔春〕エヽモうれしひ〔鹿〕アレらふお出なんした

茶やのてうちんをさきにたて三人はしごをあがるおとバタ〳〵バタ〳〵

小鍋立　終

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

色男始めハほれられ後に突出れふ男
始めはふられ後に心解る書たる本也

後篇 同廓之癖

此つゞきにてたがひにふかく眞實
をつくしあふ所をかきたる本也

三篇 同宵之程

これもたがひわいらいおふ程ほれ逢たる
とも浮世しばし隔らるゝを書たる本也

傾城買猫之巻

女郎のうそをよくしれる
よふにかきたる書也

白狐通

地もの女郎の情かき兩方の
論をするおもしろき本也

契情買言告鳥

つとめの外にきやくに逢ふおもしろき本なり

辛 同二篇廓之櫻

闘たるまゝいろ〳〵しいびあひふてる所まで書たるおもしろき本也

酉 傾城買甲子夜話

甲子の夜いろ客をよぶならいにて二階へ色客のあつまるを書本也

新 契情買中夢之汗

夢によそへてあいかたに手事をいふおもしろき本なり

版 鶴岡花撰帳

辰巳のしんの手をかきたるおもしろき本なり

追々出來仕候間御求御覽可ヒ下候

手管早算 獨稽古 全

自序

算術の徳たるや光由は八さん見一の新手を出し擬夫愚鹵に是をしめす今や不佞青樓のいつゞけがゐり傾城買の早さんを著述なす蓋娼妓買はかくかゝれんの胸算用虚ごと實の極意を悟るハ聊開立開平の算術にして愚意客豈此境をしらんや夜廊に並ぶまゝ予だてあれバ友呼禿ハ鼠さんにひこしく土用ごかんの九進が一心迷ふなが文に客の心ハ無勘定引にひかれぬ義理詰の紋日ハ胸に九ゝの數色事の座鋪へ飛桁あれバきつかけられし鋪初は是銀遣のはや割か口舌の床のきぬ／＼に抱〆たのハ改算記告に成る茶肆の掛算にむれを割算かんがへてもがらりこゝがふ内の首尾一角花買若イ衆の工面は水塞鎰井算一度讀で大象の押のおもさを知給へ猶二一天作意の引殘もおゝからんそこらハナソレ番頭新造の十露盤違ひでおざりいすご

しか云

于時享和二ッの年

なんでも正月

初買の日

於文字楼上

江戸ッ子述

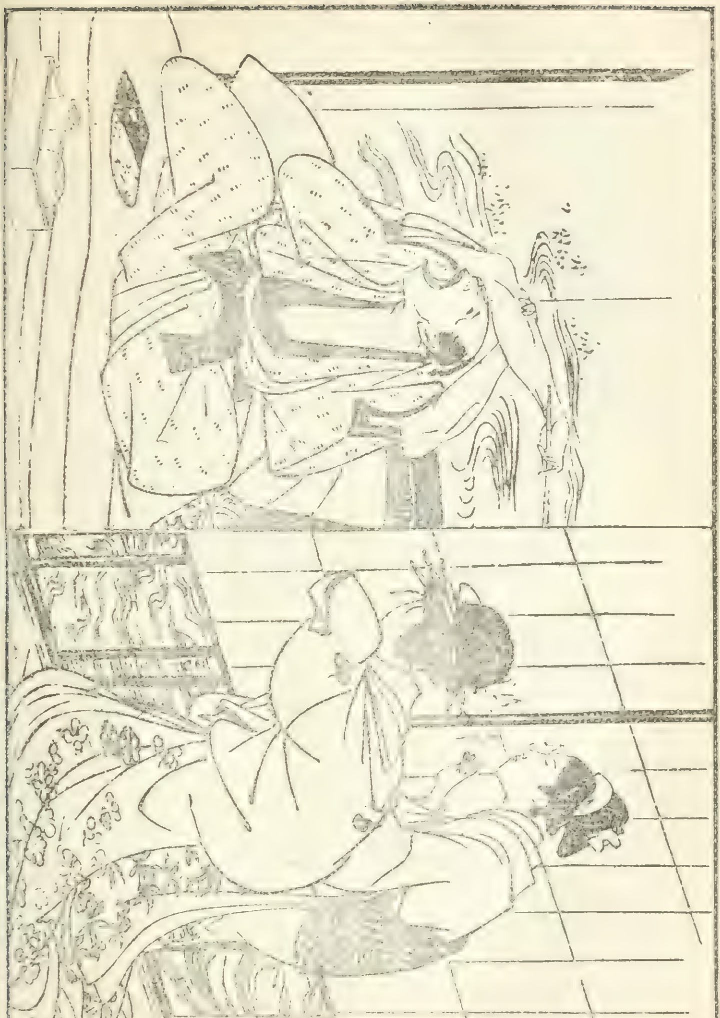
正銘

目録

新　初心の口舌

藤　廓なれし辯

鐵　聞たふう振らるゝの穴



手管早算 獨稽古

宮久亭 著

昏鐘 ボヲウン〳〵〳〵へ 土手の人足しげきころ三分なくなる智恵をだす三人づれの放蕩家 新 藤 鐵

ハいしやうづけはいまゝでありきたりの通言にゆずりこゝに略すむだ口をきゝゐもん坂をおりながら 鐵

あゝと体まねへかくたびれた 新 すぐ行がよかろうぞウとほるだらう 藤 下のりはおたいが江戸町をひやかす内にやア出掛ふから門ほしといふ刻限だト大門へはいる） 新 （見世をさがして ホイ是はしたり手ぬぐひをわすれた 藤 頬かぶる気か 鐵 ムヽヽむき出しちやア通られねへさしがあるから 藤 大わらひだかりが有が目であきれらア 鐵 それでも非常屋のふんに居るハおふくろやの阿古女に角田のふき顔だやアねへか 顔かりでも有ルのか 馬鹿アいふな 新 アレ ミヤ京庫屋のこかいがでへぶにぎやかだ尾張町の出番ての 藤 どうりで金衣清にや仙吉が聲がすることへも鉦がはいつたそうだこの間も作蔵を引抜て外に廻し楽かへたヽトはなしながら行うしろへ禿が来てりつき

禿 モシエおいらんで申ん其間ハあおにかゝわいせんどふなんしたきのふりへ文を出して置んしたがとゞきいしたかどふでもつとあそびにお出なんしとさつき主の太郎

もよふしくとさ　[腰]どこに出てた　禿角玉口(かどたまくち)に　[藤]おいらんにそふ申てくりや大キにおみそれ申ました此中はおやかましう御座りやしたろう今夜(こよい)は付合(つきあい)できたからいづれ二三日の内にお目にかゝりやせうとみんなにもよくいつてくりやヨ　[禿]（アイトかへる）　[新]どこの子どもだ　[東]鶏舌楼(けいぜつろう)のよ　ト（云ながらスルがやの角から江戸町へ入）　[新]モウひやかしなしに宿をきめよう　ぜがうきにくたびれたぜ　[東]河岸をまわつて京町を見やうか　[東]そふするとみんなに逢(あつ)てめんどうだから中の町を行ふと（立もどるいの字いの屋を見て）　[新]アノ女房は見たやうな顔だが　[東]そうだろう喜古蔦(きこた)が姉よ　[新]ウヽ太腰かでへぶじみだの（むかふより[銅]青我六きたる）　[銅]イヤこれは新様おめづらしい此間は　[青]座鋪へか　[銅]ハイ中の錦の日那はへ　[青]是もさんぐさ　[我]エヽ引そうかしてすきとお出も御座りません憚ながら御序によろしくトキニ今晩の御世界は何れだネ　[新]いまだ三界無庵(がいむあん)さ　[東]おかしくなさる事はアねへソリヤア御うらみだいづれ後ほどどなたもさよじや　ト（半八が身ぶりなしてわかれる）　[新]わりゐるものにあつた　[東]こられちやア恐れるの　[新]それだからだんまりで居たトキニ鐵ハどふしたの　[鐵]愛に居ラア　[新]ナゼだまつて居るひもじいか　[鐵]おきやアがれ　[東]おくり狼(おほかみ)を見るやうにだまつて付てこずとちつとしやれさつしなさつきほうかむりをしてへと言ッたがよくしつたものにあわねへの　[鐵]けふは間がいひから　[二人]あきれラア　向より茶やの女大でうちんな両方の手に提て来ルと）　[鐵]

アレミヤよくのふけへなだ水を吸きになつて南方へさけてくラア〔新〕イヽ〳〵ときわやの前に有る三がい菱と五枚桜の葉を付た大でうちんは誰れだ〔國〕アレハ外さくらだの小笠原と下谷の松浦だ〔新〕聞たふうな主に聞アしねへョだまつてイヤナずいぶんのわりい下座見じや有めへしよく馬に出るぜ〔國〕チヽア武鑑の事かと思つた向から来る赤イ〔新〕卅八の挑燈は団十郎が茶やでも出たのか〔國〕悪しれたつらいふてへのやア墨のてうちんだよ〔新〕そふかの　ト(まちかねて居るあげや丁の方から萬と云字の付た小田原でうちんをさげて文つかいの平兵衛来る)〔平〕新様ン此間は〔國〕平公かどこへ〔平〕二丁めまで参ります〔新〕先日ちよつとかけへ参りましたが先達ての御礼ちんなどふぞ御願申ます〔新〕ナニアレハおれにいかつとあつかからとらッせへ〔平〕左様申ましたら清花さんのおつしやるにはおれが方から代をやるから目次のやうによこしてくれろとおつしやつた帰りしらぬとおつしやつて、御座ります〔新〕何うするいろいそれな事をだれがいふものか〔平〕そうおつしやつては清花様もくらがへに出る仕合だからこゝでもねへハ如して居るし私はおり迷惑いたします〔新〕ドどこへくらげへした〔平〕御存なしかへ京町の玄珠作屋へサ〔國〕名は何とかわつたか〔平〕ハイたしか腹橋とか〔國〕さたもしやアがらねへわくせうめ　ト(むとせきこむ)〔新〕ヲヽ只今の名を何聞きへはかかるから禁てもききつし〔平〕すとふなら明日も行〔新〕うまらねへはなしだの〔新〕ナニあれに花をつてかういふ墨ハねへは、つたがてつきり何かの間違で〔新〕キ

ツイしうしんだのしかけてまけるもみつともねへから用心してとらつし 鐵ソリヤァ角力が違ふよ
（ト圓二郎をいひながら下の方へ行長瀧屋の女房おくよりかけ出） 女モシ／＼おまへは鐵さんじやァ御座
りませんか 鐵ハイお久しぶりで御座ります 女ヤレ／＼大きくおなりなさつたまへがみの時分見申
たまゝだから見違申たお上にも御きげんがいひかね 鐵ハイかわる事も御座りません 女モシしんば
の富様は久敷御出もなされませんが御きげんいゝかねおうかゞひに上ゲてへにも御ゑんりよ申ており
ますがおのぼりでもなさつたかね 鐵イヽヱまだこちらにお出なされますが慥先月湯治にお出なされ
ました 女夫レは本に御入も上ゲねへでなんとかおぼしめしたろうに（ト一チてうしあげて） 喜助や富
様は湯治にお出なすつたとよ（喜助ハたすきがわりに手ぬぐひをかたてすじかいにいわへおくり物をこしらへ
て居しが庖丁を持た手のひらではなをこすりながらおくより出て） キソリヤァとんだ事だおとゝひも江戸
橋の高嶋できいたら。ていしゆは船へ出てかみさんではわからねへからお女ばかり置てきましたが角
町へ会釈がねへ（見いたつて為になるきやく人のへなり） 女マタ高嶋も高しまだのう御立なさるも
しらねへとハあんまりな舟宿だぞ キマアあなたちつとお上りなされませ 女是はしたり御茶も上ゲな
んだ伝はどこへいつたお茶をくんで 鐵イヽヱおかまいなされますな 女お一ツ上ゲませうからマア
御上りなされませ 鐵ありがたう御座りますがつれもおりますから又此間に 女コレハあまりお早々

で御座の片さよふなら御きげんよふ 〔鐵〕ハイ（ト出てくる二人は木戸じりに待て居る所へ鐵くる）〔二人〕鐵がとんだながばなしだつけの 〔鐵〕すでに喘でもねへが父せわがふへた 〔二人〕どうしたのだ 〔鐵〕だれだかしれねへがあすのばん揚屋町まで來てくれろと長瀬屋の女房に今たのまれたがあへバしれると言て施主の名ハいわねへが大かた鶴樓か玄樓の佛だろうよ（ト二人がまへへわるみへないふ）〔吉〕何かおうら出吹だの 〔鳳〕かどがおゝひから手がゑわらねへでこまりやす 〔吉〕坊主を見るやうにソッ方ゞゝを喰ちらかしてもいひかへ満花がしつたら只ァすむめへぜ 〔鐵〕ソリャア生ちやアかへられねへのさ 〔吉〕あんまりかくななみやうりがつきるぜ 〔鐵〕大しても向から下へ膳で來てもふまねへ物を 〔二人〕ごうせい〳〵（ト京町へはいり）おが本はどふだ目白を見るやうにでへぶならんでいるぜ 〔鐵〕こゝハつなてるで上られねへし向の治文字は八重久米が早くつで二かいをせかれて居るし 〔二人〕色男と一しよにくると連までるとうに逃ぜ定めし松海老角にからもわるかろう 〔鐵〕もちろんの事さ 〔二人〕若林はどふだ 〔鳳〕こゝもわるい今地内の一目磨陸の裏に居る名婦きが時分にさうどうを出かして二かいをおろさかたまだ其時のやり手のおはちやまはしかたが居るからこゝは一生ふさがりさ 〔吉〕こまつた男だぜ年代記のいるはなしをせずと早くきめねへかでへぶ腹が來たぜ（ト立ながら交じゆ丹やの格子へ來て）〔鳳〕はどふだゑて古がとこだぜ鐵が（あいかたは客が有と見へて見せには見へねども首たけほれているゆへ名代なせ

うちにて）〔鐵〕おめへがたはいゝか　〔禿〕おいらにいさくさアねへ　〔鐵〕そんなら　ト（マがきへまはり）コヲ若紫や西河岸から來た清花といふ女郎衆は居るか　〔若〕ハイこちらでは腰立花様とおつしやりますがおなじみで御座りますか　〔鐵〕ムヽニヤ客人か　〔若〕ハイいつも早歸りのお客様で御座りますからマア御上り被成ませ　〔鐵〕そんなら正面にいる蹲じりから二ばんめの紫を着て衣を見て居る女郎衆となし見のたばこ盆をひかへて[illegible]やらしてゐるた郎衆を上げてくんな　〔若〕愁野様に[illegible]様御二人一座でござりますか　〔鐵〕ムヽヽ　〔若〕さやうならこちらへとつれんなあげる三人は二かいへ上り表の[illegible]の座敷へはいるいづれも一分女郎也ざしきのかざりつけいせうのこのみその氣位におうじさまぐ＼あれども事多ければこゝに略す例の通りたばこぼん出し物をならべて　〔若〕御[illegible]壹ツ上りませ　〔鐵〕アイと（盃を取てひとつうけ）そうしておかつせへ　〔若〕さようならト行　〔藤〕どふ[illegible]を着た　〔鐵〕初の顔さ　〔二人〕いひかへ　〔藤〕是も一分のかすりだアなんそじやアねへが仕立が見たせへ　〔藤〕手に入た物だの　〔新〕此座敷の女郎ハたれだ　〔鐵〕愁野といつて[illegible]ハ笑顔といつておく座敷だそうな　〔藤〕ナンダトうれへのにゑがほにはらたち花だとんだ名のある上戸やたせ　〔鐵〕上戸星は出來やしたまた三人一座で文珠升やちへんちきだぜさぞいひおへが出るだらう　〔藤〕定めしさ（トはなしてゐるわかいもの久兵衛ろうそくのしんをきりながらどなたもといつてまわるついでにうれいのゑがほちへ里じゆんにならぶ　わかいものさかづきだいをまゑへだして）　〔若〕

チトおはじめなされませ 吾 アイ（トかへちりにて盃を藤へさす） 若 お酌に致しませうか 國 そふさ（それぐに盃をすけ若者立てゆく） 吾 盃一ツ呑ねへ 國 チラアまだ酒がきあねへ（ト云ひながら一ツうけて藤にさす） 藤 チヨツトおさへよふ 新 憚ながらおいらんお合を 吾 アイト（盃をとり吾にさゝいつぐ又藤にさす） 藤 是ア御めんどうだっけト（ちへ里にさす是はけいせい盃の名代なり一ツうけるうれいい也はただこなつけて新へ出す呑ながら） 新 でへぶおとがすゐが雨じやアねへか 國 ねれゐもいひがと（ト云て藤ないわす） 國 ナゼ 藤 チツト謂ありさ（是は此手やいゝみなひつてんにてじッやの人かへ替ゆへ云ひ） 新 うつちやつてをくがいひどふするもんだこれ〳〵ちが酒だト ないやわんのふたではじめるふれいのハつんとして立て行） 新 藤公ちつとおどらねへか 藤 おれたトけをしるやうに無三味せんでおどられもしめへ 新 銅壺でも呼にやろうか 藤 出たのがねへとうらっせへ 新 ホンニ嘸人のおいどだっけの是ハからつけつといふ事也 國 主もきざな事を云てふさがせるぜわるいもんだ 新 此中柳橋の河内屋で源四郎が合をしたが行ッたか高砂町のおふじがいつまでおどつたそうだが面白かつたそうな 東 おれも行ふと思て居たが其日ハあへにく用が有て行かなんだいつか住吉町のお清がおどり初にいつこの須波亭の堺屋に[illegible]町のお花坊と二人ゞうたで三味せんハかぎりやみんこうに人形町の丸一ト[illegible]しかうとで下かた十二間まちの手合だからつぶが揃つてトンダ面白かつた しん 本所の手合や浅草の手合や

坂東お梅行たつけがあはねへか〔東〕ムヽニヤあんまり人過てこんざつしたから相生獅子の亂な打込とすぐに歸つて來た〔しん〕ホンニ傳吉もあすこを仕廻てこつちへ出ると聞たツけあんなかうせんがけんばんへまじるから吉原藝者の評判がわいりい（マヽ）五六年跡の燈籠に揚屋町で清久が娘のお粂が河東ぶしであみ笠や松の内を踊た時分は俄だつけ〔東〕そふ〳〵しかも三軒町の八百屋にたのまれて駒がたからすは町のむすこ達が俄のすけにでた年だッけ〔新〕ヤホンニおもしろくもねへ昔咄だコゥおめへがたは着かへて來ねへか〔う〕マアよふざんすからおはなしなんし〔ゑ〕いつそ面白ふおすよ〔東〕あじな事がお氣にかなつたね〔ゑ〕それともおじやまなら（ト立そふにするすそをとらまへて）〔新〕もつてへねへ何じやまなものか〔う〕そんならもつとお咄しなんし〔東〕咄坊主の宗寂じやア有めへし何をおれがしるもんだナ〔ゑ〕なんでもいゝからなはなしなんし〔東〕コレナなんぎな事アねへそんなら一ッ咄そふかコゥトそれそれワレ此間だいぶ鰒があたるといふにつけてできた咄しが有のさマダ是がいつちあたらしい〔うゑち〕サア〳〵夫をおきかせなんし〔東〕エヘン〳〵。すさまじいトキニある雪の日居つゞけにながして居ると茶屋がきてトキニ旦那まんざらでねへ雪で御座りますねチト御見物ながら中の町へいらつしやりませんか鐵炮でもさしあげませうというから相かたのおゐらんをつれて行と程なく吸物も出來ずらりつと膳がならぶと女郎斗り箸をとらずにいるゆへナゼたべねへと聞たらわつちやアイヤあたるといふか

らただんせんナンダくわねへ今時鰒をくわねへよふなやぼな事が有物かあたらねへ唱言があるからたべなせへといふとチャどうしんすへおしへておくんなんしといふからソンナラ先てめへが膳へすわつてふぐ汁のふたを取ながら へ我がおれかヲレが我か 〔う〕チャにくらしいのふよくわるくおつせへしたねへト（わらいながらきせるでぶつたりつねつたりする） 〔鐵〕（ハ二人斗りおちがきてゝめへ斗ねつからつまらぬゆへおれもはなしをしておちをとらんと口をむずむずしている） 〔東〕モウあやまつたからかんにんしねへがうきなあさができた 〔う〕あんまり腹がたちんすからさト（みなみなわらふ） 〔鐵〕おめへがたはいゝごきげんだおれにもちつとはなさせねへか 〔ゑ〕チャきのどくらしいどうせふの主のかつてにお噺しなんしナ 〔鐵〕マズおいらがおぼへて名はかわらねへでも顔がかわつたりして中の町をはつて見しつた女郎衆斗りもいけへと見へねへ先てうじやのせんのみな鶴が山の宿にいれバつり屋からすみ丁へくらがへヲした手ヲ書たしのわなハ儒者の女房になつて木挽丁邊にいるしくこのへも五龍と別れて是も四ツ谷へ出るといふ事だゑんといふものはおつなものであらほど男ゑらみなしてあだな京庫屋の七松もめつかちに心中を立て夫婦ながら浦賀へ行たそうなそうかとおもへば木像を見るやうな手のねへ三ッたまハ田舎大臣がせわをしてきつとしたかこゐものに成ているし心からとはいゝながらおが木の岩としハ田中にいるといふうはさ斗りでいどころもしれすかわいゝ事をしたは太助まんぢやのおゝしほよ親孝々な女郎

でやう〳〵年ンが明たとおもへば病氣ついてしんだそうながおいらが盛の時分はマダ禿でいたをおもへバ年もよらねへで今に迷てくるも出來たさたでもねへ此中も二丁目の戸世住がとこから來た文に主もさぞ年がよりなんしたろうねわつちも歯のぬけた斗りでおすト松花堂で書てよこした文がらといひその手跡の見事さあれでこそほんの傾城だ（トおしやうにしやべつているいち座もあくびたら〳〵）[東]そんな常盤な噺をせずとたばこでも呑ねへ（ときわい噺にてあてなきうそと云事也）[お]そのはなしハよしになんして外の事ヲいひなんし[鐵]さよふなら賣卜先生のぬか俵に客のこもをかぶつてねていたのはあまた見かけたが女良の古イのとて古道具やに出て居た事も聞かねへとかゝれたから河岸をかへて是から客人ンの落城をはなそうヱヘン〳〵〳〵（トせきばらいをすれば作者うしろで鐵が袖を挽てコレサやぼな事をいふぜ客のおちめをはなされてどふして爰にいたゝまれるものかくらやみのはじを月夜だモウよしなさりにもおれにやアかゝれぬと作者筆をなげだす）[鐵]是は成程尤な筋だそんならもふちつとけいせいのはなしをしよふか[新]をゝちつとやすんで又はなすがいひおもしろくもねへ（うれいの爲がほ耳こすりをしてわらふ）[遊]おめへたちやアかつぱに引れやうといふかほをして何をにこ〳〵わろうなおかしくもねへ事を[う]ナニそうじやアおつせんけれどねエアあんまり女郎衆の事がくわしいから女郎衆の肝入とやらでもなんすかとおもつてさ[鐵]（すこしおつとして目をとがらす）[う]爲がほさんぬしのかほをち

よつとみなんし初午に九郎介さんへ上げたがくによくにて居なんすね [丞]はんにいつそよくにさしつたよ（トみな〳〵わらふ） [鐵]またわらやアがるかいめへましひ似よふがにまひが料理番(りやうりはん)のむねに有からうつちやつておきな大きにおせわだ [藤]イヽサはなしはおれにあづけてマア一ツ呑(つむ)がいひ [鐵]ナントめしにして跡でまたのまふ [新]それもよかろう [ち]さゝのおきんまを上ゲや ト（うれいの丞がほ立て行ちへ里主人のはなりなたゝみさゝのきうじをする此内わる口ちくりあれどもうるさければこゝに略すぜんをさげる入ちがつて若者きたる） [若]御かたづけ申ませうチトおあちらへおつれ申しや [鐵]何時だの [若]かねすぎで御座ります [ち]コレサどこだよ [若]十二畳の次の間だ [ち]こつちへ御出なんし ト（主人を奥ざしきへつれてゆく） [藤]こゝがとんだせめへの松島丁の揚屋へはいつたやうだ [ち]かんになんしおきのどくだよ [藤]丞がほさんの座しきはとなりか [ち]アイ [藤]新公とはねて居てはなされるのおれ一人ハはなれて俊寛(しゆんくわん)といふ物だ [鐵]できすぎどもネ事だあれがくるとどんとはなしが有からおやまになる [ち]きつい團治郎だねおいらんが聞(き)かしつたらさぞよろこばつしやるだろうチャ丞がほさんの客人(きやくじん)はねなんしたそうでモシエどうなんしたお体なんせんか [新]ムヽあんまり食(くひ)すぎたせいか氣引(きびき)入レるやうになつてきましたくがわわい [東]ハヽヽなんしぶりでのびしよくだから腹(はら)がきもをつぶして蟲(むし)がおどろいたものだ [新]ならはうめてあへどやア有めへし [東]藥(くすり)でもやろうか [新]ムンニヤいひ（丞がほが兎さゝのむかいに来る） 兎生しき

へおいでなんし　[新]そんなら先へねるぜ父のちに（ト出て行はらたち花がかおる茶を持て来ルちハ里にあん
まり腹がうぬぼれゆへ水をむけてあすばんとかんがへている）　[東]先生ハさつきいつたさゝだがでへぶ[illegible]付
があじだぜ　[蔵]アノおもわせぶりが宿さちへ里さんアリヤアいつごろこつちへ来へ[illegible]ら跡の月お出な
んしたが主もあぢぶとやらにかわいひ客人がありなんすといつて待ていなんしたけがこつちへ御出な
んしたも其客人のへだトッ　[蔵]ハッシヨ　[ち]風でもお引なんしたかへ　[蔵]ナニたれがおれがうわさを
するやうな　[東]蔵公主の手跡にハおそれたぜ以来きつとへいかうだ　[蔵]ナニおゝ有事さ　ト（こけなた
でゐ　[ち]おめへさんに何で御出なんしても座敷でははたを見申といつそそはノ＼半りしてなんにも手
につきんせんよおうら山しい事だね　[蔵]ア我はつゝおとおもハ共ににあらはれしかアヽいたらねへ
女良だ　ト（蛇をいつているおもて蔵棒引捕手来なうつ）　[東]モウひけたおれも陣を引ウと出て行

（是ヨリ傾城買二人生酔（　はじまり さよふに

客人
[東吾]　あいかたうれいのとしは二十三四にてはへぎはうすくかみはさゝいにむすびしのき一本に石特の笄
あいかた
な二本さし色中白にて目のわたりなで（でカ）たずねるやうなちいさな目にて衿にはすつかりと足が弐本は
[慾野]　へ（宗カ）宗條茶七ゝ子の裾まはしにひがのこの胴をつけたねまき姿にうさおりの男帯をしめふりも見立も

あろうといふ上面よき仇ものなり初會なれど大きにのぼせそこ〳〵に仕度をして床にまつて居る
「東」（ハふべんじよよりかへりしやうじをあけはいる）「う」どこに居なんした「東」小便に「う」ばからしい今迄かへながいてうづだのふ「東」
「う」いひ譯をあげんせうか「東」サアくんなう今はおつせん捨ておきんスからこんど「東」またこひとかそれでハたかい薬につくせ來るかこねへかしれねへ物を（うれいの東がかほを見つめてほろりとなみだをこぼす）「東」どふしたしやくでもおこつたのか「う」イヽエどふもしんせんが今主のいひなんすを聞ばどうせそウ御出もなされすめへとおもへば未たがおなしうおすと泣「東」是ア大気だそれになく事が有物かどふいでおやしい名だとおもつたナニそふいふ事じやアねへから氣にさわつたらいやうけんしねへ（うれいのハ泪ごへにて）「う」わつちだつても諸道者が子供じやアおつすめへしそうおうに年もとつて二階でハおよばずながらどうかかうと諸道も存あけつつもしれす物をなんぼ主の氣にいらぬわつちだとて心一ツぼいな事を云なんせすと少しは花を持せていつておくんなんしたがいゝ（トゝでそゝかきながら）今も今とてみがはきんと二人で主の噂ばつかりしきつて着物を着替へる間も氣がせきどこがどうおまんまをたべて居んしたから腹詰んが來ていゝなんすには今まであぎつて熊野さんハいつにねへ早イおまんまのたべやうだといつておうら山しいおたのしみきんすとついぞねへテノ子達の目つまにもかゝる程にどうした事やら座敷の内か

ら主にはト（跡ないひかれしやくりなして）一チ座の女良衆にもかまはず人より先へ来て見れば床にお出もなんせずト（わる紙で泪なおさへ）呼申さうにも主の心いきもわからずまた傍輩の女郎衆に年けるもねへとつもられるも恥かしくおもへばまゝならぬ浮世とあきらめて見ればみる程くるしさのまゝ一ト人で酒を吞でいゝしたが吞ばのむ程おもひ出されてかなしうおすト（泪をおさへ紙ではなをかみながらうつむく東はせなかをさすつてゐる）夫からやう／＼お出なんしたとおもへば病氣だのモウこねへのと人のおもうやうにもねへおねのふさがる事斗ツかり云なんすものをどうして泣ずに居られる物か「トかほに袖をあてホヽイ／＼となく真きまをつぶして」〔東〕コヲそう泣てくれちやアきのどくで悔の言よふもねへチツトマアおれが言事も聞がいひ　扨ゝおめへの言事だがいやだとおもう女郎をバ先に見立て上がらうか是程わかつた理屈はねへふしんぼこいとがおめへにほれてあせつたつてはぜつりで鯛を釣た例もなけりやアしよせんおいらがふさにかゝるおめへでもねへからふんかうが月で手のとゞく瀬も有めへと愛でハ往生せざアなるめへ〔う〕何ンだとへ是程にもおもふのをまだうたぐつてそんな事をさりとはおもひげへいねへ事だざくやしくつてなりんせんと　〔東〕是サよしねへいてへわな（トひざをさすりながら）うそにもおもつてくんなさる心いきは嬉しいがよくくみわけても見なせへさはさそうにもいたるふにも刺たいめんから顔を見るとわからぬ事を言ならべて泣てはつかり

居る物をうたぐるめへ物でもねへなんぼおめ酒きげんで泣ながら喰付ても木名をあかしたり頭巾を脱で見せらりやうかおだナせりふに気をもますとあんねへ湯でも呑なせへ [う]成程よいから酒きげんで言かとおもひなんせうが初や初會の客人ンをたとへしぬほどにおもひたればとて見さげられるもいとおそれにまじめで是が言れた事かへそりやア主でもおつすめへあんまりきつよいト（すゝり泣をする）

[東]そこも有レばふたもあるとなれなじみもねへ内にゐつともねへ泣上戸はよもやとおれもにらんだがかかつた所が身のほおだからいつそゐおんなのこさうふりとあきらめるより外仕方がねへわな [う]仕かたが有つたらどふなんすへ [東]ソリヤア聞がものはねへあきたらいつでもけへしなせへとからだをおめへに任せるのさ [う]それならぬしの口をお忘なんすな [東]人のていじせうごへしよふよりそつちの土臺から直すがいひ [う]まだうたぐつていなんすかへ實にそうなら居て見なんし [東]居よふと言つたら其時は生酔本生たがへるつもりか [う]しつたかはうかしらしいなんぼしがねへわつちでも主に苦労もかけいすめへから来なんす氣なら隠さずにどふぞあかして御聞せなんし [東]なんだと天窓のこんでんまで見るやうにあだにくらつて迷せるの見へにもおつう挨拶してへが勝のおきつてこのまた行中にゐんハ有たけれだたへつけねへ事だからどふも言がいゝ事だやら不案内で知れねへからおめへの胸に聞てくんねへ [う]どういへばかう言とソリヤア人にもよりいすはな苦界の道も立引もわからぬ

やぼな生とおもへば是程くろうは致しいせんとゝふるい摩になる」年にもめんじてなぶらずに少しはおんどさせたつてよさそうなものにもなりいすめへにおだ斗り言でおらさずにてへけへにさつしなんすがいひ　トハ又さめ〴〵となく　東　談子と地獣にはかたれねへとこんなこまつた事アねへそんならおれがかゐかつたものつとせかずに落付て言とゐんなこつおからいおふとおもつたせりふだものをマア顔でもふくがいひにお紙もたまるもんじやアねへきつゐしやくりださゆでもやろうかト、　手ぬぐひにはなせでゐない　うそいふなつておくんなんすなお有がたうおすそふいうやさしい主の気で有たがいに言是程にもきがもませなんしたへコレ申しんすうへからはたとへ外に面白深しいなかの色事がおありうともどふぞ見すてゝおくんなんすな　東　もつてへねへ事をいふぜよしや外にあつたれはとてもおいらの實に見かへさアなゐやうながつさるだろう　うまたよまわす事をいひなんす主ゝまあせそんなだのう　東　おめへがうそにもまよふといへはおれも血道をぶちあけて居るから忍にきるわけもねへツリヤアおたけへ若(右カ)左衛門だ　うそシエあしたもあさつてもけへしやア申さねへがようおすかへ

東　其場におよんでみれんはねへがそこが惚情の両藥の紬でおめへの　にも有事だ　うはかつて居るから

東　きせるがしれねへ　うのますとよふおす噺しが有から　東　たつた一ツぷく　う　そんならどふとも勝手になんしト　へ　○　東　ヤレきの

みじけへおかしな　コレなぞ物をいわねへなア、聞へた五臓六腑を見ぬいたとおもつてモウふてるのかチット早イの碁にまけたから將棊でかつ氣かソリヤアおめへの點にやアねへ何だろうマアこつちらをむきなト（うれいのが肩へ手をかける）「う」（ふろへこへにて）ヱヽそツいつそくやしいぞよはらの立よくもいわれた事だのふほれたがわるいとがまんしてだまつて聞て居んすりやアあんまりしねへ事ばつかりちつとは私が自由にも成ておくんなんしたと（テカ）「おめへの恥にもふるめへに人の氣もしりながらふけへねへ女郎だとおもひなんすかそれほどにもいやならはぬむかしとあきらめてたとへおもつてしねばとて胸中で一トことふおすから心まかせせる一ツはいけねてへ事あいひなんしト（またさめざめとなく）「東」「ま」に流か氣のきゝへとなりのきやくに聞へても外聞かわるいわれ詮議子供じやア有めへし畢竟よくいつたのもきゝを引てはよふとおもつたかあるさ何もわる氣でいやアしねへおめへがあじにかんすぎおきなお由へものほれてへからもりかんにんして流に一ツなさういふ目の下にもはだらきの程へわつてにとけすんで居なんすから又もおもらしたなうとた皆の世界ではりふせんト泣「□何ばかにおわだつて氣儘じやア有めへしおめへにいしやアても有ようにいつてでいたないつてゐもんだおれとらいるとハそつちの事だ「うりやけしかねへあれ□といつておきかせもふしんしたにまだうゝくつてさやるはがねへとよんだりが……この引

出しかけ出しに藤がたもとへ入るさぐつてみれば金ゆへびつくりして）【藤】うは氣ハ廓のならひといひうそをまことゝみせかけていとしかわいのおだ傾城も酒が言いふ世（ママ）せかいとおもひの外な深切は好のつまりともしれながらどふいふ譯で是程にも　うたのもしらしいと目についたがおふたりのふんのはしかして親兄弟にも見かへる程にさ　【藤】そふいふおまへの心とはしらずお常とてかんにんしなせへ　【う】いつか身儘にもなりながら　はなしにて主の替になる事ならそれの苦界にしずみはしていとう私でおつせんかいかなら目すてゝ（ト跡に目ごもいてなく）【藤】當と置きつけへた申た約をあなれしる筋でも有るへぞへそつちに損があらやアこつちも男だ　うほんさんすかへ嬉しいのふ　トにつこりとわらふ　【藤】三三日降でもいひあふがふへにく日和に成そうだ　【う】ごしやうでおすからもふいひなんすな

【藤】さァなん時だ八ッ過かの　【う】アレには鳥がいつそ寒いよふ　【藤】ドレモゥひとねき

（サラリンチヤント）

鼻筋とふりあつらへたよふなもみあげにてかりがねびたい髪は兵庫にむすびかにの足ほどかんざしなさしまだ内證のせわと見へて緋ちりめんの胴に白じゆすの額へ萩のもようなすり込せ白ちりめんのしごきをぐいたゝてふいきやうもの也年わかいおぼこ氣ゆへまんざらにもおもわねどさしたる譯もな

くがいにもたれながら中腰になつて涕をひく

唄

我をこひくべき宵なりさゝがにの蜘のふるまひ見るにつけいとしおとこをいつしかにわすれねばこそおもひ出さず候かしく書かけて〱筆にうそなきひよく紋連理とちぎる筆をせめて畳にうらかたのうらみのくずのは風よりふけ行空いつゆさむく月はさへても床のやみ〱シウコロリン　チンチヤント　弾仕舞

[玉]ヲヤどうせうぬけねへはト(一人わらつているちへざとらうかをとふる)　[玉]おやお待遠かね　[ち]イヽエ　[玉]ちへ里さんかちよつと手をおかしなんし　[ち]なんざんす用かへ　[玉]これみなんし　[ち]ヲヤけしからねへゆびのもと迄来ていゝさあナ是でよくヽヤアおしらべなんしたね　[玉]アイサわつちもしりいせなんだがこんなになりゐしたおかしいのうト(わらひながら中の手を出してみせる)　[ち]ヲヤ〱いたからおつせんかへおめへさんもおきれけへツたもんだねへのどのこんなになつたもしらずにおいでなんして手がおかしうおすかへまたおめへがのたんしたね　[玉]さうしたにさす相さんの広袖で　[ち]これまつた物だぞマアぢつとしてお出なんしと(よふ〱つめをぬきゆびをいわへてやる)　[玉]おめへがとふおす　[ち]お是りヤア世のわざかヤアおつせん塗つていたす檀か庭原の蹉跎さんのでおすいつ……のとほかを置て御出なんしたつけ　[玉]そうかねどうりで大きゐとおもゐしたつけ嬉しいのう　ト……わか……たずね

らチットおたしなみなんし人も聞ていゝさアなモシ今おひさなんしたのハ京橋の豐高さんが下をおつけなんした身上りとやらでおつすかへ　〔丞〕ソレサ藏まへの茶がお作りなんしたそうなかいつそひんがようおすね　〔ち〕ホンニ此中桐屋で豐高さんがお見せなんした夕化粧といふめりやすを御聞なんしたか　〔丞〕イヽエ紙子さんもそんな噺しを枯木枡屋でなんしたけがたしは付さんがおかきなんしたとさおほへてならちつとお引なんしトへいふ所へうれいのが禿なみだちやわんをもつて來る　〔禿〕おゐらんに御無しんながら新茶ができたらちつとおくんなんし　〔丞〕そのどびんごと持てゆきやそしてなそこらの床に三味線があろうからかりてくりや　〔禿〕わつちらがのは此中客人がおやふきなんしたから張替に遣しんしたがまだ持てきいせなんだ　〔丞〕そんならあざみにあつて床の間のすみに三味線が有から持つてこひとそういつてくりやよ　〔禿〕アイト（とびんをさげて行）　〔ち〕おまへさんの客人はよくお休なんすがどうざんしたかへちつとおこし申さうかね　〔丞〕ナニサあんまり宵におまんまをたんとたべて心持がわるいと言なんしたからモウちつとねさせ申がよふおす　〔ち〕ばからしい食亂なこつたのう　〔丞〕主の客人はへ　〔ち〕聞ておくんなんし宵からちつともねもなんせんでおゐらんをよび申てくれろとやかましくつてなりんせんからそう申しんしたらうつちや（マヽ）てお（き）申せとさ座敷でもこんやはカノがお出なんしたからいほせけへつていさつしやる物をどふして來やアなんせんのさトはなしている所へあざみしやうじな

あけて、あ方々さがしんしたがおつせん [ゑ]チヤうすどんなおれつてへ子だのうさつきしがた床の間に置たものを あ夫レでも座敷にはおつせん物をたれぞ持ていきんしたろう [ゑ]またかきついぶじやれようだのうぶしつけらしいそんなら花川さんにそういつて見せ三味線でもかりてきなんし あ(アイと行) ちそしてわつちがそばに居んすりやアさま〲な事を言なんしてしつゝこくつて成りんせんから出て來いしたおへねへ助兵衛な客人でおざんさアナ [ゑ]チヤばかげたひつぶかな客衆だのうト(わらふあざみ見せ三味せんを置て行そうにする) ゑコレサまだ用が有ルよおれに頼マれてくりやそつちでハねさしつたか [あ]イヽエまだおきて [ゑ]そんならそこのふた物を持つて行て今程はお有がたふおすと歸し申てくりや あアイト(持てゆく) [ち]すかねへ三味せんだのうト(てうしをあはせる)

めりやす 夕化粧

〽ねみだれし寢着のまゝの身じまひハかわい男のうつり香とうつすかゞみになぞかけてとくおしろいもあだ人のよすがをまちてまゝに身をふりわけ髪ハおのずからわけときくしに二世までといふて三浦のかたにたしてカチヤン

〔忍〕いつそおもしろうおすがそのゝ唄せんは何ごとといふ引よふだね〔ち〕これハ八哥の文句と三味線と
ゐりつらとやらでつゝかつて居んすなア〔忍〕おやうだん音ヅにおしへておくれんなんし〔ち〕一中(らう)といつ
て来んすからお休なんし〔忍〕そんなら後(のち)に〔ち〕アイト(出行忍がたの禿のきたる)〔忍〕サヤ西ノむらい
今迄(まで)どこに居たこのたの〔禿〕ます計さんのつかひに次どの酒屋(さかや)まで〔忍〕なんじらの用もたらねへでは
ひ氣だつけのうト(わらいながらそこいらをかた付たる火を入れて水を一ッ持て來や〔禿〕アイ〳〵ト禿の
来ぬ客をとゆかれたけつまいとれなよりにしてそのまゝ茶わんを出して行る客ハ　たゞこゝにすまれ
そつて居る様の大夫にしき持て来て　出〔忍〕行て來や〔禿〕アイ〳〵ト出てゆく〔忍〕コレもしこちへの
袖を見やしねへたくないいれもたの〔禿〕なんでおどんが〔忍〕久しいもんだ元下へ行ッたらお針さんになつ
てもらやト(たばこをのみつけ)そこエのおさんせんかチットさきましたの間でもなんしもよく寝さつし
やあいうト(ゆりおこす禿はチヤン〳〵とねうをなしてゝ)アヽまたおれが所かチットコツハふ
きぬいむきのやかいの柱(はしら)でハのおんなゝのんをかうかりましてーッけんじ物語ハどうでござへ寸頭(あた)
ふしいやろ〳〵ト〳〵〔禿〕あすやいつそいやなときのわりふなごとないわゝしみるそふなおかしいのうちつと
目ふさいか

此よふにしてあいさつをすればいつまでも同ことをいふ也所はまた目な
めすりなゝ光斗かけ合ねごつしやれ紙かず一丁半御座候得共丁數のおゝくならん事をいとふこゝに略(りやく)すかつて

袋へ入に御目に掛可申候）〔栖〕（ムチヤ〳〵〳〵ト頭がへりをする　ト其の指よりか
ほゝづきのやうにふくらむを四本ならべ〔友〕アイタヽヽヽ頬へのびをいためさつしたよアハ〳〵
〳〵ト（なにかこへに背ばかりして）〔栖〕せつしよりあなたになつた（トからだをふきながら）おるもんで
へぶ調子けれ共の〔友〕ムチヤ御子様がおきふさんすねんのいびをいためながら〔栖〕ナニうそをわつちが
かへ来とでもおめへ延て居る物を〔友〕おかしくなつくとどうするもんだへもちつとお音イなん
し〔栖〕ヘ〔友〕おらアもうにうかされたよしつたら…お聞てくれねへ〔友〕其レでも聞かおもしろ
たうでおつしやるから夜着の袖へかほゝえてあいさつをして居えした〔栖〕それるほど嬉しいふいきたおこ
たうと　おもれねへでおんまわしねへうもねへ事だ二ト（まへをまる見て）ヲヤ〳〵法花大海のよふ
こなつて居る是ア水か〔友〕是せつかく春ふと具ものをト（前を見て）ヲヤおつだのう〔栖〕おめへもふか
うとハしねへでいひ気な物だ者アノまん中にある黒い物ハなんだ〔友〕おれがへ主の頭巾さ〔栖〕ナニ
そりやアとんだ事だト（とりそうにスル手をおさへ）〔友〕ヤヽうつちやつて置てみなんし醜かろふで顔
自可おすはな〔栖〕コリヤアおそれさせるぞおれが身にも見てみねへイキんを一ツ結うにふつたりして
こんなおいらん鯖がどこに有物だ〔友〕其レでもねてんさいよどこから品川をのぞいてみいしたらこんなに
わいそうおつせうよ〔栖〕有がてへ事をいふらんだ青金頭に見せても悪さが何はあらアまだおめへ髭

はどんな物かみた事も有めへに〔忍〕何わつちやァ持ッて居んすがよく風をふきんす〔新〕おめへも何をいふやら汐こそふけナニ風をふくもんだ〔忍〕夫レでもよくふきんす物を〔新〕そんなら見せな〔忍〕笹のに遣しんした〔新〕ソリヤア團扇じやアねへか〔忍〕アイサ其鯨がよく風を吹んす〔新〕いゝさおめへのがんだからかんにんしねへいめへましく人ぢらしな子だぜト（わらひながらたにこな付てだす）〔新〕コリヤアいひたばこだ貰つたのか櫻丸か〔忍〕櫻丸とはへ〔親〕自腹を切て買たのか〔忍〕馬鹿らしいわつちだとて多葉粉まで貰いす物かへ〔新〕そんなら久松だろう〔忍〕はかりんせん何の事だへ〔新〕小買だろうといふ事よ〔忍〕おがみんすよくぶじやれさつしやるのト（新交をわらいながらせなかを二三ツたゝき）チツト目をおふきなんし〔新〕また何かいひ出したぜ時ならねへ時分に目をふかして跡で久わらうのか感應寺の櫻じやア有ルめへしめをふいたがどうした〔忍〕目やにが付ていたからさ〔新〕おめへ酒を呑だの〔忍〕匂ひんすか〔新〕顔をみな赤まだらでぶちになつた〔忍〕ほんにかへ嬉しいのう〔新〕とんだ事を何がうれしいの〔忍〕ぶちになりんしたから〔新〕忍ゝがけんにばかをいつてわらいねへ泣ふりましたけれど勝負が有ぜと（おさる）〔忍〕どこへおいでなんす小便にかへ〔新〕ムヽ〔忍〕そこの上ぞうりをはいて行なんし〔新〕ナニいひ〔忍〕ぜうのこ忍ゝ足が穢れんすから〔新〕めんどうだト（出そうにしてヱヽいめへましいしまい付た〔忍〕どうしなんした〔新〕つきんを踏だ〔忍〕それ見なんしいわねへ事かへ　ト（ふ…と

吹だすト火ばちの灰がここらぢうへふきちるゆゑがほ袖であをぐひやうしにあんどうの火がきへる　）

ブンゴ〽わかうてつらき目もあれば泣て嬉しき夜半も有蚊やより外に紙ひとへまかせぬ身とて胸の苦を合いふにいわれずぐる〳〵まきの夫レその文のかずト

僕はまちかねこ　きせるでたゝきながら上るりながたつて居るおいらの女郎腹補としは昔がいぼつて一ッくらい洗ッたまゝの髪をわらでいわへみす紙で露出なして二枚ばい櫛を耳の方へちよいとさし横に目の切た如在のなきがほつきにて男ぼれのするうわきな風より茶かへしちりめんぶんごあられに黒しゝこのはんゑりなかけ衿にもらつた花色しゆすの男帯をゝ　つまを取やうじをつかひながら來てぐわらりと足でせうじをあけ

は馬鹿〳〵しいまだ寐なんせずによふる夜中何を口こゞとを言なんすのだ〔鐵〕こゞとじやアねへ手めへとおれが心いきをかたるのだ〔は〕おゆるしなんしごせうだから今も廊下へ新造衆があつまつて言なんすにハ腹補さんの客人ハ何かほく〳〵たゝきながらうなつていなんすがチンアブキヤアがきたよふだとみんながわらつていゝさアな外聞のわりいてへげへにして寐なんしそしてマア何いふ氣できさしつたのう〔鐵〕どふいふ氣といつて手めへもうらみなもんだぜこつちへくらげへもする程の譯なら咄

も有たろうに一寸と一筆しらせたつて腹が立かおれがちつととうざかつたとてそう氣をもんですねる事アねへマア下にいやな　【は】ヲヤ人間のいひ事をいわつしやるおいておくんなんし御禮なら先へ申んせうつれへこつたぞよ　【鐵】コレわるく我慢をいつてぢらさずと久しぶりだきげんをなをしてちつとわらい顔をみせやな　【は】おきのどくだつけねそう主に主がほれて居なんから了簡が違いんさアわつちがほれたのはわれたいとでも言やアしんすめへしひつきやう河岸に居る内呼申たも一度も大勢御出なんすから主斗り来んせざア友達衆へ外聞もわるかろうといらざるわつちがごせう心が有ただけ恥もかゝせ申さずにくけい（げカ）な事とあきらめて呼申ておけんしたがこつちへきてはぎりもへちまもありんせんからかならず来ておくんなんすなさら〳〵御如在とはおもわねへからかつてな所へ御出なんし今夜だつてもそうざうす外聞のわるいなんぼ初の顔で居さしつてもみんなア横に目が切レておめへのよふにうすのろかァおつせんよほうばい女郎衆のまへといひわずかな事をかなしんで近付にもならねへと若イ衆につもられるところも（ママ）恥かしうおつさアナ成程夫レもかわるゝといふ男なら三分四分の都合もして顔の立やうにしんせうが何ンのよしみが有て主に立引をするもんだへあつかましいよくもお上りなんしたね　【鐵】そふ何も今夜にかぎつておいそつかしを言はつハねへがおゝかた外に色でも出きたかと京の大佛じやアねへがやけてふてるかそふいふ無情なおれでもねへ噺せばわかるからチット寐さ

つし [は]かんにんなんしねるとがハしんせん [鐵]むせうにふくれてはらを立がまた酒をのんだか [は]呑みやアどふするへきついくろうせうだつけね今琴浦さんのとこで座ぜん豆をになんすとつてふた茶わんに酒が一ぱい有たからそつとかくしてのんで來たのさ主ものみたかアこんどにる時お出なんし [鐵]なんだとあじにはぐらかすの手めへもわるひ酒だぞほれているならほれてるやうにだまつてねやな跡で又あやまろうとおもつて [は]エヽヽおいてもおくんなんしいつそ聞たふうだよなんぼ酒によつたとても心におもはねへことをいふ物かへそりやア女郎が違んす（トいふ所へちへざときたる） [ち]おいらんあざみは參りんせんか [は]いゝへ [ち]客人が何かたの賴ましつたそうなが馬鹿な子だどこへいつたのう（鐵はきせるの雁首で多葉粉ぼんなひきよせながら） [鐵]あざみの馬鹿は今そこにト（すいつける） [ち]平氣でおしやれなんすハ主に似てさ氣しよく玉だよト（廊下なばたばたかけて行腹橋もゆかうとするすそなとらまへて） [鐵]ナゼゆくのだ [は]ぬし達のやうな客人にかまつて居るひまはおつせんハな用が有からおはなしなんし [鐵]そふあるそつかしな言事アねへしんな咄が有からマアすわりやナ [は]聞すとよふおす今言ウ通りの譯だから早く御かへりなんしじやなほかの客人が大事だハ [鐵]でへぶわりやア欲氣がでたら主おもひになつたの夫レ程いやだとおもふならなぜ又こゝへうしやアがつた [は]いつまで主をまよわせてもわつちが後生のじやまに成ろうとおもひすからいんぐわをふくめにちよつと來た

のさ　鐵いまさら何ンだとはつつけべへためそふいふくさつたこんせうならすへハ女房とぬかしたも
はたしはつとめいすて言葉と卵の四角と傾城の　鐵誠からでたうそで有たか　はアレまだのろい
其かほハへぐらな事をいひなんすな　鐵いかに商賣おみればとてあはれぬようにもなつたらバしね
しのふと迄ぬかしやアがつたな　はわつちもその氣で心を見たら目がわるひからおとゝひきなんし
鐵モウ了簡がト（たばこぼんをふりあげるをきせるですそをはらわれて鐵はどつさり尻もちをつく夜番はおつ
かへ出てせうじをたてきり）　はおさらばよ　鐵ホイ（コヽ、柏子木ノ圖アリ。略ス。）チヨンチヨン〳〵　拍子幕

跋

誠と云字ハ。言偏に書ス。嘘といふ字は。口扁に書。されば嘘も。誠も。口と言より出て。腹の中にハ。無きものと知れど。富久亭が腹中は。娼妓家の樂屋にて。野暮も酔に早替。魂膽の廻仕掛。やりくりの引道具。口舌の仕組まで。部屋の玉帳に〆上たる。獨稽古といふ小册を綴られしに。予も。葭の管から天井を見んより。此。江戸ッ子の穴門を覗て。胸算の置所を知り。悪玉の桁をはらつて。善玉を加へる手管算用の。差引殘て割あまりし。壹枚半の白紙を貸。勘定合て足らぬ智恵ゝだし

如柳コヽニしるす

春風 如柳

後篇跡着錦（あときのにしき）　全

三笑作

小本一册近刻

辰巳妓張（しんくきぬはり）　全

同作

小本一册

珍らしき新板諸品追〻出來申候御求

御覽可ヒ下候

青樓日記

全

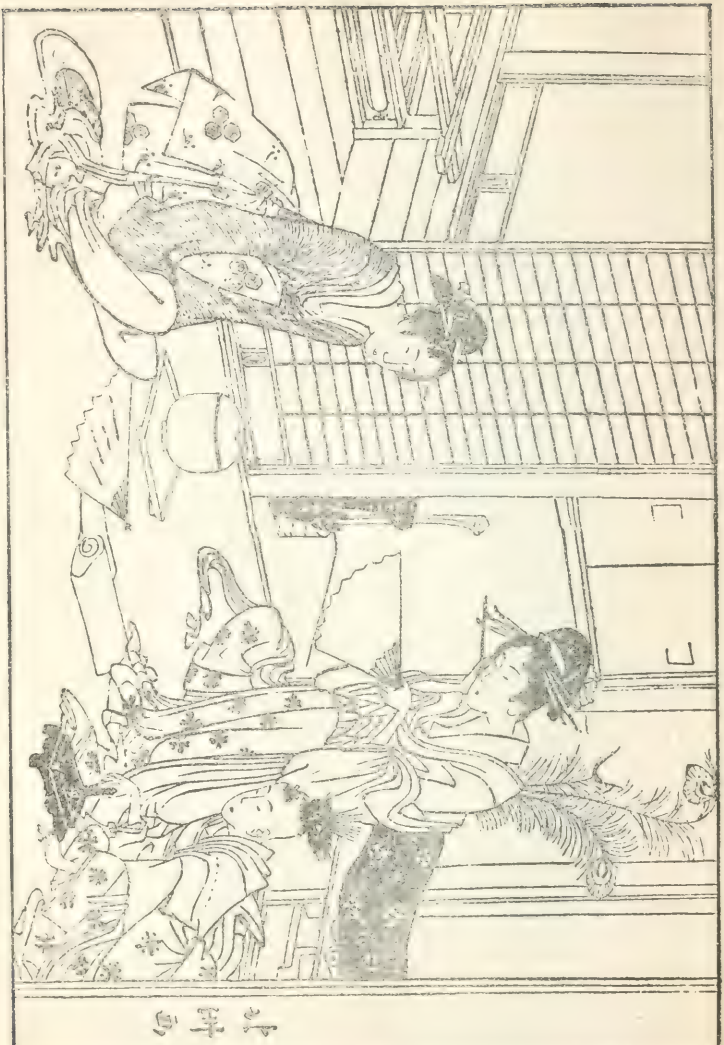
自序

唐辛の色の美なるを嘗食て初て其からきをしり傾城の顔の艶なるを見て買て後に僞る事を知蓋其辛を心得て食僞を覺悟して買バ奈何ぞ溺るの甚に至らむしかりといへども染りやすきハ此道にして紺屋の明後日復あさつてと通ひつめたる色好は色にその身を過ぞかしされや褞の百の媚茶にハ老たる心もうハの空色となり髪のかほりの伽羅煤竹にハわかき俠子の仇な花色を迷ハす已が千種にうつろひやすきハなげの情の薄柿にして客の黄檗の器に隨ふハこれも流れの水淺黄になんあるハ衣〴〵の麻の葉紋に白粉の鹿子なるを恥らひ身揚の日縮緬にハ着替の質屋へ飛色を歎く間夫を松葉色にかゝる鼠色あれバ將下紺を木賊色といろでかためた此郷の濃と淡の蠟燭描き筆に染わけて青樓日記と表題たる一册世の教戒のかたはしにもと不理屈こと

のありたけを高慢らしく端然に序す

享和ふたつ戌の孟陬

白陽東魚



品目

一　發端
一　通客之品定
一　廓中之趣
一　優男之私語
一　傾城之丹心

青樓日記

發端

白陽東魚著

今ハむかしさる烟花の娼婦柏木ときこえしハ色かへぬ松のくらゐをふミて全盛いふばかりなく上ハやんごとなき殿原よりはじめ下ハ八王子の三太郎にいたるまで稗飯でつなぐ命をも錢金と供に投うたん事をおもふそれが由來をくハしく尋るに鬘衣ミの宿の里に世をまつしく暮す醫師の住けるがひとりの娘をもちたり芙蓉の眸丹花の唇楊貴妃李夫人も沓を脱で素足で迯小町衣通姫も楡眉を捨て指なくはへつべき程のよそほひ玉ハさらなり母ハこの三とせあまり前に世をさりて父のいつくしミおほろけならず敷しま道にも携ハり手習ふ事さへに心をゆだね爪琴のすさびまでも世にかしこしともてなされぬ其ちかきわたりに家居もつき〴〵しくすミなしける人に名をバ榮二郎となんいひて錄(ママ)若干とるものゝふの次の子なりしが過し頃北の廓にいたくかよひてはてハこがねにつまりしにや家につたハる一腰を市にあがなひたるあやまちに親の怒つよくこらしめの爲にとてこのほとりにわつかの扶持など遣られてわびずまゐにものしけるが頃しも秋の夕されに豆腐やの聲物淋しく蟲の音もいとあはれにきこえければ野亭風處繊猶寒など口ずさびて枝折戸を立いでそこはかとなくたゝずミゐけるにいつこと

もなくなまめきたる女の聲にて

月をやまねくしのゝ小すゝき

かく聞えければ男もとりあへず

かねてより露をく袖も心ありて

となんいひさしてふとゝいれたるにかの娘の面なきさまして顔打あかめ何といらへもせで奥へはしりいりたりいゝじくゆかしくおぼえけれどそののちこれぞといふふしもなく心にこめてのゝ過しにける程へて娘の父なりける醫師風の心地とてふつか三日打ふしけるが生者必滅の昔の掟反古にもならず無常迅速の佛の御觸もだし難き物からあてもなき西のかたへ旅立まかりにしかバ娘の歎きいふ斗なくさてもあるべき事ならねバゆかりの者などよりつどひて野邊のをくりもかたのごとくいとなゝぬかくて娘ハ叔父の何がしとかやいへる橋場わたりにすむ人のかたへ引とられてやしなハれけるが此叔父心かたましき者にて欲にやめでけんつゐにかの娘をバ明る年のきさらぎばかりに北の廓の京庫屋なるもとへこがねにかへて遊君となし名をバかしハ木となんよびたりける

通客之品定

天さがる鄙のすまゐ程世にやすげなるものハなし庭の前栽もいと枯〴〵なるに一村すゝきのをどろの髮ゝだしたらんやうに殘りたるハ夕霜ハらふ袖かとのゝあやまたるされや音なふものとてハさと吹くゐ風の葎の門扣くのゝにて人目かれたる草の庵によろぼひたる老耆ひとりを餓たきにも留守居にも心をさなくつかひなれたる此家のあるじ【榮次郎】なんとけふハめしの菜が何もねへがいつもの肴屋の聲がしたらよんでなんぞかをうによ【おやじ】(庭なはいてゐたりしが)此頃ハきついしけだそうでいわしがひとつゝへませぬ【榮】なんでもこゝらハ食物の不自由なにハよハるよほんにきのふの手紙を淺草へもつていつてくれたらうの【おやぢ】ハイお留守でございますから歸りましたらゝせませうと御新造様がおつしやりました(トそこらはいてしまひおやじ　へつゝいのまへにすハりたバこをのんでゐる門口からしハぶきをしながらいりくる一客ハこれもおなじく廓通にて榮二郎とハもとより歌茶の湯などの友だち也)【東里】何か此程ハ御疎遠に(トいひながらあがる)【榮】イヤ東里さんかとんと打たへてマアこちらへおよんなせへ【東】(火鉢のそばへよりきせるを出しながら)けふハ内にゐたがあんまり欝してきたからちとはなそうとおもつてぶら〴〵出かけやした【榮】わつちもお尋もうそうとおもつてゐやしたが何のらちもねへ事でいそがしくといふハうそやつぱりぶせうからおこつた事さ【東】御會の度〴〵あつた時分にハ絶ず御目にかゝつたが御玉が池もくじけさつしやるしかれこれした物だからわつちもとんと今でハ歌も捨てしまひ

やした榮それでも讀保さんだのといふおかたは此頃上がたへお點をとりにやらつしやるそうさ東利口ハ俳偕ハやめやしたかね一しきりハうきゝをやつして行脚にまで出やしたつけ榮せんどもきて例のうぬぼれをまんとひからせつぢつまもあハねへ女郎買ばなしで夜のよつ過まで呑でいきやしたがあれもまたどこへかひつかゝつてかきのめされるとゝへやすいとめのきれた風じやアあんめへし東傾城もためになるやつをバ色〳〵祕術を盡してよバふとおもつてもこゝハといふ新手もねへとみへて文のかきやうなざアいつも板行でおこしたやうだ榮左樣さ近年ハ猫もしやくしもまにあいの松花堂をやらかして書ちらかすもんだから紅毛もじの素讀をするやうでむてへよめねへのがございやすまた鶴屋の内杯にハぐつとひねつて松花堂もふるめかしいとかなんとかいふてうしで御家流をかく女郎がありやす東なんだか種〳〵にそげたあんじをやらかしやすがなんぼ立あがつてもこれハ一ッ難くせのねへといふ傾城もまれなものでおほくハ似たりよつたりの十人並だよ榮そういふ内にも二階の風によりてんで〳〵の氣質によつていろ〳〵がございやすよ先一しほにゆかしいのハ雪なんぞのどつしりつもつたあしたに客人もなくたつたひとり机にでもよりかゝつて何か物あんじ姿にて枕草子大和物語のたぐひをひきちらし髮のつくりもひやうごや手柄のけバ〳〵しいやつをきらひやつぱり水髮のひつ詰島田かなんぞにゆひ衣裳つきも奥ゆかしくきりやうハもちろん巾になよ

バかにつこりとわらふ目元の汐の身にしみる程愛敬をこぼし新造がぶゐにも情をかけ義理も意氣地も立とをすのハ眞に上品の上たらうよ　東それにつゞいていはふなら色ハちつと淺ぐろいがやせぎすで人がらよく中の丁をあるくにもわき目もふらす見高に茶屋の女房があいさつをも口の内にてかもくあしらい金のある客人でも氣のすゝめねへ晩にハふりちらかしまた色男にもさのみほれず不男でも實が有とお情があるとか名をつけてその客じとりにうき身をやつし遣手や内所の異見をもそしらぬ顔で呼通すハ一こくもの　といはれるのがちつと瑕のやうなれどこいらが粋の見識さ　東なる程そいらもひと風でおもしろうございやすがマア今時の仕うちにハさへんな晝ハ明けてをいてかつとらはやると名をとるやつハ御隠居さまでも息子でもあるひハ贔屓者の袖のびかゐを目にかけてあるとあらゆるうそをつき其くせ床でハ泣てみせたり遁しの多い晩などにハ籤引からじをはかねへばかりにかけづりまハり紋日物日の仕舞をもあの人この人とおいふつて客にはかゝるのハ商賣に精を出すとハいふもののほめたさたてもございやせん　東まだそれよりか一段ひくい部屋持ハいくら若い手たくつても手も足もねへもんだからをのつと毎晩お茶はかりひき地まハりにひやかされるのを苦にして見世三味線もひきくたびれのつりそつりしてゝも誰もきたてる人もなく退屈のあまりにハなやの男や棒手振と色をして一生のだゝすにしまうのもあるつてゝれば不便だよね　東おはなし申す

もいかゞだが彼小見世の世界程おかしいものハございやせんずつと二階へあがるとつるしに魚燈をともすせへか何だかへんなにほひがして楊弓場の勞咳といふ細長い廊下の裏店とおぼしき所へすハらせ煮賣屋臺でとりあつめ十二文位の硯蓋をうや〳〵しく眞中へ出し然而后にあがる傾城をみると頭痛膏はまだしもあれ鬢切引眉のたぐひ障子の明たてにじれつてへやすかねへを八百程言そこへ來かゝる禿をつかまへて此子ハ惣體ずう〳〵しいのやれ泣ッ面ばかりするのとさま〴〵の不人柄を出したバ粉がないと客人のをかハかし　へはいるやいなや大の字なりの大躰こいらハ論にハならねへけれどひとつ廓のその内でも次第不同ハあるものだねへ　[東]それから先ハ四六局ミせだがあんまりはしたねへからはなすもめんどうしいしたが(カ)客にも黒縮緬の羽折をはじめひとへ帯まではいるもんだからそれ相應の情ハあるのさときにもう日がくれるさうだおほきにながばなしをしやした今夜ハ魚好が所で茶めしをたくからこいといつてさつき呼によこしたからいかざァなるめへ　[栄]マァいゝはなモウ一ぷく袖引とやらを　[東]おきやアがれまた此あいだにどこぞへお供をいたしやせう(ト草履をはく)[栄]サヤウナラほんにお内へもよろしく

廓中之趣

柳當ニ大江戸之北ニ有ニ一箇嶋國一名而呼ニ苦界嶋一こんなん河竹のながれの君のすむ心をもてかく名付たるにやけにゆふぐれの共氣色山王神田の夜ミやハものかハ中の丁の簾を揚てハ香爐峯の雪をおもひ打かけ姿の薫りくるハ大庾嶺の梅にもまがふこゝにむれくる遊子俠客よゐるまけいてう當世本田あるひハそりたて五分月代黒ちり頭巾さらしの手拭裏付草履日和下駄すれ違ふたる七軒の茶屋が軒端に見物の人さへわきへちりうせ淞屋が見せのその賑ハひ（鰹のかたへよりて四十ばかりのきやく酒によほどよひしとみえ顔ハらりそくのあかりにうつろひてら〳〵（する）酒好（その末座にかミとおぼしくとし頃右同行のいしやさまこいつはなにかつまミぐひをしながらこくうにしやべつてゐる）京忽此盃ハちとおをさへ（女げいしや）きく（さやうならおかたさんおあひ（茶や）女房この子ハトかくわたしにおあひをいひつけるよほんにもし酒好さま柏木さまをきゝにつかハしましたらよろしいと申ますこいつハ酒好が柏木なこよひ名ざしでかふつもりとミへたり）京それハ近頃恐悦ときにおまさをれがのハさだめて（茶や）女うつくしい柳ごしさ京なに柳ごりだ旅人が四日市をひやかしハしめへし松の木ごしの新造がきひてあきれるやつさきくよくわるつ口をきかつしやるよおはるさん何ぞちよびとした物をはる（ツウサネト三ミせんなとりいだすろ三番のおゝさへ〳〵よろこびありやよりやらかすおきくハもちろん二丁鼓也）酒さついゝもの〳〵京イニ〳〵ひいたりうつたりまつたり三介（ミな〳〵わらふ）酒もふヱヽかげんにしやれ

て店ごしもよかろふジヤアねへか　女房　いかさまだおざしきへいらしつておあがりなさいましこれおまさてうちんをつけや（トこれよりミなくげいしやもろとも立いでゝ角丁へまわるはや京庫やのミせのかゝり正めんのおいらんハつんとしておまむき本尊のごとく壁とまがきのしんぞうはいろくなミをして五百らかんににたり酒好がともがらハこれをわきにミてすぢかひて書たるのれんなくどろ茶や女わかひ者をよびながら直に二かいへあがりおもてのかたかしハ木が座しきへすハる）總而座しきのをもむきをあらましにのべん床にかけたる一軸ハ探幽（マヽ）が筆の芙蓉峯雲外に削成かとあやまたるうすばたの花瓶に寒紅梅の手際をあらハし立かけたる琴にハ中庭の松風もかよふ青貝まきゑの机の上ハ書物問屋の土用干のごとく紋ちらしの戸棚の中ハ茶碗鉢やの店ざらしにことならず其外茶器香道具ハさらにもいはず火鉢銀燭盃臺ミるも美〻しくならべしハ大名の寶藏へ盜賊に這入目うつりがしてまごつくにひとし（かゝるところへけいせいかしハ木うちかけすがたのとりなりけだかく悠〻然としていりくれバ跡ゟ京忽が相かた花浦とめ袖新造の事なればおいらんたちをミやうミまねにすました顔できたり二人ともにまうけの席につく）　例の通盃事も濟ぬればバ吸物肴とりかへ引かへ茶やの男ハをくり物を持きたり其外禿三四人新ぞうのむだ口ハ女湯をもあざむき　藝者の三絃ハ囃町の口待かとうたがふいづれもかしがましき心地すればあまたの洒落本にゆづりてこゝにはぶくあちこちとする内に見番のわかひ者障子の外からちよいと顔を出す　と　茶や女房ハ

それとさとりまハし方をよんで座しきチかたづけてもらひ酒好に迎ひの刻限などきゝいとまごひしてけい者とつれ立歸るいりかハつて枱木きたり枕元へすハりて煙艸をのミまたハ吸付て出し漸の事でになる初會の事なれバさしておかしミもなくもとより酒好ハ御ぞんじのとをりの人物ゆへ　大ていしれし御事なり（つぎの間にハ色〳〵の部類けんぞく共よりこぞりくだらぬ文なかくやらまた客のうハさなするやらへん〳〵とはなしている）浦ヅル　もし梅がえさんさつき中の丁の水樂屋の前で幸さんにあひいしたからネこの中のものをとゞけてくんなんしたかへときゝいしたらとゞけやアとゞけたがその文をミかけてつくへのうへ　エトやらをいてそれをおつかさんにミつかりいして大しくじりだからマア當ぶんハでられめへとおいひなんしたどういたしいしやうネ　梅がへ　それハおめへのとがだからしかたがをつせんまたあの人さんをよして外のになんせバいゝ　浦ヅル　ばからしいおめへさんじやアありいすめへしそれでもとしハいきいしねへ　がとんだ氣がきいておりいすよ　浦シバ　うら鶴さんいつそミかたミぐるしうおす（ヨウ引トいひながら火ばちの炭なつミなをしている）若波　ほんにうら芝さんおいらんで硯がミへねへとつて小言をいひなんしたつけがどふなんしたへ　浦シバ　さつきふミをかひてからすぐに琴野にもたせてやりいした琴野やどふした　禿（あんどうのかたハらに舟をこひでいたりしが）アノネ床の間のネ琴のうしろへをきいした　浦シバ　この子とした事がとんだとこへをくからわりいよちつ

とてめへもきをきかせやな 梅がへ それよりかおきゝなんし此子のおかしいとた（カ）してハ此中もわつちがいもじをゆかうへかけてをきいしたらその上へチャント手前のおまもりをかけてをきいすハなもつてへねへ 若波 まもりといへバをとついのばんわつちがあがつた客人ハネ 梅がへ ウヽあのよく口をきゝいすせいのひくい俄の獅子といふ鼻つきのぢいさんかへ 若波 あいさそのくせ猩々のやうに酒ッくさくなりいしていつそひつッこい事をしいすからモウ〳〵きたなくつて〳〵どふしやうとおもひいしたがかういふ時にハしん〴〵をするがいゝとおまもりをかけて堀の内さんを一心におがミいしたらそのせへおねてしまひいしたそれからネ其あさ精進をしいしたほんになし事（カ）ハできいせんよ 浦ヅル 堀の内さんハいつそ御利生とやらがおつすとききのふもおさきどんが（これハ内のやり手成し）おめへり申してかへりがけにいがらきとやらで（しがらきの覺へちがひなどもおかし）おまんまをたべなんしたらわきにいた人のはなすにハネどことやらのばアさんが六十一とかではらミいしたがネそれから十三月程立てもおまれいしねへとさ 浦シバ ふけへきなとんだすけべいな婆々さんだねへ 浦ヅル アイサそれから堀の内さんへ日參をしいしたとサそのせへかしてとふ〳〵むまれいして二人ながら達者でお禮まいりにいきいしたとさ 梅がへ ほんにかへあんまりばからしい御利生とやらでおすねへ（トはなしさい中へきかゝる新造） 々波 （これハ番新トミへ今までなくそこなくはなしてゐたも遠慮して少しつゝしむき

どり也）［夕波］こんな浦里さんさつきわつちが手ぬぐひはどふなんした［浦シバ］座しきの鏡臺の耳へかけてをきいした［夕波］そしてマアおめへがたハいつまでそねへにおきてゐなんすもういつておやすミなんせんかへト（きめられて各くちこゞとをいひながらせうじがたくさにてたいさんする折しも九ツい拍子木カチ〳〵）［消好］（ハ酔がさめたやらふつとめをさましてあくびをしながら）フウア丶丶もう何時だらうの［柏木］今ひけを打てまいりいした

優男之私語

こゝにひとりの遊子あり年の程はたちのうへを六ツばかり顔はそおもてにて色白く美目秀麗ミるもの眼をよろこバす今宵ハ京庫屋のおいらん買と出かけかねてアゝ心あたりの事あれバ座しきのうちもしめやかに茶やけい者をもはやくかへして只ひとり屏風の内へあんどうをいれ側にある湖月抄など引出して頬杖ついてミてゐるけハひかの物語などにかきしハをゐか書にうつさまほしきあり様也およびのふすまを押明て奥へ来かゝる傾城ハ廓の内にて一二をあらそふ［柏木］（すこしけしきどりたるさまにて）もしへなぜあかりをそこへおいれなんした（きやく）［栄次郎］かう物さびしいさむいばんにやア　あかるくねへとひとりでハ心ほそひやうだからそれでかうしたのさ［柏木］（わらひながら）わたくしがおへり

いしたからもうさびしくハありなんすめへ　どふぞふせうしてあかりをバそとへ出しておくんなんし
ト（屏風の外へあんどうをだし　）　〔栄〕つかねへこつたがおめへをれをゝわすれハしねへか　〔柏〕わたくしも今その事をもふしいしやうと思ひいしたが座しきの内やなにかでハ人がなんとかかんをつけよふかとそれでひかへておりいしたおめへさんハまたこよひなんとおもつておいでなんした　〔栄〕をれもおめへのこゝにゐるといふ事ハぜんてへしらなんだが此中友達が寄ておめへのうハさ形恰好から年の程生れの所もうす〳〵聞はて似たものも有ものもの（マヽ）とおもへバおもふ程來てミたくぬくらさがしに探してきたのさ　〔柏〕そふおつせへすりやァほんに初の心もちでハをざりいせん　いつぞやわたくしが口ずさミをおつけなんしたその時にハ恥かしいやなにやかで心にばかりやるせがなくとやかくおもつておりいしたそれからわたくしの身の上もだん〳〵かさなるふしやハせ今でハかういふわびしい勤御目にかゝるも面目なうをす　〔栄〕なる程おめへの身の上も聞バきく程胸がふさがるしかしかうしてをれがきてもいま全盛のおめへの事所詮長くハおぼつかねへこよひあつたハおもふ念りき　〔柏〕そんな事をいつておくんなんすななんの跡がつゞかねへ事がありいすものかなんぼちゑのねへわたくしでも心一ぱいはたらきいしたら月に三度と四たびつゝは逢れぬ事もおざりいすめへ　〔栄〕おめへがそう口さきであやなしてもかういふ勤をするからにハ今までなんとかかとかおもふ男もあ

るハ必定それをとやかくいふやうなをれがこゝろの内でもねへにそんな懸流しをいつてくれてハへだてができて互にわりいぜ「柏」マアよくつもつてもごらうじいし何もつゝむやうな心なら初の晩から馴〳〵しくハもふしいぜんよしやまたそういふ譯でもありいすならおめへさんもたゞだまつておいでなんしてハ末頼もしくおざりいせんわるい事でもあるならバしかつておくんなんすがようおす氣にない事をいはれるとわたくしハほんにくやしうざんす「榮」そういふおめへが心ならをれもせいのつゞくだけどふなれこうなれ來通さふがいつか一度ハおたけへにみのつまるのハしれた事「柏」くろふするのもふたりして問談合をしいしたらけつくうれしうおざりいせうかならず今のおこと葉をわすれてばしくんなんすななぜかおめにかゝりいしたら昔が戀しくなりいした「榮」なんだか二階がしんとしてきたぜ〳〵

二世も三世も五世も六世もよくのふかき　もことバのこりて冬の夜の霜にさへたるあけのかねはやカウ〳〵ときこゆれバなごりおしゝも立わかれこゝろを跡にかへりしがぼんのふの雲はれがたく柏木が面影ばかり目にちらつきめしくふひまもわすれねバなんでもすぐに付うらと日のかたぶくをまちかねて京庫やさしていそぎゆく〳〵

月にむら雲花に風前の章にあらはしたる酒好といへるのたまく大盡この柏木にたましゐを紛失させて有頂天雨にも雪にもいとひなく今宵もこゝにかよひしがこれに隨ふ面〳〵にハ有象無像の幇間末社女

藝者も二組あまり忠臣藏の夜うちのごとくらんちきさハぎにときうつり夜も三更(かう)にちかけれバいづれもどこへか消うせて床の上にハ酒好一人いつもハそバをはなれぬ柏木一向影(かげ)も形(かたち)もゝせねバ心ならずもあくびの數とりばかりして居たりしがいつまで待てもきたらぬゆへよんどころなく夜着(よぎ)引かついでふす處へ　廊下ばた／＼障子さらりとあけてはいるハ扨こそ柏木ござんなれと思ひの外に先だつていち座のしんぞう）［花浦］さぞおさびしうありいせうね（トいひながら一ぷく吸付て酒好へ出し）わたくしのハなぜきいせんへ　［酒］なぜだか氣がしれねへが屛風邊(あたり)へけごろとまりがけにいつたといふ事だ［花］ほんにこよひハあやにくでなすよ柏木さんもさつきから中の丁へいきなんしてやう／＼おかへりなんした故すぐにこゝへおいでなんせうとおもひなんした處がふたり程今また客人がおちやつてけへるのひくのとやほをいひすゆへそれをつれなくしなんすと内所へ對してわるいからいつそきをもんでおいでなんすさだおてしおかへさんがおさびしうありいせうが外ならぬぬしの事ゆへわつちにどふぞ其わけをいつてくれろと柏木さんがおたのみなんしたこいつハいはずとしれたそれやなぎ橋でハねへが萬八にてかしハ木ハ下ざしきの榮二郎と　　酒好が方へミまハるのがよく／＼めんどうしいとミへてこんなしらバつくれた狂言を花うらにたのんで言てもらう）［酒］（まぢ／＼とした顔できいていたりしが）なんにしろはやる傾城といふものハめいようそんな事で小むつかしいものよしかしをれがかつた女郎衆がそふ全盛なは

なしをきけバまんざら心持がわるくもねへ（トこけおしミにすましている）〔花〕アイサそうでおすよ女郎衆の氣もしらねへで小言や何かをいひなんす客人ハ自然とこつちも氣まづくなりいすしなんの益ねへことでおつす〔酒〕それといふがそんなてやいハ月に一度かそこら思ひにおもつてやう／＼くるとやろうの葛城の神をミるやうに夜の明ねへ内とつはくさして歸るんだものを愚痴をいふのもむさをいうがやうに商賣の樣にしてゐる身じやア内へ歸るとかゝアが氣をきかして水ざうすいでもこしらへて置てくれすぐさま湯へいつてくると蒲團と枕をちやんとならべサアけしなりましといはぬばかりの取あつけへにあふもんだから（ト段／＼つのつてきてあつたにはてがつきそうもなさけへ花ゞらハ氣をきかせまくら元のてうしをとつて火鉢へかけ）〔花〕ちッと酒でもおあんなんしお相手に一ッたべいせう（トありあふ盃へ一ッついで酒好が前へおく酒好ハ引のこしたる硯ぶた臺の物などむせうにあちこちとのぞいてミて玉餘魚の煮つけのかたハらのしやうがをむしや／＼かぢりながらさいつさへつ二人しての内所酒もり花ゞらもふたつ三ッのんだうへ）〔花〕をしつけおいでなんせうからわたくしもまた一寸いつてめへりいせう〔酒〕マア滞ついてもうひとつかさねなせへ〔花〕イヽヱとんだよひいしたよおかならずぬしもおやすミなんすなさつといまによこしいすから（ト屏風引よせいでゝゆく、こ此廊下ざしきにハ榮二郎やう／＼裏の事なれど惚られし身のわりなさハ餘にたかりしきりなく＼すの如くやれかハらふのかハるまいのと脇の耳から聞ときハ何

遍言てもおなじことををつくりかへしひつくりかへしかたれどつきぬ山かづら明ゆく空のよこ雲の引
わかれるが物うさにすぐにその日もぶんながしまたあすの夜もあさつて もと毎晩〳〵かよひつめ互
にかさなる質ぐさのねもかれはてゝその上に外の客をバ捨小舟流れの身にも梶をたへ内所の手前ハ不
首尾に成隱してあげしもやり手が聞とう〳〵二かいをとめられてまた あふ事もなら坂やこの手柏の
うら茶屋でちよつと〳〵が度かさなりにくき仕方とかしハ木ハ内所のわきの一間のうちへをしこめら
るゝうき身のうへ戀しき人ハいづくにと顏ミる事もかた糸のもつれてとけぬ胸のうちとひ音信る者も
なくかたハらに居るものとてハとぐろをまきし猫一疋心ぼそさぞ限りなき〽戀ゆへにまよふ心のそれなら
でおなじやミ路をたどりつゝとぼ〳〵きたるあんまの賢益とりミだしたる柏木がまくら元へ（さぐりより）賢益
（雨手なもミながら）おいらんお心もちハどうでござります 柏とかくふさいでなりいせんよ 賢それ
ハおわるうござりますかうとおこもつておいでなすつてハ猶〳〵おきむつかしうございませう 柏イ
ゝエもふ此頃ハけつくにぎやかな所より獨本でもよミいしたりまたハやつパり枕にでもよりかゝつて
居る方がわたしが勝手でおざりいす 賢アゝはやどこぞおわるいと陰氣にばかりなりまして色〳〵な
事が胸にうかびさきから先のよこ町まで あんじられる物でござりますかうしてもんでをりますうち
わつさりとおはなしでも 柏なんぞはなしておきかせなんし 賢（胸のあたりなさすりながら）さるおや

しきにヱヽ名をバ何とやらいふうへもないうつくしい奥勤の女中衆がござりましてなこれハ〳〵發明でする事なす事がお主の氣に入傍輩衆もうらやましがる程でござりました所がたしか後の月見の夜 栢替つた事でもありいしたかへ 賢奥様のおまへにて想夫戀といふ曲を音もつやゝかにかきならすをおなじ御家中に石部堅右衛門さまとかいふ人の二男榮之助さまといふお方が御庭のかたにたゝずんでいつしかかいまミたまひしよりつてをもとめて人しらず筆にいはする戀の淵ふかき心をかの女中もいなぶねならぬけしきながら法度きびしき事なれバ顔みる程の折もなくへだゝる床にふし柴のこがれてばかりおられました 栢おもひやれてかなしうざんす 賢ところが縁といふものハあじな物で其おやしきの鎮守のまつりに表と奥の御代參おもひあふたるおふたりがてうど仰付られまして其日ハ鎮守さまを出しにつかひ大しけりをやらかして先本もうハとげられましたが逢ミての後の心にくらぶればと猶しもぬるゝあまの袖あこぎが浦にひく網のまゝよ〳〵が度かさなりいつしか御上の耳へはいり男ハ勘當女の身ハ奥の一間へをしこめられ 栢(ヱヽトむねに釘)もうそのはなしハおよしなん 賢はてこれからが聞どころナおいらんきこへましたかそこをじッとしんぼうしてかならず短氣をおこさずに 栢ゆくさき永い年の内 賢えんと時節をまつならバ 栢そハれる事もありいせうかね 賢だいぶおむねがふさぎました

傀儡之赤心

雉子ハ妻をこふてありかをしられ翡翠ハ羽をもつて其身を害すとかやされバ傾城柏木ハわかれし人の音づれをまつにたよりもあらがれいつち氣色なるやまうの顔異見をされても馬の耳風のこゝちとまぎらかして細くなりゆく二度の食すゝまぬこゝろハいとゞ猶夜ふかき頃のくらまぎれ手水に行し時りおけもしもまぎるゝ事もやと見せにつゞきし下座しきこまかきかたの格子よりをもてをそつとさしのぞけバ　折ふしきかゝる一人の男はうかぶりに顔なかくし人目はゞかるその姿それかあらぬか懐しさに我をわすれて聲をかけ　柏葉さんじやァおつせんかへ　葉そふいふ聲ハかしハ木かへトたがひにとび立うれしさも内と外とをへだつる格子　柏マア〳〵よくいま時分きなんしたね　葉をれもあんまりゆかしさに文でたよりをしたいにも此頃人のはなすにハ手めへハない所でしをきのためひト間の内にをしこめてとりつぎ音もないとの事それをきいてハをれとても人目をつゝむをとこ泣途方にくれてゐた所がよく〳〵思へバどふぞしてちよつとなりともあつたならしやうもやうもあらうにと只愚痴ばかりがさきにたちしよせんむだとハおもひながら夜ふけさふけにうろ〳〵とかうしてくるのも心ハそら　柏てうど

折よくわたくしもむしのしらせか今こゝではかないごけんをいたしいすら神や佛のひきあはせえにしのつきぬしるしでおつせう［栄］しバしはなしてゐる内さへ人目いぶせきふたりが身の上なにとぞこゝをしのび出のがれるだけハのがれてミてもししそんしる物ならバ人手にかゝらぬその内に了簡するのハたがひの胸 栢一寸さきハやミのうき世かねて覺悟はきハめておりいす(トホひく〜しくも栢木ハきし足ぬき足しのぶあし音なくうらの庭づたひ土藏のわきのしをり戸はづしそつとぬけでる体面いかたえらもたけたる栄二郎なのが上着を栢木にきせかへきせてめハかり頭巾男とミミへ見もこつけられじ一ト氣くばりしてまづ大門の罰の目首尾よくのがれためいきミ月の出ぬこそさいはひと上手八丁にましかゝる)住なれし廓を跡にミかへりの柳のいとゞなすほられこでらかりける夜道さへとりかハしたるふたりが手にほん堤をたどたどしく山谷のほりに舟ハあれど音を思へバかちよりぞ行き(さカ)き長くかハら町はかてそふ日を待乳山山また山(た)の宿かとよおもひあふたる年頃も今をさかりの花川戸いそぐとすれど鳥が鳴あづま橋をも打過て事とふ人も都鳥ありやなしやのさひしさによせくる波ハ道手かと心をつけてミめぐりの石の鳥居のそれよりもおかにき契の中〳〵にうしの御前をふしおがミわが身の上ハ日髭や梅若塚も程ちかきに跡よりかゞやくてうちんハくる〳〵いかゝへ踏ひ着てん手に鉢まき棒ちぎりそれミつけたといふやいな栄二郎を引とらへふりくるこぶしの雨あられあられもなしと栢木がはつとばかりに驚けバ日頃のつらさとやかうとおもひ

しまゝのをそハれ事これ南柯（なんか）の一夢（いちむ）にして撞レ頭打レ折（マヽ）告ニ鷄鳴一（かうべをあぐればひやうしぎをうつてあかつきをつぐ）

青樓日記　畢

雖有楊枝藏人體德利納馬之品玉不及壺中隱乾坤瓢單出駒之妙術焉嗚呼予所著之戯册殆類此也纔嘗先哲之於糟粕竊拾諸君之於筆漏而才短如鴨蕎文拙似犬吼於斯冠世滑稽史知不及之遠遮莫不叙心緒則本腹滿之譬其分解後記

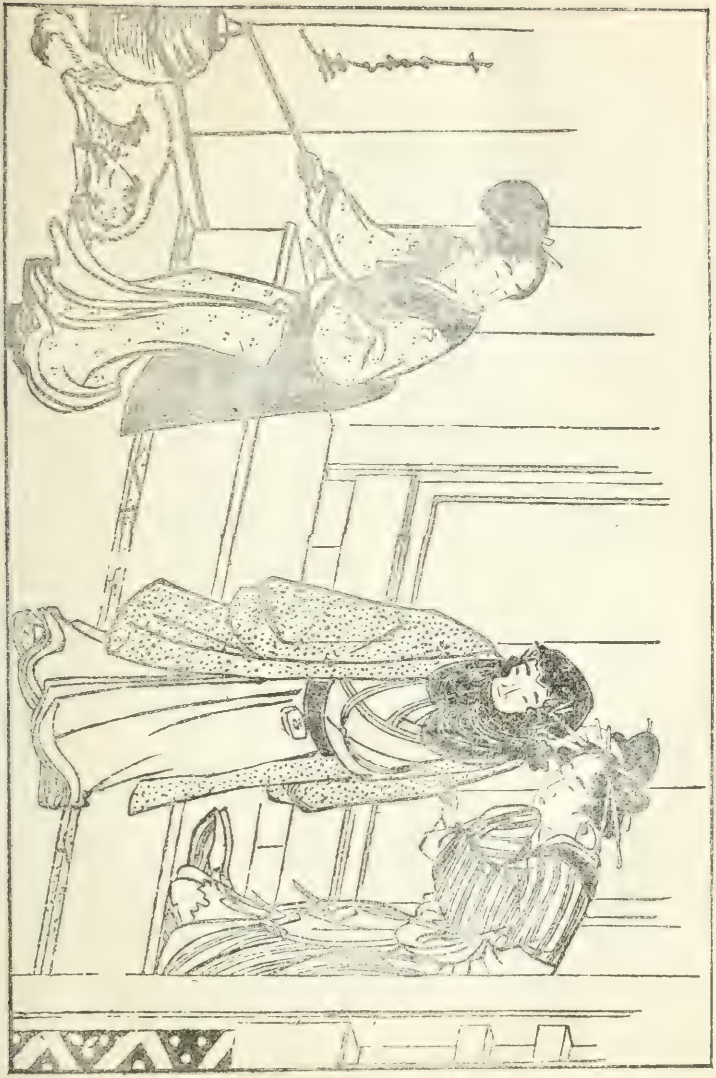
甲驛夜の錦

全

甲驛夜の錦序

名妓の眞言と鷄卵の四角あればみそかに月が出ほうだゐ廻らぬ舌のくだまいてういろう賣にハあらねども御江戸をたつて二里ほど上方甲州判のひかりより増て光れる君たちハ梅と佐久良の色競あやめ燕子花のいろざとに馬屎あるとは憎くらしと戯とつめればあやまつた山幸院のいなりさむわるく洒落たる巾の字の腹立上戸中直りして三太郎上戸の杯のあひたい見たいの度々てどゝのつまりハ間夫上戸三人よせて文字につゞくり其目錄をこゝにむすぶことしかり

宇治茶筌



跋

袜の中にあやめ咲も紫服沙に所縁なる投入の燕子花茶杓の持心に筆をかまへて水指の水を硯にうつして心にくまなき月の輪の柄杓をもて其情を汲取て初昔のうゐ〳〵しきも後昔のとゝ〳〵ハ此道に名の薫れかし今宇治の茶筌子の筆の腰押をするも石臼の古きをミて飛石をおもふ茶人氣質是もすきやの道ゆへぞかし

樹下石上

甲駅夜の錦

ね 堀の内参りに淀橋のよどみなきゆきゝもよりてこそそれ糸桜ハ成圓寺に名に聞へ江戸行の戻馬の鈴の音もとぎれ〳〵に暮六ツの鐘ゴヲン〳〵 [茶屋よしや女房]八さんもふ御出なせへませんか。新さんが。お利だから。お早いがよふござります（二人一座の客八ト云ハさるかた田舎のよろしくくらす百姓なりしがこその後よりふと此里へはまりける又新ト云ハれんぐ納メの時分かゝり合の役人也けふしも堀の内で出合夫レた一座ト成れり）[八]新さんハアいくべいなし [新]善ハ急げだ。いきやせう [八]アンデモ忝ゝ子な。かれつしやいよ [新]ソコワおばさんに御頼さ [女]あそこの内ハ美しひ揃でござります（ト云ながら挑灯ハ火燈ス）[若]（草履をなをす）[女]何方がたい。おぼつちや何かをよく。しまつて下さい [若]ハイ〳〵左様なら何方がた御きげんよふ（八新女三人草履チはき門ドを出る）[八]エウ悪い道だアなし [女]向側がよく氷つております（ト皆〳〵馬さくれの凸凹の道を来ゝ淺草やへ差かゝる）[淺草や若衆]（出おかい）コレハ〳〵八さんよう。入らつしやいました吉本さん何方（ト新へも挨拶するト三人二かいへバタ〳〵〳〵）[若]子供やアお茶アあげろ（子供大勢ア、イ、此へんじ奥ふくやのごとく云せるか此里の風流也共なんがあいかたお當が部屋へミな〳〵なたる）[八]アントぶゝ普請むし [新]コヽガおめへの女郎衆の部やか此部やの道

具立を見るに十二疊にして一けんの床有り三字物の伊坂一聲の筆にて薄ばたの梅ト椿ハ上町のおふちや(カ)トミへ此床のうへにハ大長寺の不動さまの戸びら表具へ御神酒ト御備が上げて有り上の袋戸ハ千疋駒の墨繪也用だんすとかけ硯ハ定紋の蔦のちらしの蒔繪也一たいの張附ハくすんださらさ紙てんじように三色の餅花が一枚さしてあるはや酒肴色〱(もち來ル)[女]新さん。お見立なせへまし [新]ナアニ見立ずともよしさ。がん首ハ。ともかくもこゝの。わかつた子を出して。くんねへ(ト胸をたゝく)[八]そりやアよろしくねへ了簡だ。氣に入らなくつて跡で。取けへべいと云と。ゑらむつかしいぜ。このぢうのぼんげへも向座敷の客仁が其いくつで。ゑらもめたアむし。たしか。お侍むし [女]新さんなざアそんな。いくつも云つしやる氣づかひハござへませんが。一寸と御ろふじませナ [新]ヱヽトいふに [女]左樣なら、(ト云出廊下にいる若者トさゝやくト程なくお常ト新へ出るお梅なにか一所に少シ氣色とるトミへ有りて座につく) [女](銚子を取り)おかんを見て上げませうト一ツ呑む(是よりお定りの盃左右へめぐるト お梅さん召替て御出なせへませ [梅]アイトばかり着替に行 [常]おばさん一ツ給なんし(ト銚子をとる) [女]お盃ハいたゞきませうが御酒ハ御免なせへませ [常]一ツ給なんしな [女]けふハかし本にながしの客仁がござりまして大キに給過まして。お聞なせへませ。けへります時。いつそ。よろけまして手水場のめへで。ころびました [常]チヤほんにかへ(かし本には二かいに小便所が有ゆへ也) [女]わたくしが。ころび。ましてハ一向はじまりませ

ん〔常〕〔新〕、アハヽヽ、お梅着替て来る）〔新〕八さん。一ト組よんで。ちつと。さわがふじやァねへか〔八〕アニ藝者の事か。よかんべい。かゝさん呼に。やらつしやい〔女〕（ハイ是より口チかけに行ト間もなくおつたおうら一所に来る女房も来ル）〔蔦〕八さんおとふ／＼しう御座りますね〔常〕お蔦さん此頃は八さんハ品川に面白いおせかいが。出キやしたとサ。ト八ナしり目にミる）〔八〕ア、ニちくべいゝいわア〔新〕八さんも色男にハちげへねへ。どこでも、そふほれられるといふハ〔常〕それだから。じれつたくつてなりやせん〔八〕、サリノ＼けいしやハてうしを合せ御しうぎナ始る）〽扨も見るやふりもよし合方さまの召たる烏帽子をバ〔八〕むまい事ノ＼襯ハねへか、ト古風にほめる）〽扨数ノ＼のお目出度や引〔一座〕ヤンヤ〔八〕新さん。今のうたハ。あんといふうたむし〔新〕種蒔サ〔八〕ハテナ田植歌とハ。あらく。ふしが。ちがふむし〔新〕サア一ッ存ねへト（お浦へさす）〔浦〕ちつと上ゲませう〔新〕まつノ＼〔女〕新さん何ンとおかくし藝とやらを。お出しなせへませ〔八〕新さんハ堺丁の役者衆の。さべる。まねが上手むし〔蔦〕サアノ＼一ッお遣ひ。なせへませ〔新〕そんなら一寸トめつて。くんねへ二てうにてうしろなひくト新ハ四ッ谷の薬師でけんのミ斗くおふといふめしたきこハいろを三ッ四ッつかふ今略ス一近年ハしのばゞの巳待の如く四ッ谷のゆや横丁薬師の御ゑん日にこわいろな催す）〔蔦〕〔浦〕荻野サ〔女〕中車なんぞハ出ましたよふサ〔蔦〕きついもんサ〔八〕ハア三味をばゝ。ちつと。やすんで酒にすべい〔新〕八さん。この酒ハ。わるいぜい。取りに。やろ

ふゝおばさん二河屋の菊命ヲ取ッてくんな。そして。うしほどまくの内を御頼だ。もちろん。あとやがヱヽニヨあそか一ばん鹽梅がよゝ 女 かしこまりました 常 お梅さんの所がかたづきゝやしたならば主をちつと休ませもふしやせう 新 マアよゝじやアねへかヱ 女 マアちつとお休なせへまして々のお程御酒になせへませ 八 新さんちつと〳〵ねふるべいむし 新 なんならおばさん今のものをお頼なせい 女 ハイ〳〵じきにあへります（是より藝者ハ芝居の幕明ケのよふに捨ぜりふ三ツ四ッよし本も眼乞なし皆〳〵歸るト藝者の上ゲ新造させるたばこ入なぞ持ばこぶもつとも此しんぞう宵より上り入れども子ぞうの事ゆへバ是迄だんまりにいたさせ置申候）はや二階中 納れバ耳に〳〵さわるものゝハ裏のながれがサウノ〳〵〳〵〳〵

○お常ト八が　の辨 八 大風の吹た跡とハ此こんだ三味の音が一ッしねへむし 常 その。はづさそフおふかたひけで。ごぜへやせう

常　。じように。なつても。かんじんの事だ。まゝならねへから。くやしっ。くつてなりやせん 八 アニガ 常 わたしが願ひがさトにつこりとして〳〵はづかしそふニ小言ニ〳〵ほんとふに女房にしてくんなんすかへ 八 アニおれがちくヲ云べいほんのこんだ。人トと一度けいやくをした事を此年迄間違た事のねへ男だアむし。口ひれへ云分だが 常 嬉

しいねへ 八 したが女郎の實と。たまごの四角が。あると。つもごりのばんげへにお月が出やるといふ昔たとへがあるからアお身が。ちくだんべいと思ふ 常（うるミ聲にて）なぜにくい事をいゝなんすへ（ト八が二の腕をつめつて）たとへ此末おめへさんにあきられるとも。わたしや。どこ迄も女房になるふと。おもつて。堀の内さまへがんをかけて一生さくろを斷物にしやした（ほりの内トでうしがやトたちものゝまちがいもおかしけれど相手がいなかものゆへぐつとちやにしてかけのめすせりふ也）是程にまでおもひ詰ていやす。それともうたがいなんすなら誠といふせうこを見せもふしんせう 八 ソリヤアあんを 常 髮なりと指なりと切て上ゲもふしんせうからそれで疑をはらしなんし（ト用たんすな剃刀を取出ス） 八（此やうすをミてきもをつぶし）アヽニ其心體を見屆てハアニハアうたがいは晴もふしたヤレ／＼そんなたん氣な事を。しるもんじやアねへ（ト剃刀を取上ル） 常 是程にまで。おもひやすから。かならず悪しく思つて、くんなんすな（ト なする） 八 アニハアどふしてまちけへるもんだ。今日の御日様をかけて 常 秋になつて年が明ると直に。おめへさんの所へいきやすによ。おめへさんの所にハ男しゆや女しゆが。いくたり斗り有りやすへ 八 アニそんなにぜうにもねへが作男や馬持で五人。おんなごハはたを。おるのと。めし焚をかけて四人あるむし 常 そんなら嘸賑で御ぜへやせう。それ程人をつかひなんしても。田植の時は出ねへじやアなるめへね（トいふハ此女郎の生れハ相模あたりのざ

いこそだらにて親の不廻りゆへかな川へうられて夫からこゝへくらがへして來るゆへこんな事チねどいしてミる思入有）「八アニハアおらが内なんぞでハ田うへにやア出さねへむしコレおミさまハ。あじな顔をしるが田舍へくると思つて、先の事を。あんじて。しやくでもおこつたのか「常ナアニそふいふ事をナニ案やすものか。今宵ハ。おめへの。うたがいで。わたしに。あんまり。氣をもませ。なんした。から。又しやくが。おこりやした（ト顔をしがめる）「八藥をやるべい（ト黒らしやの二ッこはせのついた紙入よりなにを出してやる）「常にがそふだねへ「八ほんに。まだやるものが有ル（ト赤皮のきん入りの金入レより判で五まい出して）此金ハ約束のだなし「常此間の噺しのかねなら。こんやでなくつても。よふござへやす「八マア取ッて置なさろ「常そんなら此金で都合いたしやせう。わたしだどつて。おめへさんの所へいつて。しろふとになれバ。きる物や。なにかも。それ相應に拵らへねへけりやアなりやせん。おめへのけいぶんのわるくねへよふにサ「八跡の金ハこんど來る時もつてくべいヨ「常もしへ亭主の事を女房のほうからハ何といふもんだねへ「八ていすの事ハとゝを。どんといふハア「常そんならととを。どん　　右之世界此女郎彼金にて色男をかふにもあらずとかく不都合なれば呉服や小間物やなぞに掛をせがまれるゆへ罪とは思へども此客をぶちころしの引取なり扨客ハ一づに女房にする。かくご。なれバ至て面白し

○新トお梅りの辯

〔新〕コチおめへ。きつい。ふさぎよふだぜ。おゝかた色男とか。なんとかゞ。今宵くるはづだが。遅ひとやら。なんとか云ふすじだろふ〔梅〕ナヱニそんな事ハございやせん。そして。ふさぎもしやせんが。どふも。おなかゞ。いたくつて。成りやせん〔新〕はらがいたくは。吉野も古ひから。大木戸の。から汁を。くいねへアリヤアふくちうし。お薬だぜ〔梅〕キツイ洒落さ〔新〕コチヽカタゑびすやの五色だんごでも。しつかり。お上りだろふからさ〔梅〕イツふるめへなんしたへ。そんな事を。大きな聲していつテくんなんすな。源ぼうじやァねへが。げいぶんが。わるう。ござへやす（ト云ながらうしろ向になつてだんまり）〔新〕（少しかんがへて）コチそふあつく。なる事アねへハな。こつちへ向て美しひ顔を。ミせねへな〔梅〕しりやせんよ。なんぼ。わたしらが。よふなこつぱ女郎だどつて。ていげいに。おなぶり。なんしな〔新〕わりいりやうけんだ。どチして。おめへがたのよふな全盛を。なぶつてミなせへ。ばちが當るハナ（などゝあやなす氣取あれども梅ハ一向とりあハず居たる故新もぐつとかんしやくにて）〔新〕此飯もりやアゑゝかと思つて。おつな仕うちをするぜへ。高坂邊から來る。いも侍か出番の青いやろふを。あつかふよふに。なまごろしハ。おそれるぜへ〔梅〕（こつちへむへて）なんだへ。しづかに云てく

んなんし。ばからしひ外の客仁のめへも。有ルもんだに。何時だと思へなんす 新 コヲそんなにつくやしがつて。はぎしりをしたがつても。下歯が。三間ばかり先キへ出ているから。ほつても出きアしねへこふもあろふか。夫かきの屋歌住先生の歌にさ「飯盛の杓子つらさへ旅なればひだるい時にまつ(ゝ)いものなし。なんと名歌で。あろふしかし此新様なざア酒ハ樽がい女ハ俵で。かつて置から。爰いらの。これ飯くさい。女郎なざア。ふりけへつても。そる氣もねへコヲナンダもふつきませんといふ伴頭さんかおきぬに異見をきくおはんじやアあるめへし紙をひねくつてまじめな顔をしているこたアねへハヘ一向つまらねへ。ふめねへ。はなせねへ。さへねへ。あひるだア [illegible]（モ今ハすてばちになり）きついねへ。つくしたねへ。とふがんのねへや。かほちやのねへも。ありそふなもんだ 新 何がどふしたつ（ト起上りぶちのめしにかゝるととなり坐敷の女郎やほうばい二三人若者なぞきて新をなだめごかしになだめればなを〳〵のりがきて大あばれになる）

△此さわぎ大だいなれバヘチヤ〳〵〳〵〳〵、トヤクヤ〳〵〳〵〳〵

是ハ別世界奥座敷おしよく 花糸（い部屋にはい）客 秋貫（とて三十五六さつぱりとした色男其姿ハふとりのおいじまの小袖帯ハ花色ばかたなくる〳〵まへて（でカ）はさみたゞ一人りふたつぶとんのうへにしんちうのねづミ張にてたばこをくゆらしているト此あいかた花糸とうなと水との）お松（もつともほうばい也せうじの外より）

秋賀さん。おさむしう。ごぜへやせうね〔秋〕お松さんかナンダナ他人らしい。そこから口をきかずと。へへりねへ〔松〕（せうじを明て秋賀が側へ居り　また太兵衛つらが。花さんを。わる留をして置くとゝへやす。ドレわたしがいつて。まくをきつてよこしもふしやせう（ト立ツそうにするを秋お松がすそを引とめ）〔秋〕マア〱あつちへ置てくんな。あの客仁だ。どつてずいぶん花糸が。ためになる客仁と言ひ。わけて今宵ハ。つとめさせねへじやアこつちの。さんだんも。わるしマア〱うつちやあて。おいてくんな〔松〕それだつて。じれつてへねへ〔秋〕それゟ熊さんが待て居よふぜへ〔松〕ナアニよくねつていやす。それはそうと。此頃はおかゝさんの。しゆびハやつぱり悪いのかへ〔秋〕此頃じやアあきれきつて。小言も出ねへのさ〔松〕随分きげんを取なんしアレアノ足音は。花さんで。ごぜへやす（トいふにたがわず花糸廿二三にてひつつめのしまだハ玉井香太郎の玉の井ゝ枕残香あぶらにて此香なりにハ諸人鼻をちよんがらせ少し色ハくろくともそのあいきようかほにこぼれむらさきちりのすそにハこぼれ梅のひなたトかけの縫もよふ同じ小袖を打かけにして帯ハ黒こはくをしめつまをもちそへてなにかもの思ひ姿にておまつがそばへ片ひざ立テすハる）〔松〕太印ハゝねましたかへ〔花〕（アイトバカリ云）〔松〕熊さんが目が覚たそふで灰吹の音がしますドレめへりやせう。秋さん。のち程〔花〕マアよふおす。おあそびなんしな薬をわすれずに呑なんし。そして酒をあんまり。のゝなんすナ〔松〕アイこよひは都合のわるい事が。ごぜへやすか

ら宵にたべて。しまいやした。そして。こよひハ心持が。よふござへやすから。あんじなんすナ
(ハトざうりばたく出行)〔花〕あの子も。かわいそうに。おめへさんとわたしが事をくろふにしてふさ
いで毎日〳〵しやくをおこしなんすハネ〔秋〕どふした縁かあのよふにもおいら二人を身にかけて世話
をしてくれるとハほんにアノ子もてめへもおれも大悪縁だコレ花糸咄所でハねへきん〳〵と狂言を
仕おゝせたが〔花〕ナア〔秋〕どふもあんじられるはやく様子を〔花〕ヤアおきゝなんしト秋賀が耳へ口フ
ツ〳〵〳〵〳〵〳〵ト言事をいひすなんでもおめへさんとわたしと深い中をたれかしやくるものが有
とミへやした〔秋〕そんならあてにした其金が〔花〕さつぱり間違した〔秋〕ナント少しも手に入らないか
〔花〕(アイトばかりふさいでだんまり)秋それじやア大変だ此ものめへにやアすくなくも十二三枚も勘
定せざア此二階へも上られめへ郭とちがつて茶屋であふ事もできず外に三文のさいかくもなしする事
なす事こふ。ぐりはまに。なるといふハトふさいで。だんまり花(うるみごへにて)嘸はらが立なんす
だろふ。どふいたしいせうねへコチまろがわす。くらいなら。あの太兵衛づらを此よふに苦労してよ
びハすまいものチばからしい〔秋〕とてもうまらねへ事だ。かわいそうに。むだほねおらした。かんに
んして。くれろ。てめへにも。しちも。はちも。置せきる。そのうへに。おれがために郭をも。かぶ
らせて此里へくらげへ間もなく。五年と云ねんのある上に。三年ねんをいれさせ。嘸あいそが。つき

たろふナかわいそふに。おれと云蟲がついていては。てめへの末も。つまらねへと。思つて幾度か。思ひきろふ〳〵とハおもへども一日あハねば飯もくわれずこふいふしぎになるとハ［花］（泪ながら）なぜそんなぐちを。おいなんすへ。おめへさんを。つまらねへ身の上に。いたしいしたも。あんまりほれ過させなんしたからの事サ若今夜の金がまちがつて。おめへさんに。あわれぬときハ。死にへせうと。かくごをしていゐす。そふ致しいしたら。云名附のお鶴さんをよびなんして。おふたりしておかゝさんへかう〳〵して。おくんなんし［秋］コレナぜそんな。つれねへ事を。いつてくれる。おれもどゝの。つまりハ死ぬかくごだ。てめへせい一所に死んで。くれる氣なら。一ツ土に。なろふハサ併そふいふ事になつたら。おまつさんの。これまでの眞實も水のあハ［花］ホンニおもへば。わたし程の。ごふ人ハ。ありへすめへ郭にいる内も。花ぎくさんや花琴さんには世話になりへす（トいふハ）△（中座もつとめし全盛とミへる）［秋］コレ花糸。とても。つまらぬ二人の身の上今度の勘定が出來ぬうへハ。二階をとめられるハまのあたりすれバ。あわれぬ上にごうはおを。かこふより。いつそ。かくごを。きわめ。今宵の中に（ト花糸が耳へ口）［花］嬉しうだんす［秋］コレてめへそれほど死ぬが嬉しいか［花］アイ［秋］サア少しも早ふ［花］アイ（トこそかにせうじを明ケくし箱の引出しにある剃刀を取に行間もなく持來り秋がまいへさし出ス）［秋］（あたりを見廻し）サア花糸。かくごを。しや［苦］アイなむあみだぶつ［秋］とは云

ふ。もの〻是迄の母者人の大おん。このよふな。ちくせうに。おとつた。おれを。子にお持なされたも。御不運そのは〻じや人より。先だつ不孝もの御ゆるし被成て被レ下ませサアはな糸 花 おくれなんしたかへ（ト剃刀を取にか〻る折からせうじをあわたゞしく明ケ飛入りて花糸のうしろよりしつかりいだきしめしハ彼お松）秋 なむさん。わるい所へ。お松さん。はづかしい 松 ナアニばからしい。わたしにハト花糸の剃刀を取上ゲ マア〳〵お二人とも氣をしづめて。くんなんし 花 お松さんか。なぜとめなんしたへ 松 ばからしい。とめねへで。どふするものかへ（ト云ひながら廣島の湯をニツついで二人えのませ）さりとハ。おめへさんがたハナゼそんなに。かなしい事をしなんす心になりなんしたへ。なんぼ。わたしらがよふな。わからねへ。ものだ。どつて。こふいふ時ハ。ひざとも談合といひやすじやアねへかへ

ト（なミだながら）おめへさんがたをバ親とも兄弟とも。たよりにして。いやす。わたしが心いきを。しりなんせんおめへさんがたでも有りやすめへナゼこふいふ。わけだから一所に死のふとおもふと一通り云てくんなんせん。あんまりどふよくな。おこ〻ろいきだねへ 花 おめへそふ思ふハ。さら〳〵無理とハ思ハぬが。とてもつまらぬ二人が身の上マタおめへの眞實ハ親もおよばぬいま迄の大おんサアそれ程に二人を不便思つてくれる其おめへにどふして死事が。云ハれるものか。死だ跡ハ兎も角もいつそ。しらさねへほうが。ましと。かくごきハめた今宵のしぎ。かならずわるく。思つて。くんな

さんナ〔花〕お松さん。いま秋さんの。おつせへすとをりでおすかならず。悪く思つて。くんなんすな〔松〕今宵は。どふも。おめへさんがたの。お顔の色が。すめねへから座敷へ。いつた。ふうをして隣の座敷に居て。その死ぬ氣に成なんした様子も。あらまし聞やした。なぜ又それほど金がいる事なら。都合してミて。くれねへかといつて。くんなんせん。なんぼ。わたしがよふな。はたらきねへものだ。どつて〔秋〕ソノお言葉ハ。ありがていが今まで。のこる所もなく。世話になつた。其おめへに。なんぼ。畜生の様な。おれだどつて。どのつらさげて。かねつくの事が云れるものか。とても。はじまらねへ。此しぎに。なつたから。おいら二人をば。さつぱりおもひ切て。くんねへ〔花〕おまつさん。どふぞ思ひ切て。二人を死なせて。くんなんし〔松〕金づくで。おさまる事なら十兩ハしら二（マヽ）十兩でも急に都合して上げやせう〔秋〕〔花〕（エヽト斗りおまつが顔を見ている）〔松〕サア金さへ出來やしたならよふござへやせうが〔秋〕どふも。がつてんが。いかねへ〔松〕なる程がつてんが。いきなんすめへから。其金の出來やうを云てきかせもふそふから。とつくりと。お聞なんし春曉さんが。あしたのばん來るはづでござへやす、此春曉ト云ハはま科から來る客なり）〔秋〕ソコデ〔松〕マァだまつて。お聞なんし。來るとネいつものよふに寐ねへで。ぐつと。くる様に面白おかしくしやすと足を近く來やすハサ。そふして置て四五まいもろふよふに致しやせうし。そうして。花さんがしつていなんすこう州

やからくる佐兵衛さんに頼やした見世者も二三日の内によこそふと。いつてひるま文をよこしなんしたハね。是が來れバ。わたしが島ちりめんや袖田ハ。まけても。よふござへす外にも一二枚ぐらいハ出來るあてがありやすから。みんな一所にしやしたなら。十兩ぐらいは出來やせう夫をみんな上ゲもふしんせうからマア排の方を少しも。おやりなんし 秋（男泣の泪ながら）それ程にまで思つて。くれるおめへの心いき中〳〵あだには思へハせぬが。それとても雲を。つかむ。よふな事なれバ。もし。おめへが苦勞して。みてくれた所が出來ねへ時ハ一向うまらねへ事なれバ 松なる程此ように請合やした所が。もし。いかねへ時ハ（トしばらくかんがへて）エヽ事が有りやす二三日の内には。かゝさんが。あひに來やす筈でござへやす。其時いろ〳〵な咄しや何かをした跡で。わたしが。ぐつと。ふさいだ顔をしていひやすにハ。つまらねへこつて。よつ程命の。いる事が出來やしたからナンデモおめへが來たらそふだんをしよふと思つていやしたといふと。かゝさんが。きもをつぶして。なんだ譯もいわねへでどんなこつたと言やすと外のこつてもねへがほうばい衆と。ちや屋衆との立引で。十二三兩も。入る事が出來やしたいつそ苦勞になりやす。そして。たて引キを。しねへくらいだと。ひつこまねいじやアなりやせん。そふすると。お部屋でハいぢめられ。ほうべい衆との。つき合も悪し。わたしもつとめをして。いま迄これほど苦しいおもひをした事ハ。ねへと。いつて泪をこぼして。みせて云や

すには、どうぞ。とつさんの病氣で金が入るといふよふな。理屈にでもして。一年なりとも。三年なりとも。ねんを入てゞも。十兩ばかりも拵へて。ぜひ立引を仕ていゝんだ。どうぞ。かゝさんそうしていもんだと。云やすと。かゝさんがネ。かんがへて見ても。たれしも子ハかわいゝもんだから。おへやでいぢめられたりなにかするのを嬉しいものはねへもんだから。おもひ切ッてね。マアそんなら。とつさんにも。そのわけ合を。そふだんしてミよふが。はやくなくつてハ。わるい事かと云やすと。ぜひ今月中に、いまのりくつを。きめてくんなせへ遅く成ッてハ。いくら出來ても。やくに立チやせんとか何とか云てネ急にきまるよふに。いたしやせう。そのきまり次第金のできしだい掛をすまして。此二階へかた身を。ひろく。御出なんしマアその事が。きまるまでハ。今夜ぎりにして。當分御出なんすな　秋（なんでも泪にしづミしがよふ〳〵おほなあげて）なんにもいわれ有リがたい。おめへのなさけ。しかしよくものを。かんがへてミな。どふして。おめへに年ンをいれさせて。金の都合が。させられるものか是ばつかりハ。なんぼ。おめへの云ふこつても　松　ナアニわたしや。おめへさんがたのためにするこつたから。そのくらいな事ハおろか。此うへまだどんな事でもする氣でいやすからどうぞ。わたしがいふ通りにして。おくんなんし　花　そればつかりハ　松　是程いゝやしてもとくしんしなんせんで。いまのやうにかなしい事を。しなんすくらいなら。わたしがさきへ死にやしよふ（ト剃刀を取り

に悪る（秋）其剃刀を手ばやく取上ゲ）コレあやまつた金もかりよふ。そして死ぬまい〔松〕（につこりとして）そんなら。わたしがいふとをりになつて。おくんなんすネ〔秋〕ぜひにおよばぬ此場のしぎ。そんならどふぞ其金を〔松〕ちつとも早く拵へて上ゲやせう〔花〕嬉しう。ござんす〔松〕花さんもう。なかすと。おだまりなんし。わたしもなかぬから。そしてもふ直に夜も明やせうから。少しも。おやすミなんし（ト云ながら有合せたるかんざしてうしを取あげ）サア秋さんもいま迄のやうな事ハ。おくびにも出しなんせんこ。しうぎに一ツ呑なんし〔秋〕いかさま。すつはり。わかつたしうぎに一ツついでくんな〔花〕おまつさんおめへのこゝろいきハ。しんでも。わすれハしやせん。うれしうさんす〔松〕アレマタしぬの死の字も言なんすな祝んぎのわるい（愛にて三人盃ツゞゝのむト）サアこれで。わたしもおねがはれやしたサア〳〵ちつともおやすミなんしト（ホツトためいきを一ツついて）わたしも。ちつともねや。せうと出て行〔秋〕（お松が實心をかんじてふさいでだんまり）〔花〕もしへどふぞ。なんしたかへ。わたしや。おまつさんの眞實をかんがへれバかんがへるほど。かなし。くつてなりいせん。それにおめへさんが。ふさいでおいでなんすから。猶でだんすト（ゆすぶる）〔秋〕ナニモふさぎはしねへ（トこちらむいて花がかほなつく〴〵ミて）コレなぜ。こんなに。まよハせる〔花〕（につこりとして）サゾにくふおつせう

しる人あらじ九年面壁なんのその

苦界十年花のはる夢むすばであけはやく魚の市場へいそぎ行若鮎何なふうたの聲あゆハナア引　あゆは瀬にすむ鳥ヤア木にとまる人ハなさけの下にすむ跡から烏がガア〳〵〳〵

冊　畢

素見數子

全

青樓 素見數子自序 貞式

門出の祝義に。後帶の尻を稱られ。藝者の名弘袴腰の斜たるを笑るゝも。始の憂を。後の娯とする。苦界拾年。此花街の牡丹餅に倖く。臆に積へて嗜盡ざる事を恨む。夫幕の内の切飯。突出しの抑より。客を抓く松花堂筆意を學び。好意の文の幼名に。簓の鯉の戀仕掛。篠原團子の轉寢ハ。茶屋の樓上の余慶もの。亦ひけ過の格子前。御神樂蕎麥の灯にて。顏ミるばかりの私言。勤の外に苦を病むも。紫蘇卷の梅干。粹が身を喰ふ此道の事跡にして。秋葉燈の絕ず火灯す臆の中。客に買れて情を賣る。其賣言葉買詞を。初商の望性となし。則大町の世界を。濱野屋の樓に登て。一錢なしの居續。退屈のあまりに書。仍て素見數子と。題號するものならし

享和二壬戌孟春

十偏舍一九識

敬貞

素見數子標目

第一　初會馴染の座敷
第二　狼戻の空氣な床
第三　沈思同士の眞の本閒

上件

素見數子

十返舎著

第一回

行水の流れの里ハ絶ずして。しかも本の水にあらず。戀の水上新吉原に堰留る。水道尻も押並て。緑湛る青簾。招く暖簾の内輪同士。よい仲の町に垣を結ぶ。花の頃とて賑ひハ。塵も芥も金銀の光輝く端手姿。繰出し褄の八文字に。熱れ日の寄る所とて。玉揃の見世附。すがゝきの音に引立られ。猶花巷の人通り。あふさきるさの其中に月に覆す扇もあれバ。灯火厭ふ袂あり。足のなき駕籠ハ。懐手して借り歩行。手の有倡妓客を牽て歸るあり。目のある盲按摩弦癖に行當り。耳の有聾。首の見へぬ紛者ハ。風呂敷頭巾打被りて。借金を恐るやらん。尊卑老若打群て。已がさまん〲浮出行。｢よしハらすゞめのうた

素見ぞめきハむく鳥の。ふれつゝ殺木格子さきツテチリ〱（すけんの徒二人つれてぬぐひはなのさきに。ちよいとかぶり）｢川 チヤ〱 こゝの内アごふてきに紅が大きい。まん中にゐるおんなア見さつし。角兵へ獅子が。三べん舞アしめへし。鼻の穴から。たばこの烟を出してくれるともねへ｢ツレ あの女も

色ごしやァ奇妙だが。あばたのきめ出しやァあやまるぜ [川]すがゝきをひいている。新ぞつこの。眞地な顔を見さつし。てうど雪隠へ這入つている。かほのよふだト(此内くびすじへ何かぽたりとおちると) [川]エヽなんだ。水がおちらァ ト(ふりむいて見れバ。ミあげるよふなおさぶらいが。あたまのうへに。よだれをたらして。のぞいているゆへ) [川]エヽいまへましい。サァいかふ。なむさんコリヤアどふかふりそふだぜ ソレ ふるとこしうだいゝ。ゑて吉の所に。柳屋のかさがあらァ。サァいかふ(ト行過ると。こゝに又ちややの男をつれたるお侍成義どう〳〵として出たらたまひ。) [侍客]アノ正めんにおるのハ。揚代ハいかほどつゝじや [ちやや男]ヘイ中座ハミな三歩でございます [客]しからバ夜分ばかりハ壹分貳朱じやの。いかさま下直なものじや。こゝらの又。はしらのねきにおる。振袖ハいかほどじや [ちや男]貳朱でござります [客]しからバ是も。夜分ばかりハ。三匁七分五厘じやの。下直〳〵 ト(こちらに又。ばつちしりにしよりにてむらさきのふくさに おたちいつかなつゝミたるをさし手ぬぐひふたつにおりて。まげの下にくゝりたる二人づれ。かうしのうちをのぞき) [素見徒成]ナント倡客亭見なせへ。こゝのうちハ。いづれも十點已上出板になろふといふ。しろものばかりだ [倡客]なかんづくこちらのおいらん。再考がよいハある [通]チヤあちらの板本が。ひざつこごうをだしていらァ。ごうてきにくろいあした。しかしつらハ。まんざらでもねへわへ [倡]殊宜がものハあろふ [徒]アノおいらんが長へふゝを書ている

が。どふぞあの。披講を聞ていきてへもんだ［倡］ソリヤアやすいことだ。入花二百疋おだしなせへ。
［徒］イヤそんなら。先おことハりだサアめへろふ　ト（そとへ出）［ウタ］あふてわかれて。又あひに　ト
（用水おけに行あたると手おけが上よりぐハら〳〵）［徒］ア、いてへ〳〵（女郎やのわかいもの。内よりと
んでいで）［若者］なんだ　おへねへべらぼうめだ　ト（りやうがハにてひきたてる。すがゞきのおと）シヤンラ
〳〵〳〵（世界ハ大見世。見浦屋の表座敷。馴染の客人［五明］（としのころ三十七八そうおうのだんな株。
ミすじだちの。とうざんの小そで。あいおなんどのつむぎのはおり。尤ためになるきやく人也）［ツレ榮吉］（お
なじはたけのむすこかぶ。としのころハ廿ばかり。あいミぢんのきうへだのこそで　あひがへしのこもん
のはおり。いづれもあきんどふうなり。今一人ハ神にて）［酒肴］（なんぶじまの小そで。おなじはおり。尤五明
がなじミのざしき。おいらんミだく〳〵。じゆんにならび。だん〳〵。さけもなかバすぎて［ちやや女房］モシあ
なたハ御酒ハあがらず。ちとなんぞ。めしあがりませト（この榮吉。初會のことゆへかはばかりおかくして
ゐながら）［榮］アノ〳〵［五］むすこ。ちとさそふ。きこうばかりしろいかほだ［榮］いたゞきませふ
［ちや女］お肴をあげましやう（ト生貝に。わさびちよつときけていだすと。小皿にうけてひとくちにやらかし）
［榮］アヽ〳〵からへ〳〵ト、むしやうにかほをしかめる。あいかたのおいらんおかしがりて。くちにそへなおは
ひむしやうにわろふ、すべて初くハいざしきのうち。あいかたのおいらん。さまでおかしくもなきことな。そら

わらひするハ。こゝろのうちに。なにとなく。うれしさをふくミての事なれバ。なんでもこのむすこ。大もてと見へたり 〔げいしやうた〕おもふこと。いはでしのぶのすりごろも。うつろひやすきこひぐさのたねをまくかと。わしやはづかしや 〔五〕アゝ酔つた〳〵。もふひとつやらかせ 〔ちや女〕ハイおさかなをあげましやう。すぐにめしあがりませ 〔五〕おいらんたちの前で。大きなくちをあくハ。はづかしいけれどト(いゝながら。両手をついて。アヽンとくちをあいてくふ。この客人はがよハくて。なまがいなむしやり〳〵といつまでもくちをうごかし大きにこまる) 〔酒〕(さいたふうにげいしやの三みせんをとりて) ちつとひきやしやう。なんぞやらかしてくんなせへじんくにしようジヤヽヽジヤん〳〵く(三みせんばつちり)なむさん糸がきれた 〔げい〕わたくしがかけてあげませう 〔げい〕もし。きよねんから出たげいしや衆に。とんだいたこぶしの。上手ながおざいますよ 〔ちやや女房〕ソリヤア一九さんが銚子からつれて。来さしつた人さ 〔げい〕さやうさ。藤次さんの弟子だそふさ 〔五〕ヲヤそのげいしやハ何といふ 〔げい〕藤門郎と申ます。しかも今。浅山さんのおざしきにおいました 〔五〕そいつアちよつと。あいてへもんだ(五明があいかた) 〔よこ雲〕そふいつておやんなんし 〔しんざう〕ドレわたくしがそふ申いしやう(ト出て行とまもなく荻江) 〔藤門郎〕わたくしを。およびなさつたハ。あなたでござりますか 〔五〕ヲイこつちらへ。アノきさまがなにか。藤門郎といふのか 〔藤〕さやうでございます 〔五〕一九がひいきにしてやつてくれろと。くれ〴〵

もたのんでいた相仕ハだれだ 藤 榮藏でござります 酒 ソリヤアきつとした釜だハヘ 五 こんやアもふ夜も更たからいゝがの。又かさねてハよびにやるから出て來さつし 藤 ありがたふございます 酒 しかし。會所へようじをつけてくるなら。今からでもご勝手次第だ。ト(わるじやれないふ一座わるおちがして)チホヽヽヽヽ ちや女 もふ。おいらんたちもおめしかへなさいませ。サアおりんさん。おしまいよ 五 サアまハしどり〳〵ト(いつぺんぐるりと。さかづきがまハつておさまり。ちやや女ぼうげいしや。ミなそれ〴〵に。あいさつしてかへると。あとひつそり。三人三ところにわかれてまづとこがおさまりける)今まで唄ひ戰きたるも。忽然寂然と成。灯火の消たるごとく。一榮一衰目前にあり。或人。此こゝろを賦したるに

淫樂師焦相(桐カ)灣樂　遷挽櫛齒貴遊人
可歎倡客鴛鴦襖　忽覩無常千住邊

第二回

客五明 (尤なじミなり、しかしこよひハ一外に人きやく人ありとミへておいらんせんこくよりざしきへよりつかずきやくぶとんの上に。ちゝぶこもんのしたぎのまゝ。あさぎはかたのおび。よこちよにむすんでころげている。つぎのまにミなく〳〵。火ばちをとりまき。しんぞういねぶりながら。ちやほうじのしりをこがし) あさじ

チヤどふいたしいしやう　番新しのゝめ　おめへさんも。氣をつけなんしな　五いゝにほひだ。こゝでさけをのむと。それで煮ばなをのんだこゝろだ　しの　ソレまた。こぼれいナ。こけへおだしなんし。(トそばにありあふちやわんに。かミなおてゝ。ちやなほうじながら)　ほんにつゆ次や。この杯を。きくのとさんのとけへもつていつての。おありがたふおざりいしたと。けへし申てきや。そしてい。しがらきの嘉七さんがきなんしたら。ちよつとしらしておくんなんしと。道しのさんに。そふいつてきや。コレサなにをしている。はやくよ　禿つゆ次　今めへりいす(トひたいへつバをつけて)　しびれ京へのぼれノ\ト(おしなひき〱立かゝる所へこれもかぶろ)　もじの　つゆ次どう。こんたァよく。おいらんのとこのねずミをにがしたの　つゆ　うそをつかつせへ。おいらァしらねへ　もじ　道しのさんがそふいわしつた。こんたがさつきもちやァそびにして。どけへかにがしてしまつたげな。おいらんのとこでハ。てへ\〱大事にかけさしつたねづミだから。いつそかなしがつてないてばつかり居さつしやらァ　しい　コレてめへ。ほんとうににがしたなら。道芝さんのとけへいつて。ツイわたくしがそゝうで。にがしましたから。御めんなさりいしと。いふ(そふノ誤)いつてきや。かわへそふに。内所のねこにとられいしやう　もじ　ナニ客人がくらまへで。かつて來ておくんなんしたソレ蠅につけた。ねずミざんす　つゆ　もじいどうハ。うそつきだよ。おいらァしらねへものを　もじ　チヤうそつきたァこんたのことだ。さ

のふちかちぐりをおつことして。人のそいにした（ママ）じやァねへか[つゆ]それよりかァ。こんたァ粨の皮をおつことして。次助どんの。あかぎれへへへつたとつて。はらをたつていらァ。おへねへけびぞうだ[もじ]おいらよりかァこんたがけびく。[つゆ]けびノヽ[もじ]チヨツく[つゆ]チヨツくノヽ（トたがひにつバきをかけやい出てゆく）[しの]やかましい子どもだよコウほんに。おいらんハどふなんしたやら。あさぢさんちよつと。いつて見ておいでなんしコレナ（トなにかさゝやきおしへると。しんぞうなづいて出て行と。間もなくおいらん）[横雲]（きりやう十人なミ。少しひたい大きくミゆれどいつたい。あいきやうあるふたかハ目。はやこの内にても。ねんあきまへ古だぬきのなをとりたる上手もの。のふりつとざしきへはいりて）アヽくたびれいした。まづいつぷくいたしいしやう[五]ばあさんか。なにをはたらいて來た[横]ナニサあんまりおまんまを。たんとたべあしたから（すいつけたたばこをそうくはたき。うちかけをとつて　ト此内ばんしんもそこらかたづけてそうく出て行）[五]きゝやァ例の色男が來たそふだが。どふした[横]辰さんの事かへ。かんにしておくんなんし。せんども。ぬしのお出なんしたとき。辰さんが來なんしたけれどわたくしやア。かまひつけもせずおきいしたら。いつそはらをたちなんして。あんまりひつこく。いぢめなんすから。わつちもかんしやくがおこりいして。ソリヤアくけへの身でおざんすものを。客人にわけへだてハおざんせんからこんなにおちやいなんしたときやア。それ

だけの。ふしやうハしておくんなんし。それができへせんくらへなら。もふ來ておくんなんすな。おめへさんのよふな。むつかしい客人ハ。もふ〳〵。いやでなりいせんから。はやくけへつておくんなんしと。おもいれいつてやりいした。そふすると。いつそおこりなんして。つん〳〵としてけへりなんしたから。もふきやアなんすめへと。うれしくおもつておりいしたら。又今宵來なんしたハな。もふ〳〵わつちやア。いやで〳〵なりいせん。ほんとうにわつちが。でへじのいろおとこといふハ [五]やつはり樣のやろふか [橫]ナニこゝに。ゐなんす人さんすト(きやくのほうべたをちよいとつゝく) [五]よしてくれろへ [橫]ソリヤノそふと。さつきおめへさんに。おねげへ申たこたア。どふしておくんなんすへ [五]ムヽかねの事か。ひさしいもんだ [橫]久しいもんじやァおざりいせん。じきにおけへし申います [五]ナニ女郎が。かりたものをけへすと。お寺さまの髪をいつたこたアねへもんだ [橫]ほんに。たび〳〵のことで。おきのどくざんすが。おめへさんより外にやァたよりにいたしいす客人ハおざんせんから。いゝにくひことも申いすハ。よく〳〵のことだと。おもつておくんなんし [五]おればかりせぶらずと。ちといろ男にもいへバいゝ。なんの。かねのいるときばかり。たよりにしてもらハずともいゝのに。そして是まで。き樣の　へも。いくら打こんだかしれねへが。まだ埋らねへと見へる。どふでも。うしろいほうへぬけうらにきハまつた。無用心なこつたぜ [橫]にくらしいよ。いつそちやに

してをいでなんす（ト少しきやくの方へにじりよりて）ずいぶんそふなんし。おめへさんハ。實のねへもんだ【五】なぜ〳〵【横】わづか。三十目ばかりのことで。わつちにはぢをかゝせなんした【五】それだとつて。これまできさまへやつたかねに。利足をかけて見ると。てうど今ごろハうけだしてしまハれらア【横】おめへさんも。いろ〳〵なことをいゝなんすよ。そんなに又おんに。かけなんすこたアおざりいせん【五】ナゼたゞやるものを。おんにかけねへでさ【横】それでも。お出なんすたびに。おめへさんのほうにハ徳がつきいす【五】ばかアいわつし。きさまが只でも出やアしめへし【横】ソリヤアしれたことざんす【五】そふしてなにがとくがつく【横】わつちがほれておりいすから。それがぬしの。おとくざんす【五】チヤよろしく申てくんなせへハゝゝゝ【横】それだとつて。ひとりねをして。おけへりなんすきやく人ハいくらもおざんす。それにぬしやア。人にほれられて。おあそびなんすだけが。とくでざんすから。そのほれた代だとおもつてお出なんすりやア。あんまり。おんにかけなんすこたアおざりいせんよ【五】ハゝゝこいつハいゝ〳〵【横】それだから。せんどのハせんどのですミいしたそのゝち。ほれてあげいした。その代を。三十めばかり。かしておくんなんしな（トかゝるせりふハよつぽど。とり

ゐのかずなとびこへたる。ふるきつねにてなくバ。いわれぬほどのちやらくらなりもつとも久しいなじミにて。たがいに心をおかぬきやくなれバ。おいらん。きやくの氣を。のミこミきつていろゆへ。手のうちにいれて。も

むよふにッおもしろおかしく。ちやらつかすなッ（客も。あへてきにもかけず）［五］さて〳〵。きさまも。むりをいふものだ。いくらほれられたとつて。たもとへでもいれてけへつて。コリヤアよこぐもがほれたのだから。でへじにしておきやれと。しまつておかれるもんでもなし。てうど。うなぎやのかどをとふる人に。かばやきのにをひの。かぎ代をよこせと。いふよふなもんで。ねつから。つまらねへりくつだ［横］チヤそれでも。ほれられていなんすおかげにやァ。人よりか。おもしろく。おあそびなんすじやァおざんせんか。わつちが又。ほれておりへせんくらへなら。今でもざしきをあけてぬしひとり。こゝにおき申たとつて。それでもつとめのかねを。けへしてくれろたァおつしやりいすめへし。なにもそれだから。わつちがむりなこたァ申いせんよ［五］ハヽヽヽこいつハなるほど。ねつからわからぬハヽヽヽ［横］そんならよふざんす。

）［五］なるほど。　まゝよそのほれらんを。マア拾匁斗も。やつておか
ふか　のろくなる）［横］トまいばかりやァいりいせん。とてもそんなし
て。ほれてあげへすもんでざんすから。もふいりいせん。それとも。ぬしに實があんたんすなら。ど

ふぞ三十まい。かしておくんなんし
又のろいねないだし）〔五〕アヽそんなら。廿匁〳〵
（つかひ谷ハはやむちうになり）〔横〕もしへどふら。三十まいなくちやアなりいせん〔五〕ヱヽ〳〵そんな
ら。三十匁〳〵〔横〕三十めじやアまだ足いせん
〔五〕そんなら四十匁でも。五十匁でも。どふとも〳〵
作略山。とう〳〵音が出来やした。成程身上も竈も打こむ筈。アヽ恐
しの古狸女ながらも金玉空ミの錯をとるべき代物にして。此倡妓が。色男との口迫ハ。追て書著
すべく。其譯は末に委し
（廻しざしきいきやく人）〔酒香〕小べんじよより。二けんめのざしきに。ひとりねのさミしさ。まじくじとし
ていると。おいかたのしんぞう）〔初花〕（しやうじをあけてはいり。あんどうをかきたて。びやうぶのうしろへ
まハして。一ぷくすいつけてきやくのかたへいだし）〔酒〕ごうぎにまたせた〔初〕まつておいでなんすうち
が。たのしミざんす〔酒〕おきやアがれ。ばかアいわずか（これハたび〳〵。互めいについ
てきたり。このしんぞうなじミなればかくしこなしたるてい也）〔酒〕ごうてきにあ

たまをかざつたハ。目ぐろミやげのもち花といふもんだ 〔初〕もふ。わるくちがはじまりいした 〔酒〕イヤわるくちじやアねへが。おめへハなるほど。いつ見てもうつくしいもんだ。ゑどに居て見なせへ。おめへなんざア。じきに鷲だの藥罐だのと。供につれてあるかアな。ほんのこつたがわつちらアおめへゆへなら。十本の指を。ミんなでもきつてあげらア 〔初〕ヲヤいゝかげんにおなぶんなんし。わつちらがよふなもんに。指をミんなきりなんして。そふしてあとの手ハ。どふしなんす 〔酒〕あとの手か。蠅叩にしてつかひやすハ 〔初〕ナホ、、ばからしいのふ（ト此うちらう下にて） 〔禿〕はつはなさんちよつと。おいでなんしつさ 〔初〕なんだのふふけいきな（トこゞとをいゝながら出てゆくとらう下にて） 〔やりて〕コレおめへハ。いけずるい。さつきのこたアどふしなさつたへ 〔初〕ほんにわすれいした 〔やり〕ソレ見なせへ。あれほどいつたのに。いゝかとおもつて。此間ちつとしぶ皮がむけてくると。もふ色だの戀だのと。ふざけるもんだから。うてうてんになつて。人のいふこたア。さつぱりきかねへ。コレいゝかげんにふざけなせへ（トいゝすてゝ行ながら、おへねへはなつたらしだ 〔初〕すかねへごよナト（ざしきへはいる。きやく人にハかに。はれおきて。おびなしめる。） 〔初〕ぬしやアどふさつしやるへ 〔酒〕わけへものをよんでこい 〔初〕なぜへ 〔酒〕なぜといふことがあるものか。用があらア 〔初〕それでもぬしやア。なにをはらアおたちなんす 〔酒〕エヽやかましい。きさまじやアわからねへ（トむせうに手をたゝくと。やがてわかいもの來り）

【若】ハイあなたかへ【酒】ナイわけへしゆかコレこゝのうちじやァとんだ客を。やすくする。おいらァたかゞ。神でくるもんだから。てへげへのこたアいハねへが。あんまりだ【若】はつ花さんどふなさいました【初】わつちやァ。なんだかしりいせん【酒】イヤほかのこつちやァねへが。今。やり手だそふながこの子のとを。はなつたらしだといやァがつた。ソリヤァずいぶん。なんとでもいふハいゝが。なぜ客のきかねへ所で。ぬかしやァがらねへヱ。一夜にもしろ。かねを出して。買つているうちやァ。おいらが女房だ。その女ほうを。なにもあいつらに。はなつたらしよバゝり。されるおほやァねへ。なんでもやり手ばゞァめハ。おれがあい手だ。こけへひきずつてきさつせへ【若】ナニそれハ。そふいふわけでハござりませぬ【酒】イヤ〳〵。まだそればかりじやァねへ。こんなことをぬかしやァがつた。この子もやう〳〵。このあへだちつとしぶつかハがむけたとおもつて。もふいろだの戀だのと。ふざけるといやァがつたがアリヤアおほかた。おいらに。あてつけてぬかしたのだ。コレヱはゞかりながら。酒肴さまといつちやア。神でこそあれ。色だの戀だのと。そんないやらしいことをした。おほやァねへぞ。ヱヽくそがあきれらァ【若】ナニそれハ。おめへさんのことでハござりませぬ【酒】イヤ〳〵。おいらがことにちけへハねへ。こうして。久しくくるもんだから。それで。あんなことをぬかしたのだ。なんでもこのあかりを。たてねへけりやァがつてんしねへ。いやだ〳〵ト（むしやうにいき

む。はつ花ハわかいものと。かほをミやわせて。ふつとふきだし。そふ〳〵むかふのざしきへはいる。わかいものも。いろ〳〵だまして見てもきゝいれぬゆへ。じれつたくなり。ことにたかゞ。神のことなればちやにしてかゝり。［若］ざやうならマアやり手衆に。そふもふしませうト（そう〳〵に出て行。あいかたむかふのざしきにて）［初］やゑ梅さん。聞ておくんなんし。あんなばからしいきやく人ハおざんせんよ［やえ］わつちやァ鐵さんのことかと。おもいゝした［初］そふさ。鐵さんが。このあいだのことを。やりて衆が。あてつけていゝなんしたを。あのきやく人が。いつそ手めへのことのよふにいつて。はらをたてなんすからわつちやァもふ。げへぶんがわるくてなりいせん。あんなふけいきな。おぢいさんと。だれがいろをいたしいすもんで。ほんにあんな。ばからしい。きやくじんハおざんせんよ。そのかわりに。こよいハ。よのあけるまで。ひとりねかしておいてつかハしいしやう ト（こゞとないゝながらどこへかなくなる）

憐なべし。此客人。相方新造の肩をもつ氣になりて。一番遣手を。へこましてくれんとの下心歟。なま中。言ずともよいことを。放言過し。終に虻もとらず。蜂もとらず。ほんの蛙ハくちからと。さりとハ氣の毒せんばんなり。折節隣座敷の客人酒肴がひとり寐を悼て口詩を吟ず

虎越千里藪　輕羅一重中

無奈何於客　　偶然有得上

第三回

おもてざしきのきやく尤初會 [榮吉]（小カ）（トべんけいのしまちりめんのしたぎ。花色はかたのおびしつかりと。うしろにむすびふとんの上に。きせるのそうじをしているところへ。おいらん。[春雨] きりやうすぐれて。すこしむつちりとしたるふうぞく。としハ十六七。つきだしまもなく。いまだ。おぼこふうなれども。いつたいがはつめいにて。ゆくすへ手とりの名をとるべき。おいらん也　へよこむきになりてすハりし [春] 小雨さん。やうじをだしておくんなんし [小雨] もしな。今下で千里さんや花川さんが。いつそおめへさんのことを。おつしやりいした [春] 今までふたりして。わつちを。なぶんなんしたわな。もふ〳〵。わつちやアよう〳〵のことで。にげてめへりいした ト（しんぞうのミヽへくちをよせて。何かさゝやきわらふ。こよいのきやく。いろおとこゆへ。それをなぶられしとミへたり。此内かうがいをぬいてしんぞうへわたし）

[春] はる次やア〳〵。ちやをひとつくりやよ。コレたんとよ [小] ほんにぬしやア。おさむかァおざんせんかへ [春] ふとんをもふひとつ。かけておあげなんしな [榮] ナニこれでよふございます [春] 小雨さん。もふいつておやすミなんし ト（此内しんぞう。すゞりぶたてうしをかたよせたばこぼんに火をいれてあてがい。

出て行と。かぶろ、ちやなくんできたりおいて出て行）[春]春次やァ〱。あんどうを。もつとそつちへむけておきやト（うちかけたとり。ふとんの上にすハり。ちやをのむ）[栄]おめへがちやをのむなゝたら。おいらものミたくなつた　[春]おあがりなんすかへ　ト（手をたゝかふとする）[栄]ナニひとくちばかりのめパいゝト（おいらんがのミさしておいたちやわんをとつてのむとい　[春]ちつと。のこしておいておくんなんしト（きやくがのミかけたあとを。わらひながらのむ。すべて初會に。女郎の心をひいてミるにハ。この傳ちかミちなり。あいかたきわめてちやをのむものなれバ。それをとつて。ひとくちのミ。すこしのこしてちやわんを。下におきミるべし。きやくにきのあるおいらんハいそいで。そのあとをのむものなり。のまぬハ。むかふに。きのなきせうこかんぜんなり。さくしや一九。この法をもつて。ためしミるに。ついにわがのミさしのちやを。のミたる女郎一人もなし。たま〱一人のしんぞう。わがのミかけのちやを。さもうまそふにのミたりはたして。この女郎と。今においてちぎりふかし。但し此女郎いたつてふきりやう。たとへんかたなし。それゆへ。ほかに。あいてになるものなきによりて。かくのごとくなるか。そのだんハはかりがたし云々此うちびつうぶのそとに人おとがするゆへ）[春]たれだよ　[かぶろ]アノネおいらんのとこで　[春]なんだこけへきや　[禿]アノヲ。おめへさん。おでへじのものざんすが。さつきのものをちつと。かしておくんなんしつさ　[春]さつきのたァなんだよ　[禿]ソレよい〱と。手をたゝきいすと。ひよいとコウ。ぶつけへりいすものざんす

[春]チホヽヽヽこれかよト(たばこぼんの下からだしてやるハかめやまのばけもの)[榮]おでへじのものだといふから。なんだとおもつたら。ひとつながやの左次兵へどのかハヽヽヽ [春]チホヽヽヽ [榮]コリヤアどふか。でへぶさむくなつたよふだ [春]ソレ御らうじいし。

おいらん手もちなきよふすにて) [春]モシナこけへおいでなんすにやァ。觀音(かんのん)さまを通つて。お出なんしたかへ [榮]さよふさ [春]かんのんさんにハアノ鷄(とり)がたんとおりいすが。アリヤアだれが。おまんまをたべさせへすへ [榮]さんけいの人が。ミんな米をもつてきてやりやすハ [春]わたくしやァね かりたくのとき。かんのんさんへめへりいしたがネアノわきざしをぬいて。こまをまハしておりいすが。いつそこわくて。なりいせなんだ [榮]ヲヤなに。あれがこわへものか [春]それでもね、あゝして。まハしておりいすときやア。よふざんすがネひよつとあの人さんが。俄(にはか)に氣でもちがつて御ろうじいし。ミんなきられて。しまいゝすハ [榮]ソリヤアこふしていても。おめへかわつちが氣(き)ちげへになつたら。どつちらぞころされよふ [春]わたくしやア。しんでもよふざんすよ [榮]なぜへ [春]おめへさんのよふなおかたに。ころされいすりやア本望(ほんもう)ざんす (ト此一言にきやくのむねハどきどきしてこれより少しづゝくちがほぐれてくる) [榮]よくおもつて見りやア、さむいのじやアねへおめへのよふな。うつくしい人のそバにいるもんだから。それでこんなにふるふ

のだ〔春〕チヤごしやうざんす。にくらしいのふ

〔春〕ドレぬしの手をおゝせなんし。なぜこんなに。やせておいでなんすへ。ヲヤなげへゆびだよト（きやくのゆびをひねくりまハし。かんでミたりいろ／＼にして。のちにハぐつとおりまげると）〔榮〕アイタヽヽヽ〔春〕テホヽヽヽヽ（かほにそでをあてゝわらふ。こゝが又しやうねなり。すべてはなしなどするうち。きやくのゆびをひねくりまハし。もちやそびにするやつハ。いつでももふ。こざつているしるしなり。しかし。これにもいろ／＼あり。さくしや一九がゆびを。ひねくりまハしたる女郎あり。一九こゝろのうちに。もふしめたものだとおもひの外。あとできけバ。こつちの手に。ひつができているか。いぬかを、ためし見たる也と云云此うち。らう下のそとにておいらん）〔よこ雲〕はるさめさんさつきのことを。辰(たつ)さんにそふ申いしたら。いつそわらつてゐなんしたよ〔春〕よこぐもさん。ちよつとおへゝりなんしな〔よこ〕マアいつてめへりいしやう〔春〕コレナ／＼（トよびいれる。すべてそとをとふるものを。むせうによびこミたがるハきやくのおとこぶりを。ミせたきこゝろなるべし。なんでもこのきやく。とんだ大もてなり）〔春〕もしな。このおかたの客人に。いつそおめへさんが。よく似(に)てゐなんすとつてヲホヽヽヽ〔榮〕だれに五明(ごめい)さんにか〔春〕いゝへ〔よこ〕コレナぬしが又。五明さんにいゝなんせうから。わるふざんす。ソリヤアそふと。もしへ。どふぞこれ

からっきておあけなんし。春雨さんが。いつそおめへさんにやアヲホヽヽヽ【紫】こんなおもしろハとけへ。これへでどふするもんで【よこ】ほんとうに。今度きて御らうじいし。おもしろへことがおざりいす【紫】かしこまりました【よこ】はる雨さんおたのしみざんす（トきやくに。すいつけたきせるをさしだして出て行。きやくのんではたき）【紫】おいらが似たといふハ。辰さんといふ客人のことか【春】そふざんす。よこぐちさんが。いつそほれてゐなんすきやく人ざんす。ほんにぬしと。兄弟といつてもいゝよふに。よく似ておいでなんすから。これからわつちとよこぐちさんと。兄弟ぶんになるつもりざんすそれだから。どふぞぬしも。見すてずにきておくんなんし【紫】しれたことさ【春】おだましなんすなへ

【紫】だまさねへしやうこハ。あしたすぐに。なじみになつてけへりやしやう【春】ほんとうにかへ。うれしいねへ

【ちやや男】ハイおむけへでござりやす【紫】チヤはやいの。五明さんハおきてかへ【ちやや男】たゞ今。おしたくをなさつてお出なさいます【春】いまにおけへりなんすから。こんたアしたにまつてゐさつせへよ【ちやや男】ハイさやうなら。おはやく（ト下へおりる 紫うちきやくハしたくして。すぐにこゝから。ふろしきづきんないだし。すつぽりきる）【春】もしへ。さつきのことを。おわすれなんすなわたくしが。じきに。はまのやへめへりいすから【紫】茶屋へけへつたら。そのつもりにしやせう　春うれしいねへ（トきやくがかぶつていゐる。づきん

、　いる

うち一座。したくして出かけきたるゆへ。ぜひなくわかれ立かへる尤ちや屋より。此おいらんなよびにやり。なじミとなりてそれ〴〵のしうぎをやり。しばらくちや屋の二かいにて。いろ〳〵あれども。事ながけれバこゝにりやくす）

かゝる蕾の花の縁咲ぬうちこそ色もあり。香もあり。盛とみる間に散かゝる。花に嵐の障ありて。任せぬをかこち恨む。臆のけぶりの絶間なき。其苦ミを娯とするが故に。身をそこなふに至るまで。それと心の附ざるハ惧るべきの此道なるをや。猶この兩子の行末に。横雲が客の始末を附會して。來陽の後篇に。書あらハし御覧に入れ可申上候

素見數子後篇

夜半冷酒　全一册

十返舍戲作　來春出板

素見數子跋

松葉榮久

いぎたなき。春のあした。霞のいとのつやゝかなる。うかれ女どちの。あうより。にたる姿ハなくて。今の世のきら〳〵しき。かふしかたち。すゞろぎたる。さしながら。俄にしもあらぬ。匂ひの袖のむめに。さゝ鳴のうぐひすてふもちゐハ。此さとの竹むらになむ。ありふりしものから。鞠もまゐ。きのじやのうてなに。よもぎがしまのかげをうつし。あしびきの。山屋どうふは。豐年のみつぎの雪かと。おもはゆるばかりになむ。老となく。若きとなく。このさとにうちさゞめきてハ。未だ見ぬ。花の奥ふかきまで。あらましにおもふこゝちぞせむ。さりや。此河竹の浪のうき寐に。めわたるかたのあいろこいろのさまを。とぢ文にかいつけ給ひしハ。その名てふ。よに匂へる。蘭奢待の十返しをきく舍のぬしこそ。さきらある人のいさほしなめりと。

そのことハりを。めでざらめやは

大はらの市女志

大原氏女

後序

酒は百樂の銚子限。いざお納ときりあげても。鳥渡格子へ呼出し上戸色男に逢夜の樂酒。否な客をバ振てミる。德利の酒も內所から。ひけ過の料理番。夜半の口舌の無理酒に。肴の世話を燒玉子。一種烏芋につけ生姜。つまり肴に十返舍がひやかし數の子。妙でござへすと。座敷才六の役まわりに

一馬齋一指誌

起承轉合

全

題起承轉合

楚書曰御客無以爲寶惟錢以爲寶故傾城白無寔客食言猶酷哉是以于實有於太郎兵衛駕于虛有於御互長左工門今十篇含據其實虛而編之者也與

白玉亭主人

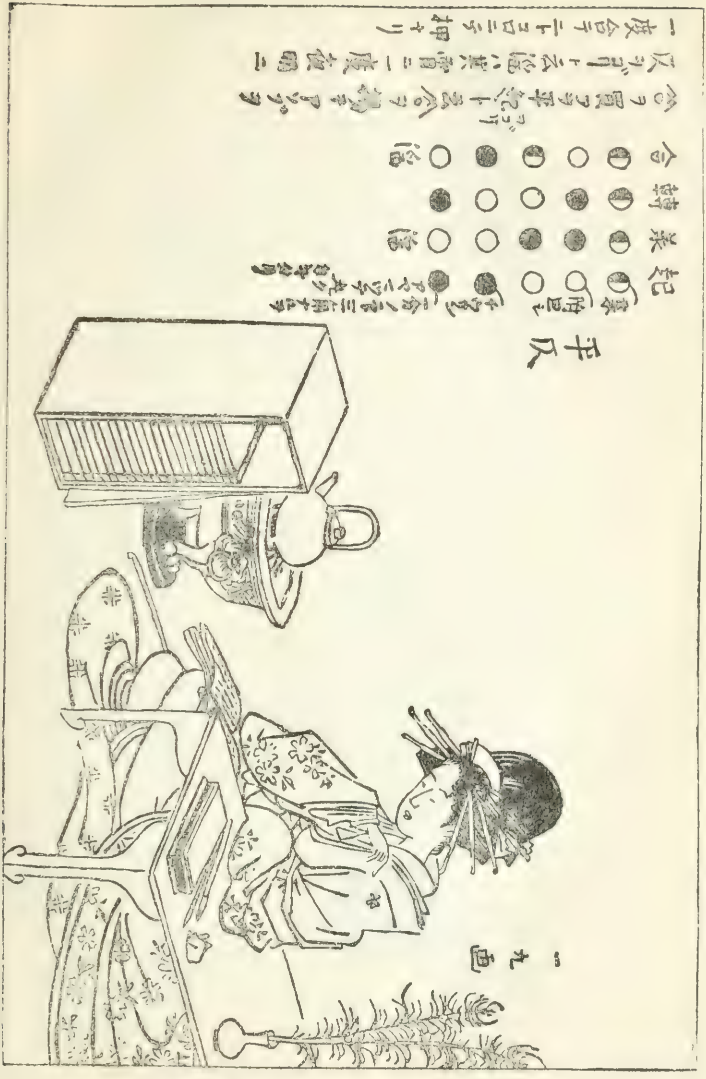
自序

聞説起承轉合とハ。詩を賦の全體なりと。予青樓の曲篇を賦て。此に其言有を思ふ。娼妓俠客を挿んとするに。食言か好意か何にも爲矣。惚たといふを起句にして互に款待仇惚に。懷のたけを懸泉。是則承句なり。其附會の懸想か。口舌の上の斷操ハ。顚倒轉句にして。配偶の合句あり。各床に淫事を押。淫事のなきハ押落し。振られし客ハ卽起る。是卽起と謂べし。雙の枕の對句にハ。殺文句の熟字有。後合の寢たふりハ。語言絶句の默然房。故事を引て。理屈をいふ。候館者にハ娼妓も。理を飛に曲る七言律。是美男の體裁を。克せんとの爲なるべし。亦平仄といふ事有。○白圏の印ハ附廻し。●黑圏ハ三歩の證なり。◐不同下二連。娼家の風體各自あり。客も一座の連句に

ハ。初盛唐の沈愼風。晩唐の似た山。宋朝の惡戲氣。賦すハ則閨中に。臥て淫を扨るをもつて。俠客行ハ詩を作るにひとしからんと。其言をして標題に命たるも。頗書生の予が管見ならん。希ハ四方の大通先生達。宜く点削を施給へ。茲歳壬戌孟春吉日

十偏舎一九題

敬貞



起承轉合

婉曲歌　集義和書

百花爛案上文獻輻紙紈妓女
風流恒如友誘畫圖也

起 杜子美が春江のながめよりもながれの里の花ざかりに目うつりのする仇ぼれ 賓

承 李白が酒の一斗ハ扨置はなに醉ふくるわのあそびハ呑こミ姿の惡じやれ 人

轉 樂天が白雲の帶とけかゝる雪のはだへのいろじかけこれよこあひの大手 支

合 橋潭が虹のかけはしよりわたりのつきしたがいのいきな客ハひとりにふたりの 眞

起承轉合

十偏舍一九賦

○起句

櫻桃花樹の下に遊んで。春ハ鎖窓の深きに。あることをしらずとハ。色男の己惚が髭を撚て吟たりけん。此に青樓五つの街其中の町の花ざかりにハ。西行法師も北へ走り。長明が尻おけざるも。居續したき心地ぞせん。花を床にうつし植るハ、野郎の上東門院にして。おぶさつてくる忠度も。花をあるじの廻し部屋。大盡の鼻ハ高く。娼妓の花ハ、賣物に飾つてうつくし。若ものこの花をいたゞけバ。禿ははなをすゝつて呵らる。たいこ持ハ客と倶に鼻をひこつかせ。けいしやハ。新造とならんではなを覆ふ。おいらん客の鼻毛をよんでハ。あるひハ鼻のさきにあしらひ。あるひハ鼻息をあげてもてなす。獅々鼻の客。牡丹がらくさの夜着にくるひ。柘榴ばなの客。あつくなつて炎をはく。鼻のひしやげし似た山も。金の威光にはなを高くし。鼻すじのとをりものも。是を地につけて借金を斷る。いつれ花の名どころにしてゝさかりひさしきよし原の。彌生ハ殊に賑ハしく。夜を晝とや火ともしごろゝ茶

屋かはしゐの花ござに。はなたか〴〵と座したるハ腹ふくれの旦那株

【夜興】五十餘のとしばい。つやなしうへだの小そで。あいのはかたの帶。くろりうもんのはなり。中ぐらいの人がら。尤でつぶりとして大男也。かミ入たばこ入にまでもへぎらしやなこのミてもちゆ

【仁三郎】廿ばかりの。ひんなりとしたるむすこかぶ。ゆふきつむぎの小そで。くろなゝこの帶。これもはなりハくろ八丈。いたつておとなしきふうぞくにて。女のおもいつくいろおとこなり

【やきやう】仁三こうひとつのミねへ【仁三郎】わたくしハ大きによいました【茶や女房】あなたハねつからあがりませんね【夜】おれとおなじことだ【げいしや】おきのつゐゝ【仁】ほんに夜きやうさんハ。きん酒をなさつたよふに。うけたまハりましたが。やつぱりあがりますね【夜】イヤそれがね。大わらひなとよ。去年子僧が病氣の時。なにが盃へぴんと錠をおろして。堀の内さまへめへりやした。重てからさかづきハ。手にもとりますめへ。何とも悴が病氣本腹いたすよふにと。願つた所が。病氣ハたちまちよくなつたが。サア呑たくてならねへとおもいなせへ。そこで。かんげへて見たところが。さかづきを。手にも取ますめへといつた斗で。酒をたべますめへといふこたアいハなんだから。そこで盃さへ。手にとらにやアいゝとおもつて。今じやア猪口かこの吸ものわんのふたでやらかしやす。なんいこたアねへ。お祖師さまを。一ばんかきのめしたといふもんだ。【げい】おそしさまをさへおかきな

さるものを。おいらんたちもおめへさんにやアかゝれうちさ。ときに。お此さん。このおさかづきハどふいたしやせう〔女房〕おもひざしさ〔夜〕おもいざしならおいらだろふぜ〔けい〕イヽヱあなた（ト仁三郎がかたへさす）〔仁〕コリヤあけよふ〔けい〕おめへさんも娵（よめ）のほうからさしたものを。おけへしなさるもんじやアござりやせん〔夜〕どふでもわけへしゆにやアおちをとられる〔女房〕モシおゆだんなさりやすな。おたえさんハ。このあいだア。さかりがついて大さハぎさ〔夜〕そんならおいらが。

上ゲよふから。仁三こう。　どふだ〔けい〕チヤにくらしいのふ（トぼちにてたゝくまねなする此うちわかいもの立かへりて）〔茶や男〕只今唐松さまハお出でござります。あやぎぬさんハ。御病氣（ごびやうき）でござるそふで。今におへんじがあるはづでござりやす（此からまつといふハ。やきやうが相方。あやぎぬといふハ。仁三郎が相方なじみ）〔夜〕御くろう〳〵。ときにそりやア。仁三こうこまつたもんだ〔仁〕ナニ病氣だといふこたアきいていやしたが。さしたることでもねへそふさ。今になんとざいつてめへりやせう〔けいしやうた〕まつまもとけし長ぎせる。むねのおもいなくゆらせて。しんきそふに見へるぞへ〔皆〕アレ〳〵向ふへ太夫さまが。ミヘるぞ〳〵（なげぶしうた）なれしくるハのうきふしや。よごとにかハるまくらのちりも。はらふハきミにあふ夜半（よは）の。床（とこ）につもりしてゞめごと。〔唐松〕夜興さんよくお出なんした。チヤ仁三さんかへ。おひさしうおざりいす〔女房〕おいらんこちら

へ（トたばこぼんなかたよせてこしなかけさせ）ぼんに。あやぎぬさんハ。どふでござります 番新 いつそおあんばへがわるいとつて。およつてばかりおいでなんす。雹衣さん。おことづけをそふおつせへしな（仁三郎がまへゝきて） 雹ぎぬ アノね。おめへさんに。あやぎぬさんがそふおつせへす。こよひハよくきておくんなんした。おありがたうおざりいす。私もあんはへがいたふおざりいすが。おめにかゝりたふすから。おまち申ておりいすとさ 夜 御くろう。お茶でもあがれ。ごうぎにせつなそふだ 皆ゝ チホヽヽヽヽ けいしやうた すけんぞめきハむく鳥のなれつゝきつゝきかうしこきこきツチチリノヽ（大門のかたよりほうかぶりをしたるふたりづれ 火をけしたてうちんをもち） 左兵へ コウ吉さん。さくらの花よりかアあのこしをかけている。おいらんかみな。あれがほんとうのいきただ 吉 いゝい。アノ又しんぞうもあだどぜ 左 チヤかぶろのあたまアなんだ。おさまりやすぞ。はつ山〳〵といゝそふなあたまだ 吉 それよりかア。あのばちで尻をかいている。けいを見さつし。ゐて吉によく似ているぜ 左 アノ又うつむいているやつが客とミへるがなんのこたアねへ。蚯蚓に小べんをしかけたわんぱことといふもので。ふくれけへつたつらの親仁だ（此内うしろからおされて。こしをかけているしんぞうのおしをふミ） 左 是ハごめんなさい 夜 左兵へじやアねへか（トいわれて。うろたへまハりほうかぶりを取） 左 ハイ是ハ旦那さま（トふんさきへかゞむ。吉ハさきへ行こし 左兵へがおしをふんだるをわびる

とおもい）　〔吉〕コウ左しうや〳〵。べらぼうめ何をあやまつているのだ　〔左〕チイ吉さん〳〵　〔吉〕なんだ。やかましい（トたちもどる）〔夜〕吉ざうか　吉ハイこれハ　〔夜〕何しにきた　〔左〕ハイ（トふところより手がミないだして、ぼんとうさまから遣(つか)ハされました（トさしだして火おせなふく。ミな〳〵おかしさなかくしている。仁三郎とからまつ。かほな見やわせて、おもわずぶつとふきだしてわらふ。これなしほに。此おいらん仁三郎がわきへすわり。わらひながらもたれかゝるきミあり。かねてこの仁三郎にハ。ほれているといふめつきかほつき。おかめからよくミへるくらい。夜きやうハ手がミなよんでいるゆへなにもしらず。つかいのものハわらわれながら大のきまじめ也）〔夜〕ときに大変(たいへん)だ　〔仁〕何ぞきうな御用かね　〔夜〕おめへもしつていなさる。かの出ゝせのりくつよ。コリヤアちよつといつて來やせう　〔女房〕ナヤ〳〵　〔唐〕おめへさんおけへりなんすかへ　〔夜〕ナニくらまへまで。いけバいゝのだから。じきさまこけへ　〔唐〕おだましなんすなへ　〔夜〕ナニきつとくるのさ。それまで。仁三こうなさきまのとけへつれていきねへ　〔女ぼう〕お駕(かご)を申てやりませふか　〔夜〕ナアニよし〳〵。左兵へてうちんをつけやよ（トたばこいれきせるなしもふ。たや屋の女房。わきざしなさしいだし）〔女ぼう〕さ様ならおまち申ておりますにへ　〔皆ゝ〕さやうならおはよふ　〔夜〕しやうち〳〵（トそう〳〵にいそいでかへる）〔唐〕そんなら仁三さんサアおいでなんし

作者曰。この息子(むすこ)ハ。元より鼠(ねずみ)とらずといへ共。おいらんハ又。鼠とる猫爪(ねこつめ)なかくすと。大様(おほやう)に

ゝせて。客をかく手取なり、此ふたりを。おなじ炬燵の上に寐かさバ。ちよつかいがさハり。足がさハり。つい猫の目のかハりやすさハ。仇惚のうハきよりして。ふと猫じやらしに。むすぶゑにしの喰つきとなるべし、兎角猫に鰹節ハさてこそ。油断がならぬ〳〵

○承句

(からまつがざしきにハ客まつ火ばちにふきおこす。ひぢりめんのふりそでしんぞう、かぶろまじりに仁三郎も。しやべりくたびれ。ひぢをまげて。まくらとなしたるたのしミに。はやとろ〳〵目のたハいなし。おいらんずつとはいりて)

唐松「チヤそんなに。よく火がおこつておりいすに。なぜ煮花でもして。仁三さんにあげなんせんへ
新唐糸「仁三さんハこけへおよりいした 唐「けしからねへ、蒲團でもかけてあげ申な。ミどり。枕をとつてきや(トまくらをとりよせ。ミすがミなかされてあてがひ。仁三郎にきせる。此内しんぞうふとんかける)
仁「コリヤアありがてへ 唐「今あやぎぬさんにおめにかゝりいした今宵ハ是非おめへさんに。あひなんせんけりやァならねへことがおざりいすとさ。もふちつとまつてお出なんし 仁「アイ〳〵(トいふもゆめごゝろたハいなくねぶる) 唐「唐糸さん。硯ばこと。さつきの巻がミをもつてきておくんなんし。

いと ほんにきつきこ おめへさんの筆をおかり申いした（トとこの間にころがつているふでをとりそへ、すゞり箱を持てくる） 唐 くらへ火だのふと あんどうをかきたて。ふミをかさにかゝる。トうへだの小そく。ごるすぎたるなきて。手にきせるたばこ入など もちたるおとこはいり） 流行 チヤこの土左衛門ハだれだ トに三郎をのぞく） 唐 およしなんなんし。夜興さんのおつれざんす 流 夜けうさんハどふした（此りうこうやけうとハこゝにて出合ちかづき也 唐 今にお出なんす 流 かくもんだね （トふミをかくむかふへすわり）ハヽアなんだ。ゆふしハよふぞや御こし下されこぐハいぶんかた〴〵。イヤこいつ三會目をせしめたな。いくらだ。さんまいかたまいハくれめへ 唐 おぶしやれなんすな 流 いつ〳〵までも御かぶらせなふ。御かよひ下されたア。手めへがつてな文句だぜ 唐 どこにそんなことをかきいした。そつちらアむいてお出なんし 流 ヒヤアおつうかくぜ。ほんにあわびのかたおもひ。御うらめしく存り〳〵かコリヤア衣がへのおしんにやアまだはやいぜ 唐 ごしやうでおざりいす。だまつてゝおくんなんし。そして衣がへのむしんだア。そんなこたアかきやアいたしいせん 流 そんでも見ねへ。ほんにあわせのかたおもて。御うらはしくぞんじりゝときこへる 唐 チヤかんにしておくんなんし 流 そのつぎハなんだ。ヤ此身たらわぬものに候へバ。ふびんとおほしめしたア。こいつ年寄ぎやく〳〵と見へるわへ 唐 なぜへ 流 ハテ此身たれこむものに候へバ。しびんとおほしめし下さるべく候 唐 チヤ〳〵ばからしい

のふ。わりいりうこうさんだよチ（トあんどうのかげへむいてかく）〔いと〕そばでおしやべりなんすから。いつそおいらんが。かきにくがりいすハな〔流〕ナニまごの手と。すりこ木を取ちがやァしめへし。かきにくいといふことがあるものかへ（トたばこをつぎにかゝり）チヤあの子や。ちよつとたのまれてくんねへ。竹里（たけざと）さんに。たばこをちつと。もらつてきてくんな〔唐〕唐琴（からこと）さん。いれてあげ申な〔流〕そりやアありがてへが。しかしいた〳〵しいの〔唐と〕おゝくびりなんすな。おめへさんなんざア。こんなたばこをあがりいしたら。ほうがはれいす（ト小だんすの引だしよりたばこをだして入れてやる）〔流〕ドレ〳〵コリヤアなるほど。さつまだわへ〔と〕ちがいゝすよ〔流〕此（こり）たばこのしをくりをする客人（きやくじん）にやア。おいらんもさぞ。まことをつくすだろふぜ〔唐〕なぜさんすへ〔流〕ハテ女郎のまことに。たばこのおきやく。あれバ晦日（みそか）が安楽（あんらく）せかいだ〔唐〕よくおつせへすもんだね〔と〕りうこうさんのおしやべりなんす。顔（かほ）を見ておりいすと。おかしくつてなりいせんチホゝゝ〔流〕なにがおかしい〔と〕アレひげのあいだからものをおつせへすハなチホゝゝゝ〔流〕おめへたちの。下くちがものをいつたら。てうどこんなもんだろふ。ハゝゝゝゝ（此内しんぞうた川あハたゞしくかけてはいり）〔うた川〕もしおいらんで。わつちが客人のとこから。此ふミがきいしたが。見ておくんなんし。いつそよめへせんわな〔唐〕ほんにコリヤア男のとけへやるよふに。むつかしい字（じ）ばかりでおざんすよ。〔流〕ドレ〳〵よんでやろふ。

ヲヤ〳〵こりやアおつだ。任幸便以手紙申入候と。先こゝらハよし然バ先達而。繍太郎参候節。是金子之事御申越下拙も甚難渋にて。只今ハ壹錢之才覺も出来不申候。繍太郎衣類之事も御申越。是ハ彼もの雜用之代に。質物にさし入。金壹分と壹〆文借受飯米をとゝのへ。宿へ遣し申候 [うた] ヲヤ〳〵なんざんすねへ [と] 繍太郎さんたアだれさんのことでおざんす [哥] わたくしやアしりいせんハな。けしからねへふミだのふ [流] コリヤアふうじてきたろふがっうハがきハ。おめへの名できやしたか [うた] そふでおすハな [流] きこへた。こふだハな。この客人が田舎へやる手紙と。おめへのとけへよこす文と。いちどきに。かいたものだろふから。そこでふうじる時にとりちげへて。こつちへよこす文を田舎へやり。いなかへやる手紙をおめへのとけへよこしたのだ [うた] ヲヤ〳〵どふしいせうのふ [流] おもしろい〳〵。時にと。下拙も三月ハ給金。三分二朱取候間。其節代物遣し可申候。母さまへ御申。木綿一反つかハされ。下さるべく候。じゆばんとふんどしに。いたし申たく候 [皆々] ハヽヽヽヲホヽヽヽ [うた] りうこうさん。もふこつちへおくんなんし [流] マアまちねへ。そこでと。上の村のおばごより。なすこがし下され候。御禮宜敷たのミ入候。筆末ながら新田の長太郎どのにじめ作野右衞門どの。與五左衞門どのへも。宜敷御申下さるべく候。おなべ事も。達者にほうこういたし居候間。御心安くおぼしめし下さるべく候。イヤこいつハ妙〳〵。うた川さん。コリヤアおめへの色男

かうたかんにんしておくんなんし。東水さんについてきなんす人ざんす。そしてわたくしやアたの
たのみどしかア出やアいたしいせん。げへぶんのわりい人さんだよノ　流それでも。おめへも姿こかし
なおもらいだろふ　うたごしやうでおざりいす。こつちへおくんなんし（トふミをひつたくり。まじめな
かほをして出て行）流いろ〳〵なばけものがあるものだ。時に此夜興さんハどふした。もしきさしつ
たら。ちよつとしらしてくんなせへ。コリヤア長ばなしをいたしやした。ヤアゐいとこな（ト立あがり、
きせるをくハへたなりにで、行　ねまきのきものをきたるかぶろ）禿から松さんに。おいらんでおつせへ
す。アノヲ。仁三さんがお出なんして。おせハさまでおざりいす。今におめにかゝりいせうから。お
たのん申いすッサ　唐あやぎぬさんに。仁三さんハ爰に。およつておいでなんすから。かならずおあ
んじなんすなとよくそふ申てくりやっ　わすれめへよ　禿そふ申いしやう（トかけだして行）いと夜興さ
んハどふしなんすねへ　唐もふひけ過でおざんせう。おめへさんたちやア。かまわずといつても。お休
なんし（ト此内しんぞう　おいらん仁三郎をゆりおこす）仁コリヤアごうせいにねやした。おいら
んまだかへ　唐まだお出なんせんわな　仁そいつアつまらねへ　唐あやぎぬさんの所から。今そふ
もふしてめへりいした。おめへさんに　もふちつと。まつてゐておくんなんしとさ（ト一ぷくすいつけ
てさしだしかミをもつててうづに行）いと　こふひハ。あやぎぬさんもでへぶおあんばへがいゝとお

つせへした。どふでもおめへさんが。おいでなんしたからのことでおざんせうね [仁]ナアニ(トいつたばかりに、きせるのそうじをしている。此内しんぞうそこらをとりかたづけ) [いと]みどりや。もふいつてねやよ。コリヤアおさゝしうおざりいせう。今にお出なんすとさ(トいゝつゝあんどうの火をかきたて。火入にも火をいれてあてがひ。びやうぶをひきまハして。出てゆく)

○轉句

[ウタ]たばこのんでもきせるより。咽(のど)がとをらぬうすけぶり(仁三郎ハひとり。ひばちのはいをかきならしていろとからまつざしきへかへり。そこらを見まハし) [唐]仁三さん。おまちかねでおざりいしやうね(ト仁三郎とならんで火ばちのそばへつくばひ)チヤさむくなりいした。コリヤアおたけへにまつ身でおざんすが。おめへさんのまつのと。わたくしがまつのたア。とんだちげへでおざりいすよ [仁]なぜへ [唐]なぜじやアおざんせん。おたのしミなこつたねへ　もしへ。そこじやア風(かぜ)をおひきなんせう。こけへきておはなしなんし [仁]夜(や)けうさんに叱(しか)られよふ [唐]よふすハな。こけへお出なんしてもおなじねでおざんす。風でもおひかせ申ちやア。あやぎぬさんへ。いゝわけがおざんせん [仁]そんならいつてもよかろふかね

あや絹さんハ仕合(しあはせ)なもんだね 仁なぜだへ 唐おめへさんのよふなおとこに。ほれられてゐなんすから 仁ナニおいらがよふなものに。見こまれたとつて仕合なものか 唐おめへさんのよふないゝ男ハ。めつたにやアおさんせん。あや絹さんハさぞうれしくつてなりいすめへ。うら山しいのふ(トはなのうへにそでをおほひ。にこ〳〵とわらつている。仁三郎もむねハどき〳〵) 仁おらア久ッ夜興さんがうらやましいッおめへのよふな人にかわいがられるから 唐チヤおなぶりなんすッにくらしいのふ

あやぎぬさんハ。どのくらへッかハいくおもつてお出なんす 仁

唐もしへ。あつまかしいもんだとおもひなんせうが。かんにしておくんなんし。はじめてお出なんしたときから。わたくしやアおめへさんに もふ〳〵いつそねごふも。いふにもいハれいせん。すいりやうしておくんなんし(トかほをかくす) 仁ソリヤアほんとうにかへどふもうそらしいよ 唐夜興さんや。あや絹さんの手めへもかまわず。こんなむりなことを申いすハ。よく〳〵のことだとおもつておくんなんし。こう改申いしたとつて。おめへさんハあやぎぬさんに。ほれきつてお出なんすから、とてもおよばぬことだア。あきらめてハおりいすが。もしもふびんだとお

もひなんすなら、せめてぬしの。いもふとだとおもつて。かならず。見すてゝおくんなんすなへ
仁 おめへもいもふとたアむしのいゝ。おいらアおふくろだとおもつて大事にしよふ 唐 ヲヤかわへ
そふに 仁 姉さまにしておかう 唐 そんならぬしやアわつちが弟でおざんすから。姉のいふことを
おきゝなんせんと。大きなめにあわせいすによ 仁 アイ／＼

○合　句

あやぎぬハ病氣にて、やくしよをひき、内しやうに引こもる折からに。仁三郎がきたりしをよろこび。しんぞうかぶろにいゝつけて。ざしきにハ　夜ふけてしのびあわんとの。心づかいもほれやつているゆへなり

番新衣甲 そで治やア、これハいをいれてきや。ソレくちからこぼれいす。きをつけやよ 禿 アイ
トハやくハんをもつて立　此内[illegible]とも、いしきのほころびたるきものをきたる（けしぼうずの禿）金次 はつ瀬さん、さつきのものハヘ はつ瀬 さつきのたアなんだ 金 ソノヲひよいと。コウぶつけへりいすもんじおさア はつ瀬 ヲヤなんだね此子ハ 金 ソレよい／＼と。手をたゝきいすよ。ひよいとつむりがひとつと

んで。其あとに又。もふひとつつむりのあろ、人形でおさアな　はつ　チヤノ＼何ないふ　金アとまた
りよチおくんなんし　衣やかましい。だしておやんなんしな　はつ　これかよ（トたばこぼんの出たしよりとりいだして）サアやらうからの。ほんさまよ。大ほんよ。おやりおやと。おさらばいかいなといふ。おどりをおどつて見せや　衣かハへそふに。やつてしまいなんしな　はつ　ソレもつていきや　金チヤノ＼こゝのものがとれいした。これじやアひよいとユワなのいせんよ　トしたにおいて手をたゝきよい＼／。チレミなれし。こんなに　はつ　エヽそう＼／しい子だよ。きり＼／あつなへ。もつてきなんし　金ふけいきなはつ梅さんだよチト（ぶつ＼／こゞとをいゝながら出て行）　亀もじの　チヤ何かおとしていきいした　はつ　チヤノ＼お安とかいてあのいす。もつてへねへのふ。そしてなんだか。かてへもいがつゝんであのいす　衣あけたんすな。ばかだあたのいす　はつ　そんでもなんだかおさのいす（トかんざしにてふうをきりあけてミれバなきのたね）チヤノ＼　衣ばからしい子だのふチヨ、、、（此内らう下ばた＼／かけてはいるおいらん）　松山（ずつとはいつてしやうじをたてあけてのぞく）　衣おいらんなんさんす　松ヲナニ志京さんが酔いなんして。いつたふさけなんすから　トせい＼／いつていなさるにてさいくんし）　志京　迷ひ子のノ＼。　松山ヤアイチヤンチキチヤンチキスツテチヤンチヤン　松ヱヽどふしいせう（トてぶのなかへはいりおくれる）　若者　はつ梅さん。そこにあぶらハござりやすか　はつ　今宵とは

すほどハありいす　若ソリヤアおたのしみでござりやすね　松（びやうぶの中よりとんで出）喜助どん〳〵。志京さんハ。どつちへいかしつたへ　若今玉うらさんのとけへ。おへへりなされましたヽ（トいふうちに又らう下にて）志京　まよひ子の松山ヤアイ　松ヱヽ又きなんしたハな　志ナヤあの客人ハはだかでさ。醫者どのが清もりさまの。脉を見にいきやアしめへし（此内まつ山が　ぶるかけてくるとおいらんハちやつとかくれる）禿おいらんハへ　衣こゝにやアまつ山さんハ。いさつしやらねへよ　禿どこざんす　若狐に聞ざアわかるめへ　禿すかねへざよウ（トつらなふくらし出てゆく）松コヽナ喜助どん〳〵そつちへいつたらの。松の戸さんに。ちよつとこけへきなんしと。そふいつてくだせへよ。コウそつとよ　若ハイかしこまりましたト（出て行く）松あやぎぬさんハへ　衣今宵ハ仁三さんがお出なんしたから。あひなんすとつて。今にお出なんす　松ソリヤア此あいだから。あやぎぬさんが。いつそこがれてゐなんしたつけが。さぞおうれしうござんせうね（トのみかけたたばこをはたき出し行此内かぶるがやくハんにゆをいれてもつてくるを火ばちへかけて火をあをぎながら　衣はつ梅さん、仁三さんをこけへ。おつれ申てきておくんなし　ふりしん初梅　今そふ申いしたが。らちのあかねへ仁三さんだ。（トふりそでなしぼつてかけだし。ほどなく仁三郎がそでをひいてくる。仁三郎まへおびじだらくにむすびをけ仁おいらんハ　衣今にお出なんす。さつき。からまつさんのとけへめへりいしたが。おめへさんハ

よくおよつてお出なんしたつけ。夜興さんハどふしなんしたへ 仁たつた今きなすつた 衣マアこけへお休なんし。おいらんハ今そふ申います(ト衣ざとは出て行。はつ梅もそこらまご／＼してかけだす。此内おやぎぬハひつつめしまたのばらつきたるかミ。白いかほへかゝりしハなをうつくしく。ことにまだ十七八のつぼミの花くろちりめんのよほどきなれたるねまきのまゝ。そろ／＼とざしきへはいり。すぐにふとんの上にすハり)

あや絹 よく来ておくんなんした。おめへさんに。あいたくつて／＼。てへ／＼もふこがれたことじやァおざんせん 仁あんばへがわるいときいて。おいらも大きにあんじていたが。どふもくるひまがなかつた　ヲヽでへぶやせなすつた。そのかはりしり　ひざをかんざしにてつゝきながら) がとんだちいさくなつた。あや ばからしいのふ　わたくしやアなんだかもふ。おめへさんのこたア。かた時も忘れいせん。こんなにおもつちやア。いのちもつゞさいすめへ。そしてうハごとまでいゝしたとさ。きぬ里さんなんざア。いつそきのどくがつて。そんなにおもひなんしちやア。身のためにもなりいせんから。本でもよんで。気をはらしなんしと。いけんをおつせへすくらいでおざんす。なぜこんなに。おもハせておくんなんすへ 仁ソリヤアわつちもそのとをりだから。はやくよくなりなせへ。どふもあんじてならねへわな あや うそにでも。そふいつておくんなんすりやア。それがたよりになりいすわな(ト なミだをふく) 仁かわへそふに(ト

此内ふりしんあハたゞしくは入）［あや］ヲヤびつくりさせなんしたなんざんすへ［はつ梅］アのね。今夜きやうさんが。いつそおこりなんして。唐松さんをぶつたり。たゝへたりしてゐなんすハな。それに。仁三さんをよんでこいといゝなんすけれど。唐松さんのおつせへすにやア。仁三さんがお出なんしちやアわるふおすから。そつとそふ申ておいてくれろッサ［あや］どふしなんしたのだへ［仁］どふしたのだか［はつ］ナアニ今竹ざとさんがそふおつせへしたがね。どふでも仁三さんと。唐まつさんが一所にねてゐなんしたとけへ。夜興さんが。お出なんしたもんだから。そのことで。はらをおたちなんしたとさ［あや］なぜ又おめへさんハ。唐まつさんと。いつしよにねていなんした［仁］ナニちよつとねころんで。はなしをしていたのだハな［はつ］うそをおつきなんし（ハトわらふ仁三郎いふなといふことな。めつきでしらせてもごしやうらくにて。いつこうとんちやくなし）［あや］はつ梅さん。どふしたのだへ［はつ］それもね。たゞねていなんすこたア。夜興さんだとつて。はらもたちなんすめへが。唐松さんも仁三さんも。　いなんしたとさ。それだから夜興さんが。おこりなんしたもおりじやアおざんせん。なんでも仁三さんが。でへぶ。ふんしがわるくなんなんしたから。おいらんたんとしなさなしておあけなんし。アヽいつそいきがきれいす。ドレ又いつてめへりいせう ト（此ことをしやべりにきたり又そう〳〵にかけだして行）［あや］そんならおめへさんハ唐まつさんと

色事(いろごと)でおざんすね〔仁〕ナアニとんだことを〔あや〕ほんにあきれもしいせん。おめへさんもあんまりでおざんすが。又唐まつさんも。ひごろ心やすくするにもにやいゝせんから。コリヤアこのぶんじやアすゞいせんにへ〔仁〕ナニそんなに。ひねるこたアねへわな。夜興さんのめへもあり。どふして唐松さんと。そふいふことをするもんだ。人のくちやアあてにやアならねへよ。ナヤなに。なくことがあるもんだ。何(なん)のこともねへのに。おめへはらをたつだけがむだといふもんだから。マアきげんをなをしな。ドレなゝだをなめてあげよふ〔あや〕エヽおよしなんし(トちからまかせにぐつとつきたおす)〔仁〕たま〳〵きたものを。そんなに振付(ふりつけ)ることたアねへわな。サアこつちらアむいてくんなよ。ソレあんまりなくから。咳(せき)がでらア埒(らつし)もねへ〔あや〕おめへさんがそふいふきに。なん〳〵しちやアしよせんわつちらア。すてられいすもんでおざんすから。よふすハな。このことを内證(ないしやう)へそふ申いして。唐まつさんだとつてたゞハおきいせん。かわいさがあまつて。にくさが百倍(ひやくばい)とやらでおざんすものを。おめへさんも。ふたゝびこけへおいでなんすこたア。できへせんよふにして。おめにかけいすから。そふおもつてお出なんし〔仁〕何のてへそうらしい。それともおめへか。そんなにおもふなら。是から唐松さんたア。ものをもいふめへから。それでよかろふ〔あや〕ナニどふでもわたくしらア。いゝよふにしられいすハ。あたいめへでおざんす。やつぱりから松づらを。可愛(かあい)がつておやんなんし〔仁〕おめへもさゝわ

けいねへもんだつものをいふめへといふに。これほど潔白(けつぱく)なこたアねへよ［あや］ひさしぶりでおいでなんして。あんばへのわりいうへに。こんなに氣をもませなんす。ほんにもふ〳〵。はらがたつて〳〵。いつそかなしくなりいしたア。ト、、、、（ト仁三郎がからだぢうをむしりちらかし。うでへくいつき。しつかりと。はいおとなつける）［仁］いてへわな。おへねへ氣ちげへつらだ。それだから。事をわけていふのに。聞わけのねへ。ひつつこくいぢばると。おらアけへるぜ。エヽいめへましい。けへるべい（トずつとたつをゝがミついて引とめ）［あや］マアおまちなんし［仁］なぜとめるへ（トつよくでられてわつとばかりになきいり〳〵）［あや］はらたちまぎれに。あんなに巾いしたのが。氣にあたりなんしたら。かんにんしておくんなんし［仁］そふいゝなさりやア。これからでも。おめへのかほの。たゝねへよふなこたアしねへからあんじなさんな［あや］そんなら。からまつさんと。ちよつとでものをおつせへすと。きゝいせんにへ［仁］いわねへから。巾なをりにサアひとつわらつてくんねへヨ（トおいらんがかほにあてゝいたふでをとりのけよふとする）［あや］おめへさんこそ。おかしくおもひなんしやうが。わつちやア。わらふほどのうれしいこたアおざんせん。これからおめへさんを。こふしてしまいゝすから。かくごをしてお出なんし［仁］どふしてころす［あや］
［仁］ごふせいに氣のつよい病人(びやうにん)だ［あや］ほんに。あんばへのわりいことも

さつぱりわすれてしまいゝした。かはいゝお醫者さんだよチト

契情の好意ハ。己苦界の身を忘レ其愚痴に歸る㕝甚歟。是色男の因果のつくばひ。惚られぬさきが戀しや。ホウヤレホ。氣違水にうかされて。榮耀に餅の川端を。ぶらつきあるく煩腦の犬骨折て鷹の餌食と。綾衣が深切より。唐松が仇惚の。うハきばなしにおちのくる。客の鼻毛をよゝ殘して。この後篇に書顯し候間。何とぞ御よゝ下さるべしめで度かしく

起承轉合

後篇遊治郎

十偏舍著

全一册出來

日本之通叉粹唐士(ママ)之遊治郎也但

仍青樓曲叉少年俠客行如是命矣

起承轉合跋

古人いふ。詩ハ無形の畫。畫ハ無聲の詩なりと。其無形の畫と。無聲の詩を。やらず遁さず。一座にせしハ戲作一九十篇舍が作にして。李白一斗。詩百篇の才に異なり。遊客韻を押バ。全盛八文字を蹈む。五言絶句の五町農賑ひ。詩を織る錦の夜具ハ。ひとりふす。ことを憐ミ。詩を書し廻し屛風に。密夫と寐んことを望ふ。處〻啼鳥を恨むハ。いつ來さつしやるの鎹にして。夜來風雨を祈るハ。居續をさせんとする腹なりと。彼が爲に貞

賛。昔の七賢が茶屋の二階に。寐言をしるして置ことしかり

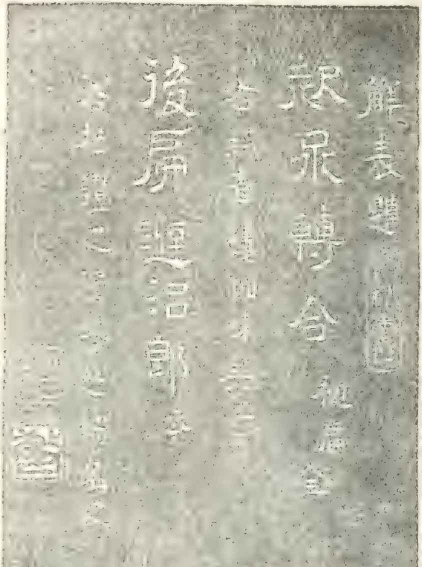
鈍々亭和樽

吉原於客細見記　十偏舍著　合本全一册

青樓大黑舞　同

右來春出板は〻御求御覽可被下候

起承轉合
後篇
滑稽遊治郎
全

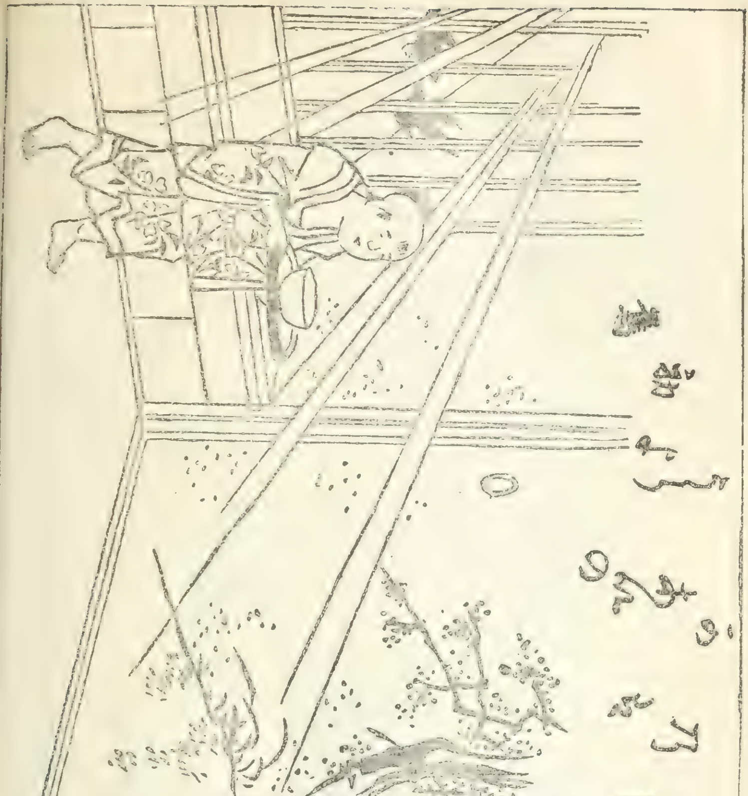


自序

青樓の曲を賦して。先に。起承轉合と。題したる。草子ハ。南鐐一片限なり。予此滑稽の裏約束に。義理と褌をせずして。南一を遣曲し。終に。再會目の座敷に嬉。嗚呼顏の皮の。進疾敷かな。濫たる雛妓を買て。御客と呼べる者と立て。羞ざるものハ。其私なり。是におゐて。紙花の帋を費し。手のある全盛に客を抓せ。新造に兇の天窓を書せて。是に予が恥を書足。則後篇。遊治郎と云。

享和貳壬戌孟陬

十偏舎一九題



總目

第一　金の威光にまかせぬ憂身ハ
義理と情のふたり尭

第二　おつにからむ口舌の新手ハ
虚言と實情のふたつ枕

第三　はづみかへつて引にひかれぬハ
仇と薄情の二筋道

起承轉合後篇遊治郎

發語

かわりました新吉原。五町まち細見記ハ。寶舟と倶に。其聲高く。市中にひゞきて。人ミな初買の夢を結ばんことを願ふ。されバ一夜千兩花廓の活計。富貴浮べる雲と疑ふ。中の町の花の頃ハ。人も見返りの柳ごしをこき交て。吾妻も春のにしきをかざる初道中の優姿にハ。いかな釋迦びいきの。親仁もうかれて。內義法界の理屈をひねられ。孔子めかせし儒者も迷ひて。悋氣應變の。言わけにまごつくべし。旦那寺の佛餉ぶくろハ。和らかにしても。紋日の約束。堅くまもつて行ものあれバ。夫婦喧花に摺鉢を打わりながら。亭主のすりこ木。いよ〳〵ほこり。木の如くなつて。はしるものあり。狐拳の庄屋化されて。鐵砲河岸に夜をあかし。虎けんの和藤內涎をながして。この川竹の藪に遊ぶ。夫朋友に信あつて。蒲燒を振廻れんよりハ。傾城の食言に。爰までござれと。甘酒の馳走をよろこぶ客人おほし。此故に。鳶とんで空に舞ふときハ。油揚の用心し。息子うかれて。青樓に遊ぶときハ。身代の用心すべし。內にハ鯰にひしこをいとハず。米も黑きを。くらふといへども。外にハ鯛の身どこ

ろを捨て。あら煮と洒落。酒ハ山ふぎ（マヽ）の色をくらひ。米ハゐのしゝの牙をかむ。内の律義を中宿に脱すて。放蕩奢侈の衿かずを着かへて。主親の目を品玉の如く。くらますもの。総に放下師の樂屋入風呂敷をかぶる身の上となり。たちまち身代水うみのごとく。すつぽりと穴が明一夜のうちに。借金不二の山とひとしく。によつきりとして。胸につかへん。是に於て目蓮が通力も用なく。宰我が辯舌もやくにたゝず。陶朱倚頓が富といふとも。おたまりハ有べからず。理なるかな。巧言令色をかざる。傾家の商内。しろ物が直に物をいつて客をとる。元是郭情の苦界といへども。長むきハ雲上に近く。身にハ綾羅錦繍をまとひ。月に花に。苦を種として人にあてがひ。其身ハ後生楽にして遊び。横に来てハ。蟹のごとく。指を挟ミ身あがりをしてハ。閨のごとく。恩にかけ。或ハみすやのはりをもち。或ハうぶ毛やの毛抜をもつて。鼻毛をぬく。ふられたる客人をたとへていハゞ。樂屋新ミちに。ゐぼし大紋をきて。さんまの干ものを買うが如く。又もてたるやつを。譬て見れバ。長つぼねのやねふきに。緋のふんどしをして行がごとし。立派な形をして。まづいものをくひ。ほれられんとして。見へをするも。ねから他愛のなきとなり。されど斯ハ言ものゝ。思案の外といふやつにハ。論もへちまも。いさくさなし。嗚呼捨がたき。色のよの中

○第一章

せかいハ大ミせ客ハ 夜興 かわりじま。八丈のしたぎのまゝ。ふとんの上にあぐらをかき。たばこをのんでいる。尤いつゞけのざしきなり。このきやくとしごろハ五十あまり。たいがいなところのだんながぶにてずいぶんそんのいかぬきやく也。しんぞうめをすり〳〵かなだらゐへやくハんのゆをあけて

新唐 こゝもしへ手水をおつかいなんし。袖次ヤア今のものハよ 禿そで次 こけへおきいしたへトないしやうのつゝちやわんに。しなゝいれたのをいだす。しんぞうちやわんのいとぞこへ。このしなゝいれて。火ばちの火を。その上へのせ。やきしほにして。ぼんの上へぼんとあける。きやくハこれにてはなミがき。てうなへから。此うちおいらん。らう下のくちにて 唐松 そで次やア竹花さんとけへ。たばこ入があるから。とつてきや。そふしてのコレサ耳を出しやト何かいゝつけてうちへはいりヲヤもふお目ざめだね。夜 人をバねごかしにして又はじまつたの 唐 なにがへ 夜 それほどあいたかア。こけへよんでやろうか 唐 なんさんすへ 夜 仁三をよんでやろうといふ事よ 唐 ヲヤおめへさんも執念のふけへもんだね。まだそんな事を。おつしやりいす。せんどのこたア。ありやア仁三さんがいつそ酔ひなんして。わたくしが　なんしたのでごさんす。ひよつとかうしているとけへ。おめへさんがお出

なんしちやア。なんとかおもひなんせうし。それに綾絹さんがきつてお出なんすから。はやくあつちらへお出なんしといつても申いしても。なんのかのとつて寐ていなんすから。わたくしアてへ〳〵。くらうした事じやアおざんせん。そふすると あんのじやう。おめへさんがお出なんして。いつそやかましくおつせへしたもんでおざんすから。綾ぎぬさんまでが。どふかわつちがわけでもあるよふに思ひなんして。いつそ腹をたつて。そこら中へいゝふらしなんしたもんでおざんすから。わたくしやアもふ〳〵。あんたはへぶんのわりいこたアおざんせんよ [夜]ソレヤアなるほど下腹に毛のねへきさまのことだから。人にほれらるふうでもねへが。それでも。たゞねかしておくもついへだとおもつて。きさまのほうから。なぐさみかけたに。わたしへハねへよ [唐]かんにんしておくんなんし。わつちらアあんなうハ気な客人ハきらいでおざんす。そしておめへさんのお出なんす前までじやア。唐ことさんが側にゐなんして。何もおもしつてゐなんすト。なんにもしらねふりしんなますここにこつて手つまくいふ。[唐こと]夜具さん。いゝかげんにいゝおゐてあげておくんなんし。その時アおめへさんが。おこりなんしたけつかので。二階中へしれてはんにてへ〳〵。わるくいはれた事じやアおざんせん。あやぎぬさんなんぞア。それからこわへ顔をして。おいらんやわつちらにまで。ものをも言なんせんほどに。腹をおたちなんしたつけ。夜々こうそふつくぜ。のふべもあやぼうとおいらんハ。やつぱりはなしをしているも

のを [唐]ヲヤそりやアそのはづでおざんす。いつたんハ腹をもたちなんしたけれど。こつちにくもりかすこもねへ身分でおざんすものを。それから綾ぎぬさんのほうから。あやまりなんして。段々わけをおつせへすから。それで今までの通つきやつておりいすこたア。此間から。おめへさんにもおはなし申いしたわな。もふ〳〵あのことをいつておくんなんすな。はらがたつて〳〵。くやしくつてなりいせんよト(くちからでしだいに言まぎらかす此いさくさ初へんにくハし) [夜]ナアそのつもりで、茶をひとつくんねへ [こと]おめへさんの。おすきなものが。たんとありいすト(たかいおしのちやたいにて、ちやなさしいだし。にしきでのちいさなふたちやわんを出ス) [夜]ドレ〳〵なんだ。ハヽアしこまきの梅か。おらア又篠原だんごかとおもつた [唐]ヲヤおぶしやれなんすな [夜]ときに流行子ハどふした [こと]けふもお出なんすとさ [夜]煮花ができたから。おあがんなせへと。そふいつてやつてくんな [こと]そふ申いしやうト(かけだして行く此内りうかうが相かた。竹里へやもちなり。八丈のつぎ〳〵なうわつぱなりにして。つまをとり。びやうぶのかげからかほばかりつんだして) [竹里]夜興さん御逗留ざんすね [夜]今そふいつてやつたが流行さんハどふした [竹]今にこけへお出なんすツサ [唐]竹ざとさん。おへるりなんし [竹]ほんにアノね(トきうに思ひだしたよふに。すつとはいつて。耳に口をよせて何かさゝやく。此うち。ふところ手にて)
[流行]コレハ御くらうだね(トらうかをはいている。おとこにまであいさつなしてざしきへはいり) ヲヤ此子

ハひさしいもんだ。又耳ッこすり御用心けふハ廿八日 [夜]こいつハきついこじつけだ [唐]サア又流行さんがはじまつた [夜]にばなハどふだ [流]コリヤア有がてへ。コレ竹里さんおめへも一ッのんで目をさましなせへ。どふか雨水で手水をつかつたといふかほで。今ひといき。はつきりとしねへ目つきだ [竹]そのはづでおざりいす。からまつさん聞ておくんなんし。ゆふべも流行さんがね。いつそけさまで。いぢりとふしなんしたハな [夜]おいらも。いぢりとふされたなかまだ [竹]おめへさんがたアそれがおたのしミざんすが。わたくしらアうまりいせんよ [流]ひとぎゝのいゝことをいふぜ反歯でこそあれ。おいらがよふないゝ男があるものかへ。それだからいつでも。けへしともながるにやア。こまりはてる [竹]ナニ留いすものかお氣のつゑゝ [唐]夜興さんなんざア。いつそ留ておき申たふすけれど。いつでもそけへお出なんすと。もふけへる〳〵とおつしやりいす。どふもおもふやうにやア。ならねへもんでおざんすよ。ノウりうこうさん [流]コウおめへたちに。いゝことをおしへてやらう。何でもとめてへとおもふ客人をとめる仕法と。けへしてへ客人をじきさまけへす藥があるが。コリヤア奇妙頂禮だよ [唐]チヤほんとうにかへ [竹]わつちやア早束（マヽ）ながらおめへさんをおけへし申たふすが。其くすりをおしへておくんなんし [流]けへすこたア造作アねへ。其藥を茶か酒のなかへいれて。其客にのませると。じきにけへる。コリヤアなによ。しゆろほうきの黒燒よ [竹]そんなことであらうとおもいゝ

した 唐客人をとめいすくすりわへ 流こいつハちつくりむつかしい。そのかわりコリヤア又妙だよサアけへろふといゝ出しちやア手拒でもいかねへ客人でも。じきにとめるハ。此くすりのめうでごぜへす 唐言つておきかせなんしな 竹どふいふ藥でおざんすへ 流朝比奈の腕を。くろやきにしたの 夜おきやアがれ 唐竹チホヽヽヽ 竹そふいつても。りうこうさんのむだがおもしろへから。ついよぶ氣になりいす。やつぱり是が。ゑんのふけへので。おざんしやうね 流ナニゑんがふけへのあさへのと。久太夫が一力で小言をいやアしめへし。時に夜興さんもまだおまんま前だらう 夜そふさ 唐いまに。喜助どんがもつてきなんす 流例のあら煮の。ぴりゝといふ所でおちやづりだらう。但御膳蒲どころハどふだ 夜よし原で。ゑどまへ大かばやきでもあるめへ。アリヤアよくあんじやした 竹わたくしやアね。いけすでうなぎのいきておりいすのを見いしたら。きミがわるくて。それからいつそ。きらひになりいしたよ 流嫌ひになつたもすさまじい。おめへたちやア。家のこくしやうか。狸汁に。天狗のしぎやき。狼のころいり。うハばミのかばやき。でも。くひかねもしねへふうをして。おしのつへゝ 竹チヤかんにんしておくんなんし。どふしてそんなものが。たべられいしやう

流くハねへでさ。　　　　　　　　　　。

。なんのこたアねへ山伏のあたまア。まさかりでぶ

つさいたといふもんだ。ハヽヽヽ　竹いゝかげんに。おしやべりなんし　流そんなら口やすめに飯(めし)にしよふか　夜コレ爰(こゝ)で。いつしよにやらかしねへ　流イヤわつちらアふたぢやわんに。もりつけたやつがうめへの　竹まだおしやべりなんすよ。サアお出なんし（トさきへたつ。うしろすがたへゆびをさして）流おいらん見ねへ。いゝふうだのふ帯(おび)ときひろげのうしろすがたア。りう〳〵のこもそうといふもんだ。そしてアノ勝山(かつやま)ハなんだ。とほうもねへ。頼朝(よりとも)さまのしやれかうべを見るよふだ。ハヽヽ先(まづ)いつて參(めへり)やせう

○第二章

客仁三郎　いつゞけのつもりにて。ぐつすりとねすごし。やう〳〵と目がさめておいらんをつゝきおこす。

あや絹　このおいらん。やミあがりにて。いつからうたハいなくねている。あらひがミをたばねたといふすこびんのばらつきがミ。大たぶさのかつ山。よこちよのほうへ。つんまげてねている。仁三郎ミゝを引はなをつまんで

仁コウおいらん。いつまでねるのだ　あやアレサおよしなんし　仁もふ晝(ひる)だ。サアおきた〳〵（トゆすりおこされてかほを上げしが又うつむきになつてねむる）　仁あきれけへるハト（此内しんぞう。ミち

のく。火入に火を入てくるかた手に。ちいさなどんぶりに。やきたまごのほや〳〵といきのでるやつをいれて。そでのうへにのせ）〔道〕モシへおいらんで唐まつさんのとこから。是ハおすくのふおざりいすが。仁三さんに。これでおまんまをおあげなさりいしッサ〔あや〕なんだへ（トやう〳〵ほそく目をあきて。下におちてあつたかんざしにて。つぶりをかき）〔あや〕そけへおきなんし。そして唐まつさんに。おありがたうおざりいすと。そふおつせへし〔仁〕こいつハいゝものだ。おいらんでへぶ。唐まつさんと。おむつまじくなつたの〔あや〕ナニサゆふべもおはなし申いしたとをり。せんどのこたア。いつそあやまりなんして。おつせへすにやア。兄弟のよふにしている。おめへさんの客人と。わつちが色事でもしたといわれちやア。どふも内證の手めへもすみいせん。それに夜興さんと。仁三さんたア御一所にお出なんす。客人のことなり。ほんのこゝろやすだてゞ。ついふたりして。ねころんでおりいしたものを。何もわけやいのある事じやアおざんせん。それに夜興さんが。やかましくいゝなんしたばつかりで。おめへさんの耳へも。へゝりいしたもんでざんすから。はらアおたちなんしたア。むりじやアおざんせんが。天道さまかけて。ほんにわけのあることじやアおざんせんから。どふぞコリヤア。是ざりにして。今までのとをりに。こゝろやすくしておくんなんし。おめへさんがものをもいつて。おくんなんせんと。いよ〳〵仁三さんと。わけでもあつたよふに。夜興さんに。おもわれいすがうまり

いせん。おめへさんたァ是まで。たけへに何もかも。打あかして。相談もしやつた中じやァおざんせんかへ。たとへわつちがどれ程仁三さんに。ほれておりいしたとつて。義理にも。そんなことが。できいすもんじやァおざんせん。どうぞうたがひをはらしておくんなんし。どんなせいもんでもいたしいすと。ほんに涙アこぼしなんせんばかりに。おつせへすから。わたくしも。ミす〳〵なことを。いゝなんすたァおもいゝしたが。まさかそふいつて。あやまりなんすものを。こゝろづよくもいわれいせんゆへ。それでりやうけんをしてあけいしたハな。それからもふ。いつそうれしがりなんして。わつちが事といふと。身にひきうけて。せハをしておくんなんすから。今じやァまんざらにもおもいゝせん。それだとつて。人にこゝろをゆるさせておきなんして。どんなことをしなんすやら。そかアどふも。しれいせんが。なんでもおめへさんさへ。相手におなりなんせんけりやア。よふおざんすから。どふぞ後生でおざりいす。かならずうハきなことをして。おくんなんすなへ【仁】ソリヤアあたまからせうちだよ。ナニおめへのよふなものをうつちやつて。外の人と。そんなことをしてつまるものか【あや】それでもせんどハ。もふからまつさんたア。ものをもいふめへとおつしやりいしたが。ゆふべもやつはり。夜興さんのうしろのほうから。なにかはなしてわらいなんしたァなんざんすへ。【仁】アリヤア夜興さんが。今宵すぐにけへるといつてゐるから。とも〳〵とめてくれろといふたのミよ。ま

んざらあつちから。ものをいゝかけるものを。ふくれけへつて。だまつてもいられねへハな［あや］そればかりじやァおざんせん。から松さんが廊下にまつてゐなんして。おめへさんと。みゝつこすりをしなんしたハ。アリヤァなんでおざんす［仁］あれハ藤四郎がつぶりのわけが。はじけてゐるから見ろとつてさ［あや］チヤばからしい。ほんにおめへさんにやァ。ほれてがおゝいから。てへ〳〵わつちが。心づかひじやァおざんせんよ［仁］ナニばかァいふ［あや］それに又。女といふと。こんなかハいらしいめつきをして見せなんすから。だれでもまよいゝすわな。わつちがねげへにやァ。おめへさんにもふいちど。おもへほうそうでもさせたうざんす［仁］とんだことをいふ。此うへにあばたにでもなつちやアつまらねへ［あや］それがよふざんす。ふためとも見られねへよふな。ふけいきなおとこにしたうざんすよ。そふなん〳〵すと。外にほれる人がおざんせんから。わつちひとりで。じゆうにしてたのしミいす［仁］いゝことをいふぜ。いちばんがけにつきだすがきいてあされる［あや］ナニそんなことをいたしいすものか。なぜこんなにおもふやら〳〵おめへさん。もふおかミさんをおよびなんしやうね［仁］そふさ。もふきまつてゐやす［あや］ほんにかへ。おたのしミざんす。おめへさんのおかミさんになるおかたハ。さだめてうれしくおもつてお出なんせう。いつそ見てへよ［仁］ずいぶんミせよふコレ。こゝにいる女よト（はなをつまゝれておいらんにつこりとわらひ）［あや］お

なぶりなんすな。そんなに人をうれしがらせなんして。ほんにおめへさんハ。女ころしでおざりいすよ

【仁】なんぼおめへが。そふちやにしてかゝても。こつちやア是非女房にしねへけりやアならねへから。そふおもつてくんなせへト（まくらもとの、きせるづゝをとつて。おいらんのひたいへあて。まゆ毛をかくして）よふくにやうぞ。妙〳〵【あや】ドレまつておくんなんし（トいつさんにはねおきて。きやうだいのかゞミをもつてきたり）【あや】ばからしいのふ（トわらひながらうつしている。仁三郎うしろよりもたれてともに。かゞミへかほをうつし）【仁】ソレそふすると。猶うつくしい【あや】もしほんとうに。どふぞおめへさんいとけへいつて。はやくこうして見たうすねへ【仁】やがておいらが内へつれて行と。よるもひるも。くつついてるて。はなしやアしねへ【あや】モシおめへさんも。こうして見なんし（トかゞみをさしつけ、た仁三郎がひたいへあてがい）チヤおめへさんも。よくおにやいなんすよ【仁】にやつたとつて。男が眉毛をおとす物か【あや】それでもおめへさんを。女にすると。ほんに人だねがつきいす【仁】おめへがまた。おとこだととんだ。よくねがふへやせう【あや】にくらしいのふ

○（此内ちややのおとこ）茶男 御めんなさいませ【仁】だれだへへらつし【男】どなたかあなたへ。おめにかゝいてへとつて。お出なされました【仁】はての。どのよふな人だの【男】ハイおひとりハ。四十ぐらいの色のしろへおかた。おつれハ。まんざらお供ともミへませぬが。なんでも鼻の少しまがつたよふな。そし

てひたいに。此くらへな瘤のあるおぢいさま 仁チツトよし〳〵。そふしてそつちにか 男すぐにいかふとつて。こけへお供いたしました 仁そんならこちらへ 男ハイ（ト出て行。やがてふたりづれにて。ざしきへはいる。一人は此仁三郎としんるいにて。中ぐらゐの所のだんな平兵へ。一人ハでいりのさかなやのおやぢ十吉） 平兵へハイおゆるしなせへ 仁どなたかとおもつたに。是ハ（トふとんより。おりてかしこまる） あやこつちらへおいでなんしト（はづして出て行） 十吉若旦那。おむけへにめへりやした。きのふからおふくろさまがお積氣で。それに大だんなさまが。田舍からおけへりなすつて。あなたをたづねてござるに。何がおふくろさまおひとりで。お心づけへをなさるがおいとしさに。そこでこの下谷の旦那がござつたをさいわひ。御相談申て。こことおむけへといふ。趣向でござりますト（ひごろから。おかげをかうむるゆへつよくもいわずしやれていふ） 平インニャヨ仁三公とハ。おなじ穴の狐だと。にらまれているおいらだけで。爰じやア一ばん。つれてけへらねへけりやアすまねへところよ。時に貴公も遊びハいゝが。逗留ハよしたがいゝによ。さりとハまだ。わけへ〳〵 仁わたくしも夕方ハ。かへらうとぞんじておりました 十すぐにおともいたしませう 仁せつかく平兵へさまが。お出なすつて下さつたものだから。先ちよびと。一ツあけませう 平イヤそれハ御めんだ 仁それでもちよつと（ト手をたゝくしんぞうらうかにて） しんわつちがそふ申いせう 平イヤ時に手間どつてハわりい 仁

ナニじきさ [平]アノ今こゝから。出ていつたのが相方か。とんだうつくしいの [十]あれを見ちやア。御むりでハございませぬが。しかし女郎といふものハト（いふところへひよつくりとおいらんがきたるト）イヤおもしろへもので旦那がたのおゝのうへじやア御尤千萬さハヽヽヽ（此内さけさかないろ〳〵出るおいらん仁三郎のわきへすわりて） [あや]ひとつおあがんなんし [平]コレハ御ちそうだ。ヲトヽヽヽヽ。サア十吉どん。さそふ酒といふと。きさまハ目のない男だ [十]イヤきさまに目がなかおかしかろ（トふるいしやれないふ） [平]サアおむけへが。しやれてきちやアむつかしい [十]まづいたゞき山。ヲトヽヽヽヽ此子ハつよいお酌で有がてへ。時にわかだんな。はゞかりながら [仁]おさへ〳〵 [十]下谷の旦那おあいを [平]いたゞきやせうト（此内いろ〳〵あつてふたりながらなるくちゆへだん〳〵よいがまハりざしきがおもしろくなり） [平]コウおいらん。おめへがあんまり。かわへがりよふがひどへから。仁三公がいつまでも。いたがるにハこまりはてる [あや]ナニぬしハ。外にかわへがりなんす。おかたがあんなんすからさ [平]外にある。そりやアわりいの [仁]ナニうそさ [十]時におさかづきハ [平]どこだとむせうに。さがすやつさ。ソレさそふ [十]イヤおさへ [平]いつけんいかふサンナ [十]ムメテ（ヲヤ） [平]トウライロマ〳〵なんと。十公どふだ [十]イヤもふ閉口ハ。ひだり〳〵 [平]なか〳〵親仁しやれるわへ [十]わたくしも。むかしおもへハ信田のきつね [平]化あらハして。いつこんくまうか [十]脊をれさすハハヽ

ヽヽヽ〔臣〕ハヽヽヽヽ〔仁〕時に平兵へさま。そろ〳〵とけへる支度にいたしやせうか〔平〕ナニまだは
やい。ノゥ十公〔十〕さやう〳〵、そして若旦那夕方けへると。おつしやつたじやァござりませぬか。昼
日中どふして。出ていかれるもので。コリヤアおめへさんのよふにもない〔仁〕それでも母が。あんば
へいわりいうへに。あんじてゐやうから〔平〕うつちやつておきねへ。おふくろハどこもわるくハなし
さ。ミなうそ〳〵〔仁〕そんなら。おやぢがいなかから。けへつたといふも〔十〕うそ〳〵。そふいわねへ
けりやァ。おけへりなさるめへと。コリヤアミんな。おふくろさまの御ちうもんさ。時に平兵へさま
に。御相談がある。若旦那も。なごりの愁歎といふところが。ちよびとありやせうが。わたくし共も。
是なりじやァ。すまねへよふなあんばいしきだ〔平〕もちろん〳〵。爰ハ仁三公の胸中にありそふなこ
とだ。ノゥおいらん。ト(むちうになつて仁三郎もおかしさをかくし)〔仁〕そんならちよつと。おいらんだ
れにしよふ〔あや〕しげ里さんになさりいし〔平〕まんと手のある。おいらんがいゝによ〔仁〕コリそこで次
わけへしゆをよんできや〔禿〕ア引(ト立て行とわかいものきたる。仁三郎さしづをして。なにかないゝつけ
る　わかいものせうちして出て行、間もなくきたりて、平兵へに向ひ)〔若者〕あなた。ちとあちらへ。いらつ
しやりませ〔平〕チイどけへ〔あや〕おめへさんのおざしきハ。あつちらでおざんす〔平〕チットよし〳〵
(トよろ〳〵してたつ)〔仁〕十公もいかつし〔十〕ハイ〳〵イヤ肝心のものをわすれた。爰に。おふくろ

さまからの。おふミが トいふところへいたして仁三郎へわたし。ミな〳〵つれだちて出てゆく〕［あや］そで次やア。こんなものをミなしけごとさんのとけへ。もつていきやツレしつかにしやな［禿］アイ引ト(ただん〳〵にこぶ、此うち仁三郎おふくろのふミをくりかへし少しふさぎていゐ也）［あや］おめへさん、どふなんした［仁］どふもしねへ［あや］それでも。おふくろさんのおふミを見なんしてから。いつそおふさぎなんす［仁］ナアニ(トいつた斗でたばこをのミながらやつぱりふつぷく）［あや］なんぞ。おこゝろづけへのことでもできいしたかへ［仁］ナニそりやアいゝがの。おめへにひとつ。あやまり入る事がある［あや］なんざんすへ［仁］ナニ何でもねへことよ。おめへにきたなしに。唐まつさんを、たのんだことがあるから。そこで。あやまつておくのさ［あや］何をおたのミなんした［仁］コリヤアちと面目次第もねへ ことだが。ちつと斗都合のわりいことがあつて。夜きやうさんに頼んだ理屈がありやす。それもまさか直にも聞にくいから。唐まつさんに其返事を聞て。もらをふとおもつてさ［あや］チヤおめへさんも、そんどのことが。なけりやアよふおざんすが。そんなことを唐松さんの客人にお頼なんして。私が顔ハどこでたちいすへ。ソリヤアどふせ私らアはたらきのねへ女郎でざんすから。おミくびりなんして。そんなことをも相談して、おくんなんせんこたア。むりたアおもいゝせんが。そふしたものでもおざんせん。そしてソリヤアどのくらへな事ざんす［仁］ぜんてへかういふわけよ。おやぢが田舎へいつ

た留守に。五十兩斗。つかへこんだから。其穴を。うめておかにやアならねへわけやいさ。おふくろの所から。來た文も。そのことをいつてよこしたのさ。それもけへりがけに藏前で。三十兩ばかりハ。つがうするあてがあるから。わづか二十兩。夜けうさんに。かりるつもりでそふいつておいたのさ。おめへにはなした所が。そんなことを。夜けうさんにいつちやア。唐まつさんの手めへも。げへぶんがわりいと。いふこたアしれてあるし。といつて又。おめへがたに。つがうしてもらうよふなはかねへおいらでもねへわな。それに。唐まつさんのこたア。いつでもおいらが。夜興さんに。そふいつてやつて。つがうしてやつたこたアいくらもあるし。又地腹をきつて。かしてやつたこともあるもんだから。たま／＼こつちがたのんだとつて。おんにきるりくつもなし。コリヤアおめへハ。しらねへぶんでいてくんねへ。それじやアかほの。たゝねへこともあるめへによ〔あや〕それだとつて。おめへさんも。あんまりでおざりいす。そのくらへのことなら。錦水さんのとけへ。そふいつてやりいしても。どふともなりいすものを。げへぶんのわりい。それだから。アノ女郎しゆが。人の客人と色事をしながら。大きな顔をしいすハな〔仁〕それだとつて。もふあとのまつりだから仕かたがねへ〔あや〕ことハりをおつせへしな。わつちがほうで。どふともいたしいしやう〔仁〕ナニ是が。あすでもいゝと。いふことだと。どけへいふにもおよバねへが。けふ持てけへらにやアならねへからの事よ。

それといふもきのふ。夜けうさんが。いせ屋へあづけて置たかねもあるから。それでたのんだといふわけやいさ〔あや〕どふぞも。かつてにしなんし〔仁〕ドレかつてにしやせうト（おいらフンとわきのほうへふりむいてすねる）〔仁〕かハへそふに。また。はらをたゝせた〔あや〕エヽおよしなんしトうしろをむく。しんぞうあハたゞしく。かけてはいりミゝにくちをよせて何かさゝやく）〔あや〕じれつてへのふ〔仁〕コウなんだ〳〵〔新はつ瀬〕なんでもおざんせん〔仁〕客人でもきたのか〔あや〕アイ錦木さんがきなんしたがどふしいした（きん木といふハ。此おいらんのいろきやく也。此内からことさたりて）〔しんからこと〕アノヲ夜けうさんがおつしやりいす。仁三さんにおめにかゝりたふすから。どふぞ来ておくんなんしツサ〔仁〕貝今めへりやせうと。そふいつてくんなト立あがつて帯をしなおす。此内からことハおけにして行〔あや〕おめへさんも。からきつさんのとけへお出なんすから。私も。きん水さんのとけへ。めへりいせう〔仁〕ヲヽどふとも。いきてへところへ。かつてに。うしやアがれへ〔あや〕かまいなんすな〔仁〕ドレおいらもいかふト（すつとたつて出て行。あやぎぬも。心ハあとにのこれども。たがいにびんしやんして。それよりきんすいのむかいに。したく在して。しんぞうひとりに。何かのことをいゝふくめてあとにのこし。そのミハなかのてうの。ふじ田やへ出てゆく）

○第三章

（いづれのざしきにやげいしや）〔ウタ〕かわいおとこにあふさかの。關より。つらい世のならい。おもはぬ人に。せきとめられて。今ハのざはのひとつ水（すでにその日もくれかゝりてからまつがざしきにハ。丸あんどう火もうすぐらく。ほんまにびやうぶを引まハし。ひつそりしたるハ折よしと。しのびあしにてそつとはいり）〔仁〕唐まつさん。そこにか〔唐〕仁三さんかへ。サアこけへお出なんし〔仁〕夜けうさんハ〔唐〕今流行(はやり)さんと。いけすへいきなんした。おめへさんも。さそつて行ふと。おつせへしたが。ナニ仁三さんハ。あやぎぬさんが。はなしなんせんから。お出なんすこつちやアおざんせんと。わざとそふ申いして。どふやらこうやら。今おひだしてしまいゝした〔仁〕コウ夜けうさんが。あいてへといつて。よこした所ハ。めうだそしてつ、いゝおつよ。アノ錦水(きんすい)とやらが來(き)て綾(あや)ぎぬハ。中の丁へいくと。さハいでいたつけ。マアなんでも。うまくいつはいくらハせた〔唐〕それでもかわへそふだねへ〔仁〕おいらが金(かね)のいることがあるとつて。おめへをたのんで。夜けうさんに。ぶつつかろふといふ狂言(けうげん)ハ。理(り)づめで。くハにやアならねへところよ〔唐〕ほんに。おめへさんと。こんなことをいゝやわしたこたア。夢(ゆめ)にもおしんなんすめへ。おもへバどふも。かハへそふだよ〔仁〕たとへもふ。しつたとつてどふするもん

だ。かうとしまに。はまりこんじやア往生だ 〔唐〕チヤおめへさんも。よくあハせるもんだね。そふいつても。あやぎぬさんにやア。
わつちらにやア大方かちッぽにしてゝ。おくんなんすだろふと。おもいゝしたから。それで。けさのものを。たんとあげいしたがさだめし。おめへさんおあがんなんしたろふから。わつちにもッそれだけの。御へんれいハありそふなもんだね 〔仁〕おめへもよくの深い。夜興さんが。
おきやアしめへし 〔唐〕ナニ夜興さんじやア。身になりいせん。おめへさんでなくつちやア。唐松さんのお氣にやアいりいせんよ。
〔仁〕コウまづ一ぷく。のませてくんねへ 〔唐〕チヤおめへさん。こけへたばこを。あがりにお出なんしたかへ。あがりたかアあつちへいつてから。いくらでも。おあがんなんし。じれつてへ男だのふト（きせるをひつたくりボイとほふる） 〔仁〕チヤ氣のあらへおんなだ 〔唐〕ちつとあらへから。そふ思つてお出なんし。兄弟のよふにいたしいす。ほうばへしうの。客人に。ほれいすくらへの。義理しらずでおざんすものを。おめへさんのお心次第で。鬼にも佛にも、なりいすによ 〔仁〕なる程恐しく手のある女郎衆だ 〔唐〕ナニ手がありいすくらへなら。しんじつ人にほれいすよふなこたアいたしいせん。こう又申いしたとつて。おめへさんがほれきつてお出なんす。綾絹さんを。されておくんなんしの。なんのと。むりなことを申いすよふな。わたくしでも

おざんせんから。マアなんでも。見すてゝさへ。おくんなんせんけりや。よふおざんす。そのかハり。こう申いしたらおきにさハりなんしやうが。たとへおめへさんが。どんな身になんノ＼しても、わつちがなるたきやア。たとへ命(いのち)にかへても。あやぎぬさんに。あいなんすよふにやァしてあげいすから。そふおもつておくんなんし [仁] チヤごうぎに。てへへいをいふぜ。そんなに又。あやぎぬが事を。とりもつてもらわずともいゝわな。なんだかおめへのいふとも。わからねへぞ [唐] なるほど。わかりいすめへ。わたくしやアおめへさんに。ふけいおねげへがおざんすが。マアめつたにやァ申いせん。コリヤアおめへさんの。お心いきをも見ぬいた上じやア。それこそわつちもしつかりときめへせんけりやア。ならねへことがおざりいす [仁] ソリヤアなんのこつた [唐] なんでも。今ハ申いせん。でへじの事でおざりいす [仁] そんならマア。はなしハあとの事にしよふか [唐] ナニまだ。めつたにかへりなんす。ことじやアおざんせんから。マアゆるりつと。こうしてゐて。わつちにたのしましておくんなんし。アノもしへ。

アノね。いつそもふ。

なぜだね [仁] なぜたア何がよ [唐] アノなんだかもふ。いふにもいわれいせん。もふノ＼。あんなに。うれしくおもいゝしたこたア。おざんせんよ [仁] 何をいふか。ねつからわからねへ [唐] わからざアよふおざんす。どふせあや絹さんでなくつちやァ。わかりいめへ。じれつてへのふトへ

。折ふしとなりざしきにうた）[道成寺]ふつつりりんきせまいぞと。たしなんで見ても。なさけなや。このまあ。おなごにハなにがなる（あやさぬハこゝろならず。中の丁よりさきへかへり。からまつがざしきへよふす。がてんゆかずとうかゞひより）[あや]さてハ。夜興さんに金のことを。いゝなんしたといふも。からまつさんに心よく。あいなんす。ためのいつわり言[ウタ]とのご〳〵の氣がしれぬ。あくしよな〳〵きがしれぬ[あや]ざしきへふんごミ。ふたり共。チヽそふじや。イヤ〳〵〳〵。なんぼつれない男でも。ほれたがいんぐハ。にくいとおもふ次ハひとつ。コリヤこうせずバなりいすめへ[作者]（カタ〳〵〳〵〳〵カタリ〳〵）あや絹さん。まつた〳〵。おめへのはらたちやアもつともだが。こゝでぞんぶんにして。くんなさると。此ほんがとほうもなく長くなる。マアこゝハ後篇まであつかりやした。又唐松さんが。今ハいわれぬふけへのぞミといふことも。是も後篇何もかも。わつちが胸に有馬山。いなといハさぬ。趣向ハさま〴〵。マアそれまでハ。しつかりと。ヘヽあつかりましたチヤチヤン

遊治郎
續後編 青樓色唐紙

魂膽胡蝶枕

自序

有田不耕倉廩虚し有書不教子孫愚なりといへるがごとく。世に教禮書多しと雖。不學故に愚なり。何ぞ博學秀才にして其味を得たるハ。賢人聖人とも稱すべし。得たると雖ども。酒を納たるにあらず。又青樓といへども。餅を賣たるにあらず。蒸より甘き狐狸窟の華麗。春ハ居ながら吉野山の娯ミ。亦燈ろうや妓舞の狂言。再の月は李白が瀑の詠より過り。邯たむの夢ハ雙枕橋にて廓輿の中に覩る。是午睡中の浮世に胡蝶の樂み。寢言かインニヤ。夢かインニヤ。魂膽胡蝶枕と云々

享和二（コノ下ニ梲二ツアリ。略ス）の

とし

著〻樂齋

廣長識

魂膽胡蝶枕

目錄

第一
つぼミのなれそめ
第二
勘當の身のうへ
第三
通りものゝこゝろゐき
第四
初會のこむたん
第五
傾城の意氣はり

魂膽胡蝶枕

第一

孔子といへる通人の敎に曰君子ハ言に訥して行に敏からんことを欲すとは夫傾城買に示すの言葉ならずや廓中におゐてこと葉數おゝき貴にあらずたゞ願くハ其穿をしつてあなをいはずの言におそく諸事のしうちに威あつて猛からざるの行に敏らんにハ鼻毛にひかれる己惚鏡も西の海へさらりつと一夜明たる春狂言虎少將の手くだ幕カチカチ〳〵〳〵へと明ぼのゝのうれんに茶店ありて朝よりぐんじゆの浅草でらゆきゝにぬるゝ道しばやその名もあだなおまちとて容顔美麗のありさまハひな鳥小町とうたがはる替住居も水茶やのむかしハ公家の息女にて悪黨どもにかどわされこゝへおくのもおふせやの源五郎とて夫婦のわる者かのお町を玉にして日ごとに繁昌添る日もまた遠からぬ御馬やがしとおるかまへハ三千石なしるよしせる人の若殿なるが親御の病氣祈願とて心ハ深くまふでける浅草寺の觀世音其名もともに浅二郎日ごと詣の其姿源氏の君か業平と誰いはねどもみしりごし互に見合す顔と顔結ぶの神の引合すよきあふ瀬もと逢瀬やのしやうぎにしばし打やすらふ供侍の）　［茂介］若殿さまきついものでござります　［浅二郎］身もとくより日に付ていたがど

ふもこゝへ休まふともいひかねたはの　［茂介］是ハ〳〵嘸さやうござりましやうそのお心を存ますとま
た〳〵御参詣がお樂になりますと（ハ腰かけのそば手をつきてひそむる聲も聞おまちまだ里なれぬ都鳥おぼこ
姿のうすざくら茶やにハすめどあいそふもいはぬ色なるおミなへし淺二郎もいまハ日ゝの詣も樂しミに往も來も
目と目の情ふかくおまちも此やうなよきとのごにあまへたらバうれしかろとおもはゆげに茶もつ手さきや爪は
づれ顔をおゝいしそのふぜいさすがゆかしき愛けうもこぼれ櫻の色香さへそれぞともれて人目にハ心ありげの互
の手くだまだ初戀のいひかれて心深草参詣ハ淺草ならぬ親の願心の願も猶まさり時雨のあすのいとひなく参詣お
こたりなかりけるにおまちハこゝろ一ツにとつおいつ流石ハ公家のながれとて一首の戀歌とやこふとかく玉章も
人目せく侍茂介を取持とたのむ戀路のならひにハもといくらしに引かへて茶屋の内い樂も淺二郎見染てよりハ
やう〳〵に故郷の住居忘れ草涙も今ハ淺二郎と互に思ひ思われつ文のかよひハせしとかや扨源五郎が妻のおたに
いかぬこんじやうにて二人の文の使りせしなつゐにけどり）　［お谷］してやつたりまゝ是ハ金もふけのせん
ざなりト　ゝ心にうなづき夫よりハ淺二郎におひそよく跡をつけて行し所に三千石い上なれども工面のよきやしき
にて門構へ格別りつぱに見へければおたにハ夫に此よし告てゆすらんと心にゑミの一もつもしらん顔にてすぎ送
る日數立ども淺二郎文い使りにしミ〳〵の噺もならぬ世のうきを父も茂介にそうだんしつれこひといはせ（ずカ）ずに
すいときどり殿のほうへしれぬやうとて物見をそふじして）　［茂介］若殿さまつれて參りましやう一寸とお

文をおかき遊しませ共内したくを致しますト（部やに行けれバ淺二郎もこの事〳〵を合がてにぬらゝ間もなき親がゝりその身も自いうにならざればぜひもなまめくなが文を伝にまかせてかきおわりまつ間ほどなく）茂介出来ましたか　淺二郎サアそんなら頼むと文をやり（侍ハつらいといふ事を身にしみ〴〵とおぼへある物見の格子を疊ざん四つ過迄まちいたり都合と首尾の手くだにてやう〳〵とつれ来り心のせくまゝ今日迄のやりとりのふミ取おとし置ミ人ハ帯になるよりハさし當る二人ハうれしさつきやらぬつもり〳〵し不二の山雪とき〳〵ゆく茂介がはたらきかつらぎや神や佛とふたりの悦びあげてうつすに暇あらず）おまち此やうなうれしい事ハないはなト（淺二郎が膝によりそへば）淺二郎ソナサ茂介が世話ゆへさそしてさもじハ茶や夫婦ハ親でないといやるがしんじつかト（いわれておまちはづかしそふにふたへまぶちに涙もち）おまちアイわつちも今ハ茶や女言葉もこのやうにしこまれても生れし所ハほんに今いつては嘘らしいが公家の娘でござんした吉野山へ花見に行しおりからにアノ夫婦とそしてまだしらぬすかぬにくてらしい人ゝがつれ行て夫から段〳〵此土地へ参りましたサ共時の心持ハあるにもあられずないてのミ暮しました嘸おふたりさんもハトいふより跡ハ涙にて聲もゑたてずしのびなき淺二郎ももらひ涙に愁を催ししばしことばもたへけれど猶も思の増見山峯よりたかく咲花を手活の枝と樺櫻つがひはなれぬおし鳥の思ひ羽かわすよき中と互のこゝろ深かりき又茶店にておたにハやしきのやうす文の便りありしと我自慢又源五郎へ咄してはたらきぶりに

やつてのけれバ）〔源五郎〕ムヽソリヤアよくしたと（大きによろこび一趣向せんといふも祝儀に酒にせうとお定りいびんぼう德利茶碗さけぐひ香のすい宿にしてよろこびいさミし夜も明れバ）〔源〕かゝアあまハどふした〔おたに〕ホンニどこへいつたかにくひ手だの歸つたらまた一トこゞといはすバなるまひト（はや晝にもなり色ゝ近所杯尋るにぬからぬおたに心附て彼娘のくし箱かれこれ見れば淺二郎よりの文殘らず大事そふにいく重かつゝミおきけるを見て扨こそとひらき見れば件の事長〳〵と認あり源五郎ハ大きによろこびこれさへあれバこつちの物よき手段ありとうなづきてしばし時をうつし）〔源〕コレかゝアあいつをとふに女郎にぶちこくつてしまつたらこんな事ハあるめへが〔おたに〕ハテコレモ金もふけのせんぎだわな〔源〕まてよあいつが十七だといゝおつたが十六とつもつてぜげんにかけた所がよくつて百兩そこを一ツぱひにさへすればまんざらでもねへハ〔おたに〕ソチサなんでも金にさへすりやアマアもと〳〵といふものさあんまり骨折損も立やすめへト（料だんきわめ源五郎ハしたくしてやしきへこそハ出てゆく）

第　二

思ふとかなはねばこそ浮世とハ欲に目のなき源五郎屋敷に行より內玄關あないをこひ用人朔太夫に對面して〔源〕ヘイ私ハ外の義でもござりやせぬ高くハ申されやせぬことでござりやすがマアとつくりと

お聞なせへやしこゝの若旦那さま若殿さまへイ淺二郎様の事でござへすてわしが所のあまをつれてへ
イ申上げにくふござりやすが昨ばんつれておにげなせへしたわしやァかふいふ内氣なものでござへす
からタベからどふぞふかとさがしても見へハせずかゝアとふたりで漸〳〵此文を見つけて少しハ涙も
ほんにお噺申もかなしうござりやした ト（目をこすり〳〵うす涙をこぼしはなをすゝりながら段〳〵とうそ
一万をいひその上にて源五郎ハ彼是(かれこれ)といふハわしやァきらひでござりやす何サおめへ若いどふしやア若
あるならひの世上でござへすソコデこふ致やしやう何がなしにハイ五百両おくれなせへそふすりやア
あまらあげて手をうつて仕舞(しまい)やすほんに安ひものでござりやすどふぞ御前宜(よろしく)と（ひらあやまりに下か
ら出かけいひけるハ心のたくみぞにくらしき助太夫ハ始終を聞大殿にしれるならハ大事となるハ必定と了簡定そ
れよりひそかに若とのに此よしをつげければぎやうてんのていにてたゞもじ〳〵として居給ひ何のへんじもなけ
れバ扱ハかれが申に相違もないか了簡して金子貳十両包ミ又かの源五郎にむかおて）〔助太夫〕コレ源五郎と
やらなる程手前の申通相違もなきよし（といゝ出せバ源五郎ハしてやつたりとゑミを含ミ猶も畳に頭をつけ）
〔源〕へイ〳〵左様でござりやすなにうそらしい事を申やしやう　〔助〕さるによつて手前もしんびやうに
いふこと故何事も取てのけ是ハ少分ながら手前におれが遣すから持て帰てくりやれ又娘の所ハ追て勘
辨もあろう事故此方より沙汰に及ばん ト（彼包を取出せば源五郎ハあんに違い小包と見るよりおかしな顔を

してかの包を見れバ貳拾両と認めあり源五郎ハミるより顔色をかへいとゞ大きなる目をむき出し）〔源〕コリヤア嗤しもならねへ人をくそにしたコヲそんな事ハホッたまりのねへとこへおきにしろなんだ貳拾両へハンあつかましいおひほれだおれがいふ事ヲ耳の穴を杖でほじつてよくきゝやアがれコフがきヲなただてるハあまへすじやアねへよそこをあのくわヱをだてた所をうまくぬすまれて其貳拾両かぼたくしいおらハ今迄子供をうつた事ハねへよ安賣の引札じやアあるめへしそんな源五郎様じやアねへこつちやァお慈悲ぶかくいつてやればいゝかと思つてつけ上りのしたふてへやつだ其くれヱなら女郎にふおこくつてしまふはへいゝかげんに馬鹿ぬかせ金を出せつんぼうやいくやしいか腹が立かそれやアこつちの事だハうまひ仕事をやりやアがつたな金がいやならいゝハ此文をもつて行バ取る所で取てミせるハナ知れたこゝの屋敷じやア人の娘をやすくかひこんで高く女郎に賣やアがるがおらア二本さして武士だと思つたらせけんの上おへと、かおれまりやア又上手だ外の者ハ其手でいかふが源様ハそふハおつと手ごたへがするわへうでのくりからがてん上しても一ばん相手だぜへ（のなにのといはれぬ悪口雜言助太夫もはぎしりし既に刀の柄に手をかけんとせしがいやいやこゝハ大事の所とかんにんして早々奥へ入けるヲ大殿へもしれやしき中ハ大騒動をなせり夫より今一人の用人角右衛門を殿の前に召し少しもはやく何事なくおさへるやうに取扱ふべし長居をして（あカ）かの通りなれば其ぶんにならずさすれば家の騒動となるハ目前入用にかま

すといへばひに欲せと仰ければ角右衛門ハ承知の御請申て又候ふすまをあけ源五郎にあへバ其ときのなりハは
ちまき大はだぬぎ大あぐらにてゐたり）【角右ヱ門】扨手前が源五郎か段々申條尤なりさるによつて金子百
兩遣すから是にていぎなくかへるべしト（いゝけるにしらぬ顔して大あくびなどしていたり角右衛門ハ又仕
損じてハとおもひ又百兩いだし都合貳百兩出し又々いぜんの通りいひければ）【源五郎】なんだ貳百兩ウゝこな
たアすこしアわけのいゝもんだおれもこんなこたアいふハきれヱよければどもわからねへから一ト通り
やアいつた物サ初手からそふいへバすんだものトウ（にわかにきげんを直し金を懐中しければ角右衛門ハ兩ま
通の文を取返し其上おたち親子縁切の證文入させかへしける淺二郎おまちハ手にあせにぎり久離の業しミ引かへ
て今日のくろうハとやせんかたもなかりけるおりから屋敷ハおもひがけなき騒動にて殿を初め用人ともあつけに
とられしふぜいなり大殿ハ立腹なゝめならず兩人とも淺二郎つれ來れとするどき言葉にせんかたなく淺二郎つれ
來れば【殿】コレ不埒者の淺二郎そなたハよくも瞞しひ事をしだしたの親の欲目かしらねども今日の仕
迄そのやうなこんじやうとハ目毟になる迄おもはなんだ不屆な働らき其儘にならぬとハ思へどももと
（いふ譯[illegible]ねにたまり）[illegible]の業を取直して源五郎とやらが悪口雑言先祖へ對し立物かせめて人
間の具情があるならハ源五郎と其女と二人を手にかけいひかけに切腹せぬひきやう者是非聞も書院の
普請をする時も釘ハ入ても持やうにあすにしんでもあとの侍とおもひ通しが残念だ其妻といふ物ハ心

が第一唐土の齊王ハ無鹽女が素顔をいつくしみしも彼ハ我朝にてのおたふくといひつべき女なれど學文才智人に秀て日本迄も名を殘すゆへに眉目によらずして齊王心を好むなり夫にハ引かへ此しだらそなたを其まゝ置ならバおじをしつたる源五郎父も來たらんハ必定さすれバ父も世間の外聞家來の手前も相濟ぬ手打にしやうとおもへどもよたみれんに魂がなをろかしと勘當するモヲ片時も内へおく事ハならぬ。ア去ながら君子ハ其罪を惡で其人を憎まずア世間しらずの其方故嘸浮めするならん身も此通りの大病そなたハ若イとハいひながらもろうせう不じやうひよつと是が一生の親子の別れかもしれぬ

ト涙ふき／＼いはれしが　ウヽおれとした事がやくたいもなひ此やうなもふ何にもいはぬ彼是はぢを蒙つて嘸うき目するならん其時親をうらむるなト、りつぱに口でハいひけれど言葉もそゞろくもりごゑ淺二郎ハあるにもあられぬ親のいけん身にしみ／＼とその席を立バ此世のわかれとハ後にぞおもひしられける胸の涙たとひおひつ心ひとつに色／＼と親の立腹おそれ入迚も勘當請るからハ何かのいひ譯切腹と了けんきわめて居間へいりまづ二タ親へ書置と硯にむかいかく筆ハ跡や先なる雁金の親にさきだつ不孝とも御免遊バし下されとかいてハ涙しやくり上げ硯の水ハつくるとも涙の露ハつきぬまじまづ二通をばしたゝめてそれよりおまちへ一通を認めながらあひそめし見そめしよりのかねごとをおもひ出して猶涙やう／＼とおしぬぐい一筆かいてハ顔をふき又一筆に親の恩思ひつゞけて思はずもわつと机にもたれつゝ思ひ直してかきかゝるおまちハ物見に殿の首尾たゞ氣

になりてひとりごと事のいたづらもしれしゆへ、おめにかゝりてお詫ごとわるひハみんなわたしゆへ浅さんのなんにもしりハなさらぬといつそいほかといひながらざしきをそつとあけれども人もいざればその先の唐紙ふすま段〳〵としれぬやしきの案内をも目をしのびこそ〳〵と行さききれいな小ざしきに忍び〳〵の泣聲もむねにあたりて心せきそつと襖をおし明ればかくごをきわめし浅二郎はつとおもへど猶も後に身をしのばせうかゞひゐるとハいざしらずきいごをいそぐありさまを見るより今ハあるにもあられずおもはずわつと泣聲にこなたハ書置おしかくして）

浅二郎 おまちそなたハどふしてこゝへきたト（涙の顔をかくしながらいひければ）

おまち どふしたとハあんまりな氣強ひわひなへト涙にてしばしことばもなかりしが漸に顔をあげ）

まち しんでもマアト（たゞひとやくり）はなれずそひとげてとおもひ極めておりましたにむごひつれないひとりしぬとハあんまりななぜわたしをもころしてハ。（ヱナ）セエくやしい是程思ふがしれぬかへどふ言譯といふ事ひとつもいゝきかせず此書置がにくてらしい ト（ずん〳〵にひきさき〳〵どきなげゝば）

浅二郎 いふまひとハおもへどもそなたがしつたらながひと思ひし事も鵤の觜段との異見どふしてしなずにいりやりやうぞせめてハそなたハ跡に殘り一ツ遍のゑこうたのむ〳〵と涙にて（親の情の異見のだん〳〵なみだながらに咄しければ）

まち ぬしが死なふとおつしやるのも元のおこりはわたしから共わたしがしぬるから夫で侘してぬしさんハどふぞ〳〵ながらへて千年も万年もかならずしんで下さんすな夫婦ハ二世

と聞からにさんずの川で待て居る心にかゝるハ主様が能奥様と睦じくとおもへバ夫のミ氣に欠る外に思ひハござんせんト(淺二郎もしてあまし留ても聞かぬ娘氣の一チずにおもひし心根にぜひなく二人りしんちうとかくご極めしおりからに勘當のせがれ片時も置事ハならぬ〳〵とせんかたなく居なれし舘跡になし今にもきゆる露の身ハ隅田のあたりにきゆるやと足もしどろにあゆミ行又傳茂介も戀のとり持あらはれて長の暇ハ出にける)

第三

過し頃二人りハふつと藍染川小町櫻や業平と思ひ逢たる小松川梢に秋も鳥越の淺黄櫻も色染し木嵐身にもしミ〳〵と儘にならぬが戀路ぞと誰か庵崎や待乳山蓮の色香ハ袖の内互の思ひ深けれど契りハ淺き淺草の鐘にさそハる村烏寐ぐらをつけて鳴〳〵も死出の旅路の取形りハ今をさかりの花川戸隅田川原の夕煙りときゆる覺悟ハあづま森つもり〳〵し浮涙袖と袂にふたりづれ人目のなきを首尾の松と思ひし心三股の胸ハ跡さき三圍や土手をつたへに両國の通り者なる長五郎(其日のなりハさんど笠合羽ハさんとめ茶ミぢんじま黒びろふどのしやうぞく〳〵に下着ハ上田のかわりじま黒地がちなる本八丈上着ハ結城のつむぎじま帯ハ茶じゆ子を貝の口ばつちに尻をかたはしより黒いとづかにさめ鞘も巣造りとハさすがにも通り者とハミへ

にける二人がなりを見てとつてしんぢう出立とさとりしより）　長五郎　コレおまへがたハ若氣の短氣だな〳〵サしんぢうと見立たにちがひハあるまひ（トこゑかけられても氣もそゞろさとられてハ死でのさまたげにげんとせしをしつかとこじり）長　コレサやぶからぼふにとめたにより死なふとおもふおぼこ氣にこわくもあらふがコレサわしも通り者といはれる南國での長五郎が助けやうと思つたからハもふ此場でハ殺しハせぬサ死なふと覺悟極めるやうす無人くんだ事であらふがマアなんにもせよ死なぬ了簡して見なせへ若ひ時ハハテ誰が身にもあるやつさ死で花ア咲ねへによ生て身のなるしあんモチいかアひ事長五郎が胸にやアふちやうをつけてしまつておひたサ、〳〵サア、何かの譯ハ道にて聞ふ先〳〵わしに任せてと（いやがる二人無さくら右と左に手をとりてやう〳〵に伴のはなしのこらずきゝ胸にうなづく長五郎我にかくまふおとこ氣ハうすき氷を踏ごとくあやうき命長五郎と兩國へこそ歸りける扨長五郎ハ二人りをつれかへりて色〻異見しやう〳〵に死ぬる心を取直させ二人ハ長五郎が世話になりて此家に日數過りしがある日長五郎壺飯を喰て居たりし所へ新場のきおひ吉五郎さらしの手ぬぐひまさの下駄花いろさなだの壺寸ほどを尻のさきへおつこちそふにひつかけて鼻歌ながら門口より）　吉五郎　頭らア内にか一寸ときねへ　長　ナンだぞやう〳〵しい今飯を喰ているハこけへきねへ（トいへば手拭をとりおかミさん御めんなせへやしと立膝にて）　吉　外の事でもねへが先刻新場の若ものが父ごたつきを起しおつたよしかへ　長　久しい物だがマアそりやアど

ふいふ譯でヱすへ　吉なにさたわへもねへ此顔見せにせいろうのもめよそいつもみんなてんぐ／＼われ
／＼から起つた事されしが仲人にへヱつた所がおれをも傳をもやつぱり相手のやうに擲ちやアがつた
そこで口をきゝてへにもマアぬしにも噺してから何もかもいゝ様にと思ひついて頼みにきたのサ（ト
いへば長五郎うなづきながら）　長かゝアごふせい臘がかれへぞよふごんすわしが一トことといへばぐふ
ともいはせる事じやアねへマア先へいきなせへ喰て仕舞ツたら今じきに（ト言葉つがひわかれ行長五
郎ハじきにうらミつらミのなきやうにかたをつけかへりて）　長いま／＼しい喧嘩といふトいつでも尻
をもつて來るモヲ仲直りの酒ハのめねへぞコヲかつやむかふへいつてなんぞいゝ肴かつてきや　ト（錢
を一本なげ出し夫より酒呑ながら）　長コヲ淺さん壹ツ氣ばらしにやんなせへト（淺二郎を相手にて）　お
めへもいつまでこふしてゐてもつまらねへもんだが此間いゝなはるにやア小つゞみの稽古所ヲ出すと
いひなさるがそねへに手がいたんでハそれも出來やすめへわしも幸ひ用があつて箱根まで行やすから
おめへも湯治に行なせへ又温泉場ハ氣がはれていゝ物さほんにアノ居そふろふの權二も此頃ハ又瘡
毒氣で脊がいたひといゝおるからあいつもつれて荷持にして行やしよう　淺二郎ソレハ大きに忝けな
いおまへが行なされバ脊よしどふぞおせわながらそふして早く手をよくしたうござりますト（急に思ひ
つきしたくして明日を待かねてもおまちわかれともなく色／＼ととめけれどもせわする人のいふこと又ひとつに

ハ身の養そうゆかれにたゝぬと三人ハ明けの鳥（ママ）ともろともに箱根の湯本へと出て行権二は日ころおまちにしうしんかけ日とさ靡けどもおまちハいつかな承知せずくやしくおもひ道中にて淺二郎をころさんと思ひしが思ひなをして一ト趣向おもひつき道にて二人りをはづし両國へ立歸ればおまちハ先トの便ありしとうれしさにやうすを聞に権二ハあたり見まわし 〔権二〕おかみさんわれへ〔おまち〕湯から庄さんの所へゆきなすつたがマア夫より淺さんハどふだへ手ハいゝかへト（といひかくれバ権二ハ人のいぬを幸ひとうれしき顔をおしかくし氣の毒顔にて）〔権二〕おまちさんわしがこふしてけへつて來たハ是淺さんの事さマアとつくりときゝなせへヨヽ湯場に逗留して居る内コレサおちつきなせへなそこで名主の娘と色事じやアなんとうまひ事さ ト（いへばお町ハ氣もせき立あとハ〳〵とせきければ）〔権〕そこですつぽり喘し合ハといふ所が其女がいひ名づけがあるのさ所で内へしれて夫から淺さんを擲殺すとて皆ながよりたかつていひやしたが是も長左郎さんといつ所なればバ氣遣ひなしといふ所がそこで是もこふだて長さんハより道をしている内にぐれやしたはのなんとわるい時ハわるい物さそこでわしと淺さんと二人りでどふも男ハいゝが尻擽のわるいにとんとこまるそれがまたこふだて聞なよ金の一束近くあれば濟事さマアざつとかわひ男の命を金で買といふよふなものさ所が金ハなしそこで工面をしてまたいかふと思つて淺さんとも相談してかへりやしたどふぞおめへも助けて上ゲなせへヨ　トへもたせかけたるわるだくミお町ハ聞よりかなしくも又くやし

くもどふぞして助たいと思へど有合金ハなしとやせん方も涙ぐミ）　[まち]權一さんどふしたら此工面が出來
やうねどうりで二三日烏啼がわるかつた　とハ有にあられぬ思ひ過したどさきだつハ涙なり權二はうまくいつ
たりとうれしき顔ハ心にて面ハかなしきうそ涙目をこすり〳〵）　[權]おめへが身を沈めて淺さんを助てやん
なさるより外にどふもしやうもなしさわしがいゝかゝアでもあるならバ男一人の命づくとおもへど
知なある通りの獨身こんなこまつた事ハないと（諸手をくミかんがへるふりにて心には胸ざんようお町ハぜ
ひもなく〳〵にあとさき何の思ひもなくとほふにくれて涙聲身をしづめれば命づくといふてくがいのひとりずミ
どふしたらといふもいはれぬないじやくりなミださきだつその折から表に何ものともしれず）　其金こゝにあり
進上申と入來る（其風ぞくハさんとめせいらすじまに緋うらの小袖下ぎハ對の小納戸太織を二つ着ておびは花色
七子に唐ざん留の羽おりをたゝんでちよいとかたにかけ上り口よりおまちが顔形ちを目もはなさず見ながら）始
終の様子ハ外にて委度聞たハテ男一疋の命と聞捨にするやうな氣性のわつちでもごぜへやせんてノヲ
權一さんとやらサア是でよく斗らつてやんなせへ　トハ懐より金子五拾兩なげ出す權二ハうなづき是も懐より
金にハあらぬ證文一通取出し彼男にわたし）[權]そんならお町さんへ淺さんの命ちやア(ママ)此權一が首にかけ
てきつと呑こミやしたハテ慈悲ぶかひ人もあればあるものだナアと（いひつゝ出て行お町ハかなしさ引か
へて）[まち]どなたさまかハぞんじませぬがあひも見もせぬわたくしども夫婦のなんぎをおすひりや

う下され夫の命をお助け下されそれハ有難いともうれしいとも此お禮ハ死んでも生ても忘ませぬ命の親じや父母とも　トいひながらふしおがミ〳〵身を忘れて（怪べバ彼男）其お禮御無用〳〵おめへのきりやうにかゝつた身の代金ハテ五拾両其駕籠是へに（又びつくり）［まち］すりややつぱり［喜蔵］ハテしれた事さぜげんの喜蔵とハわしが事さ夫トいへの勤奉公しやうとハ御奇特〳〵（ごきどく）［まち］じやといふて是がまあ［喜蔵］ウヽ勤め奉公いやかそんならよしなサア五拾両請取やしやうサア受取べいかの［まち］さあそれハ［喜蔵］奉公するのかへ（ト関つめられて泣入おまち喜蔵ハつゝ立ても金ハ出来ぬへあゝめんどうなと引とらへいやがるお町をむりやりに駕籠におし入すがる手をさつしつりおろすすだれともにサアかごやれとひとりゑミし）［喜蔵］權二といゝ合せうまくいつて奇妙（きめう）〳〵近年の掘出し代物てつきり金にあたゝまると（いさミ進（すゝ）ミて行廓家名ハ松屋や衣屋右衛門今ハ此家の奉公人質の流れと人の行末しれぬとハこゝにお町がつき出しの新造より段〳〵と今ハいひらん名も其所とあらためてくがいの浮目くらす内たゞ淺二郎が事のミに便をまちていたりけるさて長五郎淺二郎かへりてミれば件のこと下女のかつが噺のやうすそんならいよ〳〵權二とわけでもあつたのだと長五郎ハ早々に淺二郎がもといやしきへ立こへて勘當のわびいひ入ればさきにても殿ハ先月はじめつかた養生もかなはぬ老の病氣にて御厩（うまやがし）河岸の夕煙りときへし跡目のつぎてなく困る所とよろこびてなんなく家名續しとかや又過し頃いとまの出し茂介をも呼もどしもとのごとくめし仕ひ長五郎ハ町人なれど思を請しとて友のごとく

に出入せしとかや）

第　四

夜ハもへて晝ハきへつゝ物をこそおもひの晴ぬ淺二郎がふ腹まぎれ里がよひ玉やの八重妻といへるに馴てかよひしが風とせし口舌より今ハ八重妻もきれて或日茶やの庵崎屋に▲其日の形りハ黒七子の羽おりに黒羽二重の小袖下着ハかんとうじまに古渡りさらさ帯ハごろうと茶どんすのくじらのしんなきをふたつにおつてしめじゆばんハ緋ちりめんの半袖に多葉粉ハ國府の煙りをなし四方のこんたん出して席の夕げしきを見ていたりしが其町ハ淺二郎がたよりなく日ごとにくやミ歎き泣涙に目をも腫まぶち寐ミだれ髪にうす化粧その日の出立ハ小納戸どんすのかひどりにながれ櫻な惣もやうかひどり下ハむらさき七子にあさぎざくらなつま上り下ハ白むく五ツほど裏ハのこらず藤色繻子新ぞう八人かぶろ迄おもひ／＼のはでざくら揃たそふ木嵐に羅綾の袖をひるがへしぜんせい盡す道中とていほ崎にてハ 茶や おいらんへすりてありますか トいわれて其町いほ崎やの內をのぞけバ淺二郎互にはつと其町ハ面目なさに夕日さへ顔に殘れる色紅葉思ひ／＼し淺二郎たがいに恨いひたさもさすが人目におしつゝミなにげなしに其町は物をもいはず尻目遣ひに行過れば淺二郎ハすめぬ心にとつおひつやうすハしれず猶おもひかさなる胸のしあん顔著ものハ見てとつて 喜八 淺さん其町さんハあの

し昔のお馴でござりますか今の目つきハ見事じやアござりませぬノヲ新吉さん（といへバあわせる）〔新吉〕ソヲサ六さんでも是ハなまじ／＼淺さんきつい事でござりますトいへバ 〔淺〕インヤ女郎をひより新造あげてさわぐがましさ ト（そらさぬ顏にて心にハゝきつたしやうねのあの女猿二について今のうき身よりきみと思ふて見たり又ミれんやう／＼此ごろ忘れしに又もむねをいたむるかと思ひ直して、 〔淺新吉〕コレマア何にしろ奥で酒にしやう娘格子と（いふより奥ハ酒肴けい者も來りにぎやかにさわぐ中へ松倉やの若者來りて新吉をよび耳に口を付） さつきおめへがじきにつれてきなさるやうにいひなさるから待てゐるにしてどふいふ事かおいらんがきついせきやうさ又しまひせかれ道具と相見へ中條 コチ／＼氣をきかせなせへト（いひ捨にして立歸る新吉ハきどつてさじきはやくしまひ） 〔新吉〕おいらんがいつそむかひでござりますせめて座敷斗ハお勤なんし顏ミでざんすハどふでござりますほんにわだ所じやアござりませぬ其町さんもまたきつい怪やうさ（といへどもうかぬ淺二郎いやがるものをむりやりに淺さんのあやかりものいよきつい事だねと軋目うにもたゝまかけ松倉やへとこもなひ行扨初會の事なれば座敷格別の事もなく女藝者一組かミどもも一通りにてはや座敷もひけ其町が寄やにハ風流盡す茶器香具床の間にハてうでんすの違棚のかけ物花いけにハ遠州流に小菊をちよいといけ集かな物い多葉粉ぼん其外諸具用だんすにいたる迄皆風流いこしらへこゝにしあすにいとまあらず淺二郎ハ床に上り胸の内なるくやしさなどふいつて腹いよふかとちゞに心をくだきしが其町ハ床

に上りうれし涙にことばなくたゞもじ〳〵とふとんのすミにくゝりざるのぬひつけあるたかんざしにてひねりながら）〔其町〕淺さん恨でざんすよく便りもしなんせんわたしハあけ暮泣てのミ暮しいしたトいふより涙先達てわつと泣るを其町ハふりかへりもせず淺二郎たばこ盆を腹立まぎれにたばた〳〵〳〵其町ハやうやう涙をおゝひ淺二郎が膝によりそへばとつてつきのけそばにありあふてうしをとりおり酒に夜着引かぶりうしろむきころりとこけてそらねいり其町ハつきのけられて筝のおれしもしらずあられぬおもひ）〔其町〕ぬしハ何の腹が立いしてやう〳〵逢のにふりなんす川竹の流の身が恨でざんしやうがこれ迄もぬしの爲にしつめいした身でありいす夫よりハわたしが恨ミがまさりいす嘸今ハ其名主の娘さんとおしげりでありいせうわつちハそれにひきかへて昔がひの勤致いすもぬしの命の助たさおごひと思ひなんしてせめて便りでもしなんせば又心も少しハ休ミんすに權二さんも金をもつていきいしたきりでほんに便りハ鳥迹もぬしの噂ハつけいせんなんぼ其娘さんに惚なんした迚もあんまりでおざんす（ねきしハせじとゆすぶれど狸き寢いりに淺二郎ハ恨いこと業きく程にすめぬ心にとやこふと思ふ所をおこされて）〔淺〕じやうだんせずとねかしなと（何にもいけん心にハ箭もしれざるお町がことばもむつといはせてきかん物と又ねる枕をひきたくりて其町ハくやしさに）〔其〕淺さん此様に何を申いしてもしらぬ顔でいなんすハなんぞやうすがありいすかそのよにしなんせずと（トへとひかくれば）〔淺〕何さこつたにア何もなしさぬしの心と權二の色男の

むねにあるやつさ此やうに身を賣なさるも定て權二の離義な譯であろふね（トいふに其町猶淚漸顏をおしぬぐひて）［其町］ぬしハ權二さんとわけでもありいすやうにいひなんすがつとめハ致しいすけれどけふ迄ハはだをけがしハ致しいせんといへば　［淺］なるほど傾城にハなろふ物嘘言（うそ）がきつくあがつたねト（いふに其町あられぬおもひそのよにうたぐりイすならといふ間おそしとはものを取出し死なんとせし手を取て）［淺］何ゆへ死のだマアまて　ハテサはやまるまひ　［其］何ゆへにはやまるとハあんまりな勤の浮身もぬしの爲逢たひ見たひと思ひんすねがいがかなつてうれしいと思ひしたら此うたがひぬしがそのよにいひなんして何を便りに勤いしやう　［淺］サア聞屆た見屆たしんちう見へたよ　ト（もぎとれバうれしさうにうたがひは）　［其］はれイしたかへ　ト　ためいきつき　それでちつとおちつきいしたト（だん〳〵いふに淺二郎そんなら權二にだまされしに逢ひたしと夫よりハ初めに引かへうちとけて道中咄し身うりの段〳〵淺ながらにかう〳〵とかれの咄しを聞よりも淺二郎ハうなづきて道中にてハ長五郎が路金をとり夫より此事はかりしかと二人りハくやしさかぎりなくぜん非を悔ミそれよりハ互に恨ミし思ひもはれ何やかやのうれしさにあとや先にと過しよりつもり〳〵し浮咄しなが〳〵し夜もあけの鳥ともろともに茶やがむかひに淺二郎名殘りおしさも居つゞけせずその日ハついにわかれけり）

第五

小町にかよふ少将の雨の夕べのいとひなく日ごと夜ごとに雪風の寒さもしらずかよひ来る吾妻橋の片ほとりの金借半分に世をおくるハ村川新五右衛門とて道具ずきにて大小小柄にいたる迄金にあかして買込し所へいほ崎やの居そろよ久米八ハ浅二郎が小づかをぬすミ心安く行やしきなれば此村川にうりしおりから浅二郎ハ家にも身にもかへがたき後藤がさいくのおしの小柄先祖よりの拝領とて代々譲の品たるがある日廓にて行がたしれずはや親類にも此事しれ言わけ立迄座敷牢日ごとにくやミし折からに煩ひ出て牢室に心も晴ず段々とおとろへしある日の夢に枕神日頃の信心浅草の観せおんの御つげに村川新五右衛門といふ者所持にて此節其町に心かくるとの御しらせさあらバかれを頼まんと一封したゝめ遣はしけるくるわにてハ浅二郎がたよりなく皆々あんじて）

其間 綾梅さんなぜ此やうに浅さんの便りがありいせんねいつそ苦労でありいすよ 綾むめ ソヲサどふしたといふ使ほしなんしてもよささふな物でありいすねへ　ト（皆々浅二郎が噂申に（へ） 呉竹 来りおいらんへわたくしハぬしにしかられいす事を致しいしたよ其なんでありいすへ 呉 いまね磯松屋の佐吉どんがきなんして村川七兵といふ客人がぬしの所へきたふありいすといはつしやるからつれてきなんしと申しいしたわつちがこゝろにハどふぞそふしなんしたら浅さんの為にもなりいすやう金の工面に

なりいしやうとおもひんして（トいへば） 其ソシテその客人ハへ 見わつちら見ハいたしいせんが男ぶりハどんなでもよふありいす 其ほんにそふでありいした ト（互に村川がはなし半ばへいほどきやの書吉来りて淺さんから是が參りましたといふより其町とびたつうれしきひらいて見れば小梅の事細々と認めあるに其町ハよミながら） 其兒たけさん其客人の名ハなんと申しんすへ 見たしか村川と申しいした ト（いふより其町幸ひとうれしさに） 其兒たけさんよくそふいつておやんなんした淺さんの爲になる事でありいすからよふおす勸めいしやうト其町ハいやな勸もうれしくおもひ淺三郎が小梢をとりもどさんとむねにたへ間もなき折から禿まつやに村川大じんげいしやをあげてわらさわぎ其日のなりハあさぎちりめんのむくを重ね着の上ぎハ黄がらの八たんおりもへぎのおじの八丈とびいろじゆすのふたつ羽織のぶさ出たち（書曰、[illegible]）その外りつぱにやぼてんのすかぬ形りじゆばんのゑりハあさぎにてどふにハおかめの面をそめぬきのそら色縮めん紬目よりひらり／＼と雪踏にてかミども伴ひまつ倉や心らばわれかミどもがいそぎてこそハつれて行衛の事なくて何もいり組と手もなくたゞ前倉鉢ミの惣花としやれ時りしがそれよりは日ごと夜ごとにかよひ来ていやさ[illegible]もはやひけてかき祖父とんに大あやら富ぞうかミども相手としすかねはなしの其中に待かねて） 村川「よ其町ハなざこぬのだまざこ飲か 見「おいらんハ持病のつかへがおこりいしていしやの薬のと今いつさこまつていなんすそしてばからしいいつでもつよふおす ト（けびやうの床にせんかたなく新造あい手に噂す内はや夜

もあけのむかひどり村川がうはらまぎれむしやうとかミどもしかり付て立歸る又もある日のかよひくろかミども
もミな歸れとざしきなはやくしまつてふとんの上に大あぐら銀のおもきぶとふなきせるにて舞のつよきたばこな
呑其町な待かねの大あくびして新造三人あいてにして）　[村川]コヲあさじおゝ達ハなんと思ふ其町もあん
まりつまらんでハねへか座敷をバはやくしまつて床で待て居てもちやつとハこねへいつでも〱イヤ
今日ハしやうじん日だヤレりん病だきしよくがわるいとておれをつり付る　ト（いふに新造ハおかしき顔
なかくしながら）　[朝路(あさじ)]ぬしハ何をいひなんすへいつそおいらんもぬしにハ惚て居なんすよ　[しげ秋]
夫をおかしくおもひなんすハこけでありいす　ト（かきのめされて）　[村]ソヲいへバサ座敷ハまんざらで
ねへての床といふといま〱しい　ト（咄の中に其町はしろれりにてはちまきし上着ハあひ鼠の襟のたかおり下
着ハ本八丈なかされ着にしごきハあついたどんすにあひ小納戸繻子のうらなつけ床にあがりてあたまなおさへ）
[其]風を引いしたそふでいつそ頭痛(づつう)が致しいす（トいへバ）　[村]ヨヲいつも〱ほんにいま〱しいか
らだゝなそいつも人による病氣であろふて　[其]そんな自由な病ハもちいせん　ト（あいそもなさにいゝけ
れば）　[村]ソンナラおれとなぜ寐ぬのだ間夫へのしんぢうであろふがな　[其]アノばからしいまだそん
な　[村]ソンナラ寐るか（トいやミな言ばに思ひかけられ）　[其]ぬしの心もしれいせんにうつかりとはだな
ゆるすやうな其町だと思ひなんしていひなんすかへ　[村]ハテ是程にかよひくるしんぢうも　[其]誰しも

かよひきなんしてもこ心のしれぬ其内ハマアそふ思ひなんし 【村】そんなら心ちう見へぬのか 【其】互の胸をはらしやひきせう誓紙の其上になりいしたら其時ハ 【村】ナニ互の胸も晴しやひおもしろしまつ示ふ（トいひければ） 【其】そんなら申しいしやうがきつとたがへなんすなへ此里でも其町といはれる傾城がきしやうをかきいすに髪剃で指をきつたといはれてハ名ばかりか里の名迄がすたりいすサそれにつけてぬしハごとうが細工のおしの小柄をもつていなんすときゝいしたどふぞそれで切りとふおす 【村】ム、知れたヨシ〳〵〳〵至極呑込だこんだ〳〵けふハもたぬこんだ急度もつて来る指のやうじんして待て　ト（咄に其町はれる胸はやあけ渡るむかひの茶や村川ハふせう〴〵に立帰る村川ハ久米八が咄にて浅二郎が事をよくきゝ逆も心にしたがはぬ小柄の事ハ頼まれたりとすいりやうし丁簡極め茶やにかへるやいな身請の相談取極めて其町へハ沙汰無用とあくる待かね其町がむかひに来て茶やにいひつけ其町へハ約束の小柄を渡すにより是へ来れといそ松や身請の金うや〳〵しく都合七百両にて身請定り松倉やの其町ハ思はず急の身うけに今一度浅二郎に逢たくも便りなせんと思へどもはやふ〳〵のさいそくに其町ハ小柄ハとらず此まゝに今身うけ定りてハ浅二郎へのぎりたゝずと思ひ極めて死ぬ覺悟一間をあけてむろ咲来り其町が守り刀を引たくり） 【むろ咲】おいらんへ道理でハありいすがマアわつちの申しいす事をも一通り聞ておくんなんしやうす ハみんなきゝいした日頃おせわになりイしたわたしが事でありいすからわるい事も申しいせん短氣でありいす

ト(いふより跡ハ涙にてしばしことばもなかりしがやう／＼にかほをあげ) [むろ咲] ぬしハ淺さんに賴まれいした小柄とやら死んで誰が戻しんしやう死なふとおもひなんす心で苦勞をしたんしても取返してお上げなんし(ト色〻いさむる教訓に其町も有難涙はら／＼と) [其] むろ咲さんよくいつておくんなんしたうれしふおすそのよにわつちをおもつておくんなんすハほんにしんじつでありいす開譯いしたモウ死には致しいせぬほんに氣がつきいしたよだおあんじなんすなと(守り刀をたんすへ入れば) [むろ] ソレハうれしふおすわたしがやうなものゝ申しいしたをよく聞わけておくんなんしたかならずたん氣しなんすなマア淺さんへ文でもかいておやんなんし ト(いはれて其町硯を出しむろ咲ハふらゝかへ出て行跡にて其町涙ながら淺しよすがを思ひ出しわつとばかりに泣入りしがやう／＼心とり直し硯にむかひ書置の事と書出し淺さんがミなんしたら嘆なげきいしやうと獨ごとにまた淚一筆かいてハなきしづミ硯の海はつきるとも涙ハつきぬ袖の雨やう／＼と書おわりし其文にハ村川があいさつしうら段／＼と件のこと長／＼とあはれをこめて認し所へ) [兒竹] 來りおいらんへお名殘りおしうありいすいつそかなしうおすよト(いはれて其町猶なミだしやくり上ゲ／＼) [其] ぬしたちが替り／＼に暇乞に來なんしてやさしくいつておくんなんすハうれしうおすが心にそまぬ身請の相談やつぱりくだんの淨勤がましでざんす淺さんに此やうに請出されいすならほんにうれしうもありいせふがト(いふも淚にむせびたる其町ハもとが公家の息女なればすべての人に間合よければ皆〻名ご

りたおしミ人かわり立かわり暇乞にくる）　茂秋（來り）おいらんへぬしハ病身でありいすからよく灸でもすへなんし又逢ふこともありいしやうから必短氣しなんすなと（いふに其町たゞあいとへんじもいはすなきいたる）　朝路（來る）今磯松屋の次郎兵衛さんがきなんしてはやく／＼とせきたていすずいぶんたべ物に氣をつけなんしよト（いふに其町心にハ今にも死ぬるをあのやうにあんじてと思へバ猶も涙聲にて）其町ぬしたちもわつちもわかふハありいすがろうしやうぶぜうこれが一生のわかれになりいしやうかと思んすりや猶かなしうおす（トいへバ皆／＼聲たそふへ）たゞ其よふにはかなひ事をいゝなんすへ又じきにおめにかゝりいすへト力を附ても）其ほんにぬし達にハたんと苦勞をかけいした隨分煩らはぬやうお勤なんしそしてわたしが着物や櫛笄ぬしたちに上がいすからかたみと思ひなんしていゝやうにわけておくんなんし（ト互に暇ごひして袖に露をしぼる折から村川大じんまちかねてさいそくしきりとわかひもの案内がつき添いやがる其町むりやりに今が限の浮世にて居なれしくるわ路になし涙とともにつれて行場に（村川家根ぶねにて待かけいたる其所へ駕ごにつきそひ磯松やくると見るより大よろこび體にて）村川ヲヽおせ話／＼先／＼是からハ手活の花と詠るじやシャン／＼／＼／＼ア、目出たし／＼／＼コレサ其町もふよひハなんとしやうがあろうか（カガ）な（トいへども其町心にハこゝの川瀬にしづまふやとふして死なんこふしてゝ心苦ッにとゝおはつ物をもいはずいたりしが村川ハうれしさに酒や肴に次郎兵衛とさいつおさへつ辭た

おれまわらぬ舌にて）〔村〕コヽコレ其町お手めへのほしがる小柄ハ是これさ　ト（いふに其町ミる程に遣はぬ注文ごとうが細工）〔村〕ヤレそこで望に任せてやるハよしか所が寐てからよなんだばか〳〵しい寐せぬ先からきせう誓紙いやもじんむてんのう以来聞およばずお床入の御祝儀に床花に仕ふナア次郎兵衛　ト脇指そばに手枕にてやぼな鼻歌口三味せんたがいにしひつしひられつ酒もりさい中其町ハそつと小柄を懐中し逃たくおもへど川中のせんかたつきて覚悟きわめ心の内にハ淺二郎への暇ごひもふこの世でハ南無阿彌陀佛かならずうらんでおくんなんすなたミらいはまつておりますと小柄をもつて舟よりざんぶとおちければ村川はじめ次郎兵衛せん頭とほふに暮て酔たるさけもにわかにさめ）〔村〕ヤイ船頭何をうろ〳〵しやるノチはやく這入て見てしおくりやれ酒手ハ望に任せる死なぬ内に〳〵（トいふよりとび込さがせども影も形もしれずしてこゝへハもぐりあすこへハ出船の中にて村川ハ狂氣のごとくこゝなさがせあすこなといへどもしれざる其町にせんかたもなく船頭ハ舟におかれば村川大じんとほうにくれてすじぼねもくらげのからだたこのつら目斗ぴかぴかぜひきたくそばなる脇ざし小づかハなし投ハ〳〵と身をもがけど跡しら波の水の底しやうしかたもなく〳〵に我宿へこそハ歸りける扨も淺二郎ハ病氣に付今は牢宝なも赦されて保養のためと出けるがかくとハしらずしばらくミ帰のたよりなき旅に案じていかゞとその形りもまた月代の長はつにていほざきやへ行けるに其町ハ過しころ村川大じんに請出されしと聞よりも）〔淺二郎〕そりやアいつの事だへ〔茶や〕カウト先月初めでござりま

した其時此文をくれ〳〵お頼でござりますまだござりましたが此里にお出なさらぬ事ゆへ跡ハどふか致しました ト〈一封讀せバ淺二郎思ひの外に力も落胸にうかむ折からはや其まゝに立歸てひらいて見れば書置の事すりや死たるかとよみてハ卷卷てハなきまきもどし讀なをしても件の譯細〳〵と認めしに淺二郎もせんかたなく生て此世にあるならバ又逢ふ事もあるべきにはかなきさいごにあひつらんと獨くやミて泣いたるやゝありて顏をあげそふじや悔んでもかへらぬ事後がぼだいともとゞりもまだいとわかき黒かミをおしげなくも根よりきり親をも不孝にころせしゆへ彼是ぼだいとむらはんと夫より我家に養子をなし其身ハ閑居の住居して田舎にこそハ引こもり巍峨たる山ハ雪をおび皓々たる水ハ耳にきそひ雲はおゝひて枯木狂風になりはや葉はつる年の末四方のさびたる氣しきをながめ身も世にありし其時の過し事どもおもひ出し胸にうかべる其町が忌日もしらず回向して〕 淺二郎 嘸嘸たひいひたひ事もありつらんにかわいやどふして死たるか ト〈涙をうかむ袖に露おもひ直して〕 そふじや古歌によめるも理わりかたミこそ今は仇なれ是なくバと思ひの種じや〈焼すてんとそばなるいろりにうち入れバおもはず急に來むけ附うつゝともなく夢ともなくもゆる煙の内より〕 其 淺さんへ ト〈いはれてうしろをふりかへり〕 淺 コレそなたハ死んだでハなかりしかこゝへハどふして來し 〈トいふに〕 其 あひたさ見たさ戀しさにうかみもやらず請出されそれからにげて參りいした ト〈いふに淺二郎ハふしんがほもし狐狸の所爲なるかと心を引ミるあづさ弓的ハちがはぬ其町も常にかわりて色わるくさおも

に見へてそばによりしばし涙にくれけるがやう〳〵顔を押ぬぐひ）［其］どふぞして小柄を取戻さんと致しいしたに夫もはかなき水のあわぬしと深いハ知ておりイす其内身請にせんかたなくぬしに相談致しいすにも急の身請にせんかたなく夫から死なふとおもひゝしたをむろ咲さんがとめいして漸丹迄あんおんに此身ハありいしても小柄なくとほうにくれし折からにわたしにきをもませひすとて見せしを幸ひ命をすてゝほんに死にハ致しいせぬやう〳〵取戻しいしたト廓の咄し舟の事いつてハ泣はなしてハ涙をおさへ）［其］随分ぬしハながらへて必煩つておくんなんすな只夫のミが氣にかゝりいす（トいはれて）

［淺二郎］そんなら死にハしなんだかそふいふ事とハしらずして書置見しより思ひきりほだいの爲と是此黒髪ト、取出せば其町ハうれし涙におしいたゞきもらひて其身にくわい中し懐よりハ小柄を出し淺二郎に手わたしするをおしいたゞきて詠むればなくせし小づかに相違なく其町も此世をさりしと思ひの外無事の對めん小づかハかへり淺二郎ハ天にも登るうれしさに互にはなし咄されつゝよれつもつれつ糸ざくらしばし時を移せしが）

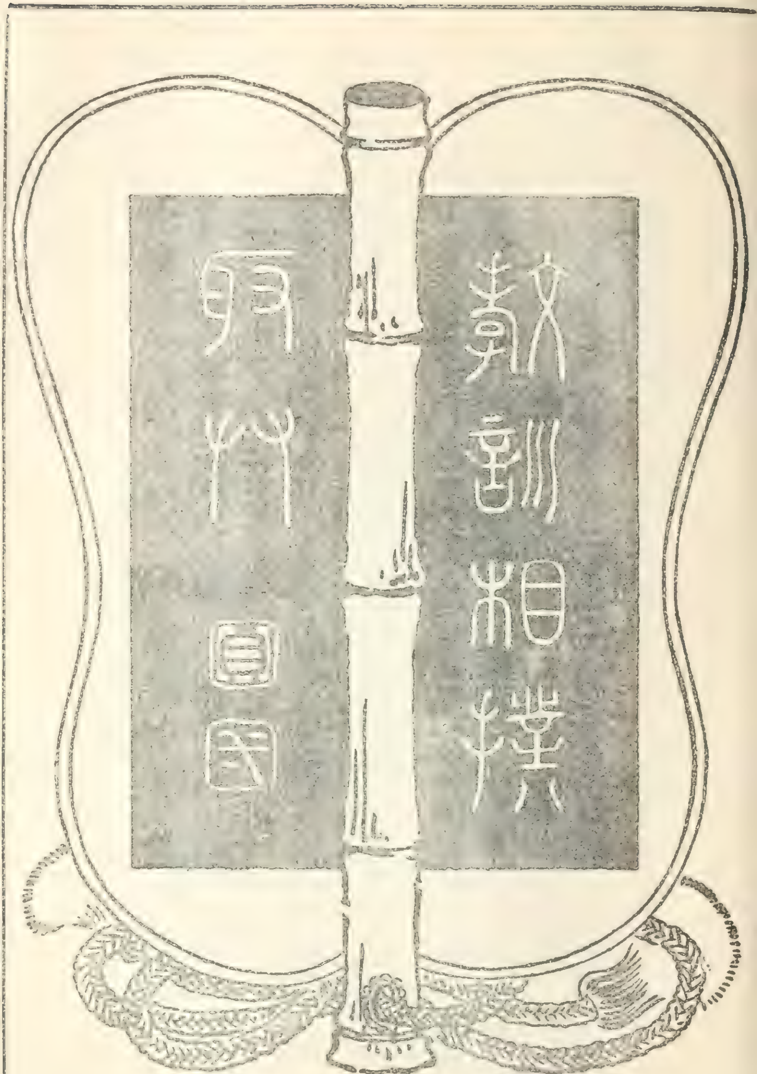
［其］申いすまひと思ひゝしたがわたしや先月十六日村川が無理な身請にせんかたなくぬしへのいひ譯舟でつれ行其川霧ときへいしたトいふに淺二郎ハ二度びつくり今のうれしさ引かへて又も愁になげく折から）［其］淺さんお名殘おしふありいすがもふゆきいす此世ハはかなひ契りでも又あの世でハ蓮葉を半座ハわけてまちいすにへ（あれあいほのふハわがむかひとおもはずわつとなく聲に淺二郎ハ目のさむるともな

くぼうぜんとかしこをミればいぜんの小袖わが黒髪ハうせければ　扨ハ今のハぼうこんやと南無あミだぶつ〳〵
〳〵俗名其ふちとんしやうぼだいと唱（とな）へる聲も涙ながら小づかをいたゞき頂拜（てうはい）し代々家の什もつにうれし
いやらかなしいやら猶々ぼだいをとぶらひて四時年月を送りける」

魂膽胡蝶枕　畢

教訓角力取草

全


教訓相撲

角力取草序

貞式

近比戯作者世に行れて。自先生と號し大人と稱するもの。各博學多才にして。克和漢の事跡に通ず。夫に異なる十返舍一九。一向不知文盲にて。固より究鬼なれば。書を求べき金錢の過余あらず。漸節用の切ぬき學文をもて。戯作をなす。故に他の作者に劣れりといへども。是亦一個の道具にして。下手あれば上手見ゆるの踏臺とや申べき。予年來彼が馬鹿の引札をやめよと。諫る片手に此書を閲して。戯語の中に用捨得失あるを察しツイいとぐちの言葉を書。扨

こそ子もおなじ連累(ふたけ)の徒(と)

ならむかし

干時享和四子蒼陽

日暮里之隱士

一竹齋識

教訓角力取草自序

綿に著す。善悪角力の勝負付といへる草双帋ハ。永壽堂の販本也。今其次編を著し。角力取草と號く。こハ黄表紙の種本なるを其儘に小冊となし。好士の覽に預らんと。予が偶中の幸を望ふ。本是虛誕妖妄の戯語にして。其功拙を論ずるに足らずといへども。非を擧て是をしらしめ。虛を以て實を諭すの排設たらめやは

十返舍一九誌（貞）

附言

ヤアどこへ〳〵。妖は徳に勝ず。弱よく強を制するとハ。正直正路柔和寛容にして。放逸濁亂の饒勇をとりひしぐ。ミな是理に依て勝負ハ見へたり。力つよきとて貪べからず。大鵬ハ海老の髭にとゞまり。海老ハ龜の鼻の穴に入るがごとく其上ハあるものなり。威勢強ければおのづから。人と立合に無理あり。兎角世界をわたるハ。角力をとるが如く。人に取組に高くくるものハ仕安く。した手にくるものに油斷ハならず。人に依て刎つける手あり。かゝへこむ手あり。勝べしとハおもふべからず。負まじとするが肝心。只ふんどしをかたく〆て。すこしも油斷あるべからず。されど又。負るが勝といふ事ハ。人と喧嘩口論しても。かてバ跡が氣にかゝり。まくれバいつでも寐心よし。弱むしとも腰秡とも。笑ふよりハ哂ハるゝが。やつと智悪のちからつよ

し。扨また此にあらハす相撲ハ。取つてわるいといふヿを記すも作者の苦労性。もし視る人の用捨あらバ、それこそ後車の誡にひとしく。悪を見て悪としり。善を察して。おのづから本然の道にすゝむ。その捷徑とや

謂つべきもの

ならんかし

相撲取草取組目錄

東 妓

突出
摺幸
情無川
於茶引
中年增
於職株

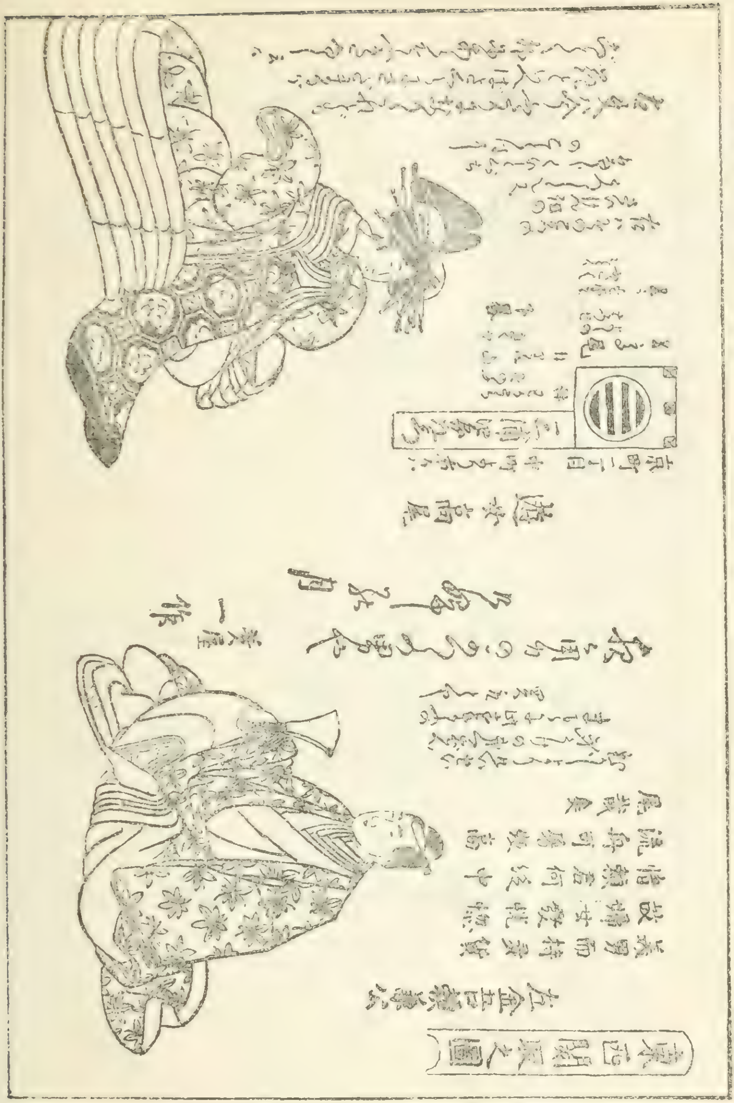
西 客

初の客
似多山
浮氣島
供の者
色男
親仁客

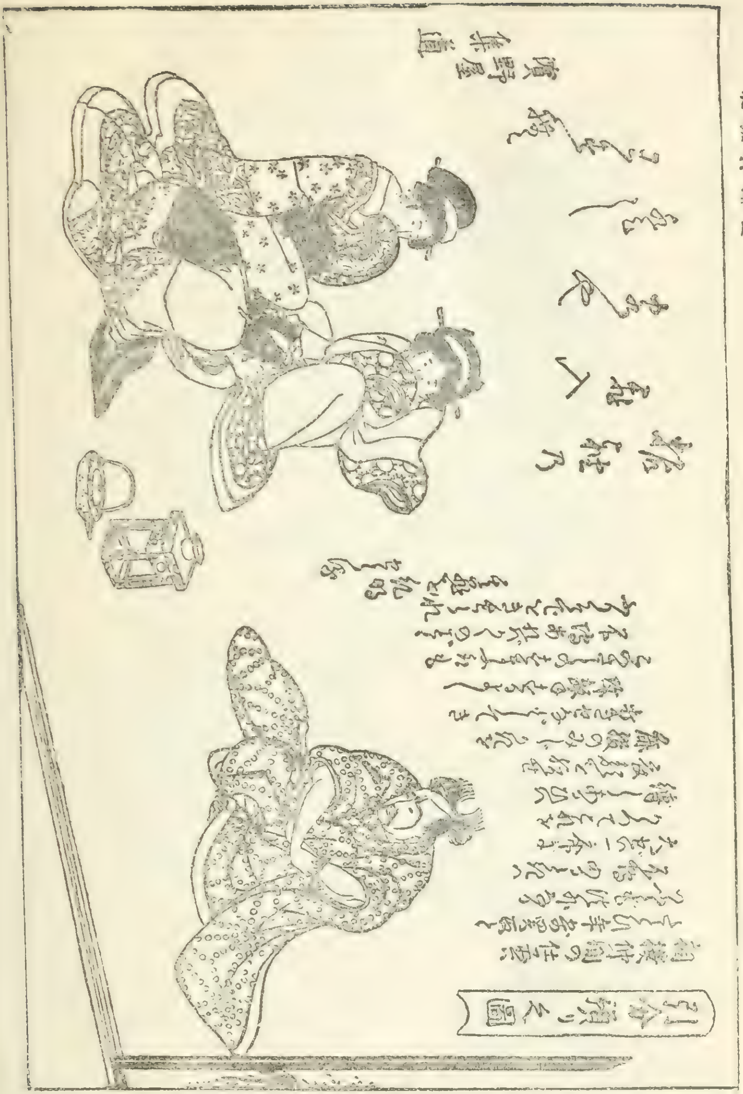
床掛ニ　武左の海
振袖ニ　末社川
色じかけニ　かすり取
手取川ニ　出番島
茶碗酒ニ　まじめ顔
竪引ニ　眞實

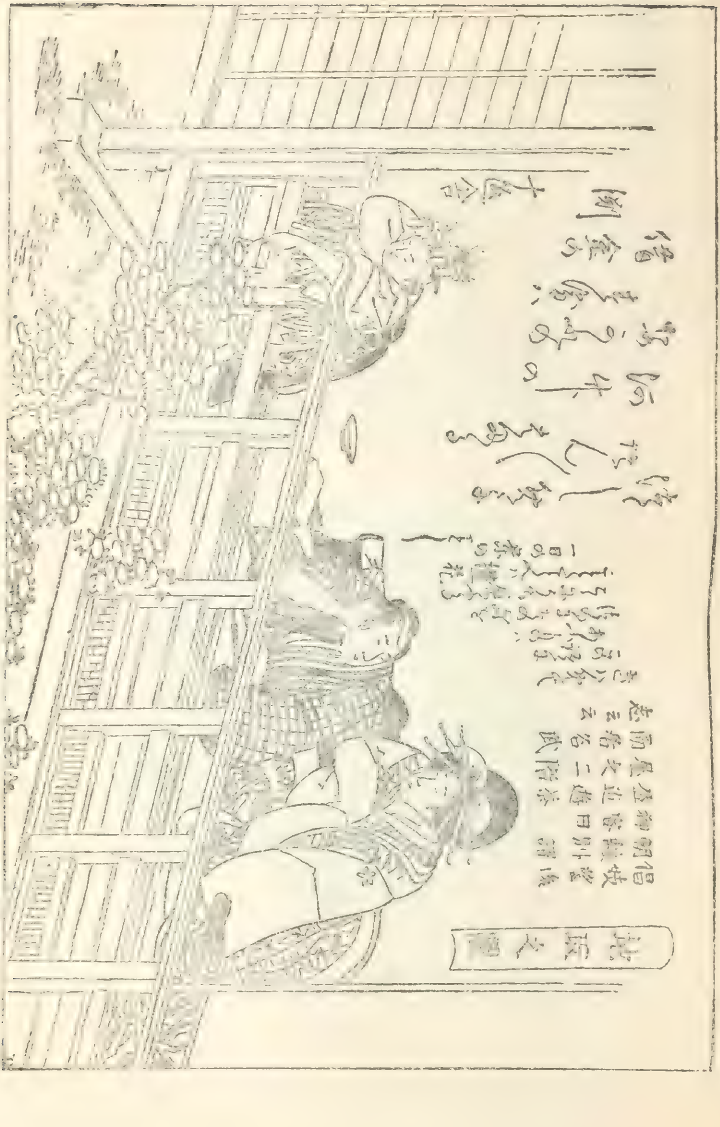
中入

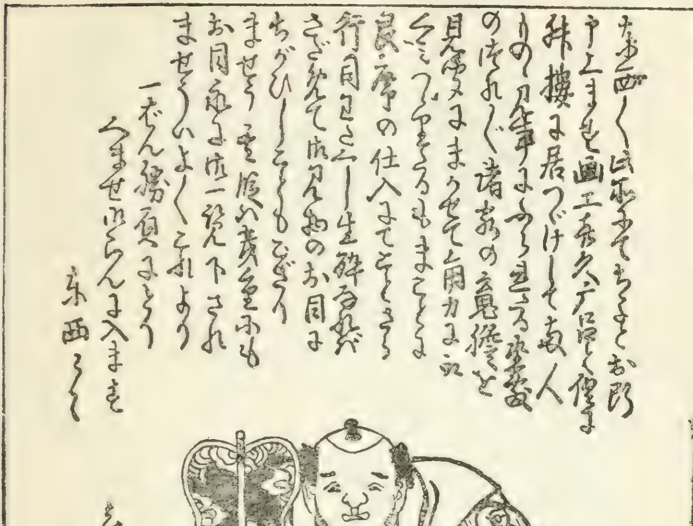
とりくミおくにて
御らんにいれ申候


左金吾頼兼公
遊女高尾
京町二丁目

土俵入之圖
新吉原







角力取艸取組

突だし二
はつの客

此取組いたつておもしろし。たがひに大事をとりて。立合にはなハだ際がいり。さきの手を出すをまちて。うかつに手を出さず。初の客おとこつきよく。身代も手強く見ゆるゆへ。つゝかけ幕の内なれども。いまだ場数をふまず。取くミいたつて内端なり。突出しも又。下よりだん／＼とりあがりたるすまふにあらず。内證に育られて。年若なれども。是もつゝかけ幕の内のしろもの。いまだ功者にハ非ず。やう／＼と拙くまねをすると。はつの客つめる眞似をする。是よりあいかた客の首すじへ左りをさしこむと。爰で勝負ハ見へたれども。はか／＼しくもあらず。二會目の取くミがかんじん／＼

すれがらし二
にた山

此すまふ。すれがらしの方。五分もすいたところ見へず。どこからでも立合。自由に客をなぶりまハし。もふよい時分と思ふ所で。ぐつとつきだしてしまふ事めいじん也相手似多山。小いきにハ見ゆれども。いつたい見かけだをしのくハせもの。もろく投らるゝこと度〳〵あり。されども自惚なれバ。こいつハ怪我にまけたそふな。此はづでハないがと。まけおしミの弱角力まだ〳〵。けいこがたらぬく

情なし川ニ　うハきじま

此情無川ハ。とんだ手のはやき角力にて。くミつくかとおもへバじきにはなれ。そのくせ相手ハいくたりでも。ちとおつりきだとおもふと。じきさま取てかゝるしろものなり。客浮氣島。もとよりごかくのすもふにて。よく下手にまわり。かきつきたがり。兎角名代のしんぞう子どもをも。相手にして地取をこゝろがけ。ひとしきりハ身にも命にもかへて。くミつきもミあふかとおもへバ。じきさまはなれて。先勝負なしと別れる。このとりくミ。見物の目にハいたつておもしろく見ゆれども。とかくしまいつかずして。ひきわけとなるすまふなり

おちや引ニ供のもの

於茶引ハどひやうへあがると。じきさまころけてかゝるすまふにて。手もあしもなし。相手供の者も。おやかたのふんどしにてすまふをとるやつ。たゞ野暮にちからつよく。いつこうに手ハしらず。むりむたいにへしつけて。かちを。とろふとする。すまふ取なり

中どしまニ色おとこ

此とりくミ。
中年増いたつて功者にて。血気さかんの手取なれバ。客もこれにひだりをさゝれてうごきハとれず。もミ合。晴天でも十日ばかりハ。居つゞけもしかねぬすまふ。しまひのはてにハ。内の年寄などがまわり。ゐいやつとひきわけて。まづしバらくおわかり〳〵

ねんあけまへのすまふとり。いたつて功者にて。なんでも相手を茶にしてかゝり。立合にせんをこして。あたまからひつたりと。くミつくふうなり。あい手親仁客。氣ばかりちんでも。はやおひこミのすまふとり。

。されどもわざと。おしよく株からまけてかゝるハ。どふでも茶屋から。こすりのすまふと見ゆるなり

床がけニ 武左のうミ

此とりくミいたつてひつつこく、くミやつていつかうに勝負つかず。とこがけすまふした手にまハり。相手の咽の下へかおりついてはなさず。武左のうミ大がらにて。ずいぶんせきとりと見ゆれども。すまふへたにて手をしらず。只ちからまかせにおしつけるばかり。とこがけじゆうにおさせて。

いさゐかまハず。土俵ぎハにて。どんといふ目にあハせるつもり。いつたい双方ともに。つよずまふにて。

ねからよハらぬとりくミなり

（ふりそでニ
　まつしや川

振袖いまだならひ出のすまふ。まけるをいとハず。むしやうに相手のじゆうになりて。おやくめのよふにとりくミに身をいれず。よいかげんにあしらふ。末社川。すまふ小りこうに立まハれども。いたつてもちまへのちからよハく。おとこまへもわるし。人のあげあしをとる事がゐてものにて。子どものよふな相手をとつて。十分ころすつもりなれどもおもひの外。人におぶさつて來るゆへか。しよいなげに。どんとなげらるゝをたび〳〵なり

（色じかけニ
　かすり取

此とりくミは。兩方いたつてあやうし。いろじかけ。さま〴〵の手をつくし。まけいろを見せて。容

ねやぐらにあげたりさげたり。おつにからんで。手をとることめいじんなり。客かすりとりも。ねからじよさいのなきすまふにて。いろ／＼の手をいだし。たがひに取こミしやうぶをこゝろがけ。ひつかけておつたをす。さんだんばかりして。いつかうにはてしなく。後(のち)にハ双方愛相(さうはうあいさう)をつかして。ひきわけとなるとりくミなり

（手とり川ニ
　出ばんじま

此手とり川ハ。たびう人の田舎(ゐなか)ずまふ。又ハ新(しん)くだりの上方(かみがた)ずまふなどの。手合せしれぬを。よくとりこなす角力(すまふ)なり。サア　。相手(あいて)のまハしへ手をかけて。ぐつと引よせ。じゆうにふりまハす。相手出ばんじま。羽(は)がひ〆にあひてほぐす手をしらず。十分にとりこなされる。しかれども金(かね)のちからつよきゆへ。ひどく投(なげ)らるゝ氣遣(きづか)ひハなし

（ちやわん酒ニ
　まじめ顔

茶碗酒大かたハ二段目のすまふ也　むしやうに智恵のちから自慢して。むかふの手をのミこんだ氣になり。取くまぬさきから。はや客のひだりをさし。兎角立合に。相手をまたせてとりつかず。土俵へあがるいきほひハ。とほうもなくすさまじけれども。手もなくころけて前後をしらず。相手まじめがほ。たび／＼しこをふミならし。どふしてこうしてと。なげる手をかんがへながら。ちから瘤をにぎりつめて。十分にとりくむつもり。やつといふと造作もなく。かちハ勝たれども。あまりおもしろき。とりくミとハ見へぬなり

たて引ニ　しんじつ

初會に取組のかほぶれをせしより。二くハい目に客の腰をぬかしてとこ花をもらひ。だん／＼に客をかく。四十八手もつきてしまひ。後にハしん手をいだしてたてひきになり。まけてもやり。客のじゆうに。茶屋の二階の　恥とおもわず。相手の眞實手づよくして。ふんごんでの取くミ見物の目にも一しほの勝負見どころあり

中入

中入後の取くミ後編に御らんに
入可申候

跋

東西〳〵。夜も明方になりますればバ。先今晩ハ是限。どこどん〳〵と。うち出されて皆々歸る中田甫。おし合へし合行中に。十分勝たる角力取も。おそくなつて内の首尾を案じながら。色も靑ざめて周章歸る。勝たる相撲でさへ此通り。況や投られたる角力取ハ猶更。是をおもへバこんなすまふハとらぬがよし。亦爰に獨角力といふものあり。裸嶋に宿なし川。ヤアどこへ〳〵。ゑいとこなと。ひとり手に投たり投られたりして人の門にたち。壹錢ヅヽ貰つて步行

乞食相撲。是〻な𫞼のすまふを。取過たる人〳〵のなれの果。兎角倡妓とすまふが過ると。身代の腰がおれ。金銀のちからなくなり。身上仕舞宿なしの身になりても。やつぱり角力がすきなれど。相手もなければしかたなしに。獨角力を取。門〳〵にたつ因果のつくばい。愼給へ大ども衆なんと合点か〳〵と大きにお世話をいふ事しかり

東都通油町

濱松屋幸助梓

吉原帽子　全

吉原帽子自序

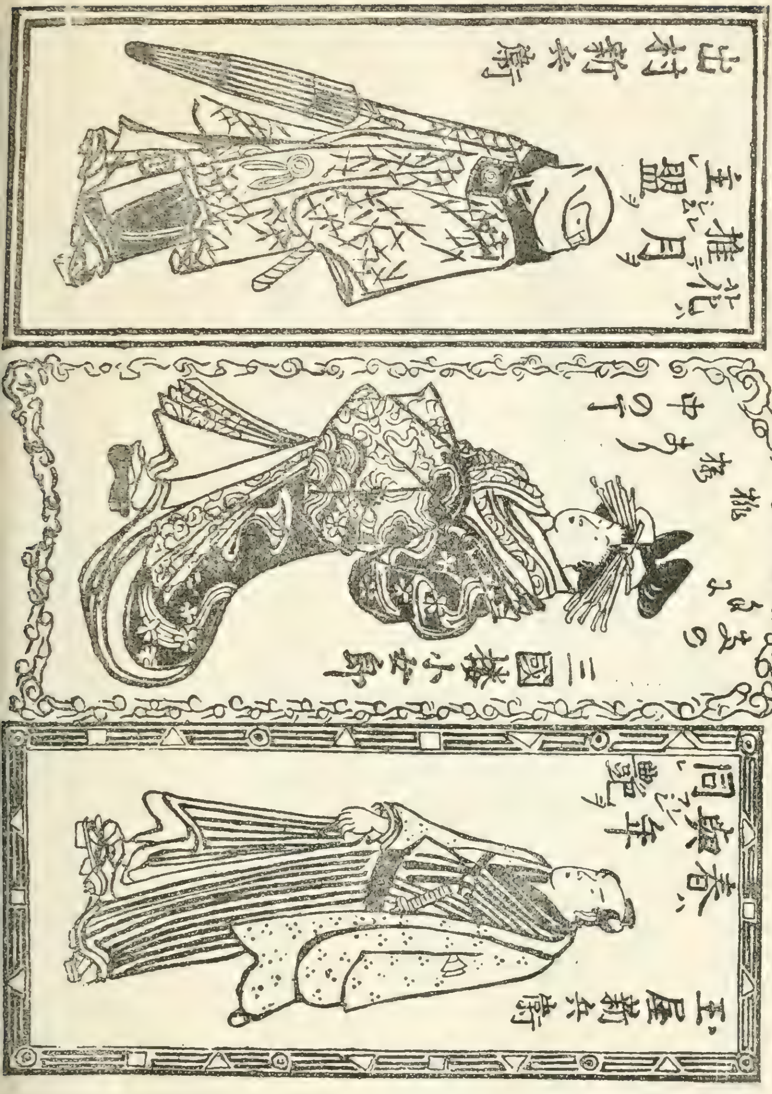
近頃芳原帽子といふものあり。其製たるや。眞綿で頸の締縊。能。人の異見を聽者ハ。譬謬るとも不亡といふ事にや。それ斯を頭巾といはず。帽子といふハ奈何。夫。兜頭巾は編團。報爐頭巾ハ壊そふ。以頭巾ハ頰被。誰乎行燈の日斗頭巾。地色が味す眼盜頭巾。費バ親が究頭巾。金の山岡頭巾でも。貧の倫に戀の歌。袖形頭巾の娼妓なく。嫖客に宗十良頭巾なし。投頭巾ハ浪華の。俠客らしく覺ゆれば。一番捻て。芳原帽子とハ名づけたり。されバ倡門に入る

者。此帽子を被て。能寒氣を防ば亦。親の勘氣を不受哉

煙花浪子識

小女郎之傳

小女郎美色出羣身雖曲中者流然非如夏姫也狎客玉新之及磊落佐之情益洽也亦遇家貧出新雖勉同枕席不與之合也出新憐其貲節從良而與玉新卒歸玉家嗚呼可謂妓女中貞女豈淫撿俗妓所可比綴乎


出村新兵衛

寄曾我狂言目錄

第一齣

出村玉屋ハ一家中曾我兄弟が

ハテ珍しき初會の對面

第二齣

虎少將ハ倡妓の貞女

ヲヤ馬鹿しい小女郎が俠

第三齣

小女郎が從良ハ五月下旬

コリヤ有難大門の切手

從是二番目後編始

吉原帽子

○第一齣

出村玉屋ハ一家中曾我兄弟ならぬ　ハテ珍しき初會の對面

大盡舞に曰。清少納言がよませたる春曙とハおもしろや。とハ實此曲中の事ぞかし。二日ハ客のきそ始。しつ守殘る妓女の。後着の褄（ママ）いよ／＼篤く。燕亭の松飾ハ裾の張ぬを門並とし。倡家の門松ハ向前の飾と突合て。いはゞ抱ついて立る姿あり。是も色氣を含るならん。廓ハづらりと青簾垂て。緞簾を懸そふ。内側に大黒舞の狂言あれバ。此方の二階にハ羣妓ゝな／＼櫺子より見物す。各初衣衫の綺羅を賁り。盛粧艶服光彩人心を動し。魂色陣に迷ひ。氣雄風を盡ざるハなし。洵此平康の盛事なるをや。（さて此三國屋の表座しきのおいらん小女郎が。けふしまいの大じん茶屋ハ出村やの新兵衛。いふきやくじんなり。一分はづんで大黒舞を見せる○こゝに又小女郎が色客の新兵衛ハ。なじみの茶屋玉屋にかけ

たゝまり。此三國やのにかいとまり。今ハはかなき身となり。けんぶつぐんじゆの中に立まぎれて。にかいな見あげ。小女良ハ見おろし。たがひににらみあいて。上と下できをもむ○大黒舞ハそがきやうげんにて。たいめん三重たいこ入のしやみせん）〵トツテツテンツントンチンチヽリンリンチヽチンリンリン〔たいこ〕ドンドン〔かぢはら〕まて／＼。つんでたやつらを見れバ。曾我兄弟のびんぼうがミだが。春がきてもまだ中の丁のてりごまめハくらうめへ。なんだかそが／＼したなりで。みじめなざまでござらあ。ミなわらわつせへ〔ミな／＼〕ソハヽヽヽ〔あさいな〕だまりやあがれげぢ／＼めら。なんと介經もし。兄弟のもいにあつて。やつちやあくんさるめへか〔くどう〕そがとくどうハ一家中。さてハ河津がわすれがたミ。ちかづきになつてくれうが。見れバ何とやらんむねんのそうごう。當時かまくらどのゝお覺へめでたきすけつねハ。大だいじんだ。見るかげもねへそがとのばら。びんほうにんのやせうでで。なに左衞門にはがたつものか。ばかなつらだ。（此時にかいの大じん新兵衞。こうまんに高／＼とせきばらひエヘン／＼）〔五郎〕おもへバくやしい介經殿（トとびかゝり立まわりあり。玉屋の新兵衞も。くやしくにかひをにらミつけると。小女郎はながミをまるめて打付る。てうど新兵衞が額にあたる）〔あさいな〕コリヤおつこてへわ／＼〔くどう〕今ハうたれぬ時節をまて。五月下旬の狩場のやくめすむまでハ。此左衞門に手むかひなすと。そちたちばかりか。母まんこうにまでなんぎがかゝるが。そこの所へきがつかぬか。お

やハなけれど子ハそだつと。せいじんなして祐成時宗［兩人］祐經殿［すけつね］ハテめづらしき［三人］たいめんじやよなア（ト見へよくならんできつとなり。是にてきやうけんはねる。かくて床姿なかつぎ出せバ。けんぶつ〵ミなばら〳〵とちるにぞ。時宗のごとくにらみつめてゐたる玉やの新兵衛も。手をむなしくゆかんとするに。二かいにおゝきなこゑをして）［小女良］モシへ新さんへ。まつてお出なんしへエヽ（トいゝすてれんじのせうじを立きつてひつこむ）［長助］まつてゐろとハおれへいふのか。アノ客人も新兵衛といふそふだが。なんにしろきのもめる。こじつてい正月だ（トひとりごとないゝながらしほ〳〵と立さる）△（にかいハ又ひとりやれ〳〵とにぎやかにて。とや　おさよる）［小女良］いつぞ大黒舞がおもしろふおした［田舎］おへいのよふに他所行がなるなら萬狂言を見せに。みんなをつれていかうもの［女げいしや］おともがいたしたうおざいますね［ふりしん］モシ十良とやらハいろ男でありましたねへ［ばんしん］おめへほれなんしたかばからしい［たこ八］イヤアとんだ事〳〵トテチントテチリ〳〵（とすわつてゐておどる）［ふりしん］すかねへ鮹八づらだよふ［ばんしん］わつちやア梶原がいつそきにすきんした［やみ子］イヤアこいつもとんだちやじんトテチリ〳〵（ト手ばかりおどる）［ばんしん］アイサわつちやアお心よしの（ママ）おてきもいだからね［たこ八］時にぞうひようどもいつたんひきとりましよう［茶やにうば］おむかいハ何時にさしあげましよふ［田舎］いろしのつかねへまへにかへりやしよう（トいふゆへミな〳〵いとまごい

してどや／＼とかへる）［ばんしん］チヤまだ新さんの羽織が出ていゝすよ。小夜舟さんよくしまつておきなんしにへ（トいゝすて立てゆくふりしんもはをりをたん（マヽ）でたんすへしまい立てゆく）［出新］なるほどばんしんが顔もかぢはらといふものだ［小］アイサかをばかりでおつせん。こゝがむづかしうおざんすから。わたくしやアたいてへ心づかいをいたしいす［出新］どこの番頭もむづかしいものだが。しかし心よくしてゐたらおいらんがすきな事をするだろう［小］なぜでおす。いろでもしいすかへ［出新］いろをするもはたらきといふものだが。あんまりすぎるとしよくたいするよ［小］モシイわつちやアしよくたいするほど。いろをして見たうすが。わつちらがよふな者にハだれもあいてがおざんせん［出新］ソノあいてハこゝにしうちしてゐるによ［小］おまへさんのむねにかへ［出新］いんにやぬしのむねにきいて見な［小］アイサきいて見いしよう（トすこしさしうつむき。にことわらつて。たばこをすいつけて出しながら）アイサもしい。わつちがむねにきいて見いしたら。どふもおまへさんのきがしれいせんからよくきゝ申せといゝす［出新］きく事があるならなんでもきゝなせへ［小］そんならおきゝもふしいせう。おまへさん。アノどふいふきでわつちらがよふなものゝ所へお出なんすへ［出新］くるからにしてハどふいふきでといふにもおよバぬ。べたにほれたのさ［小］ほんにかへ。うそにもマアそふいつておくんなんすハ。しんにうれしうおざんすが。どふもわたくしやあなんだかきがすみいせん［出新］なんのこつ

たゞなにがすまねへの〔小〕すまぬといふハ。おまへさんのお心にもおざりいしよう。去年の市のばん
初にお出なんして。わたくしがよふなものを。初会馴染になつておくんなんして。廿日から見世がひ
けてからも。繁々おかよひなんして。何やかやせつないわけをもおきゝなんして。こゝろよく後著の
相談から。松の内の仕舞迄。花やかに正月をいたしいすも。みんなおまへさんひとりのお世話になり
申いす。ホンニもつたいないよふで。しミしんじつうれしいにつけ。よくおもつてみいすりやア。ど
ふもおまへさんのお心いきが。さつはりとわたくしにやアわかりいせんで。いつそくろうになりい
す。なぜとおつせいし久しくせわにしてくれなんした客人さへも暮からきてハおくんなんせん中に。
まだおなじミもうすいわたくしを、しんせつにせわにしておくんなんすほどで。ヤノうちとけておくん
（マヽ）なん所がおざりいすからさ。それがどふもきにかゝりいすから。おきゝ申いすのでおざんす〔出新〕ハ
テ初がなけれバ三年のなじミがねへ。こふしてくるからハせわハしうち。それを他人がましくいつて
くれるハうらミだ〔小〕それがやつばりおはぐらかしなんすのでおざんすよ。なんぼいたらぬ女良だと
て。袖留たちうどかなん（マヽ）なんぞのよふに。なぶつておくんなんすなへ。わたくしやアいつそくやし
いよ（トちよつとなく）〔出新〕なにがくやしいこつたの〔小〕あんまりおなぶらしなんすからさ〔出新〕ち
らすとハなんのこつたろう〔小〕しれんせんかへ。わたくしがこれほどきをもんでおりいすものを。ち

つとハかわいそうだとおもひなんして。きをおちつかせておくんなんしにへ 出新 なぜきがおちつか
ねへの。なぜだハふ 小 なぜでもさ 出新 そんならやつぱりなぜでもさ 小 ヱヽイもにくらしいおれ
つていよふ〳〵ト　）出新 なぜといふハ
小 なぜへ 出新 きがしれぬから 小 何ざんすとへ 出新
てめへはらんでるよふだな 小 ヱヽイ（トびつくりおきかへり、顔色かわりきやうざめる。おりしもびやう
ぶのそとから 茶や男 ハイ旦那おむかひにあがりました 出新 出村屋かサア〳〵いかふ〳〵（トし
たくして立出ながら、小づかひに金五両だんまりにてまくらのひきだしあけていはれぬおゐらんのはらおび。
とかれぬなぞハ心のうち。そとハころしも春い夕ぐれ、あをやぎすし 鯛の鮓ウヽシ

○第二齣

虎少将ハ俳妓の貞女

キャ馬鹿らしい小女郎が俠

裏哉新兵衞ハ。玉屋の懇たゝまり、三國屋の二階とまりてよい。さる裏茶屋にて出會しが。つかひ

はたして勘當の身。はやたちゆきもならの葉や。二人が情とたてひきに。小女良に囲れて。裏店借のひとり者。疊ハ焼に埋れて。蛛の巣の綱わたり。荒たる宿の春さむく。損料蒲團辻ばんの。今戸焼にも火の氣なく。破行燈火燧箇。とりちらしたるしだらなさ。去年のまゝなる亂髪。三絃枕の幻寐ハ。あはれ僊姿なりける（世に男のかこいものあるハ此里ばかりなり。こゝに又小女郎ハ出村やの新兵衛な大門までおくり。内へハ中の丁にゐるかほで。かくれてこゝにあいに來り。戸をあけて見て）〔小女良〕チヤちよつと見なんし。此マアとりちらしたなりわハ　〔番新〕ホンニどふさしつたのだのう。モシイ新さんへ猥をなさりいすなよ。くすぐりいすにへ　小チヤいやだのう。ながしがくされていゝすはからしい〔番新〕アイサおゐらんのとこへこゝにおきいす（トうら茶屋からもつてきたふたちやわん物をあがりはなにおいて）モシへわつちやアとなりにはなしておりいすから。しつぽりとおしげりなんしへ（トきなきかせ。戸を引たてゝとなりの女げいしやの内へはゐる。此番頭しんぞうむづかしきやつなれども。此うらに地色がありて。身にあやまりあれば。おゐらんのしだらもいはれず。しようちでゐる事なり女げいしやの内にハけいこの）　上るり〽わがみをよこにうちかけにひきまといよせとんとねていだきしめゆりおこせバ〔小〕モシイおきなんしへ。そんなにねたうおざりいすかへ（トくすぐりおこすをとつてなげ）〔玉新〕ねてもいゝハうちやつておけ。うぬがせわになるものか（トたぶさをとつてかきむしらんとせしが。さすがりつぱのよこ

ひようご。まさかと手あたりしだい。火打箱なとつてながしへ（なげ出す）［小］ばからしうおざりいすハ。わけもいはずになにがそんなにはらがたちなんすへ ［出新］はらがたつて〳〵。ごうはらで。はらがへつてゐるハ。晝大黒舞の時。二階でたしかまつてゐろといふ聲がしたとおもつて。もふくるか〳〵とまつてゐたが。ひもじいから三絃ばかりかぢつてゐたハ ［小］ホンニまちどふでざんしたろふ ［出新］まちどふもすさまじいハ。うぬにかゝつてこんなひだるい正月をするかとおもへバ。はらがたゝねへでどふするものだ。ホンニむまれてから雜煮をくわぬハ此元日ばかり。これも親のばちとおもや。いつそ死てへよふだ（トほろりとしたる男なき見るにもるともなミだぐミ）［小］ホンニぬしもやせほつたく。いつそきちけいじミなんしたによ ［玉新］きもちがハねへでハさ。大晦日にハ一文なし。まき屋米やにせめられて。やせほつたくなつたのだ。てめへ都合しやすといつておいて。よくべらぼうにしたな ［小］よふ〳〵都合ができいしたよ。さつき出村屋の客人が。これをおいてめいりいした（ト紙につゝんだ金五兩。ひとつぶそへてやるなミだ。とつてよこがをへほふりつけ）［出新］五兩ばかりなんにするものだべらほうめ ［小］それにべらぼうがいりいすかへ（とハいふものゝ大じんにさすられるより、色男にたゝかれるがよつぽどうれしくかわいゝがいふのならいにて）金がいらずバ。いつそわつちをころしておくんなんし。ホンニぬしもぐちになりなんしたもつともでおざんす。こんなはかない正月をさせ申しいすも。はた

らきのないわつちがよふなものにおもわれなんしたが。ぬしのふ仕合（しやはせ）とあきらめて。時節（じせつ）をまつておくんなんしへ。又かうばかりでもおざりいすまい。みんなわつちがわるふした。あやまりいすからかんにんして。きげんなをしておくんなんしよ。ハテ正月でおざりいすハな 玉新 きげんをなをしていにもはらがへつてちからがねへハ。てめへおれをひころしてしまうきだろふ 小 チヤおそろしいくちをいゝなんすにへ。そふでおつしようとおもつてもつてまいりいした。サア〳〵おあかんなんし（トいふハにしきでの三組のふたちやわん。あけて見れバ正月のぢうづめ 玉新 なんぼはらがへつても。こんなやぼなものがくらわれるものか（トとつてながしへなげ出す。此ものおとにおどろき。ばんしんとなりよりかけつけ戸を引あけて見れバ。ながしハ大さわぎ） ばんしん チヤなんでざいますへ。チヤ〳〵おまんまもおさいもだいなしになりいした。せつかくおいらんのとこでもつてきさつしつたものを 玉新 せつかくもつてきたものならりやうけんしてたべてやろうから。手桶（てをけ）でいするでくんな ばんしん チヤばからしい。おまんまをせんたくするのかへ（トしだらなくながしにこぼれてる正月のぢうづめものをひろいあつめる。ばからしいが此里のならいにておかし） ばんしん チヤちよつとごろうじいし。まつしろなかゞつの子（こ）がおざりいす 玉新 そりやあ火燧石（ひうちいし）だ。大（おゝ）わらい〳〵どふりで飯（めし）がほくちにまぶれてごま塩になつたやつさ。イヤアやぼからぬものが。あるてりごまめか（トとつて見） おきやあがれながしの腐木（くきれき）だ。

ヲハヽヽヽどれ／＼その甘露梅ハくふゐたらう（トとつて一口かぢり）アヽ消炭をくつたパツ／＼

ばんしんヲホヽヽヽホヽヽヽヽ 小 およしなんしばからしうざんすにへ 玉新 ばからしくつてもはらのへつたにハかへられぬ（トまじめでいふ） 小 ぬしハそれほどまでに。ひもじうざんすかへ。いつそはかないよ（トなミだぐミ）臺屋をとりよせておくんなんし ばんしん アノ壹分が申しいしようねへ。モウおかしくつてはらすじがよれんすよ（トそで﹅口をおさへわらひながらかけ出し。戸を引よつてとなりへゆく。あとにハ金をとりあげて） 玉新 すてたものならふしようながらひろつてやろう此金も出村屋の客人がくれたのか 小 アイサかねて申しいすとふり。小遣までできをつけて。なにやかやせわにしてくれんすほどで。去年の初會から。ついぞまだあつた事がおざりいせんよ。あんまりきがしれへせんから。けふいろ／＼きをひゐてみいしたら。モシイわつちがはらんでおりいす事を。どふしてかよくしつてそれゆへおかねとはらをたつてかりながらも（ヘソ繰ヤッと）又此金をくれんした。どふいふきか。ふかくおもつて見わバ。わつちやアこをふさんすよ 玉新 ムリはてなきのしれぬ客人だ。てめへのはなしできくに。年恰好てうどおれが女房の兄源之介のよふにおもはれるが。名ハおれとおなじ新兵衛。ハテわからねへ。けふ大黒舞の時。その客人を見たくおもつたが。障子の影で見へなんだ。どふかしてちよつと見てへものだが 小 モシへ 妹があると申しいした。こないだにその妹を見物につれてく

るといゝなんした。もしやひよつとその源之介さんとやらじやアないかねへ。出村屋の二階にハてうどへやがおざりいすから。かくれてゐてごろふじいし 玉新 そふきけどバふやら源之介らしい。もしその女がおれが女房な時ハ 小 どふなんすへ。そんなにおかミさんが。あんじられんすかへ。さぞかしおかミさんも。ぬしの事をくろふにして。わつちをうらんでおいでなんしよふが。わつちやア思ひきられぬあくゑんでおざんすよ 玉新 ハテいたこの文句のとふり 小 女房もちにもほれまいものか。にようぼさらせてわしがなろかへ 玉新 といふよふに。きをつけよくおもつてゐや 小 ほんにかへうれしいねへ。しかし来月ハ寮へさげると内証でおつせいすからそふなるとあわれんすつがうもしにくし。いつそ心ぼそいよふで。ひよつと難産とやらで死んだなら。又うつくしい色をおこしらへなんしようかとそれがわつちやア。くろうになりいすよ 玉新 たれがそんなにくろうをさせる 小 くろうをするもたのしみでおざりいすハ 玉新 コレべらぼうめナゼこんなにまよわせたよ 小 ナゼこんなにほれさせなんしたへ ヱイモいつそにくいよト○

○第三齣

小女郎が従良ハ五月下旬
エイ難有大門の切手

青陽の空あをみたる曙より戀と情の中巻。出村屋の二階の賑ひハ。被々こ新兵衛大盡。妹お房をつれきたり。小女良をあげて。大勢とりはやしたる大劇。男藝者の藝づくし女げいしやの。めりやすチヤチヤン（トおさまれバ）〔にようぼう〕ごしんぞさん。ちつとおいたゞき申ましよう〔小女良〕アイサ申へ（トたばこをすいつけておふさへ出す）〔おふさ〕はい（トいつたばかり）〔出新〕時にミんなもきいてくんな。あれにはらのたつはなしがあるてさ。これハおれが妹だが。よしねへ所へかたづけて。とんだくろうをするのさ。ていしゆがまんざらこつちへくるとしりながらも。薄着してお風めすなへちよきとやら。といふ何のとふり。着物の襟をもなをして。きげんよく出してハよこすものゝ。女だもの。ちつとハ角もはへそふなものさ。姑ハあんまりきさまがきがいゝからといふそふで。中にたつてしにくゝ。りちぎなさかから。それをくろうにして。たつたひとりの妹を。かわいさうに籠絡にした

のさ。よしはらといふ所ハ。どんなおもしろい所かといふから。氣ばらしにもならふかと。見物につれてきたが。初春早〻。なかせにつれてきたよふなものだ。きらわれるていしゆでも。かわいゝかして。その事ばかりむねにあるから。此とふりふさいでゐるのさ。みんなうかしてくんな【ふさ】兄さんへ。そんな事をおつしやると。おいらんのおつもりもおはづかしい。此里までもつけあるき。恥なあたへにきたのかと。おさげすミもあろうが。いふにいはれぬわけあつて。わたしハいつそすてられても。どうともなれど。かんどうハなすつたものゝ。親御たちのおあんじ。そればつかりが（トほろりとしたるひとつゆに）【小】（さてハ玉新のよめごかとぞつとし。針のむしろに座す思ひなれども。さすがに里なじみハとぼけた顔におちついて）ホンニどこの女良衆かぞんじいせんが。おまへさんのそうおつせいすをきゝいしたら。たいていつらいこつてハおざりいすまい。そのお方もお目にかゝりなんしたら。さぞ穴へもはいりたふおざんしよう。おまへさんもさぞおはらがたつて。その女良がにくふおざりいしようが。ぬしがそふしがなくならしつてハ。猶ぎりにもどう見すてられんしようへ。かくまい申ておくほどでハ。なミたいてへなっくろうじやアおざりいすまい。あだやうわきで。よび申たでもおざんすまいし。いふにいはれぬわけもおざりいしようから。よく〳〵の事とおつもりなんして。かならずわるくおもつて。おやりなさりいすなへ【出雲】インニヤわるくおもふめへものでもねへ。女房子ハなかせ

ておいて。女良買もすさまじい。すへしじう。りつぱにもかいとふす事か。おやの内ハおいだされ。今でハこつちへきて。あろう事か女良にやしなはれてゐるとの事。それでも。女良買か。女良かわれがきいてあきれる。そんなはたらきのねへ。ろちもねへ男に。貞女をたてよふトニ(よりノ誤カ)リ。いつそおもひきつて妹に出てこいといつても。外へゆくきハさらにねへ。その心いきがかわいゝのさ。もひとつのもふ

「ふさ」(そでをひき)きのどくな兄さん。あんまりおつしやるなへ

「出新」いゝハうつちやつておかつし。女良買なら。申にくいが。此新兵衛などのよふに。みんなを大勢ひきつれて。どん／＼とにぎやかにするが。遊といふもの。そふおふに合方のせわをもするが。客人といふものだ。それに茶屋のかけハたまり。かつこうわるく二階もとまり。格子さきをうろついたり。苦界の身のせわになるよふな。いくぢのねへ。はたらきのねへばかな男があるものか。戀も情もうつちやつて。あいそもこそもつきはてた。おれが妹婿とおもや。はらがたつからいつてきかせる。あんまりしがねへ。はかねへ男だ。くやしくハこゝへ出ろ。ト。いつちやあ。なんだかあいてのねへけんくわをするよふだアハヽヽヽ(とちやうろうす)〇こゝに玉屋の新兵衛ハ。小女郎が手引にて。此出村屋のにかいに。さいぜんよりうかゞひゐたるが。見れバ新兵衛といふ、　にようぼうおふさが兄の源之介にて。むねにこたゆる悪口をいゝたてられ。ひんすれバどんするとし。まわりぎになりて口をしく。ばらにすへかねからかみさつとおつぴらいておどり

出、[玉新]お房をされバ他人の源之介。今の悪口おほへたか（ト出村がみけんをはつしとうつ。これハと皆〻立かゝり。まうそふはう〳〵引わけて。上を下へと大そうどうになり。源之介がかいほうおふかたならず）[ふさ]兄さんひよんな事になりました。わたくしやあモウいつそ。死なねバなりませぬ [出新]チツト。こゝでいつてハ花がちる。その二ばんめを出すまでハ。やつぱり新兵衛。さられたお房。此場のけんくわもしら魚の。すミだ川へおしながして。堀から舟としようか。イヤ駕ハはいつたかの [にようぼう]ハイ〳〵すぐにいらつしやりますか [ていしゆ]それにしてハみけんのおきずが見ぐるしい。はゞかりながら私が此吉原帽子。大門までめしませぬか（トさし出すをとつて）[源之介]よしはらほうしとハおもしろい。一句うかんだ。かうもあろうか

かぶつてもかんきハうけぬ頭巾かな

アハヽヽさあいきましよう（トみけんのちどめに。はちまきをしたうへに。件のよしはらぼうしをかぶり。ともをふおふさハおこそずきん。おりしもばら〳〵春さめに。人目をしのぐじやのめのからかさ。此出村屋のゑんさきより。立出れバ、うしろよりハ小女郎。にようぼうはじめ。みなそろ〳〵。大門迄と送りいづる。あとにのこつて。とりこになつた玉新が。思へバむねんとせきこんで。おつて出るを）[ていしゆ]まつた。申事あり。おまへを私が二階にしのばせ申たも。源之介さまへ通して。なにもかも御承知でおつしやつた。みな

おまへのお爲をおぼしめして。ごいけんのあつこう。ありがたくおぼしめせ。けふ御しんぞのいらいしたハ。小女良さんの身うけの手つけ。内證へおわたしなされ。五月下旬迄にハ親御さまの御きげんをなをし。根岸の別莊へおひきとりなされて。おいらん安産させますとの事。こんなとふりもの丶御しんぞもねへもの。あしくおぼしめすとばちがあたりました 目新 ハトきゝよいもさて丶そふかとうれしいやらかたじけないやらうつてかへ。これにてわかつた。實のあるおふさと。男氣な源之介殿。我名とおなじ新兵衛といふて。小女良へかよはれしハ。かうもおさめる狂言であつたか。そふとハしらず。はおいつて。今さらどふもめんぼくねへかッレ（とせめて一言わびをせんと。あとをしたふておつてゆく。時しも大門のそとにハかご二丁ならんで（トこの源之介がのりかゝる所へ。つかつかとよつて。源之介がはきものをとり。つらに手をつき。あやまりいつて） 玉新 なんにも申さぬ。新さん。此とふりでござります 源 コレハ／＼おれよおがい（意外カ）／＼ かごのあとぼう だんなよろしうござりますか（トかごのたれをおろす） ほうばな どつことな 源 はやいの月のおいらんを。それとおふさがいわだ帯みのわの紫のおろし髮ハゝ身をうけだして根岸の別莊。あんじるよりうむがやすく。おやごのきげんのなをるまで。かならずたんきをだすまいぞ。コレ駕の者これハだれが聲色だろう。アゝおふきによつたがソッ トよつたふりおくり出たる小女郎、會所のへおあんどうのきわに立そひて） 小 モシイごしんぞさん。ごきげんよふお

いでなんしにへ［ふさ］おいらんむり洒（さけ）のすぎぬよふ。ぬしをおたのゝ申ぞへ［小女良］アイサおさらはでおざりいすにへ［大おん寺のかね］ボヲン〳〵

吉原帽子　大尾

吉原帽子跋

芳原をてうといふは彼胡蝶の夢に譬ふ乎。てうハ兎角とまりたがる所以也。小女郎ハ菜の葉。出村玉屋ハ蝶々乎。蝶ハ菜種の花しらず。菜種は蝶の味しらず。しらずしられぬ中の丁。荘周ソレ奈何。女郎のちよく〳〵らがとめれば。客のおちよく〳〵もそら

とんまつた

契情實之卷

全

楚登之
美津
自画

吹からに秋の草木の色かわる。蓬の窓に倚そへて。たそがれ時の淋しさを誰と語りてなぐさまんと。思ふ折からに。したしき友のとひきたり。心のじつを打解てかたりあふたる戀ばなし。これを洒落本にあらはして。櫻木にちりばめん儘。予に其語りを綴よがしと乞侍るにぞ。元より鄙の生れなれバ。その風流をつゞらるべきと辞し侍れども。さらにもちひざりしほどに。詮すべもなふ。さらばまづつゞりても見ばやと思へども。いづれにたよりて書たらんも。準繩なかりしまゝに。兎やあらん。角や爲むとおもふ折から。過し頃より行れたる。田螺金魚翁が綴たりし。契情買虎の卷といふ本あり。其作殊に妙にして。譬バ人をしてこれを讀しめバ。梁の塵をも飛して恨が如く慕がごとく。泣が如く訴るが如し。於戲世にも又かゝる風流の作ありや。いまさいわ

い。友の予に作編を乞まゝに。我ら如きの及ぶべきにハあらねども。しバし虎の卷のちからを假り得て。ようやくこの一本をつゞれり。虎のまきの如きハ。至れり盡せり。實にしやれ本の棟梁と謂つべし。予この作中の誤。あるひハ落語等筭るにいとまあるべからず。諸子宜しく罪をゆるし玉へ

井の裏ノ　楚登美津述

じつの巻綱目

○第一

迷の闇は

戀慕の一筋

○第二

積るやまいに　郭への音信

あだなる文も　つかへのたね

○第三

隅田の舟に　ひかるゝ昔し

溢る涙も　はてハ睦言

○第四

友待蟲も　庭の木陰

夫と知たる　丸メ手ぬぐひ

○第　五

佛の利益も　たぶさの一燈
賓と賓とに　花嬌が手管

以上

當世じつの巻

井之裏楚登美津。著

第一

○人ハ謂古しへむさし野ゝの月ハ。露けき草を別いでゝ。おなじ草葉にかたむくと世がたりせしも。いつの頃よりか人の住居のかさなりて。今ハ家より出そめて。家にいるかとうたがはる。首を廻らして南をのぞめバ。名にしおふ三国に聞へたる富士の山峰々としてそびへ。けむりにむねをこがすなるその煙ぐさもいろ〳〵に。東の方をくだしうかゞへバ。乾く間もなきあら磯の。漠々たる蒼海を包めて。房總の兩國はるかに白濤の上に連れり。爰ぞ丑寅の方にあたりてひとつの別世界あり。金ふる里とも云ならわせり。黄がねしろ金ハ風の前の塵かとよ。遣ひ捨る遊客のかよふ戀じもさま〴〵に。あるひハ四つ手かごに打のりて鳥と共に飛事をあらそい。ゐもん坂にて袖かきつくろいこうかれ〳〵て大門をくゞれバ。牡丹芙蓉もはづかしのうかれめハ。三千にあまりて。いづれあやめとひきぞわづらい。蓉葵の香ハ紛〳〵として驪山のむかしに似たり。爰に優込邊に花嬌と云色

男あり。たらちねよりたまふ名ハ權三之助となん。年ハ十九のうす花に髪ゆたかにして眉清く。まだ朧月のうすぐもりかとよ。ものごししつとりとして言葉すくなく。愛敬あつて情ぶかく。只朧月を友として。花の元にハちりなん事をかなしみ。月の前にはかたむきやすきをおしむ。しかるに十八の秋の頃わりなき友にさそハれて。かい色里の全盛や。漢朝の花盛ハいさしらず。善つくし美盡す權現のとうろう。見にゆくけふぞいもせ川。心の花も笹川ぶたいに今宵おふみ星の。淵瀬とぞなりにけるが。このほど花婿は風のこゝちといひたて。たゞかりそめに打ふしつるに。とかく薬のしるしなく。母ハあらぬ嘆き心の内。頼たもしき權助が。かいがいしきあつかいも。甲斐あるやうにせまほしく。けふハあとをバ權助にまかせおき。その身ハ堀の内の厄除祖師へと心ざし。我子のやまいり端られし。門がたかけていそぎ行

【花嫁】コヽ權助最前くすりを。もらつてこい【權助】ハイそれでもおひとりで。おさびしうございませうに【くわし】すこいゝから。いつてきてくりや。(こゝろハかしこへかよひぢこ。ふうつけそへて。さし出す)

【ごん】どれまいつてきませうか(と一とすじに。しうのやまいをよくせまほしく。やたけごゝろのたけみつも。しりかるぐと一トこしきめ) サア。そんなら若旦那さま。まいつてさんじますから。かぜにおあたり遊バしますな。じきにいつてさんじませうから。ごふじうでもマアおしづまつて。お出なさりま

せ（下門前さしていそぎゆく）
跡にくよくれんぼの道。さるにても青柳ハ。おもわぬ風になびくならい。もし唉川が花心。うつろいふ香となるならバ。我みハ何とならのはや。葉ずゑにむすぶしらつゆの。病ひのとこもよわりはて。ふたりともなきはゝおやの。そのかなしみハいかならんと。おもふこゝろのせつなるハ。何にたとへんかたぞなき。こゝに二人りの友だちあり。松之助五三郎とて。水魚のまじはり淺からず。朝な夕なとひきたり。くわきやうがやまふをなぐさむる。けふも來りてくれよがしと。まちがほなる。かどぐちから

[松之助]くわきやうさんへ（といふこへにし）[くわ]松さんか。よくきてくんなさつたのう。いつそさびしかつたよ[松]どふだへ。けふハすこしもいゝかね。そして五三さんハ。きやせんか[くわ]イヽエ（といふ折から）[五三郎]ハアだれかきているそうだ。くわきやうさんへ（といふこへにつれてうちより）[くわ]五三郎さんがきなさつたそうだ。サアおはいり[五]まつさん。よくきなさつた花きやうさん。ときに何もかわる事もなしかね[くわ]あいさ[松]したがこの間ハ。でへぶやうすがわりいが。きぶんハヘ[くわ]ふさぎます[まつ]食事ハ[くわ]さつぱりたべません[五]そりやマアわりいねヱ。そしてなんという病氣だね[くわ]わたしがこんどのわづらいというものハ。ふかい別のつもつた事から[松]で

きたびやうきでありやせう〔くわ〕それだから。久しくおいらんにもあわれず。いつそこれがくろうに〔五〕ないやせう〔くわ〕くすりをのみたくも。きむづかしくてめんどうなり。たいていふじうな事でハないよ〔まつ〕ドレさんなら。薬(くすり)をあつためて(とくわきやうが。まくら元(もと)のしちりんに。火をおこし。そのまゝ。くすりをあたゝめて)サアあつたまつたから。のみな〔くわ〕松さん五三さんふしぎな縁(えん)でこのやうに。しんせつにしてくんなさるハ〔松〕ナンノマア。そんなばかな事をいわずと。のんではやくよくなるが。いゝハネ〔五〕コツくわきやうさん。子(こ)のびやうきというに。おばさんハうちにいなされバいゝに〔くわ〕けふハほりの内(うち)へ。いきました〔二人〕そしてマア。おまへのびやうきハどういうことだね〔くわ〕(とひかけられしはづかしさ。とハおもへども今ハまた。ひくにひかれぬことばのさき。もしや。よき手がゝりもあらんかと。思ひきつて)どういうことでもあらねども。これ。とつくりと聞てくんな(ふたりのみゝへこそ／＼と。いゝふくめたるやまひのほつたん)エウ／＼いつそ。かわいそうな。いかんければなを戀(こい)しいやら。なつかしいやら。そしてこれ。このやうにいく度(たび)こいというてよこすかしれぬ。びやうきの事を。いつてやりたけれども又あんじ過してひよつと。びやうきでも。出やうかと。思ふがゆへにだまつている。(といゝながらほろりと落すつゆなみだしがらみとめし左右(さゆう)のたもと)〔二人〕さつしているよ。とハいうもののくわきやうさん。なんぼおいらんが。そのやうにしてくれたとても。

そこが女郎のみのうへよ。めつたにはまるとしじうのつまり。皆の爲ならぬ事となろふ。それよりはやくくすりをのみ。くわいきしてからおいらんが。心のまことしんじつを。さぐつてからのふんべつさ［くわ］アレモウいつそはがいゝのう。わたしがこゝろを今はじめて。しんなさつたかうらめしい。きゝといわりいおふたりぞ。そんなふじつのあれならバ。こふまでしてくれたのハ。うそか誠かしんじつか

そのしんじつハ何からぞ。去年の座しきをしよくわいの戀。たがいに見そめほれおふて。いつそすいたも耳元に。のこるこなたもむつごとを。かわしおふたるほし合の。そのうれしさの我思ひ。何につゝまんみだれ心。つながるゑんのつたかづら

神〻かけてのしんじつさ。コレこふおがんでいるものを。もしや病きがよくなつたら。とも〳〵ちからをそへてくんな。しかし十が九つあだし野ゝ。夕べのけむりとなるやらん。すがりついてもいきたいと。思へども。老生ふじやうのよのならひ。あすのいのちハはかられず。もしもの事があつた時。悔ても跡にかへらぬ事。いつそのことにふたりして。わたしがびやうきをおいらんに。いうてきかせてこの文を。どふぞとゞけてくんなよ

と。さし出すふみもほそ〴〵と。いまだ十九の若むらさき。おとろへはてしおもざしハ。方士が貴

飢をたつね得し。そのかほばせもかくやらん。ふたりハしばらく涙をながし。

[まつ]コッくわきやうさん。そうきよはくてはならぬから。ばんにハじきにとゞけやせう。ずいぶんかぜでもひかぬやうに。もふひとつも引ッかけていなさいよ貝くれぐ〵も大事にしな。イヤわたしハもふけへりませう（とたちあがれバ）[くわ]モウおかへりか。今日もいつそありがたう。ほんにマアこのやうに。ちからを付て下さるのハ。死でもわすれハいたしません[まつ]なんのマアそんなむだごとをいわぬものさ。ふとしたことでこのやうに。こゝろ安くするものを[五]くわきやうさん。わたしもばんまでいたいが。どふもおつといられぬ事がありやすから。また明日あいりやせう[花]ナゼヘ五三さん。そりやアマアなんの事だへ[五]ナニサ又あすきやすから（と心のうちにハあわれなもよふし）二人つれだち歸りゆく（あとにかわりて）[權]（さぞやさびしくおわすらんと心ハうちへかよひばこあしにまかせてかへりきたり）ハイおくすりをとつてまいりました。さぞおさびしうござりましたろう[花]イヽヤいま近松之助と五三郎がきていたから[權]ハイそれハてうど。よふござりました

かゝるところへはゝおやハ。ゆきゝのみちのあしのまゝ。身にならしばのこゝちして。女のあゆみちからなき。杖にたよりて歸りきたる

[ほ]ゝ世もやけふハさぞるすでさびしかつたろう[權]けふハ五三郎さまと松さまがおいでなされまし

たそうでござります　［はゝ］ハアそれはよかつたのう
子をおもふみのおや心。わらじとくまもまちかねて。くわきやうに御符をあたへつゝ。ひとまにいりてきこゆるハ。百と十二のきつなのいのち。玉操音も聲たてゝ。七字のせうねんすみわたる。軒の嵐に花やさく。ひげ題目をかけまくも。なみだをそゆるおやごゝろ。げにじつそうの雲はれぬべし

第　二

○はるかに土手のながきを詠めやれバ。はてしもなく大門にたいし。屋のむねのてん水おけハ鳶からすのあしやすめかや。行通ふ少年ハ。尾花か末の秋のかぜ。としにまれなる折を得て。世にうれしげにいそぐも有。名にしおふこのいろざとのならハしとて。夏めきわたる雲井のそら。茶屋につらぬる青すだれも。すゞ風かよふ色客り。千くさのちぎりをかるかやも。茶やが迎ひに荻のはや。吹ばなびかんよそおひも。げにいろざとの全盛也
［客松］コレくれはさんおいらんハどうだよ用があるからもふ一チ度そふいつてくんな　［くれ］今そふいうてきいしたからヂヤ見なんしおいらんが　［松］ドレへ

こゝに咲川ハ。くわきやうがことハ夢にだに。しらくもかゝるはるのそら。匂ひみちたるよそおひも。何ごゝろなくあゆみくる。あとにかむろのことじはつせ。あどなきかほのしほらしさも。げに

あふみ屋のあげざしきなり

さき川 松さんよふおいでなんした。くわきやうさんハどうしいしたへ。いくたびか文をあげもふしいしたけれど。さつぱりおいでなんせんネ まつ サアそのことできやしたが。しかしいうたりやわるかろうが。いわねバわからぬ花きやうさんハ。この四五日ハ大びやうさ さき（きいてびつくり さき川ハ、ナニハ花嬌さんハ煩ていなんすへ 松 それでもいつそくわ嬌さんハ。おめへのことをわすれやせん。きのふ鳥渡いきやしたりや。コレまつさんよおめへマア。このやうにしんせつにしてくれるのハ。いつそうれしくおもふけれど。老生ふぜうの世のならい。このわづらいもわるくしたら。あしたのくもゆふべの雨となるふかや。それもいのちハおしまねど。たつたひとつのきがゝりハ、あの咲川にちよつとひと目。夢でなりともあふてから。死たい事がこのよのねがひ。これがひとつのよみじのさわり 咲（はらりとながすなミだ川そでにあまりておもわずも）モシヘ松さんそふくわきやうさんがいゝなんしたハ。ほんの事でありいすかへ。よくそれでもくわきやうさんハ。わたしがことをそふいつて。おくんなんしたうれしいねエ 松 マアあとをきゝな。おれハかくまでわすれねど。さきでハきつと色

男が。外にできたであろうから。なんともおもつてくれハしめへ。それゆへわたしがしんだとてたゞ一つぺんの（とはなすとたんのおりから）[くれ]チヤノ＼五三さんがきいしたよ

すこしようじのさわりある。ひとめをぞつとしのびつゝ。松があとをバおい風の。羽おりハたゝんで帯にはさみ。こしに一トこしさしたるも。おかしわすれぬこゝろかや。いそぐほどなきこよいしも。このあふミやにきて見れバ。ものむつかしげなる咲川が。うつむいているありさまを。きつと見てとる五三郎。たゞ何となくあいさつすれど。花きやうがやまひに咲川ハ。おもひのたねのますかゞみ。むねにさしこむ持病のつかへ。くよノ＼おもふ折からなれバ。たゞうつとりと。ふさいでいる

[くれ]おいらんへ。五三さんがきなんしたへ。そのやうにあまりおふさぎなんすな。そふいちどにくろうにしなんしたとて。くわきやうさんのびやうきがよくでもなりいすまいし。マアちつと咄しでもして。おまぎれなんしな[咲]ホンニマアよく氣をつけてくれなんした。五三さんよくおいでなんした[五]いくたびものをいつたとて。さつぱりだんまりのまゝだもの。すいして見りやアおゝかたくわきやうさんの事が。きゝたくねへから。わたしがきたのをしらぬふり（といわせもにてすかほうちもたげ）[咲]なんでおすへ。おめへさんのやうに。おかしなことをいゝなんすものハ。ありいすまい[五]アイ

さ［咲］ちつとまた松さんのやうに。おとなしくして居なんしな［五］コウ松さんアレきゝなよ［くれ］松さん。あんなばかな事をいゝなんす人に。おかまひなんすな［松］（たゞにつこりとわらつていれバ）［五］くれはさん。てれたやうすがありま山［くれ］てれたとおいゝなんすから。客衆にふられいすことハおざりいせん［初］五三さんへおはながあきいしたね［松］コレサ五三さん。いまゝくわきやうさんがはなしのさいちう［五］そんならはなして［松］サアおいらんへきゝなんし。それでたゞ一ツぺんのねんぶつも申てくれハしめへけれどそれでもおれハこれほどに。思ひこんだハどういういんぐわ（といふところへまたくるハ）［雲］［聞］松さん五三さんよふお出なんした［五］くもまさん。よく一年ほどまたせたの［雲］モウ／＼はやくきいせうとおもいしたが。よんどころない用がありいしたから。どふぞかんにんしておくんなんし［松］アヽとかくはなしにじやまがいつてならねへぞ。おいらんへ。だから何のいんぐわやら。たとへぶたれたゝかれても。おめへが事はわすれハせんと。泣はらしたるくわきやうがまぶた。みれハともに／＼悲しくなり。コレ花きやうさん。其やうにきをよわくしてならぬもの。そのくらいの煩で。死なれるものかそれるハ。どふおぞはやくよくなつて。わたしとひとつにあそびにゆき。おめへにあつてそのときに。つもり／＼しおもひ草。心のまゝに咄しなといふたりや。そふハいつてもこのびやうき。いつかよくなる事だやら。どうぞマアこの文を戀しい人にとゞけてと。コレ

おいらんへ。いやでもひとめ見てくんな
きけバこゝろもくれはどり。なく音をしのぶそのつらさ。人の見るめもはづかしの。もりてあまれるなみだかや

咲モウ〳〵いつそどふしいせう。むね一ツばいになりいした　くれナヤ花さやうさんハ。わつらつていなんすかへ　こと大病でいなんすと　くちそりやわるうおすね。どふりで久しくお出なんせんとおもいした　くれそれだから。いつそおいらんがくろうにしなんす　咲（くわきやうが文を手にとりてひらきよみだすそのたまづさハ）

なみだながら書ちらしりゟつ。まづハ時〴〵の御まけなふ。御うれしくとハ思へども。これやかぎりの名ごりかやと。ぞんじりゟへバ。いとゞかなしくなり行て。いまハこの世の水とても。のどにとふりかね。玉のおもたへ〴〵になりはてりゟへバ。はかなかりけるちぎりかと。思ひかこち

〇まだ十七のおぼこぎに。おもひこみたる戀じのやみ。はつとおもいしくわきやうがふみ。むねに又もやさしこむつかい。なでつさすりつよう〳〵に

くわきやうさんハ。どんなびやうきでいなんすへ　松何の事もなく。ぶらりとして煩ふが。四五日というたものゝ。じつハよつほど久しい事　咲（きけバ又もや二度びつくり。おもわず落るなみだのあめ。こ

ゝろのうちで）けふからハほりのうちのおそしさん。あさくさでらのくわんおんさんへがんかけて、どふぞよくしてあげたいぞ（とおもひのはしにまたよみだす）

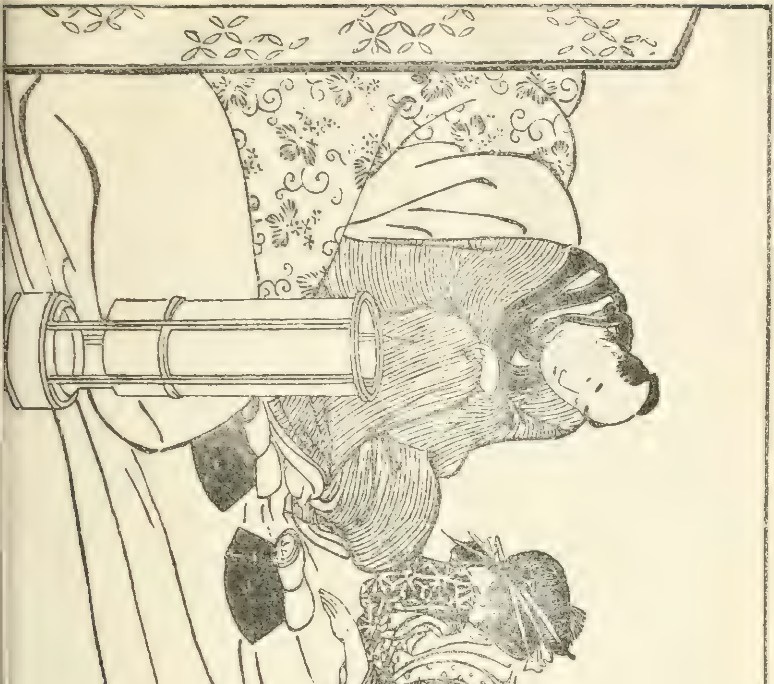
思ひかこちまいらせ候。たゞこのうへハおもふおとこに身を御まかせ。ふかき御ちぎりを。草葉の露のかげよりも、見まほしさ。もふ此文も一せうのおもひ出に候まゝ。やまやま書たき事も候へども。こゝろのおにの身をせめて。何からさきへ書ふやら。ずいぶん時しの御ゑけなふ、月日を御おくり。御身のつとめをたいせつになされかしとぞんじまいらせ候。いさいハこの。ふたりゟ

あら〳〵かしく

くわきやうゟ

咲 用 様

咲ナゼのふこんなにかなしい事を書てよこしいした。けふからこれがしやくのたね 松といふたとてどふするものかね。もふけへりやすからちよつと一筆かいてやんな 咲とゞけてさへおくんなんすならふみハあけたふおさりいすおめへさんそんなら。くわきやうさんに口でよくそふいつておくんなんし。いつそかわいしやあんじておりいすから。どふぞはやくよくなつて。お出なんしたおかほつきを。見たい〳〵がわたしがねがい。いちにちあわんでいてさへも。ひとせの秋のよふでおす。文ハあ



とからあげもふしいせう。サアそんならおやすみなんし
立てゆくなるそのすがた。もすそにつたふ蘭じやのかおり。ゆうにやさしき柳のこしハ。春の風おやさそふたる。雲のびんつらかゞやきて。紅粉によそおふ横がほの。たおやかなるはなかバひらきし海棠に。あしたの露をふくむがごとし

第　三

○夜まハりの金棒の音ハ。つゞみ三味せんにひゞき。また〳〵のはやしの聲ハ。どさくさの足びやうしに和す。ことにこよひハむら雲も。はれて眞如の玉と見る。月にあくがる座しきのさわぎ。夜も更行てしづかなる折ふしに

【こと】（せわしげにいそぎ来り）五三さんに。おいらんのおいゝなんす。そんならこの文を。どふぞとゞけておくんなんしとさ　【五】とゞけやせう。松さんそんなら先へけへりやす　【松】ム、はやくくわきやうさんに文をとゞけてやんな　【五】呑込〳〵

君が玉つさをふところにおさめ。いとまをつげてたちいづる。あとにのこりし松之助。こよいハこゝになさけのまくら。いまハふたりがこの中ハ。うるしにかわのやくそくと。なりしハたれもしら

露の。あさくさでらのくわんぜおん。ふかきちかいのひかりをバ。しめじが原のさしもぐさ。このよの中にあらんかぎり。めうとゝいへる名のついて。あかしくらして見たならバ。うれしかわいのふたすじも。ひとつふすまのさゞめごとかや

[くも]（五三が歸るを見送りてぞうりばた〳〵かへり來る）くれはさんへ。とんだしつぼりとしていなんすねエ [くれ]雲間さんちつとおはなしなんしな [くも]イヽエ（といふてふりかへりれづなきな（マヽ）！ていそぎ行）

[松]（何おもいけんふいと耳をかたむける）[くれ]松さんなにをしいすへ。サアもつとこつちへおよんなんし [松]イヤコウ藪から棒のやうなれど。あの人聲ハ隅田の舟よぶ音かのう [くれ]なんでおすへ。そんなマアおもしろくもない。やぼらしい事をおいゝなんすな。わたしやなんでおすかしりいせん（はつとおもいしかほつきにて）ソレヨ。あの梅若さんのはなしにありいしたが（とうつむくびやうしに。なミだをぼつちり）[松]てめへ。そのなミだハ [くれ]（見てとられしとおもひながら。しらぬがほにて）[くれ]よふありいすとへ。そう人の事がお氣にかゝりいすのかへ [松]氣にかけるのじやアねいけれど。隅田というたりや泣たから。泣たなみだのそのわけを。鳥渡はなしてきかせなよ [くれ]わたしやあの。梅若さんが憐でおざりいすから [松]そんならよし〳〵。イヤ氣がゝりというにつけて。おいらんハさぞくわきやうさんの事がくろうになろう。モウ〳〵いぢらしいやうだ。ア、泣た事を噺してきかせりやア

いゝけれど［くれ］イヽへ。それだつてちつアおめへさんとわたしとハ。どういうゑんでありいすかして。このやうにうそにも思つておくんなんすが［公］ナニ［くれ］イヘサこうしんじつとしんじつに。なつておりいすわたしだにつたゞおいらんの事ばかり。いつていなんすお心ハ。つらいわたしがおきにでも。かなわぬ事がありいすかへ［松］コレだまりや。そういう事じやアさらく／＼ねい。サアそんならあやまつた。（としりめにじつと見おくれバ）［くれ］（ふいとふりむくからかみの。あだなるいふやまつの葉の。見るもうらめしにくらしやと。そばにありおふきせるにて。さんぐ／＼にうちたゝき）そのくらいならこの様に。しんじつ盡すわたしがこゝろ。氣にいりいせんならいうてなりと。叱てなりとも下さんせ。そふもせずしていやみのおことば。わたしや蚫のかたおもひ。それゆへはなして見たい事。あかして見たくおもふ事も。申シいすのハいやでおす。ましてすゝだのおうたがい。はなしいす事ハなりいせん。（としばしのうちハうちふして。くやしなみだにかきくれしが）松さんこれでもむりでありいすかへ［松］ホイとんだとこからあたりがでた。おれハしんじつそふでハねエ。とハいうもの丶心ねハ神より外にしる人ハ。ないとおもへバどうせうぞ。いかにきよわいおれだとて。あんまりいぢめてくれめいよ［くれ］あれ。そふおいゝなんすおかほつき。なぜこのやうにすいたねエ（と。）［松］よしてくりや。いまに成てのあだつきハ。篠田の森のふるぎつね

こなたハやらじと　。たがいにせりおふ戀(こい)じのいきじ
〔くれ〕松さんモウ〳〵あやまりいした。わたしが噺しをたつた一トこと。きいてどうともなさりいし
〔松〕ナニモウあやまる事ハねエはづだ。わるかつたはおれが心〔くれ〕(すこしことばのたるむを見てにや
くも　いめづたの。からみまとわり)コレ松さん。わたしがはらをたちいしたハ。これからできた
うらみでおす〔松〕(よしやといへども　きぬを。しおにこなたもにつこりと)うたがいはれた〔くれ〕松さ
んほんでありいすかへ。モウ〳〵いつそうれしいねエ。
〔松〕サアこれうたがいはれたなら、さつきの事
をはなしてきかしや〔くれ〕はづかしうありいすけれど。はなしいせう。わたしや京のものでおざりい
すが。十斗(とうばかり)のとしにかどわされて。この廓(さと)へうられいしてきいしたが。ふた親のなつかしさ。それ
につれたる梅若さんの。かどわされなんしたをおもいだし。しきりにかなしくなりいした。ホンにむか
し噺ににたとても。ナンノマアこのやうに。くよ〳〵かなしむ女ぎの。ばからしいとは思へども。さ
すがおやこのならいなりや。人目もはゞかさながらに。何とうたがいなさりいせうも。いつそはづか
しうおすけれど。これが泣ずにいらりやうか(とおもわずわつとなきいだす)〔松〕(むねにぎつくりこなた
にも。いまおもひれのとこのうちに)

岩木の目にもなみだとやら。我もないの身の上なら。何かしのばんとも泣に。なけきてだにもうさおもひ。せめてはらさんおもひ草。さすがおとこの心とて。つむりかく手におしかくし。まぎらかせども聲ぐもり。くもる心のやみじから。やみじにまよふほんのうも。はらしてみたきふたりが思ひ。かほとかをとを見あわせて。たゞそでしぼるばかりなり

松（よう〳〵なみだをおしのごひて）してマアてめへ生れた所の名ハ くれ（とわれてなをもおもひだす都の人のあし手かげも。なつかしやこいしやと。のたまいし梅若丸は）わたしも北白川でありいした 松みやこにありし。おさな名ハ くれうたという名をいゝなづけの。かわいゝ人からもらいした 松そんならてめへハちがいもねエ、あの くれおめへさんハ内藏之丞さんかへシ（マヽ） 松シイ引 くれ（おもわずうれしいこゝろから。むねハわくつきうき〳〵して）内藏なに。チヤ松さんへ（ひそ〳〵はなすしんのこんたんおめへさんハ。どうしてこんな身になんなんした 松はなせバかなしきながものがたり）さりふたおやもめいどの旅。いゝなづけのてめへハ行がたしれず。一家一門とほしけりや。よるべがなしきみの上にゝ江戸のしるべをはる〴〵と、たずねてたびをしなのなるあさまのやまにたつけむと。もゆる心のおきふしもゝつきひかさねて程もなく。このあづまにつきしに しるべも今ハあとかたなく。旅籠やのていしゆがしんせつ。打わつてくわしく噺したいのや。ソリヤア氣のどく千万と。身に引うけて世話にして。さ

るやしきにありついて居る〔くれ〕(うれしなミだもしバしのうち。さらにものをもいわしゐの）松のことのは。つきもせぬ。むかしがたりハ）松さんへ。わたしがふたりのおやたちハ。さぞやあんじていなんせうネ〔松〕(いわんとせしがまてしばし)しらづか〔くれ〕なんでおすとへ〔松〕(ほつとためいきつきながら)モウ。すぎさりし年月(としつき)の〔くれ〕イ。なくなんなすつたといゝなんすのかへ。わたしハどふいふいんぐわやら。かゝるふこうのみとなりて。モウ〳〵いつそどふしいせうやら―となくねなしのぶところのうち。ふたゝびなミだなおしいごい）松さんへ。おとつさんおつかさんのかいめうを覺(おぼえ)ていなんすかへ〔松〕イヽヤ〔くれ〕そんならつねの名でもおなじ事でおざりいす　かたへのすゞりひきよせてわがふたおやのありし名を。なむそんれいと書そへて。とこのこかべにかざりおき。もしや人でもこよふかと。しのび〳〵にゑこうせり）となふ念佛(ねぶつ)の間に〳〵ハ。落るなミだのほとちる。袖のしがらみとゞめえぬ。のみこむなミだせき返し。すぎし頃までふた親の。おもわすれせぬ覺しに。いまハかはれるおもかげの。いかなる前世の悪ゐんなれバ。かゝるつたなき家のうちに。手向(たむく)る水のものうさよ

〔松〕コレサそふないたとてどふするものだ。ちつと酒でものんでまぎれるがいゝ〔くれ〕ありがたふおざりいす〔松〕思へバ〳〵けふまでハ。てめへというのハつゆしらず。あいそづかしをいうたのも。むりをいうたらあつたらうが。どうぞかんにんしてくんな〔くれ〕そふいゝなんすなわたしハまた。いゝ

なづけの身でありいすに。千人万人にはだふれて。みの置(おき)どころもないほどつらうおざりいす。どふぞつまりハわたしが事を。女房(にようぼ)といつておくんなんすやうに。したうありいす。[松]どうともしかたハあろうから。いましバらくのうち。しんぼうしな [くれ]どうこれが。いつまでまつていられいせう [松]サアそれだとて。いまこれがどうなるものか。しかし。いうてきかせてい事もあるけれど。これをいうにハあらためて。てめへがしんぢう [くれ]見ずバなるまいといゝなんすのかへソリヤ。あらためたおことばでおざりいす。そんならお氣(き)のやすまるやうに。わたしがむねをおめにかきやうか(かねてよういのこがたなを。とる手も見せずそのまゝに。ふたつの小ゆびをきらんとす) [松](かくと見るより松之助ハ。くれはが手くびをしつかとおさへ) コリヤはやまるめい。モウ心中見とゞけた [くれ]見とゞけなんしたそのうへハ [松]つゝまずいつてきかせよう。その手くだというものハ

しバし小聲のひそ／＼と。泣つわらいつ折／＼ハ。いづるせきをもしのぶなる。人やとがめんふたりがこんたん

[くれ]しんじつほんでありいすか [松]しんじつならでどうしてマア。てめへをつれてに [くれ]シイ引てそりやマアそふとけふまでハ。おもへバむりなむしんをいゝ。もとよりきづいなわたしゆへ。あいそづかしもしいしたが。さぞにくからとおもハんしたろう。これもおゝかたさきのよの。なんのかむく

いでおざりいせう。アレ〱きゝなあかつきの。きぬ〲〱つぐるとりの聲。サア〱はやくおかへんなんし 松 (つれにかわりてけふハまた。いとゞなごりのおしそうに) ドリヤさらバかへろうよ くれ アイ(トいふのもくちのうち。これもなごりのおしそうに)おかへんなんすかへ(とたがいにかほた見かわすひやうし) かね ゴナ引ン〱

第四

入相のかねハ。じやくめつ爲樂とひゞきて。ぼだいの道の手向の水。花折そへてくわきやうが母ハ。日ゝ夜〱のしんじんも。とかくしるしもなき世の習ひ。よるべとほしきこゝちして。あかしくらすもあわれなる。こゝにまた五三郎ハ。花きやうが何とかまつらんと。いそぐおもひのみちしばや。今宵の月ハほのかにて。草ばにすだく蟲の聲。きりはたりてふ切々として寂寞たる秋の夜のしん〱たるハ。はるかに晩鐘の聲を澄し。兩國の流水ハ物すさまじく。九天銀河より來るに似たり。遠寺の鐘ハあらしに吼。朦朧たる犬の聲ハ遠近にひゞく。指を折て時をかぞふれバ。もふ九ツの漏鼓なれや。忍びいりたる花きやうが庭。折戸をそつとおし開けバ。約束たがへぬ花きやうが部屋。なかバひらきしれんじの影に。ねもやらずおきもせぬひとり寐に。床淋しけのふところ手。夜

着(き)にもたれて五三郎を。まちかねたりしかほばせに。心はせけど。もしや又。人やしらんと足本ハ。心も空に飛石(とびいし)つたひ。かねてあいづの手ぬぐひを。丸めてうちへなげこめバ[くわ]（くるしき床の内よりも）五三さんか [五]くわきやうさんへ [くわ]しづかにしな [五]おめへいつそあんじたが。けふハどふだへ [くわ]かわつた事もありませんが。けふハいつそありがたふ [五]さぞくたびれなさつたろう [五]ナニこれほどにするものを。あのくらいのとこへいつたとて [くわ]それでもいつそ [五]ナニサヤアそれよりやアこれ（トこゝにてはすたまづさをとりあげみれバ）

心づくしの咲川が。おもひあまりしことのはもないふみのあとやさき。おもひまいらせ候かしこ筆(ふで)のすさみもみだれすみ。みだれそめにし長(なが)ぶみに。くわきやうがこゝろおしはかり[五]コレくわきやうさん。せけんのたとへにいうとふり。しうとやまいにやかたれんといゝやすから。あんまりくよ〳〵おもはずと。神と佛にうちまかせ。よくなんなさつたその時ハ。あそびにいつてどうしてと。いまからわたしハくふうをして。たのしみにしていやす [くわ]生死(きつし)のふたつわかちらぬに。なんのマアいまつから [五]そんなばかな事をいわぬもの。イヤでへぶ夜がふけやすそうだから。けへりやせう [くわ]五三さんそんなら明日よ

くわきやうハ五三が歸(かへ)りつく。あとにあま戸をくりたてゝ。なみだをともにおもひねの。夢になからと

もこい人に。あいたい見たいばかりなる。枕にゆめをむすぶ間も。なくてほどなく鳥も鳴し（くカ）。月ハのこりてしのゝめに。たれまつむしの音ハそへて。あけ行風もすゞ蟲に。咲川くわきやうふたりが中を。ゐんきりぐ＼すなくとても。もふこうろぎになりぬれバ。いもせのなかハあひおいの。松むし馬おいすだく音も。なさけをたづなのいとゞ蟲。ひかるゝおとかくつわむしに。夜もしらぐ＼とあけわたる。かどにかゞやく朝日のかげに。

【權】若だんなさま今日ハ。ごきぶんハどうでござります　【くわ】けふハあさゞめのせいか。すこしいゝやうだ　【權】ソリヤア。よろしうござりますドレおうがいを（とこんすけが。こたふるへんじもしりがろにとりまわしするふだいのおとこ。ちうしんものと名のつきて。どう。つかわりやうがいさゝかも。つらぶり見せぬこゝんのじつてい。）サアおうがいをとりました（と。ぼんにちやわんとふさやうじ。ミなそれぐ＼のきくばりも。こゝろのじつをはみがきに。みがきおいたるくわいちうかゞみ。とりそろへつゝさしいだす。しバらくありてそともから。それとしらるゝふたりのあしおと。くわきやうハとこにおき直り。ちからなきみのたよ＼と。よぎをうしろによりかゝる。）【松五二人】（そつとせうじをひきひらき。ふたりつれだちうちへいる。）【くわ】よくおふたりでおいでだのふ。五三さんゆふべハおふきにおつかれだつたろう　【五】ナニサ　【松】くわきやうさん。きのふ一日おめへにあわねへから。いつそゆふべハあんじやした　【くわ】どふもからだが。くるし

くてなりません。しかしけさハあさぐおとやらで。すこふし心もちがいゝようで 松ございりやすか
くわアイサ 五こまつたもんだねヱ。そしてゆふべの文を見なさつたかへ くわ見ましたがいつも
かわらずいつそ。うつむきながらしばしいうちう何ないうてもいらいもせず 五おふきにそふさ。けいせ
ひにまことなしとはわけしらぬ。したが中にもふじつもの。どつかりだます。女郎もあろう 松ナア
こしたが。人をだますハしやうべいだから。わるくいうのハこつちが大やぼ ふられるのも。どうす
るのも。みんなこつちがわりいから。たとへ女郎がだますとも。こつちハじつ〳〵にしんじつと。まこと
をつくすものならバ。十が九ツさきよりも、じつとじつとのいきじになろうハ。くわせつないからだ
まつていよふとおもへども。コレサわたしハこふだ。松さんも五三さんも。どつちもりくつハあろふ
けれど。それもよつくたゞして見りや。みんなまよいの一トすじさ。女郎ハつとめと年あけと。金と
三つにまよふゆへ。客ハ女郎のいろと香と。かゝるゝ事にまよふから。とハいうものゝわたしハ又。
ほづかしやこのまよひ。こふハしれども〳〵こふこれが。ふつつとおもひきらりやうぞ。五サアそふふか
くなつたのハ。じつとじつとでねひのかへ くわそれだからいまいうた。わたしがことばがはづかし
い 松そんならわたしがいうたのハ。イヤ。けへりやせう くわなぜへ 五ちつと用がありやすから
松わたしもいつしよに くわそんなら又ばんにもどうぞ

ふたりハかへるそのあとに。ひとりくわきやうがものおもひ。時計のきざみ数をへて。これも戀しとひゞきそふ。さるにてもこのびやうき。はやくよくなるものならバ。あひたい見たい咲川にとっ北方の空をながめやれバ。風にちらつく線先の。風鈴のたんざく目にさへぎる。よみて見れバそのうたに。おもふ事かなはねバこそうき世なれ。かなわ〻などか。アヽそふだナア。我みながらの身をせめて。むねにもつ火のきゆるまも。あらでうき世にながらへバ。かゝるやまひにそみはてゝ。戀しい人にあわれもせず。南無や厄よけ高祖大士。すくいておわしたび玉へと。東にむかいがつしやうする。げにやれんぼのならひとて。心づくしのあき風も。心してふけ秋の風

第　五

爰に又くわきやうが母ハ。まい日あさ日の出そむれバ。やがて朝日にうちむかひ。我子のやまひをあわれみて。すくひおわしてたびたまわゞ。このよの望み外になし。かゝるうき世にいつまでか。ながらいて。こんなうきめを見らりやうぞ。おもふもうらめしあだなれと。たぶさをふつつときりおとし。そのくろかみをしろなして。ひんの一燈にハあらねども。これにて清きあぶらをもとめ。ともし火を手向しやうこうし。心のたけをいのりしが。このあかつきの空よりして。よほどやまひのく

ゐしきも。おゐくなりゆくそのうれしさは。報恩謝徳の花びらも。ひらくる祖師の應護にや。じりうごふうやはりごふう。廣大無邊の利益を得る。このまゝ日だつものならバ。もはやいのちにされらじの。そのよろこびにくわきやうハまた。咲川にしらせたく。ふたりの友を松之助。五三郎までけふハ又。折ふしたづねとわざれバ。あゐひハうらみ身をかこち。立つ居つするくわきやうがせいきう。折から母のあしおとに

〔母〕コレ世ゝ之助。ごふうをいたゞきや〔くわ〕ハイ（と小よきなとりのけて。やがてごふうをのみしまい。）おつかさん。ありがたふござります〔母〕ずいぶんこのうへともにしんじんしな。ともとの一ト間へからかみを。たてきる跡のものおもひ爰に松之と五三郎ハ。何おもひけんこの日にかぎり。くわきやうがもとへたづねこず。二人り手に手を引つれて。はなうたそゞろさまぐ＼に。ゐもん坂をもうち過て。

〔くれ〕松さん五三さんよふ〔玉〕おいでなさりいしたおいらんにそふもちふしてきいせう□□（いそぎゆく。しばらくありてさき川ハ。松之助五三郎がきたりし事をきくとひとしく。そのまゝこゝにいそぎきたり。）〔咲〕（くわきやうがことをあけくれに。あんじわづらふ折からなれバ。ふたりがかほを見ぬか見ぬに。）五三さんへくわきやうさんハどふでおざりいす〔松〕おいらんへ。きついせつこみだね。くわきやうさんハ

きのふのやうすで見たときハ。でへぶくるしいがんしよくで。いきざれがするといゝやした。それについちやァおいらんへ。いつせうのねがひがありやす。どふぞかなひてくんなんし 咲 くわきやうさんのためならバ。たとへこの身ハ粉にならふと。すこしもいとひハいたしいせん 五 そりやァほんにそうかへ。ほかの事でもありやせんだ。あのくわきやうさんがわづらいハ。たとへよくなることだとて。一年や二年の事じやァねエ。それについちやァわたしをどうぞ（トいわんとせしが。しばしのうち。はなしとぎれて小聲になり）くわきやうさんのかわりにして（といゝながら松にむかいて。につこりわろふ）咲 そりやほんの事でおざりいすか。よくつもつて見ておくんなんし。たとへわたしハ川竹の。つらいつとめをする身でも。こうとおもひし男より。外のいろ香にうつりゆく。こゝろハさら〳〵おざりいせん。おこゝろざしハ。いつそうれしうおざりいすけれど。松さんへどうぞこのすゑ。くわきやうさんを。永く見すてゝくださんすな。（ト五三にことばをのこしたるハ。げにおふみやの咲川たらん。そのまゝ立てゆくすがたはつせことしを引つれて。くれないのすそをふみしだきて。さかまほしさのくわきやうが事。五三郎がいゝたゐそらごとに。こなたハわかきおぼこ気い。ぐつとせけどもなにげなく。おもてをやわらげゆくあとに。こゝろハのこるおりやけの。うしろがみこそひかれぬらん）雲 コレ五三さんへ。おめへさんハからずのやうに。わる口をいゝなんすから。おいらんがはらを立なんした 五 いわずとしれしおんことさ。はら

をたとふが脊を立ふとも。ちつともかまふ事ハねへのさ。〔くれ〕アレまたあんな事をいゝなんす。松さんへ。なぜそのやうにだまつていなんすへ。ちつと酒でもおあがんなんし

宴にしばらくさかづきの。さいつさゝれつかさなれバ。やがて四人ハおさまる床に。いる月かげもふけ行や。時しも頃ハ八ツのかね。ものしづかなる折ふしに。風のひゞきか何やらん。あふみやの戸口をたゝくにぞ。これときゝ出す若いもの。名をしられたるせうじき庄兵衛。きけバあやしといぶかりて。立て戸口を押ひらく

〔庄〕（おもひがけなきくわきやうなるに。このほどひさしくわづらいて。やせおとろへしかほばせも。元より美なるむまれなるに。みどりのかみもくろ〳〵と。ひとり戸口にたゝずめり。）イヤ。これハくわ〔くわ〕チットしづかにしてくりやい〔庄〕おめへさんハ。ひさしくごびやうきでいらしつたそうでござりやすが〔くわ〕そうさ。いまによくなつたど□□（虫。ころカ）じやアなけれども、とぢこもつているゆへに。どふもふさいでならぬから。せめてこゝらへきたならバ。すこしハうつきもはりやうかと。くち迄そろ〳〵かごにのつて。よう〳〵こゝまであるいてきた〔庄〕さいわい松さん五三さんがおいでなさりやした〔くわ〕ハアそりやアわりい。あのふたりにおれがきた事をいうまいぜ。そしてちよつとおいらんを。こゝへよびだしてくりやい〔庄〕ハイ〔咲〕（くわきやうときけバあやしみながら。これハゆめかやうつゝかや。夢のうちなら

さめよがしに。いそぎあわてゝ出きたり）チヤくわきやう［くわ］シイ引

咲川ハ。あまりの事のうれしさに。むねうちさわぎものをもいわず。はしりよつてすがりつき。かほとかほとを見かわすばかり。ふたりハそのまゝつれ立て。人のこぬまをうかゞひつゝ。手を引つれてざしきに入る

［くわ］しづかにしてくりや。モウいつそてめへにあいたかつたが。きいたとふりの大びやうで。少しもよくなるやうすがなく。それでもあまりのあいたさに。やう／＼うちをしのび出。くちまでかごにのつてきたも。そのくるまでのくるしさハ。思ひやつてくれたがいゝ［咲］ホンニそれでもよふおいでなさりいした。わたしやとふからおめへさんが。なつかしいやら戀しいやら。そのねんりきがとゞきいしたかして。今夜おもわずおめにかゝりいす。モウ／＼ほんにねいしてもおきいしても。さつぱりつとめも身にそまず。そして病きハどふでおざんす。あんまりあんじておりいしたから。もしやどふかしなんしたなら。ホンニ髪でもきろふかや。またハつゞいてしんぢうし。おめへさんと手を引つれ。三途の川瀬をやす／＼と。ひとつうてなの寂光浄土へ［くわ］それほどにまでおもつてくれたハ［咲］しんじつでなくてどうしいせう。こないだもつく／＼と。おもい直して見いしたりや。おめへさんがよくなつて。お出なさりいしたそのときハ。これをさきへはなしてからそしてあれをバ咄してのと。た

のしみにしておりいしたが。こんやおあにかゝりいすハ。おもいがけなふおざりいすから。いつそ心がうき〱して。きつぱりはなしができいせん。さぞおくたびれなさんしたろう。あしでもさすつてあげいせう [くわ]くたびれたどこじやなへ [咲]そんならマアおやすみでもなさりいしたら。ちつとハおきもやすまりいせう。どうぞねエはやくよくなつて。お出なんすやうにしとうありいす [くわ]うれしいよ。てめへおれをそれほどに。しんじつにしてくれるのハ。しんでも忘(わす)れハしなへぞよ。コレおれがこゝろのしんじつハ（とやせたるうでなぐつとよくれバ）[咲]ヲヤ〱。ほんにありがたふおざりいす [くわ]ドリヤてめへのむねのしんじつハ [咲]オヤ。なにもしやうこハなけれども。わたしがこゝろのしんじつハ。神(かみ)とほとけのその外(ほか)ハ [くわ]（くわつとせきこむかほつき）よくおれをまよハした。すこしのうちにうつりかわる。飛鳥川(あすかがは)とハてめへが事 [咲]うたがわるとてもどうしいせう。あんまり實(じつ)が過(すぎ)いしたから。こんな事(こと)になりいした。マアそのやうにせかずとも。しづかにいつておきかせなんし。松さんと五三さんがきゝつけいせう [くわ]見(み)さげはてたるふじつのしんてひ。かならづほかにいろ男(をとこ)が。きつとできたにきわまつた。おもいバ〱はらのたつ（と。こぶしをあげてうたんとすれバ）[咲]どふともして下(くだ)さんせ。おあへさんにころされりや。わたしやはんもうでおざりいす。それともころすができいせんなら。どふするものでおざりいす。そしてわたしがしんじつハ。まだおこゝろに

わかいいせんかへ〳〵と。そばにありおふくしばこの。かみそりばこに手なかけれバ） くわ （それと見るよりとひよりて〳〵かみそりばこなしつかとおさへ。）コリヤ。どふするのだ。はやまるまひ。マアきをしつめてよつくきさや。こゝにハふかい道行がある 咲 何もきかずとよふありいす。そこはなしてくださんせ。とめなんしてハおめへさんに。わたしが。じつがとふりいせん くわ もふ。よつくとふつたから。おれがいう事をきいてくりや。なんほけふまでしんじつを。つくす〳〵といふたとて。そこがあさましい男のこゝろ。心でこゝろをうたがいバ。それゆへわからぬうちハこれ。コウいろ〳〵に手をまハし。心をさぐつて見たものさ。モウ手をあわしておがむから。どふぞゆるして。 や 咲 （すこしあまへるおぼこいこゝろ。しバしへんじもなかりしに） くわ きやうさん。そんならもふ くわ さつばりうたがひはれたから 咲 ぬしのかんしやくひごろのきしつ。みんなごむりでおざりいす。

このきみとおもふ女郎のしんじつハ。何とたとへんことの葉も。あらしの山の山ざくら。咲川くわきやうがふかき中。色よい見へ（でカ）てうつろふハ。人の心のあだなれや。ふかき心ハからす羽に。かくから文の文字ときく。うつさぬほどハしる人も。なしとやいわんさりながら。いまハほに出て人めをバ。何かしのばんほたる火の。もえてこゝろを。みおつくし。いつかつとめの身のうへを。年きいつほの身となりて。おもふくわきやうとさしまいうら。月日を明石のむつごとも。まくらに夢のうき

はしを。わたりてうさをはわき木に。はらい〳〵て過ゆきし。むかしばなしを夕がほや。なさけへさわらびの。子というものをもつならバ。何かハうれしからざらん。

咲アレくわきやうさんきゝなんし。人の氣もしらぬとなりざしきの高わらい 【くわ】いつそのほせてづつうがする 咲 いつそにくらしうおざりいす。そしてさつきの事ハいよ〳〵うたがひはれいしたか

へ 【くわ】くゆふたミだの玉くしや。枕かわせしみだれがみも 【咲】とけてうれしい 【くわ】うたがひはれたこよいの空

咲川くわきやうがふたりのこんたん

【くわ】アレきゝな。となりざしきの大さわぎ。いつにかやんであの三味せん 【咲】ホンニねエ。しのびごまでおざりいす 【となりうた】かわい〳〵のむつごとも。ついきぬ〴〵のわかれ霜 【くわ】もふ夜があけようか 【咲】ナニまだ八ツ過でおざりいせう 【うた】しよふてハうらみしとりの音も 【咲】何かいつそ。わたしが身につまされいす。くわきやうさん 【うた】いへばみに岩きりどふしながれゆく 【咲】人のゆくゑハふしぎなものでおざりいす。おめへさんとわたしとでア。こうふかくなつたのハ 【くわ】かよふかみの。おひきあわせとおもふがいゝ 【咲】わたしやもつていのうおざりいすが。七面さんや。おそしさんの。おなかだちでもありいせうかと。ふだんおもつておがみいす 【くわ】もはやとなりのしやみせん

も。いまにすむからすんだなら。口じやみせんでこつそりと。高尾をうたふてきかせてくんな［咲］ナヤくわきやうさん。ソリヤなぜへ。高尾ハ郭でひかれいせん［くわ］アヽ。わりいぞモウ［咲］どふなさりいした［くわ］いつそもふ〳〵きしよくがわりい。くすりを呑からゆを一ッぱい［咲］ドレもつてきいせう。たまく星の逢瀬かとおもへバモウどうせうのう［くわ］サアはやく湯をもつてきてくれなへか。

（しばらくありて咲川ハ。いそぎあわてゝゆをくんでくる）［咲］くわきやうさん。湯をもつてきいしたから。お薬をおあがんなんし。くわきやうさんへ。アレモウなんだ。そうぐ〳〵しひ。となりざしきの大一座。くわきやうさんへ。コレどふなさりいした。ねいりなんしたかへ（といゝながら。ふとんをぐつとおしまくれバ）

ワツと。おどろく聲につれて。あたりに居たる女郎新造。かむろやり手をはじめとして。いそぎあつまりきて見れバ。咲川ハ前後もしらず床のそばに。氣をうしないて。たおれ居る。かくと見るよりおまたの女郎。氣もたましひも身にそはず。やうすハいかゞとうかごふ折から

［くれ］（手おくれしてハかなふまじと）コレ雲間さんはやく水を汲できな［くも］サアくんできいした［くれ］ドレ（と一ト口ぐつと口にふくみ咲川がかほにふきかけて、おいらんへナニサ咲川さんへ［咲］（ほつとふき出すいきのしたより）［大せい］おいらんへ氣をはつきりと。なさりいし［咲］ハイ［くれ］なんでお

ざりいしたへ [咲]あのね（ことばかりうつむいて。しバしなミだにかきくれる）[雲]なんでおざりいしたと
へ。いつておきかせなんし [咲]くわきやうさんのゆうれいが。きなんした [大]夢でおさんせう [咲]イ
イヘコレ。これを見なんし。（ふとんをぐつとおしまくれバ。たつたしきみの花だ一本）[大]ソリヤあのどう
いう事で。おざりいすへ。

こゝに咲川ハ。くわしくはなす始終のわけみち。さきだつものハなミだの雨。しぼるゝ袖をうちしきて。人目もはぢずわつと泣。心のうちぞあわれなる

[咲]モウ〳〵いつそくわきやうさんへ。どうしいせう。わたしばかりをなぜこのやうに。のこしなん
したつれなふおす。いまさらわたしハいきながらへて。この身を何にせうぞへの。（とそばにありおふほ
そおびを。とる手を見せずくびれんとす）[やり手]（やり手ハ手ばやくくみつきて）コレおいらんへ。その身
がおめへの身のまゝに。なるからだじやアありやすめい。うりしろなした身だものを。コレくれはさ
ん。マアそのひもをひつたくんな [くれ]アイおいらんへ氣をしつめておきゝなんし。モウどのように
悲んだとて。かへらぬ事でおざりいす。いつそふつつり思ひきつて。お出なんすがよふおざりいす。
くわきやうさんひとり男じやおざりいすまへし（かゝるところかけきたるハ）[五松二人]おいらんハどうしな
んしたおいらんへ [雲]くわきやうさんのゆうれいが。きなさりいしたと [五松二人]ほんにかエ。そんなら

とう／＼今夜死んだにちげいハねへ。おもへバ／＼くわきやうさんハ。十九の花を一期として。この世を見すてゝ死ンだかエ。（ト、ともにあわれのなミだなりしが）アヽどうするもんだ。いくら悔ても歸らぬハ無常の道。さいわいとなりの大一座ハ。わたしがこゝろやすひ友だちであいやすから。マアあそこへいつてまぎれなんすがいゝ 〔大〕ソリヤほんによふおざんせう。サアおいらんへ。となりざしきへお出なんし。（ト大ぜいに引たてられ。あしよわ車のよわ／＼と。なきはらしたるかほばせを。そでうちおゝひしほ／＼と。となりざしきの内へいるに）

今までハさしもにぎおふ大一座。にわかにしんとしづまれバ。あまたの女郎もきやうさめて。見つめて居たる折こそあれ。しづかに引だす水ぢやうし

ことだおいらんへ。おきゝなんし。なぜそのやうにおなきなんす。もふどふするもんでおざりいす 〔水ぢやうし〕あめもつそらの泣たくハ 〔咲〕生死の道ハぜひなけれど。これがなかずにいられりやうか 〔うた〕もといしづくとなる人に。一トつぶそへてやるなミだ 〔咲〕（またおもひ出しなくなミだ）かわいゝおとこにわかれたもわたしやどういういんでわやら 〔みつ〕この世からさへ流の身 〔咲〕老生ふぜうの習いとハネヽ。いつぞやまでハくわきやうさんが 〔みつ〕さいつさゝれつ。さゝれつさいつ。あいのおさいのかわりの 〔咲〕おもへばひとりのくわきやうさん。今度のひやうきもたゞして見りや。みんな

わたしが身ひとつから [みづ]つるのやゝ路やおやのやみ [咲]そのおやの身になつたなら [みづ]手向の水のさかさまに [咲]さぞ悲んでいなんせうと（おもわず向ふを見渡せバこハいかに）まさしくこの世をさりはてし。くわきやうが姿に。まがいなきに。みな一やうのしろむくのかさね着を。ほどよふ着なし。みどりの髪ハたゞ疑ふ。氣はれてハ風新柳のかみをけづりたる如く。おどろになしたるその俤ハいぶかしや。

[咲]きつねたぬきの所爲なるか。見れバ見るほどくわきやうさんに。まがへぬかほのなつかしや。よし何にもせよ戀人に。二度あふ事のうれしさよ（と。しばし見とれておもわずも）のふなつかしやくわ嬌さん。まさしくゑんぶを去なんしたが（マヽ）[うた]こいしゆかしのひと聲を。われハまつむしわすれずバ

[咲]（あまりのことにあきれはて。なくれもいつかうちわすれ。くわきやうがかたをながめいる）[うた]なかねバわるういふことか

しるもしらぬも佛か。幽魂か。そのあやしさをはらさんと思ひ玉はゞ。後編にゆづりたれバ。しばらくこゝにまち玉へ。

契情實之卷後編　楚登美津作

同　續編　同

當世實の卷終

櫓下妓談

婦身嘘

全

序

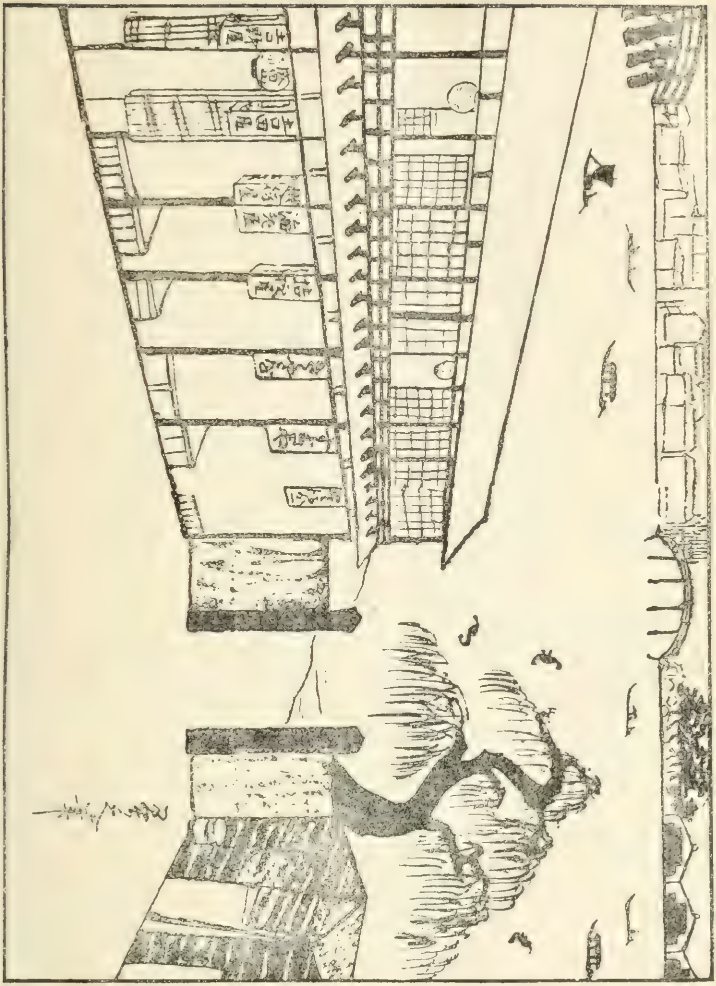
いやな客に。明（以下七字位欠）啼して。よろ（以下七字位欠）せかれて。色（以下七八字位欠）おし（以下十一字位欠）癡（以下十二字位欠）ころし文句で。かきがら道は。間夫に盡せる實情。込入たる事。新地の端の。棒杭に等しく。されバ其譯へだてハ。あるとも。皆一夜一露の。夢にあらずや。女郎の腸に。わかれ有ハ。中洲の三ツ又に。事（マヽ）あらねども可愛〳〵と舫を解れてハ。遊子純通によらず。きのふの地面は。けふの薦一枚。愼べきは色のミち。迷ふも悟るも。胸ひとつ嗚呼予ハ一足下ツて考へ。尻の先へ猪牙舟だこのいりしと。よいざめに。ぬるま水を味ふ者へ。此小舟を。參らする事。しつかり

十時庚辰夏

於出雲樓見通

陶器家輪成

採筆



輪成掌而新制の監色深川に寄て新句を綴元自新手にはまつて
穴搜しの穴に落入其段取の辛苦歟將迄來辰巳に流行の新句な
らん歟靑年才始末よんでみなせいしと云　譯露誌

当時のこと葉に習て

品目

○いろじたてのぎたきな段
○うまくかゝれたばゝァをいふ段
○手ごわいこつてりした段
切り　はがねのまくら

櫓下妓談 婦身嘘

墨之山人著

千本櫻の。名題にあらねども。又辰巳にも櫓あり。上ならで下にして。吉野もまかす。惣花の櫓をあげ。百壇の猪牙船に。魂と共に虚空へ飛して。裾河岸と新河岸え。のりこむ船ハ。やぐら〳〵とのぼり詰。角力矢倉の太皷にうつ。ドデン〳〵もかいりミず。終にハ新手を持てなげられ。腹櫓にあげられて殺され。こたつ櫓のごとくなれど。當てくだける。通不通。爰に入くる遊客ハ。ひと月置の出番を誓ふ店者ハ。たゞ附登の難をいのる。或ハ淺黄の手拭肩にかけ。前垂腰にまとふ。客人が將。船頭ともミへ。また客ともミへ。二上りの騒唄。大きに。賓主の禮を亂す。彼未至通のきいたつらハ。通二三個の藝者をかければ。火の見櫓と共に高ぶり。頼朝が鶴ケ岡の放生會も。是にハしかじとおもふ。尤鶴ハ見通しの。杉戸にとんで。いまだ行。方角をしらず。大一座の武士あれバ。また姿をかへたる色夫有。行歸りの客絶ずして。實や賑ふ繁花の地。おもてくゞりのガラ〳〵に。お客たちの美音ハ。萬客の耳をよろこばせ。なげぶしを唄ふ。船宿の兄き。樽柿くさくして。明座敷につめて。柏餅となり。あいたる藝者の三味線箱ハ。階下のおり口にならんで。かけ行燈とにらみくらをし。庭口の戸

にかけたる。子供屋のぶら燈灯ハ。下座敷の行燈と共に。光りをあらそふ。水鉢へ柄杓をあてる音ハ。山鐘かと眞の床をおどろかせ。ひるまの玉子ヲ引〳〵ハ。よるの汁粉麥飯と替りて。風輪蕎麥の音。あんまア針のこへと。ともに聞ゆるハ

鎌倉和倉下伊藏茂屋の樓上と見へて

里夕（年ハ三十四五。中せいにていろのくろき。にがミばしりし人物。衣裳付越後の中形度のかたびら。黒糸織の帶。せいひ皮のさんど多葉粉入。ひぢりめんの下帶をミてくれがしに細帶のかわりにしめ　はだゐいのすきな男にて。萬事きどつておれ壹人ハ江戸ッ子だといふ氣にて。上ゲあぐらでいる）女郎おなに（年ハ二十一二くらい。衣裳付京上布。紺がすり。帶ハくろの唐じゆす。あたまハあらいがミのばらりおとし。大しまだまへざし壹本さし。うしろに銀たいに金めつき。さんごじゆのさし込。つげのくしをちよいとさして。づいぶん此うらにて一まいかんばんなり。かんざしでまいがミかきながら。何かふさいでいる）里てめへどふした　などふもしねへが。少しふさぐ事がある。かまはづとマアお寐な　里ねるハいゝが。ふさぐ事ハなんだ。なな外の事でもねへ。此間もおめへにはなした。さや町の吉田屋からくる客よ。あれが外のわけならいゝが。うちのおでんさんの所へ。なじんできなすつたが。ちつとしたわけで。あの子をよしてわた

しなよほふというのよ。そこでわたしも。外の子供衆でもよんでいなすつた。事ならバいゝが。ひとつうちの女郎衆で今迄ひとかたならず。よんでいなすつた物が。どふいう譯かおでんさんをよして。私にでゝくれをいゝなさるが。わたしの身に取つてハうれしいけれど。またみんなの口がうるせいから。おちでどんにことわつたら。おちでどんも眞事にめいわくなして。先へもいろ〳〵ことわつたけれど。其人もこういゝだして。おなにゝはぶかれたといつてハ。みんなのめへェ外聞もわりいから。でられずバ座敷斗でも出てくれゝバおれが顔はたつからと。たつておちでどんをたのんだとよ。それでおちでどんもこまつてどふぞ座敷斗でもといふからそれをわたしがとやこう言とあんまりぞふてうするよふだから。座敷斗でたのよ。そふするとおでんさんがおかしな事をいつて。わたしにあたるから。私もいたくねへ腹をさぐられるから。とてもわるくいわれついでに。其客を一ばんくいとめこ。おでんさんのつらをふんでやろふと思つて。此間も出たのよ［男］それじやアその客にてめへ心中が立るのだな［女］はかアいゝねへほんの立引とハいふもの。其人に出ていれバ。大きにつごふもよし。おめへのためにもなるからそふしてすへェいけバ。ほんとつき出してしまわアな［男］そこで今夜其やろふがきたのか［女］そふさそれでふさぐだろうじやアねへか［男］ウヽそんならおめへはやくいきねへすぐしくハあるしおれハ一人で寐ているからいゝ［女］あの客のきたのがてうどいゝせへわへだろふ

里マアそんなものよ　なヱヽそふいふ口をきくト喜世るでくらす　里早く行がいゝあのやろうの身にもなつてミろたいてい苦労じやアねへモシあぶもとらずはちも取ずになろうかと案じているだろふ　なおまへがなんとかやかましくいつてくれるといゝけれど。おめへがわかりすぎているから案じられる　里大笑だ何があんじられる　ないゝせへわへだと思つて。また外ニやじでも出来たろう。なんだかうちの左吉ッさんが。おめへをほめているからあやしいぜ　里やかましいはやくいくがいゝ　なそんなら今咄した通りの譯だから少シでまがとれるよ　里ヲヽしよふちだ　なヲヤ火がきへたもつてこよふトニ下へゆき火と茶わんへ湯などもつてきたり）　なサア湯をおあがりはやくいつてこよふ〳〵トいゝすて出てゆく一體これハおでんがきやくにハあらずほかの客にてありしがおなに一座にでゝ其客の男ふりにほれやじにてよぶいなり里夕ハそふとハしらずしてやつぱりおでんが客なとゝおもひそれでもこゝろにハモシも色男でハないかとハ思へどもミんなおまへのためだなぞとおためごかしの氣やすめないわれしゆへおなにがくるのをまつているほどなくうらいひけなうつにおなにハこず少しきうばらになれどもよいにすゞしいから一人でねるといゝしもいまハこふかいにてよぶにハよばれず壹人りまち〳〵しているうちにまたはちまんがね）八ッの鐘ゴヲン　里モヲ八ッだそふだあしたハ釣が淺いだから早くいかざあなるめへがどふもねられねへ　トニ壹人ッ言いふうちとなりの相徳松の二かいにて女のこへで）淨るり〳〵いやな客にあひよくござ思ふ男の

やまどりの 〔甲〕ちけへねへやつぱり心いきだ（おき番忠助おふらなつぎにくる）〔忠〕りつさんまだおひんなつておいでなさい升 〔甲〕アイ忠助どん今夜ハなんだか寐ぐるしい晩だの 〔忠〕さよふで御ざい升けしからずむしますト（下へゆくまたあれ、コチン〳〵 〔甲〕チヤもふ山鐘か。さて夜ハみじけへモチけへろふ。チヤおまちどんかおめへいま時分何をしている 〔女中おまち〕チヤりつさんごふぎにけさハおはよふござり升おなにさんハへ 〔甲〕ちつといわく有さおめへこんやハあやしいぜやじがきたの 〔な〕ナニサこんやハおき番でけさ朝参りにいこふと思ひましたが少シゆふべまちがいがあつてけさいかれません 〔甲〕何だごふぎにそふ〳〵しかつたがなんだへ 〔ま〕何さごけツぽふ（ほカ）でまことにきざさ 〔甲〕うるつせへのふトキニモナひがしがしらんだ。船頭をおこしてくんねへ 〔ま〕さよふかへけふハいゝじやアございませんか 〔甲〕ナニけふハ両ごくに会があるからそこへいかねへけりやアならねへ 〔ま〕さよふでございますか。そんならおこしましやう（ト下へゆくおまちもこんやおなにがいる男のきているのをしつていれどもわざとしらぬふりでおいさつをする心でハおかしく思へどもりつがかいるといふゆへおなにをおこしてりつがとこへやるおなにもおきてみれバ夜ハあけるしすこしりつがめへさめいどくなれバわざとはらをたつたふりをしてびやうぶをあけてずつとはいり）〔な〕コチりつさんなんぼ私がモヲいやだとつてよびにおよつとおこしてもいゝじやアねへかわたしがあつちに居る心持になつてごらんなことに〳〵いやで〳〵ほんのおま

へのため父おでんさんえつらあてだからよぶものゝ眞事に今じやアよせばよかつたおまへハ仕度をして歸るのか [里]けふハ兩國に會があるからいかにやアならねへ [な]いゝじやアねへか。今にあのやろふもけへらアそふするとゆつくりはなしもできるからいかなくつてよければよしなよ又そふいつて外へいくのだろふ [里]ばかアいへ深川に舟ハすハつて居て仇まくらハかわさねへ [な]それが實ならばんにきなよいどまりをつけてまつているがしよふちか [里]こんやハ事によると付合で外へいかざアなるめへ [な]事によらずとつき合つとこつちへおいでまつているよ [里]てめへ勝手な女だぜ [な]わたしのてめへ勝手を今おしりか [里]とんだ女をしよいこんだそれをきづにして大津美屋で安くかつたのだろう [な]わるかつたね此手ぬぐいハ [里]おれがのじやァねへ [な]あつちのやろうのかいやよどふして持てきたろう [里]てめへハソヽうかれるからミろ着物がうらげへしだ [な]チヤト(氣がつきみればば着物なうらがへしにきている是ハいまきうにおこされたゆへうろたへてきたゆへきがつかずそれでもさあらぬていにて) [な]そんならきつと晩によ [里]チヽよ しよふちだ どりやけへろう トろうかへでると)

折から庭の松の木でくつわ蟲

がちや〱〱〱

△前席の客こゝろハ五分もすかぬといふ心もちいわゆるきいたつらにて女郎ハこれでなくッちやア

といつても色男きどりにてかく／＼とおもい」がいつでもかゝれるなり

よく氣をおつけなせへし

晝遊の部

「喜兵衛（年三十六七すこしさびのあるでつぷりとした人物　衣裳付ハけん(か)宝小紋羽折結城もめんもぐさ島ひとへ物小納戸なゝこの帯唐川仕入たかおりのたばこ入紀の国屋でうたせたる白おめし煙のきせるうす鐔を呑ながらあげあぐらでいる生ハいなか者にて此くらいに江戸ですれた人なれどもしやうらい、うしなわずしてことばかりいふくせあり）　「傳吉（是ハつれにて二十四五なりハあいせんすじのひとへ物帯ハ柳茶いろ琥珀の耳すゝかりしやつ気いた風なこしらへなり」　「喜」こよいハだいぶにぎやかだ平清の酒がまだ腹にあつてせつねへ　「傳」どこの座敷も二上りでそふぐ／＼しい　「喜」此間なぞよけじぶんハしづかだつたがまたはじまつたからにぎやかだ　ト　はなしのうち女ちりめんしぼりのゆかた黒じゆすの帯まへだれハなかのむじなさけじみのかゝりしやつ小紋けいのひらぐけのひも右のかたへだらりとむすびさげあたまハ丸まげのぐるりおとしにらふの深川形のくし積ンでうへさしまいざし、さハッたらおちそうにて目取肴でふしなさげて　とび／＼　「おすで」エ、ぞんざへな廊下を酒だらけにした誰れだかおそれるぜ　ト（座敷へきたる）どこなッさまちよくおいでなさい

ましたかめどんハどふいたしましたへ〔喜〕たばこをとりにやつたがまだこねへ〔す〕こんちハあいにくで御ざいますね外へでゝいなさいます。ちよつとおめにかゝつてまいりましたいまにおいでなさいます〔喜〕コチおめへ下へいくなら。藝者をかけてくんねへ〔す〕藝者衆ハ誰れに致ましやう〔喜〕大前と伊勢吉がよかろう〔す〕はい〳〵ト（下へゆく。舟頭〔かめ〕なりハ木綿ちゞみはけめじまなうらがいして仕立黒びろふどのひらぐけおしりのさきへしめけしだまの手ぬぐいこしにちよいとはさみて）そふよ音や忠もうちへハすこしも寐つきへねェうさあねへどふともしてくれろト（廊下なすてぜりふをいゝながら座敷へ来る）〔喜〕サア一ツのまねへか〔か〕いたゞきましやうけいしやハ〔喜〕ナツトおすでどんにたのんだ〔か〕おはねさんハけふないそうで御ざいますがちとだんどりがわるう御ざいますね〔喜〕そんな事アうつちやつておいて盃をよこしねへ〔か〕ハイあけますト（はなしのうちけいしやきたる　伊せ吉元八〔熊吉〕ヘイどなつさまもよふお出なさいました〔い〕喜兵へさん此ごろハさつぱりで御ざいますねチャかめどんそんなにしらねへふりをする事ハねへよ〔か〕チイかゝアがこないだあんばいがわるかつたそうだが。どふしてもおれがとおくェはなれているから。物あんじで氣やミがでたのだろうぜ〔い〕そうだろうもしれねへ（座付も引仕舞てだん〳〵大酒もゝェ成）〔す〕いせ吉さん雨潮さんのめりやすを覺へたか〔い〕ながいからやつとでおぼへたよ〔喜〕なんといふのだ引てきかせねへ〔い〕こうで御ざいます

めりやす〽つらか

らバたゞひと筋につらからで。おもわせぶりに狂ハせる。てう〳〵のかんざし手に留て。見れバうわ黄な水淺黄二ツ揃ふて相生の。松の二葉も夫じやヱ。かわらぬ色やとかゑりの。見歸り玉へ此枝に。れんぼに渡る雁がねに。とふてミたきハこなんのこゝろ。迷ふといふ字もうらミなる。葛の表葉の片思ひ情といふ事しつてなら。たゞよふ船をつないでと。こがれて明す夜ぞつらき。夢にもむすぶ神やあるらんト（引しまい）〔ミな〳〵〕やんや〳〵〔傳〕いゝめりやすだ〔喜〕杵勝が手をつけたのハこれだの〔か〕そうだといふ事で御ざいます〔い〕かめどんおめへハまじめだの二上りをやんねへな〔か〕二上り〳〵ハツ九ツや明七ツおもてのくゞり戸をとん〳〵とじひじやなさけじやおき番衆こよいあわねバこがれじに（これハ此男のくせにてうたふなり）〔元〕くよ まことにしんだい〳〵（此間いろ〳〵あれどもくだ〳〵しければ略ス）〔す〕そこお座敷がゝるりまハしにいたしましやう〔か〕それがよかろうト三みせんをしまい喜兵へ傳吉下へ小便にゆきゝな〳〵てきそいにそれより座敷へはいりげいしやはいり日にて）喜兵へさんお休なさいはいましトこな〳〵下へ行傳吉が跡ハにかの座敷也 喜兵へ相方〔おはね〕よそのうちへでゝいたりしがな ミのへおなてゝいしらけにてあいにきたとみへたり）おまいおとゝいきなさるだろうとおもつてまつていたがなぜこねへのだ〔喜〕おれもこよふとおもつてハミたがよしにしたてあへけふハどこまでゝいる〔は〕あぢうまやで屋敷衆

だが眞事にくらいよつていてやかましいからいやで〳〵なりあしねへトハいへどもまことハやじにてわざとそふいう也）〔喜〕これうわさをきけバさや丁から金とやらいふやろうがくるじやアねへかなせ今迄おれにかくしたサアわけをいへコヲなんとあなをほられちやアてめへもねこばゝで石がけへひつこましていることたアできめい（おはねこゝろのうちハびつくりしてかんがへている）〔は〕おまいもとんだ事をいゝかけて私ヲいぢめるけれど一圖におもいなすつちやアはらもたつがマアとつくりとおきゝよ針程の事を棒にいふハ世間の口だから。それを人にしやくられておまいがあじに廻すだけわるいわな〔喜〕あじもこはだもいりやあしねへ。なにから何まで氣にいらねへ。コレ五重のとうの鬼がわらじやアあるめへし。そんなにたけへつらアしてあやなしかけることハねへおもしろくもねへ〔は〕わたしがわるけりやアあやまるからそんなにあつくならずとマアはなしがあるからきいておくれ〔喜〕エヽやかましいわへコレ二上りを焼なをしてこけをあすぶなあおきにしろ（おはねハなんでもいゝけさんとて）〔は〕これさおきゝよ。いたこにもあるとふりにわたしにかゝれるよふなおまへでもあるまいし。このあいだもあのとふりほり物もほつていて。氣起（マヽ）までとりかわしてそんな事があるならバつくともころすともおまへのこゝろしでハにおし。かけひなたになつてこんなにくろふをする者をかたちもない事をいゝかけられるとくやしくつてしミ〳〵はらがたつよト（こへをくもらしていゝけさんとする此容にやじの事なき

かせてハいろ〳〵だんどりあしければこころしもん句でしばりつけこゝろのうちハちつともはやくあつちへいきたくそらたゝミだでいる）[喜]あてもねへ事をいふものかそんなにかばいだてをせずともいゝか [は]まだそんな事をいゝなさるかわたしがそんなにもあきていやになつたのかへなぜこんなにすることをなす事あだになるだろうトなく（喜兵へも此もん句にてすこしこゝろもとけてにがりきつているそのうち庭口にて二三人子供のこへにて）ミな〳〵おはねさんヱ、、、引（此こへをきいておはねハこころのうちとびたつよふにおもへどもわざとくそおちつきになつている）[喜]それミろお使者がかゝつたハはやくいけ [は]いくのハいやだ [喜]そんなやせがまんをいわずといくがいゝ [は]そんな事をいふからなをいやだよ [喜]おすごにそふいつてだれぞたいこによんでいよう [は]そんならおきいつてくるよ [喜]かつてにしろ

（大ごへにて二三人）おはねさんヱ〳〵いつてお出なさいまし

おはねさんヱ、、、、引

○つれ傳吉のいちらつハ後編（へんこ）にはじめにいだし御らんにいれます是よりハよいのだんはじまり

夜宵の部

[おまち]（夜具づゝミを引ずりながら）コチおりよどん [おりよ]（ふり返り）ヲヤなんだよ　まおしゝさん

トおすへさんをうらへきゝにやんな一チ座業がおいでなすつた　[ち]イヤおくにさんをさきにやつたら二人ながら出ていなはると　[ま]どこに　[ち]大黒屋と久字屋だよ　[ま]ない事を船宿衆にそふいゝねへ名代でもおよびなさるならあいてゐる子供衆をだれぞきゝにやんねへ（よこ座敷にて手のおと）チヨン〳〵　[な]ハイヽヽヽヽ引　（おけとしよく臺をおもそふに引さげて）おすでどんみ見通しハあいたか　[す]またふさがつているよお稠合のお二人ハよこ座敷の八疊へいれもふしねへな　[む]ソレお手がなるよ　[大せい]（アイヽヽヽヽハイヽヽヽヽヽ引）（新ざしきにいるきやく）

[梅五郎]（年ハ二十六七うすいものあるやせた中ぜいな男着物さつまもめんこんがすりひとへ物せんさい茶こやたてはゞぜまの帯羽織ハしたてた島ごろふの四ツ折の紙入唐皮さんとめ折帯彩のつゝさし多葉粉入むらたてはらせた四分一七分ばりの首はあたにかぶきいていたりしが壻頭帯に下へ三味せんをかりにやりつゝあ引て江戸ぶしをうなつている）　あミがさへ〳〵引バ縁なふりきりてゆふべの口香けふの酒うつら〳〵とねむるてふ茶碗ハ蝶の花しらすうれしやさあおれあ角を見やむしさへも露を命の置どころいのちといふ字ハたが書た白むくぬいで見せさんせ（ト引仕舞）コウ　音どん下へ酒をそふいつて島吉にもかけてやんねへ（暗見）　音おまんまハへ　[勝]まだ腑がいゝから飯ハよしにふ（トはなしいうちおすて通りかゝり）[す]ナニヤかつさんこのあいだハさつばり御とふぶ〳〵しう御ざいますね　[音]ナイおあへ下へいくならしまさをかけてやつて

くんねへそして酒もよ　すけもうらへかけにやるのか　音あッてことおねへ　すいまによ　ト下へゆく　音もふおなみさんハかいつてきなさりそふなものだ久しくかしてやつちやア地切されるに　勝さ二大の字だからまだけへろめへこう為てものハどふだおめへ事でもあつたか　音さつぱりいきやせんおとゝいも河岸におりやしたからつい手を出してかめが着物と弐分一ぽんたねまでなくしやした。それから又狐ちよぼいちがはじまつて。これでとりけへそうとおもつて。ほねをおつてよふ／＼の事さ。壹分ばかりかつてそれきりしやせん　勝いやもふ手を出しかけるとやめるのがいやでならねへくせになるやつよ　音わりいどろぼうさね（作者此ごろ一向くらければくわしい事ハあらわさず）　す　おとどんとつてくんねへアヽおもい、さけさかな臺へのせもつてくる）　音トどつこいよし／＼さあかつさんおはじめなせへ　勝ナヽ（ト茶呑で音へさす折からしま吉きたり）　島吉かつさんこないだハオヤおとどんさつぱりあかねへの　音チイでれはうあらいこまじりでけふハごふぎにうつくしいからアヽきいゝがわりい　島コヽなんぞおごろふのうおすでどん　すきめいをミせて口山ぐらいだろう　島ちげへねへ　勝藤娘の石やき豆腐たてぜへだろう　音こいつあいゝ　勝島吉さんめりやすを引ねへ　島このあいだ一ツおそハりましたがろくに覺いません

めりやす

〽おもふよりまたゝじかきよ夏の夜ハ。なかなかしんきな花おしろ。ながれてとまる捨小舟。夢にミるかとおもい寐の。おこされてきくほとゝぎす。たゞくれ

なしてじれさせる。隅田の堤の植込ハ。中にもすい（マヽ）樹もあり。また氣にいらぬ枝ぶりのやほほどものにこりやすく夏の木立の茂り枝ハまつてくらした朝あらしちらされてたゞおねくるふ雨の情もうらめしく島にうたわれ明方の寒さハいとゞ獨り寐ぞうき（チャント引仕舞）【勝】へらほうになげへめりやすだ【音】ナトおなゑさんときていゐね【島】チヤほんにどふおしだ【す】大のじへいきなすつたそうよ（虎吉ハうかなとふりかゝりて）【とら】おとゞん忠さんがどこへかいくと下にまつているよ（ト下へゆく）【勝】どこへいくのだ土橋か【音】あひさけふハほふ〳〵のこずりがきたから忠がそれでいつしよに引ずり出すさんだんさト（はなしの折から【おなゑ】（年ハ廿二三くらいなりハゑちご上布のかすりかたびら黒じゆすの帯銀名古屋うちのかんざしまち人のまじないなむすびつけちよいと三日月形つげのくしをさして（ずいぶんいちまいかんばんなれどもうわきものらしき女なり　チヤしま吉さんおめへにひるまたのんだものハとゞけておくれか【島】おあいさんのもいつしよにやりましたその本ハへ【な】これハ上方うたのゆきだのすり鉢を。うつしたのをかいてきたのさ【音】とんびをおまいなすつたね【島】おなゑさんそつちをむいておみせいつさいゝわ【な】きのふあらつたからむすんでおいたらほどけてうるつせへからざつといつてもらつたよ【吉】かつこうがよくできました【音】こんならもふさけもおんまいとしましやう（なうこと（マヽ）ハ御たいくハ此本の丁數たりませねばあらましこゝに略す）うた〽はや明のかねごん〳〵とめでたかりけるしだいな

り　ミな/＼ヤンヤ/＼　〔島〕そんならまくといたそうかア、高いけいしやだ　〔音〕高いのハ三味せんで引でハねへか　〔島〕なぜだ　〔音〕けいしやの直上りだ　〔島〕アハヽヽヽハイありがたふかつさんまた（トさハぎながらミな/＼ろうかへ出て行）（出し物をかたづけて屏風を引まハすとふたりさしむかいのこつそり）　〔勝〕コレてめへいま大のじへいつたが。おゝかたやじがきたのだろう　〔な〕なんぞといふとつまらねへ事をいうそれどこじやアねへ　〔勝〕ヘンぬすミどこであいにいつたがきいてあきれる　〔な〕ヨヽおめへも人の氣もしらねへでいまさらそんな事をいうが。ひるまもおめへにはなす通りどふぞいゝしあんがあろうかと寐てもおきてもかんがへてばつかりいるよ（かつハまじめになり）　〔勝〕どふよかうもいるもいがおれだつてもいつまでこふしてくるもいゝ子が二人りまである女房ハ出してしまいゝなんでも一座のものへたいしても外聞もわるいからひとたびハ。つれていきてへとおもふが。そんならバといつてゝめへのからだハ。證文でしばられてあるし。又借た金もあるからおれもうちそうつたり外からかいてもちつとやそつとハできもしようがどふかんがへてもなか/＼そんな事でハおいつかずヽこゝろ一ツを一筋にだト（へんきにふさぐ　〔な〕わたしもいろ/＼な事が氣になつて。日をたけてきても出るのがいやだけれどよふだをつけるとなんだのかだのといふからでゝハいるものゝそれだからお客にハろくにつとめもせずかんがへ事ばかりしているからいろ/＼なばゝアをいわれるしミな/＼つ

らくつてならねへそしてうちの廻しがあわせねへのなんのといふ事をきいたがかつさんどふしたらよかろう [勝]どふしようがあろもいかおれだつても　乞食でもあるめへしなにもそんなに廻しがやかましくいふ事ハねへなんでもこねへよりほかにしあんハあるめへ [な]そんならわたしがいふ事をきいておくれか [勝]なんだわけをはなすがいゝ（ミヽへくちをつけてちいさなこへで　[な]どふぞわたしをつれてにげておくれでないか（此文句ハいわくのある事なりかつにつれてにげてもらいすこしのあいだいてまいのからだのかたづきをさせてのちまたほんとうの色男のところへにげてゆくこゝろ也おんなのきるちへとハいへどもおそるべし〳〵かつハそふとハしらずいろじたてにされてのりがきて） [勝]ずいぶんそういふこゝろならつれていこうがとてもこゝでハできめへ [な]そふさ此長屋うちでハできないから江戸行でなければおもふようにハいかないよ [勝]いゝしあんがある吉田屋ゑくるがいゝ。とまつていて人の寐しづまつたじぶん。夜中に二階からにげるがよかろう [な]そふしようかおまへハどふおしだ [勝]おれハいつしよににげることハできねへから。あとへ残てしらぬふりでねているハ。そうすると朝だれかおこしにきて見てておめへをさがすハ。いないから是非おこすから。其時とぼけたつらできもをつぶしたふりをして。おれハどこまでも知らぬつらよ。どこへいつたろうとそうだんするハ。なんでもおまへがかゝりやいだからさがしてくれろといふ時そとへでゝからておめへをつれて。田舎へにげるのだ [な]そし

てわたしのにげていく所ハ。どこへいくのだへ 【勝】所ハ金形丁だがそこのうちへハあしたおれがはなしてたのんでおくから。あさつての事にしよう 【女】よいどまりでいこうかどふしよう 【勝】夕方ならばらくるがいゝこよいおもてでどんにたのんでおこう 【女】そうしたらわたしハどふかたがつくだろう 【勝】化があらハれておれだとしれたらいろ〳〵やかましくいつてくれバこゝろ安い口きゝをたのんでも。なかへいれてあひもらおふといゝかけさせて。やかましくいつてわけをきかせたならバ、きつとてめへの事をいふだらうわさイヱあの女ハ年もまたあるし貸た金もあるからどふもやる事ハできねへから。もどしてくれろといへバ。そんなら借金の方へ少しも金をいれよふから。年季の方ハ請人にあつけて。年期にしてくれろといつたなら。よもやかつてにしろハいひもあるめへ。それなれバおれも外から金のかりるところがある。それを其方へいれて跡腐のうちを売てほかにいゝところが有から新世帯とするのやうけんだ 【女】ほんにそうなればいゝねへわたしハまことにうれしいよそんならあさつてをまつていよう
【勝】いなら主人にしられぬよふにするがいゝぜ 【女】それハ氣つかいおしでない

新がら見世にて半鐘本来のこへにて四ッ時のく　こハいる〳〵ハチそうおきゃくいけばよいが

トツチヽヽヽンヽヽチツヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽヽ【わかれ三重】

居続宵泊のだん

【六三郎】（年二十四五くらい衣裳付さつま中形のかすりかたびら帯ハあさぎこはくかすりじまなげかたおり持ものハ是にて御ずいさ。○とむらいがいりよりいつゞけにてひるま大さわぎにうがちありてよいつぶれてかしゆかたをきて前後もしらずねているおすてなをし肴をたいへのせておもそふにもつてくる）【す】サア六さんもしおひんなりまし。御酒でも一ツ御あがんなさいませんかもしおそのさん〳〵【女郎おその】（年ハまた十九か廿くらいなり）御ずいもじおこされて目をこすりながら。六さんハま事によく寝ているよ六さん〳〵（トゆりおこされて）【六】チイなんだま事に今迄よく寝た【す】どつちでも御あがんなさいまし【六】こいつあありがてへ酒と出かけようか【す】さよふならとふしの御肴もいつしよに出しましやう【六】そして大吉兼次大豆をかけて船頭をおこしてくんねへ【す】熊吉さんハ今出ましたから二人りかけましやう（おちよおはちをもつてきたり）【す】おちよどん大吉さんと兼次さんをかけてきな【ち】アイ（せんどう松よびにいつてきたり）船頭【松】乙見橋のあねへけふハきているなちくるいめト（だきつく）【ち】よしねへなよんだいめト（ふりはなし下へゆく）【す】サアおはじめなさいまし【松】ヤアまたはじまりださつきのでハ大つぶろくになつたから下座敷へねると蚊にせめられてさつぱりねつかれねヱ【六】サア一ツのんだト（はな

しのうちげいしやきたる）［大吉兼次］へイ六さんさきほどハま事にたべよいましたよナヤ松どんおめ
ハあたまへなにをつけているハア（チホヽヽヽヽヽヽヽヽ）［松］（あたまへてをやつて）だれか寐ているうちいたつ
らをしやァがつたそれをまたがら〳〵わらつていてすむか亭主のはじハ女房のはじだハ［大］それだか
らしらせてやつたのだよ［す］コヲ松どん湯屋どろぼうをミたよふにかほへなにをつけたのだ［松］ヱト
（てぬぐいでやミとふいている）［す］そんなにふいてもつらの皮ハうすくハならねへかんなでもかけな
［松］おきやァがれまたかつがれたのか［皆々］（ハハヽヽヽヽヽヽヽヽヽチホヽヽヽヽ）［大兼］はやりうた〽どふぞわたし
をそわせてとおりを出雲の神さんゑ合ねがいかけてもへんじなくこふだとひとことしれるなら少しハ
くろふもやすまろになぜにいふてハくだんせぬコレナァ茶だち鹽だちしていてもまだもたりずバコレ
ナァなんでもわたしハよゐわいなァヽヽ引（おもふおかたと十年もそふたうへならいのちでもナヽヽ）［松］い
ゝわへこいつァおつかしい［す］サァ盃ハどふするのだよ［松］へイ旦那あげます［六］おふさへだ［松］
おふさへじやあございヤせんおやんなさいやしなおぼうさんの御いわいでございやさあ［兼］そりやァ
なんだ［松］女乞食よ　そふけゑきないやよ［松］いやよ田舎もまたすミよかろかね［す］おめへこよいハ
よりおちんしきつているよ［松］よんおりばばァめ［大］ばゞァめよりひじきにすれバいゝ［松］旦那あれで
もかゝァがおくつたので御ざい升［大］おめへよりかいゝよ（トさハいでいるうちおむときたり）［む］六さん

今久宇屋からおそのさんなちよつとかりにまいりました〔そ〕アヽいやだよ事にノヽきさだ〔松〕おむとゝんかずのハかしてやるふかこのあいだもふちをかいてよこしたからまたつぎにやつたとよくことハんねへ〔松〕そふかさつぱり氣がつかなんだよ（これハはやりことバなり）〔六〕はやくいつてくるがいゝ（おそのハふさいでたまつている六三ハまことのいろ男なれどもくじ屋の客ハ幅清といふ大盡にてためになる人ゆへ、其方へいかねバならず六三にハなにとかおもわれんかとこれも心にかゝりかんがへいる）〔す〕モシちよつといつておいでなさいましな〔そ〕そんならそうしよう（トでゝゆく）〔大〕めりやす〽きゝなれしみゝにもつらきかねの音ハ。ありや八幡の七ツ八ツ。しんのはなしにながい夜な。みじかふあかすうハの空。もうきぬ〴〵が氣になりて。かわる枕の身にくらべ。あすハいづくの誰さんに。また此よふな實らしいつくせつさんしよふといゝかゝり。やすまるおねのなみまくら。ながれの身にこそいとゞくるしき〔松〕このめりやすハ身にあたるぜ〔六〕これから大のことしようぜまつ二上りなやらねへか〔松〕二上りじややふせいでいる〔大〕そんなにほれるとやんねへよふひくぜ〔松〕〽きれてくれろときつよくも口にハいへど目になミだ男ハそれとしやうじのかげ立すそとらへてなきいだしわたしがこれほどおもふゆへけいしやのみけハやめさんせ〔天〕〽夜着にもたれてしあんすりやこそかぬ先から二世かけてもしや此世が二世目でハないかとおもふし物思ひ今ハたゞいにせきさせかれおもひすごしがますわいな〔松〕どふともせ

（おすで肴をもつてくる）［六］サアいゝ肴だ一ツ呑るぜ ［松］こいつあ氣をきかせた肴だ。新らしいかに
だぜ ［大］チヤいゝハわたしやアかにハすきだよ松どんかにがかたきだといふ。稲荷さまのあんどんハ
御あんだよ 松そんな古い事をいうものか ［六］サア大吉さんさすよ ［大］チトお押へ ［六］そんならおあ
いト（松へさす）［松］ありがたし新内でやらかせかによりおあい御こゝろナソレおによりこわい御心ナン
ト新らしかろう ［六］こいつあいゝわへ ［大］かにハおとゝをうやまいか ［松］おいらいふぜ ［六］おいらい
ふといへバ松こう髪ハどこでいふ ［松］けふ両国までよふがありましたからけさつるさんの所でいつて
もらいました ［大］いつそいきだ ［六］よく出来た鶴さんハ上手だト（はなしの所へおそのかへつてくるミて）
［す］サヤおそのさんサア一ツおあがんなさいまし ［兼］おそのさんをミたら氣がおちついた ［松］おそのへ
んじをまことゝおもいか ［六］アヽわりい蟲うりだ 大ハアイわらつてやれ ［松］まて〳〵こふとおその二
階へゆこうとハか そエ、すかねへ ［皆々］（アハヽヽヽヽハハヽヽヽヽ）［す］おかたづけに致しまし
やう大吉さんそのお盃をぐるりとおまハしよ ［大］そうしやうへイ六さん（トさすそれよりも盃がまハりい
ろ〳〵な物をかたづけてしまいみな〳〵さわぎながらろうかへでるおすでゆをくんでくる）［大］［兼］ことよふなら
六さんおそのさんおやすミなさいましト（ミな〳〵下へゆく六三ハひろざけもあるゆへよいがましてねている
故）［そ］六さんサア湯をおあがりト（いへどこたへもたハいなくウヽのことばもうつゝにていろやゝ時もうつ

りていろうちおむとハびやうぶな明ケし〔む〕モシおそのさんまた久字屋からかりに参り升たが。たび〳〵だからことわりましたがぜひおかりもふしてくんなちよつとだからすぐにおかいしもふすとたつてたのミますが六さんにもおきゝなすつてくださいまし〔そ〕またいくのかいやだのふはらがたつよ(六三ハめなさまし)〔六〕そんなにたのんできたものをかさねへといつてハいこじのよふだいつてくるがいゝ〔そ〕そんならぢきいつてくるからおまへもおきていておくれ〔六〕こりやアいゝおこゝろいきだ〔む〕さよふなら六さんぢきにト二人ながらいでゝゆく)〔やゝ時すぎてうらのひけたうつ六三ハひとりねいらずうと〳〵している船頭松かけきたりびやうぶをあけて〔松〕モシとんだ事がございます。わたしが今料理場に。忠助どんとふたりして。すぶどうまじりかんざまし。のんでいるうち下での噺し。堀井町のため本から乗てくる福田屋の。清兵衛とやらいふ客が。今おそのさんを身請して。つれていつたといふうわさ。ひよんな事でハございませんかト(これを六三ハきいてびつくりする)〔六〕エヽそんならおそのハ身請されたかはなしにきいたため本の。福清とやらいふ客だな。おれにそれとひとことの手紙一本かきのこさずだしぬかれたることよいのざま。赤はぢかくも不孝のばち親の異見もうわのそら慈悲があまれバあまる程内に片時いるのがうるさく。ちくしやうにもおとつたやつに今までおれがむま〳〵とだまされたのがくちおしい(トむねんなるおもいれ)シテ道すじハどこをいつた〔松〕サアくわしい事ハきゝませ

んが。先代河岸から大橋通永久橋へかゝるといふこんながうわさ。たしかかごだといふ事で御ざります
六「又其うへにこよいにかぎり。ねこかし(ごカ)にされたくやしさよ。おんをおもわぬ人でなし。とてもあい
つがくさつた根生こりやこふしてハいられぬわへト（身づくろいなする松よふすなみてすそをおさへている）
松「そンけん(マヽ)そふかへてどこへおいでなさりますマア氣をおしづめなされまし 六「どこへいくかハあ
とでしれるじやまさずとそこをはなせ 松「それをきいてハはなす事ハなりませぬ 六「エヽあんどふな
（トはらひのける松だきとめんとするをひとつあてるうんとうしろへふんぞかへる六三ハはしごをおりて忠助をお
こす）六「コレ忠助どん今かいるからさつきあつけた脇差を 忠「まだお早ふございます（トいゝながら
おへやのとだなよりわきざしをいだし六三にわたす手にとりてこしにさしおもてをあけさせそとへでるちがいな
いかと月のひかりに「ぬいてみる 六「まがいもなき家につたわる村政の一腰そんなら道ハ大はし筋ちつ
とも早くムヽそふだ（トあとをおつてゆくまよいすをきがすかねたいこかすかにきこゆる八ツの鐘 コチン／＼
（ト六三ハ大はしのかぶなや川ばたのところ〴〵まいにて四ツ手かごいそいでゆく六三よぶ／＼おいつきぼうばなをお
さへている）六「マアまてかごハやる事アならねへ かご「かごかきとんでもねへ事をいふじやまをせずとそ
こをはなせ かご「ほうばいこいつあ氣ちがへじやアねへか 六「氣ちがへでも何でもねへンテ此かごハ
どこへいくいでかついて行のだ かご「いまわぐらドの久寺屋から堀井町迄いそぎのかごなぜ又それを

じやまアするのだ［かご］サアどかねへかト（一人りのかごかき六三ナつきのけんとするを見事になげる）［六三］うぬらがよふなぶんざいで。おれにかゝるハかたはらいてへかごハしつかりあつかつた。おれにわたしておいてゆけ［かご］すきなあごたをたゝきやアがる。こんなやつアみせしめだはんごろしにたゝんでしまへト（三人いきうるにてぶつてかゝりたてになるなゝいおとセツの鐘ゴナこゝ、壹人ぎられ（マヽ）六三にけおとされ川へおちる又大げさにきられて壹人りたをれるこれをみて一人りハにげてゆく六三ハぬき身をさげておそのをころすこゝろにてかごいたれをあげてみる）［六］ヤアおそのとおもひのほかこりやどふだト（びつくりするかごの中のかゞみをとつて手にとり）さやにまきある花菱ハおそのが紋にちがいわねへからだハなくて此かごにかゞみのあるのがかてんがゆかぬふゝさてハたぬ木にいるにちげへねへおもてかうらよりしのびこみおりさいなんでうらみをはらさん夜の明ぬうちおいつとも早く月をたよりにいそごうかト（六三ハかがみをかゝへてほりいすへゆく）○（夜もしつんでからすなきわたる堀非町のふなやどため末のまへのところへ六三ハこゝぞとたちどまりて［六］アヽうか〳〵ときまふハバはてし夏の夜の。ゆふべの雨ハ昔となり。朝日におかわく此袖の。ぬれしたもとのむつごとハ。しんじつらしくあやなされ。いつたハやつはいこつちがうつそり。只一かたなと思ひしゆへ。たれをあげれバ其かごに。おそのハなくて此かゞみ。眞事をこするをの魂くもりし此身にかけものこさず。ぬすみにいつてそれなりにおかしをかへたるどふち

くしよう（おそのハ二かいのあま戸をあけて、かい中かゞミをいだしミだれびんをかきあげ）［そ］アヽよく／＼おもい思ふてミれバ一寸先ハやミとやら。きのふのふちハけふの瀬と。かわるハ勤め川竹の。ながれの身にも眞事をあかし二世とかわせし六三さん。きのふハとめて居續の積る咄しも夏の夜のミじかくあかす床のうち。ちよつとぬすミにかり座敷。相談できて身請され。一筆跡へのこさねば。さぞやうらんでいさんしよう。おまへにそわねバせんない此身。じがいした其跡で。未來でおわびハ致しましよう
［六］女郎に眞事ハなきものと。しりつゝ乘たさんばしの。かよふ小舟にこがれより。身をとりかぢとおもてをかわし。未來までものやく（マヽ）だくも。下のうらかへさぬ夕べのしまつ。先からよけるおもかぢのはづれたろぐい。きれたはやをハつがれねへ［そ］むすんだゑんハきるゝとも。わたしやこゝろハかわりません。おまへにおふた其日より。たま／＼あわねバ氣がじれていやな初會のふざけ口。よふじをつけて寐ていれバ。逢しがきてハやわらかに。眞わたでくびのこわいけん。ためにならぬといわるおハ。わきまへる程をつのり。まいばできざむ小よふじも。わずかな年季の數取て。あれもこれもとくつたくに晋つあハのびる中のびに。糸道つきし二上りの部屋三昧せんの辻占も。待も分れもないよふに。たのしミにしたかいものう。いやなおかたに身請され。ゑよふ榮花にくらすよりからい世帯も二人りして。くらす煙りハ細くとも。しうとごさんの御きげんとり。およばぬながらもお世話を

と。思ふた事も水のあわ。今死ぬる身となつたのも。ほんに十九のやくまけか。わかれにひとめ六三さん。お顔がミたいあいたいわいのう〔六〕草を譯てもおそのがゆくへ。あわバ其場でさしちがへ死ぬよりほかにしあんハねへアヽよそにきゝしが浪除も、今ハ此身にめぐりきて。やへばに死ぬるハいとハねど、心にかゝるハ兩親の。いきてハくろふに苦勞かけ、しんでハ不孝の煙りを立。あれしのゝめつぐるからすさへ。はんほの孝ハあるものを。人と生れしかひも無。二十五のけふまでも。一日孝ミエヽ立ず、まだ其うへにさきだつ不孝おゆるしなされ下さりませ〔そ〕ミるもの事が目について。夏朝貌の早咲も。露のひぬ間が身のさかり。日にかるゝとハしりながら。垣根をまとふ花のきも。夫をしとふわしが身も、心ハおなじものいわぬ。花より先へきへてゆく。有明の火もかけ細き。無常をしつてなくからす。別れときかバ清兵へさん。さぞにくかろふおはらもたとう、人ハ身請をよろこぶに。わたしハ身うけが身の不幸。清兵へさんへハ義理を立六三さんへハ貞節に。死ぬる命ハ一ッでも。二人りの男の顔を立、おなごの道もたつ道理トハいふものゝおんあいに。しんだときくならかゝさんが、力をおとしてなかさんしやう。ときおとゝいもあいにきて。お部屋へ手ミやげほふばいに。さし出ぐもしてにくまれな、いろがわるいと氣にかけて。はやり風でも引たのか。お客にでゝもしいられてなり酒のむと身にあたる。おいさいときの合藥くださんしたる黑丸子。他所行したら氣をつけや。

けがせぬよふに水天宮。玉子守りもなくしハせぬか、風の吹日ハ船にでな。やがて年あきかへつたら。そなたのすいた男をもたせ。うい孫のもりしやうとわらいまじりにいとまごい。廻しに迄も手をついて。なにかとお世話になりますと。子ゆへに人にあらがわず。かいり足にもふりかいり。おふきうなつたとよろこんで。かゐらしやんした其時が。親子のわかれになろふとハ。死ぬる今迄しらずして。わたしが死んだ其跡で。たよりといふハ兄さん一人り百年も御壽命すぎ未來で孝〻致しましやう

〔六〕うかく こゝまでおもわずもほれた女におびかれてきてもあわれぬ。内と外あかるくなつてハ人目あり。見とがめられてハのぞミのじやま。しのんでよふすをあきらかに照すかゞみかうらミなる。さやのもよふの花菱ハ。おそのが片身の此かゞみ 〔そ〕おもいまわせバ六三さん。一世とかけたる比守り。けふまではだ身はなさぬハ。かわらぬしやうこたがいの氣起いまハあだなれ片身い守りト（二かいより見おろす六三がもちしかゞミにおそのがかんなうつる六三かゞみなミておどろき）〔六〕かゞみにうつる此かげハ 〔そ〕そふいうこへハ六三さん 〔六〕おそのかト（六三ハあたり見まハしこなりの藏のまへにある大八ぐるまないたしひさしへたてかけこれをつたハりにかいへあがる）〔そ〕六三さんあいたかつたトいふおそのなつきのけたぶきなつかミびきの下へねぢふせて）〔六〕おのれハやい／＼。しやうねのくさつたねこ又女郎。ふくも六三をかきのあしたな。そふいう心とつゆしらず。頁うけになつたがくちおしい。今さらいふも

ぐちながらうぬになじんだ其時から。見せの帳合勘定も。とくいまハりとてもおろそかに。親類までも義理をかき。朝にかいり晩にかよい。けんぞくにまでうとまれて。たま〳〵おがむ佛壇の祖師もおのれがつらに見へ。盤若の經も文によミ。かへす〴〵もこれまでの。あやなし事とハ氣がつかず。さげすまれたがはらが立。うらミのやへばおもいしれト(つかに手(マヽ)にかけぬきかけるおそのハあハてゝ手をおさへ) [そ]おまへの手にかけころさるゝのが。わたしがねがいサア此まゝ死んでハ犬死同前一こといゝたい事がある [六]此場におよんでミれんのいゝわけト(又わきざしにそりなうつ) [そ]こゝろのせくハもつともじやが。まあ〳〵まつてくださんせゆふべぬすミにかゝられて。久字屋へゆけバいつにない。よふすかハつた座敷のさわぎ、身請ハすんだと足元から。むりにおしこむかごの鳥。出ろとしあんのかたかへて。わたしを出して廻し揚。かごハおまへをあざむく手だて。あとへ殘したそのかゞみハ。ほかへうつらぬわたしが眞事。くもらぬ心おなごのたましい [六]うたがいはれたかゞミのなぞよふすもきかずはやまつた [そ]せくいもどふりわかけの花、ちらすも今の朝あらし [六]身にふりかゝる情のやへば、むしきのいん道二人りが薄命 [そ]死出も三途もぬふとうれし、ミだの淨土ハ西の空 [六]東のしらまぬ其うちに。ちつともはやくかくごハよいか [そ]妙法蓮花 [六]南無詩經(トふりあげるやへばの下すでにこふよと見へるおりうしろのかたにふく清ハからゑこまけてこへをかけ) [満]ふたりともにはや

とろまいよう〳〵またれよ 〔七〕ヤアおまへハ清兵衛さん 〔六〕見つけられてハ一大事ト（又かたなをとりなほす）〔固〕はてさしんで花見ハ出来ぬぞや。しさいをはなすまでまたれよいま迄名を神清とかへて。おそのどのゝ客となりしも。わけある事茶屋もひとつ所でハと。久字屋へ入込などこともなるも。ひとつの手だて。どふぞおそのどのを身請して。六三どのへわたすならバ。身のほふらつもやわどふり。さすればわれらが親父へ寸志 〔六〕がてんのゆかぬことばのはし。して其元ハ 〔清〕サアそのふしんハもつとも〳〵。今このよふに町人と。すがたをかへてハおれどもわれらハ。六間の家中にても。吉田富之進が悴。吉田忠兵衛と申もの。九年以前親富之進へ。殿より御預けありし。御家の重宝藤露の香合。紛失なし。其とがハかゝるからねど。御仁心をもつてわれ〳〵に。さがしいだせとおいとまたまハり。わたくしことゝも草が露。吟味すれども手がゝりなく。いかゞが(マヽ)わせんと思ふうち。其元親父六兵衛殿ハ所縁もないものゝ。身に引請て世話をいたされ。さがしいだして手にいる香箱。それにてゆへなく[illegible]致して。今ハ困窮われ〳〵が出世もこんた親父の恩。何卒少しの恩がへしをと。おもふ斗で心もとゞかず。此節江戸へ下りし所。風のたよりでうけたまはれバ其元ハ深川辺。内にハ片時もいぬとの事。親父の苦労がさつしやられ。かなに見しりのないを幸ひ。おそのどのゝ客となり。身請をすましたうへからハ其元へお渡しもふす。どふぞこゝろをひるがへされ。年もよられし親父の事。何に付ても

孝〻第一。又堂ツにハ先祖より代〻ゆずりのかぶかとく。大事に相續いたされよト（しどうなきいて六三ハびつくりする）［六］エヽそんならあなたが忠兵衛様でござりましたかつね／″＼親どものはなしにハ。うけたまハりおりましたれど。其儀りハわれらハ若年。おかをもろくにおほへませぬ。只今の失禮ハ眞平御免くだされまし。又おそのが事につき。段〻のおほしめし。御禮ハ言葉につくされず［そ］わたしハこふいふ事とハしらず。かゑつてうらんでおりました。なにから御禮いたしましようやら［請］なんの禮におよぼふぞ。また此一品ハおそのどのより其元へほんの土産ト（おそのが年季證文を六三へわたす）［六］なにからなにまでエヽかたじけない［そ］うれしうござんす（ト二人りながらよろこんでいるへおき番忠助トやうじなあけおんどんなびきにくる此おとにおその六三目をさまし）［六］アヽびつくりしよりあせになつたはてなゆふべ久字屋身請がすんだと松がしらしたゆへ。あとをおつかけて。たしか大橋むこふでかごかきを二人りころしてそれから堀井丁へいつて今ため本の二かいだとおもつたらこいつあおかしい［そ］ほんにそういへバわたしもお客に身うけなされてたしかおまへがあとからきてため本の二かいですでに死のふとしたつけがそのおきやくにとめられてしじうの咄シがわかつたとおもつたらチヤ／＼ゆめかのう［六］そんならゆふべおむとどんが二度目にかりにきたとおもつたがあれからゆめなミたのかおきやァがれ［そ］ふたりながらおんなじゆめをミるといふもふしぎだよおまへハけさおか

へりか　六もふすつぱり夜もあけたはへろう　そけふハいゝじやァないか　六いつゞけもあんまりだ

二十三日うらにてしるす

(折からとこへ)　松ハイお船ができました

二日　上

愚筆にてしるしましたればよろしく御よミくだされませう

予未だ見悟かずして。紙をよごし。情愛を書記す事。鵜の眞似にハあれども。己が苦るし身を知つて。人を練るのミ。足の出る貸蒲團を着て。廻し枕に天窓をいためて。藪蚊にせめられ。最照事なし。それ故野暮の道ハ得たれども。色男ちん／＼鴨の。深意をしらず。文くだ／＼しく其符合せざるハ。ソレさつしておくんなはいまし

墨之戯著

卷末に

本卷本文、並に解題などの校了後、足かけ三年。その一年前の第一卷は、先日世に出でた。矢纔早ではあるが、此の第二卷を又諸賢の机上に送る。但し私としては、此の二卷分が世に出るのは、いつの事やらと半ばは諦めてゐたものである。倚、第一卷の卷末に附記した如く、此の第一卷第二卷、共に校訂用の底本は、今から思へば不備な所が多かつた。先の本第二卷分に就て、今日氣のついた所を述べる。敍述の順序である。

一、「驛者二友」は、其後、「穴學問」の原本を見たが、「穴學らん一」と理本の題簽然たるので、而も「穴一」は、口繪半丁を削つてゐる、即ち全く「驛者」が元指題と断定していゝ。

二、「白狐通」に就てであるが、校訂底本は、換表紙の跋を落したものだつた。換表紙にかつてゐたが、跋には氣がつかなかつた。「幾としも」の歌が、四十二ヶの半丁を占め、それに白狐通終とあつたからである。それが更に一丁、四十三と數へて、跋の表裏一丁があつた。其後に復た家藏本である。

（なほ、此本、元表紙に、龍を模様にした三方截の更紗表紙である。）今ちやうど、本校本二三八頁の余白を利用して、此の跋を一頁に納め、挿入れておいた。仍りて内容は、此の校本で完全となつたのである。唯、跋の次に、一丁分、谷峩著の目錄がある。それは、二筋道以下、十種の本の名があり、下に略解說の文字のあるもの。例へば、本校本二六五頁のものと殆ど同一。但しこれは小本の附尾、白狐通のは中本のであるが、書名は全部同一、字の並べ方も同一、唯、解說の文字は、字句の末に一二の異點があると見られるだけである。挿入の余地がなかつたから、これだけは略いた。

三、佳眞玉手。これも、底本のものは、後摺本だつた。さうして跋を缺くものだつた。解題にも疑問を持つたやうに、本文末尾の所が、表で終い、裏は余白になつてゐる。それは、誠は、後摺本で、余白以後にあるべき跋を略いたものだつたのである。今、此の跋は、ちやうど本校本三五八頁の余白に、苦しく組入れた。此の跋本來は、一丁半のものであるから、大字にせねばならぬのであるが、都合上、あゝした。末尾の印は、上が陽で多、下が陰で成のやうに見える。關防印は、夜話の白ヌキである。尚、底の佳眞玉手に、青表紙三方折込のものは、後摺本である。茶表紙が初摺本である。但し後摺本に、卽ち跋なき、茶表紙のものもある。とにかく此の跋あるもの、純初摺。他は、後摺本である。

（此の初摺本の跋は、一丁半。本文末の裏よりつゞけ、一行十二字位、六行半丁のもの。此の跋ある

本は、坊間複插である。）

四、北斎画帖か。其後、完全な本を見た。元表紙は、濃き草色である。

五、春見数子。図の表、雨夜の拍歌であるかと端書に書いたが、其後の善本に據ると、その通りで、提灯と傘の枝、その絵の賛である。其の半丁分、入れ込む余地がないから、已むを得ず、不備乍らも、四七四頁の部分へ補ひ刷り込んだ。或は、次の自序の表、即ちその前に持つて行かねばならぬものである。

六、好情寶之巻。校訂当時の底本に、破れがあつて、推定又は遺りのまゝの伏字があつたが、それが其後の善本により分つた。即ち左の如し。

○六八七頁、十一行目。きいせう□□□（い

は、きいせうか（トこずまとりあげい

であつた、括弧以下は、二行書の部分である。

○六八八頁、四行目。そうかへ。は、ありがてへ。の誤。

○六八八頁、十一行目。事の下に、もを入れる。

○六八七頁、五行目。たゝく は、おとつゐゝ

○六八九頁、十行目。ど[ ][ ] は、どご と原本にあつた。どこの意か。

○六九〇頁、四行目より五行目。少しも は、中〳〵

○第一巻の補遺。

×

第一巻の製本完了後、今見つけ出した一つのひどい誤植がある。それは、「居續借金」の序文の署名が、歸橋が歸歸となつてゐた。不細裁、何とも恥ぢ入る外はないが、これは四校の折は、婦橋となつてゐた。氣がついて婦を歸と訂しておいた。それが、最後の入レカヘに、二字とも歸にしてしまつたのだと見える。念校まで自分が見なかつた疎漏をお詫びする。

「意妓口」の題詩（二一五頁）の最後の印形、文字は白々であるが、どうもあの三字は、讀みあやまりのやうである。二一六頁の署名の下は、印で例の振鷺亭常用の、九曜の星と魚と文字二と四つに仕切り、上の二は陽、下の二は、陰のものである。

第一巻所收の「傾城買當世卷」（傾城傳受）は、底本が、僞版本＝再刻本だつた。初刻本と左の異同がある。

（再刻本）　（初刻本）

序（原本一裏）、校本四七七頁一行目、五行目）　遊里山人　蕣亭谷峨也

同（同二裏五行目）、同四七八頁一行目二行目）　遊好山人　式亭三馬

自序（同序四表四行目）（校本四七九頁八行目）　はつ春　未はつ春

序五裏・原本）（校本四八一頁）　遊里山人著　江東田楽橋住　梅暮里谷峨著

即ち再刻本の序で遊好山人とは、不明であつたが、それが初刻本により三馬と分つた。又年代をいふべき何物もなかつたのが、初刻本の、未はつ春により分つた。新修小説年表には、作者名を、遊里山人とあるが、これも、谷峨の本名に代へねばならぬ。なほ、原本第三十五丁裏（自跋の裏）は、第一巻（删訂本）端書には、それが余白だというたが、初刻本は、こゝに、左の如き體裁で、豫告の半丁があつた。

未新版	二筋道後編 廓の癖　谷峨作　完
来申新版	白狐通　同作　完
	霞開花撰帳　同作　完
	傾城買言造鳥　同作　完

「言造鳥」は、現在ではない。その通りである。

「孔雀楽類記」は、校本では楽類記としたが、寛政原本の書題は、そのやうに見えた。目録及び「再び巻末に」の如く、楽類記に一定しておきたい。

「通言東金船」の序文猪牙亭主人は、二馬であらう。いはでもの事ではあるが。
假名草（うちの字白一頁四（五頁にあたる）は、口繪があつたのであるが、都合上略した。男、房中悪風の圖、外を通る妓の後ろ姿の圖である。

「傾城浮世百名草薹」の洒落本は、第一巻解題（二十八頁）では、「青樓娭言解」の一作のやう見たが、實に、同享和二年の「祇園會娭嬪藏」（未校本、第四巻挿入豫定）といふものもある。品川本である。

今一つ、極めて上つこぬして、私の意に滿たぬ事は、本文中の、各本の初頁表、即ち原本からは、表紙の體裁の所がある。それが、私は、校正の折は、やかましく、左上に持つて行くやう、朱書しておいた。それが、全部中央にある。これでは、原本の氣分を出さうとしたものが、ぶちこわしである。そこは、私自身の甘い好みと、印刷當事者の普通心理との衝突だと思ふ。本第三巻は、これを再び繰返すまい、とうたつたは。これもかうした行違ひのないため、題簽の完全な元表紙物に限り、第三巻からは、全面圖出にする積りである。

なほ、第一巻の「巻末に」でお約束した、南極驛路雀の口繪は、漸く名古屋の甘露堂文庫本により、補充する事が出來た。「銚子戯語」の口繪ヒラキの半分も、其後善本を獲た。でこの二個口繪の補充

は、本第二巻に、別刷二枚として附した。これを夫々、その位置に貼付して頂きたい。

尚ゝ、第一巻巻尾の「補遺」のうちの第三頁は、無くてよきものだつた。此の組置のある事を忘れて――何分四年前の仕事だから――、その一頁分の本文を組直した。從つて重複といつた御叮嚀なものになつたのである。

續刊第三巻は、目下原稿手入中。その豫定書目を舉げておく。

放蕩虚誕傳、穴知鳥、南客先生文集、深淵情、呼子鳥、眞似山氣登里、辨蒙通人講釋、遊婦里會談、廓中奇譚、其あかか、虚實情夜櫻、青樓五ツ雁金、遊技五所紋、傾城買之心、風俗通、比翼紫、廓の櫻、夢之盗汗、妓情返夢解、南門鼠帰、通神藏、くるわの茶番、傾城買杓子規（稿本）、夜色のかたまり（同）。

第四巻・第五巻・第六巻の豫定書目も舉げておく。第四巻は、遊里小唄と色道論議物、第五巻は、遊里異聞物と世相物、芝居物。第六巻は、京坂の板本と寫本各種の物である。第四巻以下、書目は、無論變更等もあるべきものも生じよう。又讀者において、第四巻以後に收載すべき未翻刻原本所藏の方々は、何等の便を與へても頂きたい。自分としても、無論材料蒐集には心がける。

第四卷。魂膽總勘定○花姿色名寄○無頼通說法○風流仙婦傳○金枕浮女相談○無陀物語○古今三通傳○松の音妓話○舎會我○見通三世相○品川海苔○匂嚢○後篇匂嚢○孤賓通入○祇園會挑燈藏○傾城買花角力○北系兵庫結○東海探語○雨夜噺○安名手本執心廓。其他

第五卷。両巴巵言○史林殘花○閑居放言○蕩子筌○野路の譜言○當世爰かしこ○良夜狹搔○[illegible]金窟○女鬼產○讖緯盲目○夢枕通人寐言○大通紀山寺○殘坐訓○野夫鑑○太平樂卷物(馬馬)○ひろふ神○鳴通力。其他、

第六卷。くだ卷綱目○狹家内○風流裸人形○虚辭先生穴賢○遊廓擲錢考○本朝處要○言葉の玉○遊里不調法記○驛路の鈴○花街風流解○大客○(以下稿本)津國毛及(江戸)○退屈洒落(同)○夢の濃莊子(同)○蕩客寐言(宮)○南樓丸一之卷(同)○野園玉子(同)○ふしみたけ(伏見)○常夏草眞垣(信州湯田中)など。

以上

昭和四年六月十五日午後、第二卷本文、手入れ了りて

久彌誌

卷末に

再び

只今、小石川原町の増田七郎氏から、御深切な御手紙を頂いた。第一卷本文、數ヶ處に亘り、本のまゝか誤植かを聞はれて來られたのである。その箇處は、

第一卷

一。一七八頁　終ヨリ三行目　かきなさそなら　かさなカ

二。一八七頁　六行目　「林」ハ「松」カ

三。二三四頁　終ヨリ三行及二行ノ「雲」ハ「雪」カ

四。四五一頁末行　子どもの世話をしたりじめしの世話ハ　△ハ行カ

五。四五五頁八行目　おかみんハおかみさんカ

六。四五八頁九行目　「ホン」ノの下不明、「に」カ

七。五一一頁終ヨリ三行「宗」ハ　幸カ

八。五三九頁五行目　くつついて　ハ或ハくいついてカ

九。五六三頁末行　あくぶハあくびカ、(ママ)カ

一〇。五六八頁七行　あらなんニ(あうなんカ)トアルハ、

尾上の櫻(の)　咲(の)にけり　外山の霞(の)　立すも　あらなんニヨリ、あらなんニテヨ

カラン

一一。五六九頁七行目　小の山？

以上の中、今取調べると、大抵は誤植であつた。誠に冷汗背に滲む次第、なほ此上、(ママ)カ誤植カの御賀出を待ちます。右の十一條の中、本ノマヽであるのは、一と四です。一は、無論かさであらうが、本には、かきとはつきりあり、四も然りです。二と三と五と九とは誤植でした。直ちに御加朱を願ひます。六は、私の手もとの校訂本には、(ニ)とあります、六號の片假名。本によつて消えたのがあるかと思ひます。一〇は、御氣つきの如くで、うつかりしてゐました。どこまでもしやれたのでした。七と八・一一は、今原本によりて對校する事が出來ないから、(此の時の原本は、四年越の借出であつたから、昨年一と先づ返却)いつれ第三卷までに調べて附記します。(九は、原稿にすでにあくびとありました。)

これだけにくはしく讀んで頂いた事を篤く御禮申します。

其後自分が氣ついた誤りは、第一卷一七八頁一行目のはたえ△は、はた元°でした。以上、前文中の歸
歸△と、此はたえ△と、增田氏指摘の中の決定分四個と計六個は、誤植です。他にもありませうから、此
上とも大方の御指摘を偏へに待ちます。

六月十九日午後　　編者

洒落本集成 第二卷 終

昭和四年十一月十二日印刷
昭和四年十一月十五日發行

洒落本集成第二集
（定價參圓八拾錢）

編纂者検印

編纂者　尾崎久彌

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通三丁目八番地
（電話日本橋、五一、六四一、三七八八）
（振替口座東京、一一六一七）
春陽堂

PURCHASED FOR THE

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

FROM THE

CANADA COUNCIL SPECIAL GRANT

FOR

Far Eastern 68

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02993 8032